

第22回 夏季デフリンピック競技大会 日本選手団参加報告書



デフリンピック史上初の聖火

一般財団法人 全日本ろうあ連盟

秋篠宮同妃両殿下ご接見



石野派遣委員長による挨拶

結団式・開会式



結団式にて柳川主将による決意表明



メダルをとるぞ！



広大なスタジアム内で開会式が始まるのを待つ日本選手団



入場行進 日の丸高らかに！



各国選手による聖火リレー



デフリンピック史上初の聖火が灯された

選手の活躍



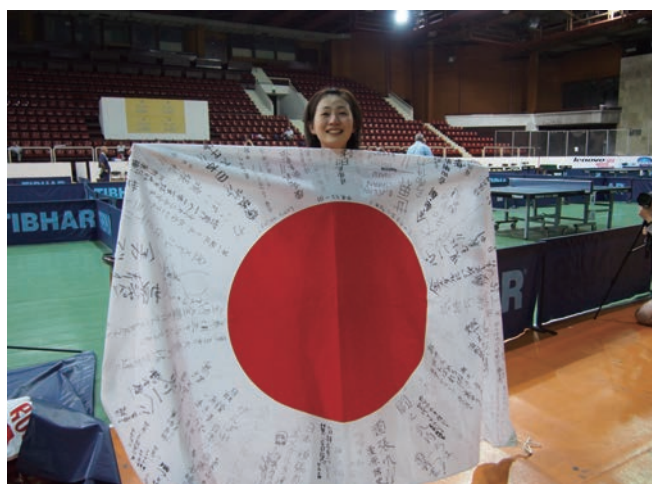
右：金メダル 金持選手（水泳）
左：銀メダル 茨選手（水泳）



メダルにキス



金メダル 上田選手（卓球）



皆からの応援を胸に

選手の活躍



銀メダル バレーボール（女子）チーム



銀メダル 茨選手
今大会ではメダルを 5 個獲得！



銀メダル 佐藤選手（女子棒高跳び）



銀メダル 上田選手・佐藤選手（卓球女子ダブルス）



銀メダル 吉良選手（柔道）



銀メダル 森本選手（男子ハンマー投げ）

選手の活躍



銅メダル 早瀬選手（女子マウンテンバイク）



銅メダル 山中選手（男子マラソン）



銅メダル 佐藤選手・上田選手・川崎選手・有馬選手
（卓球女子団体）



銅メダル 田井選手（女子100mハードル）



左：銅メダル 竹花選手（男子棒高跳び）
右：銀メダル 佐藤選手（女子棒高跳び）



銅メダル 山田選手（柔道）

選手の活躍



バドミントン



ビーチバレー



陸上



陸上



陸上



陸上

選手の活躍



マウンテンバイク



ロードレース



サッカー（男子）



サッカー（女子）



バスケットボール（男子）



バスケットボール（女子）

選手の活躍



水泳



水泳



水泳



柔道



柔道



オリエンテーリング

選手の活躍



テニス



卓球



卓球



卓球



バレーボール（男子）



バレーボール（女子）

解団式・閉会式



解団式



日本国旗をお返しする野呂選手



在ブルガリア日本大使館からも
大会期間中、応援にかけつけて下さいました



デフリンピック旗



日本選手団を代表して行進する野呂選手



聖火消える

10日間にわたって行われたデフスポーツの祭典に幕が降ろされた

選手団本部



本部事務局



各競技チームへの情報BOX



情報共有のための掲示物



試合結果などの速報



中央ろう学校からの応援メッセージ



中央ろう学校からの応援メッセージ

目 次

1. 日本選手団参加報告書の発刊について（お礼）	1
2. 第22回夏季デフリンピック競技大会2013ソフィア及び日本選手団の概要	2
3. 日本選手団名簿	3
4. 成績一覧	
①メダリスト一覧	11
②国別メダル獲得成績一覧	12
③各競技成績一覧	13
5. 日本選手団団員報告	
①団長報告	23
②副団長報告	24
③事務局報告	27
④医療報告	36
⑤陸上競技チーム	41
⑥バドミントン競技チーム	50
⑦バスケットボール競技男子チーム	53
⑧バスケットボール競技女子チーム	60
⑨ビーチバレーボール競技チーム	68
⑩自転車競技チーム	72
⑪サッカー競技男子チーム	77
⑫サッカー競技女子チーム	87
⑬柔道競技チーム	97
⑭オリエンテーリング競技チーム	100
⑮水泳競技チーム	101
⑯卓球競技チーム	106
⑰テニス競技チーム	111
⑱バレーボール競技男子チーム	115
⑲バレーボール競技女子チーム	121
6. 参考資料	
①主なスケジュール	133
②日本選手団必携マニュアル	135
③日本選手団の編成にかかる指針	152
④選手推薦等申請用紙	154
⑤健康調査票	157
⑥聴力検査票	163
⑦ソーシャルメディアガイドライン	165
⑧デフリンピック開催地一覧	169

第22回夏季デフリンピック競技大会（ソフィア 2013） 日本選手団参加報告書の発刊について（お礼）

一般財団法人全日本ろうあ連盟理事長
デフリンピック派遣委員会委員長
石野富志三郎

第22回夏季デフリンピック競技大会がブルガリア・ソフィア市で7月26日から8月4日の10日間にわたり開催され、日本からは選手・スタッフ合わせて219名を派遣いたしました。そして前回の台北デフリンピックのメダル数20個を上回る21個のメダル（金2、銀10、銅9）を獲得いたしました。このような素晴らしい報告が皆様にできることを心から嬉しく感じております。

出発前には秋篠宮同妃両殿下とのご接見で温かい励ましのお言葉を賜り、選手一人ひとりが日の丸を背負い世界の舞台に立つ責任を改めて認識し、より一層気を引き締めました。そして2011年3月に起きた東日本大震災の記憶を胸に、日本に必ず明るいニュースを届けるとの強い思いで試合に臨みました。

今回のデフリンピックは、開催決定から開会までの準備期間がとても短く、厳しいスケジュールでしたが、選手達は日々の練習や合宿で修練を積みました。日本とブルガリアの時差は7時間、飛行機で半日以上かかるほど遠い地で、21個ものメダルを獲得できたのは、ひとえに皆様が陰に陽に応援くださったおかげです。心より感謝申し上げます。

2013年11月には鳥取県で初めて手話言語条例が制定し、その翌月には障害者権利条約が国内で批准され、障害者基本法の中に「手話を言語に含む」との文言が入りました。日本の聴覚障害者を取り巻く環境は大きく変化の時を迎えています。この流れに乗り、聴覚障害者スポーツの国民への理解の輪を広げるべく、更なる普及・促進に努めてまいります。

ご支援を賜りました厚生労働省をはじめ、宮内庁、公益財団法人日本障害者スポーツ協会、日本パラリンピック委員会、デフリンピック応援プロジェクトチーム、全国手話通訳問題研究会、国立障害者リハビリテーションセンター、メディカルサポートの皆様、関係各団体、そして選手やスタッフを快く派遣してくださいました各学校・各企業等、日本選手団を多方面で支えていただいた皆様方に、この場をお借りし厚く御礼申し上げます。

私たちは今大会を通し、世界のレベルが格段に上がっていることを肌で感じました。2年後の第18回冬季デフリンピック（ロシア）、4年後の第23回夏季デフリンピック（トルコ）に向け、世界の強豪と同等に渡り合えるよう、技術面だけではなく精神面も同様に鍛錬してまいりますので、今後とも変わらぬご指導ご鞭撻のほど宜しく願い申し上げます。

＜ブルガリア 2013 デフリンピック大会概要＞

1 大会名称

第 22 回夏季デフリンピック競技大会（通称：ソフィアデフリンピック）

2 開催期間

2013 年 7 月 26 日（金）開会式～8 月 4 日（日）閉会式【10 日間】

※一部競技は 25 日から試合開始。

1) 渡航日程 7 月 22 日（月）成田国際空港発

8 月 7 日（水）成田国際空港着

※この期間、競技スケジュールに応じて各競技団体それぞれ渡航予定。

2) 結団式 2013 年 7 月 21 日（日）

3) 解団式 2013 年 8 月 5 日（月）

3 開催国・都市

ブルガリア・ソフィア

4 運営主体

国際ろうスポーツ委員会（International Committee of Sports for the Deaf）

ソフィア 2013 デフリンピック大会組織委員会（the 22nd Summer Deaflympics Organizing Committee）

5 参加国・地域数

90 カ国・地域

6 参加人数

2,871 名

7 実施競技

陸上、バドミントン、バスケットボール、ボウリング、サイクリング、サッカー、ハンドボール、柔道、空手、オリエンテーリング、射撃、水泳、卓球、テコンドー、テニス、バレーボール、ビーチバレーボール、レスリング

日本代表選手団派遣概要

1 派遣人数

選手 149 名 役員 70 名 計 219 名

団 長：太田陽介（（一財）全日本ろうあ連盟 スポーツ委員会 委員長）

主 将：柳川奈美子（女子バレー）

旗 手：野呂 啓（男子サッカー）

・最年少出場選手－酒井藍莉 14 歳（女子サッカー）

・最年長出場選手－田村 聡 48 歳（オリエンテーリング）

2 参加競技（12 競技）

陸上、バドミントン、バスケットボール、サイクリング、サッカー、柔道、オリエンテーリング、水泳、卓球、テニス、バレーボール、ビーチバレーボール

日本選手団名簿

※年齢－2013年6月1日現在で表記

通し	No	競技名	役職 (スタッフ／選手)	名 前	ふりがな	性別	年齢	都道府県市区町村	所属団体
1	1	日本選手団本部	団長	太田 陽介	おおた ようすけ	男	54	福岡県福岡市西区	社会福祉法人福岡県聴覚障害者協会
2	2	日本選手団本部	副団長	栗野 達人	あわの たつひと	男	56	東京都渋谷区	社団法人東京都聴覚障害者連盟
3	3	日本選手団本部	総務	嶋本 恭規	しまもと やすのり	男	36	兵庫県三田市	公益社団法人兵庫県聴覚障害者協会
4	4	日本選手団本部	広報	仁木 尚美	にき なおみ	女	45	神奈川県横浜市都筑区	神奈川県聴覚障害者連盟
5	5	日本選手団本部	総務	後藤 啓二	ごとう けいじ	男	36	東京都中野区	公益社団法人東京都聴覚障害者連盟
6	6	日本選手団本部	医師	立石 智彦	たていし ともひこ	男	45	神奈川県鎌倉市	健聴者
7	7	日本選手団本部	医師	羽森 貫	はもり かん	男	37	京都府京都市西京区	健聴者
8	8	日本選手団本部	アスレティックトレーナー	中島 幸則	なかじま ゆきのり	男	50	千葉県市川市	健聴者
9	9	日本選手団本部	アスレティックトレーナー	高橋 小夜利	たかはし さより	女	40	東京都板橋区	健聴者
10	10	日本選手団本部	看護師	高橋 美枝子	たかはし みえこ	女	57	埼玉県所沢市	健聴者
11	11	日本選手団本部	翻訳	高木 真知子	たかぎ まちこ	女	63	東京都調布市	健聴者
12	12	日本選手団本部	手話通訳	豊島 絵美子	とよしま えみこ	女	46	兵庫県神戸市中央区	健聴者
13	13	日本選手団本部	手話通訳	小林 慶美	こばやし よしみ	女	36	群馬県高崎市	健聴者
14	14	日本選手団本部	手話通訳	長山 綾	ながやま あや	女	33	京都府京都市伏見区	健聴者
15	15	日本選手団本部	広報	田原 里絵	たはら りえ	女	32	京都府京都市中京区	一般社団法人京都府聴覚障害者協会
16	16	日本選手団本部	輸送	林 孝雄	はやし たかお	男	63	東京都中央区	健聴者
17	17	日本選手団本部	輸送	白坂 篤志	しらさか あつし	男	36	東京都中央区	健聴者
18	18	日本選手団本部	輸送	内田 美春	うちだ みはる	女	48	東京都中央区	健聴者
19	1	陸 上	監督	三枝 隆行	さえぐさ たかゆき	男	44	兵庫県伊丹市	公益社団法人兵庫県聴覚障害者協会
20	2	陸 上	トレーナー	東口 紘也	ひがしぐち ひろや	男	35	大阪府堺市北区	公益社団法人大阪聴力障害者協会
21	3	陸 上	トレーナー	内海 優	うつみ ゆう	女	40	滋賀県大津市	健聴者
22	4	陸 上	スタッフ	正垣 亜矢子	まさがき あやこ	女	27	東京都大田区	公益社団法人東京都聴覚障害者連盟
23	5	陸 上	スタッフ	柳田 主税	やなだ ちから	男	28	東京都足立区	健聴者
24	6	陸 上	スタッフ	下防 健太郎	しもぼう けんたろう	男	41	東京都立川市	公益社団法人東京都聴覚障害者連盟
25	7	陸 上	選手	田井 小百合	たい さゆり	女	34	長崎県佐世保市	一般社団法人長崎県ろうあ協会
26	8	陸 上	選手	門脇 翠	かどわき みどり	女	20	埼玉県さいたま市	社団法人埼玉県聴覚障害者協会
27	9	陸 上	選手	土屋 文香	つちや ふみか	女	20	東京都立川市	公益社団法人東京都聴覚障害者連盟

通し	No	競技名	役職 (スタッフ／選手)	名 前	ふりがな	性別	年齢	都道府県市区町村	所属団体
28	10	陸 上	選手	小松 彩香	こまつ あやか	女	20	東京都国立市	公益社団法人東京都聴覚障害者連盟
29	11	陸 上	選手	山田 真人	やまだ まさひと	男	47	福島県いわき市	一般社団法人福島県聴覚障害者協会
30	12	陸 上	選手	金子 誠一	かねこ せいいち	男	46	山口県山口市	社団法人山口県ろうあ連盟
31	13	陸 上	選手	山中 孝一郎	やまなか こういちろう	男	31	東京都町田市	公益社団法人東京都聴覚障害者連盟
32	14	陸 上	選手	白石 進	しらいし すすむ	男	30	大阪府大阪市都島区	公益社団法人大阪聴力障害者協会
33	15	陸 上	選手	小林 弘明	こばやし ひろあき	男	24	静岡県湖西市	公益社団法人静岡県聴覚障害者協会
34	16	陸 上	選手	三枝 浩基	さえぐさ ひろき	男	22	兵庫県伊丹市	公益社団法人兵庫県聴覚障害者協会
35	17	陸 上	選手	佐々木 琢磨	ささき たくま	男	19	宮城県柴田郡	社団法人宮城県ろうあ協会
36	18	陸 上	選手	堰本 将平	せきもとしょうへい	男	20	大阪府大阪市東淀川区	公益社団法人鳥取県聴覚障害者協会
37	19	陸 上	選手	岡部 祐介	おかべ ゆうすけ	男	25	神奈川県横浜市鶴見区	神奈川県聴覚障害者連盟
38	20	陸 上	選手	水野 史生	みずの ふみお	男	30	東京都世田谷区	公益社団法人東京都聴覚障害者連盟
39	21	陸 上	選手	羽柴 大典	はしば だいすけ	男	19	愛知県名古屋市千種区	一般社団法人愛知県聴覚障害者協会
40	22	陸 上	選手	北田 明広	きただ あきひろ	男	21	奈良県生駒郡	社団法人奈良県聴覚障害者協会
41	23	陸 上	選手	高田 裕士	たかだ ゆうじ	男	28	東京都港区	公益社団法人東京都聴覚障害者連盟
42	24	陸 上	選手	森本 真敏	もりもとまさとし	男	28	滋賀県蒲生郡	一般社団法人滋賀県ろうあ協会
43	25	陸 上	選手	石田 考正	いしだ たかまさ	男	27	愛知県蒲郡市	一般社団法人愛知県聴覚障害者協会
44	26	陸 上	選手	佐藤 将光	さとう まさみつ	男	32	愛媛県松山市	愛媛県聴覚障害者協会
45	27	陸 上	選手	佐藤 賢太	さとう けんた	男	23	群馬県太田市	社団法人埼玉県聴覚障害者協会
46	28	陸 上	選手	竹花 康太郎	たけはな こうたろう	男	26	神奈川県横浜市港南区	神奈川県聴覚障害者連盟
47	29	陸 上	選手	前島 博之	まえじま ひろゆき	男	25	鳥取県鳥取市	公益社団法人鳥取県聴覚障害者協会
48	30	陸 上	選手	中村 晃大	なかむら こうだい	男	22	茨城県つくば市	社会福祉法人長野県聴覚障害者協会
49	31	陸 上	選手	高橋 渚	たかはし なぎさ	女	24	静岡県沼津市	公益社団法人静岡県聴覚障害者協会
50	32	陸 上	選手	佐藤 麻梨乃	さとう まりの	女	17	神奈川県横須賀市	神奈川県聴覚障害者連盟 (横須賀市立ろう学校 高等部3年)
51	1	バドミントン	スタッフ	阿部 千子	あべ ゆきこ	女	50	東京都清瀬市	公益社団法人東京都聴覚障害者連盟
52	2	バドミントン	選手	別所 睦月	べっしょ むつき	女	23	三重県四日市市	社団法人三重県聴覚障害者協会
53	3	バドミントン	選手	品田 千紘	しなだ ちひろ	女	23	茨城県つくば市	社団法人茨城県聴覚障害者協会
54	1	バスケットボール男子	監督	坂本 知加良	さかもと ちから	男	33	北海道札幌市北区	健聴者
55	2	バスケットボール男子	コーチ	手塚 清貴	てづか きよたか	男	26	北海道札幌市北区	公益社団法人北海道ろうあ連盟
56	3	バスケットボール男子	コーチ	山崎 敬祐	やまざき けいすけ	男	33	福岡県福岡市中央区	健聴者

通し	No	競技名	役職 (スタッフ／選手)	名 前	ふりがな	性別	年齢	都道府県市区町村	所属団体
57	4	バスケットボール 男子	トレーナー	大塚 健吾	おおつか けんご	男	28	静岡県駿東郡	健聴者
58	5	バスケットボール 男子	選手	井上 和	いのうえ なごむ	男	18	愛知県豊田市	一般社団法人愛知県聴覚 障害者協会
59	6	バスケットボール 男子	選手	石川 友正	いしかわ ともまさ	男	31	東京都府中市	公益社団法人東京都聴覚 障害者連盟
60	7	バスケットボール 男子	選手	榎並 泰徳	えなみ やすのり	男	33	長崎県佐世保市	一般社団法人長崎県ろう あ協会
61	8	バスケットボール 男子	選手	緒方 寛人	おがた ひろと	男	26	福岡県福岡市 早良区	社会福祉法人福岡県聴覚 障害者協会
62	9	バスケットボール 男子	選手	大平 良龍	おおひら よしたつ	男	24	大阪府大阪市 淀川区	公益社団法人大阪聴力障 害者協会
63	10	バスケットボール 男子	選手	小立 哲也	おだち てつや	男	36	大阪府箕面市	公益社団法人大阪聴力障 害者協会
64	11	バスケットボール 男子	選手	小沼 功治	おぬま こうじ	男	31	神奈川県横浜市 戸塚区	神奈川県聴覚障害者連盟
65	12	バスケットボール 男子	選手	吉良 悠祐	きら ゆうすけ	男	24	福岡県朝倉市	社会福祉法人福岡県聴覚 障害者協会
66	13	バスケットボール 男子	選手	下山田 俊介	しもやまだ しゅ んすけ	男	31	東京都台東区	公益社団法人東京都聴覚 障害者連盟
67	14	バスケットボール 男子	選手	竹本 圭佑	たけもと けいすけ	男	26	埼玉県所沢市	社団法人埼玉県聴覚障害 者協会
68	15	バスケットボール 男子	選手	丹沢 佑輔	たんざわ ゆうすけ	男	27	神奈川県相模原市	神奈川県聴覚障害者連盟
69	16	バスケットボール 男子	選手	早川 倫夫	はやかわ みちお	男	25	東京都荒川区	公益社団法人東京都聴覚 障害者連盟
70	1	バスケットボール 女子	監督	篠原 雅哉	しのはら まさや	男	36	長野県松本市	社会福祉法人長野県聴覚 障害者協会
71	2	バスケットボール 女子	トレーナー	佐々木 愛	ささき あい	女	34	東京都西東京市	健聴者
72	3	バスケットボール 女子	スタッフ	会田 孝行	あいだ たかゆき	男	46	埼玉県所沢市	社団法人埼玉県聴覚障害 者協会
73	4	バスケットボール 女子	選手	岩崎 葵	いわさき あおい	女	20	愛知県岡崎市	一般社団法人京都府聴覚 障害者協会
74	5	バスケットボール 女子	選手	梅本 光恵	うめもと みつえ	女	27	大阪府東大阪市	公益社団法人大阪聴力障 害者協会
75	6	バスケットボール 女子	選手	大庭 紀美	おおば もとみ	女	33	静岡県駿東郡	公益社団法人静岡県聴覚 障害者協会
76	7	バスケットボール 女子	選手	緒方 沙織	おがた さおり	女	24	東京都世田谷区	公益社団法人東京都聴覚 障害者連盟
77	8	バスケットボール 女子	選手	鈴木 裕加	すずき ゆか	女	32	千葉県流山市	社会福祉法人千葉県聴覚 障害者協会
78	9	バスケットボール 女子	選手	田中 美穂	たなか みほ	女	25	福岡県福岡市西区	社会福祉法人福岡県聴覚 障害者協会
79	10	バスケットボール 女子	選手	永田 裕子	ながた ゆうこ	女	27	大阪府東大阪市	公益社団法人大阪聴力障 害者協会
80	11	バスケットボール 女子	選手	古 香	ふる かおり	女	27	兵庫県尼崎市	公益社団法人兵庫県聴覚 障害者協会
81	12	バスケットボール 女子	選手	宮永 順子	みやなが じゅんこ	女	37	千葉県流山市	社団法人埼玉県聴覚障害 者協会
82	13	バスケットボール 女子	選手	渡辺 亜紀	わたなべ あき	女	29	東京都世田谷区	公益社団法人東京都聴覚 障害者連盟
83	14	バスケットボール 女子	選手	伊瀬知 亜希子	いせち あきこ	女	29	大阪府阪南市	公益社団法人大阪聴力障 害者協会
84	1	ビーチバレーボール	監督	牛尾 洋人	うしお ひろひと	男	38	神奈川県逗子市	健聴者
85	2	ビーチバレーボール	トレーナー	竹上 舞	たけがみ まい	女	24	東京都八王子市	健聴者

通し	No	競技名	役職 (スタッフ／選手)	名 前	ふりがな	性別	年齢	都道府県市区町村	所属団体
86	3	ビーチバレーボール	選手	天羽 弘志	あもう ひろし	男	43	徳島県吉野川市	特定非営利活動法人徳島県聴覚障害者福祉協会
87	4	ビーチバレーボール	選手	小林 誠宜	こばやし みつのり	男	29	静岡県磐田市	公益社団法人静岡県聴覚障害者協会
88	5	ビーチバレーボール	選手	武内 晴香	ぶない はるか	女	30	静岡県袋井市	公益社団法人静岡県聴覚障害者協会
89	6	ビーチバレーボール	選手	小林 奈々絵	こばやし ななえ	女	30	静岡県磐田市	公益社団法人静岡県聴覚障害者協会
90	1	自転車	監督兼選手	早瀬 憲太郎	はやせ けんたろう	男	40	神奈川県横浜市西区	神奈川県聴覚障害者連盟
91	2	自転車	スタッフ兼選手	早瀬 久美	はやせ くみ	女	38	神奈川県横浜市西区	神奈川県聴覚障害者連盟
92	3	自転車	選手	得利 雄介	とくよし ゆうすけ	男	26	神奈川県川崎市高津区	神奈川県聴覚障害者連盟
93	4	自転車	選手	箭内 秀平	やない しゅうへい	男	25	東京都国分寺市	公益社団法人東京都聴覚障害者連盟
94	5	自転車	選手	宮田 大	みやた だい	男	45	東京都葛飾区	公益社団法人東京都聴覚障害者連盟
95	6	自転車	選手	一条 厚	いちじょう あつし	男	41	東京都町田市	公益社団法人東京都聴覚障害者連盟
96	7	自転車	選手	簗原 由加利	みのらはら ゆかり	女	30	東京都中野区	公益社団法人東京都聴覚障害者連盟
97	1	サッカー男子	監督	柴田 英輝	しばた えいき	男	33	埼玉県川越市	健聴者
98	2	サッカー男子	コーチ	矢野 能嗣	やの よしつぐ	男	25	山口県下関市	社会福祉法人福岡県聴覚障害者協会
99	3	サッカー男子	トレーナー	鈴木 辰哉	すずき たつや	男	22	東京都八王子市	健聴者
100	4	サッカー男子	国際手話通訳	高橋 孝司	たかはし こうじ	男	60	埼玉県草加市	社団法人埼玉県聴覚障害者協会
101	5	サッカー男子	スタッフ	佐藤 隆	さとう たかし	男	46	北海道千歳市	公益社団法人北海道ろうあ連盟
102	6	サッカー男子	スタッフ	小林 隼	こばやし じゅん	男	32	鹿児島県出水市	鹿児島県聴覚障害者協会
103	7	サッカー男子	選手	松元 卓巳	まつもと たくみ	男	23	福岡県北九州市小倉北区	社会福祉法人福岡県聴覚障害者協会
104	8	サッカー男子	選手	菱岡 敬彰	ひしおか たかあき	男	28	北海道河東郡	公益社団法人北海道ろうあ連盟
105	9	サッカー男子	選手	千葉 駿介	ちば しゅんすけ	男	24	東京都江戸川区	公益社団法人東京都聴覚障害者連盟
106	10	サッカー男子	選手	野呂 啓	のろ けい	男	37	愛知県名古屋市瑞穂区	一般社団法人愛知県聴覚障害者協会
107	11	サッカー男子	選手	西浦 太志	にしうら ふとし	男	31	大阪府和泉市	公益社団法人大阪聴力障害者協会
108	12	サッカー男子	選手	細見 尚史	ほそみ ひさし	男	31	兵庫県たつの市	公益社団法人兵庫県聴覚障害者協会
109	13	サッカー男子	選手	毛塚 丈博	けづか たけひろ	男	25	東京都日野市	公益社団法人東京都聴覚障害者連盟
110	14	サッカー男子	選手	江島 由高	えじま よしたか	男	27	千葉県柏市	公益社団法人東京都聴覚障害者連盟
111	15	サッカー男子	選手	村上 祐太郎	むらかみ ゆうたろう	男	27	千葉県旭市	公益社団法人東京都聴覚障害者連盟
112	16	サッカー男子	選手	村田 繁	むらた しげる	男	30	神奈川県横浜市都筑区	神奈川県聴覚障害者連盟
113	17	サッカー男子	選手	桐生 聖明	きりゅう きよあき	男	23	神奈川県大和市	神奈川県聴覚障害者連盟
114	18	サッカー男子	選手	吉野 勇樹	よしの ゆうき	男	21	茨城県つくば市	社団法人茨城県聴覚障害者協会

通し	No	競技名	役職 (スタッフ／選手)	名 前	ふりがな	性別	年齢	都道府県市区町村	所属団体
115	19	サッカー男子	選手	伊東 高志	いとう たかし	男	37	愛知県安城市	一般社団法人愛知県聴覚障害者協会
116	20	サッカー男子	選手	古島 啓太	ふるしま けいた	男	22	大阪府守口市	公益社団法人大阪聴力障害者協会
117	21	サッカー男子	選手	竹内 裕樹	たけうち ひろき	男	22	福岡県福岡市博多区	社会福祉法人福岡県聴覚障害者協会
118	22	サッカー男子	選手	綿貫 俊基	わたぬき としき	男	24	神奈川県川崎市多摩区	神奈川県聴覚障害者連盟
119	23	サッカー男子	選手	渡邊 亮平	わたなべりょうへい	男	23	大分県大分市	社会福祉法人大分県聴覚障害者協会
120	24	サッカー男子	選手	河野 翔	こうの しょう	男	24	千葉県市川市	公益社団法人東京都聴覚障害者連盟
121	25	サッカー男子	選手	松本 弘	まつもと ひろし	男	27	東京都大田区	公益社団法人東京都聴覚障害者連盟
122	26	サッカー男子	選手	中島 正行	なかじま まさゆき	男	30	神奈川県茅ヶ崎市	公益社団法人東京都聴覚障害者連盟
123	27	サッカー男子	選手	塩田 知弘	しおた ともひろ	男	25	神奈川県茅ヶ崎市	神奈川県聴覚障害者連盟
124	28	サッカー男子	選手	白井 隆	しらい たかし	男	29	大阪府茨木市	公益社団法人大阪聴力障害者協会
125	29	サッカー男子	選手	野間 三夫	のま みつお	男	34	福岡県北九州市八幡西区	社会福祉法人福岡県聴覚障害者協会
126	1	サッカー女子	監督	福永 久代	ふくなが ひさよ	女	35	静岡県焼津市	健聴者
127	2	サッカー女子	GK コーチ	北 一行	きた かずゆき	男	37	埼玉県さいたま市桜区	健聴者
128	3	サッカー女子	トレーナー	石渡 あゆ未	いしわた あゆみ	女	23	東京都杉並区	健聴者
129	4	サッカー女子	スタッフ	立川 智隆	たつがわ ともたか	男	35	広島県広島市安佐北区	一般社団法人広島県ろうあ連盟
130	5	サッカー女子	スタッフ	中村 祥子	なかむら しょうこ	女	24	東京都世田谷区	公益社団法人東京都聴覚障害者連盟
131	6	サッカー女子	選手	芹澤 育代	せりざわ いくよ	女	28	東京都杉並区	公益社団法人東京都聴覚障害者連盟
132	7	サッカー女子	選手	大谷 遥佳	おおたに はるか	女	15	静岡県浜松市東区	公益社団法人静岡県聴覚障害者協会 (静岡県立沼津聴覚特別支援学校 高等部1年)
133	8	サッカー女子	選手	大島 彩香	おおしま あやか	女	21	兵庫県西宮市	公益社団法人兵庫県聴覚障害者協会
134	9	サッカー女子	選手	濱田 梨栄	はまだ りえ	女	28	東京都大田区	公益社団法人東京都聴覚障害者連盟
135	10	サッカー女子	選手	原田 明奈	はらだ あきな	女	26	静岡県焼津市	公益社団法人静岡県聴覚障害者協会
136	11	サッカー女子	選手	寺井 名美	てらい なみ	女	37	静岡県磐田市	公益社団法人静岡県聴覚障害者協会
137	12	サッカー女子	選手	川畑 菜奈	かわばた なな	女	23	北海道札幌市厚別区	神奈川県聴覚障害者連盟
138	13	サッカー女子	選手	御園 裕未	みその ゆみ	女	26	埼玉県富士見市	社団法人埼玉県聴覚障害者協会
139	14	サッカー女子	選手	井部 絵里子	いべ えりこ	女	31	兵庫県三田市	公益社団法人兵庫県聴覚障害者協会
140	15	サッカー女子	選手	中井 香那	なかい かな	女	24	大阪府堺市北区	公益社団法人大阪聴力障害者協会
141	16	サッカー女子	選手	酒井 藍莉	さかい あいり	女	14	静岡県静岡市葵区	公益社団法人静岡県聴覚障害者協会 (静岡県立静岡ろう学校 中学部3年)
142	17	サッカー女子	選手	宮田 夏実	みやた なつみ	女	15	兵庫県伊丹市	公益社団法人兵庫県聴覚障害者協会 (啓明学院高等学校 1年)
143	18	サッカー女子	選手	坂田 博美	さかた ひろみ	女	32	東京都品川区	公益社団法人東京都聴覚障害者連盟

通し	No	競技名	役職 (スタッフ／選手)	名 前	ふりがな	性別	年齢	都道府県市区町村	所属団体
144	19	サッカー女子	選手	佐藤 愛香	さとう あいか	女	28	神奈川県大和市	神奈川県聴覚障害者連盟
145	20	サッカー女子	選手	仲宗根 祥子	なかそねしょうこ	女	30	神奈川県座間市	神奈川県聴覚障害者連盟
146	21	サッカー女子	選手	星野 陽子	ほしの ようこ	女	28	東京都杉並区	公益社団法人東京都聴覚障害者連盟
147	22	サッカー女子	選手	首藤 麻衣	しゅとう まい	女	30	東京都練馬区	公益社団法人東京都聴覚障害者連盟
148	23	サッカー女子	選手	岩渕 亜依	いわぶち あい	女	19	茨城県つくば市	公益社団法人茨城県聴覚障害者協会
149	1	柔 道	監督	江上 忠孝	えがみ ただたか	男	37	福岡県糸島市	健聴者
150	2	柔 道	コーチ	桑原 和寿	くわはら かずひさ	男	26	福岡県朝倉郡	健聴者
151	3	柔 道	手話通訳	西川 美奈子	にしかわ みなこ	女	42	福岡県宗像市	健聴者
152	4	柔 道	選手	山田 光穂	やまだ こうすい	男	31	滋賀県彦根市	一般社団法人滋賀県ろうあ協会
153	5	柔 道	選手	吉良 暁生	きら あきお	男	32	千葉県館山市	社会福祉法人千葉県聴覚障害者協会
154	6	柔 道	選手	東岸 林太郎	とうがんりんたろう	男	27	高知県宿毛市	一般社団法人高知県聴覚障害者協会
155	7	柔 道	選手	木ノ下 寿	きのした ひさし	男	25	京都府長岡京市	一般社団法人京都府聴覚障害者協会
156	8	柔 道	選手	宮下 真弥	みやした しんや	男	28	愛知県安城市	一般社団法人愛知県聴覚障害者協会
157	1	オリエンテーリング	監督	丘村 彰敏	おかむら あきとし	男	50	大阪府高槻市	公益社団法人大阪聴力障害者協会
158	2	オリエンテーリング	選手	田村 聡	たむら さとし	男	48	東京都立川市	公益社団法人東京都聴覚障害者連盟
159	1	水 泳	監督	豊田 律	とよだ ただし	男	46	京都府京都市伏見区	一般社団法人京都府聴覚障害者協会
160	2	水 泳	コーチ	平田 純	ひらた じゅん	男	41	愛知県日進市	一般社団法人愛知県聴覚障害者協会
161	3	水 泳	トレーナー	中里 賢一	なかざと けんいち	男	40	東京都豊島区	健聴者
162	4	水 泳	スタッフ	高岸 里佳	たかぎし りか	女	27	大阪府大阪市城東区	公益社団法人大阪聴力障害者協会
163	5	水 泳	選手	金持 義和	かなじ よしかず	男	19	大阪府泉南郡	公益社団法人大阪聴力障害者協会
164	6	水 泳	選手	茨 隆太郎	いばり りゅうたろう	男	19	神奈川県秦野市	公益社団法人東京都聴覚障害者連盟
165	7	水 泳	選手	今村 可奈	いまむら かな	女	25	大阪府河内長野市	公益社団法人大阪聴力障害者協会
166	8	水 泳	選手	高瀬 理恵	たかせ りえ	女	35	東京都太田区	公益社団法人東京都聴覚障害者連盟
167	9	水 泳	選手	藤川 彩夏	ふじかわ あやか	女	17	長野県駒ヶ根市	社会福祉法人長野県聴覚障害者協会 (長野県松本ろう学校高等部3年)
168	10	水 泳	選手	久保 南	くぼ みなみ	女	16	愛知県豊田市	一般社団法人愛知県聴覚障害者協会 (愛知県立岡崎ろう学校高等部2年)
169	1	卓 球	監督	佐藤 真二	さとう しんじ	男	50	東京都杉並区	健聴者
170	2	卓 球	コーチ	内山 敏彦	うちやまとしひこ	男	67	茨城県高萩市	健聴者
171	3	卓 球	コーチ	須藤 聡美	すどう さとみ	女	36	埼玉県八潮市	健聴者
172	4	卓 球	手話通訳	井出 敬子	いで けいこ	女	50	神奈川県相模原市	健聴者

通し	No	競技名	役職 (スタッフ／選手)	名 前	ふりがな	性別	年齢	都道府県市区町村	所属団体
173	5	卓 球	選手	上田 萌	うえだ もえ	女	23	茨城県日立市	社団法人茨城県聴覚障害者協会
174	6	卓 球	選手	佐藤 理穂	さとう りほ	女	22	東京都杉並区	公益社団法人東京都聴覚障害者連盟
175	7	卓 球	選手	有馬 千寿子	ありま ちずこ	女	35	神奈川県横浜市鶴見区	神奈川県聴覚障害者連盟
176	8	卓 球	選手	川崎 瑞恵	かわさき みずえ	女	17	東京都小平市	公益社団法人東京都聴覚障害者連盟 (秋草学園高校高等部3年)
177	9	卓 球	選手	望月 翔太	もちづき しょうた	男	26	神奈川県横浜市港北区	神奈川県聴覚障害者連盟
178	10	卓 球	選手	有馬 歓生	ありま よしお	男	32	神奈川県横浜市鶴見区	神奈川県聴覚障害者連盟
179	11	卓 球	選手	亀澤 史憲	かめざわ ふみのり	男	20	宮城県仙台市青葉区	一般社団法人山梨県聴覚障害者協会
180	1	テニス	監督	稲辺 忠奎	いなべ ちゅうけい	男	65	埼玉県戸田市	社団法人埼玉県聴覚障害者協会
181	2	テニス	コーチ	内藤 公広	ないとう きみひろ	男	37	東京都練馬区	健聴者
182	3	テニス	スタッフ	尾形 滋子	おがた しげこ	女	43	大阪府寝屋川市	公益社団法人大阪聴力障害者協会
183	4	テニス	選手	松下 哲也	まつした てつや	男	39	大阪府貝塚市	公益社団法人大阪聴力障害者協会
184	5	テニス	選手	芦野 正樹	あしの まさき	男	30	神奈川県横浜市港北区	神奈川県聴覚障害者連盟
185	6	テニス	選手	豊田 恵子	とよた けいこ	女	30	大阪府泉南市	公益社団法人大阪聴力障害者協会
186	1	バレーボール男子	監督	岩下 忠正	いわした ただまさ	男	34	東京都江戸川区	健聴者
187	2	バレーボール男子	トレーナー	岩田 秀治	いわた ひではる	男	46	大阪府大阪市淀川区	健聴者
188	3	バレーボール男子	手話通訳	大崎 紀代美	おおさき きよみ	女	53	大阪府豊中市	健聴者
189	4	バレーボール男子	スタッフ	菊池 加奈子	きくち かなこ	女	50	東京都世田谷区	健聴者
190	5	バレーボール男子	選手	若原 正享	わかはら まさゆき	男	30	栃木県那須塩原市	一般社団法人栃木県聴覚障害者協会
191	6	バレーボール男子	選手	田中 利典	たなか としのり	男	28	兵庫県尼崎市	公益社団法人兵庫県聴覚障害者協会
192	7	バレーボール男子	選手	高橋 竜一	たかはし りゅういち	男	25	愛知県刈谷市	一般社団法人愛知県聴覚障害者協会
193	8	バレーボール男子	選手	中村 俊雄	なかむら としお	男	30	大阪府大阪市福島区	公益社団法人大阪聴力障害者協会
194	9	バレーボール男子	選手	中野 智久	なかの ともひさ	男	27	奈良県奈良市	社団法人奈良県聴覚障害者協会
195	10	バレーボール男子	選手	今井 勇太	いまい ゆうた	男	20	大阪府大阪市城東区	公益社団法人大阪聴力障害者協会
196	11	バレーボール男子	選手	信田 光宣	のぶた みつのぶ	男	42	兵庫県神戸市西区	公益社団法人兵庫県聴覚障害者協会
197	12	バレーボール男子	選手	佐藤 淳吾	さとう じゅんご	男	32	兵庫県川辺郡	公益社団法人兵庫県聴覚障害者協会
198	13	バレーボール男子	選手	木村 孝成	きむら たかしげ	男	25	東京都江戸川区	公益社団法人東京都聴覚障害者連盟
199	14	バレーボール男子	選手	加賀 充	かが みつる	男	22	新潟県上越市	一般社団法人新潟県聴覚障害者協会
200	15	バレーボール男子	選手	中橋 薫哉	なかはし くにや	男	30	愛知県日進市	一般社団法人愛知県聴覚障害者協会
201	16	バレーボール男子	選手	田畑 稔	たばた みのる	男	28	愛知県刈谷市	一般社団法人愛知県聴覚障害者協会

通し	No	競技名	役職 (スタッフ／選手)	名 前	ふりがな	性別	年齢	都道府県市区町村	所属団体
202	1	バレーボール女子	監督	狩野 美雪	かのう みゆき	女	36	東京都世田谷区	健聴者
203	2	バレーボール女子	コーチ	村井 貴行	むらい たかゆき	男	29	千葉県船橋市	健聴者
204	3	バレーボール女子	トレーナー	中川 菜保	なかがわ なほ	女	36	茨城県つくば市	健聴者
205	4	バレーボール女子	手話通訳	飯塚 佳代	いいつか かよ	女	42	千葉縣市川市	健聴者
206	5	バレーボール女子	スタッフ	大川 裕二	おおかわ ゆうじ	男	46	東京都大田区	公益社団法人東京都聴覚 障害者連盟
207	6	バレーボール女子	スタッフ	大川 愛子	おおかわ あいこ	女	45	東京都大田区	公益社団法人東京都聴覚 障害者連盟
208	7	バレーボール女子	選手	柳川 奈美子	やながわ なみこ	女	27	宮城県仙台市泉区	社団法人宮城県ろうあ協 会
209	8	バレーボール女子	選手	菅谷 美穂	すがや みほ	女	23	千葉県船橋市	社会福祉法人千葉県聴覚 障害者協会
210	9	バレーボール女子	選手	宇賀耶 早紀	うがや さき	女	22	栃木県栃木市	一般社団法人栃木県聴覚 障害者協会
211	10	バレーボール女子	選手	安積 梨絵	あづみ りえ	女	21	兵庫県姫路市	公益社団法人兵庫県聴覚 障害者協会
212	11	バレーボール女子	選手	安積 千夏	あづみ ちか	女	17	兵庫県姫路市	公益社団法人兵庫県聴覚 障害者協会
213	12	バレーボール女子	選手	河尻 奈美	かわじり なみ	女	24	岐阜県関市	一般社団法人岐阜県聴覚 障害者協会
214	13	バレーボール女子	選手	長澤 みゆき	ながさわ みゆき	女	25	神奈川県平塚市	神奈川県聴覚障害者連盟
215	14	バレーボール女子	選手	高良 美樹	たから みき	女	22	香川県善通寺市	一般社団法人沖縄県聴覚 障害者協会
216	15	バレーボール女子	選手	藤井 美緒	ふじい みお	女	18	岐阜県加茂郡	一般社団法人岐阜県聴覚障害者協会 (岐阜県立岐阜聾学校 高等部3年)
217	16	バレーボール女子	選手	藤 裕子	ふじ ひろこ	女	36	兵庫県神戸市西区	公益社団法人兵庫県聴覚 障害者協会
218	17	バレーボール女子	選手	三浦 早苗	みうら さなえ	女	27	東京都杉並区	公益社団法人東京都聴覚 障害者連盟
219	18	バレーボール女子	選手	山崎 望	やまさき のぞみ	女	28	高知県室戸市	一般社団法人高知県聴覚 障害者協会

成績一覽

メダリスト

No.	種 目		氏 名	メダル
1	陸上	男子ハンマー投げ	森本真敏	銀メダル
2	陸上	女子棒高跳び	佐藤麻梨乃	銀メダル
3	陸上	男子棒高跳び	竹花康太郎	銅メダル
4	陸上	男子マラソン	山中孝一郎	銅メダル
5	陸上	女子100 mハードル	田井小百合	銅メダル
6	自転車	女子マウンテンバイク	早瀬久美	銅メダル
7	柔道	男子－ 60kg 級	吉良暁生	銀メダル
8	柔道	男子 90 － 100kg 級	山田光穂	銅メダル
9	柔道	男子無差別級	山田光穂	銅メダル
10	水泳	男子 50 M背泳ぎ	金持義和	金メダル
11	水泳	男子 100 M背泳ぎ	金持義和	銀メダル
12	水泳	男子 200 M背泳ぎ	金持義和	銀メダル
13	水泳	男子 50 M背泳ぎ	茨隆太郎	銀メダル
14	水泳	男子 200 M個人メドレー	茨隆太郎	銀メダル
15	水泳	男子 400 M個人メドレー	茨隆太郎	銀メダル
16	水泳	100 M背泳ぎ	茨隆太郎	銅メダル
17	水泳	200 M背泳ぎ	茨隆太郎	銅メダル
18	卓球	女子シングルス	上田 萌	金メダル
19	卓球	女子ダブルス	上田 萌 佐藤理穂	銀メダル
20	卓球	女子団体	上田 萌 佐藤理穂 有馬千寿子 川崎瑞恵	銅メダル
21	バレーボール	女子団体	柳川奈美子 菅谷美穂 宇賀耶早紀 安積梨絵 安積千夏 河尻奈美 長澤みゆき 高良美樹 藤井美緒 藤 裕子 三浦早苗 山崎 望	銀メダル

獲得メダル数	金メダル	2
	銀メダル	10
	銅メダル	9
	合計	21

国別メダル獲得成績一覧

(ソフィアデフリンピックウェブサイトより)

順位	国 名	金	銀	銅	計
1	ロシア	67	52	58	177
2	ウクライナ	21	30	37	88
3	韓国	19	11	12	42
4	ベラルーシ	12	11	4	27
5	中華人民共和国	12	5	8	25
6	アメリカ合衆国	9	8	12	29
7	トルコ	7	9	17	33
8	イラン	7	4	21	32
9	ケニア	6	5	5	16
10	リトアニア	4	5	4	13
11	ベネズエラ	4	4	5	13
12	イタリア	4	3	5	12
13	台湾	3	12	9	24
14	ドイツ	3	6	5	14
15	ハンガリー	3	0	1	4
16	日本 	2	10	9	21
17	フランス	2	6	3	11
18	ポーランド	2	1	1	4
19	プエルトリコ	2	0	0	2
20	キューバ	2	0	0	2
21	ブルガリア	1	4	6	11
22	スウェーデン	1	1	2	4
23	ボルトガル	1	1	1	3
24	スロバキア	1	1	1	3
25	オーストラリア	1	1	1	3
26	エストニア	1	1	1	3
27	クロアチア	1	1	0	2
28	マカオ	1	0	1	2
29	ノルウェー	1	0	0	1
30	カザフスタン	1	0	0	1
31	インド	1	0	0	1
32	スイス	1	0	0	1
33	イギリス	0	2	3	5
34	チェコ共和国	0	2	1	3
35	南アフリカ	0	2	1	3
36	モンゴル	0	1	3	4
37	ブラジル	0	1	3	4
38	アルゼンチン	0	1	1	2
39	セルビア	0	1	1	2
40	ギリシャ	0	1	0	1
41	インドネシア	0	0	2	2
42	オーストリア	0	0	2	2
43	アルメニア	0	0	1	1
44	キプロス	0	0	1	1
45	ナイジェリア	0	0	1	1
46	ラトビア	0	0	1	1
47	モルドバ	0	0	1	1
48	メキシコ	0	0	1	1
49	トルクメニスタン	0	0	1	1
	合 計	203	203	253	659

各競技チーム成績一覧

【陸上競技 男子】

選手名	種目	出場数	ラウンド	組数	順位(位/人)	記録	風力	成績
白石 進	男子 100m	64	1次予選	8	6/8	11.53	+1.4	予選敗退
小林 弘明	男子 100m	64	1次予選	8	5/8	11.57	+1.0	予選敗退
三枝 浩基	男子 100m	64	1次予選	8	1/8	11.03	+0.7	8位 / 入賞
		32	2次予選	4	1/8	10.95	+1.0	
		16	準決勝	2	3/8	11.27	-1.7	
		8	決勝	1	8/8	11.04	+1.4	
佐々木 琢磨	男子 200m	53	1次予選	7	5/8	24.05	-0.9	2次予選敗退
		32	2次予選	4	8/8	23.82	+1.3	
堰本 将平	男子 200m	53	1次予選	7	4/8	23.65	+1.6	2次予選敗退
		32	2次予選	4	7/8	24.04	-3.8	
岡部 祐介	男子 400m	44	予選	6	4/7	51.34		準決勝敗退
		24	準決勝	3	5/8	50.80		
水野 史生	男子 400m	44	予選	6	5/7	50.82		準決勝敗退
		24	準決勝	3	6/8	50.64		
羽柴 大典	男子 400m	44	予選	6	4/7	51.59		準決勝敗退
		24	準決勝	3	7/8	51.74		
北田 明広	男子 800m	27	予選	4	5/8	1.58.49		準決勝敗退
		16	準決勝	2	5/8	1.59.31		
白石・小林・三枝・佐々木・堰本	男子 4x100m リレー	13	準決勝	2	1/7	42.78		6位 / 入賞
		8	決勝	1	6/8	43.08		
岡部・水野・羽柴・北田	男子 4x400m リレー	13	準決勝	2	3/7	3.24.46		6位 / 入賞
		8	決勝	1	6/8	3.22.74		
高田 裕士	男子 400m ハードル	13	予選	2	4/6	55.99		7位 / 入賞
		8	決勝	1	7/8	57.47		
竹花 康太郎	男子 棒高跳び	5	決勝	1	3/5	4m60		銅メダル
前島 博之	男子 走り幅跳び	22	予選	1	7/22	6m66		7位 / 入賞
		12	決勝	1	7/12	6m99		
	男子 走り高跳び	12	決勝	1	4/12	1m99		4位 / 入賞
中村 晃大	男子 走り幅跳び	22	予選	1	8/22	6m53		8位 / 入賞
		12	決勝	1	8/12	6m95		
	男子 三段飛び	7	決勝	1	6/7	13m74	+0.2	6位 / 入賞
佐藤 将光	男子 槍投げ	18	予選	1	8/18	54m12		7位 / 入賞
		12	決勝	1	7/12	56m22		
佐藤 賢太	男子 槍投げ	18	予選	1	10/18	56m43		9位
		12	決勝	1	9/12	55m76		
森本 真敏	男子 ハンマー投げ	9	決勝	1	2/9	58m20		銀メダル
石田 孝正	男子 ハンマー投げ	9	決勝	1	4/9	54m30		4位 / 入賞
金子 誠一	男子 マラソン	13	決勝	1	6/13	2H46m06		6位入賞
山田 真人	男子 マラソン	13	決勝	1	DNF	-		途中棄権
山中 孝一郎	男子 マラソン	13	決勝	1	3/13	2H39m09		銅メダル
	男子 5000 m	19	決勝	1	5/19	15.35.67		5位 / 入賞
	男子 10000 m	10	決勝	1	4/10	32.10.90		4位 / 入賞

【陸上競技 女子】

門脇 翠	女子 100m	29	予選	4	7/8	13.84	-1.2	予選敗退
土屋 文香	女子 100m	29	予選	4	5/7	13.42	2.1	予選敗退
田井 小百合	女子 100m ハードル	13	予選	2	1/7	14.82	-0.1	銅メダル
		8	決勝	1	3/8	14.56	-0.4	
小松 彩香	女子 400m ハードル	13	予選	2	3/6	65.24		7位 / 入賞
		8	決勝	1	7/8	64.65		
門脇・土屋・田井・小松	女子 4x100m リレー	9	準決勝	2	3/4	51.01		6位 / 入賞
		7	決勝	1	6/7	50.64		
佐藤 麻梨乃	女子 棒高跳び	3	決勝	1	2/3	3m00		銀メダル
高橋 渚	女子 槍投げ	12	決勝	1	4/12	43m20		4位 / 入賞

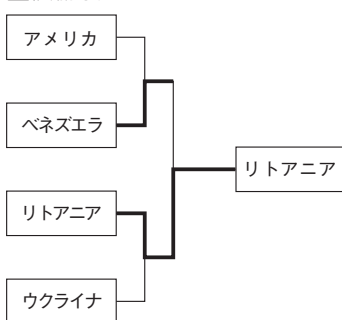
【バドミントン 女子】

選手名	種目	出場数	ラウンド	組数	勝敗	対戦相手	マッチ	セットポイント					予選成績			成績
						(選手名・国)		1	2	3	4	5	順位	勝	負	
別所 睦月	女子シングルス	38	予選リーグ	12	負	Katrin Neudolt [7]	オーストリア	0-2	12-21	10-21			3/4	1	2	予選敗退
					勝	Katarina Babalova	スロバキア	2-0	21-15	21-11						
					負	Yan-Ru Shen	台湾	0-2	17-21	19-21						
品田 千紘	女子シングルス	38	予選リーグ	12	負	Seonhwa Jeong [4]	韓国	0-2	19-21	7-21			2/3	1	1	予選通過
					勝	Anna Chorna	ウクライナ	2-0	21-11	21-6						
		24	決勝トーナメント		勝	Suni Venatalia	インドネシア	2-0	21-18	21-14						2回戦敗退
別所・品田	女子ダブルス	16	予選リーグ	4	負	Yan-Ru Shen	台湾	0-2	17-21	13-21			1/4	3	0	予選通過
					勝	Yan-Ru Shen/Wen-Hsuan Tu	台湾	2-0	21-17	21-7						
					勝	Bogdana Gubanova/Anastasiia Gubsk	ウクライナ	2-0	21-14	21-19						
		8	決勝トーナメント		勝	Neneng Lestari/Suni Venatalia	インドネシア	2-0	21-8	21-16						2回戦敗退
					勝	Kirsten Allen/Lesley Holdsworth	イギリス	2-0	21-17	21-15						
					負	Meng Xing Wang/Heng Yan Zhang	中国	0-2	16-21	12-21						
		2	3位決定戦		負	Olga Shtayger/Alena Soboleva	ロシア	0-2	9-21	11-21						4位入賞

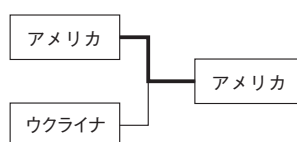
【バスケットボール 男子】

プログラム	対戦国	勝敗	スコア	成績	結果
予選リーグ	ウクライナ	負	48-101	0勝3敗 (Cグループ4位)	予選敗退
	ベネズエラ	負	74-108		
	トルコ	負	78-90		

■決勝戦



■3位決定戦



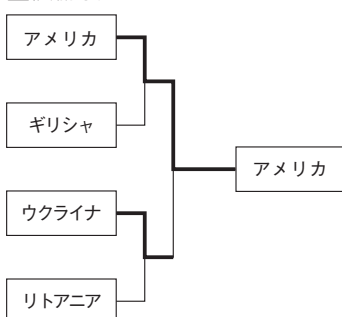
■最終結果

順位	国名	順位	国名
1	リトアニア	5	ロシア
2	ベネズエラ	6	ギリシャ
3	アメリカ	7	スロベニア
4	ウクライナ	8	アルゼンチン

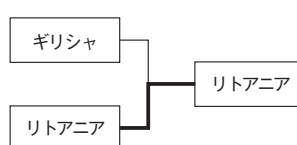
【バスケットボール 女子】

プログラム	対戦国	勝敗	スコア	成績	結果
予選リーグ	ギリシャ	負	26-52	0勝3敗 (Bグループ4位)	予選敗退
	ロシア	負	53-58		
	リトアニア	負	27-90		
準々決勝	アメリカ	負	25-90	1勝2敗	6位入賞
5位～8位決定戦	ベラルーシ	勝	67-62		
	イタリア	負	37-45		

■決勝戦



■3位決定戦



■最終結果

順位	国名	順位	国名
1	アメリカ	5	イタリア
2	ウクライナ	6	日本
3	リトアニア	7	ベラルーシ
4	ギリシャ	8	ロシア

【ビーチバレーボール 男子】

選手名	ラウンド	対戦相手		勝敗	マッチ	セットポイント			予選成績			成績
		選手名	国			1	2	3	順位	勝	負	
天羽 弘志 小林 誠宣	予選リーグ (グループE)	Kirillov/Sinelnikov	ロシア (2)	負	0-2	4-21	12-21		3/4	1	2	予選通過
		Patola/Kupczalajc	ポーランド (1)	負	0-2	14-21	11-21					
		Dyck/Whiteley	カナダ (2)	勝	2-0	21-19	21-5					
	敗者復活戦	Baltaci/Konya	トルコ	不戦勝	2-0	21-0	21-0					
	決勝トーナメント	Dayanov/Selytin	ロシア (1)	負	0-2	11-21	5-21					ベスト16

【ビーチバレーボール 女子】

選手名	ラウンド	対戦相手		勝敗	マッチ	セットポイント			予選成績			成績
		選手名	国			1	2	3	順位	勝	負	
武内 晴香 小林 奈々絵	予選リーグ (グループD)	Moore/Sanders	アメリカ (2)	負	1-2	16-21	21-11	13-15	3/5	2	2	予選通過
		Kireeva/Alexeeva	ロシア (1)	負	0-2	10-21	13-21					
		Armeniakou/Bereti	ギリシャ	勝	2-0	21-17	21-18					
		Nascimento/Vidal	ブラジル (2)	勝	2-0	21-6	21-6					
	決勝トーナメント	Stukan/Ivanova	ロシア (2)	負	0-2	11-21	12-21					ベスト16

【自転車】

選手名	種目	出場数	順位(位 / 人)	記録	成績
早瀬 憲太郎	男子 1000m スプリント	38	10/38	12.75	10 位
	男子 個人タイムトライアル	41	26/41	1:00:57.36	26 位
	男子 個人ロードレース	44	17/44	02:31:51	17 位
	男子 50km ポイントレース	43	—	DNF	途中棄権
	男子 マウンテンバイク	31	23/31	02:02:33	23 位
得利 雄介	男子 1000m スプリント	38	23/38	13.36	23 位
	男子 個人タイムトライアル	41	39/41	1:12:27.01	39 位
	男子 個人ロードレース	44	27/44	03:01:16	27 位
	男子 50km ポイントレース	43	—	DNF	途中棄権
箭内 秀平	男子 50km ポイントレース	43	—	DNF	途中棄権
	男子 マウンテンバイク	31	20/31	01:57:32	20 位
宮田 大	男子 個人タイムトライアル	41	41/41	1:15:20.82	41 位
	男子 個人ロードレース	44	—	DNF	途中棄権
	男子 50km ポイントレース	43	—	DNF	途中棄権
一条 厚	男子 1000m スプリント	38	38/38	14.71	38 位
	男子 個人タイムトライアル	41	38/41	1:09:35.77	38 位
	男子 50km ポイントレース	43	—	DNF	途中棄権
早瀬 久美	女子 マウンテンバイク	6	3/6	01:19:49	銅メダル
蓑原 由加利	女子 1000m スプリント	7	—	DNS	欠場
	女子 個人タイムトライアル	10	7/10	54:09:40	7 位 / 入賞
	女子 個人ロードレース	9	9/9	01:42:18	9 位

【サッカー 男子】

プログラム	対戦国	勝敗	スコア	P K	成績
予選リーグ	ロシア	負	2-5		2敗1引
	ナイジェリア	引	2-2		
	アイルランド	負	1-2		
13-16 位決定トーナメント	サウジアラビア	勝	11-1		14 位 /16 チーム
13-14 位決定戦	アルゼンチン	負	1-3		

■最終結果

順位	国名	順位	国名	順位	国名
1	ロシア	6	アイルランド	11	イラク
2	ウクライナ	7	トルコ	12	ベネズエラ
3	ドイツ	8	ギリシャ	13	アルゼンチン
4	エジプト	9	韓国	14	日本
5	イラン	10	ナイジェリア	15	サウジアラビア
			16	デンマーク	

【サッカー 女子】

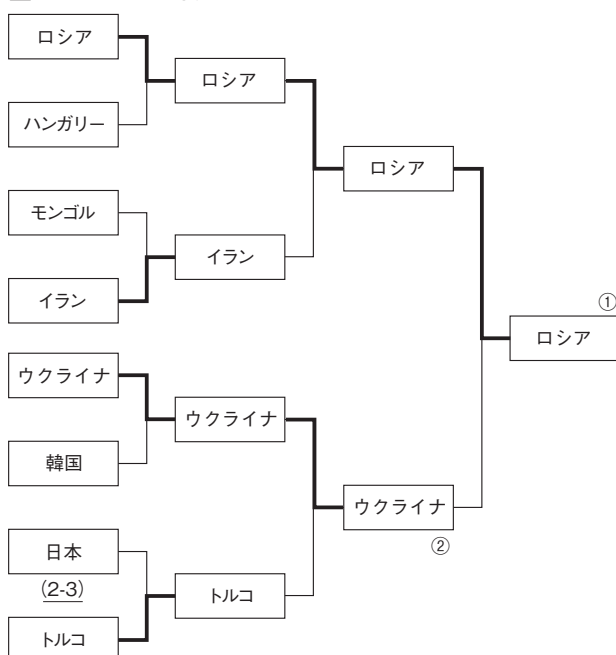
プログラム	対戦国	勝敗	スコア	P K	成績
予選リーグ	ポーランド	負	0-2		1勝2敗
	ギリシャ	勝	10-0		
	アメリカ	負	0-7		
5- 6 位決定戦	ドイツ	負	0-3		6 位入賞

■最終結果

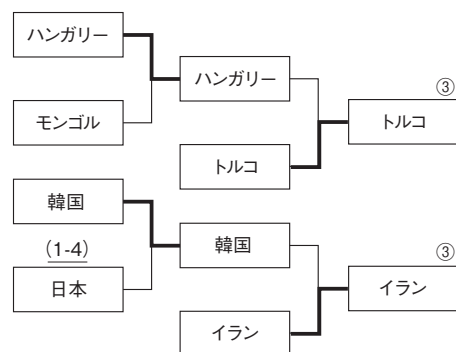
順位	国名	順位	国名
1	アメリカ	5	ドイツ
2	ロシア	6	日本
3	イギリス	7	ギリシャ
4	ポーランド		

【柔道】

■トーナメント戦



■敗者復活戦&3位決定戦



■最終結果

順位	国名	順位	国名
1	ロシア	5	ハンガリー
2	ウクライナ	5	韓国
3	トルコ	5	モンゴル
3	イラン	5	日本

【オリエンテーリング】

長距離 (8,700m 高低差 405m、コントロール数 24 個)

順位	選手名	国名	タイム	1 位との時間差
1	Tomas Kuzminskis	リトアニア	1:03:21	
2	Viktor Dinges	ロシア	1:07:05	3:44
3	Vladimir Grinin	ロシア	1:15:34	12:13
4	Oleksandr Sankin	ウクライナ	1:17:01	13:40
5	Dmytro Plakhotnik	ウクライナ	1:19:34	16:13
6	Vytautas Remeika	リトアニア	1:22:33	19:12
7	Mantas Volungevicius	リトアニア	1:22:37	19:16
8	Ruslan Nikolayenko	ウクライナ	1:23:38	20:17
9	Aleksandr Popov	ロシア	1:27:03	23:42
10	Daniel Vasser	エストニア	1:27:23	24:02
11	Ferenc Mihalyi	ハンガリー	1:28:50	25:29
12	Bojtor Szabolcs	ハンガリー	1:46:32	43:11
13	Marko Lehtonen	フィンランド	1:49:21	46:00
14	Lerose Luigi	イタリア	1:51:08	47:47
15	Imre Boros	ハンガリー	1:52:45	49:24
16	Jozef Prochazka	チェコ共和国	1:52:55	49:34
17	Mikhail Mikhailiukou	ベラルーシ	1:58:26	55:05
18	Christian Hilfiker	スイス	2:00:18	56:57
19	Farid Zagrutdinov	カザフスタン	2:07:41	1:04:20
20	Othmar Schelbert	スイス	2:07:44	1:04:23
21	田村 聡	日本	2:45:45	1:42:24
22	Janda Jiri	チェコ共和国	3:17:37	2:14:16
	Lenny Renee Damholt	デンマーク	失格	—
	Martin Betlem	エストニア	失格	—
	Lars Ryberg Vikkelsoe	デンマーク	失格	—
	Vaiko Vare	エストニア	失格	—
	Libor Hubacek	チェコ共和国	失格	—
	Allan Thesgjerg	デンマーク	失格	—

【水 泳】

(男子)

選手名	種目	出場数	ラウンド	組数	順位 (位 / 人)	記録	成績
金持 義和	男子 200m フリースタイル	35	予選	5	11/35	1:58:96	予選敗退
	男子 50m 背泳ぎ	42	予選	6	1/42	0:28:06	金メダル
			決勝	—	1/8	0:27:68	
	男子 100m 背泳ぎ	37	予選	5	2/37	0:59:62	銀メダル
			決勝	—	2/8	0:59:73	
	男子 200m 背泳ぎ	23	予選	3	2/23	2:09:76	銀メダル
			決勝	—	2/8	2:09:48	
茨 隆太郎	男子 200m フリースタイル	35	予選	5	11/35	1:58:96	7 位 / 入賞
			決勝	—	7/8	1:59:47	
	男子 50m 背泳ぎ	42	予選	6	3/42	0:28:41	銀メダル
			決勝	—	2/8	0:28:02	
	男子 100m 背泳ぎ	37	予選	5	3/37	1:01:04	銅メダル
			決勝	—	3/8	1:00:59	
	男子 200m 背泳ぎ	23	予選	3	4/23	2:15:42	銅メダル
			決勝	—	3/8	2:11:17	
	男子 200m 個人メドレー	31	予選	5	2/31	2:13:18	銀メダル
			決勝	—	2/8	2:09:29	
	男子 400m 個人メドレー	37	予選	5	3/19	4:49:77	銀メダル
			決勝	—	2/8	4:39:38	

(女子)

選手名	種目	出場数	ラウンド	組数	順位 (位 / 人)	記録	成績
今村 可奈	女子 200m フリースタイル	29	予選	4	12/29	2:20:73	予選敗退
	女子 400m フリースタイル	17	予選	3	7/17	4:52:85	予選通過
			決勝	—	7/8	4:53:95	7 位 / 入賞
	女子 800m フリースタイル	12	予選	2	4/12	10:00:42	予選通過
			決勝	—	5/8	9:52:50	5 位 / 入賞
	女子 200m 背泳ぎ	25	予選	4	14/25	2:45:11	予選敗退
高瀬 理恵	女子 200m バタフライ	13	決勝	—	4/8	2:30:04	4 位 / 入賞
	女子 50m 平泳ぎ	29	予選	4	10/29	0:36:16	予選敗退
	女子 100m 平泳ぎ	28	予選	4	12/28	1:22:48	予選敗退
藤川 彩夏	女子 200m 平泳ぎ	21	予選	3	12/21	3:06:43	予選通過
			決勝	—	—	—	—
	女子 50m バタフライ	34	予選	5	7/34	0:30:69	7 位 / 入賞
			決勝	—	7/8	0:30:71	
	女子 100m バタフライ	18	予選	3	5/18	1:07:93	6 位 / 入賞
			決勝	—	3/8	1:08:42	
久保 南	女子 200m バタフライ	8	決勝	—	7/8	2:42:74	7 位 / 入賞
	女子 200m 個人メドレー	20	予選	3	3/20	2:39:26	5 位 / 入賞
			決勝	—	5/8	2:39:14	
	女子 400m 個人メドレー	12	予選	2	6/12	5:44:78	5 位 / 入賞
			決勝	—	5/8	5:45:42	
	女子 100m フリースタイル	37	予選	5	20/37	1:07:20	予選敗退
今村・高瀬 藤川・久保	女子 400m フリースタイル	17	予選	3	14/17	5:16:66	予選敗退
	女子 100m 背泳ぎ	30	予選	5	—	—	棄権
	女子 50m 平泳ぎ	29	予選	4	4/29	0:35:51	6 位 / 入賞
			決勝	—	6/8	0:36:03	
	女子 100m 平泳ぎ	28	予選	4	6/28	1:19:53	7 位 / 入賞
			決勝	—	7/8	1:18:85	
今村・高瀬 藤川・久保	女子 200m 平泳ぎ	21	予選	3	7/21	2:56:09	6 位 / 入賞
			決勝	—	6/8	2:53:05	
	女子 4x100m フリースタイルリレー	9	予選	2	8/9	4:25:32	8 位 / 入賞
			決勝	—	8/8	4:25:60	
	女子 4x100m メドレーリレー	9	予選	2	6/9	4:52:52	8 位 / 入賞
			決勝	—	8/8	4:50:39	

【卓 球】

(男子)

選手名	種目	出場数	ラウンド	組数	勝敗	対戦相手 (選手名・国)		マッチ	予選成績			成績
									順位	勝	負	
望月 翔太	男子 シングルス	79	予選リーグ	16	負	KOPIEC Ireneusz	ポーランド	2-3	3/5	2	2	予選敗退
					勝	ERDOGAN Saffet	トルコ	3-2				
					勝	WAN Man Ho	香港	3-0				
					負	ROGALSKIY Alexander Viktorovich	ロシア	1-3				
有馬 歓生	男子 シングルス	79	予選リーグ	16	負	JUCHNA Gintautas	リトアニア	0-3	3/4	2	2	予選敗退
					勝	OH Eonseok	韓国	3-0				
					負	XU Youyue	中国	0-3				
					勝	SENGUPTA Suvro	インド	不戦勝				
亀澤 史憲	男子 シングルス	79	予選リーグ	16	負	ZAKLADNYY Gennadii	ウクライナ	0-3	2/5	3	1	予選通過
					勝	BEK Mladen	クロアチア	3-0				
					勝	DANIYAROV Serik	カザフスタン	3-0				
					勝	STURMER Erwin	オーストリア	3-0				
		32	決勝トーナメント	負	LEE Changjoon	韓国	0-4	-	0	1	ベスト32	
望月・亀澤	男子 ダブルス	36	予選リーグ	8	負	WANG Cong / ZHANG Chaoyue	中国	0-3	2/4	3	1	予選通過
					勝	CRESPI Luca / DAL FABBRO Oscar	イタリア	3-0				
					勝	BATSUURI Tuvshinjargal / LKHAGVAJAV Dashdende	モンゴル	3-0				
					勝	KHADKA Nasib / MAHARJAN Anil	ネパール	不戦勝				
		16	決勝トーナメント	負	WEN Chih-Hsuan/YANG Jung-Tsung	台湾	0-4	-	0	1	ベスト16	
日本チーム	男子 団体戦	18	予選リーグ	4	負	中国		0-3	3/4	2	2	予選敗退
					負	香港		2-3				
					勝	トルコ		3-0				
					勝	ギリシャ		不戦勝				
		4	9位-12位 決定戦		勝	オーストリア		3-1	2/4	2	0	9位決定
					勝	ポーランド		3-1				

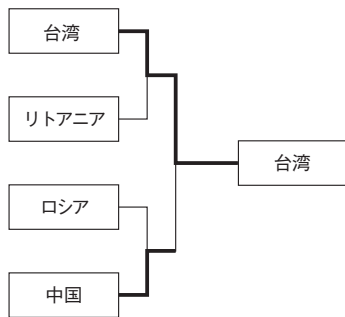
(女子)

選手名	種目	出場数	ラウンド	組数	勝敗	対戦相手	マッチ	予選成績			成績					
						(選手名・国)		順位	勝	負						
上田 萌	女子シングルス	48	予選リーグ	8	勝	SHAGIEVA Elena	ロシア	3-0	1/6	5	0	予選通過				
					勝	SZECSI Krisztina	ハンガリー	3-0								
					勝	ZAHARIEVA Aneta Ivova	ブルガリア	3-0								
					勝	HRIBAR Anamarija	クロアチア	3-0								
					勝	MONCHUSI Mmapuso	南アフリカ	3-0								
		16	決勝トーナメント		勝	LEE Jiyeun	韓国	4-1	1/8	4	0	金メダル				
勝	MAO Shangbin				中国	4-1										
勝	JURKOVA Eva				スロバキア	4-2										
佐藤 理穂	女子シングルス	48	予選リーグ	8	勝	KONDRATOVA Anna	ロシア	4-1	2/6	4	1	予選通過				
					勝	REIDER Ilona	ハンガリー	3-0								
					負	JURKOVA Eva	スロバキア	0-3								
					勝	BALDER Paola	クロアチア	3-0								
					勝	MOLL Annalena	ドイツ	3-0								
		16	決勝トーナメント		勝	SUNDUKOVA Olga Alexandrovna	ロシア	3-0	-	0	1	ベスト16				
負	LIN Huan				中国	2-4										
負	KONDRATOVA Anna				ロシア	0-3										
有馬 千寿子	女子シングルス	48	予選リーグ	8	負	STARYKOVA Larysa	ウクライナ	0-3	2/6	3	2	予選通過				
					勝	RATZ Bettina	オーストリア	3-1								
					勝	CHEUNG Yin Tak	香港	3-0								
					勝	TOKOSI Munirat	ナイジェリア	3-0								
					勝	SHI Ce	中国	0-4					-	0	1	ベスト16
		負	SHI Ce	中国	0-4											
川崎 瑞恵	女子シングルス	48	予選リーグ	8	勝	VASYLYEVA Maria	ウクライナ	3-0	1/6	5	0	予選通過				
					勝	NESTLER Anke	ドイツ	3-2								
					勝	ADILOVA Kulzhamila	カザフスタン	3-0								
					勝	AKYAZ Meltem	トルコ	3-0								
					勝	GHOSH Suravi	インド	3-2								
		16	決勝トーナメント		負	KHODKO Yulia	ウクライナ	0-4	-	0	1	ベスト16				
勝	KONDRATOVA Anna / SHAGIEVA Elena				ロシア	3-0										
勝	MOLL Annalena / DIEDERICH Ann-Kathrin				ドイツ	3-0										
上田・佐藤	女子ダブルス	18	予選リーグ	4	勝	GOROKHOVA Natalya / SHVYRKOVA Karina	カザフスタン	失格	1/3	4	0	予選通過				
					勝	BASNET Sangita / THAPA SHRESTHA Sonam	ネパール	失格								
					勝	HEIN Annette/NESTLER Anke	ドイツ	4-0								
					勝	KHODKO Yulia/VASYLIEVA Mariia	ウクライナ	4-0								
					勝	SHI Ce/HUANG Mengping	中国	0-4								
		8	決勝トーナメント		負	KHODKO Yulia / VASYLIEVA Mariia	ウクライナ	0-3	-	2	1	銀メダル				
負	LEE Jiyeun / MO Yunja				韓国	0-3										
勝	KAMALOVA Madina / ADILOVA Kulzhamila				カザフスタン	3-0										
勝	TOKOSI Muhirat / JIMOH Idayat Oluwanishola				ナイジェリア	3-0										
勝	SUNDUKOVA Olga / MARKOVICH Ksenia				ロシア	3-0										
日本チーム	女子団体戦	12	予選リーグ	4	勝	ハンガリー		3-0	1/3	2	0	予選通過				
					勝	トルコ		3-0								
		8	決勝トーナメント		勝	韓国		3-1	-	2	1	銅メダル				
					負	ウクライナ		2-3								
2	3位決定戦		勝	ロシア		3-2										

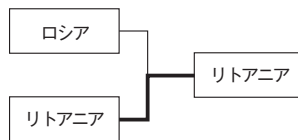
(混合)

選手名	種目	出場数	ラウンド	組数	勝敗	対戦相手 (選手名・国)	マッチ	予選成績			成績
								順位	勝	負	
望月・川崎	混合ダブルス	46	予選リーグ	8	負	PISHCUK Dmitry/KONDRATOVA Anna	ロシア	2-3			
					負	BAEHR Thomas/NESTLER Anke	ドイツ	0-3			
					勝	WU Ho Ting/CHEUNG Yin Tak	香港	3-0	3/6	2	3
					負	MERCAN Hasan/YAMANEL Yurdagul	トルコ	2-3			
					勝	ADENIRAN Ismaila/TOKOSI Muhirat	ナイジェリア	3-1			
有馬・上田	混合ダブルス	46	予選リーグ	8	勝	VELIEV Anton/VASYLIEVA Mariia	ウクライナ	3-2			
					勝	TOMIC Ilija/HRIBAR Anamarija	クロアチア	3-0	1/6	5	0
					勝	TIMUCIN Avni/AKYAZ Meltem	トルコ	3-0			
					勝	SENGUPTA Suvro/GHOSH Suravi	インド	3-0			
					勝	ODUPITAN Adetayo/JIMOH Idayat	ナイジェリア	3-0			
		16	決勝トーナメント	8	勝	MECHAU Mark/HEIN Anette	ドイツ	4-1	8/16	1	1
					負	ZAKLADNYY Gennadii/KHODKO Iuliia	ウクライナ	1-4			
					勝	OH Eonseok/LEE Jiyeun	韓国	3-2			
亀澤・佐藤	混合ダブルス	46	予選リーグ	8	勝	BEK Mladen/MARIC Stana	クロアチア	3-0			
					勝	ALIN Yerlan/ADILOVA Kulzhamila	カザフスタン	3-0	1/6	5	0
					勝	CRESPI Luca/PODDA Anna	イタリア	3-0			
					勝	AWOSANYA Babatunde/ANIMASHAUN Ganiyat Ajoke	ナイジェリア	3-0			
		16	決勝トーナメント	8	勝	BAEHR Thomas/NESTLER Anke	ドイツ	4-1	8/16	1	1
					負	WANG Cong/SHI Ce	中国	1-4			

◇【男子団体】決勝トーナメント



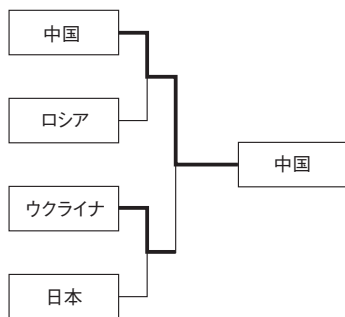
■3-4決定戦



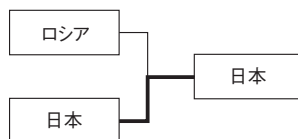
■最終結果

順位	国名	順位	国名	順位	国名
1	台湾	7	ドイツ	13	トルコ
2	中国	8	香港	14	クロアチア
3	リトアニア	9	日本	15	ブルガリア
4	ロシア	10	ポーランド	16	イエメン
5	ウクライナ	11	カザフスタン	17	ナイジェリア
6	韓国	12	オーストリア	18	ハンガリー

◇【女子団体】決勝トーナメント



■3-4決定戦



■最終結果

順位	国名	順位	国名	順位	国名
1	中国	5	韓国	9	トルコ
2	ウクライナ	6	ハンガリー	10	クロアチア
3	日本	7	ドイツ	11	香港
4	ロシア	8	カザフスタン	12	ナイジェリア

【テニス】

選手名	種目	出場数	ラウンド	勝敗	対戦相手 (選手名・国)		マッチ	セットポイント			成績			成績
								1	2	3	順位	勝	負	
松下 哲也	男子 シングルス	43	トーナメント	勝				不戦勝			-	1	1	2回戦敗退
				負	PANYUSHKIN, Egor	ロシア	0-2	0-6	1-6					
芦野 正樹	男子 シングルス	43	トーナメント	勝				不戦勝			-	1	1	2回戦敗退
				負	FLETCHER, Lewis	イギリス	0-2	2-6	3-6					
豊田 恵子	女子 シングルス	32	トーナメント	勝	DEMIR, GIZEM	トルコ	2-0	6-0	6-1		-	1	1	2回戦敗退
				負	FLECKENSTEIN, Verena	ドイツ	0-2	0-6	1-6					
松下・芦野	男子 ダブルス	20	トーナメント	勝				不戦勝			-	1	1	2回戦敗退
				負	PANYUSHKIN / LAPIKOV	ロシア	1-2	5-7	6-4	3-6				
松下・豊田	混合 ダブルス	23	トーナメント	負	JAFREEN / SEKHAR	インド	0-2	2-6	3-6		-	0	1	1回戦敗退

【バレーボール 男子】

ラウンド	対戦国	勝敗	マッチ	セットポイント					予選成績			成績
				1	2	3	4	5	順位	勝	負	
予選リーグ	ウクライナ	負	0-3	12-25	15-25	8-25			5/5	0	4	予選敗退
	トルコ	負	0-3	20-25	18-25	18-25						
	イタリア	負	0-3	19-25	19-25	16-25						
	イラン	負	0-3	12-25	20-25	17-25						

■最終結果

順位	国名	順位	国名
1	ウクライナ	5	イタリア
2	ロシア	6	ブルガリア
3	イラン	7	ドイツ
4	トルコ	8	ベネズエラ

【バレーボール 女子】

ラウンド	対戦国	勝敗	マッチ	セットポイント					予選成績			成績
				1	2	3	4	5	順位	勝	負	
予選リーグ	メキシコ	勝	3-0	25-12	25-14	25-15			2/6	4	1	予選通過
	ドイツ	勝	3-0	25-15	25-13	25-12						
	ウクライナ	負	2-3	25-23	25-23	15-25	15-25	17-19				
	ベラルーシ	勝	3-1	23-25	25-16	25-23	25-12					
	南アフリカ	勝	3-0	25-3	25-3	25-4						
準々決勝	ポーランド	勝	3-0	25-16	25-10	25-9			2勝1敗			銀メダル
準決勝	アメリカ	勝	3-1	25-27	32-30	25-21	25-22					
決勝	ウクライナ	負	0-3	18-25	22-25	16-25						

■最終結果

順位	国名	順位	国名
1	ウクライナ	5	ポーランド
2	日本	6	ベラルーシ
3	ロシア	7	イタリア
4	アメリカ	8	メキシコ

團員報告

団長 太田 陽介

1. はじめに

2013 ソフィアデフリンピックは、7月24日から8月4日まで、ブルガリアのソフィア市で10日間にわたる20種目の競技が行われました。1924年にパリで初めて開催され、今回22回目を迎え、障害者の国際スポーツとしては歴史的に一番古い大会となります。

90ヶ国・地域から2,871名の選手が参加して過去最大の規模となり、日本選手団は219名（選手149名、監督、コーチ、医療関係者、手話通訳者などのスタッフ70名）が参加しました。前回の台北デフリンピックに次いで2番目の参加者数です。開催地がブルガリアであったためヨーロッパ圏の強豪選手が今までよりも多い中、我々日本選手団はメダル獲得のため臨みました。

2. 大会開催・運営について

当初はギリシャのアテネ開催を予定していましたが、政府財政難により開催をやむなく断念したため、国際ろう者スポーツ委員会が代替の開催国を必死に打診した結果、2012年9月にブルガリア政府の好意的協力を得てブルガリアでの開催が決まりました。ブルガリアは1993年に1度開催した実績を持っているという理由が決定打のひとつかと思われます。

時間的に差し迫った状況の中、資金的な問題で国際大会を開くには整備が十分ではない競技場がいくつかありました。また、組織委員会の準備不足で各競技への輸送体制も十分に確立されていないため、日本現地本部が臨機応変にレンタカー、タクシーなどを手配し、選手、スタッフを競技場へ運ぶような対策を講じました。日本語の堪能な現地の方がおり、様々な面に対応していただきました。

今回のデフリンピックは参加国からの全面的協力を得て聴覚障害者が自主的に大会を運営するという理念が開催成功につながったと言えます。

3. 現地の本部設置、運営について

日本選手団の本部設置については、5月の現地視察で確認した際のホテルが第一候補にあがっていたのですが、組織委員会が各国の選手数によって配置を決め、日本は他のホテルへの配置となり、会議部屋についても現地に行ってから交渉することになりました。

本部から選手、スタッフへの連絡体制を確立するように会議部屋をレイアウトし、報告・連絡・相談という「ほうれんそう運動」に向けてホワイトボード、紙など用意して情報共有を徹底しました。選手の生活安全や連絡利便などとして、できるだけ同じフロアに配置できるようにし、インターネット環境も確保しました。

また、帯同していただく医師は、韓国で開催されたアジア太平洋ろう者競技大会時と同じメンバーであり、聴覚障害者とのコミュニケーション方法のひとつである手話通訳にも慣れており、医療業務をスムーズに遂行できたことに大きな意義がありました。また、医者との連携を取るため手話コミュニケーションの可能なトレーナーを配置し、対応することができました。当スポーツ委員会としては、今後医療委員会（仮）を設け、帯同の医師、トレーナー、看護師を連任依頼できるよう検討中です。

広報体制は、シンプルな方法で小型カメラを用い動画や写真

を中心に撮影したものをウェブサイトやフェイスブックで情報発信し、選手団の活躍を日本で応援して下さっている方々へ提供できるよう取り組みました。また、筑波技術大学の一助もあり、CS 障害者放送統一機構から取材担当スタッフを加え入れ、各競技の記録を残すことができました。

4. 各競技の成績について

熱戦の結果、メダル獲得数は金2個、銀10個、銅9個、計21個となり、2001ローマと2009台北デフリンピックでの総獲得数より1個上回るという史上最高の数となりました。しかし、金メダルの数は前回大会より少なく、大きな痛手でした。

国別金メダルランキングは第16位でしたが、メダル総獲得数順位では第10位でした。

競技別では、水泳競技8個、陸上競技5個、卓球、柔道各3個、バレーボール女子1個、自転車1個。特に水泳、陸上競技はメダル獲得率が高く日本は個人プレーが得意であろうとの結果です。水泳の茨、金持選手2名は世界新を含むメダル合計8個を獲得する躍進ぶりで、今後の成長を期待しています。

陸上競技のマラソンは本大会の前に開催された「一般マラソン大会（Königsschlösser Romantik Marathon）」の中に設けた特別枠で競技を行った結果、山中選手が日本選手第1号である銅メダルを獲得し、日本代表選手団としての大きな励みとなる好スタートをきりました。

棒高跳び女子ではデフリンピック初出場の佐藤が銀メダル、男子では竹花が銅メダル獲得という快挙を成し遂げました。

バレーボール女子は4大会連続のメダル獲得。これは技術の向上や粘りある努力の賜物です。

卓球競技は上田選手が2012年5月に開催された世界ろう者卓球選手権大会でのメダル獲得によるプレッシャーを跳ね飛ばすように、団体戦、ダブルス戦、シングルス戦の順に、銅、銀、金のメダルを獲得するという功績を残しました。

柔道は国技であるとの誇りを持って熱戦を繰り広げました。そして、日本選手として最後の競技である無差別級では、21個目のメダルを獲得し、今までの大会の最多数20個を突破した歴史的瞬間となりました。

自転車競技では初めて女性選手が出場し、銅メダルを獲得したことも特筆すべきことです。常勝だったバドミントン勢が惜しくも後退し、男子バレーボール、男女サッカー、男女バスケット、男女ビーチバレー競技はチーム戦として世界の壁が厚く厳しい状態でした。しかし、その壁を痛感し、次回の大会へ向けて真剣に取り組んでいけると確信しました。

競技期間中にブルガリアの日本大使館の特命大使をはじめ、数名の駐在職員の方々が駆け付け、日の丸旗を振りながら応援をしてくださいました。

総メダル獲得の世界勢をみますと、強豪なロシア、ウクライナが相変わらずトップに入り、3位は韓国。他10位内にイラン、中国、台湾、日本が入っており、ベスト10の半分はアジア勢です。隣国である韓国は参加選手数によるメダル獲得率が約60%で世界一となり、選手育成の方法など調査研究する必要がありますと考えます。

5. おわりに

公益財団法人日本身体障害者スポーツ協会パラリンピック委員会より荒木雅信科学委員長及び中森邦男事務局長に視察をいただいたことをお礼申し上げます。視察報告によりますと、聴覚障害者としての競技運営の在り方などを厳しく指摘されています。

スポーツアスリートとしての最高な競技環境を提供すべきと

いう基本的な方針で国際ろう者スポーツ委員会等関係団体に対し積極的に働きかけていく所存です。今後とも聴覚障害者スポーツへのご支援とご理解をよろしくお願いいたします。

最後に日本選手団をご支援くださった宮内庁をはじめ、厚生労働省、日本障害者スポーツ協会パラリンピック委員会、企業、デフリンピック応援プロジェクトチーム、手話関係団体、全国加盟団体、また心の込もったメッセージをくださった東京都立中央ろう学校の皆様に心から深く感謝申し上げます。

副団長報告

副団長 栗野達人

(1)事前取組

2007年より、デフリンピックにて総監督を2度、団長を1度務め、今回は4回目の参加となりました。今までの経験をフルに活かし、さらに強化した日本選手団になる様、必死に尽くしました。

当初はギリシャ開催を予定していましたが、ユーロ危機の影響もありギリシャが開催を辞退したと聞きました。その後ハンガリーが候補になりましたが、財政事情でエントリー費をアップするとの話が持ち上がり、各国から反対の声を受け、開催見送り、昨年の9月ようやくブルガリアで開催されるとの決定通知を受けました。

今回のソフィアデフリンピックは、過去最多の90ヶ国・地域から2,871人の選手が参加し、国際手話を中心に聴覚障害者独特のコミュニケーションを駆使した熱戦が繰り広げられました。この短期間に開催までこぎつけた国際ろう者スポーツ委員会やブルガリア政府の尽力、また、ろう当事者を中心とした組織委員会のボランティアの皆様には感謝致します。

日本選手団設立もブルガリア開催決定を正式に受けて2012年11月からスタートしました。通常は2年前から開始するのですが、今回は事情により遅れてしまい、大会までわずか半年余りと、今までの倍以上のスピードで準備を進めなくてはならない状況になりました。

副団長兼総監督として、日本選手団本部体制を整えること、各競技チームでメダルを多数獲得できる環境を強化するため、下記を行いました。

①全競技選手選考について

2012年11月に全日本ろうあ連盟デフリンピック派遣委員会にて「ソフィア2013日本選手団の編成にかかる指針」を策定し、全競技チームに発表、前大会よりも厳しい基準を出しました。各競技チームから総計で200名ほどの選手候補と100名ほどのスタッフ推薦を受け、デフリンピック派遣委員会で慎重に検討した上で絞り込み、選手149名・スタッフ70名合計219名の派遣を決定しました。

全競技監督会議を実施し、各競技団体との協議を持つなど、日本代表選手を最終決定するまで2年間要しました。その間に開催された全国ろうあ者体育大会、関東ろう体育大会、全日本選手権大会などを見回り、有力な選手がいないか視察もしました。ある競技ではシングルスでは基準を満たしていないものの、団体戦やリレーのメンバーに組むことでメダルの可能性が高いという評価により選考した選手も何人かいました。逆にメダルが難しい選手は厳しい判断をしました。

一度は選考決定しましたが、最終登録目前に突然の怪我およ

び家の都合により辞退があり、急遽交代選手を選考・手続きなどの対処もしました。

そうして最終的に選手は149名に絞り込みました。

②ユニフォームについて

前回の反省点をふまえ、日本選手団一同が奮起し、世界に対してアピールしやすいユニフォームにしたいという強い気持ちがありました。

デザイン仕様については、ジャパンナショナルチームやロンドンオリンピックやパラリンピックウェア及び今までの夏季デフリンピックウェア、世界選手権に出場した日本選手のウェアなどの資料を集めて検討しました。その結果、ロンドンオリンピック日本代表と同じイメージで紺と赤でオリジナルデザインウェアを作成して発注することにしました。内容はジャージ上下、ハーフパンツ、ポロシャツ、キャップです。メーカーはロンドンオリンピック日本代表と同じ「JAPAN」ロゴを使用するという条件で、ミズノに決定しました。何回かのデザイン修正、布地選びなど苦労しましたが、最終的に綺麗なカラーでまとまったユニフォームが完成し、日本選手団全員に満足してもらえる出来栄になったと自信を持っています。色々と協力していただいたミズノに感謝しています。各競技ウェアについては前大会と同様、各競技チームで動きやすいものにした方がよいと考え、それぞれ自分でデザイン、手配してもらうことにしました。

③全競技の知識把握

上記の選手選考で述べた通り、徹底的な選考をする為に、自分も毎晩インターネットで全競技の情報収集、競技ルールなどの勉強をして、総監督としてできるだけ全競技に対応できるよう努力しました。私は夏季競技よりも冬季競技の経験が長いのですが、毎年、関東・全国ろうあ者体育大会などで積極的に競技担当を務め、夏季競技の知識収集に努めました。学生時代に様々なスポーツを経験したので、総監督としてそれぞれの競技に対して何をすべきか検討することができました。

④日本選手団本部体制について

2012年ロンドンパラリンピックに派遣された日本選手団体制を参考にし、総務・医療・広報・通訳など、4年前より強大な体制になる様、各チーム、選手が競技力を発揮できる体制作りに務めました。

医師とアスレティックトレーナーについては第7回アジア太平洋ろう者競技大会の本部スタッフであった医師2名とアスレティックトレーナー1名にお願いしました。我々と行動を共にした経験があり、選手もほとんどアジア大会経験者なので、コミュニケーションを取りやすいと判断したからです。前大会ではインフルエンザ騒動があったため、医療班には、代表選手診断書チェックなど様々な協力をいただき、全員が万全な体調で渡航できる様、徹底的に進めていただきました。

手話通訳については過去にデフリンピック経験あるいは国際大会の場で行動できる方をお願いしました。おかげで現地ではテキパキと動いていただき、大いに助かりました。

また下記の通り、旗手と主将を決定しました。

★ソフィアデフリンピック日本選手団

- ・日本選手団 旗手 男子サッカー 野呂 啓
- ・日本選手団 主将 女子バレー 柳川奈美子

今回の大会で特徴は下記の通りです。

★ソフィアデフリンピック日本選手団の特徴

- ・最年少選手は14歳でサッカー女子競技の酒井藍莉選手。
- ・最年長選手は48歳でオリエンテーリング競技の田村聡選手。

⑤現地事前調査及び情報提供

2013年4月下旬に現地へ下見に行き、各競技会場チェック、

交通手段調査、ホテルで本部、医師室、トレーナー室、解団式会場の確保、ブルガリア組織委員会に輸送手段を徹底的に確認しました。前大会と比べて、ホテルが組織委員会指定であった為、直接交渉ができず、組織委員会を通さなければなりませんでした。すれ違いが多数発生しましたが、大会期間中は本部にて臨機応変に対応していきました。

下見の際に組織委員会が用意する送迎バスで競技選手を輸送、ホテル整備などをすると説明を受けたので、それに合わせて日本選手団のスケジュールを組みました。しかし実際に現地に行くと、組織委員会の手配バスが時間通りに来ない、ホテル環境のすれ違いなど混乱が生じてしまいました。本部全員で全ての専用車、タクシーを手配し輸送、ホテル環境の不足は自分達で対応しました。

日本選手団メンバーほとんどが初めての渡航となるブルガリアについて情報収集して下見報告と兼ねて情報提供しました。特にブルガリアでは英語ができる所が少なく、タクシー、電車、店などはブルガリア語以外通じないことが分かり、現地通訳を手配しました。さらに、「はい」「いいえ」の表現が日本と全く逆で「はい」の時は横に振り、「いいえ」の時は縦に振るとのこと。食事もヨーグルト関係が多く、中華関係の食物がないなど説明し、日本選手団全員で、現地で間違わない様、心構えをしてもらいました。

⑥資金作り

遠方の上、飛行機の乗り換えが必要であるため、予算作りなど、事務局でかなり苦労されていました。本部及び全競技チームと共に経費の調整を協力し合い、色々な方法で資金造りの対策を話し合ってきました。本部及び事務局でデフリンピック応援のためのバッジ、応援マフラータオルも製作し販売、企業廻り、全国の関係団体に寄付をお願いし、資金造りに尽くしました。

全競技チームと休日返上で真夜中まで連絡を取り、自己負担金、競技備品経費など相談をし、信頼関係作りに尽くしました。

全競技チームの協力ですーツケースは1人1個にしてもらい、2個目の分を競技備品に廻すことで、航空経費の節約ができました。協力してくれた全競技チームに感謝を申し上げます。

2012年度内に指定ホテル代金、エントリー費、航空費を支払わなければならない、旅行者者グロリアツアーズの協力を得てなんとか先払いすることができました。協力してくれた旅行者者グロリアツアーズに感謝申し上げます。

⑦目標

今回よりサイクリングが新たに加わり、日本からは卓球、サッカー、バレー、バスケ、バドミントン、陸上、水泳、テニス、柔道、ビーチバレー、オリエンテーリングもあわせて12競技、男女で合計15チームが参加しました。最近世界新記録を出した選手もあり、金メダル有力選手が多数いたので、全競技で入賞、メダル獲得数40個の目標を掲げました。

(2)成績と評価

★過去最高のメダル数★

熱戦の結果、日本選手団メダル獲得数は金2個、銀10個、銅9個、計21個で過去最多のメダル獲得数となりました。

参加国90ヶ国の内、国別金メダルランキング順位は第16位となりましたが、メダル獲得総数順位では日本が第10位でした。

日本メダリストの総括報告は以下の通りです。

☆メダリストたちの頑張る☆

<陸上>…銀メダル2個・銅メダル3個獲得。

■開会に先立ち、7月21日に南ドイツのフェッセンにてマラソンが開催され、3名の選手が出場、山中孝一郎選手が3位ゴ

ルし、今大会第一号となる銅メダルを獲得しました。

■女子棒高跳びで初出場である新星の佐藤麻梨乃選手が世界ジュニア新記録で銀メダルを獲得しました。

■男子棒高跳びで竹花康太郎選手が銅メダルを獲得しました。

■男子ハンマー投げで、森本真敏選手が58.20mを記録、銀メダルを獲得しました。自分の持つ世界新記録を出せば金メダルが確実だったため惜しく思いました。

■女子100mハードル競走で田井小百合選手が銅メダルを取得しました。

<自転車>…銅メダル1個獲得。

■デフリンピック初のマウンテンバイク女子で初出場の早瀬久美選手が銅メダルを獲得しました。過酷な競技であり、ゴール後は両足のふくらはぎの激痛で地面に倒れ込みましたが、トレーナー処置により15分ほどで立つことができました。怪我も不調もなくゴールできた選手の方が少ないというくらいハードな競技でありながらも選手達がすごく頑張っていて感動しました。

<柔道>…銀メダル1個・銅メダル2個獲得。

■男子-100kg級で山田光穂選手が銅メダルを獲得しました。

■男子-60kg級で吉良暁生選手が銀メダルを獲得しました。

■男子無差別級で山田光穂選手が銅メダルを獲得しました。

<水泳>…金メダル1個・銀メダル5個・銅メダル2個獲得。

■男子100m背泳ぎ予選にて金持義和選手が大会新記録を出し、2位で決勝進出、同じく茨隆太郎選手が3位で決勝進出しました。決勝ではデットヒートでコンマ秒の争いの末、金持義和選手が銀メダル、茨隆太郎選手が銅メダルを獲得しました。金メダルはアメリカの新人で世界新記録を出すほどの強さがありました。

■男子200m個人メドレー決勝で茨隆太郎選手が銀メダルを獲得しました。同時に自己記録ベストで日本新記録を更新しました。

■男子50m背泳ぎ決勝で金持義和選手が世界新記録を出して金メダル、茨隆太郎選手が銀メダルを獲得しました。

■男子400m個人メドレー決勝で茨隆太郎選手が銀メダルを獲得しました。

■男子200m背泳ぎ決勝で金持義和選手が銀メダル、茨隆太郎選手が銅メダルを獲得しました。

★金持選手は通算3個、茨選手は通算5個のメダル獲得となります。

<卓球>…金メダル1個、銀メダル1個、銅メダル1個獲得。

■団体戦予選リーグにて、上田萌選手・佐藤理穂選手・有馬千寿子・川崎瑞恵が参加した女子チームはトルコとハンガリーを3-0で下して決勝進出。決勝トーナメントで、女子チームは準々決勝にて韓国を3-0で下しましたが、準決勝でウクライナに2-3で破れ3位決定戦に進出。ロシアに3-2で勝ち、銅メダルとなりました。

■女子ダブルス競技は上田萌選手・佐藤理穂選手ペアで決勝まで勝ち進みましたが、中国ペアに1-4で敗れ、銀メダルを獲得しました。決勝では接戦をくりひろげましたが、思いがけない怪我を我慢して闘う姿に会場が感動につつまれました。

■女子シングルス戦で上田萌選手が予選リーグ5勝0敗1位と好調で決勝トーナメント進出。決勝トーナメント1回戦で韓国、準々決勝で中国、準決勝でスロバキアを制し決勝進出。最後の決勝でロシアを4-1で破り、初的女子シングルス金メダルに輝きました。

前大会の台北では、女子シングルス決勝で中国に破れ銀メダルになった悔しい思いをしたため、4年間鍛錬し金メダルを勝ち取り、日本選手団全員で涙、感激と盛り上がりました。

★上田萌選手はシングルスで金メダル、ダブルスで銀メダル、女子チームで銅メダル獲得。

＜女子バレーボール＞…銀メダル1個獲得。

■予選リーグ戦で、メキシコ・ドイツ・ベラルーシ・南アフリカを倒し、ウクライナに負け、4勝1敗で準々決勝進出、ポーランドを破り準決勝戦進出、アメリカを熱戦の末倒し、決勝進出。決勝戦で日本はウクライナに惜しくも破れましたが、8年ぶりに銀メダルを獲得しました。

★評価★

目標であった全競技入賞を果たせなかった上、メダルも金2銀10銅9計21個と、目標の40個には届きませんでした。

また上記のメダルの他に合計36の入賞がありました。メダル獲得へあと一歩という選手が多く、目標のメダル40個に届かなかったことは非常に悔しい思いですが、夏季大会では過去最高のメダル数となり、大いに喜ばれる結果になりました。

競技会場設備及び環境が一部事情により十分でなかった所もあったにも関わらず、各競技チームが頑張ってメダル獲得、入賞したことは大いに評価したいと思います。

例として、卓球競技会場は体育館ではなく、スケート場を使用していた為、硬いマットでよく飛び回る選手の足に負担をかけてしまい、怪我人が発生しました。それでも頑張ってメダルを獲得したので、素晴らしいと思っています。

陸上競技は陸上競技会場で実施しましたが、ハンマー投げ競技のみ別の会場で実施され、地盤整備が弱く、滑りやすい感じで大変そうでした。その他、練習コート、ウォーミングアップ場所がない競技もありましたが、それは日本だけではなく同じ条件で挑みメダル獲得した国もありました。よって会場設備不足のせいで負けたという言い訳はできません。現地環境に慣れる、それに合わせた自分の身体作りをしないと勝てないという課題を受け止めて頑張っていくしかありません。

世界情報によるとメダル獲得数でトップから5位までの国ではメダリストに賞金が出るそうです。ある国では二つのメダルを取った選手に500万円（日本円）を支給していると情報がありました。また新家同様の賞金をもらえる、生涯に毎月賞金もらえるなどの制度があるそうです。さらに5ヶ月間仕事や学校を休み強化合宿に参加している選手もいるそうで、選手は必死になって練習を積み重ねて来たとと思われる国もあり、4年前よりはるかにレベルが上がっていました。日本では残念ながら、その様なメダル獲得報酬がなく、メンタル面で不利がありました。それもあって世界レベルも予想以上に上がっており、目標数こそ果たせませんでした。環境実態及び短期間準備などの中で、ここまで頑張り、メダル21個を獲得でき、4年前より実力はアップしたと思っています。

これも皆様から多大なご支援、ご協力をいただいたおかげであり、深く感謝しております。改めてお礼申し上げます。

(3)大会の競技運営などの報告

■7月26日開会式について

ARMEECアリーナで開催。選手入場後、今回はデフリンピック初の聖火リレーが行われました。ランプに入った聖火がアリーナ中央に集まった各国の代表選手の手から手へ次々とリレーで渡され、最後はブルガリアの選手によってアリーナの聖火台に火が灯されました。

会場スペースの都合で、選手全員ではなく各国3名～15名が行進に参加、途中からは旗手と代表だけ残り、観覧席から全員で応援し盛り上がりました。

■競技会場について

①マラソン大会が事情によりソフィアではなく、デフリンピック開会の前にドイツで行われた一般マラソンに参加し、デフ選手の入賞表彰を行うとの連絡を受けました。その為、マラソンチームだけ先発で渡航など手配しました。

②下見で説明を受けた競技会場が間近になって変更された為、移動手段など競技チームに苦勞をさせてしまいましたが、本部で競技選手の環境を保つことができる様、対応しました。

③開催決定後、ブルガリアが準備期間が半年余りの中、大急ぎで競技会場を確保、整備したので台北大会レベルほどの環境が十分に整えられていない部分もありました。しかし、世界中のデフリンピック選手達の為に、ブルガリアが資金不足の中、短期間で準備したという事情があることを理解し、本部と全競技チームで協力し合い、臨機応変に対応しました。

■航空及びIDカード手続きについて

今回の航空便は1回乗り換えが必要であり、小型航空機であるため、一度には乗り切れず、数回に分けた渡航スケジュールにしました。その為、デフリンピック期間中に6回もIDカードの手続きをしましたが、本部で手分けし協力し合えたおかげで無事に日本選手団全員の登録を終えることができました。

(4)反省・まとめなど

夏季デフリンピック期間中は、連日競技監督達と連絡を取り合い、兼務など負担をかけてしまいましたが、よく頑張ってくれたことに感謝します。また本部及び事務局、旅行者者グロリアアツアーズ、全競技チームと共に全員で、半年余りの短期間の中必死に準備を進め、無事に日本代表選手達を派遣できたことに対し、評価いただきたいと思っています。

デフリンピックは国際ろう者スポーツ委員会と加盟国の努力で取り組まれ、開催されています。我が国の日本選手団も積極的に国際手話などでコミュニケーションを計り、現地で競技運営に対して抗議、意見を出し、改善されてきています。夏季デフリンピックという大規模の国際競技で、不慣れもありましたが、団長、総務、医療、手話通訳、広報、全競技チームと共に協力し合い進めることができました。本部全員で素早く臨機応変に対応したおかげで、全員で無事に帰国できたことを素直に喜びたいです。

全競技を見回りサポートしてきましたが、日本選手の技術は世界から見てトップレベルに達していると感じました。しかし上記の成績評価で述べた通り、紙一重の部分や、自分のミスで勝てなかったことが多く、メンタル面と経験が足りないと感じました。全競技で今後の国際大会に向けての課題になると思われるので、ぜひ頑張ってください。

派遣委員会及び事務局と、連日あらゆる面で確認と連絡を取り合い、準備を欠かさないよう尽くしましたが、それでもまだ足りない所があったと反省しております。

限られた範囲で日本代表選手団が前回よりも強い体制で取組み、ここまで成果を出したことは評価いただけると自信を持っています。

デフリンピックの知名度が上がればそれだけろう者スポーツに対する理解が広まり、ひいてはろう者の社会的地位の向上につながるものと信じています。今後、今回の取り組みの教訓を生かし、各競技団体を中心とした関係団体との信頼関係をさらに深めていくとともに、ろう者スポーツの発展と技術の向上を図っていく必要があります。

最後に、多くの皆様からいただいた多大なご支援、ご協力に改めて心より深く感謝申し上げます。

事務局報告

総務 嶋本 恭規

2013 年、第 22 回夏季デフリンピック大会に日本選手団代表の総務として参加しました。十分な情報がなく、不安もありましたが、任務遂行に専念しました。デフリンピックの開催を引き受けていただいたブルガリア共和国に感謝申し上げます。

【事前準備】

選手・スタッフの選定作業、エントリー手続、健康調査及び薬物使用調査の実施、説明会の実施、本部スタッフ及び各競技団体責任者を集め研修会及び事前確認、情報共有を事務局で進行。

厚生労働省及び JPC へ主に派遣費用を主とした交渉及び相談の実施。

本部体制の検討、編成の実施。

4 月の下見に栗野副団長を派遣。5 月に下見報告を実施。

【情報共有】

台北に続き 200 名を超える日本選手団と情報を共有するため、日本選手団本部を運営するにあたり、それぞれ競技団体の監督及びスタッフ、本部の通訳、英語通訳者の連携が重要でした。「報告・連絡・相談」の徹底を促しました。

本部においては情報が目に見えるよう、ホワイトボード及び模造紙を活用し、選手達も知りたい各競技の成績等は本部部屋の外壁に張り出し、モチベーションを高めるようにしました。

【結団式】

結団式では成田日航ホテルで行い、全日本ろうあ連盟理事長を始め、厚生労働省自立支援振興室室長・君島氏及び公益財団法人日本障害者スポーツ協会常務理事・吉田氏に激励をいただきました。いくつかのメディア取材はあったものの、まだまだ少ない状態であったため、さらなるメディア発信を推し進めて行くことが今後の課題です。また各競技によって試合日程が異なり、それぞれに合わせた出発日を設定したため、結団式に出席した選手はほぼ先発隊ということになりました。これまで結団式は日程的な都合から海外現地でしたが、今回は国内にて実施することができました。

【本部事務所の設置】

現地においてホテルの R 階（日本で 4 階にあたる）フロアにある会議室を日本選手団本部事務所として構えました。開放時間は朝 8 時～夜 9 時までとし、夜 9 時から 10 時までには本部スタッフ会議を毎日実施しましたが、競技によっては早朝出発する場合もあるため、3 日目からは開放時間を朝 7 時に変更しました。本部スタッフは選手達をサポートする立場なので、ダウンすることのないよう交代制にし、休養をこまめに取りましたが、腹痛・下痢を訴える者が出てしまい、管理が足りなかったことは今後の課題です。

【現地報告】

団長及び総務、広報はオーストリア航空、副団長及び手話通訳はルフトハンザ航空、選手達は 2 手に分かれ、2 時間差でそれぞれ出発しました。現地到着空港では在ブルガリア日本国大使館参事官・杉浦氏及び石神氏が出迎えに来て下さったのに対し、先の便には手話通訳者が同乗していなかったため、コミュ

ニケーションが取れずに戸惑ってしまいました。周到に用意できなかったことが悔やまれます。この場合は各競技団体に帯同していた通訳者をお願いをしました。

そのままブルガリアの要員よりホテル行きのバスまで誘導してもらい、バスへ乗り込みました。あまりにも情報が足りず、戸惑いを感じました。

ホテル到着後は、現地における情報収集に追われました。事前に自身が下見に参加していなかったことも今後の検討課題となりました。宿泊先ホテルでは 20 階建のタワー型であり、とても広い所でしたが、4 ケ国（クロアチア、ベラルーシ、ウクライナ、ポルトガル）と同じホテルだったため、日本選手団はできるだけ同じフロアになるよう交渉に掛け合い、ほぼ希望通りにまとめることができました。

翌日から 3 日間、ICSD 評議会へ団長、総務、広報の 3 名が出席、残りの本部スタッフには事務所の設営をお願いしました。本来、総務が指示して事務所を設営するべきだったと思い、今後の課題に加えます。

宿泊先から練習場及び試合会場までの移動は組織委員会が用意しているバスで移動ということでしたが、宿泊先のロビーに貼り出されていたバス出発到着時間があまりにもアバウトであり、宿泊先にいる組織委員のスタッフに問い合わせても、責任者ではないので分からないとの返答、これでは試合に遅れる可能性があるかと判断し、急遽日本選手団用として移動手段を構築し、ミニバスを 5 台手配しました。さらに輸送担当のグロリアアツアーズと連携し、指定された番号をこれからタクシーに乗る本部スタッフ、選手達に連絡し、その番号が標記されたタクシーに乗り移動する体制に切り替えました。この方法でぼたくりや行き先を間違いといったトラブルは最低限に抑えられたことは評価したいと思います。また、試合開始時間に遅れるといったトラブル発生はありませんでした。

この移動面で大変だったのは、5m を超える陸上の棒高跳びの棒を宿泊先から競技場までの往復運搬、開会式及び閉会式、在ブルガリア日本国大使館へ大人数での移動でした。棒高跳びの棒についてはバスを手配できたものの、棒を折り曲げることはできず、バスのドア及び窓から入れる等工夫し、辛うじて納めることができました。大人数での移動については、開会式時のバス確保に奔走し、時間に合わせたバスを確保。開会式後、ホテルへ戻る時のバスも確認に奔走し、無事に選手達をホテルへ送り返すことができました。また在ブルガリア日本国大使館の特命全権大使、小泉崇氏のご厚意により日本大使館へ選手達の招待を提案いただいたことから、急遽バスをチャーターしました。

試合開始及び終了時間の関係で、ホテルに用意してある食事の時間に間に合わない場合は、お弁当対応をしてもらう予定でしたが、必要数が想定よりも多かったようで、ホテル側から弁当の提供はできないと突然打ち切られてしまいました。スポーツ選手にとって食事は重要な位置付けであり、ここでもグロリアと連携し、現地のお世話人にも情報聴取してもらい、付近の弁当屋さんを確保し、食事提供に努めました。日本の感覚では対応し得ることで、他国では通用しないこともあると実感しました。

選手たちの体調については発熱及び胃腸の不具合、目の怪我等数名の選手から不調の訴えがありましたが、ドクターの懸命な治療により大きな病にはならず、ブルガリアにおける生活にも順応していく中で次第に快方に向かい、病によりまったく試合に出られないという選手はいませんでした。

スポーツにおけるメディカル面は必須です。外科は必然的に伴うものであり、デフリンピックにおいては、組織委員会として迅速に対応できるよう指定病院があるものだと思っていまし

たが、組織委員会に再三問い合わせた結果、指定病院は用意されていませんでした。やむを得ないと諦める訳にはいかず、ブルガリア・ソフィア市内には徳州会が経営する徳田病院があり、相談したい旨を電話し、アポイントを取ることができました。本部スタッフである立石ドクターに同行してもらい、具体的に支援していただきたい内容を説明しました。相手側も協力的であり、とてもスムーズに進めることができました。また、病院専属のドクターとも合わせていただき、日本選手が怪我等をした時はここに搬送するとの約束を取り付けたことはとても大きな収穫でした。

【解団式】

すべての競技を終え、ホテル内にて解団式を実施しました。各種目の競技日程が異なっていたため、一足先に帰国する団体もあり、全員揃うことはできませんでしたが、在ブルガリア日本国大使館の小泉特命全権大使にご臨席いただき、労いの言葉をいただきました。

【まとめ】

先に述べたように在ブルガリア日本国大使館の関係者及び現地在住の日本人会の皆様が各競技会場へ駆けつけ、日本国旗を必死に振りながら声援をいただいたことがとても大きな励みになりました。また特命全権大使の小泉氏も直々に色々な競技会場で観戦して「日本選手達が頑張っていることに感銘を受けた」と嬉しい言葉をくださいました。帰国前日に在ブルガリア日本国大使館へ招待していただきました。懐かしい日本食に心が和み、日本人会の方からブルガリアにおける生活等についてお話を聞くことが出来ました。また日本の心である、「おもてなし」をいただきました。

様々な課題に対し、工夫、方法を考え、難局を乗り越えられたことは各競技団体の監督及びスタッフ達を始め、219名が団結した日本選手団であったからだと胸を張れます。

最後に数々の難局にご尽力いただいたグロリアアツアーズの輸送班を始め、帯同ドクター及び看護師、アスレティックトレーナー、手話通訳者そして英語翻訳者に感謝申し上げます。

本部スタッフ広報 仁木 尚美

【団体内の担当とその内容】

①本部スタッフ（広報担当）

- ・選手団サイトの立ち上げ
- ・大会期間中、競技会場を巡回・写真及び動画撮影
- ・選手インタビューのアポ取り・インタビュー撮影
- ・選手団サイトへスケジュール、結果・速報・写真ニュースやインタビュー記事などを掲載

広報担当が私1人のみだったため、こなせる業務に限りがあるということで、出発前に前回の台北大会で広報カメラマンを担当された岸田氏に業務内容の確認及び撮影のポイントなどアドバイスをいただいた上で、業務内容を必要最低限に絞りました。

個人や団体によるソーシャルメディア（SNS）情報発信が一般的になっている中、選手団公式サイトとの混同や情報混乱、著作権や肖像権が脅かされる恐れがあるため、日本パラリンピック委員会からアドバイスを受け、良い例と悪い例を分かりやすくまとめた「ソーシャルメディアガイドライン」を作成し選手団に配布しました。

②大会期間の業務内容

7/23 ブルガリア・ソフィア市内入り

機内で選手達をインタビュー取材、SNS 投稿

7/24～25 ICSD 評議会出席

ICSD 評議会ミニ情報撮影（太田団長リポート）、
SNS 投稿

7/26 午前：女子サッカー予選取材

午後：メディア説明会出席

夕方：開会式取材

7/27～8/3 各競技会場を巡回・写真撮影、選手団サイト更新

8/4 閉会式取材

<その他>

- ・各出発隊の見送り写真 SNS 投稿
- ・サッカー男女選手のインタビュー動画撮影依頼・サイト掲載
- ・各競技での合図方法など情報保障内容を取材・SNS 投稿
- ・メダリストのインタビュー動画撮影、文章起こし、サイト掲載

③1日のスケジュール

午前中→輸送スタッフが手配した移動車で各競技会場巡回・写真撮影

昼→ホテルに戻り昼食。写真や動画の整理・選定。編集作業後
サイト更新

午後→輸送スタッフ手配の移動車で各競技会場巡回・写真撮影
夜→ホテルに戻り、選手インタビュー撮影、写真や動画の整理・
選定。編集作業後サイト更新

- ・本部会議
- ・競技スケジュールを元に翌日巡回する会場を選定、移動スケジュールを作成し輸送スタッフへ提出（CS 広報スタッフと共に巡回する為、お互いの希望をすり合わせて移動スケジュールを決定）
- ・引き続き写真や動画の選定、編集、サイト更新

【反省・今後の課題など】

①移動について

大会始めは、本部専用レンタカー2台のうち1台を広報用として使用できたためスムーズに移動できましたが、組織委員会での競技団体の移動保障がほとんどなく、大会が進むにつれて競技数が増えてきたこともあり、次第に競技団体の移動が最優先となり、広報スタッフはタクシーを使わざるを得なくなりました。これは医療スタッフも同様です。そのため競技会場間の移動がスムーズに行かず、次の競技会場へ行く為のタクシー手配を依頼、タクシーが来るまで待ち続けている間に次の競技が終わってしまい、取材が間に合わなかったということが多々ありました。他の競技へ予定変更するのも容易ではなく、常に歯がゆい思いをしていました。

②業務について

今回は選手団公式サイト立ち上げに加え、今年度新設したSNSを活用し情報発信を行いました。当初、選手団サイトにはICSDや組織委員会の確認情報を元に掲載、SNSにはコラムのような情報発信を考えていましたが、ICSDや組織委員会サイトの情報混乱によりなかなか正確な情報が得られず、本部事務員の機転により競技団体や組織委員会メールから得たスケジュールや結果情報をSNSに掲載するようになり、次第に情報発信の棲み分けが固定されるようになりました。やはり突発的な情報発信にはSNSが大変有効だったように思います。ケータイのSNS情報を頼りに現地移動をしているという日本人応

援者に数名出会った際、現地でも情報獲得に苦心している様子を目の当たりにし、現地入りしている日本人向けにも分かりやすい情報発信が必要であったと反省しました。

広報担当が1人だったため、選手団サイト素材用としての写真や動画撮影のみに絞り、昼間は素材収集、夜本部に戻ってサイト更新作業と、シンプルに業務をこなすことを想定していました。

しかし、大会が進むにつれて素材収集の量が膨大になり、本部に戻った後の素材選定編集、更新作業が追いつかず、徹夜が続いてしまいました。その様子を総務や本部事務員が心配してくれ、調整を図った結果、競技スケジュールと結果、インタビューの文章起こしを事務局内で分担したり、更新が間に合わない場合は選手団サイト制作者へ手伝いを依頼するなど柔軟的な対応をとりました。その結果、大会後半は作業に集中できるようになりました。

また、複数の競技会場で同時進行の日がいくつかあり、常に択一で巡回した為、全ての競技の取材ができなかったことが大変悔やまれます。サッカー競技に関しては副団長が、その他の競技については医療スタッフと手話通訳が合間に個人のカメラで撮影し提供していただくなど、たくさんの方々にフォローしていただきました。

③広報体制について

会場によってはメディア登録をしないと入れないエリアが設定されていました。特に水泳は分刻みで、陸上は競技場内の各々で同時に競技が行われるため、撮影ポイント設定に非常に戸惑いました。進行については手話や視覚的なアナウンスが全くありませんでしたが、スケジュールを競技スタッフから教えていただいたおかげで状況を把握することができました。

他国のメディアはほとんどがプロ集団であり、機器はもちろんのこと、技術もレベルの高い方が各競技会場に設置されていました。日本選手団も、広報に関しては専門団体と委託契約する方法を検討していくことを望みます。

【まとめ】

今回は短い準備期間で開催に至ったデフリンピックだった為、組織委員会からの情報が十分ではなく、日本選手団の準備にも大きく影響した面もあり、やむを得ない事情はあるものの、デフリンピックの知名度を高める為にも、本部としても広報は予算を削るべきではなかったと思います。また、広報業務は大会期間限定ではなく、大会前から取材を行い情報発信すべきであったと改めて感じました。次回からは派遣資金とは別枠で資金確保をし、専門団体と委託契約して派遣委員会設立の段階から取材・情報発信を行なっていきたいと思っています。

最後に、競技直後で疲れているにもかかわらず、一日でも早く結果を日本に伝えてほしいからと快く取材を引き受けて下さった選手の皆様、私達の顔を見た途端に今日の競技スケジュールや状況を教えて下さったスタッフの皆様、そして私達を気遣い、顔を合わせる度に何か手伝えることはないかと話しかけて下さった本部スタッフの皆様、本当にありがとうございました！

本部スタッフ総務 後藤啓二

今回の大会は当初ギリシャでの開催が決まっていたものの、経済危機のあおりで開催中止になり、準備期間が短過ぎるために開催を引き受けてくれる国がなかなか見つからず、中止瀬戸際まで追い込まれていました。厳しい条件のなか、開催を引き受

けてくれたブルガリア政府やブルガリアろうスポーツ協会、そして、現地で混乱しながらも温かく迎えてくださったブルガリアのろう者、手話関係者にまずは厚く御礼を申し上げます。

開催がブルガリア政府より正式にアナウンスされたのは11月9日、開催まで9ヶ月を切っていました。それまでは開催の有無が不明だったため、選手の選出などに取り掛かれず、1年かかる準備を過密スケジュールのもと進めました。実行委員会から宿泊や予備登録の案内がありましたが、回答は1ヶ月以内という異例の締切日設定で、急いで各競技団体に選手の選出をお願いしました。お詫びとともに、このような不安定な状況でありながらも派遣に尽力をいただいた皆様にお礼を申し上げます。

(1)総務の業務内容

①各デフスポーツ競技団体との調整

全日本ろうあ連盟デフリンピック派遣委員会にて定めた「デフリンピック日本選手団の編成にかかる指針について」にある選手、スタッフの選出基準をもとに、各競技のデフスポーツ競技団体に協力を仰ぎ、推薦を依頼しました。他、各競技団体に選手やスタッフとの連絡窓口を配置していただき、デフリンピック派遣に至るまでの間は、各担当者で連絡を取りました。当事務局から各競技団体にご協力をお願いしたことは以下のとおりです。

- ・日本代表選手、スタッフの選出基準についての面談依頼
- ・選出予定の選手・スタッフ数の報告
- ・選手、スタッフの選出（履歴書・推薦書の作成依頼）
- ・各競技の選手及びスタッフへ、内定承諾書、健康診断書及び薬物調査、聴力検査表、2013年度都道府県聴覚障害者協会確認書、ユニフォームサイズ表、荷物アンケートの提出依頼
- ・壮行会、結団式、解団式への出席調整依頼
- ・各競技の部屋割り調整依頼
- ・勤務先などへ派遣協力依頼の調整
- ・メディアマスコミからの取材依頼の仲介
- ・その他（選手からの質問の取りまとめなど）

各競技団体の窓口担当者には選手、スタッフを取りまとめていただき、誠に感謝申し上げます。今回は準備期間が短かったために、迅速な連絡やり取りが求められました。特に団体競技の場合は、人数が多いために取りまとめるのも大変厳しい面があります。これより、ますます各競技団体の事務能力が求められることは間違いありませんので、各競技団体にとっても人材や財源を確保することが課題となるだろうと思いました。

②通訳者の確保

聴覚障害者にとって、社会で生きる上で最大の障害は健聴者とのコミュニケーション手段です。医師や看護師、トレーナーなど、専門家が手話に長けているのが理想的ですが、現在の社会ではなかなか手話に触れる環境にありません。そのため、デフリンピックやデフスポーツ大会では、手話通訳を用意することが優先課題に挙げられています。それに加え、ICSDの公用語である英語、そして現地のブルガリア語の翻訳、通訳の確保が求められました。

手話通訳については、一般社団法人全国手話通訳問題研究会へ依頼し、日本語⇄手話の通訳者を2名手配いただきました。残り1名は、デフリンピック派遣の経験者に依頼し、手配しました。英語の翻訳・通訳についても、同様に派遣経験者へ依頼し手配しました。ブルガリア語の通訳については、グロリアツアーズを通して、現地にて長く日本語通訳を務めている方に

お願いできました。この方が日頃より大会組織委員会関係者ともお知り合いで、情報収集ができました。また彼女を通じて、日本語を学んでいる大学生にボランティアとして来ていただきました。

以上の通り、日本代表団内での通訳体制は確保でき言語が通じないために対応できないという事態は起こりませんでした。しかし大会中は、通訳業務以外に本部スタッフとしての行動が求められます。具体的には、ろう者の選手やスタッフの世話、英語ができる現地スタッフに選手の移動手段を自ら交渉し確保するなど、通訳以上の業務をお願いしてしまっております。それに関わらず、通訳者達は本部スタッフとして柔軟に対応してくれましたが、やはり一般の通訳業務とは違う状況に置かれることを前提に依頼しなければならないと考えます。日本代表選手団本部スタッフとしての通訳者ルールを確立することが課題であると思いました。

③メディカルチームの編成

デフスポーツの場合、特にメディカル部分の基盤が弱く、いかに継続してサポート状況を確保できるかが大きな課題となっています。これまでのデフリンピックやアジア太平洋ろうスポーツ競技大会への派遣を踏まえ、医師2名（内科・外科）、看護師1名、本部付きのアスレティックトレーナー2名、薬剤師1名の体制としました。

更に今回はメディカル情報を共有できるよう一斉送信メールアドレスを作成し、事前準備の段階から現地でも情報共有をはかりました。毎晩の本部会議では、選手及びスタッフの怪我や病気の状況について報告いただいたおかげで対応ができました。

携行医薬品については、JPC 医学委員会から借用するつもりでしたが、薬事法の改正もあり、最終的に当連盟スポーツ委員会が調達することとなりました。医材・薬剤の手配については帯同医師とも相談をし、薬剤師に選定を依頼し市販の医薬品を購入しました。しかし、下痢などで体調を崩す選手、スタッフが多発により、薬剤の在庫が尽きてしまう恐れが出ました。急遽、日本で待機している連盟事務局と連携をはかり、立石先生のご協力のもと後発スタッフに追加の薬剤を持ってきてもらいました。持参した薬剤が足りなくなった場合の対処方法も予め検討しておくことが大事であると実感しました。

現地に持参する薬剤一式は、自転車競技の選手兼スタッフでもある早瀬久美氏にご協力をいただきました。ご自身も代表選手としての練習スケジュールが厳しい中、事前にメディカルチームと連絡を取りながら必要な薬剤及び備品を確認し、手配して下さいました。

④選手・スタッフの健康診断書の提出および現地の医療体制

全員を無事に出国・帰国させることが選手団本部の義務です。本人の健康チェックを行うために、競技団体へ説明会などを通じ、以下の3点を提出してもらいました。

(選手)

- ・所定様式の健康診断書
 - ・「受診に際してのコミュニケーション方法」についての質問票
- (スタッフ)

- ・会社等で受けている健康診断書のコピー

上記資料を事前に帯同医師へ送付、確認をもらい、メディカルチーム内で健康状態の把握に努めました。おかげで持病があるかどうかも含め事前に把握でき、何があっても対処できるように備えることができました。

しかし、このような努力もむなしく、怪我や病気について報

告しないケースがありました。出発3日前に網膜裂孔でレーザー治療を受けた選手がおりましたが、本部に知らされたのはまさに出発直前の成田空港でした。その場でもかかりつけの医師に連絡し情報を得るなど対応し、派遣中は常にメディカルチームから監視してもらいました。なんとか無事に全試合を終え帰国できましたが、万一の場合は失明の可能性もあり、日本代表団として大きなリスクを背負ってしまったことは大きな反省点の1つです。

また、脳震盪を起こした選手がおり、メディカルチームとしてはリスクが大きいので以降の試合出場は不許可とすると診断しました。他、ホテル外での飲食が原因でお腹を壊す例もありました。試合中の突発的な怪我は止むを得ませんが、事前に注意すれば予防できた病気もあります。これらは本人の注意が重要であり、選手に日本代表としての自覚（意識）を持ってもらうことが課題です。

⑤アンチドーピング

競技団体へ選手全員の服薬状況確認を依頼し、アンチドーピング部会などを通じドーピングチェックを済ませるよう徹底しました。また、チェックの控えを競技団体から提出してもらい、帯同医師への情報提供を行いました。

また、各競技団体でアンチドーピングに対する研修会を開催し、知識や理解が進んできています。特に現地での服薬に関しては、ほぼ事前に医師へ問い合わせることができました。

今後も引き続き競技団体とも連携しつつアンチドーピングの普及啓発を行う必要性を感じました。

⑥聴力検査

選手149名中、聴力検査表をICSDに提出しなければならない者が20名いました。検査漏れや記載漏れなどで、再検査が必要なケースもありましたが、前大会と比べると、単純な記載ミスや書式についての問い合わせが多く、聴力検査が必要なる理由について一から説明しなければならないようなことはほとんどありませんでした。

各競技団体においても、聴力検査表の提出や申請に関し、経験者や事務局から具体的な段取りなどについて対応できるようになりました。また、世界選手権大会でも聴力検査表の提出や申請が求められるようになったことから、デフリンピック前に提出及び申請を終える選手が以前よりも増えたと思います。

聴覚障害スポーツでは、アンチドーピングに加え、聴力検査の抜き打ち検査もあります。今回は、日本代表チームより4名が対象となり、大会前日に、それぞれ指定された日時に本部へ来るようにとの連絡がありました。ホテルや会場が遠く離れたサッカー選手、また練習時間と重なっている選手もあり、調整が厳しかったのですが全員検査を受けさせるよう手配することができました。この検査に遅刻又は欠席した場合、即失格となります。各選手にも抜き打ち聴力検査がある可能性を考え、予め心の準備をしてもらうと同時に、総務としては突然通知があっても選手を行かせられる現地体制が求められました。

⑦実行委員会との連絡及びエントリー

聴覚障害者団体の場合、相手先に手話通訳がいないと電話が使用できないので、メールやFAXが連絡手段となります。各競技団体の連絡担当は全員が聴覚障害であり、各競技団体とは主にメールでのやりとりになりました。

実行委員会からの返信が遅く、進捗状況が分からず業務が滞る時がありました。最終的には、現地通訳者を通して実行委員

会へ電話で問い合わせてもらい、最低限の情報を得るようにしました。

ファイナルエントリー、ID用の写真などの登録は ICSD から通知された専用サイトにて行いました。こちらは大変スムーズで、現地で ID カードをすぐに受け取ることができました。ただ、ID カードをもらうために全員のパスポート原本が必要など現地での手続きに関する情報は当日にならないと分らなかったもので、詳細は現地に行って確認するなど柔軟に対応しました。

⑧現地業務について

現地では以下のとおり取り組みました。

- ・医療ルーム、トレーナールーム含む本部の設営
- ・現地スタッフ間及び日本との連絡手段の確保
- ・日本選手団の移動手段の確保及び調整
- ・各競技の練習時間及び会場の確認
- ・開会式の移動方法及び集合場所など
- ・食事（特に昼食）の調整
- ・洗濯（ゴミ袋 10 袋ほどの量）
- ・試合結果など情報発信
- ・本部スタッフ及び各競技チームとの連絡体制確保
- ・スケジュール管理
- ・本部スタッフミーティング運営
- ・周辺の治安確認

まず、現地に着いて大きく躓いたのは、日本選手団の移動手段と現地の情報収集の 2 点です。

ホテルから会場までのバスは実行委員会から手配されるはずでしたが、大会前の練習期間は手配されていませんでした。また、大会期間中のバスも時間が決まっておらず、現地スタッフも情報が行き渡っていない状態でした。日本代表団で車を手配するなど対応しましたが、練習や試合スケジュール、また移動人数、備品などが各競技によって異なるために、移動担当スタッフもかなり難儀していました。結果的には必要な移動全てを用意することができましたが、移動担当スタッフは大会期間中この調整にずっと集中しなければなりませんでした。

現地での情報収集について、通常は大会実行委員会が情報 BOX を本部に設け、各競技の情報などを提供しています。しかし、今回は情報 BOX がなく、直接情報を得られる手段がありませんでした。大会実行委員会のホテルロビーにある掲示板は内容が古く、その場にいたスタッフが持っている情報と食い違うなど、正しい情報を得られる機会が非常に限られていました。

各競技の練習や試合スケジュール、練習会場などは各競技 TD が実行委員会と調整しているのですが、当日直前まで情報が発表されませんでした。各競技 TD から直接各国へメールにて連絡される方法がとられ、事務局としては常時メールをチェックする体制が求められました。また、各競技の TD ミーティングなどで得た情報を本部に報告してもらうよう、各競技チームとも連携して情報収集に努めました。

その他、上記にあげた業務をこなすうえで、各競技チームとの連絡にズレが出ないように工夫しました。本部の前に情報 Box を設け、情報提供や連絡がある際は、該当する競技チームの Box に文書を入れて連絡しました。また、健聴スタッフがいる競技チームには現地で借りたプリペイド携帯を、ろう者のみの競技チームには日本で借りた携帯を支給し、全競技チームとの連絡体制を築きました。この連絡体制を非常に活用し、試合や練習会場からの移動、トラブル発生時、試合結果報告、試合スケジュールの変更など、情報共有することができました。

本部スタッフはホテル内の本部待機組と、各競技を廻る組に分けられました。団長や副団長には主に競技を、メディカルチームには怪我を負った選手がいる競技試合を中心に廻ってもらいました。現場に医師が行くことで、早期に治療ができ、また選手も安心して試合に臨むことができ、とても良い環境をつくることができました。

他にも食事や洗濯など諸問題が発生しましたが、その都度本部スタッフと連携しながら対応することができました。皆様の支えに心から御礼申し上げます。

⑨反省・まとめ（今回の課題点）

<メディカルチーム>

今回、各方面の方々の協力を得ることで、帯同いただくメディカルスタッフの確保が可能となりました。デフリンピックに限らず、世界選手権大会に日本代表を派遣する際にはメディカルスタッフの確保が最重要課題となります。しかし、当連盟スポーツ委員会も含め各競技チームは、専門家に個別にあたって確保している状況です。

アンチドーピングについての知識共有や、聴覚障害者にも対応できるアスレティックトレーナーとのネットワーク構築、各競技チームへの相談体制など、当連盟スポーツ委員会内で医学的な問題を担当する組織をどのように構築していくかが、これからの重要課題となります。

<デフリンピックの知名度向上>

デフリンピック出場を目指している選手及びスタッフにとって、一番大きな課題はデフリンピックについて周囲から理解を得られないことです。デフリンピックはパラリンピックと同様オリンピック委員会によって公認されつつも、その知名度は極めて低く、ほとんど国民に知られておりません。

即ち、選手やスタッフが強化宿舎や大会参加のために仕事を休むこともなかなか理解されず、周囲からの支援が得られずに個人にかかる負担が大きいものになっています。

今回、日本代表選手に選ばれたことにより、各地域にて市長からの激励会などを通してマスコミメディアにも取り上げられ、デフリンピックのことを少しでも知ってもらうきっかけとなっています。また、政府インターネットテレビにもデフリンピックをテーマとした番組を制作いただき、広く知ってもらえる機会になりました。行政が率先して取り組むことで、デフリンピックに対する知名度は少しずつですが上昇傾向にあります。それでもまだ、選手個人に大きな負担がかかっています。

選手及びスタッフを支えるために、様々な方からご支援いただきました。当連盟加盟団体の皆様からも、各地域で激励会を開催したり、寄付金を集めたり、支援グッズを購入するなど様々な面で非常にご支援いただきました。また、企業や団体からもデフリンピックに対する理解、ご支援をいただきました。厚く御礼申し上げます。

今大会で画期的なことは、これまでの過去デフリンピック大会に出場した選手、スタッフが「デフリンピック応援プロジェクト」を立ち上げ、自主的にデフリンピックの知名度アップに向けて取り組んでくれたことです。この運動は全国に広まり、各地で壮行会などイベントを開催して寄付などを集めてくださいました。これは、過去大会に出場した元選手、若い年代の方々が中心になって自主的に始めたことであり、我々日本代表団にとって先輩方の取り組みは非常に大きな支えとなりました。

この方々が中心となって取り組んでいく中、デフリンピックに対する知名度や理解も確実に広まっています。それがひいては聴覚障害者や手話に対する理解の普及につながり、まさにス

スポーツ活動を通してろう者のエンパワメントがなされていました。この取り組みの流れを途切らせることなく、次世代に引き継げるよう個人的にも頑張っていきたいと思いました。彼らを含め、デフリンピック中心に関わった選手やスタッフ、全国からご支援くださった方々に、心から御礼申し上げます。

通訳・翻訳他 高木真知子

【現地の状況】

ブルガリアは一般市民に英語がそれほど普及してないため、他国に比べてコミュニケーションの壁を感じました。また、手話通訳制度も十分に定着していないようで、各競技会場を回ってみても手話通訳者がなかなか見つからない状態で、大型モニターなどの視覚的情報保障もほとんど見当たりませんでした。開会式も健聴者が音声で司会をするというデフのイベントとは受け止めがたい状況でした。

【日本選手団到着後の数日】

バレーボール男女、バスケットボール男女の一番人数の多いチームとともに一番乗りで現地入りしました。翌日からすぐに練習会場へ移動しなければならなかったのですが、ブルガリアの組織委員会が貼り出していたバス運行表の時間と、日本チームの移動時間が全く一致していませんでした。そこから、バスの運行時間を変更してもらおうと、ホテルを担当していた現地スタッフとの必死の交渉が始まりました。幸いこの現地スタッフは多少英語ができ、また誠意のある方だったため、なんとか練習時間に遅れることなく各競技の選手を無事に移動させることができました。2日目、3日目から更に多くの競技団体が現地入りしてきたため、ブルガリアの組織委員会のバスでは対応しきれなくなり、レンタカーを手配してもらいましたが、それでも台数が足りず、本部スタッフや監督などは英語が通じない国でのタクシー利用が多くなり、不安の種となりました。

【病人対応】

嶋本総務が早々に行動を起こし、医療法人徳洲会が経営されている現地の病院の渉外担当者と連絡を取り、挨拶に伺いました。現地の方ですが英語で交渉することができ、救急外来の案内、担当医への紹介まで対応して下さいました。病人や怪我人が出た際には自分が対応すると約束してくれました。

実際に大会中の病人が多く、3回ほど病院に同行し、英語通訳をしました。毎回この渉外担当者が案内してくださり、医者、受付担当との会話の英語ーブルガリア語通訳もしていただきました。医師もスタッフもほとんど英語ができず、通訳してもらい大変助かりました。

医療報告書、アンチドーピング委員会への報告書の作成などについては立石先生、羽森先生の両ドクターが非常にスピーディーに対応して下さい、英語翻訳担当としては問題なく処理できました。

【現地の組織委員会】

日本選手団から現地の組織委員会に問い合わせたいことが山ほどありましたが、組織委員会の場所も電話番号も不明でした。こちらの本部からはメールしか連絡方法がなかったため、絶対に読んでもらえる英文メールを作成してほしいという指示を受けました。失礼のないように、されど困惑していることが伝わるような緊急メール作成が成功を呼び、毎回すぐに返事がきたので助かりました。

【人手不足】

本部スタッフの数が圧倒的に足りず、休憩する時間もなかなか

が取れないまま早朝から深夜まで働く状態で、まさしく体力勝負でした。競技会場、医務室などにも手話通訳が必要で、本部に必ず一人通訳が居る状態さえも確保できない瞬間がありました。

【次回に向けて】

一つだけ改善提案をするなら、日本選手団専用の移動手段（貸切バスや車）を十分に確保することです。日本人選手は競技会場に着く時間、会場を引き上げる時間を分刻みで指定するほど時間に厳しいので、現地の組織委員会のバスに他国の選手と相乗りするような方法では対応しきれません。

【最後に】

メダルをとった選手の笑顔、メダルを取れなかった選手の悔し涙を現地で共有できたことは感動的な体験であり、選手の皆様に心から感謝申し上げます

手話通訳 豊島 絵美子
小林 慶美
長山 綾

【担当とその内容】

- (1) 本部事務所での通訳、事務補助
- (2) 医師の競技場訪問に同行
- (3) ホテル内メディカルルームでの通訳
- (4) 本部ミーティングの通訳など

本部には3名の手話通訳者が同行しており、午前・午後・夜間でシフトを組んで対応しました。

(別紙1 シフト表の通り)

本部での業務は、各競技チームスタッフと本部スタッフとの通訳（対面、電話）、本部スタッフ不在時の来訪者への対応（取り次ぎ）、洗濯物の受け渡し、競技（練習予定・試合予定・結果）の整理・掲示、監督会議での通訳、本部会議での通訳などをしました。

(別紙2 勤務体制の通り)

【反省と課題】

- ①拘束時間と休養
- ②事前の打ち合わせ
- ③国際手話と英語の能力
- ④現地での情報共有
- ⑤夜間の携帯電話所持
- ⑥手話通訳と事務仕事との優先順位・バランス
- ⑦移動中の通訳
- ⑧その他
- ⑨最後に

①拘束時間と休養

・今回は3名の派遣は適した数だったと感じています。滞在期間が17日間と長く、拘束時間も毎日ほぼ7時～22時と長かったため、体力的にも精神的にも負担が重すぎることがなかったのではないかと思います。しかし、これは、高木日英通訳や、内田輸送担当も手話通訳ができるということが大きかったと思います。

・休憩をとることは、気持ち的にも遠慮が出てしまいなかなか取れずにいました。できるだけ通訳者同士で声かけをし、後半の落ち着いた頃には1～2時間といった単位で取れるようになりました。

②事前の打ち合わせ

・直接的な影響はないにせよ、手話通訳者もスポーツに関する知識や選手と関わる際に必要なスポーツ心理学等を学ぶ必要があるのではないかと感じました。

・私達手話通訳者が行える業務は立場上限られている反面、どこまで関わって良いのかわからない部分もありました。緊急時の連絡や携帯当番など、過去の大会ではどのように対応をしていたのか事前の情報があればなお良かったと感じます。現場の状況を見て柔軟な対応を心掛けましたが、できれば出発前にデフリンピックの通訳経験のある先輩方からお話を伺う機会や、本部スタッフの打合せを綿密に行う時間を設けていただけるとありがたいと思いました。

③国際手話と英語の能力

・私たちは日本人同士の通訳を担うことがほとんどでしたが、高木日英通訳が同行できない場面も多かったので私たちも英語や国際手話は多少でもできたほうが良いと感じました。国際手話についての書籍はありますが、古くて参考にならないと言われました。渡航前に事前学習ができるツールがあるとよいと思いました。

・スポーツ用語の手話については書籍にて事前学習したつもりでしたが、大会用語の手話は現地で覚えることが多く、事前の学習不足でした。

④現地での情報共有

・当初、通訳者3名は別々に行動することが多く、情報を共有しにくい状況でした。その後3名で相談し、別紙のようにローテーションを組みました。全て表通りという訳にはいきませんでした。それでも基本的な考え方が通訳者同士で共有できていたので、各自の行動予定もスムーズに決められました。3名という通訳者数は妥当であると同時に、出発前から情報共有ができれば、さらにスムーズに情報共有ができるのではと感じました。

⑤夜間の携帯電話所持

・200名を超える選手団なので何が起きるか分かりません。そのような時の連絡を受けることは、各競技チームへ貸与している携帯電話での音声・メールになります。健聴者がいるチームは電話ですが、本部の携帯電話を誰が持つかについて話し合われました。結局、通訳者が交代で携帯電話を自室に持ち帰り、緊急事態には担当者（副団長・総務担当）を起す。その際は、ホテル受付に申し出てマスターキーを持ったホテル職員と部屋に行く、という事になりました。今回は、幸いにも本部事務所閉鎖後（22時～23時以降）の重要な電話はありませんでしたが、通訳者にとって携帯電話を担当する夜はいつ電話が鳴るかとか常に気がかりで、責任が取れる立場でもありません。職員が対応してくださると良いと思いました。

【別紙1 手話通訳者シフト表】

	26日 (金)	27日 (土)	28日 (日)	29日 (月)	30日 (火)	31日 (水)	1日 (木)	2日 (金)	3日 (土)	4日 (日)	5日 (月)
豊島		C	A	B	C	A	B	C	A	B	C
長山	B	A	B	C	A	B	C	A	B	C	A
小林	A	B	C	A	B	C	A	B	C	A	B

⑥手話通訳と事務仕事との優先順位・バランス

・手話通訳以外の仕事についてです。通訳者の仕事ではないことはわかっていましたが、ろうあ連盟の職員が1名で明らかに手が足りていなかったため、私たちにもできるような事務的な手伝いをかなり行いました。（別紙の通り）

・事務局開所時は人手が必要ですが、評議委員会のため団長、総務、広報は外出、IDカード取得のため副団長と通訳者も外出していました。開会式後、しばらく落ち着くまででもよいので、もう一人事務局員がいれば通訳者は通訳業務に集中でき良かったのではないかと感じました。

・事務所開所の日、メディカルチームからの通訳依頼はありませんでしたが、後からお聞きすると、忙しそうだったので頼みにくかったとのことでした。これでは、本来の通訳者の仕事ができていなかったことになります。その後は、通訳の仕事が最優先であることをお話し、ご理解いただきました。

・時には選手から「要らない」と言われる時にも呼んでいただくこともありました。また、この大会期間中初めて手話通訳を帯同して受診した選手が、帰国後の生活で手話通訳を活用してみようと思えるような良い体験となればと思い、通訳をしました。

・メディカルチームは、聴覚障害者が安心して受診できるよう、分からないことは率直に本人や通訳者に尋ねてくださり、また次第に自然にご自身から配慮をされるようになり、気持ちよく共働させていただけました。ありがとうございました。

⑦移動中の通訳

・今回、本部は2班に分かれて搭乗しました。その際、先発隊にはろうの理事と手話の分からない健聴の輸送担当のみで、手話通訳者は同行していませんでした。同乗する競技団体の中に手話通訳者もいたようですが、立場が違います。太田団長もブルガリア到着時に大使館職員が出迎えに来ていただいた際にとっても困ったとおっしゃっていました。本部の移動が複数回に分かれる場合、今回のように複数の通訳者がいる時はできるだけ分かれて動くようにすることが必要であると改めて感じました。

⑧その他

・携帯電話にイヤホンが付いていました。電話通訳をする機会も多かったため、無理な姿勢を取ることなく電話通訳をすることができたのは良かったです。

⑨最後に

このような通訳活動の場があることは、同じ通訳者仲間でもあまり知られていません。次世代の通訳者養成のためにも、通訳者からもデフリンピックにおける通訳活動の情報や課題の発信が必要なのではないかと考えます。そのためにも、全国手話通訳者問題研究会から派遣された通訳者とデフリンピックにおける通訳活動の検討などの協働を、全日本ろうあ連盟に期待したいと思います。

【別紙2 手話通訳勤務体制】

	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	1	2	3	4
	早朝		朝	午前					午後					夜間		深夜								
通訳A	携帯当番		内担当	食事		内担当		休憩(内担当兼)		外担当					内担当									
通訳B				内担当		外担当			内担当					内担当(休憩兼)										
通訳C				内担当	医務室		内担当		内担当(休憩兼)					外担当		携帯当番								

- ①A→B→Cの順番でローテーションしていく。
- ②夜間携帯当番は、栗野副団長、嶋本総務の携帯を自室に持参し、深夜～早朝の緊急対応を担当する。
- ③休憩の時間は、本部の状況を見て調整をする。携帯当番担当者は長めに休憩をする。
- ④スケジュールの状況で変更も可能なので上記の限りではないが、休憩は交代で積極的に取る。
- ⑤食事は交代で摂る。

1) 団体内の担当

デフリンピックの映像撮影

2) 業務内容

国立大学法人筑波技術大学で使用するデフスタディのコンテンツ提供、CS 放送「目で聴くテレビ」での放送を目的とした撮影。

撮影は国立大学筑波技術大学から依頼のあったリストに沿って、各競技の情報を収集し、本部の広報担当者として作成したスケジュールに基づいて行いました。各競技会場への移動は安全面を考慮して、2名以上で行動しました。各国のメディアを対象とした説明会にも出席しました。撮影したデータはHDDに保存し、帰国後に納品。撮影内容は下記の通りです。

【撮影内容】

- ・開会式、閉会式
- ・結団式、解団式
- ・日本選手の出場種目（12競技）
- ・聴覚障害者に配慮したスタートシステム、審判の合図
- ・選手同士の手話によるコミュニケーション
- ・本部の活動（本部、メディカルルームなど）
- ・現地メディアの報道、国際手話などの情報保障
- ・日本選手、日本選手団関係者へのインタビュー

3) 反省、まとめなど

- ・現場の状況

デフリンピックの撮影は4年前の台北大会（当時の撮影スタッフは3名）と合わせて2回目という経験を活かし、出発前から各競技のルールを把握するなど準備して撮影に臨みましたが、日本選手が出場する12競技全てをひとりで撮影するには限界があると痛感しました。日本選手団が獲得したメダル21個のうち、いくつかの表彰式やメダル獲得が決まる決定的な瞬間などを撮影できなかったことが悔やまれます。

- ・移動手段

競技場への移動は安全面などを考慮して、本部専用レンタカーや指定のタクシーを使用しました。タクシーの場合、ホテルから競技場に向かう場合はスムーズでしたが、競技場間の移動では携帯メールで本部にタクシーの手配をお願いしたため、次の会場に向かうまでに時間がかかってしまいました。また、タクシーが来ないなどのトラブルで、試合時間に間に合わず撮影できないこともあったので、撮影スケジュールの調整が大変でした。

- ・選手団とのコミュニケーション、連携

選手団全員（サッカー競技を除く）同じホテルに宿泊したことは、スタッフだけではなく、選手とも会話ができたのは良かったです。コミュニケーションの機会を持てたことで、競技場や試合などの情報を得ることができたことは大きいです。本部スタッフとの連絡手段であるMLや携帯メールでのやりとりでも、選手団の動きを把握することができたので、撮影の段取りをスムーズに行うためにも、お互いの連携と情報共有が大切だと実感しました。

- ・情報収集

撮影スケジュールを組むにあたり、本部がまとめた競技スケジュールや結果一覧が参考になりましたが、それとは別に、各国のメディアを対象とした説明会、各競技場の現地スタッフや他国のメディア関係者からのリアルタイム情報が参考にな

る場合もあったので、撮影技術だけではなく、国際手話でのコミュニケーション能力の必要性を感じました。

- ・最後に

今大会の業務を無事に終えることができたのは、撮影に協力してくださった選手団の皆様のおかげです。この場をお借りして、心から感謝の気持ちを申し上げます。

ひとつひとつの試合を「映像」に収めることで、デフリンピックを広めたいという一心で撮影に臨みましたが、逆に日本選手や選手団の活躍から感動をもらいました。試合後に選手から「撮ってくれてありがとう!」と声をかけてもらった時は、胸に熱いものが込み上げて泣きそうになってしまいました。台北大会とは違い、ヨーロッパ勢が多く集まったソフィアデフリンピックで、メダル21個を獲得した選手団の活躍はすごいものがあります。国内のメディアで大きく取り上げられ、多くの人に知ってもらえれば、日本選手のモチベーションも上がると思います。

今後は目で聴くテレビでの業務を通し、デフリンピックを広く普及することで、選手の皆様の力になれるように精進していきます。

輸送 林 孝雄
白坂 篤志
(株)グロリアツアーズ)

■選手団内での所属と担当及びその内容について

- | | |
|----------------------------|--------|
| 所属団体 | ：本 部 |
| 担 当 | ：輸 送 |
| 業務内容 | ：以下の通り |
| ①選手団の航空機予約管理 | |
| ②出発／到着時の誘導・サポート | |
| ③選手団の宿泊ホテル予約管理 | |
| ④組織委員会／宿泊・輸送担当との交渉 | |
| ⑤選手団の現地輸送（ホテル～競技場間など）のサポート | |
| ⑥宿泊ホテルでのトラブル対処 | |
| ⑦費用立て替え清算 | |

■担当業務を振り返って（反省点や改善点など）

①航空機予約管理について

全般的に滞りなく行うことができました。取消料及び超過料金の減額交渉も上手に進み、出費を抑えることができました。

②出発／到着時の誘導・サポートについて

ソフィア到着初日（7/22）のホテルチェックインでは、想定したチェックイン手順ではなかったため、混乱してしまいました。今後はチェックイン手順について事前に十分な確認が必要だと感じました。

③宿泊ホテル予約管理について

特に問題なく行うことができました。

④組織委員会／宿泊・輸送担当との交渉について

事前視察で担当者と面会していたため、ホテルの予約調整時のキャンセル料を免除してもらった等、交渉事がある程度スムーズに行うことができました。仕事を行う相手と事前に面識を持つことの重要性を感じました。

また今回は、現地でガイドを3名用意しましたが、車の手

配やタクシー手配など輸送サポートにおいて大いに助けてもらい、現地に精通した人間が必要であると痛感しました。

⑤現地輸送（ホテル～競技場間など）のサポートについて

組織委員会の現地輸送システムは事前の案内とは異なりほとんど機能していなかったため、本部通訳の方や現地ガイドと連携して交渉しましたが、その後もほとんど改善されることはありませんでした。そこで、急遽車両を手配し、日本選手団独自の輸送システムを構築し、対処しました。これにより問題はほぼ解消されましたが、次大会でも同じようなことは想定されるので、事前に対策を講じておく必要があると感じました。

⑥宿泊ホテルでのトラブル対処について

部屋の設備や備品を壊してしまう選手・スタッフが多数いました。ホテルが古く立て付けが悪いこともありましたが、部屋の電灯に洗濯物をかける等、こちらの過失は明らかでした。部屋設備や備品を本来の用途以外で使用してはいけないことは常識的なことであったため、事前に案内・注意をしましたが、海外の不慣れな環境ということもあり忘れてしまうケースもあるようなので、今後は注意を促していくよう努めるべきだと感じました。また、元々壊れていた部屋備品などの誤賠償請求を防ぐため、宿泊初日に各自が部屋をよくチェックするよう案内した方がよいと感じました。

⑦費用立て替え清算について

特に問題なし。

■全体を通じて

事前の準備段階においては、大きな問題もなくスケジュール通り進めることができましたが、いざ現場では輸送で混乱が起きました。組織委員会の輸送運営が上手く機能していなかったことが大きな要因です。今回は結果的に現地で専用車を手配することができ問題は解決されましたが、次回以降も同じように直前で手配できるとは限りません。今後は事前に日本独自の輸送システムを手配しておくべきだと考えます。現地で組織委員会の輸送システムが正常に機能していた場合は余計な出費となる可能性もありますが、選手がスムーズに競技会場へ移動できないリスクを考えれば、十分必要な経費だと思います。

輸送 内田 美春

①担当と内容

宿泊・輸送担当者付き手話通訳および各種業務補佐・英語通訳。主に1階ロビーに設けた専用デスクにて待機し、広範な業務に関わる補佐、および選手や手続きに同行し、サポートも担いました。必要時には手話や英語通訳も行いました。

【具体的な業務内容】

- ・空港への送迎
- ・飛行機・ホテルへのチェックイン、ホテルフロントとの折衝
- ・ホテル～競技場間の配車
- ・お弁当の申込、受付、手配
- ・タクシー手配、精算
- ・必需品の購入
- ・洗濯物授受

・氷の発注

・選手・スタッフからの相談・質問等受付など

②感想・まとめ

・今回、輸送のお手伝いをさせていただき、とにかく現地組織委員会の輸送状況に最後まで翻弄され、その対応に追われ続けた大会であったという印象が強く残っています。

次第に落ち着いた様相を見せてはいましたが、それはワゴン車等を借り上げ、期間中自由に使い回せるという、当時の混乱状況を上回る体制を、幹部指示の後即座に整えることができたからであり、多くの関係者の知恵と力の賜物でした。

それでも、競技チームによっては円滑な手配ができず、その一端に関わった者として心苦しく思います。

選手を安心・安全に時間通りに競技場へ送り届けることが何より最優先されねばならず、どんな環境でも臨機応変に対応していくには、その場の状況把握や今までの経験、デフリンピックの運営体制、ろう文化などについての蓄積された予備知識が欠かせないと感じました。今回のような状況は事前に推測することが困難なので、次回以降の俊敏な対応のためにも他国の状況等情報を今から収集分析し、多くの選択肢を蓄えておくべきだと思います。

・会場下見時には問題なくつながっていたのですが、ロビーを始めホテル内のWi-Fi環境が悪く、本部内のML確認がうまくできませんでした。（そのメール数に対し時間的な余裕がありませんでした）。大切な情報が入らなかったことに加え、特に残念だったのは即座に試合結果を確認できなかったことで、本当は、試合結果を踏まえた上で試合を終えた選手をロビーで出迎えたかったと思い、本部に電話連絡をお願いすればよかったと後悔しています。Wi-Fi環境は重要なので、今後はより慎重な確認が必要だと思います。

・本部と競技チーム代表者用のメール専用・音声専用携帯電話は概ね活用されていた印象がありますが、実際、台数や分配に不都合はなかったか、また、競技チームから使用範囲・方法について問い合わせもあったので、配付時にもう少し適切な説明が必要ではなかったか、確認してほしいです。

・滞在中、数名のチームスタッフと会話する機会に恵まれました。競技により状況は様々であるが、それぞれの豊富な経験から貴重な見解をお持ちであり、それらを生かし真のデフスポーツの向上へつなげるためには、更なる工夫と努力が必要だと感じました。

・初めて日本選手団本部の一員として参加しましたが、予想外に発生する事象の対処に必死の毎日でした。日本手話、国際手話、日本語、ブルガリア語、英語など様々な言葉が渦巻く中で業務をこなす時、言語は共通目的を達成するための協働に必要な不可欠なツールであることを改めて実感し、その任務に携われたことを幸せに思いました。初めて体験することも多く、それら全てが貴重な経験になりました。

そんな中で、選手の活躍から元氣と励ましをもらい、また、チームスタッフの心尽くす様子を何度も垣間見て感激し、ますますデフリンピックへの興味と魅力に惹かれました。

不規則な生活になりがちな面もありましたが、無事、成田空港で選手の姿を見届けられた時、この上ない安堵と達成感を得ることができました。

今回多くの方の助けがあり役割を全うすることができました。今後のデフリンピックの認知度と本部組織力の益々の高まりを願いつつ、このような機会を与えていただいたことに大いなる感謝を申し上げます。

外科医師 立石智彦

昨年のアジア太平洋ろう者競技大会からスポーツのメディカルサポートをさせていただき、初めてのデフリンピックでした。まずは、サポートさせていただいた感謝の辞を述べさせていただきます。ありがとうございました。

メディカルサポートについて報告致します。本部ドクターは内科医師である羽森貴氏と外科医師・立石智彦、看護師・高橋美枝子氏、本部トレーナーとして中島幸則トレーナーと高橋小夜利トレーナーと一緒に担当させていただきました。また手話通訳の豊島絵美子氏・小林慶美氏・長山綾氏には選手とのコミュニケーションの際とてもお世話になりました。またTUE申請、病院受診の際には翻訳の高木真知子氏に多分なるご配慮いただきました。詳細は、羽森医師の報告に預けまして、ここでは外科医師としての部分の報告をさせていただきますと思います。

受診は外科系、新患 60 名で述べ 95 回、部位別には 1. 膝・下腿、2. 股関節・大腿、3. 肩・上腕の順に多かったです。

受傷別では 1. 筋・腱障害、2. 捻挫・靭帯損傷、3. 打撲・筋挫傷の順でした。

1. 頭頸部 …3/6	a. 打撲・筋挫傷 …11/14
2. 体幹 …3/3	b. 捻挫・靭帯損傷 …9/19
3. 肩・上腕 …10/13	c. 筋・腱障害 …21/34
4. 肘・前腕 …4/10	d. 創傷・切創・擦過傷 …2/2
5. 手関節・手 …2/3	e. 関節炎 …9/15
6. 股関節・大腿 …15/19	f. 脱臼・亜脱臼 …1/1
7. 膝・下腿 …15/28	g. 虫刺 …2/2
8. 足関節・足 …8/13	h. その他 …6/8
初診 60/のべ 95	初診 60/のべ 95

特記すべきは、

- ①集合 3 日前に網膜裂孔でレーザー治療を受けた選手（バレー男子）の対応について
- ②試合中に脳震盪を起こした選手（バスケット女子）の対応についてでした。
- ①網膜裂孔は、ボールが目当たり網膜が剥れかけた状態であり、放置すると失明に至るリスクもあります。レーザー治療後 1 週間は安静を指示されることが多いです。今回はレーザー手術を担当された先生からメモをいただいていたので、連絡を取り練習許可の確認と、段階的復帰をご教示いただきました。チーム側もゴーグルを用意し眼球外傷のリスクの軽減を図っていただきました。最悪の場合失明ということもあるので、本人、家族にも説明の依頼があったらすぐに報告してもらうよう話したうえで許可し、試合も少しずつ多く出るように考慮していただき、帯同中幸い悪化することはありませんでした。集合当日になって状況が分かりましたが、できる限り速やかに集合前の情報がメディカル内で伝わるようにしなければいけない事案であると考えました。
- ②試合中に接触、20 秒ほど意識を失った選手が、その日の試合復帰はしませんでした。症状がなくなった後ホテルに帰り、判断を求められました。近年重症外傷である硬膜外血腫を減少させるため、IOC を中心に復帰の基準がある程度決められ、脳震盪と認められた時は、有資格者のコントロールの元最低 1 週間の段階的復帰が提唱されています。今回意識消失があったことは明白であり、軽度の逆行性健忘もあっ

たため脳震盪の診断にならざるを得ない状態でした。本人にとっても最終戦に当たり出場したい（させたい）気持ちはありましたが、もし万が一のことがあった場合、今後の人生にかかるリスク、家族にかかる負担、本人・団体にかかる影響などを説明して、本人にも一定の理解が得られ出場を不許可としました。

まだまだ、選手の日本代表であるという意識、我々のサポートのつたなさもありますが、継続して記録にとどめながら改善点を上げていくことで、より良いメディカルサポートができるであろうと考えます。

次回デフリンピックは、トルコイスタンブールでの大会と聞いております。2020 年のオリンピック開催は東京であることが決まりました。いつの日かデフリンピックも日本で開催されることを楽しみにしながら、これからもサポートさせていただきます。

内科医師 羽森 貴

【担当した内容について】

- ①ブルガリア出発まで…携行医薬品の選択、メディカルチェックなど

4 月初旬にろうあ連盟スポーツ委員会より夏季デフリンピックの派遣協力依頼の連絡を受け、5 月から携行医薬品の選定作業に入りました。自転車競技選手兼スポーツファーマシストの早瀬久美氏のご協力を得て、前回大会からの残薬確認や新規購入医薬品の検討を始めました。解熱鎮痛剤、止瀉薬、総合感冒薬など偏りなく最低限の種類を選別し数量は想定量としました。ブルガリアの在外公館医務官情報で調べた限りでは、衛生・医療関係は良いとは言えなかったものの、その時点では薬剤の必要量など不明な点が多く、選手及びスタッフの病歴や常用薬も不明であったため、不測の事態で必要となるような薬の判断はつけられませんでした。抗インフルエンザ薬は感染拡大防止のため採用としましたが、一方で抗生剤の使用は限定されることや副作用頻度が高いため不採用としました。予算や移送を考慮して類似品は極力削り、薬局やネットでの市販薬（一部海外製を含む）を準備しました。また、薬品以外に医務室で必要となるような診察道具（血圧計、体温計、ペンライト、聴診器など）、応急処置に必要な物品（消毒、ガーゼ、固定材料など）、インフルエンザ迅速検査キットなどを用意し、必要性はあっても外傷時の縫合器具、体幹装具、歩行補助具などは事前準備しませんでした。医薬品を取り揃えた後は、早瀬氏に医薬品のバックキング、添付文書集の用意、使用量のチェックリスト作成などをしていただきました。

5 月 20 日にメディカルチェック用の書類一式を本部から郵送してもらい、選手や全てのスタッフの健康診断書の確認、選手から提出していただいた「基本健康調査用紙」と「使用薬物調査用紙」から病歴、健康状態、常用薬の確認を行いました。田島文博先生（日本障害者スポーツ協会医学委員会 メディカルチェック部会長）の後ろ盾を頂き、まず一次チェックを行いました。先に、同行帯同医である立石智彦先生に書類一式を確認してもらっており、申し送りも届いていたため、作業に時間を要しましたが比較的スムーズに確認できました。不整脈疾患であった選手が 1 名、要精密検査に上がったものの、精査（運動負荷検査）を受けていること、動悸などの発作症状は一度も出現していないことより競技遂行に問題ないと判断されました。また、貧血を認めた女性選手 2 名は治療対象選手と考え

られたため、ろうあ連盟を通じて病院の再受診を連絡していただきました。「別紙・コミュニケーションについて」より診療中のコミュニケーションについての希望などを確認しました。マスクを外してほしい、向かい合ってゆっくりと話してほしい、途中で確認してほしいなどの意見が多く、重要な点についてはメモを渡してほしいという要望が大多数でした。また、医師が質問する時は、あらかじめいくつかの答え（はい、いいえ、他）を書いて提示してほしいとの意見も見受けられ、普通の医療機関受診では手話通訳などがなく、コミュニケーションに困難を来していることが多いと思われました。

6月11日にメディカルチェックは完了し、6月13日付で日本選手団の決定に至りました。「使用薬物調査用紙」は、草野修輔先生（日本障害者スポーツ協会医学委員会 アンチ・ドーピング部会長）のご協力を得て、6月10日までに医師処方薬、市販薬、サプリメントの全てにおいて違反とならない様に迅速な対応がなされました。その結果、医師処方薬でTUE申請対象の禁止薬物を使用していた選手8名は、禁止薬物を中止するか、非禁止物質に変更したため、TUE申請対象者はいませんでした。また、禁止物質を含有する市販薬を使用していた選手やJADA公式認定商品以外のサプリメントを使用していた選手には、選手団本部より通知文書で中止を指示していただきました。6月30日の本部と各競技全体のスタッフミーティングでは、最高のパフォーマンスを発揮するための医学的問題チェックとして、メディカルチェックを行っていることや、今後のコンディショニング調整に、市民マラソン・ロードレーススタート前チェックリスト（日本陸上競技連盟医事委員会）を参考にした8項目のセルフチェック『1. 熱がある。熱感がある。2. 痛みがある。虫歯がある。3. 疲労感が残っている。4. 睡眠が十分にとれていない。5. 食事がきちんととれていない。6. かぜ症状（喉の痛み、咳、鼻水）がある。7. 胸の不快感、動悸、息切れがある。8. 腹痛、便秘、下痢がある。』を徹底してもらうよう説明しました。また、流行感染症に関して、6月19日の時点で風疹の罹患数が1万名を超え、免疫のない20～30代の男性に例年になく急増し続けている状態でした。潜伏期間を含めると渡航後の風疹発症や感染拡大も予想されたため、事前にろうあ連盟デフリンピック派遣委員会事務局から各競技団体へ風疹流行や予防接種などの注意喚起を促していただきました。当日は直近の風疹発生状況を踏まえ、風疹にかかったことがない方、風疹ワクチンを受けていない方、どちらも不明な方に対し任意でワクチン接種を行うなどの予防対策を説明しました。立石先生からはドーピングコントロールの説明、中島先生からは前回デフリンピックのご経験から本部トレーナーとしての役割、医療チームへの連絡体制について説明していただきました。

また、大会中に各競技団体からの健康管理報告に関して通常報告はなしとするが、集団感染症の発生時には現状把握や拡大予防のために毎日の検温などの対応をお願いするといった通達を行いました。競技スタッフ側から昨年ソフィアで開催された世界デフバレーボール選手権中に下痢症状の選手が多かったとの報告を受け、衛生面の徹底や食事の注意が必要かと思われました。1名の競技スタッフが持病の悪化から、現在投薬治療中との相談を受けました。スタッフミーティングの後、医療器具にAED携行の案があり、予算の兼ね合いも考えられましたが、緊急時の対応には絶対必要と考えられたため、立石先生にAEDレンタルの準備をしていただきました。直前に突発性難聴を発症された選手の報告を受け、ステロイド治療を緊急に行う場合はTUE申請をする予定でしたが、結果的に治療は行わ

なかったため申請しませんでした。

出発前夜に結団式に出席、太田団長や来賓の方の挨拶の後壇上に上がり、選手たちの紹介や選手代表から宣誓が行われ、選手団が一つにまとめることができました。終了後に携行医薬品の最終確認を行いました。直前に網膜剥離を起こした選手から競技可能かとの問い合わせがあり、失明の危険性などを選手や家族に十分説明し、同意の上で渡航することを再確認しました。

②渡航後から帰国まで…健康管理、診察や治療、TUE申請など

7月22日に出国後、機内で体調不良となった選手やスタッフを認めました。携行医薬品は機内持ち込みとしていなかったため、手持ちの薬で一時対応しましたが、このように不測の事態もあり得るため、移動時にも最低限の医薬品所持が必要だと思いました。

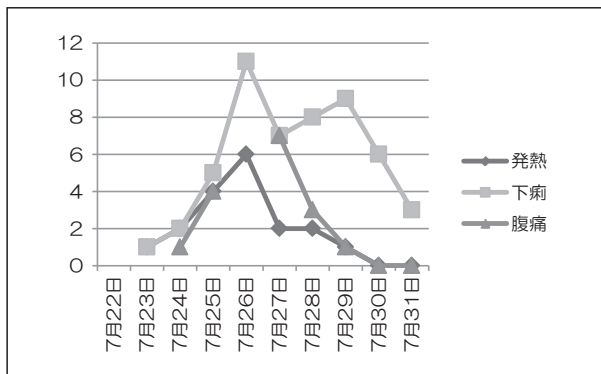
長距離フライトでソフィア到着は真夜中でしたが、選手は概ね水分摂取、体操、コンプレッションスーツ着用などの予防策が十分にされており、ロングフライト症候群の症状はありませんでした。

初日はメディカルルームの設営や薬品類の整理を行いました。メディカルルームは8～10時、15～17時、19～21時開設とし、それ以外の対応は順次電話で連絡確認後に診察しました。医師1名は緊急時対応のため本部待機とし、もう1名はAEDを携帯し各競技会場での診療や処置などを交代で行いました。各競技会場の医師や医務室などは明確ではありませんでしたが、救急車の配備は水泳会場を除いて待機されているようでした。診察は手話通訳者を通じてコミュニケーションをとりました。選手本人は補聴器使用で聞きとり、口話を読み取れるため、コミュニケーションが可能な時もありましたが、付添いスタッフが理解できない場面もあり、健聴スタッフに手話通訳してもらうなどの場面もありました。

連日手話通訳者とこちらの予定を照らし合わせ、本部内や競技会場でのコミュニケーションを手話で円滑に行えるように調整しました。渡航中を通じて天候は晴れ、空気は乾燥し紫外線は強く、日中最高気温は35℃前後であり、屋外での水分補給はこまめにする必要がありました。水分は市販のミネラルウォーターで一般に硬水とされていましたが、比較的飲みやすく、食事は宿泊ホテル内で3食摂取しました。一般的に塩辛く、油をたっぷり使った料理が多く注意が必要でした。鶏卵を介したサルモネラ菌食中毒や、特に夏季にはその他の食中毒も発生しているとの報告を受け、ホテルの食事はサラダやヨーグルトなどを除いて全て加熱調理されていましたが、肉類、貝類魚介類についても十分火が通っていることを確認して食べることが必要でした。また、用心してサラダなどの生野菜は控える選手やスタッフも見受けられました。

ソフィアに到着してから24～48時間で下痢、腹痛、発熱の症状を複数名に認め、急性胃腸炎の診断のもと経口補水液の飲水や投薬治療を行いました。症状の中には嘔気や嘔吐も認め、ノロウイルスなどの飛沫感染予防策も至急で講じました。急性胃腸炎の集団発生から、毎朝各競技団体に体温、腹痛、下痢症状の有無を記録した健康管理報告書を提出してもらい、症状悪化してからメディカルルームを受診することがないように初期症状の発見や発症者のその後の経過観察を行いました。

以下に急性胃腸炎罹患患者数の経時的変化を折れ線グラフにて表示します。症状としては翌日には解熱しましたが、下痢は数日続くことが多かったです。



急性胃腸炎による重度の脱水症状を認めた選手やスタッフに緊急回路的に点滴治療を行いました。当初、大会指定病院が不明でしたが、再三の大会本部への問い合わせにより指定病院がないとの連絡を受けました。英語に通じる病院は Tokuda Hospital Sofia だけであったため、後日、点滴加療を行った選手3名に関しては病院を受診し血液検査を実施しました。可及的早期に TUE 申請所定の様式を血液検査結果と診療録をそえて添付し、ICSD ホームページで申請しました。

7月24日に出発した選手団の中には、機内やソフィア到着後より上気道炎による咽頭痛や発熱などの症状を認めました。7月31日には、新規で消化器症状の発生はなく、発熱患者も解熱後数日経過していることから終息宣言をし、8月以降は毎朝の健康管理報告書の提出は中止とし、個別対応に切り替えました。胃腸炎を含めた内科疾患は試合や練習へ移動する前の朝の受診が多く、外傷や障害の外科系疾患は当日競技終了後の夕方～夜間の受診が多かったです。夕食時間が19時からということもあり、腹部症状の方は18時に検温や診察を含めた再診をお願いしました。

また、ソフィア郊外の Pravets に滞在中のサッカー選手団には特別の注意が必要でした。高速道路を利用し車で約2時間弱と離れていたため、主にメールや電話でのやりとりを行いました。連絡を受けた後に携行医薬品を持参し診療や投薬治療を行う、競技日程に合わせて会場へ向かい外傷治療を行うなどの方法をとりました。大会期間中を通し日本選手団の救急搬送やAEDの使用は無く、ドーピング検査は実施されている様子はありませんでした。期間中の内科的疾患名を以下の表に示します。

胃腸炎	20	熱中症	1
上気道炎、感冒	13	眼炎	1
月経困難症	2	虫刺し症	1
蕁麻疹、アトピー性皮膚炎	2	筋緊張性頭痛	1
手足口病	2	眼精疲労	1
		アレルギー性鼻炎	1

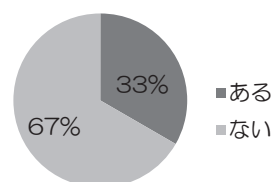
【今後の派遣で改善が必要な点について（今回の課題点）】

個人的に診療行為では、アメリカ神経学会が定めた1度脳震盪、2005年の Concussion in Sports Group (GISP) の定めた単純型脳震盪にあたる選手において、受傷当日復帰は禁止 (same day return to play の禁止) ですが、身体機能や認知機能の休息後翌日の試合にどう判断するかが問題となりました。受傷選手にセカンドインパクト症候群について話をし、一旦は翌日出場許可としましたが、最新のスポーツ予防医学の見地から立石医師により今回の出場は停止との判断が下り、本人に説明、同意を得ました。選手の立場で考えると、一度出場許可となったものの当日朝に取り消しとなったためひどく落胆されたと思われ、出場許可の言葉の重さを感じると同時に私の不勉強を反省しました。判断に迷うケースは同行医師との密接な相

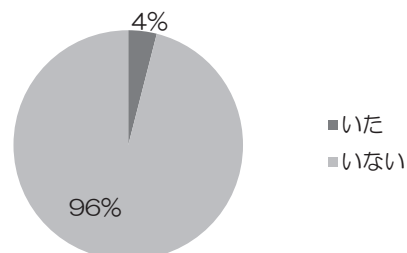
談や連絡が必要だと実感し、直前に持病が悪化した競技スタッフの健康管理も問題になりました。そのスタッフは連日の競技場同行で歩行困難な状態となり、安静をとる必要性がありました。渡航による不測の状況もありますが、渡航前に持病の悪化があった場合、代行者への変更手続きなど諸問題があるものの、選手やスタッフの渡航直前の健康管理の重要性を感じました。今回は医師がAEDを携帯しましたが、医師が帯同していない練習現場や競技会場での救急・救命処置が必要になることも想定され、救急講習会やBLS (basic life support) 講習会などを通じて、トレーナー、スタッフ、あるいは選手自身も心肺蘇生法やAEDの技術を習得する必要があると思いました。昨年のアジア太平洋ろう者競技大会は日本選手団として結成しなかったためか、あるいは各競技団体が別々の宿舎を利用したためか、本部メディカルチームとして役目が果たし切れたかどうかは考えさせられましたが、今回は選手団の一員として、選手のベストパフォーマンスにつながるような医療チームができたのではないかと考えています。しかし、結果的には選手やスタッフのベストコンディションを保つことができず、渡航して間もなく体調不良者を多数発生させてしまったのはこちら側にも問題があり、渡航先の状況に応じて、迅速に予防医療に重視したチームの体制を整えなければならないと思いました。

事前調査である「基本健康調査用紙」の心理面から各選手の違う側面を見つけることができました。以下に詳細結果を示します。今回帯同中に、心理面の相談を受けることはありませんでしたが、結果を踏まえて今後の心理サポートの重要性もあげられます。

Q. 競技の場面で心理的問題(課題)を感じたことがありますか。



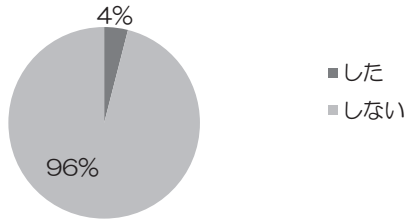
Q. その時に専門家が身近にいましたか。



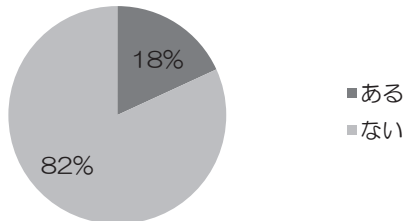
Q. その時どのように解決しましたか。

- ・メンバーとのコミュニケーションをとる。
- ・スタッフに相談する。
- ・結果にこだわらず、自分のプレーをする。
- ・深呼吸をして冷静さを保つ。
- ・イメージトレーニングをする。
- ・ストレッチをする。
- ・アップを多めにして、汗をかく。
- ・目標の再設定をする。
- ・アプローチを提案してもらう。
- ・失敗シーンの克服を練習で繰り返す。

Q. その時専門家に相談しましたか。



Q. 専門家による心理サポートや相談が必要と感じたことはありますか。



Q. 具体的にどのような心理サポートを受けたいですか。

- ・競技力向上につながるメンタルトレーニング
- ・競技と仕事（学業）の両立
- ・ベストとのギャップ
- ・何かあったときの相談（身近な相談者）
- ・人間関係
- ・国際大会初参加
- ・わからない

【反省・まとめなど】

私は勤務先のリハビリテーション科で診療する傍らで障害者スポーツに興味を持ち、一昨年に日本障害者スポーツ協会公認の障害者スポーツ医の資格を取得しました。国際大会の経験はありませんでしたが、昨年5月に開かれた第7回アジア太平洋ろう者競技大会の派遣協力をを急遽ご依頼いただくことになりました。普段は聴覚障害者との関わりはなく、加えて長期遠征になるため一時は辞退も考えましたが、幸い病院の理解も得られ医局から大会同行を後押ししていただきました。これが私にとってのデフスポーツの始まりです。先のロンドンオリンピック・パラリンピックは、医療スタッフに医師、看護師、トレーナー、栄養士、心理士を含めたマルチサポート体制でしたが、デフリンピックは、規模の違いのため一概に比較はできませんが、医療スタッフをはじめ本部スタッフの数は最低限で、臨機応変な対応を取らざるを得ない状態でした。私も急性胃腸炎に罹患し、同じ医療スタッフの皆様にも多大なご迷惑やご心配をお掛けしました。日本選手団の健康を守る立場でありながら、病気や怪我の予防ができていなかったことを深く反省した次第です。今後は、4年後のデフリンピックに向けて、選手や監督・コーチへ向けたコンディショニングやドーピングコントロールなどの啓蒙を含め、引き続き選手サポートに関わりたいと思っています。ありがとうございました。

【団体内の担当とその内容】

今大会、「アスレティックトレーナー（以下：AT）」として、本部メディカルスタッフの一員として帯同させていただきました。当初、ATは1名のみの帯同予定でしたが、ろうあ連盟の了承を得て2名体制となりました。前大会から本部スタッフの一員としてATの立場が確立され、国際大会に出場する日本選手団のサポート体制としては、オリンピックやパラリンピックと形の上では同等となりました。今大会は2回目の帯同ということもあり、形だけでなく中身（活動体制）の確立をしなければならぬという使命感を持って対応しました。前大会では、インフルエンザを罹患した選手が多数発生したことにより、大会途中より本部トレーナールーム利用者数が減少傾向となり、急速、各競技会場を巡回しての活動となってしまったためです。そこで、今回は本来の本部トレーナールーム中心の活動報告ができるように配慮しました。

今大会本部ATは男女各1名となりました。共に日本体育協会公認アスレティックトレーナー（以下：JASA-AT）資格を持っていたため、共通理解のもとに活動することができ、高橋氏は理学療法士の資格も持っていたため、医師からの指示のもと、超音波・低周波治療にもあたりました。前回は、JASA-AT1名、鍼灸師1名、他にボランティア学生1名で計3名とも男性であったため、今回はその反省点も生かされました。

今回ATの活動は基本的にはトレーナールームを中心としましたが、各競技トレーナーとの連携を図るために、可能な範囲で競技会場を回り、参加競技団体15競技のうち、9つの競技に帯同し情報交換を行いました。前大会では10競技にトレーナーが帯同しましたが、トレーナーとしての専門的資格保有者は3名であったのに対し、今回は5名に増えていたことから、デフスポーツのチームサポート体制も確立されつつあると確信しました。このことは、我々本部ATにとっても大きな意味を持つもので、本部トレーナールーム利用者は、トレーナーを帯同している競技の選手よりも、トレーナーを帯同していない競技の選手の利用が多かったのです。

トレーナールーム利用方法については、前回同様、事前説明会において「マッサージ屋ではない」ということと、利用手順についての説明を行いました。必要であれば本部ATルームの貸し出しも可能であることを伝えましたが、1件の利用もありませんでした。利用時間については、8～10時、15～17時、19～21時とし、他の時間については電話で連絡を取り合うという形をとりました。しかし、必ずどちらかがトレーナールームに待機し、今回はあくまでもトレーナールームを拠点として考えました。

ATとしての活動内容は、①各競技トレーナーと本部ドクターとのパイプ役になること ②競技トレーナーのいない競技へのサポート ③各競技団体からの氷の発注が今回の主な役割でした。以下、大会期間中のトレーナー活動の詳細について報告します。

<トレーナールーム利用者数>

トレーナールームオープン13日間で、延べ91名が利用しました。最も利用者の多かった競技は卓球で、続いて自転車、陸上です。

卓球については、大会期間中に負傷者が出てしまい、チームトレーナーがいなかったため、本部ATが試合会場まで付いていくこともありました。自転車についてはチームトレーナーがいなかったことと、試合中のアクシデントが多かったため利用

頻度が多く、陸上については、そのほとんどはマラソン選手で、陸上競技トレーナーがブルガリアに到着する前にレースが行われたことが理由としてあげられます。

＜実施内容＞

本部 AT が行った内容は、アイシング 48 件、ストレッチ 21 件、低周波 18 件、超音波 18 件、テーピング 9 件、トレーニング 8 件、マッサージ 6 件、可動域訓練 4 件、合計 132 件でした。今回、アイシングが多かったのは、ホテル内で氷の調達ができなかったことが大きな要因です。

＜時間別利用者＞

時間帯別で見ると、最も利用者が多かったのは 20 時台でした。次に多かったのは、8 時台と 16 時台です。前大会は、半数が 19 時から 22 時の利用で、朝の利用はほとんどありませんでした。この違いは、試合会場までの距離なども大きく影響していると考えられます。

【反省及びまとめ】

今大会は AT が日本選手団に帯同して 2 回目の大会となりました。前回大会の反省も含め今後の課題を箇条書きします。

- ・ホテルで氷の手配ができず、毎日配達してもらいましたが、その注文・配布方法など、事前に本部と決められれば良かったです。

- ・トレーナールームの場所は、理想を言えばドクターと同じ部屋がベストだと思います。

- ・メディカルルームと本部スタッフルームは、近い場所にあることが望ましいです。

- ・トレーナーが帯同しなかった競技の中には、直前で帯同を取りやめた競技もありましたが、改めてトレーナーの必要性を感じてもらえれば幸いです。

- ・AT 活動の場所は「トレーナールーム」でしたが、時間帯別利用者数の集計結果から、今後は朝、夕、晩はトレーナールーム対応、日中は競技会場へ出向くことも視野に入りたいです。

- ・次の大会で日本がメダルを 40 個獲得しようとするならば、単発的にメディカルスタッフ帯同をするのではなく、ろうあ連盟として、4 年間の方針を立てて強化する必要があります。

アスレティックトレーナー 高橋 小夜利

①団体内の担当とその内容

昨今の女性アスリートの増加という側面もあり、男性トレーナーとして中島氏、女性トレーナーとして高橋という本部トレーナー 2 名体制で臨み、ドクタールームの隣にトレーナールームを設置し、医師、看護師との連携のサポート業務にあたりました。

大会参加 12 競技団体 15 種目の内、トレーナーが帯同していなかったのは 6 種目であり、トレーナーがいる競技に対しては、そのトレーナーの後方支援（物品や治療機器等の提供、情報提供、手が足りない場合の援助）が主で、トレーナーがいない競技に対しては、外傷・障害対応、コンディショニング、救急対応のための競技会場待機等を行いました。出向く競技会場の選定は、外傷・障害の対応（テーピング、ケア、アイシング等）が必要な選手がいた場合はその競技を優先し、そうでない場合は様々な会場を回るようにしました。各競技のスケジュールを元に、会場へ向かう人とトレーナールーム待機者を交代で設定し、どちらでも対応できるような体制を整えました。コンディショニングに関しては、受動的なもののみの実施は避

け、パートナーストレッチや治療機器を利用したコンディショニングを行いつつも選手のセルフコンディショニングを促すようにも努めました。

氷の準備が滞在ホテル内では難しかったため、現地業者への氷の手配のとりまとめと配分（本部メディカル及び競技団体用）をトレーナー部門で担当しました。

②反省・まとめなど

トレーナーがいない競技に関してはまんべんなく会場を回り競技会場待機と現場サポートに努めることを考えましたが、ホテルと競技会場間の組織委員会による交通手段が不十分であり、充分にまた公平に競技会場に行くことがままならないこともありました。しかし、輸送スタッフの尽力のおかげで本部スタッフの視察スケジュールに合わせ可能な会場へ出向きました。充分だったかどうかは競技団体の意見を参考に今後検討する必要がありますと思います。

伊藤超短波(株)より治療機器を貸与いただき大会に臨みました。元々もっていた障害や期間中に発生した外傷のケアに大変有用であったため、今後も引き続き治療機器を持ち込めるような対応の継続をお願いするとともに、貸与下さったことをこの場を借りて感謝の意を表したいと思います。

選手のセルフコンディショニングやセルフケアの認識については、競技団体によって差があることを感じました。日本のデフスポーツの環境はまだまだ厳しいことは承知していますが、環境の改善・向上が見られている諸外国と戦っていかなければならないことを考えると、日本のデフアスリートも積極的なコンディショニングやトレーニングの実施ということをもっと考えていかなければならないのではないかと感じます。こういう点に関してはトレーナーが情報提供することで向上の一助になれるのではないかと思います。

私自身が手話勉強不足のため、選手とのコミュニケーションには筆談または手話通訳者の助けが必要でした。必要なやり取りは概ねできていたと思いますが、多少時間がかかっていたのは否めません。手話通訳者の数を大幅に増やせないとすると、スムーズなサポートのために健聴者スタッフは多少手話ができた方がいいということが反省点です。また、本部のメディカル、手話通訳、輸送スタッフ以外は全て聴覚障害者で、本部内にも手話通訳者 1 名の配置が必要であり、手話通訳者の負担が大きかったように思われました。今後本部運営という点でスタッフ構成について検討していただければと思います。加えてタイムリーな連絡、確実な連絡のためにできれば必ず競技団体内にも健聴者をスタッフにしてもらうことが望ましいと思われました。

いずれにせよ日本選手団にとって大きなアクシデントもなく競技終了を迎えられたこと、またこのような貴重な経験をいただけたことに感謝いたします。日本選手団のますますの活躍のため、より良い選手サポートのために今大会で得た多くの経験を次に生かしていきたいと思います。

看護師 高橋 美枝子

(国立障害者リハビリテーションセンター)

1. 担当内容

7 月 22 日～8 月 7 日の 17 日間の派遣期間において、私はメディカルチームの一員である看護師として、219 名の役員及び選手団の健康管理、病気や怪我の予防と治療に対して看護業務に就きました。また、選手団の試合前後における身体のケア、コンディショニングを担うアスレティックトレーナーが、

スムーズに対応できるよう医師と共に情報提供を行いました。
＜メディカルルームの設置＞

宿泊ホテルの20階2室の部屋をメディカルルームとして使用させていただき、主に診察と処置を行う部屋と体調不良者が安静に休養できる部屋に分けて、ベッドや椅子等の配置を考慮し、医務室としての環境を整備しました。

メディカルルーム利用者の症状を詳細に把握するために、手話通訳の方々の協力をいただいて処置やケアが適切に行われるように努めました。

ドアにはメディカルルームであることを明記し、不在時は連絡先が分かるように医師2名と看護師の名前と携帯電話番号を記載して掲示しました。メディカルスタッフは全員携帯電話を常備し、本部スタッフ、各競技団体からの診察依頼等の情報をタイムリーに受けて、対応できるようにしました。

トレーナールームはメディカルルームに並列した2室の部屋に配置され、対象者は医師が診察をし、必要と判断された場合にアスレティックトレーナーによるケアやトレーニングが施行できるように設置しました。

メディカルルームでの診療時間は基本的に8～10時、15～17時、19～21時までとし、各競技団体からの体調不良等による診察依頼については24時間携帯電話で受け付けて対応しました。事前の打ち合わせでは、①競技開催中に発症した怪我などの外科系の症状、②腹痛・発熱などの内科系の症状の2種に分け、ファーストコールの連絡経路を看護師と医師に分担して依頼を受ける体制にしました。しかし実際には各競技団体の判断により、担当者から医師あるいは看護師に電話で依頼があり、さらにメディカルスタッフ間でその依頼内容を共有して対応することもあり、その時の状況に応じて臨機応変に対応しました。

今回もメディカルスタッフを含む本部スタッフ全員が各自のパソコンを持参し、メールによる競技開催中の情報の共有をはかり、早急に対応できる体制の中で活動ができたと思っています。

2. 今後の派遣で改善が必要な点について（今回の課題点）

1) 4年前のデフリンピックはインフルエンザの流行期だったため、今回も発生を懸念して感冒症状の薬の数が比較的多く準備されていました。実際は現地到着早々に急性胃腸炎症状の罹患者が次々と増えたため、必要とする内服薬の不足が予想され、追加調達する事態が発生しました。派遣医師の調整により必要な薬は補充されましたが、今後は想定外に薬剤調達が発生した時の対応のしきみを検討しておく必要があると思われました。

2) メディカルルームは、宿泊用としての部屋を提供されましたが、処置やケアを提供する場所としては照明が暗く、利用者の症状観察や安全面では不十分であると感じたため、今後は、医療処置及びケアが十分に提供できる照明の確保が必要だと思いました。

3. 反省とまとめなど

今回のデフリンピックは開催地まで14時間に及ぶ飛行と移動による長時間の行程のため、参加者の身体的な疲労が懸念されました。直接の因果関係は明らかではありませんが、現地到着直後から競技選手及びスタッフが次々に発熱を伴う急性胃腸炎を発症し、一時は感染症も危ぶまれましたが、罹患者の拡大の悪化はなく5日間ほどで終息しました。不慣れた地域の生活環境、200名規模のそれぞれ生活背景が異なる集団の中では想

定外のことが起こることも予測されます。しかし、私たちメディカルチーム、本部スタッフの連携による対応で無事大会を終えることができたのは、メールも含めてお互いのコミュニケーションによる人間関係が良好であったからだと思っています。

今回、看護師としてこのようなスポーツ競技大会関係の方々と共に協働し帯同しましたが、メディカルチームのメンバーとして必要な看護ケアを十分に提供できたのか振り返っているところです。

陸上競技チーム

監督 三枝 隆行

毎回、過去の国際大会の反省点を今後に生かすよう努力してきましたが、今回は良い点悪い点のそれぞれあったと思います。

1つ目は開催日程決定から大会開始までの準備期間が短かったことです。

政治状況や経済困難等もある中、開催いただいたソフィア実行委員会は素晴らしいです。しかし、そのような状況下で仕方がないと思う一方、私達のもっともっと念入りに準備する必要があったと思います。

特にICSD技術委員とのEメール連絡がなかなか取れないことや、要項が発表されないこと、現地の衣食住等の情報が分からないことに、もどかしい思いをしました。

2つ目は各国の競技レベルについてです。日本代表選手は確実にレベルアップしていますし、現地へ着いてから2日後に始まる本番までの調整は大変だったと思いますが、頑張りました。

しかし強豪国は更にレベルを上げており、非常に厳しい戦いを強いられました。やはり、強豪を抑えて勝つためには何をすればいいのか、何をやるべきかを選手自身が念頭に置きながら練習をする必要があると感じました。

3つ目は棒高跳のポール配送についてです。配送をめぐり棒高跳選手がナーバスになってしまい大変申し訳なく感じています。配送方法には色々な知識が必要であることが分かりました。用具の準備・配送など準備も含めた全てが「陸上競技力」につながらないと実感し、反省をいたしました。

またコーディネーターとしてももっと手腕が必要であることを改めて感じています。

トレーナー 東口 紘也

国際大会に陸上競技トレーナーとして参加するのは、今回で5回目になります。今までの経験を活かしながら、トレーナー活動をしました。出発から帰国までは、選手の体調管理、現地ではウォーミングアップのフォロー、ペアストレッチ、テーピング、試合後のケアなどを実施し、日本からの低周波を持参し、疲労回復を中心に実施しました。また、初めて国際大会に参加する選手が数名いたので、不安にならないようコミュニケーションを図り、リラックスして試合に臨めるように心がけました。現地に到着し、体調不良や疲れを訴えていた選手もいましたが、日本選手団のドクターに診ていただき、試合までには回復をしました。毎回のことですが、日本ドクターが帯同することにはありがたいです。朝晩と日中の温度差があり、自己管理ができるか不安でしたが、今回は選手自身で、自己管理ができて

いたように思いました。食事の面では、なかなか口に合わない選手もあり、日本食を持参して食べていたようです。環境が変化した時の対応力を身につける必要があると感じました。なかなか難しいことですが、日本では、おいしく食べられるありがたさが身に染みました。ドリンクに関しては、スポーツドリンクがあまりなく、水の飲みすぎによるミネラル分の不足が考えられましたので、しっかり食事で塩分をとるように、選手に指導をしました。国によって、スポーツドリンクがあるところ、ないところがあるので、準備は必要だと感じました。全体的に見ると、選手1人ひとり、自分でスケジュールを立て、自己管理、体のケアをしていたように感じました。今後も、自分たちでケアができるように指導していきたいと思います。後に続くトレーナーの育成が必要になってきたと感じました。

今回は、いつもと違って、情報が少なかったように感じました。フェイスブックで情報を発信することもいいですが、確実にメールなどでの情報発信をしていただけるとありがたいと思います。合宿に関しても、ホームページを見て各自で申し込みをするといったことを後になって分かりました。情報の共有がまだまだ不足しているように感じました。準備期間が短い中で、デフリンピックに向けての準備は、大変だったと思います。お疲れ様でした。ありがとうございました。

トレーナー 内海 優

今回強く感じたことは、やはり自分の力不足です。『このチームの女性トレーナーをやってほしい。』と依頼され、私にできることはごく僅かで、とても限られているので、適任者が見つかるまでの間だけということで引き受けてから早3年、この大会で、国際大会は2度目となりました。私にも、何かできることがあればと思い続けてきたものの、本当に自分の力不足に悲嘆を感じる大会となりました。しかし、日本のチームドクターや、トレーナーの方に指示を仰ぎ、実際に現場に居合わせてくださった場面もあり、とても助けられました。大丈夫！というスタンスで、試合に臨めました。私自身のトレーナーの経験としてもかなり有益なものとなりました。日本チームのサポートに大きな感謝と安心感を得て、組織のすばらしい面も体感させていただきました。このチームの一員としてデフリンピックに帯同できたことは私にとって誇りであり、喜びでした。選手が限界に挑戦し、日々の努力を遺憾なく発揮し、結果を出す感動的なその瞬間に居合わせ。貢献できたことは本当にすばらしいことだと思います。しかしこのような大きな舞台にたつ選手達にとって、チームにとって、今の自分ではとても恥ずかしく、ふさわしくないとはいえず知らされた大会でもありました。もっと何かやりたい、貢献したい、このチームとともに勝ちたいと思う気持ちが、より高まったからかもしれません。選手と同じく、デフリンピックという世界の大舞台で、私にも、ある結果が出たのかもしれませんが。この悔しさをバネに、一歩ずつまた前に進むべく努力をしていきたいと思います。私の一歩がデフリンピックの拡がりやデフスポーツの世界の前進に少しでも繋がれば幸いです。

最後に、関係者のすべての方々、選手の皆様の高い意図と行動を、心から賞賛し感謝いたします。

現状の渡航費は負担が大きく、このままでは実力のある選手、必要不可欠な有能スタッフが、埋もれてしまう原因にもなりかねません。負担金、補助金の調整、考慮が必要と思われます。よろしくお願いします。

私が担当した業務内容は選手のサポート、水など必需品の買い出し、帳簿付け、洗濯まとめ、大会結果のまとめなどが中心でした。ホテルから大会会場までの交通方法（バスの行き方）をリサーチし、選手を会場まで案内。大会中はビデオやカメラ撮影、選手のサポート、リザルト確認などを中心に動き回りました。

また、選手の悩みや相談を聞き、一部の選手に日本食を作ってあげるなど選手のケアをしました。

練習場所の確認を忘れてしまい、選手にきちんと伝えられなかったことと、自分の時間に追われていて監督のフォローをしきれていなかった部分があったと反省しています。迅速に、正確に、効率よく行動し、選手だけではなく、監督やトレーナーのサポートをもっと頑張ろうと思いました。一人ひとりのサポートは大変でしたが、デフリンピックは人に感動、希望を与えてくれるすばらしい場所でした。ビデオで自分の走りのフォームを再確認し、周りからのアドバイスを受けながら大会に挑んだ結果、自己ベストが出たという方が多かったです。メダルを獲得できなかった選手もいましたが、決勝まで進み、周りの心を熱くさせてくれたり、スランプ続きだった選手が久しぶりに好記録を出したりと本当に自分のように嬉しくなり、感動しました。また、大会中は選手一人ひとりが自分の出る種目に向けて体のコンディションを行いつつ、落ち込んでいた選手がいたら励ますなど仲間の団結力が凄かったです。今季デフリンピックを通し改善すべき所は改善し、次回の大会でも活かせるよう活動していきたいと思いました。

今回はブルガリアで開催することを急遽決定したため、作業に追われて大変だったと思います。本当にお疲れ様でした。現地の情報不足も加え、曖昧な情報があり、不安を持った選手が何人かいましたので、例えば業者に出す洗濯は本日に戻ってくるなどの情報をきちんと提供してほしいと思います。みんなが快くデフリンピックに行けるように、心がけながら的確な情報を発信できる環境をお願いします。

スタッフ 柳田 主税

はじめに、今回デフリンピックマラソン日本代表にスタッフとして帯同させていただき、誠にありがとうございました。

山中選手よりこの話をいただいた時は、正直即答することができませんでした。私は手話もできないですし、スタッフとしての経験もないため、選手の皆の役にたてるかどうか心配で、逆に迷惑をかけるのではないかと不安があったからです。

しかし、山中選手はじめ、三枝監督が背中を押してくれ、自分にできることを精いっぱいやろうと決めました。

私が主にサポートしたのは現地での通訳、練習場所の確保、帯同、大会コースの試走、トラブル時の対応、交通手段の手配、ホテルとのやり取り（レース当日の食事など）、そして大会当日の給水サポート、写真撮影などです。

反省点としては皆へ手話での伝達ができなかったことです。私が日本語訳したものを山中選手に伝え、さらに金子選手、山田選手へ伝達してもらうという方法で、スムーズにコミュニケーションをとることができませんでした。もし、私に国際手話も含め手話通訳の力があれば、ストレスなく、皆とコミュニケーションがとれていたと思います。次回、またチャンスをいただければ、手話をマスターし、より専門的な知識を備えてサポートさせていただきたいと思います。

最後に私の個人的な意見を述べさせていただきます。重要なのは通訳サポートにとどまらず、選手のコンディション把握、メンタルケア、選手に合わせた食事の調整など、選手がレース当日にベストコンディションでスタートラインに立てるよう、どれだけサポートできるかどうかです。

このような素晴らしい機会を与えてくれた三枝監督はじめ、全日本聴覚障害者陸上競技協会の皆様に心より御礼申し上げます。

スタッフ 下防 健太郎

7月30日～8月6日、陸上競技スタッフとして帯同しました。

ソフィア市は長野県長野市の環境に似て日差しが強く、暑い日が続きました。監督、トレーナー2名、スタッフ3名、選手26名すべての方を激励し、特に監督の相談相手となりアドバイスやサポートをしました。テクニカルディレクター（TD）や各国陸上競技関係者、選手達の国際手話通訳も務めました。

競技開始前にたびたび至急や変更の呼び出しがあるので、監督、選手達に内容を伝え、解決するようにしました。26名中、2名は銀メダル、3名は銅メダル、22名入賞（決勝）入りしたので最終ミーティングの時に歴史的快挙であると選手を誉めました。

また、ソフィアでは各国陸上競技リーダーと協議し、国際ろう陸上競技連盟を創設することになりました。そして、私が初代会長に就任することになりました。日本と世界のスポーツ発展及び普及のための橋渡し役として尽力に努めたいと思います。

ブルガリアデフリンピックは大変有意義で得たものがたくさんありました。

選手 田井 小百合

- ・女子100m ハードル 予選 14 秒 82 (-0.1) 1 着、決勝 14 秒 56 (-0.4) 第3位
- ・女子4×100m リレー 予選 51 秒 01 (1 走) 3 着、決勝 50 秒 64 (1 走) 第6位

初出場となったデフリンピックで、100m ハードルは金メダルを目標にして臨みましたが、決勝で自分の走りができず、銅メダルに終わったことは本当に悔しいです。予選が終わった時点で、決勝は上位2人と私の接戦になると予想していましたが、前半から2人と競ることもできず終わってしまいました。決勝では、2人が世界ろう新記録を更新する好走であり、自分が完璧な走りができていても、今の實力では二人に届かなかったと思います。2人の好走を称えますが、一番大事なレースで自分の満足した走りができなかったことはやはり心残りです。

リレーは昨年の世界選手権同様、世界との差を痛感しました。個人の走力でかなわない部分をバトン技術で少しでも補えればと思っていましたが、それでも追いつけるレベルではありませんでした。また、49秒台を目標としていましたが、独特の雰囲気の中でチームベストを出すことの難しさも改めて痛感しました。世界と互角に戦うためには、まずは個人の走力をもっと向上させなければならないと強く感じました。私以外のメンバーは20代前半でまだ若く、十分伸びしろもあるので、今回の経験を今後の世界大会に活かして欲しいと思います。

世界大会出場は2回目でしたが、他国の選手やボランティア、役員、応援など、多くの人と国際交流ができたことは楽しく、良い経験となりました。

出発日が試合開始日とかなり近く、試合日が早い選手は時差や体調調整がかなり大変だったと思います。万全な状態で試合に臨めるよう、次回は日程にもう少し余裕を持たせてほしいです。また、4年に一度のろう者の世界最高峰の大会であるにもかかわらず、選手、スタッフの自己負担が大きすぎると思います。デフスポーツの認知度を向上させるために、また若い選手を育てるためにも、国や企業にもっと積極的に働きかけ、サポート体制を充実させるべきであると思います。

選手 門脇 翠

- ・女子100m 予選 13" 84 (-1.2) 予選敗退
- ・女子4×100mR 予選 51" 01、決勝 50" 64 6位入賞

世界大会は第2回世界ろう陸上競技選手権大会に引き続き2回目ですが、デフリンピックは初出場でした。昨年は100mに出場しましたが、初の世界大会であり、走り終わった後に走った時の感覚すらも忘れてしまうほど極度の緊張で、自分の思うようなレースができず、あまり楽しめなかった記憶があります。今回は、日本でレースを重ねる度に自己ベストを更新する等調子が良かったので、自信を持ってレースに臨むことができました。しかしデフリンピック本番では自己ベストに程遠い記録、予選敗退という残念な結果に終わりました。リレーも目標であった49秒台を出すことができませんでした。改めて、デフリンピックのレベルの高さ、自分の實力の無さ、海外レースで最高のパフォーマンスをすることの難しさを痛感しました。しかし持てる力をすべて出し切った結果なので満足していますし、何よりも笑顔で終われたことが一番良かったと思います。日本に帰ってきてからも度々レースの時の記憶が蘇ってきます。当時のLive中継を何度も見ては、強くなってあの舞台にまた立ちたいという思いが日に日に強くなります。女子の短距離チームが始動してまだ2年、世界大会の出場も1、2回と一人ひとりの経験がまだ浅く、日本聴覚障害者陸上競技協会に所属している女子短距離選手も少ないです。世界と互角に戦える實力を身につけ、世界に示すことができるのは今の私達しかいません。日本女子短距離チームがどんどん拡大し強いチームになるよう、今後も貢献していきたいです。その日が来ることを信じ、4年後も出場することを目指して、競技を続けたいと思います。携帯に保存したリレーの決勝記録を見ることでその時の悔しさを思い出し、それを支えに頑張っていきます。

スポンサーを多く集め、選手の育成により力を注いでいただきたいです。また、聴覚に障害を持った子ども達の中でもデフリンピックの知名度は低いので、私たち選手やスタッフの活動を拡大して、より多くの子ども達に“世界と戦える”夢を与えられるような機会が増えると良いと思います。

選手 土屋 文香

- ・女子100m 予選 13" 42 (+2.1) 予選落ち
- ・女子4×100mR 予選 51" 01 決勝 50" 64

初めての国際大会、そして世界各国からろうの代表選手がデフリンピックに集結しており、私は楽しみでいっぱいでした。こんなすごい大会に自分が出場できると思うと胸が震えました。支えてくれた親や学校、応援してくれた人達への感謝の気持ちを忘れずに最高のパフォーマンスで走ろうと試みました。ろうの選手やスタッフと生活し、健聴者との文化の違いを理解

できました。女子 100m では「自分はろうだけど、できることがある」と自信を持ち、今の自分のベストな力を発揮することができ、非常にリラックスした状態で楽しんで走ることができました。また、感謝の気持ちを忘れずに走りました。もう一本走りたいという気持ちを忘れずに、今後も積極的に陸上競技に取り組んでいきたいです。反省としてはもっと早くから出場することを目標にして練習や技術に努めていればよかったと思います。今後は競技力の面でも高めていきたいです。リレーでは、チームワークが少し欠けていたように感じました。笑顔で終わることを目標としていましたが、くやしさと安堵から涙が止まりませんでした。しかし、このリレーメンバーで走れたことはとても幸せでした。

次のデフリンピックへの目標と課題ができました。自分は手話が少ししかできませんが、今回のデフリンピックを通してもっと手話を知り交流をしてみたいと興味を持ちました。ろうは健聴者よりも顔の表情を読み取りやすく、常に笑顔で接することの大切さを覚えました。

協会の公文書の手配に時間がかかったこと、デフリンピック 3 ヶ月前から監督に学校への公文書をお願いしていたのですが、デフリンピック 1 週間前に公文書ではなくメールになってしまいました。これでは大学からの信頼もなくなってしまうので、これからは気を付けてほしいです。選手やスタッフの自己負担の軽減にも取り組んでほしいです。デフリンピックの認知度を周りに広めていくように努めていきたいと思います。

選手 小松 彩香

- ・ 400H 予選 65 秒 24、決勝 64 秒 747 位
- ・ 4 × 100MR 予選 51 秒 01、決勝 50 秒 646 位

自己ベストを出せず悔しかったのですが、いつも通りレースに集中することができたので良かったです。4 年後も出場できるよう、気持ちを切り替えて努力していきたいと思います。応援していただき、ありがとうございました。

選手やスタッフの自己負担が大きすぎます。連絡も急すぎです。連絡方法もメールではなく、書類にしてほしいです。お金の明細書もしっかり配ってほしいと思います。

選手 山田 真人

- ・ マラソン 30 km 棄権（レース中、ハムストリングの肉離れによる負傷）

今回はデフリンピック出場 3 回目になりますが、自分にとっては最悪でした。スタッフは英語通訳一人しかいなかったため、手厚いサポートがありませんでした。今回は自ら TD 会議や大会実行委員会などに確認していましたが、いくつか食い違いの面があり、精神面もくたくたでした。TD 委員からスタート時刻の 30 分前に記念写真を撮りたいという要請がありましたが、アップの微調整、排泄時間など一番大事な時間に重なっていました。しかし他国の選手は抵抗感がないようで、驚きました。

2001 年ローマ大会は監督だけでなく、事務局の方にも協力してもらい、レースに集中できました。2009 年台北大会も監督を始め陸上競技チームの多くのスタッフが居たからこそ、自分への負担が全くかからず集中できました。今回は柳田スタッフの協力はありましたが、一人だけでは負担が大きく、もう一人必要だったと思います。

山中選手は日本代表マラソン選手の中でも安定がありました。金子選手も故障上がりと思えないほど、かなり安定度が増してきたと感じました。自分はスピードがない分、粘りとスタミナでカバーし、少しでも追い付けたら良いと思っていました。しかしレースは最悪で、全体コースの半分は慣れない山道や砂利道でした。マラソン大会には 30 回出場してきましたが、砂利道を走るのは初めてです。また、何度もコースを間違えてしまい、ロスが出てしまいました。28km 辺りで下りの砂利道で滑り、ハムストリングの肉離れによる負傷をし、ストレッチなどを試みましたが、激しい痛みの為、走り続けられる状態ではなかったため、やむなく棄権しました。海外レース 5 回目で初めてのリタイヤです。念入りの下見チェックをしておけば、シューズ選択の見直しができたかもしれません。判断ミスだったと後悔しました。

また、英語通訳だけでなく責任者のスタッフにも同行してほしいかったです。TD 会議出席や大会当日の選手達をサポートしてもらえれば、選手たちの精神面の負担も軽くなったと思います。次回からはスタッフ 2 人以上同行できるように要請します。

選手 金子 誠一

- ・ 男子マラソン 6 位（2 時間 46 分 06 秒）

日本選手団選考条件であるメダル獲得を果たせず、6 位に終わる結果となりました。メルボルン大会の 5 位、台北大会の 3 位から順位は低下し、自分としても不甲斐ない結果に恥じています。当初、マラソンはソフィアデフリンピックの開催種目とならないと言われ、モチベーションが大きく削がれてしまったせいもありますが、敗因としてはやはり怪我による調整遅れ、実力不足が第一です。4 月初めにドイツでのマラソン開催が決まり、大きく喜んだのと同時に、実質的な練習もそこから始まる形となりました。これまでの経験を活かし、約 3 ヶ月半の短い準備期間でも自分としては十分に仕上げたつもりでした。最後の調整として極めて暑い盆地の山口という地でハードな練習を重ねたため、疲労が抜けず体調低下を招いてしまいました。しかし、この短期間で一定の成果を残せたことは、経験力とトレーニング方法が間違っていなかったと認識し、自信につながりました。今後はまた怪我に注意しつつ、相応の時間をかけてレースに臨めるようにしたいです。

最近のデフリンピック、また陸上世界選手権でさえ、手間と費用のかかるマラソンは実施しないという潮流が生まれつつあります。今回は選手団本部や関係各面の尽力もあり開催されましたが、予断は許されません。過去、メダルを連続獲得している日本のマラソンレベルは高く、また、昨今のマラソンブームが示すように努力の尊さが人々を勇気付ける影響の大きさや選手の裾野の広さ、可能性の大きさを持つ競技性からも、今後継続的な開催の働きかけをお願いします。

最後に、選手団、陸上チームのスタッフの方々には大変な気遣いと助力をいただいたことに厚く感謝申し上げます。

選手 山中 孝一郎

- ・ マラソン 2 時間 39 分 09 秒 3 位
- ・ 10000m 32 分 10 秒 90 4 位
- ・ 5000m 15 分 35 秒 67 5 位

マラソンは開幕前にドイツの南部、フュッセンで行われまし

選手 小林 弘明

- ・男子 100m 11 秒 57 一次予選敗退
- ・4 × 100m リレー予選 42 秒 78 1 位（日本新記録更新）
決勝 43 秒 08 6 位

初めてのデフリンピックでした。日本代表として、責任感が重く緊張しました。100mに出場し、やはり世界の壁が高くもっと練習してレベルアップしなければいけないと痛感しました。ろうのレベルを健聴者レベルに近づけていかなければならない、メダルを取るためにも10秒台が当たり前になれる力を身につけなければならないという課題ができました。

4 × 100m リレーでは事前にメンバーを集めて試合に出るという経験は少なかったのですが、国内で試合に出た時に、日本新記録を更新し、自信が付きしました。しかしソフィアデフリンピックは台北より明らかにレベルが高く、負けた悔しさが大きかったです。世界にはなかなか追いつけず、日本には何が足りないのか、世界との差は何なのか、疑問ばかりでした。日本も世界レベルである存在感を見つければいい勝負ができ、ライバルも見つかり、色々な部分をアピールできるので、もっと頑張らなくてははいけません。経験を活かして一步一步積み重ね、レベルを上げていきたいです。

出発してすぐに試合に臨むのは厳しかったです。せめて1日ほしかったです。良いコンディションで、気持ちを高めるには時間が必要です。食事の部分での対応も難しかったです。日本食を持参しましたが足りませんでした。オリンピックと違うのは分かりますが、日本食のシェフ同伴など、何かしらのサポートが欲しかったです。

デフリンピックの為に協力や応援をありがとうございました。知名度を高め、スポンサーなど選手がメダルを量産できる環境ができることを夢にしています。本当にありがとうございました。

選手 三枝 浩基

- ・男子 100m 決勝 11 秒 04 (+1.4) 8 位入賞
- ・男子 4 × 100m リレー 決勝 43 秒 08 6 位入賞

自分にとって今までにない大きな大会であるデフリンピックに参加しました。競技結果について、男子 100m 一次予選では 11 秒 03 (+0.7) を記録し 1 着、二次予選では 10 秒 95 (+1.0) と自己ベストを更新しました。準決勝では向かい風 1.7m の中で 11 秒 27、3 着に入り、デフリンピック短距離初の決勝進出です。男子 100m 決勝では 11 秒 04 で 8 位入賞を果たしました。決勝の舞台でどれだけ自分の走りができるかが勝負だと思いました。最後で少し固くなりました。スタートでうまく加速に乗るというのが自分の走り方で、悪くなかったです。このような機会はなかなかなく、その中で走れたことは素直に嬉しく、目標としていた決勝の舞台に立つことができたので本当に嬉しいです。目標の 10 秒台が出た決め手は 3 月に JDAA の合宿があり、平井コーチから教えてもらった走りの技術がタイムとなって表れたのだと思います。歴代 3 位ということは、自分がやっと日本の歴代スプリンターの先輩方と肩を並べることができたという意味であり、光栄に思います。でもまだまだこれからだと思っているので、歴代 3 位に満足することなく、さらに日本記録（10 秒 68）を破りたいです。男子 4 × 100m リレー予選では、42 秒 78 の日本ろう記録を樹立で決勝進出、決勝では 43 秒 08 の日本ろう記録歴代 4 位を記録し、

た。マラソンコースは半分以上が土や草道で、とても走りづらかったです。まずは 4 位をキープして 3 人のケニア選手を追いかける作戦をとりました。しかし、途中で 3 位を走っていたケニア選手が逆走し、自分がコースアウトしていたことに気付きました。一気に順位が 7、8 位にダウンし、まさかのケニア選手と並走の展開です。その後ケニア選手が飛ばしましたが、冷静に自分のペースで進みました。まず 2 名を抜き 5 位へ、ケニア選手の姿が大きく見えた所で追いつき、突き放し、1 名を一気に抜き去りました。その時点で 3 位であることを信じ、後ろのケニア選手から逃げ切るだけ考えました。最後の登り坂でスタッフから「3 位！」と言われ、ようやく気が楽になり 3 位で完走しました。コースアウトという思わぬハプニングが発生したものの、最後まで強い意志を持った結果、最終的に銅メダルが取れたと思います。

ソフィアでの 10000m、5000m では、ケニア勢に周回遅れないことだけを目標としていました。しかし、10000m では、トップと 2 位に 2 周遅れ、5000m では周回遅れとなりました。トップの速さは箱根駅伝のメンバーに選出されるほどのレベルで、とても勝負できる相手ではありませんでしたが、ケニア勢以外でトップをとることを目標にしました。10000m は 4 位、5000m は 5 位という結果を残しました。

記録面では自己ベストに遠く及びませんでした。ケニアの異次元のスピードを体感し、世界を相手に 3 種目で走ることができ、日本ろう記録保持者としての位置づけを知ることができました。銅メダルはマラソンチームの同僚とスタッフのサポート、デフリンピックのための強化練習や、応援していただいた皆様のおかげです。トラックでの入賞、チームや他競技の頑張りなどもあったと思います。本当にありがとうございました。

デフリンピック強化練習として、計 7 回の練習会を設けました。台北時と比べ、今回は適齢期であり、安定感及び経験値が飛躍的に上がったと思います。コースアウトしても気持ちが折れず冷静に走ることができました。

日本選手団名簿には都道府県の協会しか記載されていませんが、職場の同僚の支援のおかげで出場している以上、恩返しという意味で会社名や学校名も記載してほしいです。

選手 白石 進

- ・100m 1 次予選 11 秒 53 予選敗退

陸上競技キャプテンとして任されました。良い面も悪い面もありましたが、自分の結果が残せず残念です。でも陸上競技メンバーの結果としては今までより良かったようです。2012 年 トロント世界ろう者陸上競技選手権大会では 100m に出場、5 位入賞しました。メダル獲得を目指して練習を積み重ねていましたが、アキレス腱炎症でなかなか練習できず、デフリンピックまでに間に合わず、全てを発揮できませんでした。何も残らず惨めになりましたが、2 度と繰り返してはならない勉強になりました。

今回のデフリンピックは、台北や世界ろう者陸上競技選手権のレベルよりはるかに高く、厳しい大会となりました。キャプテンとして陸上競技メンバー達のモチベーションを上げようとしましたが、何もできずに反省しています。でも最後までサポートができて良かったと思います。

出発日を少しでも早くした方が良いと思います。競技の結果を求めるためには時差による慣れとコンディションが一番大事だと思います。

6位入賞を果たすことができ、このチームでやれたことを誇りに思います。悔しい思いは今後の糧にし、自分なりの目標を立てて夢に向かって走れるようにしていきます。

3年後の世界選手権、4年後のデフリンピックに挑戦しようと思います。また皆と喜びを分かち合い、ぶつかり合い、泣き合い、陸上を通して成長していきたいです。

今まで支えてくれた監督、スタッフ、たくさんの方々に心から感謝しています。応援していただいた皆様、本当にありがとうございました。

選手 佐々木 琢磨

・200m 1次予選 24" 05 5着
2次予選 23" 82 8着 予選敗退

デフリンピックに参加した皆さん、お疲れ様でした。そして、感動ありがとうございました。初めての国際大会に出場することができて良かったです。今回の目標である「メダル獲得」は達成できませんでした。本当にあっという間に終わりました。日常の練習で4回も肉離れしてしまい、満足のいく練習が出来ないままのコンディションの中、全力で200mを2本走れたことは一緒に練習した大学の仲間や日本選手たちの支えがあったからこそ最後まで走り抜くことができたと思います。自分のレースに集中することで周りのことを気にせずに前に進むことができました。しかし、ゴール前で他選手が前にいることがわかり、ゴール直後、ここで終わったなと床に倒れこみました。悔しさのあまりの涙が止まりませんでした。そういう経験は初めてでした。さらにリレーにも出れず何のためにここに来たのかなと思うと悔しかったです。補欠メンバーとしてサポートさせていただきました。リレー決勝では6位で43" 08という良い結果ではありませんでした。41秒台を出すという夢が叶えられませんでした。1日でも早くタイムを出したいのでこれからしっかり怪我に負けない身体や精神を鍛え上げて、日本のデフの陸上選手たちと最高のリレーメンバーを作りたいと思います。個人種目ではライバルに勝つつもりで練習を取り組みます。自分はまだ大学生なので東北インカレや日本インカレを目指しながら過去の悔いを将来に活かしたいと思います。これまでほとんどの大会を棄権したことは本当に申し訳ありませんが、心配していただいた選手の皆さん、応援してください。皆さん、心から感謝します。ありがとうございました。スターティングブロックに問題はあります。室内トラックはありますが、バトン合わせ練習が必要なのでサブトラックを用意してほしいです。時差ボケのことを考えると大会の1週間前に目的地に着国した方が選手にとって助けになると思います。難しいかもしれませんが、オリンピックやパラリンピックのように選手村があればデフアスリートにとって他国のアスリートとの交流が深まると思います。

選手 堰本 将平

200mと4×100mRに出場しました。200mでは2次予選まで進出し、4×100mRでは決勝で6位入賞という結果でした。200mは1次予選を通過することが目標だったので、達成できたことが嬉しかったです。4×100mRでは4年前のリベンジをする思いで、メダル獲得を目標としましたが、夢が叶えられずとても悔しいです。リレーでは予選、決勝とアンカーを務

めさせていただきました。6人のリレーメンバーとの意志、バトンを受け取ってフィニッシュすること、記録更新をし、メダルに近づけられるように力を合わせることを考えました。リレーメンバーとして共に戦えたことに感謝しています。これで終わりではなく、まだまだやっていきたいです。日本の強さはこんなものではないということを強く示したいです。今回で2回目の出場となりますが、世界にもっと証明できるように4年後に向けて一からスタートして磨きをかけ、メダル獲得、日本国民のデフリンピック認知率を高められるようにしていきたいと思っています。今後のデフ陸上が発展、レベル向上を目指すためには、認知度を上げ、理解や支援がかなり必要だと考えます。また、スポンサーを得て、陸上生活ができること、職業と両立できる環境に近い将来にできれば、私たちデフ陸上の歴史も衰えることなく、夢、未来、希望、デフリンピックのモットーに基づき、栄えることは間違いないと信じています。そのためにもみんなと共に戦い、協力し合い、更なる日本の実力、本当の力を見せつけられるように頑張っていきたいです。

最後に、デフリンピックに出場された日本代表選手団の皆様、スタッフ、トレーナー、旅行会社様、お疲れ様でした。本当にありがとうございました。

選手 岡部 祐介

・男子400m予選 51秒34 4着、準決勝50秒80 5着
・男子4×400mR 1次予選 3分24秒74 3着
2次予選 3分22秒74 6位入賞

私の目標は400m決勝に残ること、リレーでメダルを取ることだったのですが、残念ながら達成できませんでした。50秒台を出せたことは嬉しかったです。去年行われたカナダ世界選手権よりデフリンピックの方が、はるかにレベルが高く驚きました。強豪チーム（ロシア、ウクライナ、アメリカ）とのレベルの差を感じ、私たちはまだまだ力不足だと分かりました。でも、チーム全員で力を合わせて全力を出し切り、楽しんで走れたことは、本当に嬉しかったです。4×400mRの日本記録(3分22秒47)にもあと一歩でした。4年後のデフリンピックを目指していますが、まずは2年後のアジア大会、3年後の世界選手権、そして4年後のデフリンピックとステップアップしていきたいと考えています。さらにデフリンピックの知名度を高め、強い日本代表選手になりたいです。皆様の応援が私を後押ししてくれ、今回の経験は大きな宝物になったと思いました。

もし可能であれば、デフリンピックが始まる前に、日本代表の選手団の顔合わせをしてもらえると、何かある時に困らないと思っています。そしてやはり専門的なコーチが必要です。日本が世界に勝つために不可欠であると思われます。

選手 水野 史生

・400m 予選：50秒83、準決勝：50秒64 (PB)
・4×100mR (1走) 予選：42秒78 (日本ろう新記録)
決勝：43秒08・第5位
・4x400mR (1走) 予選：3分24秒74
決勝：3分22秒74 第6位

前大会の台北デフリンピックは自身の怪我による日本代表辞退をしましたので、今回は自分自身にとって初めてのデフリンピックです。台北の悔しさを晴らすためにしっかり準備をして

挑みました。しかし、世界のレベルは前大会とは比較にならないほど記録が大幅に向上しており、予選から厳しい戦いとなりました。400m では予選でセカンドベストを出し、準決勝は自己ベストを叩きだしました。4 × 100mR は第 5 位、4x400mR は第 6 位でした。個人としての評価は上出来でしたが、日本代表としては不甲斐ない結果となりました。私は今大会で陸上競技の引退を考えていましたが、ブルガリアデフリンピックに出場して惨敗したものの、私の中では次のデフリンピックに向けてのビジョンができました。今後、更なる飛躍を求めるには今大会の結果にとらわれずに「世界のトップ選手は今大会よりも更なる記録を目指している」という認識をしなければならないと考えています。トップ選手は常に頂を見つめており、追いかける立場である私は世界のトップに追いつくだけでは勝利を手にはできません。追い抜く勢いで挑戦をしなければいけないと思います。現段階では予選を通過するだけで一苦労ですが、4 年後は私が表彰台上に上り、日の丸の旗を掲げ、メダルを手持って日本に帰る姿を想像しています。それは厳しく険しいものであり、年齢的にも身体との対話が必要な日々が続くと思いますが、コンディションをしっかりと整えつつ、日々練習に励み、次のデフリンピックはろうあ連盟、日本聴覚障害者陸上競技協会、日本国民の期待に応えられる結果を残していきたいです。監督、スタッフ、日本から応援していただいた皆さま、最後まで応援をしていただき本当にありがとうございました。

選手 羽柴 大典

- ・ 400m 予選 51 秒 59、準決勝 51 秒 74 準決勝敗退
- ・ 4 × 400m リレー (3 走) 準決勝 2 分 24 秒 74
決勝 2 分 22 秒 74 6 位入賞

小さい時から夢だったデフリンピックという大きい舞台で走れて、言葉に表せないくらい気持ちがよかったです。しかし、400m 走で決勝進出、4 × 400m リレーでメダル獲得という目標を達成できず、悔しさが残りました。

ソフィアへ出発する前に、私は初の海外なので、食生活、環境の面ですごく不安がありました。過去、デフリンピック、世界大会を経験している選手に色々質問し、しっかり準備を備えることができたおかげで、デフリンピックの期間は、食生活、環境の面では困らず、安心して競技に集中することができました。その結果、400m 走の予選では、自己ベストに近いタイムで走ることができました。準決勝では敗退しましたが、400m 走で決勝進出するには、最低でも 48 秒前半台は走らなければならないということが分かりました。4 × 400m リレーでは、皆と心をつなげて取り組みました。デフリンピック前のいくつかの合宿で、皆と一緒に走り、チームワークを深めました。そうした中で皆と一緒にメダルを獲りたい、日本ろうあ記録を破りたいという気持ちが強くなりました。日本ろうあ記録まであと 0.3 秒、6 位入賞という結果でした。個人記録としてはよかったのですが、世界の壁は本当に厚く、とても悔しかったです。今回のデフリンピックは、400m 走で決勝進出、4 × 400m リレーでメダル獲得できるように、これからの 4 年間で技術、パワー、スピード等を身につけます。

最後に、いつも支えてくれた三枝監督、安井コーチ、内海トレーナー、東口トレーナー、正垣マネージャー、下防会長、他選手の皆様、本当にありがとうございました。

選手 北田 明広

ソフィアデフリンピックに 800m と 4 × 400m リレーの代表として出場しましたが、結果だけでいうと最悪の結果となりました。

800m では前回のデフリンピックで決勝に進めなかったという悔しさがあり、そのリベンジのためにこの 4 年間練習してきました。昨年は自己ベストも出し、調子は悪くありませんでした。しかし準決勝でドイツ選手との接触、投擲の選手の乱入というアクシデント続きで自分の走りができず、今回も準決勝敗退となってしまいました。

4 × 400m リレーも前回あと一步のところでメダルを逃したので、メンバー丸となってメダル獲得を目指してきました。今年に入ってからメンバーの自己ベスト続出もあり、メダルも視野に入ってきたので、個人種目よりも気合を入れていました。しかし 800m の接触の際にふくらはぎを痛めてしまい、出場することさえできませんでした。どんなアクシデントがあってもそれを乗り越える力が自分にはなかったと痛感しました。また 800m も 4 × 400m リレーも自分の力を出し切ることができないまま終わってしまい、応援してくれた方々には申し訳ない気持ちでいっぱいでした。

しかしデフリンピックで最後までメンバーと一緒に戦ったことは、自分の人生の糧となりました。これまで 2 回のデフリンピックを経験し、自分は本当に幸せだと思います。今の僕にできることは、次世代の人やデフリンピックを知らない人達に自分が経験してきたことを話していき、デフリンピックの知名度を高めていきたいと思っています。

最後に応援してくれた人に改めてありがとうと言いたいです。

選手 高田 裕士

- ・ 400m ハードル
予選 55 秒 99 4 着 (日本ろう新記録)
決勝 57 秒 47 決勝 7 位入賞
※デフリンピック男子 400m ハードル日本史上初ファイナリスト & 入賞
- ・ 4 × 400m リレー
予選 3 分 24 秒 46 位
決勝 3 分 22 秒 74 6 位入賞 (日本ろう歴代 2 位記録)

これまでの専門種目である 400m から 400m ハードルへ転向して出場する初の国際大会でしたが、上記結果の通り、目標としていたメダル獲得を達成できず、悔しい結果に終わりました。400m ハードルに関しては、決勝進出者の中で一番ハードリング技術が低いため走力でカバーしていました。優勝したロシアの選手とは技術・走力共に差が大きいのですが、2 位以降の選手とは走力の差があまりないので、走力向上と更なるハードリング技術の向上を目指して取り組んでいきます。4 × 400m リレーに関しては、日本ろう歴代 2 位記録を樹立したにも関わらず 6 位入賞にとどまりました。どの種目も過去の国際大会結果が参考にならないほど、全体の競技レベルが上がっており、今後 4 年間、自分が強くなりすぎるくらいに強くないと勝てないと痛感しました。自己負担にも関わらず、日本代表選手のサポートをしてくださった日本ろう陸上競技協会役員、スタッフ、トレーナーの方々に心より感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

デフリンピックの知名度が数%程度にとどまる日本の現状を変えるべく、ろうあ連盟主催の普及活動をより積極的にかつ定

期的に実施してってほしいです。

また、派遣費用自己負担額の割合については、

- ①メダルが獲得可能なレベルにある者は自己負担なし
- ②8位入賞以上のレベルの者は半額自己負担
- ③入賞が厳しいレベルの者は全額自己負担

など、制度を整えるべきではないでしょうか。入賞可能な水準にある団体競技及び選手を中心に派遣を行うべきだと思います。メダル獲得数一位のロシアにおいては、メダル獲得が困難な競技にはあまりお金をかけず、大量のメダル獲得が可能な競技にはとてつもないお金をかけて強化に取り組んでいるとのことでした。日本においても同様に優遇する制度作りは重要です。

応援して下さいましたすべての方々に心より感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

選手 森本 真敏

男子ハンマー投げ 58m20cm 2位

台湾大会に続き2度目の出場で、2連覇がかかっていましたが、凡記録で終わりました。すべてのコンディションが揃って挑むことができたわけではありません。中でも60mを超えておけば優勝できるだろうという予想していたロシアの選手は62mでした。デフで2人目の60mスロワーで、昨年の世界選手権から7mも伸ばしてきました。デフで60mを超えるのは難しいことではないことが証明されました。今後も厳しい戦いが続きます。次回のデフリンピックは今のままでは戦えません。世界選手権には出場せず、デフリンピックに絞り込む選手もいます。メダル獲得＝生活というものがはっきりと映し出されています。その中で日本はどう戦っていくかが課題であり、早急解決できるよう日本の組織を動かなければなりません。

この4年間支えてくれたスタッフ、役員に感謝を申し上げます。ありがとうございました。

もう少しホテルの衛生面での管理やホテルの選択をしっかり見極め判断してほしいです。選手にとって重要な休息場所です。デファスリートにとって必要となる動きをお願い致します。

選手 石田 考正

今回はハンマー投げ選手として出場しました。4位(54m30)という結果に終わりました。悔しさでいっぱいというのが正直な感想です。でも、今持っている力を精一杯出し切れたと思います。

今回の大会は、とてもレベルが高かったです。自分の実力が足りず、悔しかったです。特にロシア選手が驚くような記録が連発しており、圧倒的に負けました。更にステップアップし、金メダルを取れるよう実力を高めなければならないと思いました。応援して下さいました皆様、期待に応えられなくて申し訳ありません。そして、熱い声援をいただき、本当にありがとうございました。私たちの闘いはまだ終わっていません。これからも温かく見守ってくれたら嬉しいです。共に頑張っていきたいです。よろしくお願いいたします。

ろうあ連盟、陸上競技協会、私達のために色々な準備をしてくれてありがとうございます。お陰様で貴重な経験をさせていただきました。メダル獲得はできませんでしたが、皆様の協力があったからこそ、ここまで戦えたと思っています。感謝しています。ありがとうございます。今回のホテルの規則が厳しく、ホテル内で調理ができないため、健康管理を考えた食事が取れ

ず、体調不良になり、不満に思う選手が何人かいました。もう少し優しい環境を作っていただければ嬉しかったです。海外での体調調整は難しいので、余裕を持って早めに現地入りできれば良かったと思います。

メダルの数をアップする為には、選手の力だけでは足りないもので、ろうあ連盟や陸上協会の力も不可欠だと思っています。4年後のデフリンピックでは他国を驚かせて、最強の日本を見せましょう。これから色々とお世話になりますが、よろしくお願いいたします。最後に、今回のデフリンピックは本当にお疲れ様でした。そして、様々なサポートしていただき、ありがとうございました。

選手 佐藤 将光

・やり投げ

予選 54m 10位(予選通過)

決勝 56m 7位

一言で言えば悔しい気持ちでいっぱいです。

今回で世界レベルの大会への出場は4回目となりますが、試合に臨む態勢としては今までの中で最も悪い状況となっており、反省することばかりでした。

1点目は、ベストコンディションで現地入りすることができなかったことです。4月に出場した大会で肘を負傷してしまい、デフリンピックまでに状態が回復するよう練習や調整をしてきたつもりでしたが間に合わず、完治しないままデフリンピックに参加しました。日本の代表選手に選ばれたということを実感し、まずは故障しないような調整を行うべきだったと思います。故障したまま現地入りをするようなことは二度とないようにしたいと痛感しました。

2点目は、冷静な状態で決勝に臨めなかったことです。予選では上位8名が決勝に進出できます。予選が終わった時点で、自分の記録が7位であることを確認し、自分の肘の状態と相談しながら決勝に向けて調整を行ってまいりました。しかし、審判から呼ばれることはなく「予選落ち」と宣告され、動揺してしまいました。再度記録を確認したら間違いなく7位であったので、審判に「記録を見てほしい」と伝えましたが全く取り合ってもらえませんでした。このことに対して冷静さを失ってしまい、審判に抗議したところ、審判のミスとの判断がなされ、決勝に残ることはできませんでしたが、集中できないまま決勝に進み、3投すべて投げ切ってしまいました。国内外で大会経験を積んできましたが、ここぞという時に冷静さを失ってしまっは、自分の投てきができないということを今回の大会で痛感しました。どんな時でも自分らしい投てきができるよう、より一層メンタルの強化を図る必要があると感じました。4年に1度のデフリンピックに合わせて心と体を作るには、日々の生活が大切です。今回のデフリンピックの反省をもとに、一から鍛え直したいと考えています。

今回のデフリンピックは前回と違い、大会の規模や運営方法が国内の一般大会のようなイメージだったので、残念に思います。「4年に1度のこの大会に、必ず出場してみせる」という選手のモチベーションをより一層高められるような大会であることが大切だと思います。

また、日本代表の選考についても、本番3ヶ月前では準備や調整など大変なことも多いので、できれば半年～1年前に内定してほしいです。大会への予算や、選手一人ひとりの負担額が直前まで決定しないのは選手やその家族にとって大きな不安要素です。

選手 佐藤 賢太

初めてデフリンピックに出場し、いろいろとありましたが選手それぞれが戦意を持って今までの4年間の練習や大会の成果を出そうという強い気持ちが伝わってきました。

自分もベストを尽くしたい気持ちでしたが、初海外で体調を崩してしまい、ベストコンディションではない状態でのやり投げとなり、予選は6位、決勝では9位という無惨な結果となりました。

しかし今回デフリンピックに出場して、海外の選手達と交流し、絆を深め合えた大会でした。

本当に日本ろう選手達一人ひとりが懸命に頑張ったと思います。この悔しい想いは次のデフリンピックでリベンジしようと気持ちを変え頑張りたいと思います。ありがとうございました。

選手 竹花 康太郎

・男子棒高跳び 4m60（自己ベストタイ記録）3位

総論から言うとりベンジを果たすことができずきりました。前回のデフリンピックで悔しい思いをしてから4年間、リベンジを果たそうという気持ちが私のモチベーションを高めてくれました。仕事と両立しながら、時間をうまく見つけて、集中して練習に取り組む日々が続きました。やれることは全てやったつもりでしたが、記録は前回のデフリンピックから伸びたわけではありませんでした。今回メダル獲得ができたのはアベレージが伸びたこと、前回デフリンピックでの経験が活きたことの2点です。今シーズン、記録が伸びずに悩んでいた時に、コーチから「安定した跳躍を目指すことがメダル獲得につながる。さらに記録が伸びればよし」とアドバイスをいただき、今回は安定した跳躍で勝負することができました。

今大会1番の目標にしていたことは、「師弟そろっての金メダル獲得」です。女子棒高跳に私の教え子が出場しましたが惜しくも2位、私が3位だったので最大の目標は達成できませんでした。「師弟そろってのメダル獲得」は達成できたので、競技が終わった瞬間は嬉しい気持ちと安堵感がいっぱいでした。

私を応援し、支えてくれた家族、練習パートナー、横須賀市立聾学校、その他の皆様に感謝しています。これからは皆様のために尽力したいと思います。

メダル獲得射程内でも、経済的状況により辞退する選手も何人かいたので、もう少し補償サービスを設けるべきだと思います。

選手 前島 博之

・走幅跳 6m99cm（今季ベスト）7位入賞

・走高跳 1m99cm（今季ベスト）4位入賞

ブルガリアの皆様、そして日本代表を支えてくださった関係者の皆様、応援してくださった皆様、ありがとうございました。

私は、デフリンピックに出場できたことを嬉しく思っています。世界大会4回目の出場になりますが、これまでの経験上落ち着いて試合に臨むことができたと思います。過去の大会では惜しいところで終わってしまい悔しい気持ちが強かったのですが、その悔しい気持ちがあったからこそここまで頑張ってきたと思っています。

今大会では走幅跳と走高跳の2種目に出場しました。走幅跳の決勝では12人中6番目の跳順、ぎりぎりベスト8に残り、

冷や汗をかきました。決勝では落ち着いて1本1本に集中し、5回目に今季自己ベストの6m99cmを跳びましたが、6位の選手が7m13cmを跳び、世界の壁を感じました。

頭を切り替えて翌日の走高跳もメダルを狙いました。2m05以上を跳ばないとメダルは取れないと想定し、目標を高く持ちました。1m90を一発でクリアした時は良かったのですが、1m93を1回失敗したことで慎重になりすぎ、2回目ではパニックになっていました。バーを激しく揺らしながらも辛うじて成功させ、その後は1m99まで成功することができました。特に1m99は順位でもかなり有効となる一発クリアを果たしました。2m02は残念ながら失敗しました。ロシアの選手が2m02を失敗するのを祈っていましたが、成功した瞬間、自分のメダル資格が消えました。あの時の悔しい気持ちは一生忘れられないと思います。

しかしベストは尽くしました。今大会が今までで最高の成績です。それを残すことができて満足しています。陸上競技の中でも跳躍ブロックは全員入賞と団結し、お互い支え合うことができました。

選手 中村 晃大

私は走幅跳・三段跳の2種目に出場させていただきました。2度目の日本代表です。今回は現地まで行って大会中止となったスロバキア・ハイタラス冬季デフリンピックです。事実上夏、冬のデフリンピック日本代表に選考されたことをとても嬉しく思います。

三段跳びの結果としては自己ベストには及びませんでした。13m74の6位入賞とまずまずのスタートが切れました。

翌日は走幅跳の予選があり、2本目の6m53で予選を通過し、決勝日を迎えました。試合には、メダル獲得という強い気持ちで臨みました。2本目で6m88と5位の記録を出し、最終競技残り3本に残ることができました。ここから最後の追い上げとして、とにかく集中して全力を出しました。最高記録は5本目の6m95、6本目は力みすぎてファールとなってしまいました。8位入賞と私としては申し訳なさとし悔しい気持ちでいっぱいです。6m95は自己ベストであり、世界的舞台で自己ベストを出せたことはうれしいですが、やはり悔しいです。

現状を知ることができましたので、また4年後も挑戦し、次は悔しい気持ちをしないよう今から更にトレーニングに励みたいと思いました。

2年後のロシア冬季デフリンピックでアルペンスキーとして表彰台を狙うため、既にトレーニングを再開しております。必ず表彰台でメダルを取ること、そして今回の悔しさ、前大会中止の悔しさをリベンジしたいと思います。

今回は派遣していただき、誠にありがとうございました。また冬季デフリンピックでよろしくお願い致します。

選手 高橋 渚

・女子やり投 43m20cm 4位（12人中）

台北デフリンピックに続き二回目の出場でした。二度のチャンスを与えてもらえたのは、皆様のおかげであり、感謝の気持ちでいっぱいです。私は、金メダル獲得、世界ろう記録を破ることが目標でしたが、有言実行できませんでした。途中までは3位でしたが、最後の6投目に4位のオーストラリア選手に

逆転され、メダルを逃し、とても悔しかったです。練習中調子が悪くなり、伸び悩んだ時期もありましたが、皆様の支えがあったからこそ、デフリンピックで良い投げを見せることができたのと、自分自身に納得できる投げをできたことが、とても嬉しかったです。やり投を続けて良かったと改めて思いました。悔しい気持ちと嬉しい気持ちが混ざっていますが、四年後に出場できるチャンスがあれば、リベンジし大幅の差で勝ちたいです。応援していただき、本当にありがとうございました。陸上競技のレベルが台北デフリンピックよりもレベルが高くなっていましたが、今回のデフリンピックは、さらに高くなると予想しています。デフリンピックに出場する夢を持っている皆には、大きな目標に向かって頑張ってほしいと伝えたいと思います。

陸上競技で使用する槍を飛行機の中に持参できるのか、1年前から飛行機会社と対応していただければ、当日スムーズに進められ、助かります。またホテルの部屋については、各競技が固まったフロアにしてほしかったです。

私たちのために、サポートしていただきありがとうございました。特にタクシーの手配です。通訳ガイドがいたからこそ、スムーズにできました。今後も同じようにたくさん的人数で参加できたら良いと思います。

選手 佐藤 麻梨乃

女子棒高跳に出場し、3m00で2位になりました。

また、今回の記録は、自己ベストを20cm更新、そして世界ろうジュニア記録を更新しました。

海外に行くことが初めてだったので、準備すべきことが何かわからず、戸惑うこともありましたが、周囲の助けを得ながら無事に大会に参加することができました。

「デフリンピックで世界ろう記録を更新し、優勝する」ことが私の目標であり、達成できなかったことは大変悔しく思いますが、世界大会という大舞台で自己ベスト、世界ろうジュニア記録を更新できたことは嬉しく思います。

また、達成できなかった要因、課題を見つけることができ、今後の記録の向上に繋がると思います。

そして今回達成できなかった目標は4年後にリベンジして達成するという強い決意をするきっかけとなりました。

試合以外では、他国の選手と交流をすることができ、ブルガリアでの10日間はとても充実していました。簡単な挨拶や自己紹介程度の国際手話はできますが、会話となると、通じない、分からないことがほとんどで、もっと国際手話を学ぶ必要があると反省しました。試合以外の会話もできたら、情報交換もでき、もっと楽しく充実した日々を送ることができたと思います。

改善点としては、前日練習、試合の際に助走距離を測るメジャーがなく、困りました。前日練習のときにマット側から走って調整し、合わせることができたので、試合本番はほぼ問題なく跳ぶことができましたが、やはり、助走をずらすときのひとつの目安としてメジャーは必要だと思いました。

デフリンピック期間、私自身は団体行動、チームで協力し合うことができました。特に大きな問題もなく無事に大会に臨めたこと、日本に帰ってくることができたことに感謝しています。

たくさんの応援、支援をしてくださった方々をはじめ、現地でサポートしてくださったマネージャー、トレーナー、監督、選手の皆様に感謝しています。ありがとうございました。

1. 選手の選考について

全日本ろうあ連盟が今回のデフリンピックに掲げた選考基準は「2009年以降アジア選手権でベスト2以上、世界選手権でベスト8以上の成績を収めた選手」でした。この基準にならうと、対象は女子選手2名となり、出場可能な種目は女子シングルス及び女子ダブルスのみになってしまうため、男子選手の出場を認めてもらおうと全日本ろうあ連盟に何度か訴えましたが、要望は通らず、出場したのは女子2名のみでした。

このような経緯もあり、2012年11月に行われた北海道での選考会から、2013年1月の2次選考会、4月の最終選考会とデフリンピック最終エントリーの締め切り間近まで選考が難航しました。初めは女子ダブルスで世界選手権二連覇を果たし、選考基準を満たしていた2名の選手を第一候補に挙げていたが、大躍進を続けているもう2名の選手が最終選考にてトップの成績を収めたため、役員間で再協議を余儀なくされました。世界選手権二連覇という経験値を優先したいという声も強かったのですが、その選手を倒したという実績を買い、最終的には初出場の品田選手を含む女子2名の選手を選考しました。

2. 試合結果

☆女子シングルス

(予選リーグ)

品田千紘 1勝1敗 決勝トーナメント進出

別所睦月 1勝2敗 予選リーグ敗退

(決勝トーナメント)

品田千紘 決勝トーナメント2回戦敗退 ベスト16

☆女子ダブルス

品田千紘&別所睦月

予選リーグ3勝0敗 決勝トーナメント進出→

3、4位戦→ベスト4

3. 成績と評価

☆女子シングルス

①品田千紘選手

今大会がデフリンピック初出場となりましたが、女子シングルスベスト16、女子ダブルスベスト4とまずまずの成績を残しました。

アジアデフバドミントン選手権大会、第7回アジア太平洋ろう者競技大会と2度の国際大会の経験を生かして臨みましたが、初めての世界大会は相当の重圧があったようで、大会全体の雰囲気にもまれてしまった場面がいくつかありました。

シングルの試合では予選リーグで第2シード選手を相手に粘り強いプレーで果敢に攻めましたが、終盤で経験の差が出てしまい、惜しいところで落としてしまいました。決勝トーナメントでは、1回戦を突破し、2回戦に臨みましたが、台湾選手のミスのないプレーに対し自分のミスによる自滅プレーが目立ち、得意のスマッシュが生かされなかったのが惜しかったです。

②別所睦月選手

現在日本ろう者バドミントン女子ランキングトップの選手です。台北デフリンピックに引き続き2度目の出場でしたが、デフリンピック出場後、アジアデフバドミントン選手権大会及び第7回アジア太平洋ろう者競技大会には出場していません。そ

の影響で、台北デフリンピックで獲得した世界バドミントン女子ランキングによるシード権を消失してしまい、ノーシードでの出場となりました。

そのため、女子シングルス予選リーグでは第7シード選手のオーストリア選手、著しい成長を続けている台湾の若手選手と当たり、どちらも攻め苦しみました。オーストリア選手は別所選手より二回りも大きい体格でゲーム前から相手を圧倒しており、パワーで押しつぶされたような展開となりました。台湾選手は若いということもあり、勝機はたくさんあったものの自分のプレミスによる自滅が多く、接戦を制することができませんでした。

予選リーグ敗退と本意な結果を招いてしまいました。

☆女子ダブルス

品田選手と別所選手がダブルスを組んでから日が浅く練習も満足にできないまま、試合に臨んだため、2名の戦略やローテーションがまだまだ未完成の状態でした。また、デフリンピック期間中、長い時間をかけ、お互いがコミュニケーションを取りながら、平常心を保つようメンタルコントロールを心掛けていたのですが、本番になって発揮できませんでした。

準決勝戦、3位決定戦ともに、相手のペースに呑み込まれてしまい、リズムを崩し自分のペースに取り込むことが終始できませんでした。劣勢状態から、どう立て直していくのか、メンタル部分がまだ弱く、練習不足がプレーに出てしまったことが悔やまれます。

今回のデフリンピック経験を通し世界レベルを肌で感じたと思いますので、今後の更なる飛躍を期待します。

バドミントンTDから指摘がありましたが、アジア選手権、世界選手権に出場することで、ランキングポイントを重ねることによって上位に進むことができるということでした。

アジア選手権・世界選手権出場こそデフリンピックでのメダル獲得の鍵になるのだと実感させられました。

4. チーム体制と各コーチの役割

派遣人員制限の都合で、監督及びコーチは同行せず、スタッフとして阿部1名のみ同行しました。

私が唯一のスタッフでしたが、デフリンピック直前に持病が悪化してしまい参加辞退も考えましたが、治療を続けながらの同行となりました。ただ、やはり体調が万全ではなかったため、選手及び役員やボランティアの皆様にも過大な迷惑をかけてしまいました。

監督もコーチもいない状態で、選手たちが満足なサポートを受けられなかったことに対し、大変申し訳ないことをしました。

5. 競技スケジュール（旅行スケジュール）

7月24日	成田空港出発、ソフィア空港到着
7月25日	公開練習
7月26日	公開練習及びTD会議
7月27日	シングルス及びダブルス予選リーグ
7月28日	シングルス及びダブルス予選リーグ
7月29日	シングルス及びダブルス予選リーグ
7月30日	シングルス及びダブルス決勝トーナメント
7月31日	シングルス及びダブルス決勝トーナメント
8月1日	シングルス・ダブルス準決勝
8月2日	決勝・3位決定戦・表彰式
8月3日	自由行動（女子バレー決勝戦応援）
8月4日	ソフィア空港出発
8月5日	成田空港到着・解散

6. 大会の競技運営などの報告

☆会場について

会場名：Hristo Botev Hall, Sofia, Bulgaria

当初予定していた会場が、デフリンピック開催直前になって変更したと現地より連絡がありました。そのため、せっかく選手団長及びスタッフが事前現地視察で集めた会場及び会場周辺の情報が無駄になってしまいました。

しかし、TDによると、当初予定していた会場は設備が古く大会運営に支障をきたす恐れがあるため、本部と交渉して現会場に変更したとのこと。コンサート会場によく使われているようで会場全体が明るく清潔な印象を持ちました。会場設備や照明については、国際大会基準を満たしており、コンパクトな設置ではありましたが、選手達は競技に集中できたと思います。

☆TD会議について

競技開始前日にNational Sports Academyにて行われました。複数の競技と同会場で行うため、1競技につき1時間程度の割り当てとなりました。そのため速いペースの進行となり、参加国によるエントリー選手の確認の段階で時間切れとなってしまいました。もっとも重要な各種目の組み合わせ抽選は本部のみで行うことになり、その結果を各国選手が宿泊しているホテルへ通知する流れとなりました。各国からは監督やコーチ、国際手話通訳など複数の参加がほとんどで、単独での参加は日本のみのようでした。

☆選手の輸送

競技会場は会場変更で遠くなってしまいましたが、日本選手団にとっては宿泊先からタクシーで20～30分の距離でした。当初は実行委員会が用意した輸送バスを利用する予定でしたが、交通事情が不安定なため、日本選手団が用意した専用車（ワゴン）を利用しました。そのおかげで競技期間中は選手自身が安定した状態で競技に臨むことができ、日本選手団の努力に感謝します。

7. 競技規則の適用（問題点など）

☆競技ウェアについて

デフリンピック以前から本部からメールで周知徹底したおかげもあり、競技ウェアについては特に問題はなかったと思いますが、細かい問題点がありました。

競技時に対戦相手同士が同色のウェアを着用してはならないというルールがあります。日本は全て黒を基調としていますが、他国はそれぞれ別色のラインや違う模様が入ったチームウェアを用意していました。

しかし、ラインの色や模様は違うが、黒を基調としたチームウェアの相手とぶつかった場面があり、審判から注意を受けました。黒以外のチームウェアを用意していなかったため、相手国に白を基調としたチームウェアに着替えてもらったという経緯があり、チームウェアについては反対色をそれぞれ用意する必要があると反省しました。

8. 大会参加までの準備状況

☆合宿について

選手の参加枠が女子2名のみだったため、大会3ヶ月前まで選考会が続いた影響で、合宿等の準備が満足にできませんでした。

4月の最終選考会では、東京都社会人トップ選手4名対選考対象選手全員という形で、オール組み合わせによる実戦を行いました。社会人選手より、各選手の良い点や悪い点を指摘してもらいました。

5月に北海道にて3泊4日の強化合宿を行いました。札幌デ

フバドミントンクラブの協力で北海道トップ選手数名を迎え、ダブルスやシングルスの実戦による練習を集中的に行い、戦略等アドバイスを受けていました。別所選手がダブルスプレー中、左足踵の捻挫というアクシデントもありましたが、待機していたトレーナーによる応急手当が功を奏し、大事に至らずに済みました。もしその場にトレーナーがいなかったら、デフリンピックに万全の状態で臨めなかったと思うと感謝の気持ちでいっぱいです。

7月に東京都内でトップレベルのオープン戦に出場、オープン戦優勝ペアと当たり、フルセットの上に惨敗しました。選手達はどのように接戦を制するかを学んだようです。

最終宿宿は千葉商科大学バドミントン部の協力で、大学生部員との合同練習を行いました。様々なタイプの大学選手とダブルス実戦を行い、大学生選手から戦略などアドバイスを受けました。デフリンピック直前の合宿を設定するにあたり、難航していたが元デフリンピック選手の協力のおかげで実施できたことに感謝しています。

☆資金について

日本ろう者バドミントン協会及び札幌デフバドミントンクラブから援助を受けましたが、それでも足りないため選手達とスタッフに一部自己負担をお願いしました。

資金集めについては、協会の組織全体での協力が得られなかったため、なかなか集めることができませんでした。

☆食糧調達について

デフリンピック期間中は、三食全てホテルで用意してもらうと事前情報を得ていましたが、どのような内容が分からなかったため、念のためスタッフが非常食用の白米を用意しました。ホテルの食事が選手達の口に合わないのか、ほとんど手付かずの状態でしたので、持ち込んだ非常食用白米を摂取しましたが、3日分しか用意していなかったため、すぐに底をついてしまいました。日が経つにつれ、スタミナ面で体力が落ちていくため、心配になりましたが、競技終盤に日本から応援に駆け付けた方からおにぎり等の提供があり、スタミナ回復につながりました。

9. 反省・まとめなど

今回のデフリンピックは、派遣条件が厳しく女子選手2名とスタッフ1名というわずかな人数体制であり、不完全な状態で臨んだことが悔やまれます。

監督の不在については選手自身が全てのコントロールをすることを意味しています。他国の参加状況を見ると、参加選手が1名であっても監督・スタッフが2名以上ついていた国が多く、コート内に監督コーチ席がありますが、ダブルスで空席になっている国は日本だけでした。

いくら予算の都合上といっても、スタッフ1名のみとはデフリンピック競技に対して厳しすぎたように感じます。そのスタッフが体調を崩した場合、対応が難しくなってしまいます。もう少し、日本ろう者バドミントン協会内で、スタッフ体制について協議すればよかったと思います。また、初出場1名を含む2名の選手体制を決めた経緯についても、もっと慎重に検討したほうがよかったかもしれません。

全額自己負担でも参加可能という条件を認め、世界ランキング1位ペアを追加参加するべきでした。そうすれば、監督やコーチが不在でも、どちらかが代行をすることでコーチングすることも可能だったと思います。

現在、日本ろう者バドミントン協会はデフリンピックに向けて体制が整っていない状態なので、まずは体制の立て直しからスタートするしかありません。

最後に、万全な体制で臨めなかったバドミントン競技に対し、全面的なサポートをしてくださった、日本選手団役員の皆様やボランティアの皆様言葉に尽くせないほど感謝しています。本当にありがとうございました。

選手 別所 睦月

前大会に続き、2度目の出場となり、「今回こそはメダルを」と強い気持ちで望みましたが、ダブルス4位という結果となり、少し残念な気持ちです。私的に試合を振り返ってみるとプレーに関しては現在の練習体制から考えると、精いっぱい力を出し切れたのではないかと思います。

前大会の時は大学生だったということもあり、ほぼ毎日クラブで充実した練習を積むことができ、シングルスでも5位という結果を出せたかもしれません。しかし、今大会においては、私自身も社会人となり、学生時代のようにはいかず、少し不安もありましたが、そんな中ダブルス4位入賞には納得のいく結果となりました。

そして、国外の選手とのコミュニケーションから日本との違いについても多くを考えさせられました。強豪国においてはかなりしっかりとした練習体制ができており、指導者とともに着実に力を伸ばしてきている点など今の日本との差を強く感じました。

今大会においては試合中、ベンチには監督、コーチもいない状態でした。国外の選手には必ずコーチがついていて、韓国チームはホワイトボード持参で選手につきっきりで指導していました。コートの中で試合をしている本人では気付かない点などコート外からのサポートは絶対必要だと思います。

そんな中、日本から2名の先輩方が駆けつけてくださり、試合後に快くアドバイスやサポートをしていただけたことは本当に心強かったです。また、私達選手2名と共に一人同行していただいたスタッフも大変だったと思います。

このような状況の中、ダブルス4位入賞という結果を踏まえ、さらに練習体制、指導面などの強化を図ることができれば、もっと上を狙えるのではないかと確信しました。私達選手からももっと声を上げていかなければいけないのだとの思いを強く持ちました。7年後のオリンピック、パラリンピックの日本開催が決定した今、デフリンピックの知名度も上げていくチャンスだと思います。選手である私達の声をもっと反映させていきたいと強く願います。

選手 品田 千紘

シングルスベスト16、ダブルス4位と、メダルまで後一歩という結果に対し、メダルを目前に敗退したことがすごく悔しく、また応援して下さった多くの方にメダルを見せることができませんでした。しかし、パートナーと一緒に練習ができる限られた時間と、監督やコーチがいない状況の中で精一杯のことはできたと思います。

メダルを目前とした試合では私自身もパートナーも自分達のプレーを客観視することはできず、流れを変える余裕がありませんでした。もしそこで見てくれているコーチや監督の一言があったら流れを変えることができたのかもしれない、またどちらかの経験が豊富であればまた違う結果になっていたのかもしれないなど考えられる課題は多く残されているように感じました。

初めてのデフリンピックで世界の様子を見て、日本とは練習環境や練習回数が全然違うことを知りました。日本では一人ひとりが離れた場所で努力していますが、選手が集まったりダブルスのパートナーと練習したりする場が非常に少ないと感じました。また、他国では実績のある人がコーチや監督を務めていました。この2つの点を改善できれば、日本がメダルを多く取る可能性は十分にあると感じました。

4年後に向けて少しでも改善していけるように働きたいと思っています。それと同時に長い期間で数多くの試合をこなすための体力、どんな場面でもミスをしない力の二つを中心に自分自身のレベルをもっとあげていけるようこれからも努力していきたいと思っています。

バスケットボール競技男子チーム

ヘッドコーチ 坂本 知加良

1. 選手の選考について

アジア太平洋ろう者競技大会で2位という功績を残したことからアジア大会時のメンバーを基本としました。大会時に得点源であったセンターがアジア大会で引退したことから、センターの補強とカットイン能力のあるガード、フォワードを補強したいと考えました。その結果、経験のあるセンターを補強しましたが、諸事情により代表候補者から外れることとなり、ガードとフォワードを1名ずつ補強しました。全体のポジションやチームとしてのプレースタイルの相性などから選考をしました。

2. 成績及び評価

【予選リーグについて】

A グループ

スロベニア、アメリカ、ロシア、オーストラリア、ケニア

B グループ

台北、リトアニア、ギリシャ、アルゼンチン

C グループ

日本、ベネズエラ、ウクライナ、トルコ

《リーグ戦における試合結果》

日本対ベネズエラ	74-108
ウクライナ対日本	101- 48
日本対トルコ	78- 90

今大会の予選リーグは少し特殊な形となりました。出場国12チームで行うと決定されていたにもかかわらず、DIBFの受付時の確認ミスにより13チームの出場となりました。当初はAとBの2リーグで対戦する予定でしたが、ABCの3リーグに組み直し、Aは5、B・Cは4チームのリーグ戦となることがメールで通知され、7月24日のTD会議で各国の承認を受け決定しました。

抽選の結果、日本はCリーグとなりました。

1. Cグループ内で3位以上になること。
2. 3位以上のチームが計9チームとなるため、得失点差で8位以内に入ること。

以上が決勝リーグ進出の条件です。

日本は、予選リーグで3位以内に入り、得失点差で8位に入ることによって決勝リーグ進出を目標としていましたが、0勝3敗で

予選リーグ敗退という結果になりました。

目標は達成できませんでしたが、2、3試合目では新加入した若手の選手の活躍が目立ち、インサイドのセンターではなくアウトサイドのシューターを中心とするチーム編成により日本選手チームの世界との新しい戦い方を発見することができました。今後の日本のバスケの概念を見直す良い経験になりました。

3. チーム体制と各コーチの役割

【チーム体制】

ヘッドコーチ1名、アシストコーチ2名（内1名は兼マネージメント）、トレーナー1名

【各役割】

- ・ヘッドコーチ（健聴者）
練習内容の作成、技術指導、戦略、分析など
- ・アシストコーチ（ろう者）
選手起用、選手とのラポート業務など
- ・アシストコーチ兼マネージメント（健聴者）
事務作業、会計、スコア記入と分析、スカウティング、本部との連携業務など
- ・トレーナー（健聴者）
選手、スタッフの体調管理、テーピング、マッサージなど

すべてのスタッフが手話で話せるため選手とスタッフのコミュニケーションをスムーズに行うことができました。このことにより、選手が競技に集中でき、チーム運営がうまく進んだと考えています。

今後もしヘッドコーチが手話のできない健聴者であった場合は、バスケの知識を持つ有能な手話通訳者が必要であると考えます。

4. 競技スケジュールについて

7月22日	移動
7月23日	練習
7月24日	練習
7月25日	ベネズエラ戦
7月26日	閉会式、TD会議
7月27日	ウクライナ戦
7月28日	他国のスカウティング
7月29日	トルコ戦
7月30日	試合観戦
7月31日	決勝リーグ8位進出のアルゼンチンと交流試合
8月1日	試合観戦
8月2日	試合観戦
8月3日	試合観戦、TD会議
8月4日	閉会式
8月5日	日本大使館食事会
8月6日	移動
8月7日	帰国

5. 合宿について

2012年5月から2013年7月にかけて3度の合宿を行いました。その他にトライアウトを1度実施しました。なお、3度目の合宿は、出発直前の7月20、21日に行いました。合宿の交通費や宿泊費、食事などほぼすべて自己負担ということから、合宿回数を増やせないことが現状です。また、コーチ、スタッフも全てボランティアで行っています。

【合宿内容】

東京2回、福岡1回、大阪1回（トライアウト）

1年で3回（トライアウトを含め4回）という時間の限りがあるので、合宿では主に実践からの修正、確認を行いました。東京都内、福岡県内1位のクラブチーム、大阪や東京のBJリーグプロ選手、福岡1位の大学チームなどの協力を得て、試合後に相手チームの監督や選手から直接アドバイスをいただき、その点についてチームで確認、修正、練習を繰り返し行いました。

過去の世界大会で行ってきたオフェンスとディフェンスを新メンバーと確認し、新しくピックアンドロールに対するオフェンスとディフェンスを加えました。

トヨタアルバルクのガードでNBAの得点王であるケビンデュラント選手とアメリカの高校で共にプレーをしていた伊藤大司選手を中心にトヨタアルバルクの選手達にクリニックを開いていただき、ピックアンドロールを直接指導していただきました。ディフェンスについてはインサイドの得点力のある選手に対するダブルチームの方法を指導いただき、合宿で確認、修正を行いました。

福岡大学の小牟礼育夫元日本代表監督に、世界選手との戦い方や戦術を含め、マッチアップのさせ方や、フォーメーションを使うタイミングなどすぐに使える戦略を直接ご指導いただきました。

世界ではゾーンディフェンスが多く、その対策について練習を行いました。また、日本はインサイドが弱く、OF、DFリバウンドが取れないことから、失点が多くなる傾向があるので、スクリーンアウトとディフェンスのポジショニング、3線目のヘルプポジションについて確認を行いました。

6. 反省

【1試合目・対ベネズエラ】

ベネズエラの1-2-1-1のゾーンプレスに対して、ガードがうまく対応できず自らのTO（タイムアウト）も重なり、1Q（クォーター）で17-31と大きく離れてしまいました。2Qではボールをうまく運べるようになり、日本のオフェンスの流れも良く、25点を獲得することができましたが、ベネズエラのオフェンスもよく、ガードからセンターに対する合わせプレーにより、日本のディフェンスのローテーションが機能せず、なかなか点差が縮まらず前半42-57で終わりました。

3Qはディフェンスの修正が必要であることを指示し、ペネトレイトからの合わせに対するローテーションを強調しましたが、またベネズエラの1-2-1-1プレスにガードなどがTOを重ね、センターポジションのフラッシュやウィークサイド側の2線目をドリブル突破するよう指示しましたが、修正できず、さらに点差が開いてしまいました。結局その流れを止めることができないまま、74対108で敗退しました。1ゲームで計35回のTOした例は、今までの国内試合でもなく、プレスのディフェンスに対するチームとしての準備不足があったと考えます。また、コート外で見ているよりファウルに強いプレッシャーがコート内にあったと考えます。低身長でフィジカル面にも不安がある日本のガード陣で対応がしきれなかったと考えます。

ミーティングでは、大きく2つの反省点が挙げられました。

- ・TOを1人1回減らすことができているれば20点は抑えられたのではないかと
- ・リバウンドをベネズエラに48回、OR（オフィスリバウンド）は21回取られているが、チーム全体でスクリーンアウトを徹底し、センターのリバウンドを1人1〜2本増やすことができているれば5〜8本で10〜16点は抑えられたのではないかと

つまり、この2つの反省点を踏まえると、34点の失点のほとんどはTOとリバウンドだと言えます。日本はベネズエラの選手達の高い身体能力から、カットやブロックなど日本の選手がオフェンスに対して消極的になり、メンタル面においても差があったと感じています。ベネズエラのガード以外のほとんどの選手はダンクシュートができます。下位となっているケニアやオーストラリア、台北でもセンターはダンクシュートができる能力があります。しかし、日本のセンターにはそのような選手がいないため、センター陣の身体能力が他のどの国よりも低いという現実があります。

○相手国の練習環境について○

4年前からベネズエラはデフリンピックに参加するようになりました。ベネズエラの選手は皆同じ地域に移り住み、週に6回の練習をしているという情報を後から聞きました。結果的には、たった4年で絶対王者アメリカを下し、銀メダルを獲得しました。国の情勢としては世界一治安の悪い国と言われており、厳しい環境であるにも関わらず、デフバスケットボールの練習環境への取り組みは日本より進んでいると感じました。

【2試合目対ウクライナ】

ディフェンスはマンツーマンでしたが、能力、技術、スピードなど全てにおいて圧倒され、1Qから6-33とオフェンス、ディフェンスのどちらも全く機能しませんでした。特にインサイドのスタートメンバー2名が1試合中6本しかシュートしておらず、その内決まったのは1本のみ、センター陣からは5名で16本打ち込んだものの、入ったのは2本、そしてリバウンドについてもスタートメンバー2名が0本、センター陣でシュートを打ったのは6本でした。スターティングの司令塔ガードもシュート5本を打ったもののすべてTOだったので、数字から判断し、3Qからは3Pを打てるセンターとシュートの調子が良い選手を投入し、1-4のオフェンスに変更しました。するとオフェンスが機能し、前半では12得点だったのに対し、3Qのみで20得点獲得し、後半だけの点数では38-46と1桁の点差でした。センターがいないとリバウンドがとれないという今までの日本のバスケットの考え方ではなく、フォワードでもしっかり全員がスクリーンアウトをすることでリバウンドを取れるということがこの試合を通して分かりました。フォワードだけで15リバウンドをとることができました。ガードとアウトサイドのセンターを合わせるとチームで20リバウンドあり、しかもそのほとんどが後半によるものでした。

試合後に、チームとしてのセンターの役割を再度確認しなければならず、ミーティングで今後のチームの方向性について話し合いました。ガードやフォワードのみでチームを編成すべきなど一方的な意見も出ましたが、センター陣からもっと自分たちの意見を言うべきだ、ガード、フォワードも自分たちの反省すべきところを見直し、チームとしての戦い方そのものを修正する必要がある、やはりセンター陣がいないとチームとして1試合を勝ち抜くことはできないという結論となり、チームとしてコミュニケーションをとっていこうということで意見がまとまりました。

ウクライナのデフバスケットボールチームは皆公務員のような待遇で、同じ場所で働き、安定した雇用の中で毎日練習を行える環境があると聞きました。ウクライナはどのスポーツにおいても着実に力を付けており、様々な種目で多くのメダルを取っています。

また、ヨーロッパではデフバスケットチームが多く存在し、ヨーロッパリーグというものを設け、試合をしています。今回リトアニアがデフリンピック王者になったことから、ヨーロッ

パ内のバスケットに対するさらなるレベルの向上が予想されます。指導者や選手はヨーロッパと交流をして情報を入手していく必要があると思います。

【3試合目対トルコ戦】

①スターティングメンバーを前戦で調子の良かったメンバーに変更し、5人中3名を変更

②6年前の中国広州大会で主に使用した2-2-1プレースデフェンスを1、2Q内にて実行

前試合の反省より、以上2点についてチームとして修正を行いました。

予想通りトルコのガードはボール運びが得意ではなかったことと、1、2戦では日本がプレースデフェンスをもっていることを知らなかったトルコチームはすぐにミスをし、TOをとって修正しようとしたのですが、うまく相手の不意をつくことができませんでした。しかし、相手の2mを超えるセンター陣2枚をフォワードだけで止めることができず、前半34-37と接戦になりました。

3Qの後半になり、入っていたシュートが落ちはじめ、シュート本数は日本の方が多いにもかかわらず、アジアで得点王となったフォワードの選手も3P6本中0、シュート数は11本打ち込み2本、スタートのフォワードも8本中1本と、アウトサイドシュートしかない日本は苦しい時間となりました。1本決めてほしいと他のシューターを出しましたがすぐにTOをし、3Qは最後まで流れを取り戻せませんでした。この状況でなんとか点を取るためにセンターの強化を中心にさまざまな練習を行ってきましたが、センターはやはり2mの長身選手の前にボールをもらうことができず、インサイドで得点を取ることができませんでした。3Q後半に得点が止まったことから2-2-1のプレスを仕掛けることができなくなり、着実にインサイドで得点を重ねられ、3Qは41-55と大きく離されました。

4Qになり、また日本のシュートが入り始め、プレスの効果で残り5分で60-66まで詰めることができました。しかし、ディフェンスの修正が追い付かず、インサイドで確実に点を取られ、こちらのノーマークの3Pが落ち10点差で残り1分を切ってしまいました。TOを取り、次のオフェンスを指示し、それが成功した場合はプレス、失敗した場合はファウルゲームに持ち込むように指示しました。相手は2本目のフリースローを落としましたが、リバウンドを取られ、ファウルをし、再びフリースローとなりました。スクリーンアウトを徹底するよう終始言い続けていましたが、ボールの落ちる所の運もなく、リバウンドを取られ、最後はファウルゲームでしたが攻めるチャンスがなく、そのままタイムアップとなりました。

敗因としては、世界の2mセンターに対するディフェンスの修正ができず26得点を取られたこと、こちらはシュートが落ちる時間帯にディフェンスを頑張り、リバウンドをとることを徹底できなかった面であると思います。このことについては10年前から抱えている課題であり、「リバウンドを制するものが試合を制す」といわれるほどにインサイドの課題は最後まで残りました。

また、シュートの決定力不足で苦しい時間帯にイージーショットを決める力が求められると思いました。アウトサイドの得点力しか望めない状況である現在のチーム力では、ノーマークのシュートを確実に決めるシュート力を身につける必要があります。この点においても今後の課題となると思います。

7. まとめ

今大会を通してチームとしてよくまとまり全員しっかり自分

の役割に集中したと思います。しかし、それが結果に繋がらないのが男子デフバスケットのレベルの高さであると思います。健聴者の男子バスケットでもオリンピック出場はできておらず、身体的な能力の壁があります。まともに戦って勝てない場合と力が均衡している場合など相手や状況に応じて戦法を変える必要があると思います。

ベネズエラについては、アメリカを倒し銀メダル、ウクライナは3位決定戦でアメリカと当たり4位、トルコは得失点差で9位つまり日本がトルコに勝ったとしても9位であった可能性が高く、決勝トーナメントに進めなかったと考えます。得失点のルールにおいてはあまり得点が取れず、ロースコアでの戦いになりがちな日本にとっては厳しい条件でした。また、Cリーグは組み合わせとしても非常に苦しかったと考えます。交流試合としてアルゼンチンチームと試合を行いました。同点であったことから、台北、オーストラリア、ケニア、トルコ、アルゼンチン、日本は同じレベルにあり、地区で考えた場合、アジア3チームとアフリカ地区1チーム、アメリカ南米地区3位1チーム、ヨーロッパ5位チームが同じレベルであることから、リトアニア、ベネズエラ、アメリカ、ウクライナ、スロベニア、ロシア、ギリシャは7強であり、日本が現在の力で勝つことはかなり厳しいと考えます。しかし、デフリンピックでは1戦勝負になるので、奇策を打つことでなんとか決勝リーグでは勝負をかけたいとプレスやゾーンなどを考えていましたが、予選で敗退してしまいました。

事前に出ていたグループ分けも参考にならず、大変残念な結果です。私はイタリアのローマデフリンピックの最終合宿から男子デフバスケットに関わり、12年間コーチやヘッドコーチをさせていただきました。今回結果を出せなかったことは、非常に残念でなりません。

私は12年間のデフバスケット指導の一線から退き、また別の形でサポートは続けさせていただきたいと思います。12年間応援やさまざまな形で支えて下さった方々へお礼を申し上げます。本当にありがとうございました。また、結果を出せず本当に申し訳ありませんでした。

アシスタントコーチ 手塚 清貴

今回のデフリンピックではアシスタントコーチとして参加し、戦術を理解し、試合の流れを読み、選手交代の判断をするのが私の担当でした。そして、いままでに2回国際大会に選手として出場した経験から、選手たちの精神面をサポートすることも重要な任務でした。今までの合宿では、常に、ワンガード、ツーフォワード、ツーセンターで考えてきました。高さのある世界を相手にリバウンドで対抗するためにはセンターが2枚必要だと思って準備を重ねてきました。しかし、第一戦目のベネズエラ戦、第二戦目のウクライナ戦では、それでも思うようにリバウンドが取れずに苦戦しました。さらにセンター陣のファウルトラブルのため、控えセンターを試合に出しても、リバウンドと得点を取ることができず、逆に相手のセンターには好きなようにやられてしまいました。やはり世界のチームのセンターは身長190cm～2mであるのに対し、日本のセンターは身長180～185cmというサイズの差を埋めるのは容易ではありませんでした。ウクライナ戦のハーフタイムのミーティングで、ツーガード、スリーフォワードで勝負することを決めました。それにより、速いバスケット展開で相手のターンオーバーを誘い、相手を苦しませることができました。そして、日

本はおもしろいようにシュートが決まり出し、ベンチにいたセンターも、チームメイトの動きを見て、「こう動けばいいのか!」というヒントを得ることができたのではないかと思います。結果は惨敗でしたが、大きな収穫となった一戦でした。

次のトルコ戦、どうしても勝たなければならない一戦であり、ウクライナ戦の後半で流れが良かったメンバーをスターティングメンバーにし、前半を3点差で終わることができました。しかし後半はターンオーバーとシュートミスの多さが目立ち、相手の長身センターを中心にあっていう間に13点差に広げられてしまいました。ここで2-2-1ゾーンプレースを仕掛け、相手チームのミスを誘い、速いオフェンスで点差を6点差に詰めることができましたが、その後シーソーゲームとなり、その6点がとても遠く感じました。残り1分。このままでは、相手がスローオフェンスにすると我々のオフェンスの機会が減るため、あえてファウルをし、フリースローを打たせ、リバウンドからオフェンス権を得るというファウルゲームに持ち込みました。退場者を出さないよう、選手は残りのファウル数を確認し、計画的にファウルをしました。相手のフリースローは外れたものの、リバウンドが取れず、またオフェンスでも相手のディフェンスに阻まれシュートを決められず、ファウルゲームで得たチャンスを活かすことができませんでした。バスケットボールは難しいと改めて思いましたが、日本のデフバスケットボールのレベルは確実に上がってきていることを確信しました。今後は、速いスピードを活かしたバスケットボールで世界に挑んでいけたら良いと思いました。

アシスタントコーチ 山崎 敬祐

2009 台北に引き続き、2 回目のデフリンピック参加になり、準備や対策については、全大会よりもはるかに仕上がりのよい状態で今回の大会に臨みました。私は、アシスタントコーチとして、監督のサポート、データによる戦略構築、選手への指導、またマネージャー業務として、合宿会場、宿泊先、食事、交通、会計、デフリンピックまでの提出書類の作成、ろうあ連盟と日本代表とのパイプ役を兼任しました。対応は迅速かつ慎重に行ってきましたが、今年に入ると、仕事の合間でも至急の対応が必要なメールがどんどん届くようになりましたが、各自メールでの対応となりますので、なかなかメールに気付かない選手には対応が遅くなることもあり、仕事との両立と各方面への連絡の取り方については、苦労しました。

デフリンピックに行くまでの4年間で、日本選手のレベルも上がり、チームとしても今までで一番のできでしたが、それと同時に世界のレベルもまた向上しており、追い越せなかった、勝ち切れなかった、というのが今の気持ちです。ウクライナ、リトアニア、台北は国を上げて代表の環境作りを行っており、練習会場の確保、海外遠征なども積極的に行っております。リトアニア、アメリカ、ベネズエラのレベルは、日本のプロチームと肩を並べますし、今年はアフリカからケニアのチームが初出場し、まだレベルは高くはないですが、身体能力の高さを見せつけられ、今後のレベルアップの要素を秘めていました。3試合の内容としては、予算の関係や自己負担分の限界を考え、4回の合宿でここまで仕上げられたことには成果を感じております。ただ、メダルを狙える状況は、これからの運営における工夫により、さらなる可能性が出た大会でもありました。最後のトルコ戦は、相手のファウルが30個以上の中、日本は耐える姿勢を見せ、一時はリードをする接戦となりました。今まで

の中で一番良い試合だったことは、選手もスタッフも分かっており、練習してきたことがやっと出せた試合でした。最後はお互いファウルゲームに持ち込みましたが、結果的には負けてしまい、勝てそうで勝てなかった試合となりました。敗因は球際の強さ、決定力が相手の方が上回っていたことによります。まとめると、世界でも通用する可能性を生み出した大会でした。

今回は日本から遠いブルガリアの地での開催により渡航費等も援助のおかげで選手の自己負担も軽減できたことは大変ありがたく思っています。また、その他にも日本ユニフォームの配布や壮行会の開催もしていただき感謝の気持ちでいっぱいです。今後、メダルを狙うためには、日本国内でのろう者への理解、またデフリンピックの認知度向上が必要不可欠です。認知度を向上していく活動は広がりつつあります。それとともに、子どもたち、若者を巻き込んで、スタッフとしては人材育成から始めたいと考えています。全国ろう者体育大会には中学生も参加できるよう提案をする、ミミリーグ（JDBA 主催）、東日本・西日本大会（JDBA 主催）、デフリンピック応援プロジェクトによるイベント協力、各都道府県でのろう者へのバスケットクリニックの開催をし、デフスポーツの促進をします。また、JDBA を通じてアジアカップを日本で開催し、世界の前にまずはアジア圏内交流試合を行い、日本のレベルアップと選手へのモチベーション、また子どもたちが目標、夢を持てるように工夫します。地域の協力も、福岡、東京、北海道を中心に日本代表メンバー、協会理事が主催に入り進めていきます。

JDBA は日本バスケットボール協会の認定団体になりました。今後は交流を増やしていきますので、対外試合、メディア活動も積極的に活用していきます。私たちにできることはどんどんしていきますが、やはり国単位で動かないとできないこともたくさんありますので、これからもご協力のほど、どうぞよろしくお願い申し上げます。

トレーナー 大塚 健吾

男子バスケットボールのトレーナーを担当させていただきました。バスケットボールチームでサポートを始めた時に、私のトレーナーとしての仕事内容を選手とスタッフに伝えました。トレーナーが何をする人なのかということチーム全員にしっかりと理解してもらいました。トレーナーのサポートを初めて受ける選手やトレーナーに対するイメージの差異が選手間であることから私がすること（できること）としないこと（できないこと）をきちんと説明する必要があると思いました。

活動のテーマは“自分のことは自分で行う”というシンプルなものでした。そのため大きく3つのことを行いました。

- ①コンディショニングチェックシートの記入をしました。これは、今のチーム活動がスタートした時から化合宿で毎日行っていました。デフリンピックでも行うことを決めていたので合宿時から記入をする習慣をつけました。“自分の体に興味を持ってもらう”という意味が含まれています。内容は起床時間や睡眠時間、脈拍、体重、体温など数字で表すものからストレスや食事の満足度など5段階評価するもの、一日の反省などきちんと自分と向き合うものが含まれています。
- ②自分でできるトレーニングやセルフコンディショニングを教え、選手自身が再現できるような体制をつくりました。普段、全国各地で活動している選手に会うことは難しいので、自分の体を自分で整える手段を教える機会は合宿のみ。それ以外にストレッチポールやテニスボールを使ったコンディショニ

ング方法やトレーニングの動画を SNS にアップしました。そうすることにより、練習や試合で疲れた時はトレーナーに体のケアをお願いする前に、まずは自分で疲れない体をきちんとつくること、そして疲れた時もまずはセルフケアをきちんと行うことという意識づけの強化ができたと思います。

- ③チームアップを選手のみで行えるように指導しました。選手自身がアップの内容や理由をきちんと理解し自分自身で出来ることが求められます。世界大会では試合時間や場所、移動方法がバラバラになったり時間に遅れたりということが考えられるので、トレーナーがいなくても選手自ら活動ができる体制の必要性が想像できました。また、選手自身がアップを行えることで私は会場のメディカルスタッフへの挨拶や環境の安全面のチェックを行う時間の確保ができます。

バスケットボールに関わった当初、現在の坂本ヘッドコーチから「手話を覚えることはろう文化を学ぶきっかけになりますよ」という言葉をいただきました。デフスポーツをサポートする上で大切にしている言葉です。健聴である私はろう文化がどういうものか分かっていないところがあります。しかし、ろう文化というものがある、こういうことがろう文化なのかもしれないという思いでサポートにあたりたいと思っています。サポート当初は手話を覚えることのみに焦点を当てていましたが、そうではなく、ろう文化や選手がいつから手話を覚えたのかを知っておくことも大切なのだと思います。個人差がありすぎるデフスポーツにおいて、「ろうだから」とひとくくりにするよりも一人ひとりと向き合うことが大切であり、それを教えてくれるのは長年デフスポーツに精通しているスタッフであり、何より選手なのだと改めて感じました。

チームとしてまとめるためには自分の想いを相手に伝えるように伝えることが今回の課題でした。私自身、選手に伝えるように伝えていたのかと自問自答をしています。伝える力が足りなかったことが一番の反省です。伝える力を向上させ、選手がアスリートとして自立し競技力を上げることが今後の課題となります。日本本部スタッフをはじめ、立石ドクター、羽森ドクター、高橋看護師、中島アスレティックトレーナー、高橋アスレティックトレーナーの医療班には大変お世話になりました。本当にありがとうございました。

選手 井上 和

私にとっては初めてのデフリンピック出場なので不安感と緊張感がありました。デフリンピックまでに様々な一般チームの練習に行ったり、日本代表強化合宿に参加したりして、個人の技術を磨いてきました。それでもやはり世界の壁は突き破れませんでした。私にとっては初めてデフリンピックに出場したことが良い経験となり、またチームが一つとなって目標に向けて全力で戦えたことが財産となりました。チームの目標としてベスト8、そしてメダルを取ることが目標でしたが、予選敗退という結果に終わってしまいました。目標を達成することができず、悔しく情けない気持ちでいっぱいです。ただ、みんな最後まで諦めずに全力を尽くし、今までで一番のチームワークを発揮できたことは日本の誇りだと思います。個人的にはドリブルでの仕掛けや1 on 1などは世界においても通用したと思います。課題は海外の選手の高さやパワーに圧倒された部分でした。

今後はJBAの傘下チームに所属することになりました。今までプロチームやクラブチームには、強化合宿での練習試合やク

リニックを通し、大変お世話になりました。個人技もさらに磨きをかけ、次のデフリンピックでは必ずや上位に食い込みます。

ご協力いただいたJPC、ろうあ連盟、JDBA、地元のサポーター方への感謝でいっぱいです。本当にありがとうございました！試合後から月日が経ってはいますが、やはり悔しい気持ちや情けない気持ちがまだ残っています。これは、私のモチベーションに繋がりますので、2年後の世界選手権に向けて、様々なトレーニングを取り入れ、筋力の向上や、技術を磨き、「次こそは！」という気持ちです。

選手 石川 友正

台北デフリンピック終了後、ソフィアデフリンピックでメダルを獲得するために、この4年間自分が何ができるか色々考えました。まず、①個人技術のレベルをあげる。②多くの試合を通して経験を積む。③代表全体のチームワークを強化する。の以上3点に絞って強化合宿に臨みました。チーム内でのコミュニケーションを十分に取り、今まで見えていなかった部分を見つめ、お互いの信頼関係を深め、団結力を高めて大会に臨みました。チームの目標はメダルを獲ることでしたが、勝つことができずメダルは獲れませんでした。個人の目標としていたフックシュートのマスターは国内では通用しましたが、海外の試合ではフックシュートを打つ前に、ベストのポジションを確保するのが難しかったです。しっかりポジションを取れば、周りが見えるので、様々な選択肢を持ってプレーできるのですが体格差が予想以上に大きく難しかったです。家族、友人の皆の協力のおかげで慣れない環境の中で、精神面や体調面において怪我や大きな病気もなくベストコンディションを維持できたことも、試合に臨む上で大きかったと思います。それから、デフバスケットボール日本代表を支えていただいているJDBAやろうあ連盟、日本パラリンピック委員会、東京都議会議員の小山有彦様、東京都府中市バスケットボール協会の会長様、同協会役員の皆様、株式会社東芝、東芝府中事業所組合、東芝横浜事業所組合の方々のご協力もあり、強化合宿やプロチームとの調整をしていただきました。

今後、デフリンピックの経験を伝えるため、地元でプロジェクトを立ち上げて他競技の日本代表選手と共に同じ聴覚障害を有する子どもたちへの指導や、若い選手の育成に携わっていきたいと思います。

選手 榎並 泰徳

ブルガリアのデフリンピックまでに何回も合宿を行い、みんなで頑張って練習をしてきました。チームの目標は予選リーグを突破する（ベスト8に入る）ことでしたが、残念ながら果たすことはできませんでした。チームとしては頑張ったと思います。個人目標として、メダルを取ること、上位入賞を果たすことはもちろんでしたが、私自身、試合に出られたらその時のベストを尽くし頑張ろうと思いゲームに臨みました。キャプテンとして、チームをまとめることはできたと思っています。ベネズエラ戦で2点を決めたことは印象に残っています。全体的に出場時間が短く、大会で自分のプレーができたかどうか分かりませんが、トルコ戦の2Qまではよかったと思います。3Qから流れが変わり、シュートが入らなくなってしまい焦ってしまいました。4Qからチームが再びまとまり、内容がよかったの

で2Qの雰囲気をきちんと維持できていれば勝てた試合だったので残念です。私はキャプテンとしてチームをまとめ、チームを引っばっていくことを中心に考えていましたが、副キャプテンの丹沢選手に助けられることもあり、ありがたかったです。3試合とも負けてしまいましたが、台北デフリンピックと比べ、内容もかなり改善されてきて、2年後の世界大会では上位に行けるための基礎ができたと考えています。また、日本からの応援メールや応援に来てくれた方々が日本の旗を振り、たくさん応援してもらい、ありがたかったです。今後は年齢的にも体力的にも厳しくなってきたので、若いメンバーのサポート役として、また次のキャプテンには私の経験を伝えるなど、デフバスケットボールに携わっていきたいと考えています。

選手 緒方 寛人

デフリンピックに参加して、まず思ったのはアピールが物凄く足りなかったことでした。試合に全く出場できず、とても後悔しています。デフリンピックまでに外国人選手と渡り合えるようにフィジカル面、スタミナ、技術などを鍛えてきました。しかしメンタル面がまだまだ不十分でした。アピールするチャンスはいくつかあったにもかかわらずそれを生かせなかったため、自分のベストパフォーマンスを出しきれないまま、大会が終わってしまったという感じでした。そして結果は予選で3敗し、予選リーグ敗退という形になり、勝負の世界は甘くないと思い知らされました。今回、初めて代表として選ばれた自分にとっては貴重な経験となりました。また外国人選手の体格、身体能力の高さにも圧倒されました。個人的に良い経験をさせてもらったので、その経験を糧に今後の競技に生かしていきたいと思っています。食文化の違いなどブルガリアの環境に慣れるまで時間がかかり、最初の状況は良くなかったのですが、最後までメンバーの皆でやり遂げられて良かったと思っています。最後のトルコ戦は全員が諦めないという気持ちで、10点差を追う場面で終盤はファウルゲームに持ち込み、最後の1秒まで諦めずに戦いました。チームの皆が1つになって諦めず戦いぬいたことは誇りに思います。強化合宿からここまで、最後までやり遂げられたのは、日本にいる皆様、スタッフの皆様が支えてくれたおかげです。現地まで応援に来てくれた人の応援も励みになりました。本当にありがとうございます。デフリンピックを終え、今までに色々とお世話になった方へ感謝の気持ちを伝え、また自分の全てを見つめ直し、次に繋げていきたいと思っています。

選手 大平 良龍

前回のデフリンピックを終え、今回のデフリンピックまでにしてきたことは、練習時間、練習環境の確保（学生から社会人の生活環境の変化にも対応）をしてきました。特に、練習環境については、自分自身が成長できるチームを求めて約3年かけて様々なチームにお世話になりながら練習してきました。チーム目標は、チームディフェンス、早いオフェンス展開であり、個人目標はチーム目標に沿ってディフェンスからの早いオフェンスを展開し、私自身は外角シュートを決めることでした。最終戦のトルコ戦は、試合前に選手同士で話し合いの場を設け、各自が一人ひとりの役割をはっきりさせ、チームディフェンスからリバウンドを取り日本の得意とする早い展開に持ち込むことができました。最終戦では内容の良いゲームをすることがで

きましたが、初戦に入る前からお互いもっとコミュニケーションをとっていれば良かったと思いました。私自身、最初の2試合は思い通りの試合ができませんでしたが、最終戦は迷いを捨て、ただ目の前のゴールに向かっていくことだけに集中しました。ディフェンスについても、楽にプレーさせないように足を動かししました。今回、チームで話し合うことが、チーム全体で守りきることに繋がると分かりました。まず一人ひとりのプレーの質を高め、チーム全体で日本バスケットの課題である、高さへの対策ができるのではないかと考えています。チームメイトは何が得意なのかをしっかりと見極めることも大事だと思いました。今回デフリンピックの開催地が転々と変わる中、協会の方々とはとても大変だったと思います。特に、私たち聴覚障がい者は情報の共有が難しいので、その中でさまざまな課題をクリアし、デフリンピックに出場することができたことに改めてお礼申し上げます。これからは、デフスポーツの周知活動や、国内のデフバスケット基礎練習を徹底をし、日本のバスケットボールのレベル向上に貢献していきたいと思っています。

選手 小立 哲也

デフリンピックまでにしてきたことはチーム練習は強化合宿で、個人練習は勤務先の会社の体育館で仕事が終わったあとに週3回行いました。掲げたチーム目標は「メダルを取りに行く」「チーム内のコミュニケーションを上手くとっていく」の2点でした。そして個人目標は、海外の長身選手に負けず、自分の持てる限りの最高のプレーをし、前回の大会より良い結果を出したい、ということでした。結果は、メダルを取ることができませんでした。初戦のベネズエラ戦、続くウクライナ戦では全く自分のプレーができませんでした。最後のトルコ戦では長身相手にリバウンドを取ることができ、ディフェンスでしっかり相手を抑えることができました。世界のレベルの高さ、体格の差を改めて思い知らされました。ディフェンスでは、リバウンドを取れた試合と、全く取らせてもらえなかった試合がありました。相手より腰を低くし、ボックスアウトで相手の動きを抑え込めば大抵の長身選手とマッチアップしてもリバウンドが取れるのですが、圧倒的な体格差により、それすらも上から取られる時がありました。また、メンバーそれぞれのポジションでのコミュニケーションが不足しており、私はセンターとしてインサイドを攻めることがなかなかできませんでした。自己負担の額が多い日本代表にとって、国からの助成金にはとても助けられています。またろうあ連盟の皆様のご尽力のお陰で素晴らしいデフリンピックに参加することができました。JDBAや地元のサポーターの応援をはじめ、全ての皆様にありがとうございましたと伝えたいと思います。これから私は若い世代にデフリンピックで得たことを伝えていき、デフリンピックにおける認知度の向上など、ろう者を取り巻く環境を変えていきたいです。また次世代のデフバスケットボールプレーヤーの発掘に関わっていきたいと考えています。

選手 小沼 功治

大会までは、ほぼ毎日技術向上やトレーニングをする時間を作るため、仕事の後体育館やジムに行き、帰宅は深夜0時という日々で苦労しましたが、デフリンピックで悔いの残らないようにと頑張ってきました。日本代表として選ばれたメンバー

と共に最後までやれたことは嬉しく思いますが、結果を出すことができず悔しい気持ちです。前大会よりも上位を目指し、メダルへの挑戦をするべく、ベストを尽くして、日本らしいバスケットボールができるようにと考え、現地に入りました。また、体力やパワーでは負けないこと、1 on 1 でも負けないこと、一戦一戦を大切に戦うことを念頭に試合に臨みました。今までの日本代表の中で一番チームワークが良く、12人全員で戦い、その意味ではやれることはすべてやったので、悔いはないです。今大会では10位となり、結果は結果ですので受け入れて次につなげたいです。私は日本国内のプロチームに所属したこともあり、結果にはいつもこだわりがあります。今回の結果について言い訳はできませんので、次は必ず結果を出したいと考えています。監督、アシスタントコーチ、トレーナーには色々とお世話になりました。合宿や試合毎に指導や良い助言をいただき、勉強になりました。今回は現地でお腹を壊す選手が多く出てしまいましたが、トレーナーの対応が適切で助かりました。これからも更に技術を磨いて2年後の世界大会に備えたいと思います。JPC、ろうあ連盟の皆様のご支援のおかげで、大会に集中できたと思っています。本当にありがとうございました。

選手 吉良 悠祐

前回の台北デフリンピックでの悔しい気持ちがあり、それから4年間、技術面・精神面・フィジカル面を磨いて来ました。ブルガリアデフリンピックはその成果が出て、個人としては自分の力が世界に通用したので良かったです。しかし掲げたチーム目標は、メダルを取ることであり、一人ひとりの考えが違うため、まとめるのが大変でした。一人ずついろいろと話をしてお互いの理解を深め、チームワークを高めるために努力してきました。団体競技では、意識してできるだけコミュニケーションを取ることで、解決できることを学びました。デフ日本代表では主に手話を使うため、一つ一つのやり取りに時間がかかりますが、大事なことだと思い最後まで意思疎通をはかりました。個人的にはシュートの決定力の向上を自ら掲げた個人目標として今回の大会に臨みました。また、自分の得意プレーである3Pシュートは世界に通用したことが自信になりました。その結果、チームで最も多く得点を決めることができ、今までの練習の成果を出すことができました。しかし個人目標達成の陰でチームの皆のサポートがあったことも改めて実感しました。ディフェンス面では私よりもサイズの大きい選手を抑えることが非常に難しかったです。しかしこの試合をとおして2mクラスの選手を守るコツが掴めてきました。チームに足りなかったことは、メンバー同士のコミュニケーションを十分に取れず、もっと細かい部分まで話し合えばチームとしてもっとスムーズにできたと思うので、その課題を2年後の世界大会に活かしたいと思います。協力いただいたJPC、ろうあ連盟、JDBAの皆様に対して、残念ながら結果を出せなくて申し訳ない気持ちです。今までのサポートについて本当に感謝しております。今までの課題を必ず次につなげて、自分自身をもっと磨いて頑張りますので、引き続き今後ともよろしくお願いします。2年後の世界選手権に向けて自分自身も一生懸命頑張っていきます。

選手 下山田 俊介

すべての試合を振り返ってみて、勉強になったこと、反省す

べきところなど、多くのことを得ることができたと思います。センターとしての仕事はベストを尽くせるよう努力したつもりですが、まだまだ力不足でした。しかし、世界の壁は高いものの、確実に日本と世界の差は近づいていることが分かりました。今後、若い世代が入り良いプレーができると実感しています。今回は19歳の代表初選出のルーキーの活躍が目立ち、チームにプラス作用をもたらしました。バスケットボールはチームプレーであり、チームワークが悪いと良いプレーが生まれないので、常にチームワークを意識していました。海外で食事や環境が変わると体調を崩す人もいましたが、ドクターやトレーナーをはじめスタッフのご尽力のおかげで試合はベストのプレーができたと思います。特に苦勞されたのは監督、コーチだと思います。私は、相手をブロックし、壁をつくり、時間を一杯かけるプレーや、またファウルプレーなど多くの戦略から常にベストの判断をしなければならないポジションでした。トルコ戦ではシーソーゲームになり多くの戦略が採用されました。特に4Qの終盤にはファウルゲームが採用され、残り時間が短く、かつ多くの得点のチャンスを作るにはベストな戦略でした。世界レベルでも追い上げるチームがよく採用される作戦であり、相手のフリースローの確率が低い選手にファウルをすることで。惜しくも後一步のところでしたが、なかなか経験できないことであり、貴重な経験になったと思います。大会を通して監督、コーチ、トレーナーのご尽力には感謝の気持ちでいっぱいです。

選手 竹本 圭佑

デフリンピックまでにしてきたことは、代表選手の中では、体が細い方なので海外選手の高さやサイズ、パワーに対抗するにはどうするかを考え、体幹トレーニングを中心に、体づくりに取り組んできました。私の持ち味はスピードなので、スピードを犠牲にすることなく必要な部位についてはさらに筋力強化をはかりながら、地元のクラブチームで練習をしてきました。チーム目標は、メダルをとることであり、そのために予選突破することを目標にして挑みました。個人目標は、試合の状況によってはゲームメイクを任されたり、得点をとるために多くシュートを打ったりするなど、自分の果たすべき役割やポジションが変わるので、どんな状況でも安定したプレーをし、チームに貢献できる選手になることを目標としました。試合では序盤、予想以上に大きい海外の高さやサイズを前に、チームプレーが噛み合わず、ほとんどの試合で1Q、2Qで点差をつけられ、追いつける内容となり、予選グループ最下位という結果になってしまいました。個人的に、短いプレータイムでシュートを打ったこと、チームが求める自分の役割を果たすことができたことは良かったと思います。シュートまでの過程において、日本の戦術であるファウルはある程度通用したと思います。反省点は、ゲームメイクの中で私が1対1を仕掛ける場面がなく、世界で戦うには個人としても、もっと強気でいくことと、状況判断を早くすることでした。トルコ戦では終盤、追いつくためにあえてファウルゲームをし、オフェンス権を多く得よう仕掛けていきましたがあと一歩及びませんでした。ご協力いただいたJPC、ろうあ連盟、JDBA、地元のサポーターに対して、皆様の支えがあったからこそ、こうしてデフリンピックに出場することができました。どうもありがとうございました。しかし結果を残せず期待に応えられなかったことについて申し訳ない気持ちです。今後は、2年後の世界選手権に今回の経験を活か

し、より良いプレーをするために準備していき、次こそはメダルを取りたいと思います。

選手 丹沢 佑輔

デフリンピックまでにしてきたことは、強化合宿への参加だけでなく、所属する地元のチームでの練習、個人トレーニング、デフリンピックに対する職場の理解を得るための活動、デフリンピックにかかる自己負担金を集めるための活動です。チーム目標は上位入賞、そしてメダル獲得でした。前回のデフリンピックに出場し、日本は海外のチームと比べて身長差、体格差の前に、個人の技術だけで対抗できないことを実際に肌で感じていました。高さや体格では劣るものの、個人の能力は高く、技術面でも負けていないので、やはりチームの力で戦うことが大事だと考えました。今回のデフリンピックでは副キャプテンとして、キャプテンを支え、チームをまとめることを意識しました。個人としては、4年前に初めて世界を相手に戦った台北デフリンピックで、直接観戦した決勝戦（アメリカとリトアニア）に感化され、その時の MVP 選手（ハニー選手）を意識し、シュート力、ドリブルの緩急を高めることを中心に練習してきたため、その成果を今回のデフリンピックで表現することが目標でした。予選敗退となりましたが、試合を重ねるごとにチームで戦う意識が強くなっていき、最終戦のトルコ戦では高さのある相手よりチーム力で勝っていたと感じました。しかし、足りなかったのはやはりシュートの決定力であると感じました。相手は自分より身長の高い選手ばかりであり、その中に入るとやはり小さい自分にとって何ができるかを考え、守りづらい緩急のあるドリブルを意識して練習してきた結果、1対1では世界でも通用し、安定したボール運びでチームを引っ張ることができたのではないかと思います。JPC、ろうあ連盟の皆様には、忙しい中、色々選手のために尽くしていただき本当に感謝の気持ちでいっぱいです。ありがとうございました。今後は、選手としても頑張りながら、デフリンピックの経験を生かして、ろうの子どもたちにバスケットボールの楽しさを伝え、デフバスケットボールの普及に努めていきます。

選手 早川 倫夫

デフリンピックまでに、週2〜3回ほど仕事の後にパーソナルジムでみっちり体を追い込んできました。また、残りの週1〜2回は地元のクラブチームでの練習を通してバスケットボールに取り組みました。私のポジションはシューティングガードで、3Pシュート、アウトサイドシュートを主に練習し、併せてボールハンドリングやディフェンスといった基礎技術についても鍛えてきました。チーム目標は、上位リーグ進出、そしてメダル獲得で、個人の目標は、上位リーグ進出のために、シュートとディフェンスで結果を出すことでした。結果としては予選リーグ全敗で上位リーグへの進出を果たすことができませんでしたが、個人的にはディフェンスについて相手を抑えることができたので、一定の結果を出せたと考えています。日頃のトレーニングを通してボディバランスを鍛えていたので、ディフェンスは通用していましたが、3試合目のトルコ戦では2mクラスのセンター2人に対して序盤からの激しいポジショニング争いの結果、ファウルがかさんでしまいました。そして、残り2分で10点ビハインドと厳しい状況になり、少しでもオ

フェンスの時間を作るためにファウルゲームに持ち込みました。私自身は、コートやボールなどの微妙な違いにアジャストできなかったために、この試合ではシュートの確率が低かったです。今後の改善策としては、日頃から海外での試合に対するイメージを持って練習に取り組みたいと思います。大会を通して何が足りなかったかと考えると、コミュニケーションだと思いました。最初の2試合を続けて落とした後のチームミーティングで、チームで戦うことが大切だと再確認し、次のトルコ戦では、結果的には12点差で負けたものの、チームでコミュニケーションを取り、全員で戦うことができ、今までで一番良い内容の試合でした。JPC、ろうあ連盟、JDBA、地元のサポーターの皆様には、資金面、環境面で支援していただき、本当に感謝しております。どうもありがとうございました。今大会では結果を出すことができませんでしたが、私たちは非常に良い経験を積むことができました。デフリンピックを終え、次の目標は、2年後の世界選手権で上位進出を果たし、4年後のデフリンピックでメダルを狙います。

バスケットボール競技女子チーム

ヘッドコーチ 篠原 雅哉

1. 選手の選考について

2013年ソフィア・デフィリンピック女子バスケットボール日本代表の選考については、毎月行われる選考合宿を10回行い、基礎体力・スキル（技術）、戦略への理解度、人物像、日本代表候補選手としての自覚の高さなどから総合的に評価し、12名のエントリー登録枠に対して11名を選出しました。選考に関しては、最後の選考合宿となる2012年12月の合宿終了後、ヘッドコーチ、マネージャー、トレーナーの3名で検討し、ヘッドコーチの推薦案として、11名の選手を日本代表として派遣することを日本デフバスケットボール協会の理事会に提出し、理事会の承認を経て、ろうあ連盟スポーツ委員会に推薦しました。12名の枠を全て埋めなかったのは、12番目の選手を選出し登録してもチームの力は変わらないと判断したからです。ろうあ連盟の承認を経て、11名でのデフリンピック出場となりました。

2. 成績一覧

優勝	アメリカ
準優勝	ウクライナ
第3位	リトアニア
第4位	ギリシャ
第5位	イタリア
第6位	日本
第7位	ベラルーシ
第8位	ロシア
第9位	中国

3. 試合結果と評価

予選リーグ1試合目	●日本 26 対 52 ギリシャ○
予選リーグ2試合目	●日本 53 対 58 ロシア○
予選リーグ3試合目	●日本 27 対 90 リトアニア○
予選リーグBグループ4位	
準々決勝1試合目	●日本 25 対 90 アメリカ○

5～8位決定戦 ○日本 67 対 62 ベラルーシ●

5～6位決定戦 ●日本 37 対 45 イタリア○

6試合中、3試合は競り負けてしまいました。初戦のギリシャ戦は先行しながらも追いつかれ、逆転を許し、ロシア戦、イタリア戦はロースコアであったことからディフェンスはうまく機能していたと考えていますが、それ以上にオフェンスで攻めきれませんでした。

自己評価として、ディフェンスは世界上位レベルであり、現時点で我々日本のディフェンスを突破できるのはアメリカとリトアニア、スウェーデン（今回不出場）の3国のみと考えます。一方、オフェンスはシュートの決定力不足という課題が浮き彫りとなりました。

4. チーム（コーチ）体制と各コーチの役割

今回のスタッフ体制はヘッドコーチ、アシスタントコーチ、トレーナーの3名でした。ヘッドコーチは主にデフリンピック本戦に向けたチーム作りを中心に合宿のメニュー作成および指導、デフリンピック本戦では采配を担当しました。アシスタントコーチはヘッドコーチが指導・采配しやすい環境を整え、必要に応じてヘッドコーチと戦略に関する協議・検討を行いました。またヘッドコーチが戦略構築のための時間を確保するために、現地では連絡係、スケジュール確認や調整、買い出しなどの雑務を行いました。トレーナーは前回の世界選手権大会（バレルモ・イタリア2011年）では、男女で1名しかいなかったため、負担が非常に重いものでした。今回は女性トレーナーという条件で、紹介のあった佐々木トレーナーにチームをお願いしました。トレーナーの役割は障害予防のテーピングを中心に、選手へのコンディショニング指導（ストレッチ、食事、練習やゲーム中の摂食管理）を担い、そしてトレーナーのコネクションからストレッチポール講習会、栄養学講習会などの講師を招聘し、選手の学習の機会を設けました。バスケットボールの技術以外において、様々な知見を得ることができたことは非常に大きいものでした。

5. 競技スケジュール（旅行スケジュール）：現地時間で表記

7月20～21日 調整合宿（柏市）

7月21日 結団式（成田市内ホテル）

7月22日 日本出国・ソフィア到着

7月23日 練習：ユニバシアダホール（U.H）

7月24日 練習：オベリガスホール（O.H）

7月26日 開会式

7月27日 ギリシャ戦（U.H）

7月28日 ロシア戦（O.H）

7月29日 調整日

7月30日 リトアニア戦（O.H）

7月31日 調整日

8月1日 アメリカ戦（O.H）

8月2日 ベラルーシ戦（O.H）

8月3日 イタリア戦（O.H）

8月4日 休養日

8月5日 閉会式

8月6日 ソフィア発

8月7日 帰国・デフバスケットボール日本代表解団

6. 大会の競技運営などの報告

バスケットボール会場は2ヶ所あり、1つはソフィア市内にあるユニバシアダホール、もう1つはソフィア郊外のガス会社

が所有するオベリガスホールで全てのゲームが行われました。

設備面において、ユニバシアダホールは特に大きな問題はなく、コートはコンクリートの床にバスケットボール専用のタイルを敷き詰めるタイプで、海外では一般的なものでした。オベリガスアリーナはコートのサイズは正規のものであり、仕様も日本と大差のないものでしたが、アリーナ自体が小さく設計されており、エンドラインおよびサイドラインから壁までのスペースがほとんどありませんでした（エンドラインからアリーナ壁面までは目測で1.5m程度）。そのため、リング正面の壁には緩衝材が設置されており、アリーナの設計者も競技者が壁に衝突することを想定していることが窺えました。オベリガスアリーナに控え室は2つしかなく、連続するゲームの開催は想定しておらず（本来アリーナには控え室として、ゲーム中の2チーム、次のゲームの2チーム、合計4部屋が必要である）、多目的ホールなどを代用していました。しかし、その程度の不便があったのみで競技および競技進行そのものには大きな影響はなかったと考えています。

気になった面として、選手の汗でコートがぬれた場合はモップで拭き取るのが通常の対応ですが、今回のデフリンピックではモップ要員が準備されておらず、ユニバシアダホールでは、モップが立ててあるだけで審判の指示で手の空いているボランティアが出勤し、オベリガスアリーナではオベリガス社が契約している清掃会社のスタッフが大会途中から1名待機するようになり、彼が審判の指示で観客席から出勤するというものでした。一番望ましい形としては、モップ要員にバスケットボール経験者を配置し、コートの隅で待機させると良いと思いました。

またオベリガスアリーナでは観客席とコートとの間に仕切りがなく（そもそもアリーナの設計上、仕切るほどのスペースも確保されていませんでした）、観客席の立ち入りについても制限がなかったため、選手と観客の距離感は非常に近いものでした。競技者および観客の安全面を考えると、観客の動線を制限し、アリーナのフロアに観客が降りられないようにすべきだったのではないかと思います。今回は大きな事故がなかったため、大会期間中は大きな問題として取り上げられませんでした。オベリガスアリーナでの対応は手話通訳担当が1名常駐していましたが、1名では全てのチームのリクエストに応えられず、控え室の案内などは手話のできない所有会社（オベリガス社）の社員が対応するなど、会場運営の粗さが随所に見受けられたように思います。しかし、ソフィアでの開催が決定してからわずか9ヶ月の準備期間を経て、デフリンピック開催に漕ぎ着けたことを考えると、我々にとっては要員が不足しているという状況は事前から想定内であり、チームとしても選手がスムーズにゲームに向かうことができるよう、スタッフが現地で情報を集め、必要ならば要望を出し交渉をするように動くことで一つ一つ解決していきました。日を重ねるにつれ、代表スタッフと現地の方（オベリガス社の社員）との関係も深まり、ごちないコミュニケーションから我々が何を望んでいるかを察してもらえ、十分な対応をしてもらえたことはありがたいものでありました。

ユニバシアダホールにおいては、競技者にはあまり影響のない問題ですが、アリーナの床と、コートのタイルとの間にはバスケットボールコート専用のタイルの厚みの分だけ段差がありました。段差には何もなかったため、背走した審判が転倒するなどの事故があったと聞きました。審判の安全のためには段差に三角広告を設置し、動線を制限するなどの工夫が必要ではないかと思いました。

設備面においては以上であり、他に困ったところは見当たりませんでした。大会全体の運営において、我々が最も心配していたプログラムの急な変更はなく、ほとんど予定通り行われました。1つだけ、男子の決勝戦と女子の決勝戦の時間が入れ替わったのみでした。しかし、次に心配していた、会場への移動手段については非常に苦労しました。事前に「バスは用意する」という話があったものの、現地の実行委員会が用意したシャトルバスはそれぞれの競技の試合時間に合わせておらず、宿舍と各競技会場を巡回するものでした。バスケットボールは2つの会場とも徒歩で行ける距離ではなく、アップなどを含めて必要な時間を確保するためには、個別に移動手段を確保する必要があります。現地の実行委員会は個別のリクエストには対応できないとのことで、全日本ろうあ連盟スポーツ委員会および旅行会社の担当者がタクシーや現地のレンタカーを手配し、現地の実行委員会のシャトルバスの運行時間と組み合わせながら、こちらの希望時間に会場入りできるように対処してくださいました。移動手段に関する連絡は非常に密に行われ、安心して見通しを持って計画を立てることができました。

バスケットボール競技において、テクニカルディレクター(TD) 会議に出された案件としては審判のコールが異常に多すぎるというものでした。実際に同じバスケットボールであっても、国内と海外では審判の国民性が少なからず反映され、日本とは違うコールに戸惑うこともありました。しかし、それでも審判の組み合わせについては、対戦カードの国や審判の出身地域などの配分も十分に配慮がなされており、一方が不利になるようなことはなく、問題はありませんでした。

審判のコールについて、デフバスケットボールは敵味方の声など、音声による情報が遮断されるため、背後など死角での接触がどうしても多くなります。死角での接触に対するコールが多くなったことで、審判自身の心理面において、疑わしい場面では笛を吹きやすい雰囲気全体にありました。そして近代バスケットボールはパワープレーが重要視されてきており、オフェンスに有利なルールとなっているため、ディフェンス側は対応策としてファウル数を計算しながらあえてファウルをする状況も生まれています。審判はゲームをコントロールするため、被ファウル側が不利になるコールはしないなどの対応をしており、今回は言語の壁(健聴者、ろう者:手話、音声英語、音声ブルガリア語など)によってその対応にばらつきが生じてしまっていたと推測されます。さらに接触転倒については、日本国内ならばチャージングを取る場面でも、デフリンピック期間中においては、転倒の原因となった動作がオフェンス側にあるのかディフェンス側にあるのかが体格差によって隠されてしまい、故意による接触なのか、そうでないのかが判断しづかったため、総じて日本は審判のコールに対して不利でした。我々は、今までの国際大会の経験から「審判のコールに必要な以上に神経質にならない」よう、選手に周知し、納得のいかないコールに対しても冷静にアジャストするよう求めてきましたが、今後国際大会においては、被ファウルについても含め、国際試合における審判へのアジャストも強化のテーマとして重要になってくると考えられます。

7. 競技規則の適用(問題点など)

事前に通知のあった情報が変更されることはなく、また細かい確認事項についてもTD 会議によって文面および国際手話によって参加国全体で共有されたため、特に問題点は見当たりませんでした。

8. 大会参加までの準備状況

2011 年度に開催されたDIBF(国際デフバスケットボール連盟)パレルモ世界選手権大会から2013 年のデフリンピックに照準を合わせて、主に筋力系、持久力系、体幹系のトレーニングを意識して選手の基礎体力の強化・向上をはかりました。

同時に近年のバスケットボールの潮流としてパワーバスケットボールが広まってきており、海外の国々はアジアからの出場国に対しては、サイズの優位に立てる利点を生かしてることが予想されました。そこで、普段の練習からコンタクトプレーを意識したメニューを取り入れ、ぶつかり合うことについても慣れていくように指導をしてきました。日本ではファウルになるプレーでも、海外ではコールされないことがあるため、日本代表強化合宿では日本のバスケットボールの基準にこだわらないよう毎回確認しました。戦術面として、ほぼ1ヶ月に1回程度の合宿の中で全国から集まる候補選手内による綿密なチームオフェンス、チームディフェンスを熟成させるのは厳しいと考え、よりシンプルで且つ弾力性のあるシステムを考案しました。3人の選手が動き、日本では認知度の高いUCLA シングルポストのオフェンスの比率を減らし、2対2の合わせプレーを重視しました。そうすることで、動く選手はボール保持者とレシーバーの2名という最も単純な組み合わせになり、ディフェンスのプレッシャーがかかる状況の中でもルールに従って動くレシーバーに注目し、且つレシーバーの動きも予想できると考えました。このような2対2の合わせを数種類準備し、同時に組み合わせることで、ボール保持者はシュートが難しいと判断した時、ボール保持者の動きに対して決まった動きをとる複数のレシーバーへのパスを自由意志で選択することができるシステムにしました。このシステムだと、ボール保持者は声が聞こえなくてもどこにレシーバーが待機しているかを予想でき、探す必要がなくなると考えました。また、海外のデフバスケットボールでは主流となっているゾーンディフェンスへの対策にも力を入れました。パレルモ世界選手権大会ではアウトサイドシュートを得意とする日本に対して、3-2ゾーンを数くチームが多かったのですが、当時は日本でも3-2ゾーンを行うチームは少なく、経験不足が出てしまったという反省がありました。そこで、デフリンピックに向けて3-2ゾーンへの対策を十分に行い本大会に臨みました。

ディフェンスにおいては基本的にマンツーマンとし、マッチアップにおける身長差は、ボールマンに対峙する1番目のディフェンスがノーミドル(リングとリングを結ぶ仮想のラインをミドルラインと言い、ミドルライン方向に行かせないディフェンスのこと)を実行、2番目のディフェンスがディナイ(パスコースを塞ぐポジションを取る)を実行、そしてボールマンがドリブルによって攻めるしかないという状況を作り出し、3番目のディフェンスがミドルライン上にポジションを取り、常にヘルプに行ける体制を保持し、ゴール下への侵入があった場合はダブルチームに行くという約束事を徹底させました。

合宿においては約束事の徹底に多くの時間を割き、その他に管理栄養士を招聘し栄養学講習会を実施し、合宿前及び合宿期間中の食事についての指導を受けました。また、アンチ・ドーピング講習会、体幹トレーニングのためにストレッチポール・ひめトレポール講習会を実施しました。選手の意識も高まり、合宿時にはストレッチポールを持参し、デフリンピックにも5本持っていきコンディション維持に努める様子が見られました。

9. 反省・まとめなど

今大会は前回の反省を踏まえ、海外選手とのサイズの差を埋

めるためには何が必要かを考えて実行してきました。しかしながら結果は6試合のうち3試合は競り負けてしまい、前回のデフリンピック同様6位という結果でした。競り負けた原因として、データ（シュート決定数／シュート試投数＝シュート決定率）を見れば、シュートを打てなかったのではなく、打ったシュートを決めることができなかったということは明白であります。今後は海外選手との体格・身長差のみならず、「シュートを決めること」を日本デフバスケットボール全体の強化重点課題と位置づけ、シュートに力を入れていきたいと考えています。

最後に、温かい支援をいただいた全日本ろうあ連盟及び日本パラリンピック委員会関係者の皆様方、そして日本デフバスケットボール協会、選手のご家族の皆様にはこの場をお借りし、心より厚く御礼を申し上げます。

トレーナー 佐々木 愛

トレーナーとしてデフバスケットボール日本代表女子チームに関わり始めてから1年が経ちました。まずは、チームの選手やスタッフ、デフバスケットボール関係者の方々、ご協力や応援をしてくださった方々、そして現地でご協力いただいた日本選手団本部や現地の方々に厚く御礼を申し上げます。トレーナーの経験はあっても、障がい者や日本代表の経験はないため、この大会を通して多くの経験をさせていただいたことに多大な感謝をしています。本当にありがとうございました。

デフリンピックを総括すると、メダル獲得が叶わなかったこと、4年前の成績を超えられなかったことに悔いが残ります。今回、結果が出なかったことに対する責任は私にあると思っています。選手達と今大会における目標や目的に対する差があり、コミュニケーション方法の違いにより信頼関係が構築できなかったと感じました。それでも、皆様にご協力をいただきながら、日本選手団の一員としてベストな状態を作るため、チーム一丸となって最後まで諦めずに闘えたことは、一チームとして仕事をするのとは少し違う喜びや楽しさがあり、幸せな2週間を過ごすことができました。4年後のため、今後は新たなスタッフで一から作っていくことを強く望んでいます。

デフバスケットボールと関わったこの1年間を総括すると、今まで関わってきたチームとは違うコミュニケーション方法のため、言っていることが分からない、伝えたいことが伝わらないということが多く、異国の世界で仕事をするような感覚を抱き、信頼関係を得るための手段が少なかったように感じます。それでもトレーナーとしての役割は変わりありません。チームから求められるものが分からなくても、私自身が行う仕事は、身体に関すること、気持ちに関すること、教育的指導など、競技で成績を出すためにできる限りのことをやることでした。これらは今までと変わらないと考えていましたが、チームと私の中で差があった部分だと感じています。

あまり区別をしたくないですが、ろう者と健聴者で何かやり方が違うかもしれないと思った時もあります。何か特別なやり方があるのではと思い、自分の意見は言ったものの、納得するまで意見交換をしたことはありませんでした。しかし、日本選手団の一員、日本代表チームのスタッフの一員としてははっきり分かったことは、オリンピック・パラリンピック同様、国や人から求められていることは、ろう者も健聴者も変わらないということでした。オリンピックやパラリンピックに比べたら、知名度や環境が整っていない部分や個人の意識の差もあります。知識として知らないこと、経験が足りないこともたくさんある

と思います。大事なことは、デフリンピックという国際オリンピック委員会からオリンピックの使用を認められた大会に出場する者として、自分達が心身ともに相応しい人物になることが必要であり、今後は競技面だけでなく、選手自身の内面への指導も求められるのではないかと思います。一人ひとりが自分を律し、真剣に取り組むことで、今までデフスポーツを知らなかった人が興味を持ったり、好印象を与えたりするきっかけになるのではないかと思います。

4年後のデフリンピックで結果を残すために、これからやらなければいけないことはたくさんあると思います。まずは、基本的な部分を徹底的に行うことです。バスケットボールの技術の前に、基礎体力を作ることが大変重要になります。十分な体力を備えた身体があって初めて技術が向上するであろうし、勝てる気持ちも作られると考えます。奇跡という形のないものに頼るよりも、努力をして自ら勝利を掴むチーム作りが必要だと感じました。そのため、明確な目標を掲げ、共有し、計画を立て、環境を整え、4年後に向けて着実に歩んでいければ良いと思います。

アシスタントコーチ 会田 孝行

2013デフリンピックにおいて女子バスケットボール部門のスタッフに関わらせていただく機会に恵まれました。デフリンピック期間中チーム内において私の主たる役割は選手・スタッフが試合及び練習に専念できる環境を作ることでしたが、目標の成績を収めることができなかったこともあり、力不足であったことを痛感しています。

国際大会では慣れた日本の環境とは異なる中で試合に臨まなくてはなりません。そのためには、選手やスタッフ達がいかに関わることができるかが重要であると考えています。食事、移動手段、氷、水などの物品の確保など、細々とした調整事項が多くあります。それらのことは出発前にヘッドコーチやトレーナーと相談し、確認を行った上で本番に臨みましたが、やはり現地に着いてみないと分からないことがありました。特に今回は、体育館までの移動手段や練習場所が確保されていないことで、スケジュールを立てるのが難しい部分がありました。試合に向けて、体調、メンタルを整えていく選手達にとっては好ましくない環境でありましたが、本部スタッフのご尽力により見通しをたてて対応することができました。また、中には国際大会を経験している選手もあり、どのような状況の中でも自分なりのリズムで試合に臨んでいましたし、初めて国際大会に参加する選手にそれぞれの経験を伝えることで、チームとしてのまとまりと成長を感じ、今後に向けて期待を持つことができた大会でもありました。

しかし、6試合中1勝5敗という思わしくない結果で終わってしまったことは到底納得できるものではありません。そのために、今大会を通して浮かび上がってきた課題を反省し、今後の世界大会、デフリンピック等の国際大会において、目標のメダル獲得につなげていくことが自分の使命だと受け止めています。それがデフバスケットボール全体のレベルの底上げにつながると 생각합니다。

言うまでもなく私たちは勝ちにこだわり、そのために選手もスタッフも懸命でした。しかし、それでも勝てなかったのは、単に「弱かった」だけです。では、何が「弱かった」のかとなると、メンタル面の強さとシュートの決定力であると考えています。確実に決めなければならないシュート、ここぞという時

に決めなければならないシュートを打つ場面が少なかったことです。体格差は理由になりません。それは初めから分かっていることであり、体格差を補って余る程のスピードとシュート力、これが日本の生命線だと考えますが、それを発揮できませんでした。また、体格差をものともせずにゴールに向かっていくメンタルの強さも発揮できていませんでした。ベンチにいないが選手のメンタル面を引き出すことができず、歯がゆい思いでした。また私自身がヘッドコーチをサポートし、必要な時に適切なアドバイスを行うことができるほどの力量を持ち合わせていなかったと思います。選手の持ち味やメンタル面の強さを上手に引き出していくのも重要なベンチワークの一つだと考えています。今後様々な経験を積み重ね、試合中も適切な助言や指示ができるようなスタッフでありたいです。

また、この大会を通して感じたことは、海外遠征の機会が少ないことです。強化合宿において対戦国の状況を想定した練習試合を行ってきましたが、あくまでも慣れた日本の環境内でした。海外遠征において、いつもとは異なる環境でも選手が本来の力を発揮できるような経験を積ませることで、選手自身の持ち味やメンタル面の強さを引き出し、それが国際大会における結果につながると 생각합니다。予算や日程などクリアしていかなければならない課題もありますが、国際大会で結果を残すためには真剣に検討しなければならないと考えています。

最後になりますが、このデフリンピックにおいて多くの方々にご支援、ご協力をいただきました。皆様のご厚情に深く感謝の気持ちを申し上げます。

選手 岩崎 葵

初めてデフリンピックに出場しました。結果は前回のデフリンピック順位と同じでしたが、とても貴重な経験をさせていだいたと思っています。私が大会を通して感じたことは、日本がもっと強くなるためには海外遠征などで経験を積んでいくことが必要だということです。そして、次の世代には世界を相手に通用するセンターが必要だと思いました。

チーム全体の反省点は、勝てそうで勝てなかった試合をしたことです。敗因は、メンタル面だと思います。点差を広げられたり、縮められたりしたとき日本は焦ってしまい、いつも通りのプレーができなかったと思います。国内ではシュートが入るのに海外では入らず、一方で相手にセカンドチャンスを与え過ぎた点については、次の大会までに改善していかなければならないと思いました。しかし、1試合ごとにチームが成長したと思います。そして4年後も同じメンバーで出場できれば確実に強くなると思いました。

個人の反省点は、ミドルシュートがあまり入らなかったことであり、最も大きな課題だと思いました。海外での生活や、日本とは異なる海外のコートなど、普段と違う環境においてもミドルシュートを決められる選手にならなければならないと思いました。国内で通用するプレーが海外では通用せず、体格でも負けているというところで苦しみましたが、1対1では海外の選手相手に通用したのがすごく嬉しかったです。今回のデフリンピックを通して、もっとシュートの技術を磨き、メンタル面も強くなれば国際大会では勝てないということを感じました。2年後の世界選手権では後悔することのないようさらに研鑽を積み重ねていきたいです。

デフリンピックを振り返り、今回はメダル獲得を目標に頑張りましたが、残念ながら結果としては4年前と同じ6位という成績に終わりました。私は2年前に世界大会を経験しましたが、デフリンピックは今回が初めてでした。2年前より、今回の日本代表として感じたことがたくさんありました。どの試合においても結果を出すために欠けてはならないと思ったことは、『決定力』でした。どんなにフォーメーションが下手でも、相手よりも多くシュートが入れば勝ちであると思い知られた大会でした。日本はどの国よりも相手チームのディフェンスに対応できるよう準備をしており、それぞれのディフェンスに対してフォーメーションプレーに持っていけたと思います。ただ決定力がないため、勝ちという結果につながらなかったことについて、非常に無念な思いです。これからの大会に向け、日本が必要な力は何かを考えたとき、一番に必要なのは「決定力」だと強く実感しています。そして次に必要なものは何かを考えると、やはりどんなに大きい相手でも身体接触を恐れない度胸だと思います。今回のメンバーで気持ちが折れるといったことは私の中ではなかったと思います。誰もが、チームのため、ベンチのため、日本のために全力を尽くすといった『全員一丸』の精神で戦いぬくことができたと感じています。しかしながら、1対1では、国内にいるときよりゴールに向かう気持ちが弱かったと思います。国内でできるプレーがデフリンピックでもできたかという、全体的に少なかったように感じています。しかし、全員気持ちが強く、最後まで諦めずに共に戦ったことは、私の中で宝物となりました。

そしてこれからの日本代表のために、私が協力できることは惜しまず、サポートしていこうと思います。私にはろうの子供が2人います。そして私が子供を連れて通うろう学校の子供達はデフリンピックという大きな世界大会があることも知っています。たくさんのろうの子供達のためにバスケットボールクリニックや、様々なイベントを開き、一人でも多くのろうの子供達が小さい頃からデフリンピックへの出場という夢を抱くことができるよう、活動したいと思います。同時に、次の日本代表が更に成長できるような手助けしたいと心から思っています。

選手 大庭 紀美

目標だったメダル獲得には到底及ばず、前回台北デフリンピックと同様の6位で終わった3回目のデフリンピックでした。過去に対戦したことがある国のビデオを観るなど、対策を練りましたが、6戦中1勝しかできなかったという厳しい結果に終わりました。また、現地においても水や食事には十分注意していましたが、自己管理不足で試合前日に発熱・腹痛を起こしてしまい、万全の状態では初戦に臨むことができませんでした。予選リーグでロシアに5点差、5位決定戦でイタリアに8点差で負けてしまいました。予選でのギリシャ戦は26点差で負けたものの、最初の1Qは14-9と5点差のリードがあり、勝てるチャンスのあるゲームでした。ロシア、イタリアは2年前の世界選手権でもシーズンゲームの末、敗北を喫しており、今回こそはどうしても勝ちたい相手でした。敗因はそれぞれのゲームごとにありますが、全体を通して共通していることは2つあると考えます。

①シュートの決定力不足

体格で劣る日本はシュートチャンスが少なく、またセカンド

チャンスを狙うことが非常に困難であるため、ノーマークで打ったシュートは確実に決める必要があります。ロシアやイタリアは、格上のギリシャやリトアニアと対戦した時でも、数少ないシュートチャンスをきちんと決めていました。ノーマークや容易に入りそうなシュートのミス、またはパスミス、キャッチミスなどのターンオーバーをしなければ勝てた試合だったと思います。

②スタミナと精神面におけるタフさの不足

高さ、パワーで勝負する外国勢に対抗するためには、40分コートを走り回ることができるスタミナと、試合の流れに押しつぶされない精神的なタフさが必要であると考えています。国内での試合以上に体力を消耗し、相手のペースで試合が進んでいる流れを引き戻すための精神的なタフさが足りないために、特定の時間帯で無得点の状況が続き、その間に多く失点する場面がありました。前に述べたシュートの決定力不足もあり、相手がペースに乗っている時に、じっと耐えられる精神的なタフさが日本にはなく、一気に10点近く取られてしまいました。慌てずじっくりパスをつなぎシュートに持って行くこと、ディフェンスを粘ることをすれば試合の流れを変えられたと思います。

バスケットボールはチームスポーツであり、「全員一丸」を掲げて試合に臨みました。しかし、結果としてメダル獲得はるか上位に食い込むことすらできませんでした。一方で、このチームが「全員一丸」となってバスケットボールをすることができたのは大きな収穫でした。女子日本代表は2005年メルボルンデフリンピックに初出場し、世界を相手に思うように勝てなかった悔しさをバネに2009年台北デフリンピックでは6位と躍進しました。しかし周囲からの「チームとしての評価」は低いものでした。得点王などのタイトルを受賞したことは嬉しかったのですが、チームとしての評価よりも私自身の評価が先行してしまったことに違和感を覚えました。そのため今回のソフィアデフリンピックに向け、私はチームのために何をすべきかを最優先に考え、行動してきました。その結果、私がコートに立てなかった初戦のギリシャ戦の第1ピリオドを、14-9とリードして終了したことは、選手全員が個々の役割をコートの上で最大限に発揮することができたからであり、これが「全員一丸」ということなのだと思えました。結果がすべてなので負けたことには変わりないのですが、このように4年ごとに日本代表チームが成長していることを3回に渡るデフリンピック出場を通して実感しています。今後は、今回の経験を次世代の若い選手達へ繋いで行きたいと思っています。

最後に、これまでの合宿等でお世話になった方々、デフリンピック開催中にはろうあ連盟本部をはじめとした多くの方々のご尽力、そして応援して下さった方々に感謝の気持ちでいっぱいです。本当にありがとうございました。

選手 緒方 沙織

初めてのデフリンピック出場でした。私は2年前に世界選手権大会を経験しており、そこで世界の高さを痛感しました。今大会では世界選手権大会の反省から、世界の高さにどう対抗するかを意識しながら練習を重ねてきました。ゴール下では高さに不利であるため、ゴールから少し離れたミドルシュートなら世界相手にも勝負できると考え、そのエリアからのシュート練習を徹底的に行いました。予選リーグではヨーロッパ勢の強豪が揃っており厳しい戦いが続きました。

初戦は世界ランク4位のギリシャでした。前半は接戦でした

が、後半相手のペースに飲み込まれてしまい、大差をつけられてしまいました。ギリシャのディフェンスを攻略できず、日本はなかなか点を決めることができませんでした。

2戦目はロシアで、世界選手権大会では4点差という僅差で負けた相手でもあり、今回は絶対勝つつもりで試合に臨みましたが、しかし、相手もこの2年間で成長しており、苦戦を強いられました。そんな中でも日本らしさを発揮することができましたが、なかなか点に結びつかず、またしても5点差という僅差で負けてしまいました。

3戦目は世界ランク3位のリトアニアでした。高さもあり、正確なパス回しをするチームでした。日本らしいプレーを発揮できず、点を重ねることができませんでした。予選リーグを終え、得失点差で決勝トーナメントに進み、最初の相手は世界ランク2位のアメリカでした。体格差があり、特にゴール下はとて強く、シュートも正確でイーージーシュートは必ずといっていいほど決めてきました。世界ランク上位の国と試合ができて良い経験となりました。5～8位決定戦の相手は、世界選手権大会の時、僅差で負けたベラルーシでした。相手は前回よりもメンバーが増えており、長身揃いでしたが、日本の持ち味であるスピードを活かし、速攻を重ねて点を取りに行きました。一時追いつかれましたが、そのまま逃げ切り2年前の雪辱を晴らすことができました。5～6位決定戦に進み、イタリアとの対戦になりました。イタリアは世界選手権大会で1勝1敗の相手です。メンバーはほとんど同じでしたが、2年前に比べてレベルがあがっていました。前半は日本がリードして逃げ切りましたが、後半始まってすぐにイタリアのペースに飲み込まれてしまい、そのまま終盤まで巻き返すことができずに負けてしまいました。その結果、日本は前大会と同じ6位という結果に終わりました。前大会の成績を超えることをチームの最低限の目標としていただけに悔しい気持ちが残りました。

今大会のチームは世界選手権大会と比べるとレベルも上がり、世界の強豪相手にも臆せず、日本らしいプレーができたと思います。またパス回しもよくなり、課題であったゾーンディフェンスに対する攻めもできていました。大会を通しての課題として、シュートの確率の低さが挙げられます。今後、日本にこの課題を持ち帰り、次の世代の選手たちに世界の厳しさを伝え、高さにどう対抗するか共に考えていきたいと思います。

選手 鈴木 裕加

台北デフリンピックに続き私にとって二度目のデフリンピックとなった今回、日本の成績は前回と同じ6位に終わりました。シュート決定力不足が響き、ロシア戦を5点差で、イタリア戦を8点差で落とすという、勝てそうで勝てない試合が続きました。しかし今後の日本の課題、強化すべき面は明確になったと思います。

ディフェンス面では、前回と比べると確実にレベルアップしたことを、対戦してみて実感することができました。特にギリシャ戦では、立ち上がりからワンアームウェイでプレッシャーをかけ、1Qは日本のペースで試合を進めることができました。台北デフリンピックに続き体格で劣っていても全員で身体を張ってスクリーンアウトをすることで、確実にリバウンドを取れることが再確認できました。

オフェンス面でも今まで相手のディフェンスに合わせて攻め方を変える練習を積み重ねてきたので、コートに立っている5人だけでなくベンチメンバーも含めて全員でコミュニケーション

ンを瞬時にはかれました。しかし、シュートを打つところまでは持って行けたもののイージーシュートを外し、ロングシュートの決定率が低かったことが響き、後半徐々に点差が広がってしまったゲームが多くありました。

自分自身は世界選手権も含めると三度目の国際大会であり、初戦のギリシャ戦から会場の雰囲気や相手との体格差にのまれることなく、落ち着いたプレー、ゲームコントロールができたと思います。合宿で練習を積み重ねてきたオフェンスパターンを何度かゲームのなかで成功させること、視野を広くしてフリーの味方にアシストすることができました。また、出発直前までスランプに陥っていたフリースローについても、現地に到着し意識して調整をしたことで、大会を通して決定率を高く保つことができたこと、デフリンピックでは初となる、ヨーロッパ勢のベラルーシに勝利できたことが、自信に繋がりました。

反省点はリトアニア戦の際、オールコートで当たられ、うまくパスを繋げない、スリーポイントシュートを打つタイミングが早い場面が何度かあったことでした。しかしどちらもチームメイトがカバーしてくれました。「全員一丸バスケ」のスローガン通り、試合を重ねるごとに団結力も高まり、最高のチームになっていきました。日本はまだ成長できると思います。今後は若手の育成も含めて活動していきたいと考えています。

多くの方の支えがあり今回ソフィアデフリンピックに参加することができたこと、この場をお借りし心より感謝いたします。ありがとうございました。

選手 田中 美穂

2年前の世界選手権大会に続き、日本代表として2度目の国際舞台となりました。前回の世界選手権大会で全く歯が立たなかったギリシャ相手に序盤で点差を広げ、シーソーゲームができたのは日本が強くなったということだと思います。日本の持ち味であるチームワークを活かしたディフェンスは効果があったと思いますが、日本に足りないのはシュート決定力であり、シーソーゲームで勝つためにはシュート力の向上が最優先であると考えます。ロシア戦では2年前に4点差で敗北を喫したチームであり、自分の中で次こそ勝ちたいという気持ちが強い相手でした。残念ながらあと5点届かず、倒せるようで倒せませんでした。ロシアはゴールに対する執着心が強く、当たりの強いチームでしたが、体格差に対しても一歩も引かなかった日本のハートの強さを見せることができたので良かったと感じています。リトアニア戦では自分の持ち味を出すことができなかったことが一番の反省面です。日本にはシュート力がないと思いました。続くアメリカ戦ではチームのために自分にできることは何かを優先に考え、意識しながらプレーしました。前半だけでも相手の得点を抑えられたことは自信を持ちたいと思います。ベラルーシ戦では自分にシュート力がないことを改めて知りました。速攻でファウルをもらい、フリースローを2本決めたことは自信を持ってましたが、どこからでも得点できる力を磨きたいと思いました。イタリア戦では前回の成績以上の5位を獲得できる機会でしたが、後半の得点差を縮めることができなかったことが一番の反省となりました。バスケットボールにおいて、シュートを決める力がどれだけ大切なか思い知りました。

全てデフリンピックのために自分の得意な部分、自分たちの課題となる部分を磨いて大会に臨みましたが、結果を残すことができずまだ世界の壁は厚いと感じました。世界を相手に戦っ

たことはいい経験となり、全員一丸となって楽しんでプレーできたことは良かったのですが、応援してくれた様々な人に前回の成績以上の結果を報告することができなかったことが悔しいです。しかし、今のメンバー達と共に戦うなかで、チームワークを大切にするということを学びました。これから自分のやるべきことは、世界を相手に戦った私自身の経験や、デフリンピックは素晴らしい大会だということを周りや次の世代のプレーヤーに伝えていくことだと思います。いい経験をさせていただけたことに、心から感謝いたします。

選手 永田 裕子

私が2013年ソフィアデフリンピックの女子バスケットボール日本代表に立候補したきっかけは、周りのデフバスケットボール仲間に2009年台北デフリンピック出場者が多く、刺激を受けたからです。色々な経験談を聞き、学生時代に健聴者と一緒にバスケットボールをしてきた私としては、同じ障害を持つ仲間と手話でコミュニケーションをとりながら同じ目標に向かって練習を積み重ね、日の丸を背負い、世界に挑戦することに変な魅力を感じました。また、自分のバスケットボールのスキルを高め、デフバスケットボール日本代表の勝利に貢献したい気持ちがあり、日本代表への立候補を志願しました。

2011年8月に初めて日本代表候補合宿に参加した時、周りの候補者は私よりバスケットボールのスキルや身体能力が優れている選手が多かったため、代表に選出されるように毎月1回のペースで行われた合宿に一度も休むことなく参加しました。合宿以外では常にデフリンピック本番の試合でプレーをするために、現時点で必要な自分の課題を考え、休日や就業時間外に地元のチームでバスケットボールの練習や自主トレーニングに打ち込みました。しかし、今デフリンピックの全6試合のうち、勝てたのはベラルーシ戦のみで、ギリシャ、ロシア、イタリアの3戦は、接戦の末負けてしまったという結果でした。約2年間で、メンバーと共に築いてきたチームプレーと徹底的に練習してきたオフェンスのフォーメーションやディフェンスのシステムを生かし、奮闘したにも関わらず、負けてしまいました。敗因は、「シュート決定力の不足」だと考えます。私たちは頭で考えながら動くプレーはできていましたが、シュートの確率が低かったと思います。それに対し、長身で手足が長く、体重や体格に勝る外国の選手は日本人よりも簡単にゴールに迫り、シュートを決め、外してもオフェンスリバウンドをとるため、セカンドチャンスを与えてしまうことが多かったように思います。

私自身、国際大会に出場したのは今回が初めてであり、日本代表としての自覚やシュートの確率の向上などの課題について事前に想定することができませんでした。デフリンピックの前に1度だけでも海外遠征などで外国人選手との試合を経験していれば、少しは対策ができたのではないかと考えさせられました。今回、身を持って世界の壁が本当に厚く、高いことを実感し、学ぶことができたことを、今後何らかの形で2017年トルコデフリンピックに出場する選手に伝えることが自分の役目だと考えています。

選手 古 香

3度目のデフリンピック出場でした。前回の台北デフリンピックでは、同じアジア太平洋ブロックのオーストラリアや中

国に勝ち、アジア1位となることができましたが、欧米諸国相手には、自分達の持ち味、ベストのパフォーマンスを出す前に抑え込まれてしまい、とても悔しい思いをしました。今回ソフィアデフリンピックでは相手に呑まれないよう、自分たちのプレーを貫き通し勝とうと強く思い、試合に臨みました。しかしながら、1勝5敗、前大会と同じ6位という結果でした。初戦のギリシャ戦の序盤はとても良い流れで始められたのですが、途中で失速してしまい、慌てて追い付こうとしましたが、勢いづかせてしまった相手を止められず負けてしまいました。ただ、強豪ギリシャを相手に序盤に試合の流れを自分達のところに持っていけたのはとても良かったです。また、ギリシャが多用するスクリーンプレーへの対応を事前に練習してきたことを活かすことができました。2試合目のロシア戦では5点差での敗戦であり、ゲームを通して終始総合力では拮抗していたと思います。しかしパワーで競り負け、一番悔しい試合となりました。3試合目のリトアニア戦は、相手の動きは遅かったのですが、高さで負けた印象が強くあります。世界で勝つためには日本はもっと高さに対抗するオフェンス、ディフェンスを磨かなければならないと思いました。順位決定戦1試合目のアメリカ戦は、自分達のプレーはあまりできませんでした。ディフェンスで相手を苦しめることができたと思っています。今大会の試合の中で、一番センターのパワープレーが多かったので、それを抑えるためのチームディフェンスはこれから必要だと思いました。次のベラルーシ戦は、相手も必死でラフプレーも多く、がむしゃらに向かって来ましたが、日本はひるむことなく戦い、勝利をあげることができました。私は途中であった接触で、頭部を強打しコートに立てなくなりましたが、チームが勝つことができ本当によかったと思います。最終戦のイタリア戦ではドクターストップのため試合に出られませんでした。前から皆で確認していた「コートに立つ選手も、ベンチから応援する選手も皆同じ試合を戦う選手だ」という言葉を胸に、カー杯応援し、選手たちにアドバイスを送り続けました。

今大会では、私はなかなか自分の納得いくプレーができませんでしたが、一瞬一瞬を大事に戦うことができました。次の大会に向けて日本がやらなければいけないことはまだまだたくさんありますが、次の代表選手に対して今大会で感じた世界でも通用する点や反省点と課題などをしっかり伝え、日本が世界でも通用する力をつけられるよう、支えていきたいと思っています。

選手 宮永 順子

今回のデフリンピックに向けて、私達日本代表は月に一回の頻度で合宿を行いました。始めは基礎体力作りをメインに行い、代表決定後はフォーメーションなどを多く繰り返し、選手同士のコミュニケーションを増やし、チームワークを深めていきました。

初戦のギリシャ戦は前半までは抑えていましたが、後半は相手のペースに呑み込まれてしまいました。でも、初戦にしては良いスタートだったと思います。ロシア戦では互角に戦うことができましたが、敗因はシュート決定力が低かったことです。リトアニア戦では世界の壁の厚さを改めて思い知らされた試合でした。続くアメリカ戦でも完敗でした。マンツーマンディフェンスもゾーンディフェンスも通用しませんでした。むしろ、逆に大変勉強させられた試合でした。今回のチャンピオンとなったアメリカチームと試合できて光栄だと思います。ベラルーシ戦も互角で最初はリードしていましたが、逆転されてしまった瞬間がありました。でも、チーム全員の力で巻き返すことがで

き、やっと勝利を掴むことができました。この勝利はデフリンピックでなかなか勝てず一勝が遠く感じられた分、喜びが非常に大きかったです。チームメンバー全員でもぎ取った勝利でした。イタリア戦は5～6位決定戦で絶対に負けれない試合でしたが、終始相手のペースに呑み込まれたまま時間が過ぎてしまい、勝利を手にすることができませんでした。外国は本当にメンタル面や技術の面において日本より優れていると実感しました。今後、メンタル面、技術面など足りない部分をさらに磨かなければならないと痛感しました。

今回のデフリンピックは初めての参加でしたが、家族を始め、職場の皆様、合宿でお世話になった皆様、デフバスケットに関わって下さった皆様、激励メッセージを下さった皆様、陰ながら応援してくれた皆様、ブルガリアまで来て応援してくれた皆様、怪我した膝を治療してくださった先生方がいてくれたからこそ、私たち日本代表はここまで頑張ることができました。また、一緒に頑張ってきたチームメイトや監督やスタッフのお陰でもあります。感謝しきれないくらい心から感謝しております。今のメンバーと一緒に世界へチャレンジできたことを誇りに思います。デフリンピック出場は私にとって一生忘れられない貴重な経験となりました。

日本代表はこれで終わりではありません。ソフィアデフリンピック日本代表の経験を活かし、今後のメダル獲得ができるチーム作りのサポートをしていきたいと思っています。

選手 渡辺 亜紀

デフリンピックに向け、2年かけて強化合宿を重ねてきました。強化合宿では、世界の高さとパワーを想定してフィジカルの強化をはじめとし、チームで戦うために攻防と共にフォーメーションを繰り返し練習してきました。私自身もチームでは唯一のセンターとして、ゴール下のシュート率を高めること、ポストプレーで場所の取り合いに勝つためのスキル向上に努めました。

予選リーグでは世界ランクで上位に入るギリシャと当たりました。ギリシャはフィジカル面ではそこまで強くないものの、フォーメーションを仕掛けてくるチームということが分かっていたので、過去のデフリンピックの経験を活かし、パターンの傾向を分析し、チームで話し合うなどギリシャ対策の練習を重ねて来ました。その成果があり、1Qでは点差をつけて勝っていましたが、その後、ギリシャに得点を重ねられ追いつかれてしまい、結果的には負けてしまいました。大変悔いの残る試合でしたが、あと少しというところでの敗北でしたので、逆に自信がついた試合でもありました。続いて、リトアニアとロシアに負けてしまいましたが、試合を重ねるなか、少しずつチームまたは個人で出てきた課題を修正しては修正の繰り返しで、チームがより良くなっていくのが実感できました。ここで改めて国際試合の経験不足を痛感させられました。予選リーグでは全敗となりましたが、得失点差で決勝トーナメント進出となりました。決勝トーナメントの初戦は前大会準優勝国のアメリカが相手となりました。予選リーグでアメリカの試合をチェックし、チームでアメリカ対策の練習やミーティングを重ねて来ました。しかし、試合が始まるとフィジカル面で圧倒的な差をつけられてしまい、厳しい敗北を喫しました。5～8位決定戦に進出し、ベラルーシ相手にやっと勝利することができましたが、5～6位決定戦でイタリアに僅差で負けてしまいました。

自分自身にとっても、日本にとっても、様々な面で課題がた

くさん残ったデフリンピックとなりました。デフリンピックで結果を出すために、これまでの2年間で考えうる課題をクリアし、対策を講じてきましたが、やはり国際試合の経験の差が大きく出てしまったように感じました。今回のデフリンピックで得た課題を次世代の日本代表に伝えられるように、行動を起こさなければならないと考えています。

選手 伊瀬知 亜希子

女子バスケットボール日本代表として出場し、大会期間中に6試合行いました。デフリンピックに向けて2年間合宿を行い、1年半後に正式に日本代表として選ばれ、初めて世界大会に出場しました。私にとって初めての国際大会になりますが、メンバーの中には国際大会の経験者も何名おり、国際大会独特の雰囲気や各国の特徴や、それらの対策などの情報をチーム内でしっかり共有することを図っていきました。そして、「全員一丸」というキャッチフレーズを基に技術向上やフォーメーションにおける意思統一を行っていきました。予選リーグでは、まずギリシャ、ロシア、リトアニアの順に試合を行い、決勝トーナメントでは、アメリカ、ベラルーシ、イタリアと試合を行いました。予選リーグと決勝トーナメントを通して感じたことは、まずシュート率の悪さでした。そして、後半から相手のペースに振り回されてしまうパターンが多かったように思いました。体格の差も敗因の一つとして考えられますが、言い方を厳しくすれば、体格の差は事前に分かっていたことであり、技術で補えたはずだと思いました。しかしながら各国と試合を行い、率直に思ったことは相手のディフェンスで、特にゴール下のリバウンドの場面で、体格の差が想像以上にはっきり表れたことです。リングではねたミスシュートのボールの取り合いでは、一緒に飛び上がってもリーチの長さで、まずボールに届くのが相手のチームになります。パスにおいても、チェストパスの場合、相手のリーチの長さによってコースが遮られ、簡単にパスカットされます。パスカットされると相手チームのボールになり、そこからカウンターでゴールを許すことになります。多くの試合でパスミスしたチームはそこからの切り替えが間に合わず、カウンターを許してしまうパターンが多く感じられました。リバウンドで競り負け、パスカットをされることが多かった理由を考えると、やはり簡単なシュートを外したからだと思います。簡単なシュートをしっかり決めれば、リバウンドで競り負ける場面も減ると思います。日頃の合宿から常にリーチの届かない、床に投げつけるバウンドパスをするようにと言いついてきましたが、いざ本番となると判断が間に合わず「つい」いつものチェストパスを出してしまい、相手のリーチの長さによって通らなかったというパターンも多くありました。まずはシュート率の向上が課題だと感じました。苦し紛れのシュートは打たないことが基本中の基本でしたが、海外のチームではその苦し紛れのシュートがよく入るため、常識の概念が打ち破られた経験になりました。それをふまえ、日本は普段の練習においてもフリーのシュートを磨くだけでなく、ディフェンスの中からシュートを打ち、決めるための練習を増やすべきだと思いました。様々な角度やパターンからのシュートを成功するためにはやはり反復練習しかないと思います。実際に海外で経験し、課題がたくさん見つかったことは大きな収穫だと思います。それらを日本に持ち帰り、ウィークポイントを克服し、将来の日本代表がより確実にメダルを獲得できるよう、今後も日本代表のサポートをしていきます。

ビーチバレーボール競技チーム

監督 牛尾 洋人

① 選手選考

2011年8月より監督に就任し、同年10月のジャパンデフビーチカップ2011の大会結果やスカウティングにより、代表候補選手を選考し、強化合宿に招集し定期的な合宿を実施してきました。2012年9月のデフビーチバレー世界選手権(トルコ)では、デフリンピックを見据え代表候補選手の中から選出を行い、参戦しましたが、男女共にペア変更などもあり、最終的には2013年2月にデフリンピック代表決定戦を開催し、女子1組、男子1組を日本代表としてデフリンピックへ挑みました。

② 成績一覧

日本代表男子：天羽弘志・小林誠宜ペア

月日	VS 対戦相手	国名
	スコア	備考
7/27	Kirillov-Sinelnikov ペア 0 (4-21, 12-21) 2	ロシア 2
7/28	Patola-Kupczalajc ペア 0 (14-21, 11-21) 2	ポーランド 1
7/29	Dyck-Whiteley ペア 2 (21-19, 21-5) 0	カナダ 2
7/30	Baltaci-Konya ペア 2 (21-0, 21-0) 0 Forfeit	トルコ 決勝トーナメントへ
7/31	Dayanov-Selyutin ペア 0 (11-21, 5-21) 2	ロシア 1 9位タイ決定

日本代表女子：小林奈々絵・武内晴香ペア

月日	対戦相手	国名
	スコア	備考
7/27	Moore-Sanders ペア 1 (16-21, 21-11, 13-15) 2	アメリカ 2 予選
7/28	Kireeva-Alexeeva ペア 0 (10-21, 13-21) 2	ロシア 1 予選
7/30	Armeniakov-Bereti ペア 2 (21-17, 21-18) 0	ギリシャ 予選
7/30	Nascimento-Vidal ペア 2 (21-6, 21-6) 0	ブラジル 2 予選：決勝トーナメントへ
7/31	Stukan-Ivanova ペア 0 (11-21, 12-21) 2	ロシア 2 9位タイ決定

③ 成績と評価(男女別)

【男子：天羽・小林ペア】

- ・成績・・・9位タイ
- ・天羽のビーチバレーの経験値は日本選手内でベテランの域に入るほど持っており、2012年の世界選手権にも出場し5位タイという結果を出しています。小林が本格的にビーチバレーに取り組んだのは1年程度と期間は短いですが、インドアバレーボールでは十分な経験と知識があり、また彼の妻が女子代表選手の小林奈々絵選手で常に練習できる相手が身近にいたため練習には十分取り組みました。

二人とも日本国内では優勝して強さを見せていますが、世界

のレベル（特に男子のレベル）はかなり高く、差を感じざるを得ません。今大会のメダリストは日本の健聴者のトップ選手と同等ではないかと思わせる程です。

その中で、同レベルのチームには取りこぼすことなく勝利をつかめたことは大きな収穫であると評価しています。

ただ、メダルに絡む各国に対して、色々と策を講じて戦いましたが、現時点ではフィジカルに圧倒的な差があり、策に嵌めることが適いませんでした。

今後世界と戦い勝利していくには、どうあがいても勝てない高さに対し、守り（レシーブ）と戦略（ゲームの組み立て）で圧倒的に優位に立つ必要があると考えます。

【女子：小林・武内ペア】

・成績・・・9位タイ

・二人は、前回大会の台北デフリンピックにペアで出場しようと試みましたが、最終選考で落ちてしまい悔しい思いをした選手達です。その後、それぞれペアを変え、地道に練習を重ね、2012年の世界選手権には双方ともに代表として出場を果たし、その後また二人でのペアとして再結成をし、今デフリンピックへ挑みました。二人は同県（静岡県）同士ということもあり、自分達だけで本当によく練習に取り組んでくれました。

世界各国のチームと比較すると、この二人は特に身長が低く、参加チームの中で最も低身長ではありましたが、粘り強く戦ってくれたと評価しています。

今大会で、今後の日本チームが世界の高さに対抗し勝利していく為には、粘り強くレシーブする技術、長時間戦える体力、何よりインドアバレーボールとは違う独特の戦略の体得が急務であると考えます。

④ チーム体制と各コーチの役割

- ・監督 / 牛尾洋人
- ・コーチ / 高尾和行
- ・手話通訳 / 根本由家
- ・トレーナー / 竹上舞
- ・GM / 平井望
- ・マネージャー / 會本聡子
- ・現地通訳者 / ティナ

⑤ 競技スケジュール（旅行スケジュール）

- ・7/23：全選手、全スタッフ日本出国
→ブルガリア・ソフィア到着
- ・7/24：会場練習
- ・7/25：会場練習、TD会議
- ・7/26：会場練習、総合開会式
- ・7/27：【予選リーグ】女子 VS アメリカ2、男子 VS ロシア2
- ・7/28：【予選リーグ】女子 VS ロシア1、男子 VS ポーランド1
- ・7/29：【予選リーグ】男子 VS カナダ2
- ・7/30：【予選リーグ】女子 VS ギリシャ、女子 VS ブラジル2
【敗者復活戦】男子 VS トルコ
- ・7/31：【決勝トーナメント】女子 VS ロシア2、
男子 VS ロシア1
- ・8/3：現地練習
- ・8/4：総合閉会式
- ・8/5：現地練習
- ・8/6：ブルガリア・ソフィア出国
- ・8/7：日本到着、解散

⑥ 大会競技運営の報告

私自身初めてのデフリンピック帯同であったので以前のデフリンピックとの比較はできませんが、気になった点を以下に記載させていただきます。

【競技会場】

・正直、最低のコンディションでした。コートは2面のみということで、練習コートもなくウォーミングアップができない状況でした。

また、砂質についても、かなり固く整備されていません。途中コート内だけは砂を耕し少しは柔らかくなってはいましたが、プレイングエリアの大部分がとても固く、選手達は擦り傷を多くつくっていました。膝や腰にも相当な負担がかかっていたようであり、選手にとっては非常に厳しいコンディションだったと言わざるを得ません。

・選手テントや、救護エリアなども一応ありましたが、導線やブライバシーは良いとは言えず、他国同様利用できるものではなかったように思います。

【試合進行及び審判】

・特に大きな問題はなく、スムーズに進行されていました。

【輸送】

・大会開催前の練習の輸送から既に疑問がありましたが、練習時間は朝から夕方まで割り振られているにも関わらず、ホテル～会場間を走るバスは一日2本のみでした。さらにその2本すらも時間が守られておらず、数日後にはホテルや会場に来ることすらなくなってしまいました。

その対応にろうあ連盟も自前の車を手配し、タクシーを手配するなど手段を講じてくれましたが、全競技同様の事態で起こっていた中、車の手配は充分だったとはいえません。今回私はビーチバレー監督として帯同してはいましたが、実態は男女各1チームの計2チームを率いていました。その為試合や練習時間はまちまちであり、2チーム分の車の手配だけでも非常に大変なことでした。

⑦ 競技規則の適用

・2013FIVB ビーチバレーボール競技規則に基づく。

⑧ 大会参加までの準備

・2013年2月：代表決定戦
・代表選手決定以降：定期的な強化合宿や練習時に、現地での食事、飲み物または日本国内での食事（ドーピング含む）についてトレーナーを中心に指導。同様に服用していても薬やサプリメントなどについてもチェック＆指導を行いました。

※アンチドーピング講習も受講（昨年受講済）

・6月：現地でのブルガリア、英語⇄日本語の通訳者手配
出発までの期間に連絡を取り合い、現地情報の入手

※我々ビーチバレーチームは、前年開催されたトルコ世界選手権の結果が、デフリンピック派遣基準をクリアできなかった為、最終的にデフリンピックに出場できるのかどうかがかんがえられず、出場決定したのが2013年5月頃と非常にタイトなスケジュールであった。

また出場できたとしても、全額自己負担というのは決定事項であり、費用の工面や会社への休暇申請など、非常に行動しにくい状況が長く続きました。

⑨ 反省・まとめ

今回、私自身は初めてのデフリンピック帯同、ビーチバレー日本女子チームにとっては2大会連続、男子チームは初めて

の出場となりました。

前年のトルコ世界選手権を経験させていただいたおかげで、世界のレベルや、デフビーチバレーの大会運営や雰囲気はある程度経験していたので、戸惑いなどはほぼなくある程度想定内での行動ができました。

昨年の世界大会でも感じましたが、男女ともにウクライナ、ロシアは実力が突出しており、その2国を他国が追いかけるという図式であり、日本も追いかける2番手グループの一国です。

2番手グループの日本チームがそのグループの中からいかに上位にあがり、メダル圏内に入り込めるかということを今デフリンピックに向けて取り組んできましたが、今回は予選リーグ、決勝トーナメントの1回戦で男女ともにロシアを対戦し9位タイという結果で終了してしまいました。

監督として、基礎練習には充分取り組んできた自負とその成果が試合の随所に見られたことには少々納得していますが、基礎技術を上回る海外の高さとパワーに対抗できる総合的な技術を教えるまでにはいかず、反省しています。

ただ、事前にたてた作戦が何度となく計画通りにはまることもあり、それが勝利につながるまでにはいきませんでした。そのゲームコントロール力を今後さらに磨き上げ、試合経験、練習経験を積むことで、世界で戦うことのできる大きな武器の一つになると考えています。

現時点では、男女ともに他国は身長が高い選手が多く、攻撃力やブロック力では日本チームが追いつくことはかなり厳しいと考えています。

ただ、日本チームは丁寧なプレーをモットーに、レシーブ力、体力、ゲームコントロール、チームワークという部分では、今後世界を相手に充分勝負ができるカテゴリーだと考えています。言い換えれば、そこで他国に勝てなければ試合には勝てないと考えています。

それらに取り組んでいく為には、次回のデフリンピックへ向けての強化だけではなく、その先のデフリンピックも見据えて選手の発掘および強化育成を行う必要があると考えます。

デフビーチバレーの競技人口はデフバレーボール競技人口と比べると10分の1以下だと推測されますが、その少ない中でもしっかりとジュニア世代やユース世代の選手発掘および強化育成をして行くことが今後デフリンピックでメダルを取る為に必要な一歩であると確信していますし、次回以降監督として取り組まさせていただけるのであれば、上記の取り組みを必ず行いたいと思います。

最後に、次回のデフリンピックへ向けて、今回の取り組み以上に本気でメダル獲得を目指したいと考えています。

是非とも、ろうあ連盟の皆と一緒にその目標実現に向けて取り組みさせていただきたくよろしくお願い申し上げます。

アスレティックトレーナー 竹上 舞

今回トレーナーとして帯同させていただきました。大会中の主な取り組みとしては、コンディショニングの管理、ウォーミングアップやクールダウン、ストレッチの促し・指導、試合後のケア、救急処置、テーピング、熱中症予防等です。特にコンディショニングの管理には注力しました。大会の3ヶ月前から定期的に体重と体温の測定を行い、大会中の変化に迅速に対応できるように徹底しました。

大会中、突発的な大きな怪我や熱中症は0名、内科疾患1名、大会期間中のケアは3名でした。普段の合宿や昨年行った世界

大会よりも、本大会期間中のケアを必要とする選手が多かったことが大きな違いでした。連日する試合の疲れ等もあるとは思いますが、それに加えて考えられる要素としては、試合会場の環境があげられます。ビーチバレーボール会場のために設置してあった試合コートは、海岸にある砂とは違い、公園にあるような砂に近い状態でした。普段使用することのない足元の固い砂場は、選手にとって疲労を蓄積する要因になったのではないかと思います。また、いくつもの小石があったこともあり、大きな怪我には繋がらなかったものの、何度か選手に処置を行うことがありました。さらに、ビーチバレーコートに関しては、大会用の試合コートしか設置されておらず、次の試合を控えた選手がウォーミングアップをするためのコートがなく、近くにある草むらで準備やケアを行っておりました。ウォームアップに関して言えば、足場が不安定な場所でのランニングやボールを使ったアップは、怪我に繋がるリスクが高い上に、雑草類で湿疹等が出てしまう可能性があります。このようなリスクを回避するために、可能であるならば、今後ウォーミングアップができる場所も試合会場同様に準備していただければ、より良い環境を選手に提供できるのではないかと思います。

また、今回内科疾患として、下痢と発熱を起こした選手が1名おりました。本大会では、医療チームが素早い対応をして下さり、大事には至らず、試合にも引き続き頑張って挑んでくれました。原因は不明ですが、手洗い、消毒の徹底を行った上での発熱だったため、今回はどうすれば海外遠征でのこういった被害を防げるかが私自身の課題の一つだと感じました。

ホテルで過ごす中で、選手にとって重要とされる食事が、毎回同じ内容であることや、栄養の確保が十分とは言えない程品数が少ないこともありました。選手のパフォーマンスを最大限に引き出すためにも、食事にはもう少し配慮していただければと思いました。

今回、デフリンピックに初めて参加させていただいたことを本当に光栄に思っております。また、同時に数多くのことを学ばせていただきました。また、試合会場までスムーズに移動できたことや、アイシング等に使用する氷の確保、迅速な傷病者への処置、どれをあげても感謝しきれません。この大会中、本部をはじめとする多くの方々の方々の多大なるサポートがあったからこそ、無事に終えることができたのだと実感しております。本当にありがとうございました。

選手 天羽 弘志

①対ロシア 4-21 12-21

周囲から多くの注目を浴び、緊張より放心状態となってしまう、自分らしくないブロックを多く作ってしまい、アタックも決められず、個人とペアがバラバラでした。

②対ポーランド 14-21 11-21

10点まではいい勝負でしたが、スタミナが持たず、呼吸も酷く乱れ、技術的に上手く調整できなくなってしまい、点差が開いてしまいました。

③対カナダ 21-19 21-5

朝1試合目で観客もあまりおらず、ちょうど良い温度で心地よかったため、自分が心身共に一つとなり、個人プレーやペアと一緒に勝利を取って一番嬉しかったです。

④対トルコ 21-0 21-0

相手がどんな選手だったかは分かりませんが、私自身がまた放心状態になってしまい技術的にも悪かったので、自分自身は

負けたと思います。

⑤対ロシア 11-21 5-21

最初のスタートは良かったですが、途中積極プレーが出せず、ストレートに負けてしまいました。

⑥反省

自己評価は 50 点です。

風もなく強い日差しが照りつけ、土っぽく固いコートの特徴であり、さらには十分な睡眠が取れず、三食や水分補給、過度の筋肉疲労、時差 7 時間と、総合的に健康管理が厳しく調整できず、ビーチバレーの技術面を発揮できなかったことに対し、心から監督、スタッフ、ペア選手、連盟の実行委員などに迷惑をかけてしまいました。本当にすみませんでした。

選手 小林 誠宣

初めてブルガリアデフリンピックのビーチバレーボール競技に参加しました。

予選リーグでロシア、ポーランド、カナダと当たりました。

ロシアは高さが高く、動きが速く、思うように試合ができず負けてしまいました。高さに敵わない自分が嫌になる試合でした。

ポーランドはもう少し内容を濃くすれば勝てると思った試合でした。つまらないミスがあり、本当にもったいない試合をしたと思います。

カナダは弱点をみっちり攻め続けることで点を取ることができ、勝利することができました。この時、やっと自分のバレーをすることができた瞬間だと思います。狙い続けることとつなげたい気持ちが相棒と心が一つになった瞬間だと思います。

ランキング戦でトルコと当たりましたが、トルコが時間通りに試合に来なく、不戦勝となりました。相手のことを考えず、試合開始まで自分のアップなどに集中し、自分のペースに持ち込む大切さを感じた瞬間でした。

決勝トーナメントでロシアと当たりました。ロシアの一人が同じパターンの動きをしていたため、その人の動きを利用した守り、攻め方をしましたが、2 セット目は逆をつかれ、思うようなバレーがなかなかできず、高さも届かず、自分のリズムのとれたゲームができませんでした。

反省点として高さ、経験の差がかなり大きかったと思います。動きは速くても最終的に高さにやられた部分がありました。そしてゲームの中で経験の差が出る内容がいくつかありました。ボールを追うにしても次はどうするかなどのことを考えながら落ち着いた動きをするなどの一つ一つのこと自分にはまだまだだと思いました。もっと経験を積むことでゲームの内容が大きく変わるのではないかなと思うこともありました。そしてもう少し自分に身長があればと歯がゆく思うこともありました。もっと経験を積む必要があると思いました。

選手 武内 晴香

ビーチバレー選手としてデフリンピックに参加しました。18 ヶ国参加し、16 ヶ国がトーナメント戦を行いました。

まずはリーグ戦で、最初の試合はアメリカでした。アメリカの二人組で一人が年配だったので狙いましたが、意外とよく動き、粘り強かったです。もう一人は若いのですが動きが鈍く、レシーブも苦手の方でした。初めからそちらを狙えば良かったと後悔しましたが、結局作戦失敗で負けました。ロシア①は優勝候補の

チームでした。私達の攻撃が甘く、相手のいる所にボールを返した為、強打スパイクを多く打たれました。もっと厳しいところを攻めるべきでした。ギリシャは倒せる相手でしたが、相手に合わせてしまい、人のいる所にボールを返してしまいましたが、ロシア①のような強打スパイクはなかったので、レシーブで繋ぎ返し初勝利を得ました。ブラジルはまだビーチバレーを始めたばかりの初心者でした。ギリシャの反省から、相手に合わせず自分達のリズムで倒し、二勝二敗でトーナメント戦に出場しました。

一回戦はロシア②でした。レシーブで守りを堅くしましたが、強打スパイクは守りきれませんでした。もっと厳しいところに返せない限り、世界には通用しません。

個人としては、どんなボールでも拾うスタミナ力をあげ、守りを堅くし、粘り強くしようとレシーブを主に磨きましたが、もっと攻撃力を高めればまだまだ勝てる見込みはあると確信し、今後は狙い撃ちができるようにすること、試合経験を積み重ね作戦をうまく利用することを目標にし、世界に挑戦したいです。

このデフリンピックに参加して、世界の戦い方や今の自分の実力がどのレベルなのかを知ることができました。どうすれば世界に勝てるのか、この大会で色々学びました。色々な国との交流もあり、本当にたくさんの方の出会いがありました。デフリンピックでしか味わえない貴重な体験をすることができました。応援ありがとうございました。

選手 小林 奈々絵

アメリカ戦ではフルセット持ち込みで惜しくも敗退してしまいました。このアメリカ戦で勝てたらもっと上位を取れていたのではないかと思います。

今大会で金メダルを獲得したロシア①との対戦では、初めは互いに点を譲らない形でしたが中盤で離されてしまいました。もっと相手の弱点を付けるような攻撃をしていくべきだったと思います。ギリシャ戦ではギリギリの所で相手から 2-0 で勝ちのポイントを取りました。この試合では無駄なミスや攻撃の組み立て方があまり良くはなく、相手に合わせたプレーになりがちでした。

ブラジル戦では相手に合わせず自分たちのプレーで思いきりゲームを運ぶことができ、結果的にリーグ戦では 3 位でトーナメント戦に進めました。

トーナメント初戦はロシア②でした。最初はシーソーゲームでしたが、途中からぐんと点を離され、初戦敗退しました。

全体的に見るレシーブの守備は良かったのですが、攻撃はまだ甘く、作戦もっと練の必要があります。世界の選手達は身長も高く、今大会では日本が一番小さいプレーヤーでもありました。その分レシーブの守備やスタミナにおいては日本が優勢でした。しかし、攻撃やゲームメイクにおいては相手に劣っていたため、今後の改善課題を得られたことはとても大きいと思いました。また、チームのキャプテンも務めさせてもらいました。選手達をまとめ、チームを引っ張りました。

スタッフの皆には買い出し、通訳、会計、サポートなど色々な面で支えていただきました。それに対して自分でやることを真っ先に自分から動いていくことが足りなかったのも反省の 1 つです。

今大会を通して、選手とスタッフの間にはとても大きな絆がしっかりできていたことはとても嬉しく思っています。自分だけの力ではなく皆からの支えがあった結果だと思います。

色々本当にありがとうございました

自転車競技チーム

監督 早瀬 憲太郎

①選手の選考

■ロードの選考基準

- 日本で行われる一般の自転車競技大会に出場し、入賞の実績がある。
※総出場者の3分の1以内の順位でありかつ10位以内であること。
- 日本サイクルスポーツセンター(日本CSC)のロードレース用コース(1周5km)において、男子は11分／女子は12分を切る選考標準記録を持つ。

【解説】

自転車競技は「集団での競技」という特性上、合宿だけでは練習が難しくレースに出場することが最も強化につながります。聴覚障害者のみの大会開催は難しいため一般の大会に出場する必要があり、年間数多く開催されていますが、その中でもデフリンピックの競技種目及びレベルを考慮し、レースを選定しています。上記の基準の通り、選考指定レースで総出場者の3分の1以内の順位に入り、かつ10位以内の入賞であれば実力的には世界のろう自転車選手と戦えるレベルにあるとみなしています。

ロードレースはチームワークによる駆け引きが必要で、チームの中で「エース」「アシスト1番手」「アシスト2番手」「アシスト3番手」などの役割が必要になります。

日本サイクルスポーツセンターには、自転車競技のトップクラスが使用する設備や専用コースを備えており、プロ競技選手の標準記録が定められているロードレース用コースがあります。ここではアマチュアトップレースやプロレースが行われており、1週のタイムにおいて細かくレベル分けがされています。

A. 男子ロード

台北デフリンピック(2009年)及びカナダ世界ろう自転車選手権(2011年)のリザルトを元に、ロードレース用コース1周でのタイムを計算すると、国際大会トップ3の選手は9分台、4～10位の選手は10分台に換算されます。また標準タイムレベルでは、国際大会トップ3は上級の中～上レベルに値します。つまり日本代表選手全員が10分台～9分台であれば入賞もしくはメダルを獲得できる可能性が高いとみています。

※参考：日本CSC 5km サーキット標準タイム

- 12分台 : 初級の上レベル
- 11分台後半 : 中級の下レベル
- 11分台前半 : 中級の中レベル
- 10分台後半 : 中級の上レベル(日本競輪学校生徒標準)
- 10分台前半 : 上級の下レベル(高校生インターハイ優勝)
- 9分台後半 : 上級の中～上レベル
- 9分台前半 : 実業団&アマチュアトップレベル
- 8分台後半 : 実業団トップレベル
- 8分台前半 : プロレベル

B. 女子ロード

目安として、上記男子ロードの記録よりプラス1分とします。

【選考方法】

ナショナル本部から記録員を配置し、5km サーキット1周のタイムを記録します。場合によっては複数回行ない、この中から自己ベスト記録を決定します。

速い順に「強化指定選手」に内定していきますが、場合によ

ては役割をつけています。またマウンテンバイク(MTB)との兼任を認める場合もあります。

【選考結果】

早瀬憲太郎	8分58秒
得利雄介	9分49秒
箭内秀平	10分46秒
宮田大	10分48秒
一条厚	11分05秒
蓑原由加利	11分29秒

■マウンテンバイク(MTB)の選考基準

- 日本で行われる一般の自転車競技大会に出場し、3位以内入賞の実績がある。
※総出場者の3分の1以内の順位でありかつ3位以内であること。

【解説】

クロスカントリー(XC)は登りや下りなどアップダウンのある山道のコースを周回し、順位で決めるため標準記録というものはありません。コースや天候状況によって非常に左右されやすいですが、レースにおいて平均時速が16キロ以上(男子)であれば上級～トップレベルとされます。

カナダ世界ろう自転車選手権(2011年)のリザルトを元に計算すると上位3位の選手は平均時速約16キロ以上、10位以内の選手は14キロ以上。世界では、ロードとMTBを兼任する選手がとて多いです。

日本ろう選手は全員日本マウンテンバイク協会(JMA)に所属しています。

【選考方法】

年間の一般レースの順位、走りの状況などから「強化指定選手」に内定していきます。ロードとの兼任を認める場合もあります。

【選考結果】

早瀬憲太郎、箭内秀平、早瀬久美

②成績一覧

【ロード4種目】

■1000m スプリント

〔男子／38名〕

- ・早瀬憲太郎 10位(12,75／予選5位)
- ・得利雄介 23位(13,36／予選落ち)
- ・一条厚 38位(14,71／予選落ち)

〔女子／9名〕

- ・蓑原由加利 DNS

■タイムトライアル

〔男子 37.2km／41名／Av43.283km/h〕

- ・早瀬憲太郎 26位(1:00:57,36)
- ・一条厚 38位(1:09:35,77)
- ・得利雄介 39位(1:12:27,01)
- ・宮田大 41位(1:15:20,82)

〔女子 30km／10名／Av35.940km/h〕

- ・蓑原由加利 7位(54:09,40)

■ロードレース

〔男子 96km／44名／Av40.430km/h〕

- ・早瀬憲太郎 17位(2:31:51)
- ・得利雄介 27位(3:01:16)
- ・宮田大 DNF(－1Lap)

〔女子 48km／9名〕

- ・蓑原由加利 9位(1:42:18)

■ポイントレース

[男子 43 名]

- ・早瀬憲太郎 DNF
- ・得利雄介 DNF
- ・宮田大 DNF
- ・一条厚 DNF
- ・箭内秀平 DNF

【MTB 1 種目】

■クロスカントリー (XC)

[男子 22.8km (5.7km × 4 Lap) / 31 名 / Av14.592km/h]

- ・箭内秀平 20 位 (1 : 57 : 32)
- ・早瀬憲太郎 23 位 (2 : 02 : 33)

[女子 11.4km (5.7km × 2 Lap) / 6 名 / Av11.712km/h]

- ・早瀬久美 3 位 (1 : 19 : 49)

③成績に対する評価

【ロード 4 種目】

■1000m スプリント

予選 5 位という結果を出し、決勝進出したのはアジア圏内では初めてのことであり、日本の自転車競技にとっても大きなトピックスとなりました。一瞬の瞬発力と駆け引きが問われるため、日本人選手には少し苦手な分野でしたが、身体能力の上でも十分に世界と戦えることが分かったのが大きな収穫です。しかしその反面、駆け引きといった戦略面では経験不足が露呈してしまい、入賞をあと 1 歩のところまで逃してしまいました。

男子と女子ではルールが異なることや、当日突然ルールが変更するという状況もあり、こういった世界大会に慣れている各国と違って初参加の日本は情報収集面でかなり後れをとってしまったことが大きな反省です。

■タイムトライアル

通常のロードバイクではなくタイムトライアル用の特殊なバイクで独自のフォームで走るため、そのような準備をしていない日本としてはロードレースに備えての足慣らしと位置付けました。その点では目標を果たすことができましたが、結果としては世界のトップレベルのタイムの速さとかけ離れており、今後この種目で入賞を狙うためには、それなりの機材と準備の上で、スペシャリストが必要であると感じました。

■ロードレース

集団から一度引き離されるとまた戻るのが非常に困難なため、戦略としてはレース終盤まで集団内にいることが大切です。日本からの出場選手それぞれの役割をしっかりと果たしてトップ集団にエースを 1 人送り出し、終盤まで良い位置でレースを展開することができました。しかしレース終盤でバンクしてしまい、集団から遅れて入賞を逃してしまいました。身体的には充分入賞選手と互角に走ることができましたが、一瞬の判断や集団の中での位置取りに経験の差が表れてしまいました。トップ集団にあともう 1 人送り出し、エース選手 2 人体制でチームプレーをすることができれば、より入賞の可能性が高くなることが分かりました。

女子は最初から 1 人でのレースでありながらトップ集団にずっとついていく身体能力の高さを見ることができましたが、中盤での落車により集団から離れてしまいました。いかに落車のリスクを避けてかつ最後まで集団に居続けるかが大きな課題です。

■ポイントレース

スタートの位置取りが重要なレースであるのに、一番後ろに並ばざるを得なかったことが大きなミスでした。この種目は国

内ではほとんど行われないため、経験ができないままの参戦となり、ある程度の結果は想定していましたが、スタート時の位置取り次第ではもう少し良い結果を出すことができたと思われる。

【MTB 1 種目】

■クロスカントリー (XC)

MTB はヨーロッパではとても人気のある種目で参加選手全体のレベルも高く、男子は日本でのエキスパートクラスの選手でも参戦選手の半分の順位という結果となりました。ヨーロッパの多くの国では国内の一般大会の中にデフ選手権を組み入れているため、力量がより明確になります。

女子 MTB ではアジア圏内初の銅メダルを獲得することができました。日本以外の国は全員がロードとの兼任であり、ロードでも表彰台に立った選手がほとんどでした。今回は MTB に絞りましたが、全体の入賞チャンスを増やすためにも、女子はロード兼任も検討していきたいです。

④チーム戦略と体制

全 5 種目をそれぞれの選手の脚質や得意種目を考慮して出場種目を決定しました。今までの合宿やレース実績を省みると、入賞以上を狙える種目は長距離をチームで走る 100km ロードレースと国内大会で入賞を多く獲得している MTB の 2 種目でした。タイムトライアルは適したフォームや走り方の習得と特殊な機材が必要なため、その準備が難しいということと、ポイントレースは国内でもあまり開けられないタイプの大会であったため、上記 2 種目で入賞を目的として選手の配置を行いました。

初日に 1000m スプリントがあり、後半にロードレース、MTB、ポイントレースがかたまっていたため、MTB の入賞が狙える箭内選手と早瀬久美選手は、MTB 前の他競技参加は控え、力を温存させるようにしました。

早瀬憲太郎選手はエースとしてロードレースで勝負、得利選手、宮田選手にはアシストの役割を担ってもらいました。

ポイントレースは今後の世界大会に向けて一度は経験しておこうというねらいのもとに全員で出場しました。

⑤競技スケジュール

■7月27日(土)：1000m スプリント

■7月29日(月)：タイムトライアル

■7月31日(水)：ロードレース

■8月1日(木)：MTB XC

■8月2日(金)：ポイントレース／表彰式

⑥競技運営について

種目ごとに出場する選手と出場しない選手に分け、出場しない選手はスタッフの早瀬久美とともに出場選手をサポートする体制を取りました。

デフリンピックでの自転車競技は 80 年以上の歴史があり、種目ごとにどのようなルールで行われ、どのようなサポートが必要なのか、各国それぞれ経験を蓄積していました。その面では日本は全く初めてであるため、出場選手をどのようにサポートするかを現地でしっかり情報を確保するように努めました。特に補給場所や補給方法、バンク時の対応、サポートカーの対応など内容は多岐にわたるため、スタッフそれぞれの役割を決めて、当日速やかに選手のサポートを行えるようにしました。

⑦競技規則

(1) 年齢

2013年7月26日までに19歳に達する選手。
(1994年7月26日以前生)

(2) 選手人数

- ・ロードは各国から男子・女子 各最大15名、MTBは最大5名ずつエントリー可。
- ・自転車競技選手はUCIの国際ライセンス(2013年度)を取得。

(3) 競技

自転車競技はUCI規約に基づき行われる。

【ロード4種目】

■1000m スプリント

- ・封鎖されたハイウェイ上に設定された1000mコースを使用。ループコースとゴール前直線200mを設定。
- ・トーナメントの第1ラウンドの直前に200mタイムトライアルを行い、トーナメントの順番を決定。
- ・16名の選手によって2人ずつトーナメントが組まれ、2人で勝敗を決めていき、8位までを決定。

■タイムトライアル

- ・封鎖されたハイウェイ上に設定された37.2km(男子)／30km(女子)のコースを使用。
- ・選手は1分おきにスタートし、ゴールまでのタイム順で順位決定。

■ロードレース

- ・一般公道上に設定された1周48kmのコースを男子2周／女子1周し、ゴール順に順位決定。
- ・フォロワーがつき、補給、メカ整備。

■ポイントレース

- ・封鎖されたハイウェイ上に設定されたコースを使用し、2周ごとにスプリントをかけ、ポイントを獲得。
- ・各スプリントに1位5ポイント、2位3ポイント、3位2ポイント、4位1ポイントを獲得し、合計で順位決定。

【MTB1種目】

■クロスカントリー(XC)

- ・Vitosha Mountainに設定された1周5.7kmのコースを男子4周／女子2周し、ゴール順に順位決定。

⑧準備状況

デフリンピックで行われる種目同様もしくは同系統の国内大会にできるだけ日本選手全員で出場し、本番のつもりでチームとしてどのように走るかを確認していきました。

機材スポーツである自転車競技は、選手自身の身体だけでなく機材もきちんと整備を行わなければなりません。自転車自体のトラブルがもっとも起きやすいのは飛行機輸送の時で、現地入り後まずは自転車を組み立て、不調がないかどうか確認をしました。

練習やレース当日に自転車のトラブルが起きた時にすぐに修理できるような環境を作ることが重要なため、到着後すぐに現地のプロショップを探しました。全ての機材に対応できるショップはそれほど多くないため、ショップ探しに難航しましたがようやく軒見つけることができ、大会中は毎日ショップでメンテナンスをお願いしました。

自転車競技は大会ごとにコースが異なるため、事前のコース試走が重要となります。種目が行われる各会場へ試走および視察に行きました。ロードレースのコースは実際に試走するのは難しかったため、車をチャーターして同じコースを走りました。

⑨反省・まとめ

世界のレベルをしっかりと把握できたことが大きな収穫です。

ロードの場合、メダリストは国内でいえば実業団のE2クラス、入賞者は実業団のE3クラスのレベルに相当します。MTBの場合、男子はエリートクラスのトップ30位以内に相当します。

何よりも世界の選手たちの年間の大会参加数が20～30ととても多く、自転車競技は一般の大会に参加することで様々なレース戦略を経験し、経験値を上げることが重要であることを再確認できました。

現時点で、日本の選手は身体能力的にはトップ10以内には入っていると思いますが、そこから上に行くためには身体能力をさらに上げるのと同時にチームの中の実力差をなくし、同等の力量を持った選手たちでチーム編成しなければなりません。具体的には200mを13秒～12秒台、日本CSC5kmコースのタイムを9分台～8分台といったタイムが基準になります。これらの記録を出せる選手数名でチームを組み、国内の大会でチームとして経験を積んでいくことが大切です。これらの基準タイムおよび参戦する大会のセレクト、合宿における強化プログラムなど今まで以上に世界レベルに即した強化計画を立てていくことが今後の大きな課題です。

サポート体制としてはバイクトラブルに瞬時に対応できるメカニックの存在、日本チームとしてサポートカーを用意し、レース中の選手のサポートを行う体制などもしっかりと行うことが必要です。

スタッフ 早瀬 久美

①担当と内容

- ・日本ろう自転車競技協会ナショナル本部事務局としてデフリンピックに向けた業務や強化合宿の手配などをしました。強化合宿においては、強化担当の計画に沿って会場や宿の手配、講師の手配、選手への周知などを行いました。

【2013年度に行った合宿一覧】

■4月6日(土)～4月7日(日)

MTB FESTIVAL Spring 2013 in 緑山スタジオ・シティ
神奈川県横浜市 参加者：3名

■4月13日(土)～4月14日(日)

鮫川村ロードレース
～LINK FUKUSHIMA サイクルツアー第1戦～
福島県鮫川村 参加者：5名

■4月20日(土)

2013 JCRC ロードシリーズ第3戦 in 群馬 CSC
群馬県みなかみ町 参加者：4名

■4月27日(土)～4月28日(日)

群馬 CSC グランプリ 2013
群馬県みなかみ町 参加者：7名

■5月2日(土)～5月3日(日)

2013 筑波 8時間耐久レース in スプリング 20th 記念
茨城県下妻市 参加者：7名

■5月5日(土)～5月6日(日)

JCF J1 びわこ高島 STAGE XCO#1 /DHI#1
滋賀県高島市 参加者：3名

■5月11日(土)～5月12日(日)

- ・ENJOY! SPORT BIKE 2013 FUJI VELO FESTA
in Fuji Speedway

・AKI GREEN CUP FESTIVAL

静岡県駿東郡／長野県富士見町 参加者：7名

■5月18日（土）～5月19日（日）

2013 J 八幡浜インターナショナルクロスカントリー

（UCI 公認・クラス3）

愛媛県八幡浜市 参加者：3名

■5月25日（土）～5月26日（日）

ろまんちっくエンデュロレース

栃木県宇都宮市 参加者：6名

■6月1日（土）～6月2日（日）

・2013年JCF/MTB ジャパンシリーズ富士見パノラマ大会（春）

・JCRC シリーズ第5戦 in 日本 CSC（修善寺）

長野県富士見町／静岡県伊豆市 参加者：5名

■6月15日（土）～6月16日（日）

2013 JCF J2 XCO きじま平大会

長野県木島平村 参加者：3名

■6月22日（土）～6月23日（日）

SY-Nak 強化宿

長野県南牧村 参加者：7名

■6月29日（土）～6月30日（日）

ツール・ド・Mt ささもり

～LINK FUKUSHIMA サイクルツアー第3戦～

福島県福島市 参加者：5名

■7月13日（土）～7月14日（日）

川西夏の7耐

山形県川西町 参加者：2名

■7月20日（土）～7月21日（日）

第26回全日本マウンテンバイク選手権大会

静岡県伊豆市 参加者：2名

②反省・まとめ

- ・デフリンピックの間は、スポーツ委員会から発信される情報とデフリンピック委員会内の自転車競技委員会から発信される情報の2つを常に収集し、選手達に情報提供を行っていました。
- ・特に自転車競技についてはレース前日に行われるテクニカルディレクター会議に参加して自転車競技全体のルールの把握に努めました。レース当日も毎日テクニカルディレクターのミーティングが行われるため、それらにすべて参加し、急遽変更されるルールや情報について正確に収集できるようにしました。
- ・毎日ホテルを出発する前に本部に立ち寄り、日本選手団全体の情報の確認や氷の手配を行い、レース後も必ず本部に立ち寄りレース結果を報告、情報の確認を行いました。
- ・レース当日は、出場しない選手をサポートスタッフとして役割を振り分け、それぞれに飲み物の補給や機材の運搬、チームスペースの設置など具体的な内容を指示して行きました。レースが始まったら主に参加選手全員のタイムやリザルトを1人1人細かく記録して行きました。

選手 早瀬 憲太郎

①成績に対する自己評価

■1000m スプリント

力まぎりラックスして走ることができたため、予選5位という結果を出すことができましたが、決勝1回戦で敗退したの

はこのレースの経験値が不足していたからだと思います。予選から決勝戦までの時間や力の配分を失敗したので、予選が終わった後に素早く身体のリカバリーにつとめるべきでした。特性をもっと理解した上で、国内でも繰り返し経験していく必要があります。

■タイムトライアル

通常は平坦な道路で行われますが、今回は激しいアップダウンのある高速道路で行われたため、上りが得意な自分にとってはもう少しタイムを縮められたかもしれません。ロードレースの脚ならしのつもりで臨みましたが、レース中はうまく割り切ることができず中途半端に力んだ走りとなってしまいました。

■ロードレース

トップ集団の中でうまく位置取りをすることができ、終始落ち着いてレースを進められました。パンクをした時の対応も比較的スムーズに行うことができましたが、最も得意とする上りで判断ミスをしてしまいました。一瞬の判断で勝負が決まります。先頭とわずかの差が開いた時、少し様子を伺ってしまったがために、長い下りで取り戻せないほどの差がついてしまいました。いつでも追いつけるという油断があったと分析しています。

■ポイントレース

1位の選手に周回遅れをした時点で失格というルールですが、1周1kmと短いため日本選手全員が足切り、実力通りの結果となりました。180度カーブの曲がり方、減速のタイミング、曲がり際からの加速など全てにおいて技術不足がはっきりと出ました。集団での位置取り、一瞬の判断など、スプリントとロードレースの要素も詰まった総合的な力が試されるレースでした。

■クロスカントリー

ロードレースに重きをおいたため、MTBでは完走を目標にしました。参加者全体の半分が失格となる中、完走することはできましたが、スタート直後の周りのペースの速さに慌ててしまい、自分のペースで走ることができませんでした。連戦の疲れをうまく回復できないままの参戦で、得意な上りの走りを生かすことができませんでした。

②反省・まとめ

自分自身の力を冷静に分析すると、世界の上位には入れてもそこから上の表彰台を狙うには経験や技術、基礎体力全てにおいて差があると実感しました。まずは個々の力を最大限に引き上げ、個と個のぶつかり合いの中で生まれる「絶対に金メダル!」という強い闘争心が不可欠です。

心のどこかでスタート前から世界大会という名前に名前負けしているところがありました。最大限に高めた個の力を普段通り出すためには、相応のメンタルの力を高めなければなりません。長期的な計画の中でしっかりと育てていきたいです。

選手 早瀬 久美

①成績に対する自己評価

国内のMTB最高峰レースである日本MTB協会主催のジャパンシリーズに年間通して参戦しているので、大体の力量は把握できています。そのため、レース開始前は最下位～5位を想定していました。結果的に3位となったのは、アメリカの選手の落車、ロシア選手のパンクなどで選手が絞られたことからだと分析しています。

とはいえ、4位だったロシア選手はロードのスプリントで金メダルをとった選手であり、ゴールまで3位を守りとおしたことは評価したいです。またスタート直後から焦らず冷静に他の

選手の様子を見て、力をセーブしつつ走ることができました。国内のジャパンシリーズで多くのレースに出場し経験値を積み重ねた成果だと考えます。

②反省・まとめ

2012年の冬の段階でMTB競技は中止という発表があったから、デフリンピック開催の2週間前まで開催されるかどうかははっきり決まっていませんでした。開催の有無に関わらずしっかりと練習をしておくべきでしたが、なかなか集中できず自分自身の心の弱さが露呈してしまいました。しかし国内での合宿やレースを繰り返す中で、絶対開催されると信じ、少しずつレースをイメージするようにしていきました。

本来乗る予定だったバイクが間に合わず、スベアバイクでの出場となり、準備不足でした。大きな反省点です。

今回の3位という結果は決して実力だとは思っていません。本当の意味で、実力で表彰台に上がるためには、今以上にMTBという競技の特性をしっかりと把握した練習を積み重ねていく必要があります。MTBは自然が相手の競技であり、大会によってコースがまったく異なり、地域の気候や天気により路面状況も刻々と変化していきます。それらの変化に対応し得る力をつけるためには、多くのレース経験を積むことが表彰台に立つ最短の道です。

今回MTBに出場した女子選手は、デフリンピック後も次の世界大会に向けて国内の各大会に出場し入賞するなどしっかりと結果を出しています。今後もジャパンシリーズの大会を軸に、国内のあらゆる大会のコースを経験して、どのような状況になっても冷静に走り切る術を身につけたいと思います。

選手 得利 雄介

①成績に対する自己評価

初めて出場した海外レースがろう者の中で最高峰の大会であるデフリンピックであり、世界のレベルや力の差を知ったことが大きいです。ロードレースの種目は4種目ありましたが、全種目に出場させていただき、感覚を知ることができました。そのため、アジア大会、世界大会、そして4年後のデフリンピックにおいても同じもしくは似たような種目が予想されるので、どのように走ればいいのか、どのように戦ったらいいかなどといった戦略が組めると思います。

②反省・まとめ

海外レースの経験がなかったとはいえ、自分の実力と世界との差がここまで離れているとは想定せず、結果は惨敗でした。少しは通用するのではないかと、心のどこかに甘さがありました。デフリンピックまでの練習でももちろん努力不足であると実感しています。「練習」不足ではなく「努力」不足です。

まず、出場ことが当たり前の実力をつけ、海外に通用できる、そして勝てる実力をつける必要があると考えています。世界のレベルに対してどうしたらいいか、どうしたら通用できるか、どうしたら勝てるかと1日1日大事に考える必要があります。しかしデフリンピックのことだけを考えるのではなく、一般の全国大会に出場するなど目標を高くして自分を磨くことも大切です。一般の全国大会はデフリンピックよりレベルが高く、容易に出場できるものではありません。仮に出場できるようになれば大きな成長にもなり、自信に繋がることは間違いありません。ただ自分一人だけでは限界があると思うので、日本ろう自転車競技協会を盛り上げる必要があり、それが結果的には自分の成長に繋がると信じています。

選手 箭内 秀平

自転車競技団体として初めて臨んだ今回のデフリンピック。私たちは何もかも初めての経験でしたが、本部スタッフをはじめ日本選手団からご理解・ご助言をいただいたおかげでトラブルもなく全てのレースに出場できたこと、まず感謝の意を申し上げます。

①成績に対する自己評価

1人でも入賞を勝ち取るという方針をもとに、それぞれ各自で調整してきました。私はマウンテンバイク競技のエースとして入賞を狙いにいきました。マウンテンバイクはデフリンピックで初めて加わった種目であり、新たな歴史の1ページを刻む日に感謝しながらスタートラインに立ちました。結果は35名中20位で完走しました。

機材、コンディションも最高の状態でスタートし、先頭集団で好位置をキープしながら登りに入りましたが、ヨーロッパ・南米選手の登板力に敵わず、先頭集団から引き離されてしまいました。その分、得意な下りでタイムを稼ぎながら入賞を狙いに行きましたが、その差がなかなか埋まりませんでした。

②反省・まとめ

国内では日本マウンテンバイク協会でエキスパートクラス上位の結果を残していますが、デフリンピックはそれ以上の結果が求められると感じました。また、全体的に日本代表は海外でのレース経験が乏しい状況でしたが、過去のカナダ世界選手権、アジア大会と比べると確実に世界と戦えるレベルまで達してきました。

最後に、これからの課題については若い選手を発掘、育成するために、今回の経験をいかにもうやって伝えていくかが大事だと考えています。また、選手強化については、選手としてスポーツ医科学の基礎知識を身につけることと、一般の大会で上のレベルまで行くために具体的な強化プランを考えていく必要があると痛感しました。

選手 宮田 大

①成績に対する自己評価

■タイムトライアル

2日後に控えているロードレースを目標としていたため、前半はセーブ、後半にペースを上げて心拍数を上げていく作戦でスタートしました。私のバイクはDHバーハンドルを付けているTTバイクではなく、ノーマルバイクのため想像通りの展開となりましたが、自分の作戦通りにレースを進めることができましたと思います。

1:15:20というタイムは平凡ですが、自己ベストでした。苦手な坂が前半続いたのは辛かったですが、終盤はしっかり走れたので、ロードレースに繋がるレースになったと思います。

■ロードレース

最初は後ろに付いて守りに入ったレース展開を想定していましたが、前を走るという攻めの構えで当日を迎えました。スタートから時速50kmを超える高スピードで、日本では経験したことがない、かなり厳しいレースでしたが、それでも前でレースをしていくという強い気持ちのおかげで初盤は好位置で進められました。5~6人で形成されたアタック集団が抜け出し、前が空いたので、それを追いかけるべく抜け出そうとしましたが、一人で時速50kmを走ったことはないため、風のパワーに負けて後退してしまいました。自分の弱点を露呈してしまっ

たと思います。

結果的には時間にして約 30 分、距離にして約 10Km で集団から脱落し、1 周で DNF となってしまいました。攻める気持ちでレースを進めることができたのは大きな収穫ですが、結果を残せなかったのが悔しいです。高速レースに対する持続性を高める練習は以前より行っておりますが、練習内容を見直して更に高めていきたいと思います。

■ポイントレース

最終日のポイントレースは DNF という結果になりましたが、世界とは技術的な面での差は感じませんでした。

②反省・まとめ

自分の体力面をどう埋めていくか今後の課題だと思います。

選手 一条 厚

①成績に対する自己評価

1000m スプリントは日本ではほとんど行われていないレースなので、個人として空地で瞬発力の練習を積み重ねました。世界の平均時速は 50 ～ 55km です。

タイムトライアルについては、高地トレーニングや 100km の練習をしてきたので自信がありました。当日は 40 度を超える暑さの中、全速力で走り体力が消耗してしまいましたが最後まで完走しました。

ポイントレースも 1000m スプリント同様日本ではあまり行われていないため、経験が足りませんでしたが、全速力で走り切ることができました。ポイントをとった選手は 15 名で、1 位アメリカ 105 ポイント、2 位ロシア 28 ポイントでした。日本勢は DNF で入賞できませんでした。

②反省・まとめ

日本代表選手はこれまでに高地トレーニングや厳しい練習を積み重ねて自信をつけ、国内大会では 100km などの長距離を中心に出場してきました。今後は世界大会やアジア大会に向けてポイントレースやタイムトライアルの出場経験も積み重ねていきたいです。また、デフリンピックを経験した自分から表彰台を狙う日本代表選手にアドバイスやサポートをしたいです。

選手 箕原 由加利

前回の台北デフリンピックではバスケット競技に出場し、今大会では自転車競技に出場しました。2010 年 8 月に日本ろう自転車競技協会が設立され、自転車競技に念願の初出場ができたことを嬉しく思いました。

個人競技に転向して、日々練習を積み重ねてきました。自転車競技は個人競技でもあり団体競技でもあります。試合開始前には選手をサポートし応援するといった助け合いの気持ちを持ち、試合では自分一人の力で勝ち進んでいきます。

デフリンピックまでの 2 年間は研修会や強化合宿に参加し、体力アップをしてきましたが、もっと長い準備期間が必要だということを感じました。

①成績に対する自己評価

現段階での自分の実力がよく分かりました。皆様への感謝の思いを良い結果で表したかったのですが、入賞も取れなかったのを考えれば悔しいとしか言えません。メインレースとしてのロードレースでは後半に落車で転倒したため、本来の実力を

発揮できなかったのですが、タイムの短縮など様々な課題が見つかったと思います。

②反省・まとめ

世界レベルは凄く、自分の体力ではまだまだ通用しません。自分自身の問題点や練習不足を反省しています。レースの雰囲気やいろいろな味わえたので刺激になりました。4 年後、8 年後のデフリンピックに向けていい勝負ができる身体を作りたいです。

世界大会に挑戦するには人一倍頑張らないといけないし、地道な努力が必要です。年齢の壁もありますが、食事や練習、自転車のメンテナンスもしていけないといけないと思っています。またゼロから練習を積み重ねて再スタートします。自己更新を楽しみながら苦しい日々を過ごしていきたいです。

支えてくれた家族と一緒に出場した日本代表達、日本ろう自転車競技協会の皆様、応援して下さった友人や地域の方々には本当に感謝の気持ちでいっぱいです。ありがとうございました。

サッカー競技男子チーム

監督 柴田 英輝

①選手選考について

第 22 回夏季デフリンピックへ 23 名の選手を派遣しました。フィールドプレーヤーは、各ポジションにサブを置いて 20 名、専門性の強いキーパーは 3 名、怪我や過密スケジュールの大会を考慮して選考しました。

②今回の目的

新チームを始動した当初からのチーム目標は「アジア王者・世界王者」です。去年のアジア王者に続き、この大会での世界王者を最大の目的とし、4 年間戦い続けてきたチームの集大成でもあります。大会での優勝と真剣勝負の試合を通し、チームワークと選手個々の成長を目標に掲げ、大会に挑みました。

③チーム体制と各コーチの役割

監督…柴田 英輝（選手の管理、スタッフを含めたチーム統括）
コーチ…矢野 能嗣（選手の管理・データ収集）
トレーナー…鈴木 辰哉（選手のメディカル管理）

④活動の成果

リーグ戦は 0 勝 2 負 1 分で、ナイジェリアと同率 3 位、コイントスによる順位決定で、リーグ戦 4 位となりました。そのため順位決定戦は 13 位 -16 位決定戦に回りました。

[予選リーグ]

7/25	対ロシア	2 - 5
7/27	対ナイジェリア	2 - 2
7/29	対アイルランド	1 - 2

[順位決定戦]

7/31	対サウジアラビア	11 - 1
8/2	対アルゼンチン	1 - 3

⑤活動に対する評価

今回の結果についてはとても残念であり、1 人ひとりの自覚と意識が高くなれば世界のトップに上り詰めることができると感じています。全員が一生懸命に自分の仕事に取り組んでいましたがベストではありませんでした。少しの対応や準備の遅さ

が積み重なり、全体のバランスを崩したことも否めません。これは、スタッフ及び選手のどちらにも言えることです。

⑥反省、まとめ、改善点など

1) チームについて

アジア王者のチームから、戦力をアップするために新しい選手を招集しました。5月の事前合宿では、まずまずの仕上がりがでしたが、本番では7月の自主合宿参加メンバーと不参加メンバーが半々の状況で、プレーに微妙なずれが生じました。これは、イメージの共有が取れず、パスミスやポジショニングミス、プレスのタイミングのズレなど全てにおいて現れ、その結果、得点を決めるものの自分達のミスから失点し流れを掴みきれない試合が多くなりました。それでもコミュニケーションを図りつつ、試合中や試合後に修正し、自分達のサッカーを貫く姿勢を見せることができました。2週間という集団生活と周りに何もない場所での生活で、自分でも気づかないうちにストレスを感じており、気分転換などが難しい環境ではありましたが、チームとしてプールを活用するなどして気分転換も含めたトレーニングを行いました。

2) 運営について

試合会場や練習会場へはバスが用意され、出発時間の10分前にはスタンバイしてありました。試合会場まではバスで5分、練習会場もバスで15分ほどだったので便利でしたが、練習会場の1つはグラウンドがひどい状態で、特にゴール前は土が大きく盛り上がり、キーパーの怪我にもつながりかねないほどでした。ホテルは、サッカー競技のみソフィアから離れた場所で開催した為、全てのサッカー出場国が1つのホテルに宿泊しており、同階に日本の女子と男子の部屋が準備されていましたが、イラクなど他国の選手が混じるような部屋割りでした。

3) 食事について

三食ともにホテルのレストランでの食事となりました。バイキング形式で、毎日少しずつメニューが更新され、あまり飽きの来ない内容に工夫されていました。試合や練習時間が夜だったのですが、食事時間が決まっており、コンディショニングにあまり良くない状態での食事となることもありましたが、日本チームだけが入口付近の通路際4人テーブル席となり、他国の選手と触れる機会が多かったため、健康状態のチェックやコミュニケーションの場として、落ち着いて食事をとることが難しかったです。

スタッフ、選手共に新しい仲間が参加し、良い経験を積めたと考えています。また、はっきりとした課題も見つかったため、今後4年間の活動によって、必ず世界のベスト4に入る力を身に付け、更なる飛躍をし、常に最高の結果を出せるチームにしていきたいと考えています。

コーチ 矢野 能嗣

①団体内容の担当とその内容

デフリンピックサッカー男子日本代表コーチとして、監督の元で練習指導のアドバイスをし、選手達の意見も聞き、練習にも参加しました。その他、選手のリラックスをはかることや人数確認、試合記録、スケジュール調整、ミーティング等を行いました。夜は各部屋を廻り、十分な睡眠を促しました。練習及び試合時にはスタッフ不足により、飲み物準備、荷物運び、ボール拾い等もコーチの仕事となっていました。

②反省

大会結果は、16チーム中、14位で終わりましたが、選手達は良く頑張っていました。チームワークは良かったと思いますが、決定力不足、攻守の切替、メンタルの弱さ等で十分実力を発揮することができませんでした。

日本人選手は、諸外国の選手に比べ、体格の差で不利な面が多いのですが、何よりも勝つ気持ちが劣っていたと思います。自己負担が重いため、日本代表チーム全員の合宿練習が少ないので、チーム内のコミュニケーションがうまく行かないのも大きな原因の一つだと考えます。練習中にも、スタッフが少ない為、確認不足や時間調整が足りなかったと思います。

(メリット)

- ・ホテルにはプールも付いており快適に過ごせました。
- ・食事はバイキング方式で、美味しかったです。
- ・試合会場が整備されていて良かったです。
- ・ホテル周辺の環境も良かったです。

(デメリット)

- ・グラウンドの整備が整っていない場所がありました。
- ・グラウンドも少なく、練習開始時間も遅い為、練習不足でした。
- ・最初の練習中、給水不足になってしまいました
- ・一日のスケジュールを手話で伝えていましたが、聞き漏れがあり、不安を抱えていた選手が多くいました。食事時間、練習時間等は、印刷又はボードを使うと良かったかもしれません。
- ・換金がうまく行かず、買い物できませんでした。
- ・ホテルやグラウンド周辺にお店がなく、水が不足しても買い物にも行けず、困りました。
- ・クリーニングに出すと一日かかり、お金も高かったのでコインランドリーがあれば良かったです。
- ・ホテル内で、ゲームシャツを交換してほしいという外国人が訪れることが多く、選手達が困っていました。
- ・バスでの移動の際に、安全面が欠けていました。(バス運転手が、シートベルト未着、携帯電話使用)

③まとめ

デフリンピックのサッカーコーチとして初めて参加する機会を与えていただき、貴重な体験ができたことに感謝しています。

諸外国のチームは、合宿等を多く行っており、チームのまとまりがあったのに対し、日本は、資金不足という大きな課題があることを実感しました。

出発前に各地でデフリンピックのイベントを開催していましたが、デフリンピック知名度の低さにはがっかりしました。

その為、スポンサーや募金が少ないので、自己負担の大きいことは残念でした。4年に一度ですが、定期的にイベント等をし、パラリンピックと同等の扱いを受けたいと思います。

今回、買い物が困難だった為、レンタカーが一台あると良かったと思いました。

4年後の開催地であるトルコの時は、ホテル、サッカーの会場等、詳細な事前の調査が必要だと思います。

現在、私は手話でフットサル、大学手話サークル、講演会等を行っていますので、多くの人にデフリンピックのことを広めて行き、子供達にも将来参加してほしいと伝えていきたいです。

トレーナー 鈴木 辰哉

今大会における私の担当は、選手のコンディショニング、試合中や練習時に発生した怪我に対する応急処置でした。まず選

手のコンディショニングについては主にテーピング、セルフコンディショニングチェックの実施、試合間のアクティブレスト指導の3つです。テーピングについては足関節捻挫などの怪我予防のためのテーピングや、筋肉サポートのテーピングを1日におよそ15名行いました。テーピングを希望することは、選手自身の怪我予防に対する意識の表れですが、テーピングを巻く選手の筋力をチェックしたところ、筋力の低下が見られました。怪我の予防をテーピングに頼るだけでなく、筋力を強くすることで怪我を予防できるということを選手たちに指導する必要があります。今後SNSなどの情報伝達ツールを使用して、怪我予防のためのトレーニング方法を配信していこうと考えております。

セルフコンディショニングチェックの実施については、毎朝欠かさずに継続して行うことができました。選手の方からも「最近体重が増えてきている」「最近疲労が抜けない」など、データを読み取ろうとする意識が見受けられ、事前合宿時からこのチェックを継続した成果が表れたのだと思います。しかし、ただやるだけという選手もいましたので、何のためにやるのか、この数値の表している意味を一度説明する必要があります。次のステップとして、自分自身のコンディションを良い方向へと向ける手段を選手自身が考えるところまで導くことができたら良いと考えております。

試合間のアクティブレスト指導については、ホテル内のプールを使用しての水中運動や、練習グラウンドで軽いランニングを行いました。特にプールを使用しての水中運動は、選手たちにとって心の面でも良い気分転換になったのではないかと思います。しかし、試合を重ねるごとに選手たちの疲労は強くなります。疲労を考慮して、楽しさを取り入れたゲーム感覚でできるメニューを取り入れることも必要であると感じました。その都度選手たちの状態に応じて、メニューの引き出しを多くしておくことは、次回に向けての私の課題であります。

次に試合、練習時に発生した怪我に対する応急処置について報告致します。試合中に発生した怪我は打撲8件、母指（IP関節）捻挫2件、突き指（PIP関節）1件、肘関節（MCL）損傷1件でした。また、練習中に発生した怪我は足関節捻挫（中等度）1件、虫刺され2件、その他オーバーユースによる怪我が数件ありました。試合には本部ドクターの先生が来てくださり、試合後に診察を受けることができたので、応急処置についてはスムーズに行うことができました。軽度の怪我は軽視しがちですが、的確な初期対応を行わなければ翌日のパフォーマンスに悪影響を及ぼします。今回上記のような症例が1件ありました。試合後の選手とのコミュニケーションをより細かくとることで、軽度の怪我の見落としは防ぐことができたので、私自身の反省すべき点です。

終わりに、今大会を大きな怪我や病気で終えることができたこと、また男子サッカー選手団により良いサポート活動ができたことは、関係者各位のご協力があったことであります。厚く御礼申し上げます。

スタッフ 高橋 孝司

1. 団体内での担当、及び内容について

- ・男女共用の現地におけるコミュニケーション国際通訳
- ・現地でのチーム全員がスムーズに行動できる環境作り

成田空港発ミュンヘン乗り継ぎでソフィアに到着、早速ミュンヘン発の機上でノルウェーのろう者と隣同士になり、ブルガ

リアの情報収集に努めました。もちろん国際手話での会話で、彼らは選手ではなく、評議員としての国の代表でした。食事の面や、飲料水等の貴重な話を聞けたので、現地入りした時に活用しようと思いました。ガイドの方が出迎えてくれて、スムーズに誘導できると思いましたが、男女選手団の人数が52人と多く、荷物等を含めるとかなりの数となり、バス1台では間に合わないで、ロシアチームのバスに分乗させていただきました。

デフリンピックは、選手団としては3回目の参加でしたが、ソフィアにサッカー会場が確保できないため、ソフィアからバスで1時間以上かかるPravetsのRIUホテルになりました。そのため今回はサッカーのみによるホテル滞在となり、男女エントリー国のほぼ全員が一つのホテルに集結しました。

各国の手話が飛び交う場で1日3度の食事を取ることで、交流の中で国際手話を取得するいい機会になるかと思ったのですが、なかなかうまくいきません。ここはリゾートホテルなので、食事面を含め、今までになく過ごしやすい環境でした。クリーニングにしても、まとめてフロントに提出すれば、一晩で受け取れ、1kg1ユーロと手頃でした。

TD会議には、ろう者スタッフ全員を出席させ、手話や雰囲気学んでもらい指導も重ねて進めて行きました。試合会場はホテルからバスで5分とかわからず、素晴らしいロケーションであり、4会場すべて徒歩で観戦できるので、次戦の研究もできました。天然芝3面人工芝1面で、男女共1日おきに試合、練習となっており、試合の通訳として毎日出向きましたが、特に問題はなくスムーズに進められました。心配された飲料水や氷の手配は、タクシーで10分ほどの所にスーパーがあるのでを見つけ、問題解決しました。出発前の旅行社の話では、近郊には何もないので注意してくださいと言われていましたが、水や氷はサッカーには必要不可欠なので、安堵しました。これでスタッフとして、試合環境は整ったと思い、あとは選手が力を発揮してくれたらと願うばかりでした。

2. 反省・まとめ

前回大会の反省から飲料水、飲食、病気を頭に入れて注意して来ましたが、男女共前回は上回る成績が出ませんでした。

特に男子はこれまでで、最高のメンバーだと自負していたにもかかわらず、なぜこうなったのかが疑問です。

16チーム中14位とデフリンピック出場史上最低の成績となり、女子も7チーム中6位と不本意な結果になりました。

各国とも事前に長期練習を行い、早めの現地入りを調整するなど準備をしていたようです。

結果として、アジア各国5チーム中4番目、苦い経験となりました。アジアで勝てても、世界では通用しない課題が出ました。国内での選手選考や練習環境を見直すことが必要だと判断し、選手・スタッフの世代交代を強く実感した大会でした。

スタッフ 佐藤 隆

【団体内の担当とその内容】

- ・男女問わず、サッカー部門の全体を総括する業務
- ・スケジュール管理、スタッフ及び選手の状況確認

【反省・まとめなど】

第22回夏季デフリンピック大会は、昨年トルコで開催された第3回世界ろう者サッカー選手権大会の反省を踏まえ、その後基本練習（シュート、走り込み、筋トレ、メンタル面）をメ

インとした合宿をやってきました。

私はアジア大会王者としてデフリンピックの予選リーグ戦を突破できると確信していましたが、結局予選突破ならず、残念な結果となりました。

全日本ろうあ連盟、日本ろう者サッカー協会及び職場、家族など大勢の皆様方の支えがあり、周囲の方々に対して感謝の気持ちでいっぱいです。

全体的にスタッフが不足しており、水・氷を買うためにホテルから遠く離れた店へ出向く、他国のビデオ情報を監督に伝える、練習を把握するなどバタバタしていました。次回の大会はスタッフの数を増やし、情報を共有する必要があると思いました。

TD 会議に参加し、試合の進行方法などについて説明を聞きました。過去に国際大会へ参加したことがあり、少しでも国際手話が理解できて良かったです。しかしもっと国際手話を勉強しておくべきだと感じました。時々連絡漏れや報告漏れなどのミスがあり、何か分からない時には自分から積極的に確認することが足りませんでした。

ろうあ連盟本部はソフィア市にあり、サッカーチームのいるプラベツツからは遠く離れたホテルだったため、連絡の際には混乱を招きましたが、健聴者スタッフが電話でスムーズに話しかうことができて大変助かりました。

戦術については、攻撃のスピート、パス回しなどでディフェンスを崩すなど、攻撃力においては世界に通用しましたが、走るスピードは負けていました。暑さの為、集中力の弱さが見られました。でも選手達は最後まで諦めず一生懸命頑張りました。選手それぞれに個性があると思いますが、2週間ほど選手と共同生活をしていく中で、精神面の弱さなどが見えてきた選手がいたので改善していく必要があると思います。その課題を解決する為には、どんどん経験を積み、更なる自信をつけ、今回の厳しい結果を選手共々率直に受け止め、新たな出発が必要だと思います。

この経験を糧に、今度は選手強化及び技術指導を育成していきたいと思います。課題について自分も勉強し、出直していきます。

そして、最後にここまで多くの苦勞をかけながら、トラブルもなく、無事に支えてくれた理事やスタッフ、選手達に対して心より深く感謝しております。ありがとうございます。

スタッフ 小林 隼

今大会の開催地はなかなか決まらない時期があり、不安でいっぱいでしたが、無事にデフリンピックが開催できたこと、ブルガリア共和国に感謝します。

当サッカー代表は男女共出場しました。男子日本代表は去年アジアナンバーワンになったので、今回は世界ナンバーワン、女子代表はメダル取得という目標を掲げ、今日までチーム強化をしてきました。私は男子代表のスタッフとして参加し、全体的なスケジュール管理、TD 会議出席、問題解決探し、情報収集、費用管理、担当振分等の確認をしました。宿泊地、競技会場は他の団体とかなり離れた所のリゾート地で、自然に囲まれてリフレッシュもでき、環境的にとても良かったです。食事もし日替わりで、飽きることなくおいしかったです。問題点としては、宿泊地の周辺に日本円を換金できる銀行や水、バナナ等を買えるお店がなかったことです。最初は本部の協力を得て、なんとか確保できました。その後、車で 15 分ほどの所にショップがあるという情報を得て、タクシーで買い物へ行きました。金銭

的な負担はありましたが、レンタカーを借りていた帯同の方にもご協力をいただき、感謝の気持ちでいっぱいです。

ホテル内には本部がなく、大会委員、通訳者が常時おらず困惑しました。自力で探す、とにかく待つ、ホテル側と筆談して情報を得るなど、時間がかかり大変だった面がありました。国際手話でのコミュニケーションは、少しずつとれるようになってきたと思いますが、まだまだ乏しいので、もっとコミュニケーションできるように頑張ります。

男子代表に関しては、チーム力も技術面において高く、期待していましたが、結果は前回より下回ってしまい、残念でした。どの試合でもあと一歩で、気持ちが足りないという印象を受けました。女子代表に関しては、気持ちが強いプレーが表れ、強豪チームと対戦した時でも前回大会より差が縮まり、確実に技術面が上がっていると感じました。結果的に前回より上でしたが、もっともっと技術面やチーム力を上げて、上位クラスを狙えるようにしたいです。監督とのコミュニケーションがうまく取れず、不安になった時期もありました。もっとぶつかり合えば、コミュニケーションがとれたのではないかと反省しています。

最高の舞台であるデフリンピックに初めて参加し、本当に良い経験となりました。大きな怪我もなく無事に終え、ご協力いただいた方に厚く御礼を申し上げます。

今大会は非常に得るべき要素が多く、今後の為にも反省点を大いに生かして、協会側のチームバックアップ体制、強化、改善に努め、監督や選を含め様々な方々のご理解とご協力に支えられながら、今後はアジア、世界に誇れるサッカー日本代表を派遣できるように、協会運営を図っていきます。

選手 松元 卓巳

今大会は前回に続き2回目の出場となります。前回は結果が残せなかったため、今回はリベンジという強い気持ちで挑みました。非常に面白く、力のあるメンバーが揃いました。アジア大会優勝、世界選手権ベスト8と実績もついてきた中でのデフリンピックだったので、当然メダルを意識できる大会でしたが、結果は 14 位と過去最低の順位でした。ルールが変わったとはいえ実力不足だったと思います。しかし、まだ若い選手も多く、ヨーロッパで試合ができたことは非常に良い経験になりました。時差ボケやヨーロッパ独特の柔らかく深い芝生のグラウンドなど、アジアでは経験できないことが得られましたので、次回デフリンピックに向けての準備につなげたいと思います。チームとしての課題も多くあり修正が必要となりますが、敗戦の中でも細かいパス回しや、サイドからの攻撃など良い所がありました。この良い部分を伸ばしながら、まずはアジアで結果を出さないとはいけません。

一番の課題は、前回同様に決定力の弱さです。ワンチャンスで決めるかどうかで世界で通用するか否かであり、上位に残ったチームはやはり決めるべきところで決めていました。個の力とチームの力で解決しないといけません。

もうひとつは準備不足です。初戦は自分を含め緊張感や意識の共有が少なく、メンタルの部分で弱かったと思います。また、環境面において、他国はサッカーで生活している方が多く、日本のようにビジネスマンが参加という国は少数です。通常は大会直前に練習や合宿を行って大会に挑みますが、日本は仕事面、金銭面での折り合いがつかず、そのままの現地入りとなっています。実際に決勝へ進んだロシアは3ヶ月、ウクライナは1ヶ月半合宿を行っています。自分たちも動いて環境づくりを行う

べきだと思い知りました。

最後に、大会前、大会中に温かい応援をしてくださった方々や長期休暇をくださった会社、支えてくださった方々に本当に感謝申し上げます。ありがとうございました。

選手 菱岡 敬彰

昨年の第2回世界ろう者サッカー選手権大会でベスト8、第7回アジア太平洋ろう者競技大会で初優勝し、アジア王者として自信と誇りを持ち世界王者に向けて挑みましたが、グループリーグを突破することすらできず、前大会の11位を下回る14位という結果に悔しさしか残らない大会となりました。

開会式に参加していないからかもしれませんが、デフリンピックが始まったという実感ができないまま大会に臨んだような気がします。個人の力や全員の意思統一の差を感じました。

攻撃ではゴールや前への意識が足りなかったため、1対1での駆け引きができず、横パスを受けた選手がボールを奪われてしまいました。ボールを収めた上での時間作りを意識したフィニッシュまでのイメージ共有など、効果的な攻撃ができず、相手に怖さを与えられなかった部分が大きいです。また、リスクを考えず攻撃的なサッカーを貫こうとした結果守備がおろそかになり、慌てて戻るなどして体力が消耗し、攻撃のメリハリが落ちるといった悪循環から抜けられませんでした。守備の部分では相手の力を恐れ積極的になれず、マークも甘くなりDFラインが下がり、バイタルエリアにスペースができ相手を自由にさせ、ミスの重なりで失点につながることも多かったです。リズムが乱れ自分たちのサッカーをできない部分もありましたが、全試合で得点を決めたことは自信を持ち、次に繋げていこうと思います。

チームとしての課題は、『ボールを保持する』『点を取る』『ボールを奪う』『点を取られない』、この4つをメンバー全員がイメージし共有することです。そのためには一人ひとりが徹底的に強く言い合うくらいのコミュニケーションを取ることと、状況判断やプレーの正確性を上げるため個々が成長していくことです。日本の調整期間が数日だったのに対し、他国は1ヶ月～3ヶ月程度の時間を費やしていることを知り、コンディションの調整やチームの連携面での差、国からの支援や体制が違っていたと感じました。こういう部分も踏まえてサッカー協会、スタッフ、選手23人がデフリンピックで勝ち上がるためにできること、やらなければならないこと、一人ひとりの役割など、もっとできる部分がたくさんあることを思い知り良い経験になりました。

この経験を今後のろうサッカーの発展や成長の為に次の世代に伝え、自分自身もこの悔しい想いを4年後へのモチベーションに変え、これまでの環境を与えてくれた皆様への感謝の気持ちを忘れず、また1からスタートしていきます。

選手 千葉 駿介

初めてのデフリンピック出場でした。サッカー男子は去年のアジア大会で金メダル獲得し、デフリンピックではメダルを獲得できると周りから期待されていたので、良い成績を残せると思っていましたが、16チーム中14位と理想とは全くかけ離れた結果となり、言葉にならない衝撃を受けました。

日本は運に恵まれなかったと思います。初戦は今大会優勝したロシアで、前半は先制点を入れたにも関わらず、連携に悩ま

され、2-5の完敗、次戦のナイジェリア戦では、ほぼBチームのメンバーで試合に臨みましたが、2-2の引き分け、最終戦ではグループリーグを突破するためには3点差以上で勝たなければというプレッシャーに吞まれ、1-2で敗退しました。グループリーグ内ではナイジェリア同等3位だったため、コイントスをした結果4位となり、前回の台北デフリンピックの12位を下回る、13～16位決定戦になってしまいました。実力はそこまで大差はなかったのですが、運に負けてしまった大会だったのではないかと思います。

私はアルゼンチン戦で、先発フル出場をしました。この試合が今大会最後の試合だったので、必ず勝つと強く思い、無失点で抑えるようゴールを死守しましたが、1-3で敗戦しました。試合終了後、まだまだやれたのではないかなという悔いは残りましたが、今ある自分の力を最大限出し切ったので後悔はしていません。次のデフリンピックでは悔いも後悔も残ることのないように、また一から自分を磨いていきます。4年後には男子サッカーがメダルを取れるよう更なるレベルアップをしたいと思います。

選手 野呂 啓(主将)

①成績に対する自己評価

グループリーグでは0勝2敗1分で3位となりましたが、ナイジェリアも同等となり、コイントスの結果4位になりました。その後のサウジアラビア戦で勝ち、13～14位決定戦へ進みましたが、アルゼンチン戦で負け、最終成績は14位となりました。

私は3回目のデフリンピック出場となり、過去2大会は共に12位でしたので、前大会以上の成績を求めるべくブルガリアに乗り込みました。

サッカーの試合会場は主都ソフィアより1時間離れた所でした。時差調整も完全にできないまま試合が始まりました。予選グループで対戦したロシアやアイルランドは過去に対戦したことがあり、対策をしっかりと練り試合に挑みましたが、相手もレベルアップしておりかなり苦戦し、予選リーグ敗退という結果になってしまいました。23人全員が一つになり、自分の持てる力を十分に発揮しベストを尽くしたと思いますが、世界レベルには日本の力がまだ及びませんでした。私は全5試合の内、4試合フル出場し、力を尽くしましたが、悔しい気持ちだけが残りました。今後の日本の為にもこの経験を生かして、次世代に伝えていきます。

②反省・まとめなど

昨年トルコにて行われた世界選手権大会を踏まえると、時差やコンディションの調整には最低でも1週間は必要だと思います。また国内合宿を増やすことも大切です。派遣期間を延ばす、合宿回数を増やすなどをすれば、当然負担金額も大きくなります。サッカーはアジア予選もある為、毎回自己負担ばかりでは金銭面も苦しく、対策をしっかりと考えていかなければなりません。今大会優勝したロシアは、スポーツが仕事なので毎日サッカー生活を送っています。他国でも国から支援を受けており、長期合宿も実施しています。日本も大きく環境を変えていかないと世界との差を埋めていくことは厳しいと改めて思いました。

今大会では、日本選手団の旗手という大任をいただき、大変光栄でした。代表として改めて気の引き締まる思いでした。このような貴重な経験をさせていただきありがとうございました。

選手 西浦 太志

①成績に対する自己評価

1ヶ月前に怪我を負ってしまい、出場機会がほとんどありませんでしたが、ベンチからしっかりチームをサポートできたと思います。試合では厳しい戦況が続く中、落ち着かせるような声掛けや的確な指示をもっと出せれば、より効果的だったと反省しています。コイントスで最下位予選敗退が決まったことは納得いきませんが、やはり運も実力の内だと痛感しました。

今大会もアジア相手にしか勝てておらず、世界で勝ち抜く為にはクレバーな戦い方や個の力底上げが課題だと思います。

合宿などをもっと増やし連携を高めていけるといいのですが、その為には資金面の問題も発生するので、やはり聴覚障害者サッカー、デフリンピックの知名度を上げていくことが最重要課題だと考えます。

②反省・まとめなど

反省すべき点は、『怪我をしたこと』これに尽きます。

不慮の事故だったとはいえ、もっと細心の注意を払うべきでした。これにより『レギュラー＆スタメンフル出場』という一つの目標が程遠くなってしまいました。

ただ、悪いことばかりでもなく、リハビリを通して役立つ知識を得た上に、最後まで諦めずに治療し、デフリンピックに出場できたことは大きな財産となりました。

大会中は試合に出られず、自分は何の為にここに来たのだろうと悩むこともありました。それでもチームの為に今何をすべきか、何ができるかを考えて行動できたことは、社会においてもきっと役に立つと思います。だからこそスタメンの選手が気迫溢れるプレー、責任あるプレーをすることにより、ベンチの選手も少しは救われますし、それが本当の意味での23人全員で戦うということだと思います。こういう大会ではそういったメンタル面が間違いなく勝負を大きく左右します。

最後に、これまで支えてくれた家族や応援していただいた友人、職場の方々には感謝の気持ちで一杯です。ありがとうございました。

選手 細見 尚史

メルボルン、台北に続き3回目の出場となりましたが、結果は過去2大会の12位を下回る14位となってしまいました。リーグ戦ではナイジェリアと同率3位、コイントスにより4位という不運も重なりましたが、改めて世界で勝つ難しさを実感しました。

敗因としては、試合におけるチームの決まり事が徹底されていないこと、対戦した選手の体格を活かしたパワープレーに対応できなかったこと、1対1の場面での接触プレーが弱いこと、中盤でボールを支配できなかったこと、ゴールを決める決定力の低さが挙げられます。

また、デフリンピックそのものが日本であまり知られていないことも、選手への支援の低さに繋がっており、強化合宿も年に3回程度しか実施できなかったことに対し、日本を除く他国がデフリンピック開催直前に合宿をしていたことを考慮すると、他国に比べて準備不足であったことは否めません。前大会の悔しさを糧に4年間トレーニングを継続してきましたが、今大会では相手の頑強なフォワードにすべて対応できたとはいえないものでした。

今大会で、今後のチームとしての課題や個人としての課題も

はっきりと把握できたので、3大会出場の経験を活かし、デフリンピックでの悔しさを常に忘れずに今後も競技に励んでいきたいと思います。

最後に、サッカー競技のデフリンピック派遣に関わってくださった関係者の皆様、現地で選手達をサポートしてくださったスタッフの皆様、そして応援してくださった皆様に心からお礼を申し上げます。ありがとうございました。

選手 毛塚 文博

(成績に対する自己評価)

初のデフリンピック出場でした。3年前に初めて男子サッカー日本代表に選出され、今回デフリンピック選手として参加でき光栄です。デフリンピックの本番まで、ドーピングにかからないよう苦しい生活をし、仕事の合間を縫って、練習、筋トレ、ランニングを行いました。そして大会日が近づくにつれ、わくわくしました。成田空港で男女の集合写真を撮り、16時間のフライトを終えやっとソフィアに着きましたが、日本から遠くて疲れました。ホテルが高級でびっくりし、ブルガリアでの生活や時間に慣れるまで大変でしたが、ホテルからの風景はとても素晴らしく、3度の食事もおいしかったです。

初戦がカギになるので、ロシア戦では絶対勝つという気持ちが強かったのですが、結果は完敗でした。本当に悔しく、残り2試合は気持ちを切り替えていこうと決めました。ナイジェリア戦では初先発スタメンに選ばれ、とても嬉しかったです。本当はフルで出場したかったのですが、後半で途中交代となり悔しかったです。仲間からは好評価をもらえました。アイルランド戦ではスタメンから外れてしまいましたが、チームが1つになって絶対勝つと気合を入れました。結果は負け、少し泣きました。フィジカルの差はありましたが、日本らしいサッカーができずミスが多かったです。

大会結果は16チーム中14位でした。決勝戦を観戦し、世界のレベルの高さに驚きました。とてもいい勉強になりました。

(反省・まとめ)

今回はデフリンピックで自身の足りない部分や課題をたくさん見つけました。連日練習をすればきっと日本は強くなれると感じました。皆はプロサッカー選手ではなく、仕事とサッカーの両立は大変です。4年後のデフリンピックにも必ず参加し、日本代表も続けたいと思います。来年のアジア大会や世界大会など色々な大会があるので、また一から鍛え直し、選出されるように頑張りたいです。もっと合宿を増やし、コミュニケーション時間を多く取りたいと思います。そうすれば新しい日本サッカーを築けるのではないかと思います。

選手 江島 由高

■成績に対する自己評価

14位という過去最低の順位、そして個人的にはチーム内で唯一の出場ゼロという結果に終わってしまいました。想像すらしたことがなかった今回の結果に対し、帰国してから日が経つにつれ少しずつ向き合えるようになってきたというのが正直な感想です。

■反省

「最悪を想定しつつ、最大限の準備をした上で最善の期待をする」

上記の一節は日々の生活の中で頭の片隅に置いている言葉で

す。前回の台北から今回のブルガリア大会までの自身の4年間を振り返ると、「準備」の部分が甘かったように思います。一番は代表選手としてのブランクをつくらない努力です。仕事の事情で4年の間に行われた2回のアジア大会、世界選手権は辞退するしかなく、国内合宿は参加していたものの海外でしか行われない代表の公式戦には帯同できず、代表選手としての実質的なブランクが4年あり、後から思い返すと、ろう者サッカーやデフリンピックについて周囲に理解してもらう為の自身の努力が足りなかったのではないかと思います。誠心誠意頭を下げて自分の気持ちを伝えた「つもり」になっていたかもしれません。「つもり」で終わってしまわぬよう、日頃から周囲とのコミュニケーションを密にして、自身の真剣な気持ちを伝える努力をしていく必要があると感じました。

■まとめ

1試合も出ることができなかったのは自身にとって大きな財産です。周囲とは違う形で素晴らしい経験を得ることができたのも、応援してくださった全ての方々のお陰であり、この場を借りて心よりお礼を申し上げます。

選手 村上 祐太郎

前回優勝したロシア、ナイジェリア、アイルランドと善戦しましたが日本は最下位となり、決勝トーナメントに残ることはできず、次の13～16位決定戦でも苦戦し、14位となり、メダルを獲ることができませんでした。試合中は修正などの話し合いがうまくできず、気持ちばかりが焦ってしまったことで周りの選手の焦りにも繋がってしまったように感じました。それは日本チームに足りなかった精神的な弱さでもあったように思います。技術や戦術では世界でも十分に通用するものがありました。勝たなければいけない、負けられないというプレッシャーを力に変えられないことが、世界と日本との1番の差ではないかと感じます。ベテラン勢の中には今大会を最後に現役引退、またはサッカーから完全に離れる方もいたため、様々な思いを込めて試合をしていたとなると、益々勝たせてあげられなかったことへの後悔ばかりが思い出されます。今回もデフリンピックに参加することができたことで数え切れないほどたくさん学ぶことがあり、私にとって貴重な経験になりました。世界という大きな舞台でサッカーができたことは私にとって大きな財産であり、価値のあるものだと思います。本当に周りの環境にとても恵まれていたと思い、感謝の気持ちでいっぱいです。4年後のデフリンピック会場はトルコのアンカラですが、今回の無念を忘れることなく技術的にも精神的にも向上し、日本代表として選ばれるように日々成長していきたいと思います。これからも応援よろしくをお願いします。

選手 村田 繁

まず、今大会で5試合中4試合を右SBとしてフル出場させていただいた、柴田監督及びスタッフに心から感謝申し上げます。

①敗退の原因について

1つ目は、メルボルン大会同様、メンバーの総入れ替えです。初戦から次第にエンジンを上げていく世界強豪国と違い、日本は常に全力投球しなければなりません。

2つ目は、環境の順応不足です。ソフィアやアンカラは1000mの準高地であり、日常生活に支障はなくても、極度の

プレッシャーの中で気温が高く、世界レベルのフィジカルと技術を持った相手との90分間は、日本にとってあまりにも影響が大きすぎました。私は身体が慣れるのに1週間ほどかかりました。3試合目までは身体が重く、とてもしんどかったのですが、4試合目以降からは自由に走れる身体になっていました。初戦からこの状態であればと心底思います。

また、90分間での戦い方を選手達が熟知できていなかったことです。ロシアやアルゼンチンは技術こそ日本と差はありませんでしたが、90分間での戦い方が非常に上手くしたかでした。

②4年後にメダルを取得するためには

総入れ替えを不安視した選手が指摘をしましたが、結局1名を戻しただけでした。

環境の順応化については、1000m前後で天然芝という立派な運動公園がある長野県茅野市で、3泊4日の合宿をするなどの対策を考慮し、4年後のアンカラに備えたいです。

日本で90分間の試合ができる環境は、全国大会の決勝戦、全日本ろう者サッカー選手権くらいでとても少ないです。勝つためのしたたかさは、合宿よりもこういった試合から身につくものであり、優勝したロシアは3ヶ月前から合宿を行っていますし、他国も長いスパンで準備に取り組んできたようです。日本の場合はほぼビジネスマンであるため、このような環境を整えることは難しいですが、先に述べた合宿の対策だけでも取り組むことができれば、十分にメダル圏内に踏み込める余地はあると考えます。

選手 桐生 聖明

①成績に対する自己評価

アジア王者としての誇りを抱き、デフリンピックでは優勝の目標を掲げて臨んだ結果、予選リーグで一勝もできずに予選敗退してしまいました。周りからの期待が大きかったのか、見えないところでプレッシャーを感じていたのかもしれませんが、自分としてはベストコンディションで臨むことができたのですが、大会は過去最悪な順位となってしまう、ショックが隠せませんでした。日本から応援してくれた方や会社の方の期待に応えられず、申し訳ない気持ちです。結果は現実なのでその悔しさをしっかり受け止めて、次に繋げていきたいと思います。

②反省・まとめなど

台北デフリンピックの時は自分のプレーに満足できず、不完全燃焼で終わってしまい、とても後悔していました。この経験を踏まえた2度目のデフリンピックへの挑戦でした。環境に慣れるのは容易ではなく、時差ボケや空気が違ったので大変でした。試合を通して思ったことは、先取点を奪った後の5分間内で点を取られてしまうという欠点が出てしまったことです。ロシア戦はロングボールやDFとDFの間に狙われ、インターバルのように走らされました。DF、MF、FWの縦距離がワイドなところがあり、お互いのカバーが遅いと感じました。個人の反省はゴールに関わるプレーを貢献できなかったことです。

デフリンピックは4年に1回なので貴重な経験になりました。選手をサポートしてくれたスタッフの方、応援してくれた家族と会社の皆様、色々とうございました

選手 吉野 勇樹

今回の日本代表は各個人のレベルもありチームとしてのまとまりもあったので、メダルを勝ち取れるかもしれないという期

待がありましたが、16 チーム中 14 位と納得のいかない結果になってしまい、大変悔しく思います。反省及び課題点を3つ挙げます。

まず1つ目は、選手はろう者であるのに対し、監督は健聴者だったため、意思疎通がうまくいかず、もどかしく感じる部分がありました。

2つ目は、チームとしての戦い方を再考することです。日本はこれまでコンパクトに守り、パスサッカーで攻めていくといった戦い方をしてきましたが、アジア相手には通用してもヨーロッパや南米相手には通用しませんでした。ヨーロッパや南米の戦い方というのは、攻守のメリハリがあり、選手それぞれの役割がはっきりしていました。日本はそういった面で曖昧なところがあるので、もっと個人のレベルを上げて1対1で勝負する強さを示していけば世界でも戦えるようになるのではないかと思います。

3つ目は、サッカー環境を確保することです。国内でのデフリンピックの知名度がまだまだ低いので、まずはそれを上げるための様々な活動をしなければなりません。知名度が上がれば、会社の理解をいただくこともでき、サッカー環境も良くなると思います。また、日本代表合宿も月に1回は実施し、チームとしての成熟度を高めていかなければならないと思いました。今回のデフリンピックで達成できなかった悔しさを忘れずに、4年後に向けて日々スキルアップしていきたいと思います。

選手 伊東 高志

結果は14位でした。前回の台北デフリンピックの成績より上回ることもできず、みっともない気持ちと悔しい気持ちが残っています。協会の方々や応援して下さった方々に申し訳ない思いでいっぱいです。日本人の真面目さや仲間を大切にすることをチームワーク意識の高さは評価したい反面、どうしても理解しがたい面もあります。それは、日本人の決断力です。監督の考えと選手の考え方を統一し、コミュニケーションをしっかりとれば良かったと思います。相手を尊重するとは、お互いが遠慮することではなく、自分が持っている意見を真正面からぶつけ、徹底的に話し合うことこそ本当の意味での尊重なので、時間を大事にして進めてほしかったと思います。監督と選手がもっとお互いに信頼し合えれば良かったと思いました。

日本のサッカーレベルを向上するためには、現状の練習の質を変えた方が良くと思います。今までの練習を見ていると集中していないように思えます。選手個人がもっと集中するように指導者からも注意してほしいです。大切なことは、練習でも全力を出し切る癖をつけておくことです。試合になったら頑張るという考え方では、話になりません。どれだけ練習しても試合でそのすべてを出し切るのは難しいです。相手も体当たりでぶつかってきますので、スタミナ面も鍛えなければなりません。試合の最後まで、ずっと全力を出し切るためには何をすべきなのか、それは練習です。試合中緊張して疲れた場面でも全力が出せるために何度も何度も練習することです。練習でしていないことをぶっつけ本番でできると考えるのは間違っています。その小さな努力の積み上げが日本全体のレベルを上げることに繋がりますので、若手達は今回のデフリンピックで輝いているメダルを獲得することを期待しています。本当にいろいろとありがとうございました。

選手 古島 啓太

①成績に対する自己評価

初めてのデフリンピック出場でした。今大会で、16 チーム中 14 位という結果になりましたが、自分としては、まだまだ上を目指せると感じました。

デフリンピックで優勝するために、社会人チームに入り、個の力を磨き、日々のサッカーに努めましたが、チーム連携が思う通りに行きませんでした。

自分の課題はスタミナとフィジカル面であり、まだまだ追い込めます。90 分間走りきる体力は持っていますが、2週間持続できる体力が必要です。オーバートレーニングにならないよう、体力をキープすることは非常に難しいところでした。今大会の悔しさを忘れずに、4年後に向けて、自分の体をキープできるように頑張っていきたいと思います。

②反省・まとめ

日本代表はなぜアジアに勝ってヨーロッパには勝てないのか、これが一番の課題です。競り合いや、スピードでは明らかに負けていますが、日本はすばしっこさを持ち合せています。しかしデフリンピックでは、何も活かせませんでした。日本代表には特徴やこだわりがないため、選手がただサッカーをし、個の力で勝負しているように感じました。他国と異なったサッカー環境も、このような結果を招いた要因だと思います。合宿の数を増やし、連携やコミュニケーションの場を作らないと何も上達しません。自己負担はかかりますが、協賛してくれる方を積極的に探せば、見つかると思います。選手各一人ひとりの意識の問題でもあります。

今回は皆が積極的な行動をしたことで、デフリンピックの知名度は上がったと感じています。今大会を通して感じたことをこれからどう活かしていくかが問題になりますし、どのように意識していくかが4年後のデフリンピックの結果にも出てくると思います。自分も積極的な行動を心がけて、良い成績を残していけるよう頑張っていきたいと思います。

選手 竹内 裕樹

私は、デフリンピックという貴重な経験をさせていただきました。アジア予選を優勝という結果で勝ち抜いての挑戦でしたが、結果は16ヶ国中14位という厳しいものになりました。予選リーグでナイジェリアと同率、コイントスで4位になり最下位決定戦に回るという不本意な部分もありましたが、予選で勝てないという厳しさを目の当たりにしました。

大会に挑むに当たり他国は平均1ヶ月の合宿を行いブルガリアに来ていましたが、日本はビジネスマン、練習・合宿なしで大会に参加というどうにもならない問題もあるということも気付かされました。

他国の選手は体が大きく当たりも激しいため、パスの繋がりができず力不足を痛感したのでリベンジしたいと燃えています。

今回はトルコデフリンピックですが、その前にアジア予選を突破しなければなりません。もちろん二年連続アジア NO. 1 になるよう目指していきたいです。

今大会に向けてたくさんの応援、メッセージをいただきまして本当に感謝しております。期待に応えられず申し訳ない気持ちでいっぱいです。

今後とも日本代表に選ばれるよう上を目指して精進してまいりますので、引き続き応援をよろしくお願いします。本当にた

くさんのご声援をありがとうございました。

選手 綿貫 俊基

①成績に対する自己評価

協会合宿だけではなく、自主合宿を行うことでデフリンピックに向けて準備をしました。予選リーグではロシア戦、ナイジェリア戦と連続でゴールを決めることができ、アシストやゴールまでの流れを作ることができました。

私はFWなので、1試合で2点以上取るべきだったと思います。試合までにベストな状態をキープすることや疲労回復への意識が足りなかったと反省しています。

②総括

予選リーグではナイジェリアと同率となり、大会規定のポイントスで予選最下位という結果になったことは煮え切らない思いでいっぱいでした。順位決定戦では16チーム中14位という残念な結果になりました。予選では初戦のロシア、次戦のナイジェリアと先発で出場しそれぞれ1ゴールを決めることができ、チームに貢献できました。予選はトーナメント進出をかけた大事な試合であり、その中で貴重な1点を取ることはFWとしての仕事なので、責任感を持って臨みましたが、総合点で負けてしまいました。

アジア圏では勝利できても世界の壁は厚く、特にフィジカルや連携の面では差があると感じました。ロシアやウクライナなどは何ヶ月も前から合宿をしていると聞いていますが、日本は連休だけしか合宿ができず、年に2、3回であり、大会前の準備がまだ足りなかったと思います。この経験を生かし日本に足りない部分を強化してサッカーの発展に活かしていきます。

選手 渡邊 亮平

必ず優勝すると仲間達と誓いました。僕はこの大会で「攻撃の起点になる」とこと、「司令塔として全体のバランスをとり、攻撃のリズムを作る」とことの2つを意識しました。結果としては、初めのロシア戦に大敗し、上手く自分たちのサッカーをすることができませんでした。世界の選手は体格がいいので、シンプルにロングボールを裏のスペースに入れてきました。日本は失点を恐れ、DFラインが下がり過ぎていました。FWは前線で孤立し、ボールをキープすることができませんでした。僕はDFにもっとラインを上げるように伝えましたが、下を向く選手も多くコミュニケーションをとれないところがありました。もっと周りを見てプレーしなければいけないと思います。また、中盤でのパスミスが多く、カウンターを狙われたことでDFラインを上げることができなかったと思います。また、大量得点が必要なアイルランド戦では、積極的にボールをもらい攻撃のリズムを作ることを意識しました。大きな選手に対し、ボールとの間にしっかり体を入れてキープし、攻撃を組み立てました。日本のチャンスも多くありましたが、うまく活かせず、得点できませんでした。世界大会では、アジア大会に比べマークが早く、ボール際での当たりも激しいと感じました。そのため、少ないチャンスで得点できる決定力が必要だと思いました。僕ももっと全体をみて、バランスを取らなければいけないと思いました。今大会では14位という悔しい結果でしたが、日本代表と世界との差を感じることができました。ロングボールや鋭いカウンターへの対応や、少ないチャンスで得点できる決定力が

必要です。また、チームの中で約束事を決め、得意な攻撃パターンをつくることも必要だと感じました。そのためにも、もっと合宿などで話し合いを重ねていく必要があると思いました。

選手 河野 翔

■個人成果について

今大会は4試合出場しましたが、無得点という成果でした。相手DFの方が体は大きいですが、裏へ回り込み、何度も決定機会を作り出すことはできましたが、シュートの精度が悪く得点まで繋げられませんでした。得点へ繋げる準備、平常心が欠けていたことが今大会を通しての課題となりました。

■今大会全体を通しての感想

昨年のアジア大会で初優勝し、この4年間で確実にレベルアップしてきましたが、それは世界も同じでした。今回はアジア王者として世界に挑みましたが、結果は14位でした。世界と戦える力はあったと思いますが、チーム全体として完成していなかったことが今回の大きな敗因です。強化合宿の実施回数、戦術確認などの準備不足、環境に慣れるまで時間を要したことなど様々な要因が挙げられます。優勝したロシアは大会前に3ヶ月間の国内合宿、上位国は日本より1週間以上前に現地入りし練習していました。日本は過去最強といわれるほどのベストメンバーで挑みましたが、どんなに良い選手が揃ってもチームとしてのカタチが仕上がっていなければ勝てません。また国から報酬と生活が保障されるような他国は、選手のハングリー精神が日本よりもはるかに強く、世界の壁を思い知らされました。

■今後の日本ろう者サッカー協会について

強化合宿、国際親善試合の回数を増やしていかなければ、優勝はできません。費用の面で負担や様々な課題はありますが、デフリンピックで勝ち上がる為には、これ程の対策を講じる必要があると思います

■総括

この4年間限られた時間内でトレーニングしてきました。そして同じ聴覚障がい者の仲間、スタッフと共に厳しいアジア予選を戦い抜き、世界に挑むことができとても誇りに思います。日本ろう者サッカーは4年後のデフリンピックに向けて、また一からのスタートになりますが、今大会を通して得た経験を糧にし、今後のろう者サッカーの発展のためにも、努力を続けていきたいと思っています。

選手 松本 弘

①成績に対する自己評価

今大会は4年前の台北での経験をふまえた上で準備をしてきました。中堅として、ベテランと新しい選手のつなぎ役に徹しました。また、日の丸の重みと責任感です。チームは団結し、アジア王者にもなり、このチームは世界一になれると確信しましたが結果は完敗でした。アジア各地からも期待されていたのかもしれない考えると、悔しさが倍増します。日本チームには厳しい言葉をかける者が少なく、自分に厳しく相手に優しい選手が多いように感じました。捉え方次第で、対人関係に亀裂が生じる可能性もありますが、その優しさが、詰めの甘さ、得点のチャンスを逃すなどの敗因のひとつになりました。遠慮はいりません。強い気持ちが合わさりチームができるということを次の代表に伝えたいです。

②個人の反省

また、慣れない長距離移動と環境で体と頭が固く、反応や判断が鈍くなり、いつものプレーが発揮できず、オフェンスパターンも制限されてしまいました。そういう時こそ個人で打開する勇気や、アイデアを膨らます必要があるのですが、精神面のコントロールという部分が欠けていました。

③チームとしての反省

国内合宿、対外試合などの回数が少ないことが敗因です。強豪国に行き、組織の仕組みやサッカーへの取り組み等を肌で感じることも大事だと思います。日本人のフィジカルでは限度がありますし、日本人特有の団結力だけでは補うことができない面が多々あります。疲労や怪我を考慮することも大事ですが、時差をふまえた上でのフィジカルコンディションをあげていくことが重要ではないかと思っています。

決勝トーナメントの数試合を観戦して思った事は、ミスが勝敗を左右するということです。スタメン、ベンチメンバー、監督スタッフを含めた25人がミスをしないようケアやフォローをすることがいかに大事なかと改めて思いました。相手のミスを突くという意味では今回のロシアはさすがだと思いました。相手の弱いところを徹底的に突き、相手のミスから奪ったボールを得点にする、自分たちはミスを最小限に抑えた結果、ロシアは世界王者になりました。その試合から得たものや感じたことを次回デフリンピックに活かしてほしいと願っています。

選手 中島 正行

2回目のデフリンピックに出場し、今回も表彰台に立つことはできませんでした。台北・ソフィアと2回のデフリンピックでチャンスをもらいながらも、表彰台を逃したのはとても苦い経験でした。

応援してくださった皆様にも本当に申し訳なく思います。大会が終わった途端に、日本は4年後もこの先もずっと同じ結果になるのではないかという焦燥感に苛まれていました。

チームの雰囲気は決して悪くなかったと思いますし、選手一人ひとりのコンディションも今までで良かったと思います。にもかかわらず、日本はなぜ良い結果を残せなかったのか、その根本的な原因を突き止めることが急務であると考えます。

「失敗は成長するためのステップ」となることを信じて、今後も日本チーム一丸となってメダルを目指して努めていきたいと思っています。

サッカーチームはソフィア市から離れたところで生活しましたが、日本だけでなく、他国が滞在しており、さまざまな国の代表選手同士が暮らす、まさに選手の村でした。私が今まで体験したことのないような貴重な体験ができ、とても感心しました。

最後に、私がそんな貴重な体験をできたのも、今まで支え続けてくれた方々のおかげだと感謝しています。皆様の応援や声援は、本当に励みになりました。ありがとうございました。

選手 塩田 知弘

①成績に対する自己評価

私は、ろうサッカーを始めてちょうど3年です。当初は健聴者の世界しか知らなかったため手話もできず、輪に入ることが難しかったです。アジア予選に初めて参加した時もコミュニケーションがうまくとれず、自分の意見を伝えるには手話が必

要という自らの課題を作り、手話サークルやデフサッカーのイベントにできるだけ積極的に参加しコミュニケーションをとってきました。おかげで一年後にはある程度手話もできるようになり自分の世界が広がりました。これでサッカーに打ち込めると思いきや、サッカーの為に仕事を休むのはありえないと職場の上司から厳しく言われ続けました。デフサッカー日本代表という立場は自分を大きく成長させるということを理解してもらおうと、自ら被災地へボランティアに行き、企業から任された仕事に対し、聴覚障がい者ならではの結果を出し続けました。ついで2012年のアジア予選では、優勝という偉業を成し遂げるなど結果を残してきました。そうした中で会社の考え方も変わり、やっと理解してもらえるようになり、ユニクロがスポンサーになってくれました。自分にとってベストな環境で迎えた初めてのデフリンピックでは、14位という全大会を下回る結果となり、非常に後味も悪く、申し訳ない気持ちでいっぱいでした。しかし、サッカーに全力で打ち込める環境を自ら作れたことは非常に大きなメリットです。4年後があるので、本当の意味でスタートはこれからだと思っています。自分だけではなくチームにもスポンサーがつきサッカーに打ち込めるような環境も作り出し、デフサッカーの世界を大きく変えられるように貢献していきたいです。

②反省・まとめ

一番の反省はろうサッカーをまだ理解しきれていない部分があったことです。プライドを高く持ちすぎ、スタメンに選ばれないと不満に感じてしまうこともありました。試合に出なくても、チームの為にという行動力がまだまだ足りなかったです。これからの課題は本当の意味でチームリーダになり、チームをけん制していけるよう磨いていきたいと思っています。デフリンピックを経験して課題は山積みですが、世界の壁は乗り越えられると信じています。

選手 白井 隆

①成績に対する自己評価

今大会の成績は、参加国16ヶ国中14位と、前回の台北デフリンピックの成績(12位)を超えられませんでした。1年前のアジア大会で王者となり、その誇りを持って、今大会に臨みましたが、世界の壁は厚いことを思い知らされました。

前大会当時の代表は世界に通用するレベルにあったと自信を持ち、日々切磋琢磨しながら課題克服に力を注ぎました。また、当時よりレベルの高い人材が多く集ったため、さらに強くなっていると確信を持っていました。しかし今大会では、ゴールまでの距離がまったく縮まらず、レベルの違いを大きく感じました。世界に勝つためには、メンタル面、戦術展開スピード、決定力不足、フィジカル面など課題がたくさんあります。その中でもメンタル面が劣っていると、基本的なミスを招いてしまいますし、決定的なチャンスはたくさんあっても、掴むことがなかなかできません。

課題を克服するには膨大な時間がかかります。個の力を高めつつ、チーム内のレベルアップが必要になりますので、合宿の頻度を増やさなければならぬと感じました。

②反省・まとめなど

前回の台北デフリンピックでは、インフルエンザの疑いがあり、試合に出られないという悔しい思いをしました。この悔しさをばねにして4年間切磋琢磨し、今大会に臨みましたが、1試合しか出られず、ベストパフォーマンスを発揮できずに途中

交代となってしまいました。努力不足だと痛感しましたが、ベンチメンバー全員で、スタメンができる限りベストパフォーマンスを出せるようなフォローはできたと思います。また、若手とベテランの間で確固たる絆も築けました。今大会で得られた課題や貴重な経験を無駄にせず、次世代に語り継いでいきます。私自身も今回のデフリンピックに向けて、日々切磋琢磨していき、必ずメダルを獲得します。

日本代表の為に4年間応援していただいた家族、職場や協会関係者の皆様に心から感謝致します。

選手 野間 三夫

3回目のデフリンピック出場となりました。日本代表に選ばれてとても光栄です。初戦ロシアは大金星を獲る気持ちでいきましたが、ロシアは戦術に長け、メンタル面も強かったです。後半ロスタイムで出場しましたが、ゴールは遠かったです。気持ちを切り替え、ナイジェリア戦に臨みました。前半35分に出場し、残りの10分で攻撃の流れがよくなり、先制点を取りました。後半20分で2点目を取った時、これで、勝ったと油断した隙に1点目を取られ、日本は慌ててしまい、5分後には2点目に取られました。日本はあきらめずに頑張りましたが、引き分けでした。決定力とメンタル面が弱く感じました。次のアイルランド戦は、勝てば2位になるので、多めに点を獲ろうと思いましたが、出場の機会がなかったので、ベンチからみんなへエールを送りましたが、結局負けてしまいました。ナイジェリアと日本が同率3位、コイントスの結果予選リーグ4位となりました。13位～16位決定戦のサウジアラビアとの対戦は、攻撃のリズムが良く、大勝しましたが、次のアルゼンチン戦はベテラン勢のメンバーと一緒に出場し、全力で対戦したものの負けてしまい、日本は14位に終わりました。世界一に獲ろうと思っていたので、とても悔しく、まだまだ気持ちが足りなかったと思います。一番の敗因はメンタル面だと思います。

私は12年間代表を続けられて良かったです。若手には、メンタル面をもっと強く持ち、次のデフリンピックに出場してほしいと強く願っています。メダルを獲れる環境を作り、スポンサー支援が更に広がれば、サッカーも世界一になれる可能性があります。今回のデフリンピックは本当に良い思い出になりました。ありがとうございました。また4年後にはいい結果を出せるように頑張っていきたいと思います。

サッカー競技女子チーム

監督 福永 久代

(1)選手の選考について

前回デフリンピックが初出場だった女子サッカーは、さらなる発展を目指し2009年11月から選考会を実施し、2012年11月に監督へ就任することになりました。コーチ時代も含め4年間にわたり次世代の育成ならびに強化を図ってきました。全日本東西対抗戦や代表候補合宿、海外遠征、世界選手権などの経験を通し、最終的に「世界で勝てるチームづくり」が実現できる選手を選考しました。

攻撃面では、動き回って相手を攪乱するだけのスタミナがあること、貪欲にゴールを狙い得点が期待できること、中盤から

の飛び出しやラストパスが冷静に出せることを重要項目とし、守備面では献身的かつ堅実な守備で安定性を求め、体を張って止める度胸のある選手を選考しました。GKに関しては堅実なプレーと、ポジションの役割上リーダーシップのある選手を選出しました。

また、協調性や責任感、使命感などをしっかり自覚しチームのために動ける人間性も併せて考察し、下記18名を最終メンバーとして決定しました。

【ろう者女子サッカー日本代表】

背番号	氏名	ポジション	年齢	所属
1	芹澤 育代	GK	28	東京都
2	濱田 梨栄	DF	28	東京都
3	大谷 遥佳	DF	15	静岡県
5	坂田 博美	DF	32	東京都
6	井部 絵里子	MF	31	兵庫県
7	川畑 菜奈	MF	23	神奈川県
8	御園 裕未	MF	26	埼玉県
9	首藤 麻衣	DF/MF	30	東京都
10	中井 香那	FW	24	大阪府
11	岩渕 亜依	FW	19	茨城県
12	原田 明奈	DF	26	静岡県
13	寺井 名美	MF	37	静岡県
14	仲宗根 祥子	MF	30	神奈川県
15	星野 陽子	MF	28	東京都
16	宮田 夏実	FW	15	兵庫県
17	佐藤 愛香	GK/DF	28	神奈川県
18	酒井 藍莉	FW	14	静岡県
20	大島 彩香	DF	21	兵庫県

(2)成績一覧

7ヶ国を2グループに分け予選リーグ戦を行い、戦績により順位決定トーナメント戦を行いました。

【予選リーグ】

7/26	Poland	2-0	Japan	Group A
7/28	Greece	0-10	Japan	Group A
7/30	Japan	0-7	U.S.A.	Group A

グループA…1位アメリカ、2位ポーランド、3位日本、4位ギリシャ

グループB…1位ロシア、2位イギリス、3位ドイツ

【順位決定トーナメント】

8/1	Japan	0-3	Germany	5-6位決定戦
-----	--------------	-----	---------	---------

最終順位…1位アメリカ、2位ロシア、3位イギリス、4位ポーランド、5位ドイツ、6位日本、7位ギリシャ

(3)成績と評価

【7月26日9：30～予選1戦目】

●日本 0－2 ポーランド

(退場：後半20分、日本 #1 芹澤)

初戦は必ず勝ち点を取ることが重要でした。昨年の世界選手権の反省から、入り方が悪くならないよう、現地入りしてから練習やアップを良い雰囲気で行進していき試合に入るまでの流れは良かったです。しかし始まってみると相手の速さや足の長さに対応できるまでに時間がかかりました。早々にミスからの失点を防ぎ切れなかったものの、チームは盛り上がりを見

せ、良い展開も生まれました。右サイドがうまく展開できていなかったの前半のうちにメンバーを代え、左右から攻撃を仕掛けられるようになりました。

後半になると怪我や疲労の見えた選手は交代を余儀なくされ、3人という交代枠を使い切った後、GKのペナルティエリアを飛び出してのスライディングが危険行為とみなされ退場となり、非常に痛手でした。急遽DFの選手をGKにさせたため反撃の糸口も息をひそめてしまいました。窮地に立たされた日本は粘りを見せましたが、最後のプレスが効かずロングシュートから追加点を奪われ敗戦となりました。

【7月28日9：30～予選2戦目】

○日本 10－0 ギリシャ

(得点者：酒井3、井部・濱田2、寺井1、佐藤1、御園1)

ギリシャは初戦で米国に0-11と大敗していたため、日本としては選手の疲労を考慮しなるべく先発メンバーを休ませながらも、中盤の展開ができて得点が取れるように、フレッシュな攻撃陣を配置し得点を図りました。試合開始直後はなかなか点が入らず我慢の時間帯が長かったのですが、勢いづいてからは敵陣までボールを運ぶ流れもできた中で得点を重ねることができました。時折ディフェンスの裏を狙われスペースに走られることもあり、前がかりになっている時の守備意識の欠落、攻守の切り替えの遅さ、相手の攻撃を早めに潰せなかったことが反省として残りました。

前日のミーティングでは1人1点を目標に掲げました。これは「どこからでも点が取れる」という印象をつけるためですが、ファウルにより得たPKもGK佐藤がきっちり決め、目論見どおりとなりました。

中井主将の体調不良と芹澤副主将の前節退場処分による欠場の代わりを井部ゲームキャプテンがよくまとめ上げ、チーム全員で盛り上がり勝ち取った試合となりました。

【7月28日9：30～予選2戦目】

●日本 0－7 U.S.A.

(警告：後半15分、#2濱田／後半17分、#7川畑)

相手は強くて体格も良く、どこからでもフォローが入るチームであり、とにかく最低限やるべきことを指示しました。米国はFW陣ら3人が主に得点を重ねており、さらに中盤で起点となる選手を要注意人物とし、これらキーマンを押さえるよう布陣を組みカバーリングを指示して挑みました。選手達はそれぞれ役割をこなし攻撃のパスワークもできたことは収穫でしたが、体幹が弱いところを露呈し後手に回ってしまいました。最後の一步が届かず失点、また、こちらの集中が切れた隙を掴まれ得点を許し、注意していたFWら3人に7得点を許す結果となってしまいました。ただ、防戦一方ではなく攻撃できたことは確実に成長を示していました。あと一步ゴールに近づけるよう個々のスキルアップが必要です。

この結果により日本はグループ3位となり、ドイツと5、6位決定戦を行いました。

【8月1日9：30～5、6位決定戦】

●日本 0－3 ドイツ

事前に提示されていた対戦表ではグラウンドが「Pitch4」でしたが、現地に着くと得点ボードや更衣室が「Pitch2」で準備されていました。「Pitch2」は天然芝、「Pitch4」は人工芝であり選手にとっては重要なピッチコンディションなので、連絡不備を改善していただきたいです。

試合前に、相手GKがファブルしたところを必ず詰めること、そのために積極的にシュートを打つこと、攻撃としては相手DFラインを見て有効的なパスワーク(サイド攻撃の有効性)

を説明し、相手の中盤2人のキーマンを押さえることを指示し挑みました。前半に中井主将の怪我也有り、全員が実際のピッチで対応できなかった部分もありますが、ゴールへ向かう意識は統一できました。前半は良かったのですが、後半は今までの試合の中で最悪の出来でした。決定力不足が否めません。

守備では、後ろ向きの相手FWに対し間合いを取ってしまう悪い癖が顕著に出現し、前半は何かカバーし合っていました。後半はすべてのポジションにおいて出足が遅れるようなプレーばかりで、“先を読むプレー”がなくなっていました。何よりも、劣勢で残り時間もわずかという状況において、アウト・オブ・プレーになった時はとにかく早くボールを拾ってリスタートさせるという行動が微塵もなく、勝とうとする気迫がまったく見られませんでした。

課題の残る試合でしたが、日本のサッカーは著しく成長しています。経験を積んだことでさらなる成長が期待できます。

尚、試合後GKが熱中症で倒れてしまいました。コンディションの注意が不足してしまったことはスタッフの課題です。

(4)チーム体制と各コーチの役割

本来はフィールドコーチも必要です。人事の都合により不在でしたが、現場スタッフ4、5名と協会スタッフ2名以上必要であるため、派遣人数については健闘してほしいです。

- ①監督／福永 久代 …総指揮、練習・行動計画の立案決定、指導進行(コーチ兼務)
- ②GKコーチ／北 一行 …監督補佐、GK強化指導
- ③トレーナー／石渡 あゆ未 …選手のコンディショニング管理指導、怪我の予防処置
- ④アシスタント／立川 智隆 …トレーナー補佐
- ⑤アシスタント／中村 祥子 …JDF Aや本部との連絡調整

(5)競技及び渡航スケジュール

7/21 結団式<ホテル日航成田>

22 成田出発(日本出国) → ブルガリア到着

23 自主練習、ミーティング

24 公式練習、ミーティング

25 公式練習、ミーティング、男子サッカー応援

26 試合(対ポーランド)、開会式

27 公式練習、ポーランド戦のビデオ検証

28 試合(対ギリシャ)、コンディショニング

29 公式練習、ギリシャ戦のビデオ検証

30 試合(対米国)、コンディショニング

31 公式練習、米国戦のビデオ検証、男子サッカー応援

8/1 試合(対ドイツ)、コンディショニング

2 コンディショニング、ドイツ戦のビデオ検証、男子サッカー応援

3 自主練習、ミーティング

4 女子サッカー決勝(米国対ロシア)観戦、閉会式

5 解団式<ロディナホテル／ソフィア>

6 ブルガリア出発

7 成田到着(帰国)

7/23の自主練習は女子サッカーの練習グラウンドが確保されていなかったためコーチングを切り替えて行いました。また、8/3の自主練習に対応いただき、感謝しています。

(6)大会の競技運営などの報告

ホテルから試合グラウンドが近く、ピッチも4面あり各試合の移動に負担もなく非常に良かったのですが、ホテル周辺にお

店がなく、試合はもちろん試合以外の場面でも水・氷等の手配には苦労しました。

ホテルにおいては、朝食時間が遅く、試合当日は軽食になってしまいました。また、練習時間も正午を挟むなど食事時間に苦慮しました。日々のタイムテーブルはコンディショニングのため非常に重要であり、試合を想定したスケジュールが組めると良いと思います。

一番改善を求めたい点は情報伝達についてです。サッカー競技のみ宿泊ホテルが遠方であったとは言え、あまりに情報が少ない上に変更が多く、行動計画が立てにくい状態でした。開会式・閉会式・解団式、移動バスの連絡調整等様々な面でなかなか情報が入らず、解団式では男女サッカーが出席することになっていることすら前日まで伝わっていませんでした。

競技の面でも最終戦のグラウンド変更、練習場や移動時間等、必要な情報が足りない場面が多々見られました。

(7) 競技規則の適用（問題点など）

TD 会議においてアウェイチームがサブのユニフォームを着用するよう指示がありましたが、掲示された各国ユニフォームはフィールドプレイヤーのカラーだけだったため、GK が着用するカラーが不明でした。日本はホームの最終戦で相手のサブ（赤）と同色であった GK のユニフォームを敢えてサブ（黄色）で用意しました。実際は相手もホーム（白）を着用したためチーム同士は何の問題もなかったのですが、審判着が黄色であったために日本 GK ユニフォームをキックオフ直前に変更するという事態になりました。それまで審判と同色を着ていたにも関わらず、最後だけ指摘されることに違和感を覚えました。こういったトラブルを避けるため、ユニフォームの決定は審判を含めて前日または当日のキックオフ 1 時間前までに協議できると良いです。

(8) 大会参加までの準備状況

本大会まであと 8 ヶ月という時期に監督を引き継いだため、前監督の構想を軸に戦術を浸透させるよう進めました。4 年間にわたる合宿等での対外試合では毎回良いチームづくりができました。基礎の徹底、共通理解、共通意識を含め、何度も繰り返しやってきた 4 年間の積み重ねは確実に選手たちにも入っていましたし、昨年は世界選手権を経験したことでチームとしてのまとまりもできていたと思います。また、大会中の生活についての心構えや準備という面でも良い経験となりました。

個々を見ると、チーム競技で選手交代枠も限られた中で大会目前の怪我人が多く、問題意識が薄いように思えました。結果的に選手達はお互いに切磋琢磨し、本大会には高め合って臨んでくれました。決して合宿等の回数は多くありませんが、自主的に開催した直前合宿は本当に良い機会となりました。

チームサポート側も、荷物の仕分けや予備品などぬかりなく手配していただきましたが、現場側もサポート側も、最後は時間に追われながらの準備となったため、余裕を持って備えることも大事にしたいです。

(9) 反省・まとめなど

大変多くの方々にご支援、ご声援いただき、メディアにも取り上げられることが急増した中で、結果を残せなかったこと、監督として勝利へ導けなかったことは非常に残念で申し訳なく思います。個人的には、敗戦であるときこそ無得点で終わらせないことを目標の 1 つにしていたが、思惑が外れてしまいました。

初戦の惜敗が悔やまれますが、全体を通しての反省は、前後

半立ち上がりと終了間際の 5 分の集中力が足りず、失点があったことです。サッカーでは一番危険な時間帯と言われているだけに、経験や知識不足でもあります。

しかし、どの選手も確実に成長を見せ、試合中もパスワークで攻撃の形ができ、各試合前に指示したポイント（自分の役割）をしっかりと実現してくれていました。ただ、そこに捉われ過ぎて他のことが考えられなくなってしまった部分があります。世界の壁を乗り越えるためには、言われたことだけではなく $+ \alpha$ が考えられる選手の育成が必要です。また、上背のある相手に体をぶつけるにも体幹が弱く、簡単に態勢をくずしてしまっていました。基礎的な技術とともに基本的な筋力、体幹を鍛える必要があります。

デフサッカーは発展途上であり、まだまだ成長できるのびしろがあります。判断力、正確性、体幹づくりを強化し、ぜひ次世代の飛躍を期待したいと思います。

本大会が開催できて本当に良かったです。各関係者に感謝するとともに、より良い大会が今後とも開催できるよう願っています。

GK コーチ 北 一行

● 団体内の担当とその内容

(1) GK 2 選手のトレーニング計画の立案・実施

練習日は公式戦に向けて基本的な練習（キャッチングやシュートストップなど）や試合で起きる状況を想定した練習を主に実施しました。

(2) 相手チームの戦力分析

次回対戦するチームの試合ビデオを見て、ストロングポイントやウィークポイントの分析を行いました。

(3) 監督の補佐・選手への助言

全日程の様々な状況において監督のサポートを行いました。また、全体練習で気づいたことを選手にアドバイスしました。公式戦ではスコアシートの記録を担当しました。

● 反省、まとめなど

(1) チームについて

この 4 年間、合宿や韓国遠征、世界大会を通じ、台北デフリンピックと比べると諸外国との力の差を縮めることができたと考えます。しかしこの大会において最低でも 5 位以上、そしてメダル獲得を目標としていましたが結果として悔いの残るかたちとなりました。

課題・反省としては①基本的なボールを止める、蹴る「質」。②ボールを奪った後の攻撃。③運動量の向上。が考えられます。①に関しては、飛んできたボールを 1 回で止められなかったり、相手のプレッシャーがないのに相手にパスを出してしまったり、味方が受けやすいパスを出せなかったという場面が多々ありました。②はボールを奪った直後のパスがほぼ 2 回以内で奪われてしまい攻撃のチャンスがつぶれてしまう場面がありました。逆に 3 回以上つながると相手ゴール前まで効果的なチャンスがつくれていたので、質や意識を高める必要があると考えます。③は体格面で劣る部分を運動量の多さで補い、効果的な攻撃や守備ができなければならないと考えます。

(2) GK について

今回のデフリンピックに向けて 4 年間、主に GK 2 選手（芹澤育代・佐藤愛香）育成に携わりました。二人とも経験は豊富ですが、もう一度原点に返り、GK として必要な基本スキル

(様々なキャッチング技術・ポジショニングや移動の方法など)の確認やの苦手とするスキルを補う練習を中心にを行い、さらに台北デフリンピックでの反省をふまえ、その課題と照らし合わせた状況を設定した練習などを行ってきました。合宿中は GK ミーティングを頻繁に行い、今日実施した練習の意図や成果課題をパソコンなどで提示、選手からの意見を求めて共通理解を図りました。

この大会において芹澤は3試合、佐藤は1試合の出場となりました。両者とも今までのトレーニングの成果を十分に発揮し、良いパフォーマンスを見せました。特に相手のシュートに対しての準備(ポジショニング確認のタイミングや構え方など)は良い形で対応できるようになりました。

芹澤は最終戦のドイツ戦では、相手からゴール前へのロングフィードに対して果敢に前に出て体を張ってチャンスを阻止した場面や、失点につながる決定的な場面を阻止するなど、最もすばらしいプレーを披露してくれました。

佐藤は出場した1試合では一方的な展開でゴール前での守備に関わることは少なかったのですが、その数少ない場面においても集中を切らすことなく無難な対応ができました。また芹澤のバックアップとして常に鼓舞し、ベンチワークも最高のパフォーマンスを行ってくれました。芹澤の試合でのパフォーマンスも彼女のサポートによるところが非常に大きいです。

課題としては①相手シュートを止めるための技術の発揮が十分にできないまま、失点してしまう場面があったこと。②クロスボールなど空中にボールがある場合の対応。の2点があげられます。ボールがどこを通過してどこに落下するかの認知予測が不十分な部分がありました。身長が高い外国人選手に対して今後その対応力が最重要課題だと考えます。

(3) 自身について

この4年間で両 GK の課題の修正に努めてきましたが、初戦のポーランド戦でその課題となる部分で失点してしまいました。他にも私自身がポイントを伝え、しっかりとした対策を講じていれば、かなりの失点を防ぐことができたと思います。これも手話で細かく選手に伝えられなかったことや私の指導力不足による責任と考えています。

残念ながら良い結果を出すことができませんでしたが、女子 GK コーチに推薦して下さった協会スタッフや監督そしてトレーナーや関係者の皆様に大変感謝しています。私自身にとってとても貴重な経験となりました。ありがとうございました。

トレーナー 石渡 あゆ未

私のチーム内での担当は、傷害予防やコンディショニング指導、救急処置、選手の体調などについて本部ドクター及びトレーナーとの連絡役です。

傷害予防についてはテーピングをメインに行いました。テーピングは事前合宿を通して指導し、デフリンピックでは自分で巻けるようになることを目標にしていました。現場では足関節捻挫予防のテーピングやこむら返り防止の筋肉サポートテープの巻き方を指導することが多くありました。大会直前や大会期間中に怪我をした選手以外は、自分の目的にあったテーピングを巻けるようになっていたので、事前に指導をした成果が見られたと思います。

コンディショニング指導については、運動前後のストレッチや運動後のアイシング指導、大会期間中の体調管理、該当選手にはホテルでのマッサージなど行いました。特に体調管理につ

いては、毎日数項目のチェックを行うことで選手が無自覚でも客観的な指標を持って変化に着目し、選手とコミュニケーションをとってコンディションを整えることができましたが、選手にとってはチェックするだけにとどまってしまったことが反省です。チェックする意義をきちんと説明しておけば、今大会だけではなく、今後の競技生活でも体調管理の重要性についてもっと理解を得られたと思います。

救急処置については、試合中に起きた怪我や熱中症、試合以外での体調不良が出た場合の対処を行いました。試合中においては、試合から離脱する選手が1名、試合中に怪我の救急処置を行った選手が1名、試合後に打撲などの救急処置を行った選手が数名、熱中症で倒れた選手が1名いました。怪我に対する評価・救急処置については本部ドクターと連携を取り、初期対応がしっかりできたと思います。反省点としては、熱中症で倒れた選手の対処の際、大会ドクターと連携するため英語や国際手話を使用しなければなりませんでした。まず私がサッカー協会スタッフとの連携がうまくとれず、選手に処置を行うまでに時間がかかってしまったことです。サッカー協会スタッフとトレーナー間で救急対応時に誰がどう行動するのか予め決めておき、もっとスムーズに連携が取れるような体制を作るべきだったと思います。私が選手をしっかりと観察し、症状がもっと軽いうちに対処することもできたとも反省しております。また試合以外での体調不良の選手としては、ウイルス感染による皮膚疾患が1名、風邪と思われる症状を訴える選手が3名出ました。皮膚疾患の初期対応としては、私の判断がもっと的確であれば早めに本部ドクターに診てもらうこともできたと思い、反省しております。本部ドクターに薬を処方していただいたおかげで、症状が軽快した状態で試合出場でき、結果としてはよかったと思います。風邪と思われる症状を訴える選手に関しては、症状出現までの経過を観察していた結果、日本より現地が乾燥していることや環境が変わったことへのストレスなど、環境的要因も大きく関わっていると感じました。これに関する対処法も今回のデフリンピックでは考えなければいけないと思います。

また、本部ドクター及びトレーナーとの連絡役としては、電話やメールで選手の体調や怪我の状況報告などを行いました。私の説明不足により本部ドクターとトレーナーの方々にご迷惑をおかけしてしまったので、正確な情報伝達を心がけたいです。

今回のデフリンピックで選手スタッフ一同に大きな病気や怪我がなく、全員揃って無事に帰国できたことは関係者の方々のお力添えのおかげであると思います。この場をもって御礼申し上げます。

スタッフ 立川 智隆

①団体内の担当とその内容

【大会前】

- ・本部や旅行会社担当者との連絡窓口担当
- ・サッカー男女の代表コーチングスタッフと共に物品確認、競技団体荷物の荷造り

【大会期間中】

- ・サッカー競技のテクニカルミーティングに出席
- ・男女とも練習や試合の際にはサポートとして同行
- ・物品の買い出し
- ・スターティングメンバー発表があった時点で、協会 HP 担当者へメールし、報告

【練習／試合】

- ・トレーナー補佐、チームサポート
- ・ホテル⇄送迎バス⇄グラウンド 物品の運搬
- ・練習前や試合前に、ポカリスエットを準備、保冷
- ・「アイシング用」の水をビニール袋に入れ、練習や試合中のアクシデントに備えクーラーボックスに保冷。
- ・各国チームに与えられた練習時間が限られているため、時間短縮のためボール拾いに奔走
- ・応援横断幕の取り付け
- ・当協会公式 Twitter の担当者に試合状況のサポート
- ・送迎バス、更衣室、ベンチ等の落し物をチェック

②反省

- ・国内強化合宿では、ボールの感覚を慣れさせるため、大会公式ボール（NIKE 製）の手配しようとしたのですが、どこも同じ製品は扱っていませんでした。仕方なく同じ NIKE 製で似たようなボールを準備しました。
- ・今まで出場したデフリンピックと違い、大会側の事情により、サッカー競技のみ別のホテルになりました。ネット環境が悪く、ソフィア市街地のホテルに設置されている本部と連絡がスムーズに取れませんでした。自前で準備したスマートフォンと海外用レンタルモバイルルーターで何とか連絡をとりましたが、次回からはそのようなことがないよう、しっかりと準備していきたいです。
- ・代表コーチングスタッフ以外のスタッフ役割分担については、直接に話し合い、決めていくことができたのですが、突然の予定変更までは手が回りませんでした。

③まとめ

今回の大会は非常に残念な結果になってしまいましたが、今後の代表チーム強化について、考え直す必要性を強く感じしました。

男子はアジアチャンピオンとして、今大会に臨みましたが、同アジアのエントリー国は日本より上位に食い込んでいることに驚きを隠せませんでした。リーグ戦の組み合わせという運もありますが、選手同様、悔しさでいっぱいです。

女子は今大会で2回目の出場になりますが、試合を見る限り、前回より明らかにチームの戦力が向上していました。決定力が欠けていたのは残念でしたが、よく健闘していたと思います。女子は競技人口がまだまだ少ないので、男子も含めて、競技人口の拡大や若い選手の発掘が急務です。アジアはおろか世界に後れを取っていることは否めません。代表チームの強化について、各方面のサッカー関係者から様々な意見を取り入れ、考え直していきたいと思います。

最後に、選手を陰ながら支援していただいた関係者および関連会社には大変感謝しております。この感謝の気持ちを忘れずに、今後も頑張っていきます。応援ありがとうございました。

スタッフ 中村 祥子

「チーム全員が練習や試合に集中できるための環境づくり」を中心にサッカー競技チーム全体のサポート役に徹しました。2011年にスウェーデンで行われた世界ろう者フットサル選手権大会にもスタッフとして帯同した経験を活かし、自分ができる精一杯のサポートをできればと今大会に臨みました。台北デフリンピック、世界ろう者サッカー選手権ともにスタッフは男

子のみで構成されていましたが、大人数で期間も長いサッカー競技では女子スタッフを入れることも重要になると改めて感じました。男子と女子では目線も異なるためそれぞれ違った問題に気づける面があり、女子選手にとって女子特有の悩みや不安については、女子スタッフの方が相談しやすい等のメリットがあります。女子の人数は決して多くありません。今後はろう者健聴者問わず、ろう者サッカー競技に関わる女子を増やし、選手層、スタッフ層を厚くしていく必要があります。

今回のデフリンピックでは SNS（Twitter）での試合速報も担当させていただきました。自分自身のサッカーに対する知識が十分になかったため、的確な速報ができていたかどうか自信がありません。今後は自分自身でサッカーについても勉強していく必要があると感じました。速報を担当することにより、リアルタイムで試合情報を知ることにより、応援したいという気持ちがより強くなる人がたくさんいるということを知りました。リプライ（twitter 内の返信）でもたくさんいただいた声援をリアルタイムで読むことができたのはサッカー競技チーム全体にとってとても心強いものでした。「応援したい」という気持ちを様々な立場の人に持っていただくことは、デフリンピックの存在意義を広めていくことにもつながるため、試合速報の大切さを実感しました。今回は多様のメディアでサッカー競技について掲載していただき、注目を集めていたので、その中でどれだけ現地の情報をリアルタイムで伝えていけるのか、ということにも重点を置いていました。せっかく注目を集めることができて、現地での情報がなかったら、注目もすぐ薄れてしまいます。単に注目を集めるだけではなく、どうやって惹きつけていくのかを考え行動していくことの大切さも感じました。

私自身、ろう者サッカー競技に関わるようになったのは、4年前の台北デフリンピック後からですが、この数年間を見るだけでも、以前に比べると改善された部分や解決方法が見えてきた部分はあると思います。引き続き課題を解決していき、日本でのろう者サッカー競技全体の環境を良くしていけるよう自分も努力したいと感じました。

最後になりましたが、今まで応援してくださった皆様、本当にありがとうございました。

選手 芹澤 育代

日本は参加国7チーム中6位になり、台北デフリンピックに続き、同じ結果となりました。同じ結果でも内容は全く違います。台北は誰でも代表になれる雰囲気があり、経験、情報がない状態で世界に飛び込んだチームでした。今回のソフィアは、韓国遠征、フットサル世界選手権大会、サッカー世界選手権大会と国際経験を積んだ選手が集まり、ポジション争いが激しく、落選するメンバーも多数いるほど、誰が試合に出てもおかしくない強さがありました。世界相手に確実に勝てる力はまだまだだが、試合経験を積み重ねるごとに、防戦一方で大差負けしていた台北と比べ、僅差だったり、攻撃力が上がったりとチームは成長していました。

敗因の理由はたくさん挙げられますが、他国と交流してみても分かったことは、デフリンピック知名度の高さと環境面です。日本以外の国は大会直前の3ヶ月～1年前から強化合宿を実施しており、休みの日にしか合宿が積めない日本とは違い、羨ましく思いました。日本も少しでも合宿を多く実施できる環境を整えば、更なるコミュニケーションが深まり、もっと強くなれると感じました。

個人的には、全4試合のうち3試合出場し、収穫もあれば課題もたくさん出てきて、未来に繋がる内容でした。世界一のアメリカとも対戦できたことは嬉しく、アメリカは次元の違いを感じさせられた試合でした。悪かったことは、大事な初戦に0-1で負けている時、決定的な場面で相手を転倒させてしまい、一発退場となり、人数的に不利にさせてしまったことです。どうしようもないくらい落ち込んだ私はチームの皆に救われ、その日のうちに気持ちを切り替えることができました。その後も数えきれないほどたくさん支えられ、とても感謝の気持ちでいっぱいでした。何よりも日本でデフリンピックを様々な形で広めていただき、協力してくれた人、応援してくれた皆様に一番お礼を言いたいです。本当にありがとうございました。

選手 大谷 遥佳

試合では、自分のポジションの役割（インターセプト・トラップ・簡単に抜かれない）を忘れずに一生懸命ゴールを守りました。最後まで走ることを、絶対に勝つことを強く思っていました。私にとってはいい試合ができ、悔いはありません。チームメイトのコミュニケーションは上下関係なく、「あきらめるな」「まだまだ」「落ち着いて」「大丈夫だよ」「あなたならできる」などお互いに声をかけながら励まし合いました。私もベンチスタートの時がありましたが、この時も一生懸命声をかけました。

技術面では、昨年の世界大会と比べて伸びたと思います。どの試合も接戦だった試合が多く、団結力も良くなり、お互いに励まし協力し合えるようになったと思います。

ある散歩の時、ばらばらに歩いていた選手に対し、監督から団体行動するよう叱咤され、どんな時でも団体行動、日本代表らしい行動をすることを学びました。個人としては、日本代表のルール、マナー、時間をしっかり守りました。

初めてのデフリンピックで貴重な経験が出来ました。接戦だったドイツ、ポーランドに圧勝できるように、今後の合宿や日々の練習で技術を磨いていきたいと思います。接戦で負けてしまったこの悔しさを4年後リベンジしたいと思います。デフリンピックに初参加することができて良かったです。

選手 大島 彩香

二回目のデフリンピック出場でした。

初戦は0-2という結果で終わり、厳しいスタートになりましたが、諦めずに戦いたい気持ちが強くなり、チーム全体がさらにまとまりました。

2戦目の相手国ギリシャは、初出場で結成まもないチームと聞いていましたが、前回の自分達と重なり、色々よみがえってきました。10-0と快勝で初勝利をあげましたが、課題が多く見られました。

3戦目のアメリカは現在二連覇中の強豪国でした。昨年の世界選手権時は敗戦しましたが、1点奪うことができました。日本にとって大きな財産だったので、その時のことを思い出し、本番を迎えました。前半は相手の攻撃を抑えられましたが、後半から失速してしまい、相手ペースに振り回されてしまいました。次から次へと失点を奪われつつも、最後まで諦めずに戦うことができたと思います。強豪相手と戦うことは日本にとって貴重な経験になりました。課題も多く見つけ、5、6位決定戦では絶対に勝ちに行くという気持ちが更に上がりました。そし

て一つでも順位を上げて日本に帰るというチーム目標を抱き、本番を迎えました。しかし結果は0-3で敗戦、6位という前回と同位で終わらせてしまい、とても悔しかったです。

今回のデフリンピックは守備面での成長は見られましたが、決定力のなさを痛感した大会でしたが、得たものもたくさんありました。

デフリンピックを通じて18人全員が一つになり自分の持てる力を十分に発揮し、ベストを尽くしましたが、世界レベルには及ばず、悔しい気持ちが残ってしまいました。仲間と一緒に気持ちを高め自信を持って戦うことができ、この瞬間を共に過ごせたことは一生忘れられない貴重な財産になりました。

今後の日本女子代表の為に、この貴重な経験を生かして次世代に伝えていきます。たくさんのご声援をありがとうございました。

選手 濱田 梨栄

私は、女子サッカー選手として2回連続デフリンピックに出場しました。今回はいろいろな面で気づかされることが多い大会でした。4年前の台北デフリンピックに出場したことがきっかけで、アスリートとしての意識が大きく変わり、自分の人生が変わるきっかけとなりました。あれからブルガリアデフリンピックまでの4年間は早かったと感じていましたが、実際にサッカーグラウンドの上にいると、この4年間はたくさんの方々から貴重な教訓をいただいた時間だったと実感し、心から感謝しています。

結果は、全7チーム中6位で前回のデフリンピックと同位、私にとっては悔しくて情けない気持ちでいっぱいでした。初戦にポーランドを倒すことが1番大事でしたが、0-2で惜敗、試合中はいろいろなドラマが起きました。GKの退場によりDFだった私が代役としてGKを務め、1失点の重みを知りました。0-2で残りの時間が少なくても最後まで諦めず頑張っていたFPの姿が胸に響き、忘れられない試合となりました。アメリカ戦は0-7で完敗、さすが世界チャンピオンであり、1人1人全員の基本技術、戦術眼が優れており、レベルはまだ遠いです。

個人のトレーニングに加え、やはりチームの信頼、団結力がとても大切です。サッカーは11人で戦うものであり、互いに信頼し合う中で成果を出すことが、力を発揮する原動力になるのではないかと強く思いました。デフリンピックが終わり少し寂しい気持ちになりましたが、それ以上に満足感がありました。

選手 原田 明奈

◆成績に対する自己評価

7ヶ国中6位という成績は、メンバー全員が試合に出場し、精一杯戦った結果です。

私は第3戦のアメリカ戦でこの大会初めてスタメン、カバリングを期待されて出場しました。カバリングはできましたが、私が状況判断を誤っていなければ防げた失点もあります。期待に応えることができず、悔しかったです。

最終順位は前回の台北大会と同じ6位ですが、守備面では昨年の世界大会の時に比べ世界との差は縮まっていると感じます。守備力が上がっても決定力がなければ試合には勝てません。これがろう者サッカー女子日本代表の今の実力です。

女子日本代表に足りないのは、決定力、絶対勝つという強い気持ち、サッカーに対する理解度です。これらが向上した時、上位に入ることができるようになります。

◆反省・まとめ

大会1ヶ月前に怪我をしてしまい間に合うか心配でした。仕事の中で時間を有効活用し、治療とリハビリ、トレーニングを一生懸命やって間に合わせることができました。大事な時期に怪我をしてしまいトレーニング不足は否めませんでした。

アメリカ戦のスタメン発表の時、名前を呼ばれてすごく嬉しかったです。最終的に4試合中2試合出場、トータル約73分の出場でした。コンディションを整えるためにも毎朝早く起きてストレッチ、体幹トレーニングを自主的に行いました。滞在したホテルや閉会式では海外選手と英語や国際手話で交流できました。日本手話もままならない私が、閉会式の時に海外の選手と国際手話で交流できるようになっていたことには自分でも驚きました。

大会に参加して良かったこと、悪かったこと、悔しかったこと、全部含め数え切れないほど多くのことを経験できました。日本から多くの方々に応援していただいたことを忘れずに、大会に参加して感じたこと経験したことを今後の生活に活かしていきます。

選手 寺井 名美

①成績に対する自己評価

2回目のデフリンピック出場でした。前大会では6位という悔しい結果になり、その経験を活かして4年間、合宿や健聴者チームで磨き上げソフィア大会に挑みましたが、前大会と同じ6位という残念な結果になりました。

予選では、去年のトルコ世界大会で敗戦したポーランド、前回優勝国のアメリカと強敵なチームであり、気持を強く持って挑んでみたものの、緊張や不安が出てしまい、うまくコンビネーションができず、敗戦に繋がってしまいました。

5、6位決定戦の相手国はドイツで、何としても勝ちたい一戦であり、5位を獲得したかったのですが、集中力、体力が低下し、惜しくも負けてしまいました。精神面やスピード面は日本の方が上でも、技術、組織、フィジカル面において世界の差を大きく感じました。何より足りないものは決定力です。ゴールに向かう意識がまだまだ低くて、決定力不足だけでなく、攻撃や守備の戦術理解や意識も足りず、今後の課題になりました。しかしチーム力は前大会より上がりました。今までの台北大会やトルコ世界大会の経験を活かすことができ良かったです。

②反省・まとめ

今大会は現役引退のつもりで、長年所属した健聴者チームの練習や試合でレベルアップし、フィジカルトレーニングにこの4年間励んできました。

調子が悪く、途中出場で悔しい思いもしましたが、チームのためであり、若い選手達に経験を積んでほしいためピッチだけでなく、ベンチメンバーとともに試合を戦っていく気持ちが必要な1つになって良かったです。

最後に、今まで支えてくれたスタッフ、応援してくれたみなさん、本当にありがとうございました。

今後も、ろう者女子サッカーのレベルアップのために、サッカー経験者が増えるよう願っています。今までの経験を活かしてサポートしていきたいです。

予選では、ポーランド、ギリシャ、アメリカの3チームと決勝トーナメント進出をかけて戦いました。

予選の結果、1勝2敗で予選敗退し、5、6位決定戦に回り、対戦相手は4年前準優勝したドイツでした。しかし0-3で負けてしまい、結局日本は4年前と同じ6位という結果に終わってしまいました。内容を見れば、4年前に比べて選手のレベルは上がってきましたし、サッカーらしいサッカーができたと思います。それに攻撃のチャンスも4年前より作れていました。他国とのレベルの差は縮まったかもしれませんが、追い越したわけでも追いついたわけでもありません。

日本の一番の大きな課題は決定力です。ギリシャ戦を除いた3試合は攻撃のチャンスがありましたが、シュートが枠内に入らない、相手に当たる、こぼれ球を狙う意識が足りないということが多く、1点も決めることができませんでした。ギリシャ戦は高得点を取れましたが、決して良い試合ではありませんでした。トータルで60本ほどシュートを打ったにも関わらず、実際に得点になったシュートは10本、確率としては約17%とかなり低いです。また体の使い方やファーストタッチがまだまだであることも日本全体の課題です。

個人としては、ゴールを決めるという目標を持って挑みましたが、達成できませんでした。シュートを打っても、ゴールになりませんでした。しかし、確実にレベルアップしていると実感できたのはドリブルです。4年前は全く通用しなかったのですが、今回は何度か敵を抜き周りを見てパスを出すことができました。他国に勝つためにはさらなるレベルアップが必要だと感じました。

今回のデフリンピックは、4年前に比べチームとして成長はできましたが、世界にはまだ追いついていないということを実感させられた大会でした。今大会で経験したことをこれからのサッカーやフットサルに生かしていきたいと思います。最後に、私達日本代表を応援してくださった皆様、本当にありがとうございました。

選手 御園 裕未

◆成績に対する自己評価

ポーランド戦では世界大会のリベンジを果たしたかったのですが、エンジンがかからず、思いきり戦うことができませんでした。ギリシャ戦は高得点でしたが納得のいかない試合内容であり、全員が決めるべきところで決められませんでした。1人1点を合言葉にチーム全員で積極的に点を取りに行けたことは良かったです。ドイツ戦ではサイド攻撃とともに個人的にも積極的に仕掛けることができましたが、その後の決定力へつなげられませんでした。

敗戦試合では無得点で終わってしまったことが悔しいです。得点の有無でメンタルも変わってくるので、全員が常に枠内に入れる意識を持ち、どの位置からもシュートを打てる技術が最重要だと改めて思いました。しかし、チームプレー、技術、メンタル面全てにおいて4年前より確実にレベルアップしており、サッカーを楽しむことができました。

次のデフリンピックまでには、なでしこ JAPAN に負けないような若手も増え、選手達の経験もアップし更なる飛躍に期待できると思います。

◆反省・まとめ

4年前と違うのは、韓国遠征、世界選手権といった海外試合の経験を積み重ねられたことだと思います。

また、私も4年前の悔しさを晴らすために、帰国後、デフ男子サッカーチームに混ざってもらい、健聴者のサッカーとフットサルチームへ入部するなど、4年前以上に練習を優先にして真剣に取り組めました。合宿も、最後の自主合宿以外は全ての合宿に参加してきました。この4年間は、社会人生活が始まり、仕事との両立がとても大変でしたが、それを乗り越えることができたのは誇りに思います。

そして、この4年間で金銭面、練習環境や2度のデフリンピック出場ができたのも、家族、会社、友達、チームメイト、デフサッカー関係者の皆様の応援、サポートのおかげです。ありがとうございました。

選手 井部 絵里子

■成績に対する自己評価

結果は4年前の大会と同様ですが、日本チームのレベルは確実に向上していると実感できました。成績に対する自己評価は、ギリシャ戦で2ゴール決めることができ、チームに貢献できたことは評価したいと思います。一方、不足していた点は決定力と、周りを見てからボールをもらおうといった判断能力です。自分がマークしている相手からボールを奪って点を決める粘り強いプレーや、味方に正確に足元にパスを出すといった基本技術でした。

■反省・まとめ

1勝したギリシャ戦ではボールの支配率は80%以上日本でしたが、決定力が足りませんでした。どんな場面においても、落ち着いてシュートを打てるようにならないと痛感しました。またポーランド、アメリカ、ドイツと対戦し先制点を許してしまった時、日本チームは焦燥感にかられてしまい守備よりも攻撃しようという気持ちが強くなり、守備の形が崩れてしまった場面がいくつかありました。勝利したい気持ちを持ちつつ、全体を見てどのような形で攻撃をし、守備を行うかといったことを冷静に判断できるようになる必要があります。またセットプレーからの空中戦で点を入れられることが多かったので、その対策が必要だと思います。

体格やフィジカルコンタクト面においては、他国に比べると日本人は小柄であり弱点がいくつかあります。その弱みを強みにし、次大会に向けて世界レベルに近づけるためには、「スタミナ」をつけることと、スピード感のあるパスワークができるようになること、ゲームを組み立てる判断力を身につけ、攻撃のパターンを増やすこと、基本技術等を一人一人の選手が身につけること、そして個々の力だけではなくチーム全体で守備を行うといった意識をもっと高めていくことが必要であると思います。サッカーは団体競技のため、選手全員が少しでも意識統一するためにはどのようにコミュニケーションを取っていくか、そのことを考えて行動していくなかで、さらなるレベルアップを図ることができると思います。この度は、監督やコーチ、選手の皆様方、ご声援下さった皆様方、ありがとうございました。

選手 中井 香那

ブルガリア大会は、前回の台北同様6位という結果になりま

した。着実にレベルアップし、そう簡単には失点しないチームになったとの評価をいただきましたが、決定力がなく、世界の壁は厳しいものでした。

5、6位決定戦では試合中に膝を怪我してしまい、本調子で戦うことができず、シュートのチャンスを何度も外し悔しい思いをしましたが、最後まで諦めずに走り続けられたと思います。

キャプテンという大役をいただき、自分ができることを考えました。みんなが気持ちよくプレーができ、何でも言える存在になることです。年齢層に幅があり、環境や目標も違う選手集団の中で、それぞれに役割を決め、皆で考え、周りに相談しながら、チームがひとつとなり戦うことを考えました。皆から温かい言葉をかけてもらい、私にとって忘れられない宝物になり、ありがたく思います。

日本は、デフリンピックを知らない人が多いです。世界には、長期合宿を行い、メダルを取れば報奨金が出る国もあるそうです。女子日本サッカーチームは、実績もないため、合宿費も自己負担であり、参加する為に仕事を辞めた人、仕事が休めず参加を断念した人もいます。今回は市内とサッカー競技場が離れており、スタッフや取材して下さった方が送迎や必要物品を運んで下さるなどたくさんの援助をいただきました。また、職場の人達、友達、家族、周りの人達の応援や支えがあったことを忘れません。デフリンピックは同じ聴覚障害者が集い、国や言葉を越えた交流ができる素晴らしい場です。

デフリンピックに出場したことが自信となり、日々の生活にも活かされます。今大会に参加できたことを誇りに思います。次の世代に繋げられるよう、まずはデフリンピックの知名度を広げ、個人的にはまだまだサッカーの技術を身につけていきたいと思っています。ありがとうございました。

選手 酒井 藍莉

①成績に対する評価

私は1位～3位を目指していましたが、結果は5位で残念でした。

②反省・まとめ

初めてのデフリンピック出場で緊張していましたが、そのまま試合に出ると負けてしまいますので、あまり緊張しないように心がけました。

最初のポーランド戦は必ず勝ちたいと思い、最初から集中して練習しました。接戦であり、日本も攻めていましたが、決定力がまだまだ足りずシュートがあまり打てませんでした。だから負けたのだと思います。2012年にトルコで開催された世界ろう者サッカー選手権大会のリベンジができなくて悔しかったです。

ポーランド戦で負けてしまった分ギリシャ戦で11点以上獲得するという課題が出ました。私は絶対点を取ると決めました。試合では、たくさんシュートを打った割にはなかなか決められず、交代してすぐ1点を決めることができて本当に嬉しかったです。流れも変わり他の選手達も決めることができて良かったです。私も合計3点を決め、ギリシャ戦は勝ちましたが、不満が残りました。11点以上取ることはできず、決められる所で決められなかったからです。アメリカ戦、ドイツ戦は本当に最低な試合だったと思います。抑えることができたのにどんどん決められて、良くないプレーもたくさんありました。順位を上げることができなくて悔しいです。

今回のデフリンピックは、たくさんの課題を残してしまった

と思います。

4年後のデフリンピックに向けてたくさん練習して、今回のデフリンピックより良い結果を出したいと思います。

選手 宮田 夏実

①成績に対する自己評価

私は第2試合のギリシャ戦の前半38分間だけ出場しました。海外選手との体格差、日本では経験できない程の激しい体当たりで改めて驚きました。試合中は自分のプレーに精一杯で周りを見る余裕がなく、判断が遅れ相手ボールへ、パスミスやトラップミスをしてしまうことが多かったです。どんな状況下においても冷静に素早く判断し正確なパス、丁寧なトラップができるよう、日頃の練習を積み重ねていかなければならないと思いました。また、今回の大会において、シュートして点を決めなければいけない所で味方を探し、パスを出してしまうという場面が何度かあり、FWとしての技術面や精神面がまだまだ足りないと感じました。これからFWを続ける上で大きな課題を得ることができました。他にも自分の思うようなプレーができず、とても情けなく、自分に腹が立ったと同時に世界のレベルの高さを痛感しました。

②反省・まとめ

私の試合出場はほとんどなく、もどかしかったのですが、チームのために何ができるのか一生懸命考え行動してきました。監督、コーチ、スタッフ、スタメン、サブがいるからこそチームは成立すると思いました。

私にとって初となる今回のデフリンピックは、悔しさの残る大会となってしまいましたが、この悔しさをバネに高校でサッカーの基礎を一からやり直し、誰よりも上手になって4年後には中心選手として活躍したいです。また、たくさんの支援、応援をして下さった関係者の方々に感謝の気持ちでいっぱいです。16歳という時期にデフリンピックという貴重な経験をさせていただき本当にありがとうございました。

選手 坂田 博美

①成績に対する自己評価

初戦のポーランド戦では互角に戦っていましたが、失点後は相手優位のゲーム展開になり始め、予想外のアクシデントが起こり、残り25分を10人で戦いましたがゴールに持っていかず試合終了となり、勝てる試合だっただけに悔しさが残りました。初戦&初出場だったため、いつも通りのプレーをするように心がけ、自分なりに守備できたと思います。

2戦目のギリシャ戦では、前半なかなか得点できず、後半で気持ちを切り替え、次々と点を決め、日本優位のゲームで終了しました。逆に優位すぎて、危ないシーンが何回も見られたので、最後まで集中力を切らさないように気をつけるべきでした。

3戦目のアメリカ線ではスタートからアメリカ優位となり、なかなか日本のペースに持っていかずアメリカの壁は大きかったです。歯が立たない試合でした。

4戦目のドイツ戦はサイドからの攻撃が続ぎ、日本も中盤より攻撃を開始、お互い譲らない時間帯が続きましたが、日本に疲労が見え始め、守備が緩くなり敗戦となりました。私は足を痛めてしまい、思い通りのプレーができず、守備に集中しまし

たが、サイド突破を何度も許してしまいました。怪我と体力消耗が影響した試合となりました。

②反省・まとめ

個々の技術の未熟さ、サッカーの知識不足、経験不足が敗因として挙げられますが、少なからず4年前の台北よりは悔いの残らない試合となりました。それは、チームとして戦うという部分が、大いに成長したと思うからです。結果だけを見れば、全然良くありませんが、内容や質は濃くなったと選手それぞれが感じていると思います。

初出場のデフリンピックで、全試合出させてもらい、全力を出し切ったと思っています。1ランクでも上位を獲りたかったというチームとしての悔いは残りますが、個人的には後悔していません。人生の貴重な経験ができ、大変感謝しています。

これからは、選手ではなくデフリンピックの環境が良くなるようにサポートしていきたいと思います。

選手 佐藤 愛香

前大会の悔しさをバネにメダル獲得という目標に向かって、強化合宿や自主練で一つ一つ積み重ね現地へ乗り込みました。初戦のポーランド戦は、一進一退が続く中、シュートまで持ち込むことができず、GKがファウルによる一発退場という事態が起こり、失点を重ね大事な試合を落としました。2戦目のギリシャ戦は快勝したものの、内容は決して良くありませんでした。リーグ最終戦は強豪アメリカで、圧倒的な個人技術の差が大きく勝敗を分けました。ベスト4進出を懸けた予選リーグでは予選敗退となり、5、6位決定戦に持ち込まれました。ここはどうしても勝たなければと強い気持ちで臨みましたがミスを重ね、攻撃の形がなかなか作れず、シュートまで持ち込めませんでした。それに対しドイツは、数少ないチャンスをものにしました。その試合も対策をしっかり練り試合に臨みましたが、相手もレベルアップしており、残念な結果になってしまいました。18人全員が一つになり、自分の持てる力を十分に発揮し、ベストを尽くしましたが、悔しい気持ちだけが残ってしまいました。でも、一つだけ言えることは、この4年間でチーム力は向上し、世界レベルの差がかなり詰まったことです。まだまだ世界の壁は高いですが、飛躍的な成長が大きな成果であり、いつか世界レベルまで追いつく日が来ると確信しています。1度は代表を辞退しましたが、台北大会の悔しさが忘れられず、もう一度世界に挑みたいと思い日本代表に復帰しました。必死にトレーニングに励みましたが、ギリシャ戦以外は不出場、サブメンバーとなり、試合に出られない気持ち、何もできないもどかしさを痛いほど味わいましたが、自身やチームのためにできることを考え、新たな発見ができ学ぶこともたくさんありました。自身の無力さに悔しい気持ちでいっぱいですが、監督をはじめスタッフ、仲間と共に力を合わせて戦えることができたので、後悔はしていません。この2年間を通して、歴代最高のメンバーとも言えるこのチームで、サッカーができたことは私にとって一生の財産です。日本の将来のためにもこの貴重な経験を活かして、今後のサッカー活動の糧にしていきたいと思います。協会をはじめ、監督やスタッフ、そして仲間、応援してくれる家族や友人、関わるすべての人に感謝の気持ちを込めて、たくさん『ありがとう』と伝えたいです。本当にありがとうございました。

【成績に対する自己評価】

初戦のポーランド戦と3試合目のアメリカ戦に途中出場しました。チームは4年前の台北大会と比べると、パス回しが良くなり、攻撃のパターンが増えてきました。ポーランド戦は互角で勝てると確信しましたが、後半から日本らしい攻撃チャンスがあったにも関わらずゴールを決められませんでした。ギリシャには勝利でしたが、豪強アメリカ戦では途中出場したものの1ゴールも決められずに終わってしまい、本当に悔しくてたまりません。4年前はパワー、フィジカル諸々において、個人プレーで世界には通用しなかったのが、合宿ではパス回しや戦術などを中心に練習し、レベルアップができ、良かったと思います。

【反省、まとめ】

今大会の中で、日本は決定力、ポジションの動き方の理解、DFの重要意識等の不足、また、基礎部分でまだ出来上がってなかった所があるので、一つずつクリアしていくことが大切だと思います。

この大会を通して様々な経験ができ、これからの合宿はチームのレベルアップが必要だと改めて思いました。日本から応援して下さった皆様、ありがとうございました。

選手 星野 陽子

日本は2回目のデフリンピック、私は初出場となりました。外国人との対戦は過去に経験があったので思った程の緊張感はなく、わくわく感が芽生えました。リーグ戦は3試合ありましたが、私がスタメンで出場したのは2試合目のギリシャ戦です。私たちは高得点を獲得して勝ち点3を取らないといけなかった状況にありました。エースの選手を温存して足を引っ張らないよう必ず点を取るという気持ちでプレーしました。私は右利きですが、左サイドハーフとしてプレーをし、ゴール前まで持ち込み、味方にパスをする機会が何度ありましたが、中々ゴールを割れませんでした。相手国のペースにのまれながらも、自分のアシストで先制点を取れたことはとても嬉しかったです。その勢いに乗りエンジンがかかり、10-0という結果になりました。内容はあまり良くなかったのですが、ポーランド戦では空中プレーばかりしていたのですが、ショートパス中心に繋がったことがあったので、その面では改善できていました。

ギリシャ戦以外は参戦できず悔しい思いをしましたが、精一杯、味方を勇気づけるために声をかけに徹し、一緒に闘えたと感じました。結果は惨敗でしたが日本はまだ見込みがあると思っています。体型の差こそありますが、メンタル面と状況判断にも問題があると思います。外国人はとても賢く状況判断が優れているので、日本もその点を強化すれば勝てると思います。このデフリンピックで得た課題はゴール前に近づいても冷静に状況判断をしてシュートすることと、自分の力を出してプレーをすることです。もちろん技術面も大事ですが、この2つを向上していけば、絶対に勝てると信じています。

将来の若者達のためにも人口を増やす、知名度を上げるなどしていきたいと思っています。貴重な体験をさせていただき、ありがとうございました。

ろう者サッカー女子日本代表がデフリンピックに出場するのは2回目でメダル獲得を目指すべく本大会に臨みましたが、1勝2敗で予選敗退となり、最終的に5-6位決定戦でも負けてしまい、7ヶ国中6位となりました。

4年前の経験を生かせず終わってしまったのが最も残念です。最後まで熱い応援してくれた人たちや理解と協力により本大会に出場させていただいた会社、怪我などで落選した人たちのことを考えると本当に申し訳ない気持ちでいっぱいです。ただ唯一良かったと言えることは強豪相手に恐れず正々堂々と立ち向かって女子日本代表全員が全力を出して戦えたことです。

私はセンターバックと左サイドハーフとして全5試合の内4試合出場しましたが、あと一步の所で競い負ける場面が多く、状況判断力不足により失点に繋がるミスも犯してしまいました。体格の差をカバーする為の走力も足りなかったです。対戦したどの国も状況判断力やずる賢さ、フィジカル、空中戦、決定力など全てにおいて日本より上回っており、特に4連覇を果たした米国がずば抜けて上手でした。

確かに4年前の初出場時と比べると女子日本代表はパス回しがよく何度かチャンスを作り出せる場面もあり、サッカーらしくなりましたが、世界には通用せず、壁は厚かったです。でもそんな強豪の国と対戦したことは私にとっても女子日本代表にとっても大変貴重な経験になりました。

今大会の結果を受け止めて色々な課題を見つけました。今回の敗戦に次に繋げるよう、日本が世界に勝つにはどうしたらいいかを真剣に考えて取り組まないといつまでたっても世界に勝てません。本格的に女子も気軽にサッカーを専念できる環境づくりを進めないと競技人口も増えず、強い選手も育ちません。私も今までの経験を生かし、ろう者女子サッカーの発展にサポートしたいと思います。

選手 岩淵 亜依

①成績に対する自己評価

国際大会初出場でしたが、今回体験してチームとしての力も個人としての力も周りにはまだまだ及ばないと通感しました。

②反省・まとめなど

チームとしては、パスが回ることにはありましたが、トラップミスやパスの力加減でボール所持者がキープできない位置にボールが転がったところで奪われることが多かったこと、プレスのタイミングや強さの面で海外選手に何のプレッシャーも与えられずに効果が薄かったこと、また、利き足でしか強いボールを蹴れないことで、センタリングやロングパスができなかったことが今回の6位という結果につながったのだと思います。個人としては、トップで、点数を取らねばならない立場の中でひとつもゴールを決められなかったことが1番大きいです。決定力のなさ、ゴール前での経験不足を痛感しました。しかし、ダッシュ力やスタミナについては予想以上に海外選手についていけたことで、自分に自信ができました。今回の大会の反省を活かして、より一層技術力向上を目指していくのは当たり前ですが、同時に海外選手も技術力が向上しているということを忘れずに慢心することなく自分が納得いくまで技術力を高めなければ、そしてチーム内での意識を共有させなければ、メダル獲得は程遠いと感じています。個人だけではなくチーム全体での試合経験数を増やさなければ、チーム全体の一体感は得られ

ないと思います。社会人がいることも踏まえて全国から集まる
ことが難しい中で、いかにチームとしての活動ができるかが、
大きな問題だと思います。今後同じ反省をすることのないよう
に、まずはより一層個人での技術力向上に励みたいと思います。

柔道競技チーム

監督 江上 忠孝
コーチ 桑原 和寿

1 大会内容

日 程 平成 25 年 7 月 29 日 (月) ～ 8 月 7 日 (水)
開 催 地 ブルガリア共和国 ソフィア市
会 場 Sport Academy

2 選手団

監 督 江上 忠孝 (九州電力株式会社)
コ ー チ 桑原 和寿 (九州電力株式会社)
手話通訳 西川 美奈子 (会社員)
選 手 吉良 暁生 (会社員) 60kg 級
選 手 東岸 林太郎 (会社員) 66kg 級
選 手 木ノ下 寿 (会社員) 73kg 級
選 手 宮下 真弥 (会社員) 81kg 級
選 手 山田 光穂 (会社員) 100kg 級

3 大会結果

【60kg 級：トーナメント戦】吉良 暁生 準優勝

1 回戦…○優 勢 インド
2 回戦…○背負投 ロシア
準決勝…○大外刈 韓国
決 勝…●肩 車 ○ウクライナ

【66kg 級：トーナメント戦】東岸 林太郎 1 回戦敗退

1 回戦…●優 勢 (GS) ○イラン

【73kg 級：トーナメント戦】木ノ下 寿 5 位

1 回戦…○背負投 ハンガリー
2 回戦…○優 勢 イラン
準決勝…●内 股 ○韓国
3 位決定戦…●内 股 ○トルコ

【81kg 級：トーナメント戦】宮下 真弥 1 回戦敗退

1 回戦…●合せ技 ○フランス
敗者復活戦…●優 勢 ○韓国

【100kg 級：リーグ戦】山田 光穂 3 位

1 回戦…○内 股 モンゴル
2 回戦…●優 勢 ○ブルガリア
準決勝 (トーナメント) ●優 勢 ○トルコ

【団体戦】日本チーム 1 回戦敗退

1 回戦… ●日本 2－3 ○トルコ
敗者復活戦…●日本 1－4 ○韓国

【無差別級】

吉良 暁生 1 回戦敗退

1 回戦…●横四方固 ○ロシア

山田 光穂 3 位

1 回戦…○ 内 股 ●ウクライナ
2 回戦…○ 内 股 ●ベネズエラ
3 回戦…● 優 勢 ○トルコ

敗者復活戦…山田○ 優 勢 ●ロシア

3 位決定戦…山田○ 優 勢 ●イラン

4 総評 (江上監督、桑原コーチ)

日本柔道競技チームは銀メダル 1 個、銅メダル 2 個という結果になりました。前大会では、金メダル 1 個という結果であったため、色としては金を逃したものの、個数としては前回は 2 個上回る結果となりました。柔道競技は 3 日間にわたって開催、大会初日は体重別個人戦が行われ、各階級ともに熱戦が繰り広げられました。

60kg 級の吉良選手は、緊張から初戦は動きが硬かったものの、徐々に調子を取り戻して一本勝ちを重ね、決勝進出。そのままの勢いで優勝を狙ったものの、ウクライナの強豪選手に肩車で一本負けを喫し、惜しくも銀メダルという結果となりました。

66kg 級の東岸選手は、持ち前のしぶとい柔道でイランの選手に善戦したものの、ゴールデンスコアで有効を奪われ、惜しくも初戦敗退となりました。

73kg 級の木ノ下選手は、1 回戦、2 回戦と背負投で調子の良さをアピールし、準決勝進出しましたが、韓国選手と対戦し、場外際に内股を掛けられ一本負け。3 位決定戦に回り、トルコの選手と善戦し、ゴールデンスコアまでもつれ、お互い一步も譲らない戦いを見せましたが、最後は内股で一本負けを喫し、惜しくも 5 位という結果に終わりました。

81kg 級の宮下選手は、1 回戦でフランスの強豪選手と対戦し、自分の持ち味を発揮することなく敗れてしまいました。その後敗者復活戦に回ったものの、韓国の選手に終盤ポイントを奪われ、敗戦となりました。

100kg 級の山田選手は、前大会の金メダリストとしてのプレッシャーや膝の怪我はあったものの、予選リーグを 1 勝 1 敗で通過し、準決勝へ進出。トルコの強豪選手と対戦し、組み手争いが続くも終始自分の組み手にさせてもらえず、終盤ポイントを奪われ残念ながら 2 大会連続の金メダル獲得ならず、3 位という結果でした。

2 日目は団体戦が行われ、初戦でトルコと対戦しましたが、ミスや競り合いに負けてしまうシーンが目立ち、2 対 3 でまさかの初戦敗退。敗者復活戦に回ったものの、韓国に 1 対 4 で大敗し、目標としていた団体戦でのメダル獲得にはなりませんでした。

大会最終日は無差別級個人戦が行われ、年長者の山田選手、吉良選手が出場しました。吉良選手の初戦は、今大会 100kg 超級の覇者であるロシア選手で、自分の 2 倍以上ある相手を前に必死で攻撃したものの、体格差に圧倒され、初戦敗退となりました。山田選手は、100kg 級で金メダルを逃したため、無差別級での金メダルを目指して順調に勝ちを重ねましたが、3 回戦で 100kg 級覇者のトルコの選手と再び対戦。初日の敗戦の悔しさをバネにリベンジを果たしたかったのですが、健闘むなしく敗戦となりました。その後、敗者復活戦に回り、ロシアの選手に優勢勝ちし、3 位決定戦でイランの選手にも優勢勝ちを収め、見事 3 位を勝ち取りました。柔道が今大会最後の競技であったため、このメダルが、日本選手団最後のメダルとなりました。結果、前大会を 1 個上回る 21 個目のメダルとなり、日本選手団の皆に笑顔をもたらすメダルとなりました。

今回、選手達は今持っている力を十分に発揮できたと思いますが、外国人選手の身体能力やレベルの高さには、目を見張るものがありました。メダリストの中には、健聴者の大会に出場しても上位に食い込めるのではないかとと思われる選手もいました。そのような中で、今後日本人選手が活躍していくためには、特に若手選手の体力や技術の向上を強いられると思います。今

回メダルを獲得した選手は2名とも30歳を超えており、年齢的には4年後のデフリンピックまで今のパフォーマンスを維持、向上させることは難しいと考えます。厳しい言い方かもしれませんが、若手の3名が今後の日本ろう者柔道界を引っ張っていかなくてはなりません。そのためには、各人が今以上の努力をしてパワーやテクニックを身に付けることが大切であるとともに、柔道の素晴らしさをもっとアピールして、日本のろう者柔道界の裾野を広げ、次世代の選手を育てていくことも大切であると考えます。また、パラリンピックに比べ、デフリンピックの認知度や注目度は低く、マスコミやメディア等に取り上げられていませんでした。これだけ頑張っている選手達がいるにも関わらず、ニュースにもなりません。関係者のアピール不足と、周囲の関心度の低さが原因だと思います。私は、選手達が聴覚障害を持ちながらもひとつのことに没頭し、輝いている姿をひとりでも多くの方々に見てほしい、知ってほしいと強く願います。

ろう者のコミュニケーション能力の高さに大変驚きました。「手話」というひとつのツールを使い、世界中の選手達とうまくコミュニケーションをとっている姿に感心し、仲間意識さえ感じました。健聴者の感覚では、国際大会や世界大会等でもあそこまで仲良くしている姿というのはあまり見たことがないです。昨今コミュニケーション能力の低下を問題視されている中で、彼らの積極性は本当に見習うべきだと感じました。

最後に、今回のデフリンピックに柔道日本代表チームの監督、コーチとして参加させていただき、貴重な時間を選手達と過ごせたことやいろいろな経験をさせていただいたことは、人生の貴重な1ページとなりました。彼らの今後益々の発展を祈念したいと思います。日本代表選手団の皆様、大変お疲れ様でした。ありがとうございました。

手話通訳 西川 美奈子

【反省・感想】

監督やコーチの通訳時にはスポーツ用語、専門知識が必要不可欠です。スポーツ好きという程度で柔道未経験の私が依頼者の意向に応えられたかどうか疑問が残ります。国際手話、諸音声外国語も挨拶程度しかできず、対応できない部分もありました。監督、コーチ、選手の協力のもと、試行錯誤しながらの通訳となり、やはりコミュニケーション関係の構築期間が必要だと感じます。監督、コーチ、選手は2年半の強化合宿などで信頼関係が作られており、その中に初対面で加入することで不和を生じないように努めました。

監督、コーチ、選手は通訳を介さなくとも大変通じ合っていたため、伝わりにくい部分を通訳するようにしました。通訳としての派遣でしたがマンパワー不足は明らかであり、監督やコーチと相談の上、積極的に行動することを努めました。国際大会で1人の現場通訳ということで、緊張の連続であり、健康の維持にも気を遣いました。また、いつでも対応できるようにと思うとON、OFFの切り替えが難しかったです。手話通訳としてなかなか体験できないことを経験させていただき、いい勉強になりました。会場の環境は、開閉可能な窓が3ヶ所、空調設備や観戦席がなく、トイレが遠かったです。

【改善提案】

①事前打ち合わせ実施

派遣依頼打診の際に強化合宿へ参加することになるかもしれないという話はあったものの、実現はしませんでした。事前打

ち合わせなどが行われず、当日成田空港での顔合わせとなりました。できれば、大会期間だけでなく事前に直接打合せができれば良いと思います。

②語学力

TD 会議や競技中には英語、国際手話、現地の手話などが混在していました。日本手話だけでなく、音声の英語もしくは現地の公用語、それに国際手話ないし現地手話が理解できる者の派遣が必要だと思います。

③通訳者でなくスタッフの派遣

チーム内の通訳という派遣依頼でしたが、それ以外の場面でも通訳することがありました。また、通訳だけでなく、チームスタッフとして行動することもありました。またすべての調整を監督・コーチのみで行っていました。今後派遣依頼をする時は、通訳兼スタッフとしての役割を担える人を派遣するようにしてほしいと思いました。

選手 山田 光穂

①成績に対する自己評価

前回に続く柔道主将として2回目のデフリンピックとなりましたが、今回は前回と同じ-100kg級、今回新たに採用された無差別級、団体戦に出場しました。「2連覇」という目標のもと試合に臨んだ結果、-100kg級も無差別級も銅メダルという結果に終わってしまいました。

前回よりもはるかにレベルが高く、技量の拮抗する中での試合でしたが、自分にとっては2位も3位も一回戦負けと同様なので、この銅メダルには当然満足していません。しかし、前回と比べ体力等は落ちてきたものの、気持ちは誰よりも負けず、大会前に右膝を負傷するといったアクシデントがありつつも、自分の限界への挑戦になったと思っています。

②反省・まとめなど

柔道で金メダル0個という結果に終わってしまったことは、皆様に対して非常に申し訳ない気持ちでいっぱいです。柔道は国技であることから、今回のデフリンピックでも「一本とる柔道」や日本が強いということを示していきたいのですが、柔道の基本でもある「礼に始まり、礼に終わる」といった礼儀作法の素晴らしさは世界に示せたと思います。

今回のデフリンピックに参加するにあたり、前回のデフリンピックから4年間、多大なご協力や応援をいただいた皆様にこの場をお借りして心から御礼を申し上げます。本当にありがとうございました。感謝の気持ちでいっぱいです。

これからは常に「感謝」を忘れず、広い視野を持ち、小学から長年にわたって続けてきた柔道を通して培ってきた経験を様々な場所で活かしていく所存です。

選手 吉良 暁生

私は柔道の-60キログラム級の選手として、初めてデフリンピックに出場させていただきました。日本代表に選ばれた時は嬉しく、長年柔道に打ち続けてきたことが報われた瞬間でもありました。また、柔道は日本が生んだ伝統ある武道のひとつであり、世界に誇るスポーツなので、私は聴覚障害者にとって世界最大の規模であるスポーツの祭典、デフリンピックという場を借り、世界中の国々に「礼に始まり、礼に終わる。」という柔道の基本である礼儀作法の素晴らしさを伝えとともに、柔道の真髄

選手 木ノ下 寿

個人戦 -73kg 級と団体戦 -81kg 級に出場し、優勝するべく、限られた練習時間と練習量で最大限のパフォーマンスを発揮するように努めましたが、力及ばず、個人戦は三位決定戦で敗退し、団体戦は一回戦で敗退し、敗者復活戦も破れました。詳細は以下の通りです。

1 回戦はハンガリーと対戦し、一本勝ち、2 回戦はイランと対戦し、優勢勝ち、準決勝は韓国と対戦しましたが、一本負けで敗退しました。そして三位決定戦へと進出しました。三位決定戦はトルコと対戦し、延長戦の末に一本負けで敗退しました。

個人戦では、未熟さを自覚していますが、準決勝、三位決定戦のいずれも共通して言えることは、場外際での気の緩みが敗因です。特に、今大会の準決勝の相手である韓国の選手は、2012 年アジア太平洋ろう者競技大会で倒した相手だったので、大一番の場で雪辱を果たされる結果となってしまいました。対戦前から、選手間に非常に大きなモチベーションの差があったと感じています。

団体戦 1 回戦はトルコと対戦し、3 対 1 で敗退、敗者復活戦は韓国と対戦し、4 対 1 で敗退しました。この敗戦の責任は私にあると自覚しています。

日本のデフリンピック関係者の皆様、期待に応えられず、申し訳ありません。この悔しさは一生忘れません。この経験を私自身で終わらせずに、次世代の若い競技者達に、デフリンピック情報発信とともに伝えていきたいと思っています。ありがとうございました。

選手 宮下 真弥

私は、初めて夢の舞台デフリンピックに出場しました。アジア大会、世界大会に出場させていただきましたが、満足できる結果ではなかったので、悔しい思いでした。今回の舞台では今まで味わったことのない緊張感や独特の雰囲気があり、プレッシャーもありましたが、とにかく自分のできることをがむしゃらにやろうと思い戦いました。自分の柔道を貫き精一杯戦いましたがメダルに届かず、激しい悔しさが残っています。団体戦に初出場し、日本チームの皆で心一つにして頑張って戦ったことが私の誇りです。

今回のデフリンピックを終え、日本の期待を背負いながら戦うというなかなか経験できないことをさせていただき、非常に厳しいものだ実感しました。金メダルを目指しながらもメダルすら獲得できず、情けない気持ちと期待に応えられなかったという悔しい気持ちになりました。これからの長い人生の中で、苦しく辛いことに耐えなければいけないと思うと、今回の負けた悔しさや情けなさを忘れずに、結果を受け止めて、新たにできた課題やメンタルの弱さを克服し、日々精進していきたいと思っています。デフリンピックの緊張や興奮は他ではなかなかできない体験であり、プレッシャーや緊張感のすごさを思い知ることができてよかったと思っています。金メダルの夢は達成できなかったものの、出場するまで応援、支援して下さった皆様に感謝の気持ちを伝えたいと思います。ありがとうございました。

である「一本」の美しさを披露するためにも、私の頭には金メダルしかありませんでした。そんな心構えで大会に臨みましたが、結果は銀メダルに終わり、目標を果たせず、悔いが残る思いでした。また、今年から国際柔道のルール変更に伴い、審判の判断や偏見による言い争いや見苦しい場面、コンピューターによる判定で裁かれるなど残念な結果も見られました。しかし私が思っていた以上に柔道の文化は世界中に浸透しており、どの国の選手も柔道の技術や体力のみならず、礼儀作法まで重んじて正々堂々と戦う姿勢は印象に残り、次から次へと素晴らしい試合運びで展開していき、会場は熱気に包まれていました。このデフリンピック大会に出場するまでの私は、柔道の素晴らしさを世界中の皆に伝えようと有頂天になっていたのを自分を恥じました。柔道が世界中に浸透した今、逆に多くのことを学びました。銀メダルという結果について、目標を達成できなかったことは残念ですが、決勝戦まで一戦でもより多く、様々な国の代表選手と対戦できたことは、私にとって金メダル級の良い経験になったと思います。この経験を生かして、次世代を担う子ども達に柔道の素晴らしさを伝え続け、世界中の様々な選手達と一戦でも多く戦い、関わり合い、平和をもたらしてくれることを願い、指導、練習していきたいと思っています。柔道関係者をはじめ、多くの方々から多大なご協力とご声援をいただき、本当にありがとうございました。

選手 東岸 林太郎

①成績に対する自己評価

本大会では自分が思うような柔道ができませんでした。特に韓国戦では、相手のペースで試合が進められ、指導を2つ取られてしまいました。相手の試合運びが上手く、組み手で負けてしまったことが要因です。イラン戦では互いに技が決まらず、延長戦でスタミナ切れにより優先負けを喫しました。トルコ戦では相手の絞めが入るなど危うい場面がありましたが、小休止の際、大内刈りを仕掛けるよう監督の指示があり、その通りに仕掛けたところ見事に一本が取れました。これは監督の的確な指示のお陰です。

しかし全試合を振り返ると、得意技によるポイントが得られなかったため、納得のいく柔道はできませんでした。

②反省・まとめなど

今年から導入された国際柔道新ルールの下で試合することは初めてでしたが、相手に技をかけられた際、反射的に相手の足に触れそうになる場面が多く、新ルールに苦戦しましたが、多くの国が新ルールに順応しているように見受けられ、普段から新ルールを強く意識する必要があると感じました。

自分の柔道ができなかった原因としては、組手負け、立ち技で一本をとる決定力の不足及び寝技への移行がスムーズにできなかったことです。特に寝技については、本大会に合わせて強化したつもりでしたが、実際は使えるものではありませんでした。寝技の練習、乱取では技が決まるものの、試合本番では決まりませんでした。柔道は立ち技が主体であるため、寝技は「待て」がかかりやすいことも理由の一つですが、立ち技から寝技へ持ち込む技術が未熟だったことが一番の原因です。巴投げ、隅落とし及び帯取り返し等の寝技へ展開する技を磨き、使える寝技を醸成します。また、パワー系柔道に負けないようなスタミナを身に付け、更に柔道の技術を研究し、磨きをかけて一本を取る柔道で4年後のデフリンピックにてリベンジします。

オリエンテーリング競技チーム

監督 丘村 彰敏

【選手選考について】

前々回の大会（メルボルン）にはアジア地域で初めて選手1名が派遣されました。前回の大会（台北）は不出場でしたので、今回の大会は8年ぶりの出場となりました。各選手の国際大会経験を積むために、2011年ウクライナで開催された世界ろうあ者オリエンテーリング選手権や国内外の大会に出場し経験を積んできました。今回、3名の選手をエントリーしたかったのですが、ろうあ連盟が提示した選手選考基準の「世界大会ベスト4以上」に全員が達成できず、今回は一般のアジア選手権 M45A クラスで優勝した選手1名のみを派遣することになりました。

【競技日程】

（競技人数）

5ヶ国、59人出場。日本からは選手1名、監督1名で出場しました。

（競技会場）

- スプリント競技（2013年7月29日）
 - ・エントリー数：男子27人、女子17人
 - ・会場：「Borisova gradina」Park…テラインはフラットであり、道路がネットワークのようにつながっていました。
 - ・マップ…1/5000 図
 - ・距離 3,100m、高低差 20m、コントロール数 17 個
- ミドルディスタンス競技（2013年7月30日）
 - ・エントリー数：男子28人、女子17人
 - ・会場：「Borisova gradina」Park…スプリント競技と同じテラインでしたが、走行範囲が延長され、森林部も入りました。全体的にフラットな地形で高速でのレースが要求されました。
 - ・マップ…1/10,000 図
 - ・距離 5,750m、高低差 45m、コントロール数 28 個
- レストデー（2013年7月31日）

8月1日のロングディスタンス競技に備え、休養。
- ロングディスタンス競技（2013年8月1日）
 - ・エントリー数：男子28人、女子17人
 - ・会場：「Bonsovi poljani」…牧場地帯の草原部とかなりの急傾斜のある尾根を含むテラインでした。
 - ・マップ…1/12,500 図
 - ・距離 8,700m、高低差 405m、コントロール数 24 個
- リレー競技（2013年8月2日）
 - ・エントリー数：男子8ヶ国、女子5ヶ国
 - ・会場：「Bonsovi poljani」
 - ・マップ…1/10,000 図
 - ・距離 4,900m（男子）、4,200m（女子）、高低差 180m
 - ・コントロール数 15 個

【成績と評価】

- スプリント競技

ウィニングタイム 12～13 分で高速でのレースが要求されました。田村選手は5番目にスタートし、タイムは19分08秒、27人中19位で完走しました。

男子1位の優勝タイムは12分35秒で欧州勢のスピードに

圧倒されるレースとなりました。1位ロシア、2位リトアニア、3位ロシアの順です。

○ミドルディスタンス競技

こちらも同じく5番目のスタートをした結果、制限時間内の56分42秒の21位で完走することができました。

男子1位はロシアの28分18秒、2位はリトアニアの28分45秒、3位はウクライナの30分57秒でウィニングタイムを凌ぐハイレベルなレースでした。

○ロングディスタンス競技

牧場地帯の草原部とかなり急傾斜のある尾根を含むテラインで高低差が405mあり、タフな走力が要求されました。制限時間は3時間で、田村選手は3番目にスタートしました。結果、制限時間内の2時間45分45秒の21位で制限時間内に完走しましたが、ブルガリア特有の複雑な地形に何度かコントロールの場所が分からなくなり、コースミスをしたとのことでした。もう少し適切なコースの選択をし、無駄な走行ルートを減らし、早く走れるようにするのが今後の課題だと思います。

男子1位はリトアニアで1時間3分21秒、2位はロシアで1時間7分5秒、3位もロシアで1時間15分34秒と、1位から3位までウィニングタイム以内にゴールするほどの熱戦でした。

【大会を振り返って】

今回のデフリンピックにはスタッフとして田村選手をサポートしました。田村選手は全種目完走でよく頑張ったと評価しますが、やはり本場欧州勢は強く、世界とのレベルの違いを強く感じました。アジア勢のレベルの底上げが必要です。アジア各国でオリエンテーリング競技が開催されることを強く希望しております。今回の大会での課題を真摯に受け止め、今後もオリエンテーリングのナビゲーション技術を更に磨き、2年後の世界ろうあ選手権及び4年後のデフリンピックを目指すと共に、アジア勢のオリエンテーリングのレベルアップを図っていきたいと思います。

競技最終種目はリレー競技でしたが、日本は残念ながら選手が足りず、エントリーはありませんでした。次回のデフリンピックには是非、男女でリレー競技に出場できるように選手を育成し、チーム編成して出場したいと思います。

選手 田村 聡

【成績に対する自己評価】

○スプリント競技…19分08秒、19位

デフリンピック前に左足首の重度捻挫をしてしまい、インターバルや走り込みが足りませんでした。そのせいか精一杯に走ってもタイムが出ませんでした。スプリントはスピードが重要ですが、若い時は5000m 15分強だったので、早い時にオリエンテーリング競技に出会えば良かったと思いました。

○ミドルディスタンス競技…56分42秒、21位

森林部に小道が多く交差していて、藪の中でのコントロールが多かったです。道回りか藪を切るかという瞬間的な選択判断はいまいち掴めませんでした。元々藪が苦手であり、スピードも上がりません。他の選手は藪でもスムーズに走っており、ここでも差を感じました。

○ロングディスタンス競技…2時間45分45秒、21位

スプリント、ミドルディスタンス競技より本格的な地形でしたので、もっと力を発揮して今まで以上に良い成績を取れるように努めました。ブルガリア特有の複雑な地形でのルート選

択ミスも出てしまい、経験量の差を感じました。とても悔しく思いました。

【反省・まとめなど】

やはり本場の欧州勢は強豪で健聴者の世界も同じですが、このデフリンピックに参加して自分自身の課題が見つかりました。

メダル獲得者達はオリエンテーリング競技が職業のようで、週6回トレーニングしています。このようにもっとトレーニングをしないと厳しいようです。そのことを踏まえて日本チームは今度の方針を考えないといけないと思います。いろいろな場所で経験を積み重ね、その結果歩くような感覚になれば、欧州勢を倒したいと思っています。

水泳競技チーム

監督 豊田 律

1. 選手の選考について

2011年の第3回世界ろう者水泳選手権大会の6位記録を基準記録として、2012年第7回アジア太平洋競技大会で2位以上、第7回日本ろう者水泳選手権大会にて選考会を行い、2012年の日本水泳連盟の公認大会も含めて基準記録を突破した選手を厳格に選考した結果、男子2名、女子4名の計6名を派遣候補選手に決定し、派遣委員会へ推薦届を出し、全員とも正式に派遣選手として決定しました。

スタッフにおいても2011年の第3回世界ろう者水泳選手権大会と2012年の第7回アジア太平洋競技大会の監督及びスタッフの中から監督とスタッフ1名が引き続き決定し、女子スタッフとトレーナーも日本ろう者水泳協会の強化本部の推薦で決定しました。

2. 成績一覧

・【金メダル1個】

金持 義和：50M 背泳（デフ世界新記録）

・【銀メダル5個】

金持 義和：100M 背泳

200M 背泳

茨 隆太郎：200M 個人メドレー（デフ日本新記録）

400M 個人メドレー（デフ日本新記録）

50M 背泳

・【銅メダル2個】

茨 隆太郎：100M 背泳

200M 背泳

・【入賞14個】

今村可奈：200M バタフライ 4位、

400M 自由形 7位

800M 自由形 5位

藤川彩夏：50M バタフライ 7位

100M バタフライ 6位

200M バタフライ 7位

200M 個人メドレー 5位

400M 個人メドレー 5位

久保 南：50M 平泳 6位

100M 平泳 7位、200M 平泳 6位

茨 隆太郎：200M 自由形 7位

久保・高瀬・藤川・今村：400M メドレーリレー 8位
400M リレー 8位

3. 成績と評価

今大会でのメダリストは金持選手と茨選手の男子2名でした。金持選手は2年前の第3回世界選手権大会にて初めての国際大会であるにもかかわらず、100M 背泳、200M 背泳でともに大会新記録で金メダルを獲得するなど輝かしいデビューを飾りました。前回金メダリストの茨選手も50M 背泳にて世界タイ記録で金メダルを獲得し、二人ともデフリンピックの優勝候補として大きく期待しておりました。去年の第7回アジア太平洋競技大会においても金持選手は50M 背泳、100M 背泳、200M 背泳にて大会新記録で金メダル、茨選手も背泳から個人メドレーに転向し、200M 個人メドレーにて大会新、400M 個人メドレーにてアジアろう者新記録で優勝し、期待通り活躍してくれました。

今大会になって金持選手は100M 背泳と200M 背泳でランキング1位になっており、茨選手も50M 背泳でランキング1位、他の種目もランキング3位以内になっており、金メダル獲得に向けて大きく期待が膨らんでいました。しかし、18歳の米国選手が背泳において予選からデフ世界新を連発し、周囲を驚かせていました。金持選手も茨選手も想定外であったせいか、少し固まっていたのですが、すぐ気持ちを切替えて米国選手をマークすることにしました。100M 背泳決勝において金持選手は米国選手を意識したせいか、前半ハイペースでいき、後半に入ってから少しペースダウンしてしまい、後半に強い米国選手がペースアップし、ラスト5Mで金持選手を逆転しデフ世界新で金メダルを獲得しました。金持選手も自己ベストのデフ日本新で銀メダルを獲得し、茨選手も今季ベストで銅メダルを獲得しました。しかし、米国選手の後半の強さは驚異的であり、勝つためには前半にハイペースで差を広げ、そのまま後半で逃げ切るしか方法がありませんでした。50M 背泳は金持選手と茨選手はスピードが得意なので米国選手より有利であり、50M 背泳に賭けることにしました。

作戦通り、予選では金持選手が1位、茨選手も3位、米国選手は5位に入り、金メダル獲得が見えました。決勝になると、金持選手が良いスタートでトップに立ち、そのままスピードを落とさずにゴール、デフ世界新で念願の金メダルを獲得しました。茨選手も金持選手に最後まで付いていき、銀メダルを獲得し、見事にワンツートを果たしました。米国選手は5位でした。200M 背泳は米国選手の得意種目であり、予選からデフ世界新を出し、調子を上げていました。金持選手も茨選手も調子を上げ、予選2位、3位で決勝に進みました。決勝になると、金持選手が積極的に飛ばし、前半のタイムが自己ベストのハイペースで頭一つ米国選手をリード、そのまま逃げ切りたいや、米国選手がスピードを上げ、あっという間に金持選手からリードを奪いました。茨選手もスピードをあげ、金持選手との差を詰めていきました。あと10Mで金持選手と茨選手がラストスパートで先行する米国選手との差を詰めていき、もしや揃って逆転かという激戦になりましたが、米国選手の強いスパートに敵わず、金持選手は今季ベストの銀メダル、茨選手も自己ベストで銅メダルを獲得しました。金メダルの米国選手は4個目のデフ世界新を出し、強さを見せてくれました。

金持選手は初めてのデフリンピックであり様々なプレッシャーの中で獲得した3個のメダルは十分価値があるといえます。

茨選手も個人メドレーで2種目とも自己ベストのデフ日本新で銀メダルを獲得し、個人メドレーの選手として実力を見せてくれました。また、今大会で5個もメダル獲得できたことでデ

フリンピックでの日本選手が獲得した最多メダルの4個を超える、史上最多のメダル獲得となりました。大学2年生でまだ若く、実績を積み上げ、2年後の世界選手権大会ではライバルである米国選手を打倒し、次回のトルコ大会につながってほしいと思っています。

惜しくもメダルに届かなかった女子選手達もよく健闘し、13個の入賞を果たすことができました。しかし、去年の第7回アジア太平洋競技大会時と同じタイムを出せていれば多くのメダルを獲得できたはずです。

メダル獲得の有力候補だった今村選手は練習で痛めた肩痛が完全に治らないまま大会を迎えました。得意の200Mバタフライの前に400M自由形決勝があり、参加するかどうか悩んでいました。監督とトレーナーは棄権を勧めましたが、今村選手の気持ちを優先し参加することになりました。400M自由形決勝は7位入賞を果たしましたが、その時点で力が尽きてしまい、トレーナーが懸命にケアしましたが、十分な回復ができないうままレースが始まりました。前半はまずまずのペースタイムで進めたものの、後半になると泳ぎが重くなり、ペースダウンしてしまいました。しかし、あと20Mになると持ち前のスタミナでスピードをあげ、3位のウクライナ選手との差を詰めましたが、ウクライナ選手も粘りそのままゴール、今村選手は今季ベストで4位入賞を果たしました。400M自由形決勝を棄権すれば良かったととても後悔していました。しかし初めてメダルを獲れなかったことが良い経験になり、勉強にもなったと思います。また一からやり直すことができます。今村選手の今後の成長を期待しています。

同じくメダル獲得有力候補の藤川選手は、去年のアジア大会後、環境変化による心身不調が続き、練習もなかなか行けず、タイムも著しく低下し、参加辞退の話まで出てきましたが、監督やスタッフのサポートで何とか乗り越え、今春から少しずつタイムを上げていき、復調の兆しが見られるようになりました。大会になると、ベストタイムには及ばなかったものの、参加種目全てにおいて入賞を果たしてくれました。

たった半年でどん底から復調まで這い上がったことは普通ならなかなかできません。藤川選手の人一倍の努力のたまものです。その努力を忘れず、これからの成長に期待しております。

高瀬選手もメダル獲得の有力候補でしたが、大会になるとベストタイムに遠く及ばず、決勝進出を果たすことができませんでした。年齢的にコンディションをうまく調整できなかったそうです。去年のタイムを出せばメダル獲得の可能性があっただけにそこからのベストコンディションの維持が大変だったことを改めて痛感しました。

一方、久保選手は大会1ヶ月前に尾骨の骨折というアクシデントを起こしましたが、大会までに何とか治すことができ、調子を上げることができました。17歳の若さ、初めてのデフリンピックとあって様々なプレッシャーを抱えながら自己ベストを含む3種目の入賞を果たしたことは高く評価します。まだ若いので今後の成長が楽しみです。

全員メダル獲得との目標を果たせなかったものの、ベストコンディションで自己ベストを出せば、全員メダルを獲れる機会が十分あったので、大会前、あるいは大会中のコンディションの調整を失敗したことが大きな原因と考えられます。

4. チーム（コーチ）体制と各コーチの役割

- ・豊田監督・・・チーム全体の掌握、指揮監督、選手指導管理、競技規則担当、TD 担当
- ・中里トレーナー・・・選手ケアサポート、選手指導管理補助

- ・平田スタッフ・・・監督補助、TD 担当
- ・高岸スタッフ・・・監督補助、選手ケアサポート補助、競技スケジュール担当

5. 競技スケジュール（渡航スケジュール）

- 7/24・・・ソフィア到着
- 7/25・・・8時～9時、17時～18時 現地練習
- 7/26・・・10時～TD会議（豊田、平田）11時～12時、16時～17時 現地練習
- 7/27・・・試合 9時半～12時予選、17時～19時半決勝
- 7/28・・・試合 9時半～12時予選、17時～19時半決勝
- 7/29・・・試合 9時半～12時予選、17時～19時半決勝
- 7/30・・・10時～TD会議（豊田、平田）10時～12時自主練習
- 7/31・・・試合 9時半～12時予選、17時～19時半決勝
- 8/1・・・試合 9時半～12時予選、17時～19時半決勝、中里トレーナー帰国
- 8/2・・・試合 9時半～12時予選、17時～19時半決勝
- 8/3・・・豊田監督帰国
- 8/4・・・ソフィア出発
- 8/5・・・帰国

6. 競技運営などの報告

競技においてFINA（国際水泳連盟）の基本規則通りの運営が行われていたと思います。しかし、電光掲示板には一部しか表示されなかったため順位やタイムの報告が一部しか伝わらず、選手はもちろん、聴覚障害を持つスタッフ、観客からの不満が多くあがりました。

聴覚障害者の大会なので情報保障をしっかりしてほしかったと思います。しかし、開催変更による準備期間があまりなかったことを理解しているからか、スタートランプの故障によるレース進行の遅れなど、多少のトラブルに対しての抗議はあまりなくスムーズに運営することができたと思います。

7. 競技規則の適用（問題点）

FINA（国際水泳連盟）の規則に従っており、日本においても同じなので問題はありませんでした。競技開始後のスタート方法、召集呼びかけ方法において聴覚障害者に対する配慮がなかったと思います。しかし審判長がすぐ対応し改善してくれたので、大きなトラブルもなくスムーズに試合ができました。

8. 大会参加までの準備状況

今大会に向けての強化合宿において、監督、スタッフ、選手の都合とプールの確保ができず、なかなか調整ができませんでしたが、日本ガイシアリーナ管理室、沖縄県奥武山運動公園管理室、アクアリーナ豊橋、奈良教育大学、そして近畿ツーリストのご厚情、ご協力により下記の通り実施することができました。

- ・第1回強化合宿 4/13-14 於：日本ガイシアリーナ
- ・チームワーク作りと基礎体力の向上
- ・第2回強化合宿 5/2-6 於：沖縄県奥武山運動公園プール
- ・持久力強化
- ・第3回強化合宿 6/15-16 於：アクアリーナ豊橋
- ・持久力、スピード持久力強化
- ・第4回強化合宿 7/5-7 於：奈良教育大学
- ・レーススピード強化、調整、リレー引継ぎ技術向上
- ・第5回強化合宿 7/13-15 於：なみはやドーム
- ・レーススピード強化、スタート、調整

9. 反省・まとめなど

今大会での水泳競技は 42 ヶ国、選手 202 名が参加し、世界新記録が延べ 10 個、デフリンピック新記録も延べ 16 個も樹立するなど、水着規制後としてはレベルの高い大会となりました。日本チームは男子 2 名、女子 4 名の計 6 名で参加し金メダル 1 個、銀メダル 5 個、銅メダル 2 個、入賞 14 個とデフリンピックとして過去最多のメダル獲得となり、よく健闘してくれました。

しかし、メダルを獲得できたのは男子選手のみで、女子選手は入賞 13 個にとどまりました。自己ベストを出せば、多くのメダル獲得が期待できたのですが、力を発揮できなかったのは、コンディションの調整失敗、レース実績不足などが大きな原因だと考えられます。

特に社会人になると試合が少なくなります。レース実績を積みめないとレースのイメージがつかめず、ペース配分を失敗するリスクが高まってしまいます。

コンディションを管理するにあたり、デフリンピックに合わせてピークにするのは容易ではありません。練習だけでなく自己管理も重要であることを強く認識しなければなりません。

大会を通して、「レース後の回復力」、「120%の力の発揮」、「自己管理」との 3 つの課題が挙がりました。

一つ目の課題である「レース後の回復力」。一週間近くもある長いスケジュールにも関わらず安定した記録を出した選手は素晴らしい「回復力」を持っていたからです。厳しい練習に耐えに耐えてそこから回復力が上がります。疲労の原因となる乳酸を休憩の時にいかに減少できるかが大きなポイントです。人によってまちまちなので、練習を通して自分で乳酸のコントロール調節を身につけなければなりません。それが回復力アップにつながります。

二つ目の課題は「120%の力の発揮」。試合になるともちろん、レースで 100%の力を発揮しなければならないのですが、これ以上の力を発揮できるようにしないと勝てません。なぜならレースにおいて 100%の力を発揮できたとしてもこれ以上の力が発揮できず、すぐ力が尽きてしまうのです。そうならないためには 100%の力を発揮してもまだまだ力が余るほどの体力をつけなければなりません。そのためには練習にてレーススピードで 120%の力を発揮できるようにしないといけません。試合の結果は全て練習の成果によるものです。

三つ目の課題は「自己管理」。試合が長いので疲労や筋肉痛を訴える選手が出てきます。中里トレーナーの身体ケアで疲労および筋肉痛は軽減したようですが、本来であれば中里トレーナーに頼らずに自分でストレッチやアイシングを使い筋肉痛を抑えるなどしないといけません。なぜなら自分の体は誰よりも自分がよく知っているからです。自分で体のケアができるようになれば 24 時間いつでも体のケアができるので先述した「回復力」につながります。

試合にはベストコンディションで臨み、自己ベストを出すためには、3 つの課題をクリアしなければなりません。そのことを選手達にしっかり認識させました。

今後の取り組みとして、

①合宿では水中ビデオ撮影をして自分の泳法を確認し改善のポイントを自覚させる。

②レースで 120%発揮できるようにレーススピードを中心とした練習を取り入れる。

③技術だけでなく筋力アップもフォーム改善につながるのウェイトトレーニングを取り入れる。

④回復力強化および自己管理の徹底化を図る。

以上 4 点を取り組んで次回の国際大会につなげたいと思います

す。また日本水泳連盟と日本スイミングクラブ協会との連携を強めて、新人の発掘、技術指導、合宿施設の斡旋など色々な協力が必要になります。

最後になりましたが、強化本部の方針としてさらなる精鋭主義を持って選手育成に励みたいと思います。しかし、少数でなくみんなを精鋭にしなければなりません。そうしないと世界とは戦えません。それを次回の国際大会を目指すデフスイマーたちが認識して頑張っていたくことを、私は願ってやみません。

コーチ 平田 純

デフリンピック日本代表、本部、スタッフ、選手達、本当にお疲れ様でした。

初めてスタッフとして参加しました。

スタッフという仕事は、監督補佐、選手指導管理、時間や場所取りなどです。試合中には、ビデオ撮影をしました。この録画を参考にし、決勝へ向かってイメージを膨らませた選手や、泳ぎ方の改善点を発見した選手もいました。ビデオを撮って良かったと思っています。

選手達は時差ボケを心配していましたが、きちんと管理し、少しずつ慣らしていったので、コンディショニングも良く、安心していました。男子 2 名、女子 4 名、計 6 名参加し、男子はメダル 8 個を獲得できました。女子もメダルは取れなかったものの、入賞をたくさん取りました。4 年前の 5 個を上回るメダル数 8 個でした。本当に良かったと思っています。

しかも、他国のレベルが高くなり、すごいと思いました。やはり練習をもっと厳しくし、頑張れば良かったと考えていました。

ブルガリアは、温度も高くなく、平均 30℃とちょうどいい環境で、過ごしやすかったです。食事はホテルのレストランで食べることが多く、同じ物ばかり食べていたため飽きてしまい、食事を抜くこともありました。閉会式に出席することができなかったのが、1 番悔しかったです。この日は、サイクリングとオリエンテーリングと水泳が帰国日になっていたため、見られずに残念でした。4 年後トルコで開催する時は、開会式、閉会式共に選手も参加できるようにしたいと思っています。その時は、よろしくお願いします。

最初はギリシャのアテネで開催する予定でしたが、予算の都合で場所が変わり、ブルガリアで開催することができ、本当に感謝の気持ちでいっぱいです。しかしあまりにも突然で、準備する時間がなかったことは仕方ないと思っていますし、最後まで問題なく無事に終えられ良かったです。

他国では多くの選手数で参加しているので、日本もできれば数を増えて参加した方がいいし、スタッフも 2 人くらい増やしてほしいと思います。

最後になりますが、ソフィアデフリンピックという本当に最高のスポーツ祭典に参加でき、嬉しい気持ちでいっぱいでした。もっと若い世代に参加してほしいと思います。

2 年後の世界大会と 4 年後のデフリンピックに向かって、選手達のサポートをして行きたいと思っています。

トレーナー 中里 賢一

この度初めてデフリンピック競泳日本代表トレーナーとして大会に帯同させていただきました。今回は監督をはじめ競泳チームのスタッフ選手全員がろう者ということでできる限りの

準備をして臨みました。

事前合宿として5月、6月、7月と予定が組まれていたのでその前になんとか日常会話程度の手話を身に付けるため、4月から手話講習会に参加しました。先生方がとても熱心で毎週通ううちに少しずつですが私も手話が理解できるようになりました。その後の合宿でスタッフ選手の皆様からも手話を習い、水泳に関する質問や練習の相談なども手話を交えて行えたので本番の大会にスムーズに入れたのではないかと思います。

デフリンピック開催地であるブルガリアに向かう時から航空機が変わり、連絡をとるのに苦労しました。ブルガリア到着後は各競技チームに1台ずつ携帯を配布いただいたのでとても助かりました。おかげで車での移動の際、連絡がとれない状況で待たされるといったことがなく、ホテルから会場までの移動で選手が疲れてしまうという心配はありませんでした。また滞在していたホテルでの食事は3食ビュッフェ形式で、種類も多く野菜や肉類も美味しくとれたので外食せずに済みましたが、初代表の選手や海外に慣れていない選手は持参したレトルトの日本食も合わせて摂取し健康管理に気をつけました。

体調管理を一番に考えた上で練習を積み本番の試合を迎えました。試合当日の仕事は、少し前の時代のように選手をマッサージするだけでなく多岐にわたります。

まず朝、身体を動かすためのストレッチは選手各自で行い、足りない部分の補助が必要な箇所をサポートします。ひと種目で予選、決勝と1日2回レースがあり、競技時間がそれぞれ違うため、ウォーミングアップの時間や内容も各選手で異なりますが、トレーナーが流れを把握して選手の特徴に合わせ、アップ前もしくはレース直前に腹筋運動等、体幹トレーニングを入れて腹圧を入れたり関節を締めたりしていきます。1日に複数のレースをこなす選手に関しては合間に身体が緩みすぎないようにマッサージを入れて疲労をとります。

期間中連戦となるため、夜ホテルにて長めのマッサージを行い、その日の疲労をできるだけ翌日に持ち越さないよう準備をして就寝します。試合期間中という一番大事な時に身体を任されるため、どのように身体のケアのサポートをしていけば良いのか各選手とも事前によく相談していたので、その点では迷わずサポートできました。

全員ベストタイムというところまではいきませんでしたが、競泳チームの結果は金持義和選手の50M背泳ぎ金メダル（デフ世界記録）ベストタイム連発、茨隆太郎選手の銀メダルなど金1銀5銅2となり、目標を上回る8個のメダル獲得となりました。

春から続いた強化合宿から本大会までで、ろう者の方の苦勞やそれを支える方々の大変さを改めて感じましたが、素晴らしいと感じたこともたくさんありました。そのひとつが各国の人達とのコミュニケーションです。スポーツの国際大会では試合後、お互いの健闘を称え、シャツやピンバッジを交換する場面があります。デフではそれぞれの国の手話である程度会話が成り立つ為、英語圏以外の人達とも気軽に会話（手話）ができます。これは素晴らしいことだと感じました。私もですが外国語を覚えるのが苦手の日本人は先に国際手話を覚えた方がいいのではないと思うくらいです。手話を覚えたおかげでブルガリアのスタッフともコミュニケーションがとれました。

このような経験をつなげて、障害者スポーツにおいてこれからよりサポートできることを拡げて活動していけるよう、今後も動いていきたいと思っています。今回このような機会を与えていただいた関係者の皆様、また応援していただいたスタッフ、選手ご家族、デフ応援プロジェクトチームの皆様に改めて感謝いたします。

本当にありがとうございました。

スタッフ 高岸 里佳

デフリンピック日本代表の本部の皆様、各競技のスタッフや選手の皆様、本当お疲れ様でした。

私は水泳競技のスタッフとして参加しました。

スタッフの仕事内容は監督の指示により行動、選手達のサポート、スケジュール管理、皆に連絡するなどです。大会期間中は、場所取り、出場する選手達のタイム記録、タイムラップへの記入、速報を取り込み、選手やスタッフに連絡するなど動き回り、特に私は女子選手達のサポートをしました。

環境に慣れるまで時間がかかりました。設備なども大変だったと思いますが、大会を開催していただけたことを本当に感謝しています。日中は暑かったですが早朝と夜は涼しく、湿気もなく過ごしやすいかったです。

前回のデフリンピックまでは、選手として2回出場しました。その経験を生かし、選手達をサポートしたいという思いが強く、スタッフとして派遣させていただきました。皆がよく頑張った結果、多くのメダルと入賞を獲得し、スタッフとして大変嬉しかったです。男子陣が大変活躍していましたが、女子陣もメダルは逃したものの最後まで諦めず、決勝に残り入賞できたことは大変素晴らしく、褒めたいと思います。選手が悔しがっている姿を見て、一緒に泣いてしまった時もありました。時差や長い大会期間で疲れがあっても、最後まで粘って頑張ったと思います。その頑張りを勇氣に変え、感動をくれてありがとうございました。とても刺激を受け、励まされました。

大会期間で失敗したことがいくつかありました。スタッフ同士での連絡のやりとり中にかみ合わない時があり、連絡ミスをしてしまったこと、決勝時、表彰時間が大事なのに、応援に来てくれた人たちに気を遣い話し込み、聞き逃してしまったこともありました。私が切り替えるのが遅いと思い反省しつつ、次の時に気を付けて行動をしました。初めての仕事でかなり緊張してしまい、バタバタする時もありました。皆様にご迷惑おかけいたしました。最後まで、監督やスタッフ、選手、応援に来てくれた皆様や日本から応援してくれた人達、大会期間中お世話になった本部の皆様のご協力があったおかげで、最後まで無事に終わることができ、仕事もうまくいくことができました。いい経験になったと思います。その経験を今後につなげていこうと思っています。

今後の課題は、やはり世界レベルが上がっていくと思いますので日本もさらなるレベルアップをしなければならないと思います。そのための勉強をしつつ、選手達をサポートしていきたいと思っています。

最後になりましたが応援してくれたスタッフ、選手達、選手のご家族の皆様、デフリンピック応援プロジェクトチームの皆様、日本にいる皆様や会社の皆様に改めて感謝いたします。本当にありがとうございました。

選手 金持 義和

初めてデフリンピックに参加して、水泳の200M自由形、50M、100M、200M背泳ぎに出場しました。200M自由形は予選落ちでしたが、50M背泳ぎでは世界新記録で金メダル、100M背泳ぎ、200M背泳ぎでは銀メダルを獲得することがで

きました。

今回の大会は、食事面が一番大変でした。なかなか食欲が優れず体調不良を起こし、その影響で一日目の200M自由形が残念な結果に終わりました。100Mと200M背泳ぎは自分の自己ベスト更新に届かず、優勝を狙えなかったことに悔しい思いをしました。大きな敗因は、アップ不足とレース展開の仕方が悪かったところです。50M背泳ぎはよい調整ができて、最高のパフォーマンスを発揮でき、日本で最初のコメダルという快挙を成し遂げたことを大変誇らしく思います。しかし全体的には自分としては納得いかない試合でした。

今後は、種目ごとに合ったアップの仕方やレース展開の戦略をしっかりと考え、今後の各大会で実践し、最高のパフォーマンスに繋げられるように頑張りたいと思います。

試合会場の雰囲気はすごく盛り上がっていて緊張しましたが、メダルを取れて嬉しかったです。今回の試合では、三冠という目標を持ってレースに挑みましたが、世界新を2つ破ったアメリカの選手に負けてしまい、悔しい思いが湧いてきました。でも、ライバルの出現で今後の対決が楽しみになりました。

今回のデフリンピックの応援、サポートをしてくださり本当にありがとうございました。

選手 茨 隆太郎

二度目の出場となった2013ソフィアデフリンピック。前回の台北大会以上の成績を収めようとして臨んだ結果、銀2、銅3全部で5個のメダルを獲得することができました。これまでのデフリンピック史上最多獲得は4個であり、僕が今回のデフリンピックで日本選手として一大会で最多メダル獲得という快挙を成し遂げたことを大変誇らしく思います。

しかし、個人としてはずっと金メダル優勝を夢見てここまで続けてきたので、銀銅メダルには悔しいという感情はありますが、自分なりの精一杯の最高のレースができたと思います。さらに日本の環境と比べてタイムが出にくいプールで、4種目ベストを出せたことは、大いに自信になりました。正直に言うと、応援してくれている大勢の方やお世話になってきた方達に金メダルという形で恩返ししたかったのが本音です。これも実力であり、個人としての課題が見つかり、今後につながる貴重な試合だったと思います。

最後に、4年後のアンカラデフリンピックについての思いを皆様から良く聞かれますが、まずは、2年後の世界ろう者水泳大会に向けて、一年一年着実にステップアップしていき、今までと比べものにならないくらい確実に優勝を狙える位置まで成長したいと思います。水泳に集中できる期間が限られてくるため、自分が、今以上にやるべきこと、できることは何かに気が付き、実現のために懸命に取り組んでいきたいと思います。応援して下さっている方々に感謝の気持ちを常に忘れずに、また気持ちを新たに挑戦していきます。どうもありがとうございました。

選手 今村 可奈

デフリンピック出場3回目になります。優勝するためには、ほぼ毎日の練習に参加して、少しでも無駄な泳ぎ（水の抵抗など）を減らすためフォーム中心に練習してきましたが、デフリンピックの半年前に右肩に違和感があり、少しずつ痛みが増し

てきて、診てもらった結果、炎症を起こしさらに腫れていました。痛みを恐れるあまり集中力が切れ、泳ぐことへの不安を抱えたままデフリンピックを迎えました。私の専門は200Mバタフライで1日目でしたが、同日に400M自由形もあり、2種目とも出場し決勝へ進み、先に400M自由形を泳ぎ、30分後に200Mバタフライを泳いだため4位という結果になりました。400M自由形を棄権しておけば良かったと今でも後悔しています。どうしてもメダルを獲得したかったです。今までのデフリンピック、世界大会、アジア大会では必ずメダルを獲得してきましたが、今回はメダルなしでした。でもこれがきっかけとなり、次の世界大会での大きな目標と課題ができました。水泳はしんどいですがやっぱり好きなのだと思っていました。今回のデフリンピックは悔しい大会になりましたが、2年後の世界大会、アジア大会は、良かった、楽しかったと言える大会になるよう、また1からスタートして頑張りますので応援よろしくお願いします。そして最後にメダル獲得できなくてすみませんでした。

選手 高瀬 理恵

台北大会に引き続き、2大会連続で出場させていただきました。

台北大会は惜しくも4位に終わり、ブルガリア大会を目指すプロセスの中で、メダル射程圏内の好位置までいったものの、リレー2種目のみの入賞という期待に沿えられない結果に終わってしまいました。4年に1度の最高峰の舞台にピントを合わせ、実力を出し切った上で最高のパフォーマンスをパーフェクトにこなすのは非常に難しいことであり、私はこの準備が足りなかったという一言に尽きると 생각합니다。結果的にはメダル獲得の期待を裏切ってしまう敗戦となってしまいましたが、デフリンピックを通して先々の人生への糧となる多くのことを学ばせていただきました。

夢への実現は時には人を苦しめると言われるように、こういった最高峰の舞台で戦うにあたり、必ずや何かを犠牲にしてしまうものではありますが、デフリンピックという舞台で長年の努力と思いをぶつけることで、この希少な経験は人間形成の上で大いに勉強になったと思います。

わが水泳チームは、日本チーム全体の MVP とも言える男子エースコンビの健闘で、メダルを量産しました。

大会全体を目のあたりにして感じたことは、世界レベルが上がっている中で勝ち抜くためには、競技のための環境整備が必要だということです。私自身、フルタイムで仕事をしながら2大会出場してきましたが、長い目で結果を出す環境を見据えると、これからはスポンサーとなって下さる企業の支援が必要となってくのではないかと感じました。2020東京五輪開催に伴い、パラリンピックも文部科学省への移管が決まっており、障害者スポーツ全体の底上げが大いに期待されています。

一方で、デフリンピックは一步出遅れている気がするのですが、更なる飛躍を目指すにあたり自身の経験を生かして、強化に協力、貢献できたらと思います。

最後になりましたが、このような最高峰の舞台で戦うチャンスを与えてくださったスタッフの皆様方に感謝申し上げます。

選手 藤川 彩夏

4年前の台北デフリンピックに続き2度目のデフリンピック

卓球競技チーム

監督 佐藤 真二

でした。4年前のデフリンピックは中学生で、初の世界大会だったため分からないことばかりで、世界のレベルは高いと思いながらも甘く見てしまい、決勝まで残れたのは1種目のみでした。その痛感を胸に、今回のデフリンピックでは全種目において決勝進出し、ベスト・日本記録を更新し、メダルを狙うことが目標でした。今までの国際大会では記録が伸びてきていたのですが、諸々の事情で練習時間が減ってしまい、いい結果が出せませんでした。目標としてはベスト・日本記録を更新してメダルを狙うことはできませんでしたが、全種目（7種目）において決勝に残ることはできましたが課題もありました。200M バタフライでは、後半からキックが弱くなり体が重くなってしまったこと、200M、400M 個人メドレーでは、特に平泳ぎについて、もっと技術を磨いていけば海外選手に追いつけたかもしれないと反省しました。400M フリーリレーでは、個人のタイムが遅いので、試合開始前から監督と相談し悩み続けました。日本記録を更新するにはタイムを縮める工夫や、リレーメンバーへ迷惑をかけないために考えた結果、初めて50M ずつバタフライとフリー両方を泳ぐことを決心しました。リレーする時は不安でしたが、泳ぎ終わるとスッキリした気持ちと自分のベストが出せて良かったです。日本記録更新ができなかったことは悔しかったのですが、団結力があって良かったと思います。デフリンピック期間中には悔し泣きあり、笑いありでしたが、気持ちを1つにして頑張れたことが思い出です。これから世界大会に向けて新しい目標で頑張っていきたいと思います。相談やアドバイスなどお世話になった監督、スタッフ、トレーナー、選手、そして自分のために色々なサポートしてくれた家族やコーチ、応援してくれた方々、本当にありがとうございました。

選手 久保 南

デフリンピックでの成績は、50M、100M 平泳ぎでベストを出せて良かったです。でも、200M 平泳ぎは、2秒落ちました。自由形ではベストが出せず予選落ちしました。全種目で決勝に残りたかったです。でも精一杯やれたので良かったです。レースの日が長くて体が重く感じ、疲れも溜まってきました。だから体の調整はもっとやるべきだったと思いました。また、長くいることで環境に慣れるのに時間がかかってしまいました。疲ればかりですが、いい経験ができたと思います。

初めてデフリンピックに出場して、ワクワクした気持ちもあり、不安な気持ちもありました。外国人はとても体が大きくて泳ぎも速くて、世界はレベルが高くてすごいと思いました。精一杯頑張りましたが、メダルに届くことができませんでした。でも入賞できたので悔いはありません。たくさんの人が応援してくれて本当にありがとうございました。

そして、国際手話に興味を持ちました。面白くてもっと学びたいと思いました。外国の文化も違って、なるほどと思いました。例えばブルガリアでは、YES の時は横に首を振るのでびっくりしました。日本では縦に振るのにと疑問を持ちました。もっと外国人と交流してみたいです。

飛行機に乗るのがとてもきつかったです。長くて時差があり、時差が戻るのに時間がかかりました。でも、初めての遠い国だったのでいい経験ができました。楽しくて、良かったです。この経験を生かしていき、生活をしていきたいです。

①選手選考

ろうあ連盟が発表した選考基準をもとに選手を選考しました。

- ・2012年世界選手権ベスト8以上（後日ベスト4）
- ・2012年アジア大会ベスト4以上（後日ベスト2）
- ・メダルを確実に獲れる選手を選ぶ

この結果、女子は上田・佐藤・有馬・川崎選手を、男子は望月選手をエントリー。その後男子団体とダブルスを考え、ろうあ連盟と協議をした結果有馬、亀澤選手をエントリーしました。

②成績

男子 団体 9位

シングルス 亀澤ベスト32

ダブルス 望月・亀澤ベスト16

女子 団体 3位

シングルス 上田優勝 佐藤・有馬・川崎ベスト16

ダブルス 上田・佐藤準優勝

混合ダブルス 亀澤・佐藤ベスト8 有馬・上田ベスト8

③成績と評価

男子) 完敗に終わり、本当に参加させるべきだったのかと考えざるを得ません。選考の段階で私情は入らなかったか、過去は過去として現状分析が正しかったのかと反省しています。

女子) 今の女子の置かれている環境からすると、アクシデントのあった各人が力を発揮したと評価できます。特に相当なプレッシャーの中で優勝を果たした上田選手は、ろうあ卓球界だけでなくろうあスポーツ界に希望と自信を与えたと思います。

④チーム体制と各コーチの役割

今回は、チームとして金メダルを1個獲ることが目標でした。そのために一番可能性のある上田選手に専属として内山コーチを指名できて良かったです。

また、今回は男女の区別をせずに監督1名、コーチ2名として情報を共有できたことで、役割が明確になり各人が行動しやすかったです。

⑤競技スケジュール

7月27日～29日 男女団体戦

7月30日 混合ダブルス戦

7月31日 男女ダブルス戦

8月1日～2日 男女シングルス戦

⑥大会の競技運営などの報告

(1) TD ミーティング

- ・言葉と手話の統一性がなく日本を始め各国が困っていました。
- ・ビジョンボックスがなく、情報が入り乱れました。

(2) ラケットコントロール・ドーピング

- ・実施されませんでした。

⑦競技規則の適用

厳格な国際ルールに基づいて運営されていませんでした。

(タイムアウトの時間、ハブニング時の対応、クレームの対応)

⑧大会参加までの準備

【対選手】

- ・代表が決まり3ヶ月に2回のペースでの代表合宿
- ・健聴者の試合に参加（東京選手権大会：全日本選手権大会に次ぐ大会）
- ・合宿先を各地のろう学校で実施することで選手のモチベーションを向上
- ・社会人との練習（アドバイス）

【対マスコミ】

- ・上田選手を取材している関西テレビの活用
- ・壮行会の開催
- ・卓球専門誌および雑誌へのアプローチ
- ・大会期間中のメディアの同行（関西テレビ・日立広報部）

【対資金】

- ・日本卓球協会からの補助金 200 万
- ・カンパ
- ・卓球メーカー・ジュイックが応援クリアファイルを作成、一部を協会へ寄附

【その他】

- ・練習場の確保（協和発酵キリン練習場、ろう学校体育館）

⑨反省とまとめ

昨年の世界ろう者卓球選手権大会で最高の成績を収めたことにより、特に女子は各国から厳しいマークを受け追われる立場での大会でした。その中で上田選手は、4年前忘れてきた金メダルを取りに行き、見事獲得したことは賞賛できます。上田選手だけの力ではなくそれをサポートしてくれた方々が獲った金メダルだと思います。男子については、厳しい戦いが予想されてはいましたが、それ以上の現実を目の当たりにしました。本当に男子の参加は正しかったのかを改めて分析すると、今回は参加しないか、2名だけの参加で良かったと反省しています。このことについては協会内でも冷静に受け止め、責任の追及も必要だと思います。私は、5年間指導をさせていただきいろいろな勉強ができました。今後の自分の人生に生かせる内容ばかりです。

呼吸している人間は健聴者も障害者も皆同じだと思います。これからは上田選手、佐藤選手のように高校・大学で強くなる環境を与えることが大切だと感じています。男女ともにこれからは低迷期に入りますが、そこから早く強い選手を育てて世界で勝つように祈っています。

私は、これだろうあ卓球の指導の現場からは離れますが、皆で力を合わせて強い日本を作り上げてくれることを希望します。長い間お世話になりました。

コーチ 内山 敏彦

①団体内の担当とその内容

今回、私は卓球競技の女子コーチとしてブルガリア共和国で開催された夏季デフリンピックに参加しました。

各選手が最高のコンディションで、持てる力を最大限に発揮して戦えるよう調整することと、ゲームの流れを分析、適切な

アドバイスからひとつでも多くゲームに勝ち、選手とともに上位を目指すことが私の担当でした。

慣れない外国での生活からくる食欲減退、体調のリズムの狂い、アクシデント等も予想されることから、監督、コーチ、手話通訳、本部のメディカルスタッフの方々が一体となって活動が行えるための良いコンディションを確保できたと思っています。

選手の技術面においては、日本での活動と同様に練習時間の確保、過去の映像記録から対戦相手を想定した練習など、良い練習法ができたと思っています。

特に女子シングルの金メダル候補の一人である上田萌選手に必ず当たるであろう中国、ロシア、ウクライナの有力選手の長所、短所を知ってもらう目的で、試合内容を撮影したビデオカメラの映像を繰り返し確認したことも、金メダル獲得に繋がれたと思っています。

②反省・まとめなど

(1) 反省

1. 選手強化のための合宿は何回か実施しましたが、デフリンピック出場選手同士が集まった練習であるため、真に選手のレベルアップには繋がらず、実りある合宿とはならないのではないかと思います。

2. 自分の反省ではありますが、定期的に選手の活動拠点を訪問し、日々の練習を把握していなかったために、上田選手を除いては適切な技術指導が不足してしまい、全体のレベルアップに貢献できませんでした。

(2) まとめ

女子は上田、佐藤、有馬選手が出場した団体戦が3位、上田、佐藤選手組のダブルスが2位、上田選手が女子シングルスで金メダルと、最高の形で2013デフリンピックを終了することができました。

上田選手は素質のある素晴らしい選手ですが、企業に入社し、企業の卓球チームで一般の選手と日々練習を積み重ねる場があり、強化をすることができたのも大きいです。他の選手の強化は何回か合宿を行ったものの、日頃から一般に混じっての練習ができずにレベルアップが叶いませんでした。今後現状の成績を継続するには、

1. 一般選手のいる企業に就職し、日々一般の選手と練習する。
2. 遠征・合宿費用は掛かるが、定期的に一般チームへの遠征を計画し、切磋琢磨する。

等の対策が必要かと思っています。

本部スタッフ、競技スタッフの皆様、お世話になりました。

ありがとうございました。

コーチ 須藤 聡美

①団体内の担当とその内容

コーチとして参加しました。大会前の強化合宿では、時間の管理や監督が不在時の練習計画の作成などを担当しました。

本大会では、ベンチコーチ、練習トレーナー、本部への連絡や、氷の手配等を行いました。

②反省・まとめなど

日本チームで一つの金メダルを！を目標に掲げ、上田選手が女子シングルスで金メダルを獲得することができました。

世界ろう者卓球選手権大会で3冠を獲得し、各国からマー

クされた中での試合でしたが、プレッシャーを跳ね除けメダルを掴み取ることができて、とても嬉しく思います。

女子団体では銅メダル、女子ダブルスでは銀メダルを獲得しました。日を重ねるごとに男女キャプテンを中心とし、纏まりが増していき、全ての流れが最終日の女子シングルの金メダルに繋がっていったと感じます。

冷房がない会場でしたので、選手が体調を崩さないよう補食や水分を切らさないようにスタッフと共に準備しました。

デフリンピック前の強化合宿で「どろくさく、がむしゃらに」というスローガンを選手達で決めました。

日の丸を背負う重責を、一本一本に込めて諦めない気迫で臨めた試合もあれば、雰囲気にもまれた試合もありました。ベンチコーチとして共に戦う中で、その状況を打破させることができない自分の力の無さを不甲斐なく思う場面もありました。

今大会は TD 会議の時間や競技スケジュールも頻繁に変更がありました。審判長への交渉は本部の方や周りの協力で何とか乗り切れましたが、今後を考えると英語や国際手話のできるスタッフがいることも大切だと思います。

男子はメダル0に終わりました。男女ともに世界のレベルは大変高いです。今の実力を真摯に受けとめ、今後に活かしていかなければなりません。上位者は簡単なミスは少ないし、甘いボールを見逃してくれません。より高い安定性、攻撃力、サーブ力など鍛え直さないとっと差がつく恐れがあります。

各国は若手も多く出場していました。日本も4年後、8年後を見据えた強化が急務であり、スタッフ全員も同じ方向を向かないと世界で戦いメダルを狙うにはとても厳しいと感じています。

前大会では金メダル0で終えましたが、今回は女子シングルスで金メダルを獲得でき、センターボールに上がる日の丸と君が代にとても感動し、スタッフとして携われたことに感謝しています。

しかし、既に次の大会へ向けスタートを切っています。男女ともに強化が必要です。メディアも活用し、もっとデフリンピックを周りの方に知っていただく努力も継続していかなければなりません。

本大会では、本部の方やたくさんの方からご協力とご声援をいただきました。また、日本でも大会準備期間から多くの方のご協力をいただいた結果、メダルを獲得できました。心から御礼申し上げます。

前回大会から4年間、強化合宿や会議等を重ねてきました。あっという間に過ぎ去った時間でした。

至らない点を、周りの方がサポートしてくださいました。貴重な経験をさせていただいたこと大変感謝しております。

今後はこの経験を少しでも活かせるようにもっと勉強を重ねていきたいと思っています。

手話通訳 井出 敬子

①団体内の担当とその内容

【出発前の準備】

○事務連絡（窓口）

対ツアー会社、全日本ろうあ連盟、上部団体

○メディア対応

○卓球チームの荷物の準備、発送

【派遣期間中の手話通訳及び事務局】

○手話通訳

- ・チーム内（練習、試合、ミーティング）
- ・医師・トレーナー
- ・メディア取材

○本部への連絡

- ・試合結果報告
- ・タクシー手配
- ・その他

○日本ろうあ者卓球協会事務局（東京）への連絡

- ・試合速報
- ・データ送付

○写真撮影、データ管理

○メディア対応

- ・現地取材
- ・データ送付

○TD 会議参加

○買い出し

○会計

○応援者対応

○その他

【大会終了後の事務処理】

○事務連絡

○メディア対応

○挨拶、報告

②反省・まとめなど

職務は「手話通訳」となっていますが、スタッフ体制が当初計画の8人から4人に減ったため、総務の仕事も兼ねることになりました。私としては「手話通訳かスタッフか」と立場を明瞭化することに対し思い煩うことがなかったので、逆に動きやすかったともいえます。その中で気づいたことを記します

○「遅刻は10分まで。来なかったら不戦敗」、国際卓球ルールというロジックで審判長に話をしましたが、反感を持たれるということが1度ならずありました。また、「アドバイスをした」と手話通訳者にレッドカードが出されました。組織委員会あるいはTDは、競技審判に対してなんらかの啓発、教育があって然るべきだと思います。デフリンピックの信用に関わるのではないのでしょうか。

○ビジョンボックスがなく、組み合わせ、会議等の情報はすべて掲示という方法がとられました。その確認作業に手間取り、急ぎ発信した情報間違いを東京事務局が訂正してくれたり（現地のHPのアップの方が早い）アドバイスを受けたという後方支援がなければ、広報の仕事はできませんでした。

○NHK、関西テレビ、日本テレビ、舞鶴新聞、卓球王国、卓球レポート、ニッタクニュース等、大会前から多くのメディアに取り上げていただきました。しかし、その対応は十分とは言えず、特に現地において「表彰式の写真をすぐ送ってほしい」といった急ぎのものは、間に合わせることはできませんでした。また、写真が届かなかったこともあったようです。せっかくの機会なのに惜しいことをしたと思います。

○インターネット環境が十分ではないと事前に知っていたのですが、あまり問題とは思っていませんでした。しかし、例えばWi-Fiルーターがあれば、日本で応援して下さっている多くの方々に一刻も早い情報発信ができたはずですし、余裕を持っ

てPC作業をすることができたのではないかと考えます。
○怪我をした選手に、高橋本部トレーナーが2日間ついて下さいました。とてもありがたく心強かったです。今回は日本選手団12競技中4競技8団体がトレーナーを帯同されていたと聞きました。選手の身体に触れる、テーピングができるトレーナーの存在は必須だと感じました。

これらの振り返りを次の体制に活かしていきたいと思います。しかし、強化については個人の努力には限界があります。意識、教育、そして環境作りにお金をかけられるよう整備する、働きかけることが急務です。

最後に、このような貴重な機会をいただいたことに深く感謝いたします。また、卓球日本代表選手、及び日本ろうあ者卓球協会強化本部の活動に対し、多大なるご支援、ご協力して下さった方々に心よりお礼申し上げます。ありがとうございました。

選手 上田 萌

①成績に対する自己評価

団体戦は惜しくも3位でしたが、全員自分の力は全て出し切れたと思います。

ダブルスとミックスダブルスにおいてはもっと練習量、パートナーとのコミュニケーションが必要だと感じました。

シングルスにおいては金メダルという目標を達成することができたので良かったです。

②反省・まとめなど

団体戦においては惜しくもウクライナに敗れてしまいましたが、3位決定戦では全員が一丸となって戦い、なんとか銅メダルを獲得することができて良かったです。

女子ダブルスにおいては決勝でパートナーの佐藤選手が足を怪我するというアクシデントがありましたが、それでも最後まで諦めないでプレーしました。金メダルを獲得することはできませんでしたが、私と佐藤選手の絆は他の誰よりも強いということを証明することができたゲームだったと思います。

シングルスにおいては4年前のデフリンピックであと一本の差で負けて悔しい思いをしました。

その後の4年間、最後の一本の重みを大学で叩き込まれ、卒業後日立化成に入ってからチームメイトや色々な人に練習相手をしてもらったり、教えてもらったりしました。

生活面においてもトレーニングや食事制限をしたりして忍耐力を身につけ、万全な状態で臨みました。それが今回の金メダルという結果につながったと思います。

何より私が3つのメダルを獲得することができたのは支えて下さった家族、監督、スタッフ、仲間達、会社のバックアップがあったからです。本当にありがとうございました。

選手 佐藤 理穂

①成績に対する自己評価

私にとって2回目のデフリンピックでした。2013年世界ろうあ者卓球選手権大会で金メダルを獲得し、今回は日本の私達が追い詰められる立場でしたが、それでも私達は「挑戦」の気持ちで戦いました。その結果、団体銅メダル、ミックスダブルスベスト8、ダブルス銀メダル、シングルスベスト16でした。

まず団体戦では、準決勝で私が2点も落としてしまいましたが、3位決定戦では笑顔で銅メダルを獲得することができました。ミックスダブルスは4年前に負けた中国ペアと当たり、今回こそと思いましたが、パートナーと共に焦ってしまい、もう少し落ち着いてプレーをすれば良かったです。でも一本一本力を合わせられたので良かったと思います。ダブルスは忘れられない試合になりました。決勝で捻挫し10分タイムの時に『もうダメだ』と諦めた自分がいました。でも上田選手との小さい頃からの夢だった「金メダル獲得」という文字がすぐ頭に浮かび、最後までやり遂げました。試合終了後は本当に涙が止まらないぐらい悔しかったけど、上田選手との絆は誰よりも負けないほど強いということをアピールできたと思います。シングルスは怪我のため棄権をするつもりでしたが、それでは後悔する、動けなくてもいいからフェンスから入ったコートにもう一度立ちたいと思い、試合に出ました。結局ベスト16で終わりましたが悔いはありません。

②反省・まとめなど

今回は4年前と違って、レベルも上がっていて驚きました。今のままでは日本も危ないと感じました。私は4月から社会人になり、練習量も少なくなり、できることはやりましたが、それでもまだ通用できないと思いました。

これから私はどうなるかわかりませんが、若い人達に経験したことを伝え、自分にできることをやっていきたいと思います。

ここまで支えてくれた家族、仲間、目には見えないけれど応援して下さい周りの方々、そして現場で色々して下さい本部の方やトレーナーの方、本当に心から感謝します。ありがとうございました。

選手(女子主将) 有馬 千寿子

①成績に対する自己評価

団体では目標にしていた優勝を逃がしてしまい、3位という結果になりました。ウクライナ戦の相手は自分の苦手なタイプでもあり、レシーブの凡ミスが目立ってしまい負けてしまいました。ウクライナ戦以外は全て勝って良かったと思います。

女子ダブルスは予選リーグ戦で6組中3位になり、決勝トーナメント進出ができませんでした。ウクライナ戦と韓国戦ではコースが甘かったり、ボールが浮いてしまい強打で打たれたり、パートナーの足を引っ張ってしまい申し訳ないと思いました。

シングルスは予選リーグ戦で6人中2位、決勝トーナメント1回戦で前々回大会の世界チャンピオンの中国選手と対戦し、ストレートで負けてしまいました。ベスト16に終わったものの、前々回の大会では予選落ちという結果だったため、今大会は決勝トーナメント進出を目標にしていたので、進出を果たせたのが何より良かったと思います。

②反省・まとめなど

デフリンピックには2回目の出場、今回は女子主将という役割を任せられ、最後まで気が抜けませんでした。女子は前年東京で行われた世界ろうあ者卓球選手権大会で日本が優勝し、世界中が日本に立ち向かうという姿勢が見られ、私達日本も負けられないという気持ちで世界に挑みました。団体では皆で目標にしていた金メダルは取れませんでした、私の中では最高のチームワークだったと思います。これまではアジアの選手が目立っていましたが、今大会を見てみると、ヨーロッパの選手も

力をつけてきており、アジアの選手だけではなく、ヨーロッパの選手にも目を向けて、注意しなければならないと感じました。

選手 川崎 瑞恵

①成績に対する自己評価

初めてデフリンピックに出場しました。最初はすごく緊張してしまいましたが、皆様が支えてくれたおかげで、いつも通りのプレーで試合に臨めたので本当に良かったです。

シングルスはベスト8以上に行くことが目標でしたが、ベスト16と残念な結果になりました。しかし外国の選手と試合をし、色々経験できたので、これからももっと磨きレベルアップできるように頑張りたいです。

団体は3位になり、皆の頑張っている姿を見て、私も全力でサポートができたと思っています。女子はお互い支え合うことができ、チームワークが良かったと感じました。

ミックス、女子ダブルスは予選で負けてしまいましたが、お互い話し合いながら戦うことができたので良いパートナーだったと思います。

②反省・まとめなど

約2週間ブルガリアにいましたが、初めての海外だったので、初めは食べ物や環境に慣れませんでした。食べ物は口に合わず、あまり食べない日々が続く、周りの皆様に迷惑をかけてばかりでした。しかし食べないと試合で体力がなくなると分かり、自分の自己管理がしっかりできていなかったことに気づきました。皆様に支えてもらったおかげで少しずつ慣れ、食べられるようになりました。色々経験して来たことを頭に入れ、支えてもらった分、これからは自分で自己管理ができるようにしっかりとします。

チームの皆、日本から応援、支えてくれた方々のおかげで頑張ることができました。本当にありがとうございました。

選手 望月 翔太

①成績に対する自己評価

デフリンピックの成績

男子団体戦→9位

男子ダブルス→ベスト16

混合ダブルス→予選リーグ敗退

男子シングルス→予選リーグ敗退

自分としては悔しさの残る結果でした。その結果を受け止めて、次に向けて頑張りたいです。

②反省・まとめなど

今回が今までで最もひどい成績なので、大変悔しさが残る大会だったと感じています。今まで支えてくださった先輩方やスタッフ達に申し訳ない気持ちでいっぱいです。

負けは負けなので、その結果をしっかりと受け止め、それを忘れずに次につなげていきたいです。

すべてのプレーにおいて未熟だと感じたので、ひとつひとつの課題をしっかり改善していきたいと思っています。

今後の方向性については、やはり何らかの改革が必要です。漠然としていますが、このままでは厳しいと思うので、何かを変えなければいけません。私は現在26歳で、まだまだ学ぶこと、身に付けなければいけないことはたくさんあるので、次に

向けてしっかりと練習、トレーニングを続けていきます。

また、現在ろう学校で教員として子ども達の卓球部の顧問を担当しているので、子ども達にも夢や目標に向けて頑張ること、努力を続けることを伝えていきたいです。そして、その子ども達がいつか世界で活躍することができたら、すごく嬉しいと思います。

そういう意味では、卓球というスポーツと向き合うことで、周りに感謝する気持ちを忘れずに、まだまだ未熟な自分をもっと成長させ、子ども達にもいろんなことを教えていきたいと考えています。

最後に、今大会においてたくさんのご支援、ご協力をいただき、ありがとうございました。皆様の支えに大変感謝します。

選手(男子主将) 有馬 歓生

①成績に対する自己評価

団体戦において、予選リーグ戦は中国及び香港に敗退し、3位となったため、決勝トーナメントに進出できませんでした。特に香港との対戦結果は2-3と、どちらが勝ってもおかしくない状態でした。香港に対し1点を奪うことしかできず、中国に勝てなかったため、チームの勝利に貢献できなかったのが心残りです。しかし、9-12位決定戦の前夜に男子チームミーティングを数時間行い、チームワークをより固めたので、9-12位決定戦は全て勝利し、9位になることができました。それが非常に良かったと思います。

混合ダブルスにおいては上田選手と組み、結果的にベスト8になることができましたが、上田選手とは地域が違うため、練習時間がなかなか取れず、試合中は連携プレーがうまくできませんでした。もっと練習すればメダル獲得も狙えると感じました。

シングルスにおいて、予選リーグ戦は5名中3位のため決勝トーナメントに進出できませんでした。その中でリトアニア選手、中国選手と対戦し負けましたが、彼らは今大会男子ダブルス優勝、準優勝の選手だったため、正直精神的に参ってしまっていた部分もありました。しかし実際に中国の選手と接戦した時、勝てるかもしれないと感じ、あと一歩だと思いました。

②反省・まとめなど

主将を任命されたことに非常に感謝しています。任命された時は驚きましたが、男子の中で自分が年上のため、男子チームを引っ張る役目を持たなければなりません。実際は難しかったのですが、貴重な経験でした。また、団体戦敗退した翌日から毎日男子チームミーティングを行ったのが一番良かったと思いました。なぜなら、今大会全体を通じて日本の将来も含め話し合ったことを、後輩達へ受け継ぐことができるためです。将来、後輩達にメダルを獲得してもらいたいの、色々教えていきたいと思っています。

選手 亀澤 史憲

①成績に対する自己評価

自分の成績に対しては実力相応の結果だと感じています。ただ目標であるメダルに届かなかったのは悔しい結果となりました。求められているのはメダルであり、選手一人ひとりが実力を発揮することは最低限のことであると思います。自分は日本代表として残念な結果を残してしまったのではないかと考えま

す。もっと上を目指し、結果を残すことが国の代表としての務めだと思いますので今後は更なる向上を目指すべきだと考えます。個人的には芳しくなかったものの、日本チームとして「金1つ」という目標は達成することができたので、大変嬉しく思います。

②反省・まとめなど

今回のデフリンピック出場は自分にとって初の国際大会であり、出場することにより、掴めたものは大きかったです。日本を背負って戦うことの大切さ、日本代表チームとして長期間、選手、スタッフと共に過ごしていく中で感謝の気持ち、今が当たり前でないことを感じました。それらを含めた経験を糧に今後のアジア大会や世界大会そして次回デフリンピックに向け、精進していかなければならないと感じました。国内大会で競い合っている場合ではないと思います。もっと世界を見据えた練習や生活を心がけていかなければ、到底メダルを取ることは困難だと感じました。そういったことを自分だけでなく、同年代の人たちや、下の年代の人たちに伝えていくことが、デフリンピックを経験した私の役割だと自覚しているつもりです。さらに男子チームの中心となって今後は引っ張っていくべきだと感じているので、今回を通じて多くのことを学ぶことができたのは良かったと思います。そのための準備というのは今からでもスタッフのみならず、選手も整えていき、日本チームを強化させていく必要があるのではないかと、今後の日本ろう者卓球界の発展の重要性を感じ取ることができた大会でした。

テニス競技チーム

監督 稲辺 忠奎

①選手選考について

2009年から2012年の3年間における全国体育大会及び全国ろうあテニス選手権大会（ランキング大会）での成績、また「ドレセ・マエレ杯」「第7回アジア太平洋ろう者競技大会」での競技ポイントを考慮し、競技内外の社会的マナー評価も合わせて選考しました。

上位を狙える選手として男子4名、女子2名を日本代表として推薦しましたが、ソフィアデフリンピック派遣委員会の協議により、男子2名、女子1名の派遣となりました。

②成績一覧

《男子シングル》

★松下哲也

1回戦 BYE
2回戦 0-6 1-6
PANYUSHKIN Egor（ロシア）

★芦野正樹

1回戦 BYE
2回戦 2-6 3-6
FLETCHER Lewis（イギリス）第5シード

《男子ダブルス》

★芦野正樹・松下哲也ペア

1回戦 BYE
2回戦 5-7 6-4 3-6
PANYUSHKIN・LAPIKO（ロシア）

《女子シングル》

豊田恵子

1回戦 6-0 6-1
DEMIR Gizem（トルコ）
2回戦 0-6 1-6
FLECKNSTEIN Verrena（ドイツ）第5シード

《ミックスダブルス》

★松下哲也・豊田恵子ペア

1回戦 2-6 3-6
SEKHAR・JAFREEN（インド）

③成績と評価

(1) 松下哲也 選手

《男子シングル》

1回戦 BYE
2回戦 0-6 1-6
PANYUSHKIN Egor（ロシア）

《男子ダブルス》

ペア：芦野正樹選手

1回戦 BYE
2回戦 5-7 6-4 3-6
PANYUSHKIN・LAPIKO（ロシア）

《ミックスダブルス》

ペア：豊田恵子選手

1回戦 2-6 3-6
SEKHAR・JAFREEN（インド）

ミックスダブルス以外は実力を出せていました。シングルスでは、ロシアの若手選手と戦うことになりました。この選手は、松下選手が「ドレセ・マエレ杯」で敗れたドイツの選手を倒し、前大会では、梶下選手が決勝戦で敗れたフランスの選手ともファイナルセットまで持ち込むほどの実力の持ち主でした。

その他の選手であれば勝つ可能性はあったと思います。事実アジア大会の準決勝でファイナルセットまで持ち込む死闘を繰り広げたオーストラリアの選手は、今回3位でした。その彼とは実力では五分五分です。ドロー運としては残念でしたが実力は出せていました。

ダブルスではロシアのペアとぶつかり、厳しい戦いを予想していましたが、ファイナルセットまで持ち込む素晴らしい戦いを見せてくれました。松下選手のサーブから芦野選手のボーチという良い形を作り、互角以上の勝負をしました。勝敗を分けた原因はファイナルセットに入る時です。ロシアチームが守備的な作戦とポジションで勝負をかけてきました。そこで攻撃的な作戦を作りあげられなかったことです。これは大きな課題でもあります。相手との勝負の駆け引きがとても下手だということです。技術的には上がっていますが、メンタル的に変わらないので、この様なギリギリの勝負で海外のハングリー精神に対抗できる頭脳を持ってほしいです。

ミックスダブルスではとても残念な結果に終わりました。アジア大会で見た気迫も感じられなければ、動きも硬く得意のサーブを安定して入れることができませんでした。ミックスダブルスの日、TDの手違いにより朝の練習が急遽できなくなり、十分なウォーミングアップができないまま試合に入ってしまったことも原因としてあるとは思いますが、その中でも気迫を込めたプレーをすることで何とかカバーしてほしかったです。

(2) 芦野正樹 選手

《男子シングル》

1回戦 BYE

2 回戦 2-6 3-6

FLETCHER Lewis (イギリス) 第5 シード

《男子ダブルス》

ペア：松下哲也 選手

1 回戦 BYE

2 回戦 5-7 6-4 3-6

PANYUSHKIN・LAPIKO (ロシア)

どの試合においても芦野選手らしさは出ていました。

シングルスにおいては、スピンの効いたストロークを中心に今大会第5シード選手のネットプレイヤーとしっかりと戦うことができました。しかし、相手のサーブになるとしっかりと返球することができずに苦しみました。リターンを返す技術がもう少し上がれば、もっと良い戦いができるようになると思います。欲を言えばキリがないですが、良いラリーで来たアタックチャンスのボールでのエラー。これは非常にもったいなく思うのですが、現時点での芦野選手はそのレベルにまでは達していないと感じます。

この辺りの確率も上がってくればもっと良い評価を与えることができます。メンタル部分では、ダブルスのファイナルでの審判ジャッジは確かに正しいとは言いきれませんが、日本に不利になるジャッジをされた時、そのジャッジに対していくつかのポイントを引きずったままプレーし、逆転の機会を失うことになってしまいました。気持ちは分かりますが、そこで試合を投げることと、諦めずに集中して勝利に向かって頑張ることとは結果として大きな差となります。その部分は評価しかねます。

(3) 豊田恵子 選手

《女子シングルス》

1 回戦 6-0 6-1

DEMIR Gizem (トルコ)

2 回戦 0-6 1-6

FLECKNSTEIN Verrena (ドイツ) 第4 シード

《ミックスダブルス》

ペア：松下哲也 選手

1 回戦 2-6 3-6

SEKHAR・JAFREEN (インド)

練習と同じプレーができていました。

ミックスダブルスでは、大会までに相手の速いボールを返す「ブロックボレー」の練習を多くしており、その成果ははっきり出ていました。シングルスでの試合でもラリーをしっかりと行っていたので、そこは評価に値します。しかしミックスダブルスでは松下選手の調子が悪かったため、その分気持ちを盛り上げて良い雰囲気にする必要があったのですが、自分のプレーをこなすだけに留まってしまいました。

シングルスでもセカンドセットの序盤で相手のミスから流れを持っていけるチャンスがあったにも関わらず、次のポイントをダブルフォルトという自滅から始めてしまい、流れを掴み損ねました。この様に技術としての評価はできますが、勝つために何をどう頑張るのかというハングリーさとしての意味ではまだまだ足りないと思います。

(4) 選手の全体的評価

技術は評価しますが、気持ちは評価できません。全体的に言えることは、技術としての日本は世界に近づいており、梶下選手や阿部選手（※2名とも台北デフリンピックメダリスト）のような突発的なトップではなく、日本の層として世界の選手と戦う準備はできています。しかし、メンタルの話になると変わってきます。日本を背負って戦うことのプレッシャーや、相

手との勝利へのハングリー精神で負け、審判やコートといった変えることのできないことまで気にしてしまい、勝つために気持ちを盛り上げていくという部分では世界と大きな差があることを実感しました。

技術だけでなくメンタルを鍛えることで世界との差をもっと縮めなければなりません。

④ チーム体制と各コーチの役割

監督…総括

コーチ…選手達への指導他

マネージャー…協会速報、チームサポート

※今回はトレーナー同行せず

⑤ 大会の競技運営などの報告

7月25日にテニス会場クラブハウスで16時から開始。尾形マネージャーと2人で参加しました。18ヶ国と地域から集まった選手達→男子選手43名、女子選手33名のドローを作成。国際手話を基本として協議が始まりますが、ほとんどが英語で進行され、状況を把握するのが難しかったです。パソコンでドローの選手の入れ込みを試みましたがなかなかうまくいかず、結局人の手で作成しました。協議は長引き、5時間もの話し合いとなりました。

作成時に現地の健聴者のディレクターとろう者のディレクターが、話をしながらドローの作成方法を決めて行くので、我々には分からないままドローを作成されてしまった部分は次のトルコ大会でぜひ改善してほしいです。例えば、ソフトを使ってドローを作成するにしても、ドローの作成にあたってのルールをあらかじめディレクター間ですり合わせておく、ドロー作成のルールとして我々にあらかじめ提出しておく、もしくは国際手話の通訳を間に入れてディレクター間の話の内容を我々も理解できるようにするなど、分かりやすい会議進行をしてほしいです。根本を考えると、今回の健聴者側のトーナメントディレクターがろう者のことをどこまで理解し配慮していたかに疑問を持ちました。

⑥ 競技規則の適用（問題点）

競技規則はITF（国際テニス連盟）のルールに則って行われていたので、規則的に何の問題もありませんでした。ただ、いつも思うのはレットの時の伝え方です。サーブからネットインした時、隣からボールが入った時などはプレーをやり直すのですが、その時に選手がレットを認識するのがとても遅くなってしまいます。線審が付いている時には線審がレットの手話コールをしますが、審判が1人の場合、審判はわざわざ審判台から降りてコートの中に入って行き選手にレットを伝えます。素早くレットを知らせることができると良いと思います。

⑦ 大会参加までの準備状況

日本ではアンツーカーテニスコートが減少しつつありますが、幸い大阪府高石市にある浜寺公園にて、最終調整合宿を実施することができました。しかし、大会使用球の連絡が遅れた上に国内で販売されていないと分かり、大至急インターネットで検索して海外から取り寄せるなど慌ただしかったです。前大会時と比べて余裕があまりなく、大変でした。

⑧ 総括と今後の課題について

今回のデフリンピックでは、ブルガリア入国後に腹痛を訴えるなど体調を崩した選手が出る中で、テニス競技選手達も心配

されましたが何とか無事に試合に挑むことが出来ました。送迎バスについても予定通りの運行がなされないなどのトラブルがあった割には、スタッフの努力でなんとか切り抜け、選手に負担を与えることなく試合会場に向かうことができ、運営面ではまずまずだったと思います。

前回のデフリンピックから4年、昨年の第7回アジア太平洋ろう者競技大会でメダルを取った選手など3人を中心に、来年開催を控えた「ドレセ・マエレ杯」も視野に入れて練習を重ね、トルコや韓国などにも遠征するなど技術を磨いてきました。健聴のコーチから指導を受け、今大会にも同行してもらいました。コーチも初めは手話通訳をつけて指導していましたが、今ではろう者テニス指導も3年目となり、通訳を介さず指導をしています。今回の試合を想定してのクレーコートを使った練習、また試合球と同様のボールを海外から取り寄せて日本とは違うボールに慣れる練習をするなどの準備を重ねてきました。そんな中で今回のデフリンピックではある程度の成績を得られるのではないかと期待もありましたが、女子シングルスを除いて初戦敗退、世界の壁は厚く高いものでした。外国の選手は身体も大きく、技術レベルも高いことを改めて感じています。身長の高い選手は高い位置からのショットや長い腕を効果的に使えるなど有利であることに加え、今回急成長の目立ったロシア選手はアメリカのアカデミーで学ぶなどして力をつけていました。日本選手も今後は世界の国々との交流を増やして技術を磨いていくことが必要だと痛感しました。

さらにデフリンピックを通して、世界のデフテニス選手の低年齢化とレベルアップが急速に進んでいることも感じました。今後は日本ろう者テニス協会として学童期からテニスを学べる場を設けるなど幼少期からの育成が必要なのではないでしょうか。また、普通学校に通う難聴の子供達の中にもテニスに励む子供達がいると思われます。HPなどを通して、デフテニスについて情報を発信し、人材を集めて育てていくことによって世界で戦える選手を早い段階から育成していくことも検討する必要があるのではないかと感じた大会でした。

コーチ 内藤 公広

日本ろう者テニス協会のコーチをしています。

コート内では練習の実施、練習メニューの紹介、試合相手を探す業務を行っています。コート外では上達方法、メンタルや体の仕組みについて、ミーティングを行っています。

今回のデフリンピックではコーチとして選手のパフォーマンスを十分に発揮するために、相手選手の情報収集、練習メニューの作成、練習環境の準備を中心に担当し、それに付随した選手運搬の手配、試合期間における1日のスケジューリングを行いました。試合の結果自体は決して良いものではなく、残念な結果に終わってしまいましたが、選手の実力とトップ選手の実力とを比べると結果自体は大きく変わることはなかったと思います。しかし、大きな反省点があるとすると、大会初日（現地入り3日目）のミックスダブルスの試合で男子の松下選手の調子を上げることができなかった点にあります。

初日の練習でも調子が悪く、動きに俊敏性がなかったのも、2日目の練習でも動きの練習を入れて試合に臨んでいました。しかし、動きが回復することはなく、一番勝てる可能性が高かったミックスダブルスの試合を落とす結果となってしまいました。その後、シングルス、ダブルスと続き、負けはしましたが調子を上げていったことを踏まえると、いくつかの要因が上

げられます。

①時差ボケが十分に解消されていなかったこと

選手とのミーティングでも時差ボケにならないよう、行きのフライトではあまり寝ないように努力していました。2日前の練習時間も長めに取り、ゆっくりと体を慣らしながら瞬発力の必要な練習も行いました。しかし、ブルガリア時間に体を合わせられるまでには至らなかったのかもしれません。

②メンタル面のサポート

松下選手は4回目のデフリンピックでしたが、他2名は初のデフリンピック出場でした。松下選手自身、2人のお手本として、またバトンを渡す者として気持ちは十分に入っていたと思います。しかし、それが逆にプレッシャーとなり体が堅くなっていった可能性もあります。事実、試合が終わり諸外国の選手と練習試合を行うと、良いパフォーマンスを見せることもありましたし、強い選手に勝つこともありました。試合前にもう少し、試合の入り方について2人で話をし、過度なプレッシャーを外しておく必要があったのかもしれません。

松下選手には、最初からもっと良いパフォーマンスを試合で見せてほしかっただけに大きな反省点として残りました。その他の各選手は自分の持てる力は出していました。芦野選手は初出場でしたが、第5シードの選手に善戦し、豊田選手はスコアこそ開きましたが、第4シードの選手に対して素晴らしいプレーをしていました。

今後の課題点を上げるとすると、男子においては技術面で海外の速いサーブの返球が求められるので、リターンの向上が必要になります。芦野選手も相手のサービスゲームをブレイクすることができれば勝つ可能性もあります。女子においてはフットワークです。ラリーとしては互角ですが走らされた時のストロークの精度が悪いので先にミスを起こしてしまいます。この2点を特に技術面で向上させる必要があります。

メンタルの部分ではもっと世界に飛び込んでいく貪欲さが必要だと感じました。海外の選手と練習をするのも私が指示をしてもなかなか動きませんでしたし、海外の選手と積極的に話をして世界の仲間に入っていくという部分でとても消極的でした。この消極さが試合のプレーとしても出ていると感じます。

この2点の課題をクリアし、国際大会で良い結果を残せるようにまた努力して参ります。

スタッフ 尾形 滋子

今回は、スタッフ業務を担当させていただきました。備品の準備、食事や試合中のスポーツドリンクの調達、スケジュール、情報の把握、お金の管理、写真撮影、フェイスブックの更新、毎日の報告書の作成などあらゆる業務を行いました。実際に表に立ってチームを率いるのは監督・コーチの役割なので、監督・コーチが仕事をしやすいようにサポートすることが私の役目でした。

選手から一転して初めてのスタッフ業務なので、出発前までは慣れない面が多かったのですが、自分が選手の時に見ていたスタッフの動きが参考になり、協会の役員やデフリンピックの経験者からも色々アドバイスをいただいたおかげで、心構えができました。その心構えと、体調に留意してデフリンピックに臨みました。

ブルガリア入りして2、3日は長旅の疲れ、時差ボケ、ルーチンがまだ定着していないことから、要領よく進めることが困難でした。出発前から懸念していた試合日までの練習環境の整

備は、やはりスムーズではありませんでした。

ろうあ連盟から練習コートについての連絡が来た時はすでに他国の予約が埋まっており、また当日のコートまでの交通手段も、現地スタッフや本部の間で混乱していました。監督・コーチの交渉で結果的には事なきを得ましたが、選手は大きな舞台での試合を控え、不安や緊張感を抱えています。テニスの調子やメンタルが良い状態で試合に入るために、練習の環境、つまりベストの時間帯でのコート確保、交通手段の確保は非常に大切なことです。これにはろうあ連盟や本部の協力が不可欠だと思います。

チーム内での業務で、私自身が一番できなかったことは国際手話です。監督・コーチの代理でTD会議に出席しましたが、英語はおろか国際手話の読み取りもできず、お手上げ状態でした。これもコーチにSOSを出して来てもらい、事なきを得ました。出発前に国際手話の講習会に出ていましたが、会話ができるレベルにも及びませんでした。せめて会話ができればのレベルであれば、会議での話の把握、他国のメンバーとのつながりを作ることもできたかもしれません。しかし、TD会議は試合に出るにあたって重要な会議なので、会話レベルでは試合のための情報が十分に把握できるか心配です。全ての協会が通訳者の派遣ができるほどの財力があるとは限りません。本部の方でTD会議のための通訳者派遣の体制があれば良いと思いました。

チーム内でのコミュニケーションも重要ですが、難しさを痛感しました。ブルガリア入りして2、3日は余裕がなく、監督、コーチ、スタッフの間での報告がないまま物事が進んだりする場面もありましたが、お互い報告や相談をきちんとしようと話し合い、その都度修正していきました。

選手は選手での結束が必要です。できるだけ、選手の3人とは少しの距離を取るようにはしていましたが、その距離の取り加減が難しかったです。もしかしたら、スタッフのフォローが必要な場面がもっとあったかもしれません。

フェイスブックの更新や毎日の報告書の作成は、多くの人にデフリンピックを知ってもらい、またろうテニスに関心を持ってもらうという大切な役目があります。しかし、一日の終わりの深夜では頭が回らず、自分では納得のいく報告書を作れませんでした。昼間の待ち時間など、もっとうまく時間を活用すれば良かったと思います。

全ての試合が終了した後、残り1週間、日本選手団員としての過ごし方も重要な課題でした。試合がある時は、チーム全員が試合に向かって気持ちが一つになっているのですが、その試合がなくなると、各々の気持ちに温度差が生じてしまいます。

チームで話し合い、今後に向けた他国との練習やパイプ作り、試合観戦、他競技の応援等で過ごしました。試合に負けて終了ではなく、4年後を意識して行動しましたが、選手自身もすぐ気持ちを切り替えられないのも無理はなく、長く感じた1週間でした。

今回のテニスチームは、リーダーの松下選手が選手をまとめていたこともあり、チームワークが乱れることもなく、スタッフの仕事はしやすかったです。お互いが感謝の気持ちを持ち、良いチームだったと思います。

選手 松下 哲也

①成績に対する自己評価

・男子シングルス

第10シードで1回戦勝ち上がったロシア選手に敗退しまし

た。シードなので、相手の初戦を偵察することができ、作戦を練りました。試合をしてみると相手も修正をしてきて作戦が通用せず、慌てたまま試合が進みました。相手との力の差は歴然でしたが、最後まで諦めずに戦ったことが良かったと思います。

・男子ダブルス

第7シードで1回戦勝ち上がったロシアペアに敗退しました。午前にシングルスで当たった選手でした。ダブルスはパワー、フットワーク主体のシングルスと違い、作戦・技によって戦っていくので、気持ちを切り替えましたが、フルセットで敗退。勝ち切るための作戦が足らず、相手の勝利執念が我々より上回ったように感じました。ゲーム進行の中ですぐ相手の弱点を見つけ作戦を立てたおかげでフルセットまで持って行けたと思います。

・混合ダブルス

1回戦インドペアに敗退。大会の初戦だったため、プレッシャーにより足取りが重く、判断力が鈍くて本来のプレーでない状態が続き、修復できないまま試合が終わってしまいました。本来のプレーができていれば勝てたかどうかは分かりませんが、もっと良い試合ができたと思います。相手は堅実なプレーでショットを打っても何度も返され、チャンスボールをきっちり決めてきました。私達はそれができなかったのが敗因だと思います。

②反省・まとめ

日本代表を背負う重圧に耐えられず、プレーに大きく影響が出たと思います。原因は練習不足です。多くの厳しい練習を重ねると自然に自信が芽生え耐えられる力が付きます。昨年子供が生まれ、私生活の変化で練習時間を確保する調整がうまくできなかったため、そこが今後の課題です。世界情勢はロシア、インド、エクアドルなどの新興国で若い選手が増え、選手層が厚くなり、1つ勝ち進むことが以前より厳しい状況です。ジュニア世代から育成に力を入れる必要があります。世界レベルの速いボール、弾むボールを当然のごとく打ち返すのが必須です。それができないと作戦実行もできません。自分より格上の選手と練習をしてレベルアップする必要があります。格上の選手を確保して練習時間を費やすことが課題です。

選手 芦野 正樹

①成績に対する自己評価

・男子シングルス

1回戦byeからの2回戦が初戦となり、第5シードのイギリス選手とあたり2-6、3-6で敗退という結果になりました。

相手は長身のネットプレイヤーでボレーが得意な選手でした。ストロークのラリーになった時には互角以上に打ち合い、ポイントを取ることができましたが、サービス力の差がそのまま結果に出たと感じています。相手のサーブの回転、コントロールが良いのに対し、こちらはリターンが最後まで安定せず返球できなかったことが敗因です。もう少しリターンゲームを上手く展開することができれば勝機もあったと思いますが、現時点では精一杯のプレーでした。

・男子ダブルス

シングルス同様に1回戦byeからの2回戦となり、ロシアのNo.1ペアと試合しましたが、5-7、6-4、3-6で競り負けてしまいました。上手く相手の弱点を突いてポイントを取ることができていたと思いますが、ロシア選手の強力なサービスを攻略できず最後は押し切られてしまいました。あと少し

で勝つことができる試合だっただけに残念でしたが、少ないベア練習の中で呼吸を合わせることができ、実力は発揮できたと思います。

②反省・まとめ

今回対戦した相手はどうしようもないほどの差があったとは思いませんでしたが、ある程度自分の力は発揮できた上で負けたので、勝ちを引き寄せるだけの実力が現時点ではないことも感じました。

海外選手のパワー、スピードに対応するための練習を普段からできていたかと振り返ると、やはり足りなかったのではないかと思います。また国内のろう者レベルでは今のフィジカルでも通用しますが、上のレベルを目指していくには更なるフィジカルの上上の必要性も感じました。

選手 豊田 恵子

①成績に対する自己評価

シングルス1回戦は私にとってデフリンピックのデビュー戦且つチームの初戦だったのでとても緊張していました。しかしチームの皆が試合前に色々とお励ましてくれたので、リラックスして試合に入り、慎重な試合運びで突破することができました。2回戦はスピンとスライスで走られ、返すだけで精一杯でした。サーブも強弱を使い分け、こちらのテンポを崩されました。しかし2セット目の最初のゲームで相手のフォアの調子が悪くなったところをなんとかブレイクし、そこから流れを完全につかむため自身のサービスゲームでサーブを強く打とうと力んでしまい、何本かダブルフォールトしてしまいました。その間に相手は立ち直り、ゲームを取ることができないまま負けました。

混合ダブルス1回戦は10代の若いペアで、フットワークが良くボールスピードもありました。女性を中心に狙って男性がカバーに入ったところをオープンコートに決めるという作戦でいきましたが、こちらの動きが悪くミスが多発してしまいました。そして流れが悪くなり、立て直すことができないまま敗退しました。コートチェンジやセット終了の時に、トイレタイムやメディカルタイムを取る等で立て直すための努力をもっとするべきでした。

②反省・まとめ

どの試合も勝てるチャンスがあったのに、それをつかむことができませんでした。今後の課題は、ショットの威力を高めることはもちろん試合の流れを読めるようにすることと、自分が波に乗り且つ相手を波に乗せないための方法を考えて、確実に実行できるようにすることです。また、日本は若手育成にもっと力を入れるべきだと強く思いました。日本以外のほとんどの国は、派遣選手のうち必ず1人は素質のある10～20代の若手が入っているからです。未熟でも敢えて参加させることで、今後に向けての準備をさせているのだと思います。今大会で日本は私達の力不足で成果を残すことができませんでしたが、今後上位に食い込むためには、選手の人数枠を増やして最低1人は若手を加え、積極的にあらゆる国際大会に派遣するべきだと思います。

最後に、これまで支えてくださった監督、コーチ、スタッフ、そして日本から応援してくださった皆様へお礼を申し上げます。本当にありがとうございました。今大会で経験したことを今後様々な場面で活かしていきたいと思っています。

バレーボール競技男子チーム

監督 岩下 忠正

①選手選考について

2010年8月から19回の合宿を行い、台北デフリンピック経験者を中心に下記観点を重視し選考を行いました。

- ・世界各国と対戦できる高さ（身長等）を兼ね備えている選手
- ・日本特有の敏捷性、正確さを兼ね備えている選手
- ・世界各国と対戦できる戦術、戦法等を理解し対応できる選手
また選出後に急遽辞退者が1名発生し、メンバーの入れ替えを行いました。

②成績一覧

下記に第22回夏季デフリンピックでの成績を記載致します。

■予選リーグ

第1戦 対ウクライナ

0-3 (12-25、15-25、8-25)

第2戦 対トルコ

0-3 (20-25、18-25、18-25)

第3戦 対イタリア

0-3 (19-25、19-25、16-25)

第4戦 対イラン

0-3 (12-25、20-25、17-25)

予選リーグ4戦4敗となり、予選リーグ敗退となりました。
(9位タイ)

③成績と評価

全敗となり、予選リーグでの敗退となってしまいました。

上記結果を踏まえて日本チームにおける評価を下記に記します。

- ・各国の急速な大型化、技術向上に対応できていない。

今まで世界大会においてベスト8クラスにいたチームの中で、急速な大型化及び技術の向上を遂げているチームがありました。昨年行われた世界選手権時から約1年の間に多くの選手が入れ替わり、なおかつ技術的にも非常に優れた選手でしたので、選手選考の段階からまだまだ発掘しきれていない選手の深堀等を行った結果と思われます。これに対し日本においては、デフリンピック出場の条件を満たしているにもかかわらず、選考から漏れている、または選手自体がデフリンピックの存在すら把握していない可能性があります。

- ・体調管理について

出国直前での目の異常ならびに出国直後の発熱、また到着後も発熱、腹痛を訴える選手が多数いました。体調面が不安定な状況から安定的な状況になるまで、約1週間程度を要し、ブルガリア到着後の調整や試合に影響が出てしまいました。昨年の世界選手権での経験上、腹痛が発生することは大方予想しており、対策等は講じていましたが、発熱の原因については特につかめないままでした。また上記状況からメンタル面についてもあまり良い状態ではなかったと推測します。

- ・諸外国への対策

ベスト8クラスに入るチームは大型の選手が多く、技術力も高いです。特に高さ、パワーという面については急速に力をつけており、より健聴者のシニア代表のバレーボールに近づきつつあると感じます。コンビネーションについては、アジア諸国のチームには感じられましたが、アウトサイドヒッターとミドルブロッカー双方に、高さとパワーで押してくる選手が増えて

きていたと感じました。身体的な部分でも対等に渡り合える人材、さらには大型選手にも怯まず対応できる自信と技術力の向上が必要だと考えます。

④チーム（コーチ）体制と各コーチの役割

当初はゼネラルマネージャー（ろう）、監督（健聴）、手話通訳（健聴）、トレーナー（健聴）、マネージャー（ろう）の5名体制での出発を予定していましたが、上記にも記載した通り急遽辞退者が発生したため、デフリンピック出場経験者であるゼネラルマネージャーを選手に復帰させる対応を取りました。またマネージャーについても体調等の問題があり、帯同が難しくなったため健聴者のマネージャーを帯同させました。

最終的な体制としては、下記の通りです。

- ・監督：全体的な指揮を取り、スケジュール全般の確定ならびにバレーボールにおける技術、戦術等の指導。
- ・手話通訳：監督の指示等を的確に選手に伝え、スムーズなコミュニケーションの確保ならびに情報の伝達。またサブマネージャー的な動きを行い、現地での移動や生活を行う上でのフォロー役。
- ・トレーナー：選手の体調管理（食事や試合前後でのウォームアップ、ダウン、ケア）現地での本部メディカルスタッフとの連携。
- ・マネージャー：チームでの金銭管理ならびに現地での生活における全般的な対応。

⑤競技スケジュール（旅行スケジュール）

- ・2013年7月21日
全選手、全スタッフ、ホテル日航成田集合
- ・2013年7月22日
日本出国、同日ブルガリア・ソフィア到着
- 7月25日 対ウクライナ戦
- 7月26日 総合開会式
- 7月28日 対トルコ戦
- 7月29日 対イタリア戦
- 7月30日 対イラン戦
- 8月4日 総合閉会式
- ・2013年8月5日
ブルガリア、ソフィア出国
- ・2013年8月6日
日本到着

⑥大会の競技運営などの報告

競技については、参加国全10チームをA、Bグループに5チームずつ振り分け、総当たり戦で各グループの順位を決定し、各グループ4位以上が決勝トーナメントに出場、その後はトーナメント戦にて最終順位を決定するという方法でした。

競技事体の運営はとてもスムーズでした。

特にバレーボールは昨年同会場で世界選手権大会を行っており、試合会場や練習会場の場所の使用方法についても熟知していたため、大きな支障はないと思いますが、気になった点を記載します。

・競技会場への輸送

ブルガリア組織委員会での輸送手段がほぼない状況となり、非常に不安な状態が続きましたが、本部スタッフの迅速な対応によりその状況は解消されました。しかしながらこのような状況は先に察知できるよう本部スタッフには対応をお願いしたいです。

・練習会場の確保

練習会場の確保と使用時間について見直しをお願いしたいです。

す。朝8時から45分間のみの使用、また前日の試合時間の関係で使用できない等の制限がありました。最低でも使用時間は1時間としてほしいです。また会場を増やすことにより、時間設定についても調整できる幅が増えると考えます。

⑦競技規則の適用（問題点など）

競技は本年より適用となっているFIVB規定に則り行われました。また詳細な部分については、TD会議での説明がありました。

以下にいくつか気になった点について記載します。

・審判の水準

各審判によりダブルコンタクト、ポジショナルフォールトについてかなり曖昧な部分が多く感じ取れました。ダブルコンタクトについては、大会ごとに基準が曖昧な印象があり、この点についてはFIVB規定に則るのか、それとも独自なルールを適用するのかを改めて明確にしてほしいと願います。

・試合結果の掲示

試合結果については特に会場等での掲示はなく、Webでの確認もしくは自らTDへ確認する方法になってしまいました。

宿泊施設や競技会場ではWi-Fiがあり確認できましたが、やはり目でしっかりと確認できるように掲示をお願いしたいです。Webについても当日の結果については迅速に更新をお願いしたいです。（だいたい前日の結果を翌日に更新している状況）

⑧大会参加までの準備状況

以下に大会参加までの準備状況を記載します。

- ・3月末…選手選考
- ・4月以降…各合宿時に現地での食事、飲み物また日本国内での食事（ドーピング含む）についてトレーナーから指導
- ・6月…現地でのブルガリア語⇄日本語への通訳者と連絡をとり、現地の状況や生活で必要となるものの準備、リサーチを依頼。
- ・7月…詳細の確認、現地での生活における注意事項等
昨年世界選手権を同国で開催しており、スムーズに準備ができたと考えています。

⑨反省・まとめ

以下に今大会に参加した結果を元に所感を記載します。

日本チームは世界各国と比べ、やはり身長、高さ、体格、パワー等身体面での差が大きく、小型なチームとなってしまっています。選手選考段階から情報収集を続け、世界各国の選手に見劣りをしない選手発掘をする必要があると考えます。またチーム形成を行う上でも世界のレベルが上がっているため、より健聴者の力を借りる必要があると考えます。

先述の通り、健聴者シニア代表と同じようなバレースタイルとなっているので、世界上位クラスを想定した形での強化が必要となります。そのためには日本のトップクラス（Vプレミア、チャレンジリーグならびに関東大学1部リーグ）のバレーボールを常に肌で感じ、体感しなければ、上位国と対等に対戦できないと感じました。常に感じることで、メンタル面でも大きな向上が期待できます。

もちろん今までも上位国を常に意識し対応をしてきましたが、それ以上に世界各国の技術は進歩しています。国内での活動だけでは世界に太刀打ちすることは非常に困難な状況です。それは精神的な部分でも大きく感じる場所がありました。

団体競技であるために、試合中にはコミュニケーションとい

うものが非常に重要となりますが、声でのコミュニケーションは不可能なため、ボールを触ろうとしている当事者の意思が大きくプレーに反映されます。つまり、その当事者がどのように選択するかによって結果も大きく左右されてしまいます。当事者は「ミス」を意識するため、負担が大きく仲しかります。その繰り返しで団体競技は成り立ちますが、瞬時での判断能力を競技時間以外でも常に保ち続けることが必要です。プロセスについても確認が必要ですし、周囲への配慮や気遣いという面でもさらに強化が必要となります。これは今までの发育環境などにも左右されますが、団体競技における能力向上については非常に有効であると考えます。

課題は多くありますが、選手達にはバレーボールプレーヤーとしてだけでなく、いち人間として大きく成長する機会であると捉えてほしいと思います。

最後になりましたが、本大会派遣にあたり全日本ろうあ連盟はじめ多くの方々にご協力いただきました。この場を借りてお礼申し上げます。誠にありがとうございました。

トレーナー 岩田 秀治

1. 団体内の担当とその内容

はじめに、第22回夏季デフリンピック競技大会ソフィア2013において男子バレーボールチームのトレーナーとして帯同させていただき感謝申し上げます。以下に大会期間中、選手に実施した内容を報告します。

男子バレーボールチームは7月22日に成田を出発し、オーストリアのウィーンでトランジット、ソフィアへ入りました。ウィーンでのトランジットの際に、選手の一人が38.1℃の発熱を確認しましたが、嘔吐や下痢の訴えはなかったため解熱剤を服用させ、機内では終始クーリングを実施しました。ホテル到着後、やや回復の兆しも見られ36.7℃まで下がりましたが、翌朝のバイタルチェックでは再び38.6℃の発熱が見られたため、本部メディカルルームにて医師の診察を受けました。その後、この選手は3日間発熱が続きましたが、初戦のウクライナ戦にはなんとか間に合わせることができました。この選手以外にも、発熱者が3名、主症状は下痢でした。医師との情報交換の中で、ウイルス性胃腸炎であるとのことで、その対処法などを指導していただき、食事の取れない選手にはおかゆを作り食べさせ、レストランからスクランブルエッグやハムを提供していただき、3大栄養素だけは確保するように心掛けました。

現地宿泊先でのトレーナールームはツインのシングルユースということで申し分なかったです。宿泊先ホテルにはドリンクおよびアイシング用の製氷機の設置がなかったため、本部トレーナーの方々のご尽力があり大変助かりました。また氷はその用途に応じ、ドリンクに使用する氷は衛生面を考慮し、ビニール手袋で触ることを心がけました。毎朝実施したバイタルチェックは、その項目を血圧・体温・脈拍・体重・食欲・疲労の6項目とし、選手のコンディションを評価しました。これらの情報は有益で、本部医師とのチームアプローチに大きく役立ちました。

その他、選手の自己管理能力について、随時体調の報告やアイシングの徹底、食事面においてもビュッフェの中から何を選択すれば良いかなどの判断、現地での移動時のマスク着用など、選手自身の自己管理能力は高かったと評価しています。

これらは国内での強化合宿において常に自己管理能力の向上を共通理解としてきたことによるものであり、トレーナーとし

てこのチームに啓発してきたことを実感することができました。選手のコンディションに関して、「気になることは早めに報告する」「隠さずに報告する」などコミュニケーションが図れる雰囲気作りを心がけました。

2. 反省およびまとめ

男子バレーボールチームのトレーナーとして、傷害予防を一番の命題とし、身体の使い方の習得やボディイメージの修正に時間をかけてきた4年間でした。集大成であるデフリンピックにおいて大きな傷害が発生することなく終えられたことは、その成果として実感できるものがあります。しかし、体格に恵まれない日本選手が外国勢の高さとパワーに対抗できるための身体能力の獲得にまでは至ることができなかったことが反省点として挙げられます。また、選手にトレーナーの必要性を確認した結果、その専門知識を身体作りや傷害予防に生かしたいとの回答を得ました。

トレーナーとして、今後は整形外科領域だけではなく、内科領域の知識を持つ必要があると切実に感じました。

最後にトレーナーとして質の高い知識・技能を有し、かつ障がいに関する専門知識を有することを目的に制度化された日本障害者スポーツ協会公認トレーナーが、デフ競技団体日本代表チームで活躍されることを願っています。

手話通訳 大崎 紀代美

私は前台北大会に続き2大会連続でバレーボール男子チームの手話通訳者としてデフリンピックを経験しました。今回の競技成績は予選リーグ敗退という誠に残念な結果に終わり、スタッフとして大いにその敗因を分析し、次チームにつなげなければ強く思っています。

団体内での担当は、本任務以外に直前の一選手の辞退があり、急遽ろう者スタッフが選手登録するという事態を受け、そのスタッフの任務の一部を追加で担当しました。自チームではスタッフMLにて常にお互いの職分を共有していたため、その代行は比較的行いやすかったのですが、国際大会に帯同するスタッフとして事務処理能力はもちろんのこと、英語や国際手話ができ、言語も含めるコミュニケーション能力や交渉力も備えていることが望ましいことを改めて実感しました。

大会中、他チームの手話通訳者がベンチに座ることを認められなかったケースがあったと聞きました。実際、私もある試合の審判からは、ベンチではなくその後部に設けられた通訳者席に移るよう示唆されたこともあったので、大会におけるチームの手話通訳者の扱いとその認識の徹底を希望します。

聴覚障がい者と一口に言っても多様性があり、選手にはネイティブサイナーもいれば、補聴器を活用し音声言語で十分コミュニケーションができる選手、手話があまりできない選手もいる言語差の上、年齢差や社会経験差なども含め、団体競技チームはコート内外共に円滑なコミュニケーションを図ることが重要な課題です。強化合宿を重ねる中では、技術面のみならずこの課題を克服していくことも目的ではあります。しかし回数が限られている上、デフリンピックがマイナーであるために職場からの理解が得られず、合宿すら満足に参加ができない状況下の選手がいることは、団体競技の強化のマイナス要因です。是非、全日本ろうあ連盟には国内におけるデフリンピックの位置付けを改める動きを性急に行っていただきたいです。

本大会はギリシャ、ハンガリーとその開催地が変じたことから

も組織委員会においては1年という短い準備期間での多くの困難、それに伴い日本選手団本部の苦勞も推察はできますが、是非次大会にお願いしたいことは、日本選手団本部は選手団より先入りし、その受け入れ体制を整えていただきたいと思います。今回は本部の方々と私達が同便もしくはその後の現地入りであったため、到着後しばらくは必要な情報が得られない状態で混乱しました。事前の下見報告ももっと有益なものであってほしいです。幸い、私達は昨夏に同ソフィアでの第2回デフバレー世界選手権に出場していた経験もあり、混乱は最小限にとどめられたと思いますが、他の競技団体は戸惑ったのではないかと思います。特に当初、練習会場への輸送が確保できていない有様には閉口しました。辛辣ではありますが、本部が環境を整えるべきであることは言うまでもなく、恒常的なメダル獲得を期待するなら、その強化も全日本ろうあ連盟もしくはそれに相応しい団体が各競技団体と共に、若い世代の育成強化を国家戦略的に図らなければならないと思います。オリンピックが「参加することに意義がある」ではすまなくなっているように、デフリンピックもそうであってこそ、オリンピックやパラリンピックの認知度に近づけるのではないかと考えます。そして、その強化を進めるためには各競技の有識者、スポーツ医学・科学等の力も不可欠です。そうすると、情報保障が必要であることは明白であり、養成と身分保障の双方を合わせて考えてこそ、真の強化体制構築といえると思います。早い時期の実現を心願しております。

スタッフ 菊池 加奈子

①団体内の担当と内容

- ・マネージャー業務
- ・大会期間中の経理全般
- ・ランドリー、試合時の軽食や水等の買い出し、試合観戦時の選手に同行、タクシー手配等

②反省とまとめ

はじめに

今年4月よりデフリンピックの手伝いをさせていただくことになり、手話もできなかったので、選手とのコミュニケーションも十分でないままの参加となりましたが、スタッフ、選手の皆様には温かく受け入れていただき、私も不安を抱くことなく出発の日を迎えられたことに感謝しています。

デフバレーボールを初めて目にしましたが、いつも大学バレーで活動している私にとっては驚くことも多く、もう少し早くから関わっていればコミュニケーションや業務の面でもスムーズに動けたのではないかと反省しています。

期間中も本部との連絡等は大崎手話通訳にいただきましたが、本来であれば自分の仕事だったのではないかと思います。

ホテルについて

- ・チェックインについて、大人数の到着にも関わらず、現地スタッフにより一人ずつ行われた為、かなりの時間を費やし、選手団のロビーでの待ち時間が長すぎました。各競技団体でパスポートをまとめて提出し、人数分のルームキーを渡す、或いは事前にチェックイン用にパスポートコピーを用意する等の準備をすればもっとスムーズだったのではないかと思います。
- ・マニュアルではホテル備品としてドライヤーが記載されていましたが、実際には完備されておらず、特に女子の中には困った選手もいたと聞きました。
- ・フライト後のコンディショニングの為のプール利用にあた

り、フロントスタッフの対応が「無料」「有料」とまちまちでトラブルになりました。アスリートの場合、トレーニングルームやプールの利用頻度は高いので、マニュアルにインフォメーションがあれば良かったと思います。

男子バレーは事前にHPでチェックしていたのでプールの利用ができて良かったです。

・試合時間が夜の場合のレストランの利用時間について、日本選手団だけでなく、競技によって試合時間も違うので、三食の時間を区切らずに常に利用可能であるべきだと思います。期間途中から、レストラン利用にあたり部屋番号のチェックがありましたが、その際の対応にも差があって混乱したので、ルームカードを提示すれば入場できるようにしてほしいです。

・インターネットのアクセスも非常に不便で、20階ではエレベーターホールか廊下のみ利用可能でしたが、暗く、衛生的にも良くないと思いました。

洗濯について

マニュアルには「業者に一括依頼予定」とありましたが、混乱を予想して男子バレーは事前に現地通訳にチェックを依頼し、さらに到着後付近を探して、偶然、家族経営のランドリーと交渉することができたことは幸運でした。

ホテルでは何度も「どこで洗濯しているか」と尋ねられたことから、本部での「一括依頼」は結局不可能だったのではないかと思います。

選手輸送について

当初のシャトルバスの運行表を見てあまりの少なさに目を疑いました。数日後から日本選手団として車の手配をしていたいただきましたが、それでも不足しており、時間に間に合わずタクシーを利用した競技団体もあったと思います。16人乗りのワゴンに男子バレーは17人乗車するにもかかわらず、「本部から一緒に乗るように言われた」と他のスタッフの方が数名来るなど、多少の混乱もありました。

本来なら、大会の本部が循環バス、シャトルバスを30分ごとに運行して宿泊している各国の選手団がスムーズに利用できるべきだったと思います。

終わりに

大会を通して感じたことは、外国選手のタフさと身体能力の高さ、自己管理能力です。アスリートとしての強さを感じました。また、こなしてきたゲームの絶対数に力の差が出たと思います。日本の選手達も合宿、ゲームがもっと多くできたら実力を発揮できるのではないかと感じました。

選手 若原 正享

<成績>

男子バレーボール競技は参加国10チームのうち、A及びBグループの各5チームに分かれて予選リーグを行いました。日本男子チームは予選リーグ敗退（4戦：0勝4敗、対戦国はウクライナ、トルコ、イタリア、イランの4チーム）でした。

<自己評価>

個人的なプレーに関してはミスもありましたが、国内合宿で積み重ねてきたことを出すことができ、それほど悪い内容ではありませんでした。

<反省>

出発前の合宿で負傷してしまい、ベストコンディションでデフリンピックに臨むことができませんでした。

＜まとめ＞

私自身3度目のデフリンピック出場であり、メダル獲得のために練習やトレーニングを日々積み重ねてきました。大会を前にして怪我をしてしまったことが悔やまれますが、その状況下においてチームの一員として何ができるかを考えて行動を起こすことができたと思います。チームとしては2009年度の台北大会を区切りに、メンバーが刷新され2013年度までは個人の技術力向上に重きを置いて合宿を進めてきました。そして、デフリンピックが開催される2013年度の合宿では、練習試合を多く設け、より実戦に近い形で練習を行い、チーム力を磨いてきました。合宿での実績は実りあるものでしたが、海外チームは体格の大きい選手を揃え、かつ技術力も上がっており、厳しい結果となりました。デフリンピックへの出場やこれまでの合宿に参加できたことは、家族をはじめ職場の方々、先輩後輩、友人などの多くの皆様のご理解及びサポートをいただいたことにほかなりません。この場をお借りし感謝の意を述べさせていただきます。

選手 田中 利典

予選敗退となり、不甲斐無い結果になりました。結果を現実的に受け止めて、私の想いをそのまま伝えます。

デフリンピックという大舞台で「世界の3強」になるため、合宿を積み重ねてきて、チームとして個人として戦う準備はできました。そして世界3強というチームを証明する時が訪れ、私はコート上で思いきり戦いました。個々の選手も最後まで諦めずに思い戦ってくれました。試合が終わり、選手それぞれ様々な思いを抱えていると思います。もちろん私も抱えています。大会が終わった今でも、あの試合のプレーや状況が鮮明に蘇ってきます。バレー知識が豊富である監督の下、「どんなチームにしていくなのか」「チームとしてどんな戦術を持って戦うか」「チームの良さ」等、バレーに対する戦術、知識と各選手への気遣いは学ぶべきことばかりであり、自分自身プラスになることばかりでした。今までやってきたことを振り返り、1つ1つ洗い出してみると自分らしく表現する能力やアクション、個人としては準備がもっともっと必要だったのではないかと改めて感じました。選手12人全員が戦う気持ち、泥臭い粘りから一点をもぎ取る力があってこそ、日本のチームらしさが出ます。これがわがチームの魅力です。そして何より大事なことは「気遣い」です。それはチーム作りには最低限欠かせないということとは断言できます。

最後になりましたが、今大会で得たことや学んだことを、自分らしく次世代へ上手く繋げていけたらと思っています。

選手 高橋 竜一

デフリンピックに、参加させていただきました。予選リーグ敗退という残念な結果になってしまいました。海外選手は大きくてスピードパワーもあるので、それに対抗するために練習や戦略を考えて来ましたが、足りませんでした。このままでは勝てないという結果を収穫と捉えて、今後の練習や考え方に反映していきます。次のデフリンピックでは、必ずメダルを取るという強いビジョンを持って、日々頑張っていきます。今後も応援とサポートをよろしくお願いします。

選手 中村 俊雄

○戦績に対する自己評価

予選敗退という結果を受け入れたくない気持ちはありますが、これが現メンバーの実力だと思っています。

○反省、まとめなど

「コミュニケーションを大事にすること」

監督や選手の話の内容をきちんと理解してもらうようにフォローすれば良かったです。自分に精一杯で他の選手へフォローする余裕がありませんでした。

この4年間、本当に自分はよく頑張ってきました。トレーニングを休まずにコツコツと積み重ねてここまで来ることができました。予選敗退という残念な結果になりましたが、やれることはやったと自負しています。

選手 中野 智久

①成績に対する自己評価

今大会の結果は0勝4敗、どの国からもセットを奪えず、敗退となりました。この結果を受けて感じたことは、練習でやってきたことを本番でどれだけ表現することができるかが勝負の分かれ目となるということです。一つ一つのプレーを振り返っても、練習でできたことが本番ではうまくいかずミスをしたり、攻めないといけない場面で攻めきれなかったりと、自分達のゲーム運びをすることができませんでした。その理由は、色々あるかもしれませんが、特にメンタル部分が大きく関わっていると考えます。相手がリードしている時に「我慢」ができず焦り、ミスをしてしまいます。そして今度はミスを恐れるあまり、攻めることを躊躇してしまい、攻め切れなくなるというようなパターンに陥ってしまう場面も有りました。しかし、その「我慢」ができていた時は、どんな相手でも力負けしない展開ができていたので、常にその展開ができるように、メンタル部分を強化していく必要があります。

海外のチームは大型化の傾向が強く見られていますが、それに対抗できるだけの力（サーブ、ディグ、レセプションなど）が日本チームにはあるので、精度を高め、本番に実践できるようなチーム作りを早い段階で取り組んでいく必要があります。

②反省・まとめ

今回のデフリンピックは、選手としてのプレーだけでなく、副主将として主将やチームのサポートという役割もあり、プレー以外の部分に取り組んだところ、色々な課題が見えてきました。資金面、知名度、事務関連などたくさんあるのは事実ですが、デフリンピック直前から本番での本部側の未然に防ぐことができたようなトラブルが多かったのが残念です。聴覚障がいがあることでコミュニケーションに課題が生じてしまうのは仕方ないですが、それとは関係のない部分での原因を作りだすことで、競技チームの環境を乱してしまう事態は避ける必要があると思います。前大会でも起こったことが再び今大会でも起こってしまうのは、引き継ぎや反省を本当に活かしているのか気になります。そのように身内同士で足を引っ張ることなく、本部と競技団体が一丸となって、デフリンピックに臨み、多くのメダル獲得ができるような日本チームになってほしいとの期待を込めて書かせていただきました。応援していただいた方々、本当にありがとうございました。

選手 今井 勇太

今大会における男子バレーボールの成績は、予選敗退という厳しい結果となりました。初戦がウクライナ、トルコ、イタリア、イランという流れで予選の4試合を行い、すべて1セットも取れないまま全敗しました。昨年の世界選手権では4位という成績を残しており、今まではフィジカルやパワーは断然外国チームが上回り、技術は日本が上回っていましたが、今回はそうではありませんでした。外国チームも技術力が身に付きさらにレベルアップしたように感じました。もちろん、日本も月に1回のペースで合宿を積み重ねてレベルアップしましたが、残念な結果となりました。

もちろん、合宿で積み重ねてきた成果が表れた部分もあり、点を取得し、ボールをしっかり拾うことに繋がった点は良かったです。しかしチームが不利な状況に立たされた時に、みんながカバーし修正する力が足りなかったと感じました。苦しい展開の時にチームが一丸となれませんでした。エースである自分の力不足もありました。

コンディションの面では、ブルガリアに向かう飛行機の中で発熱してしまい、現地に着いてからも2日ほど療養せざるを得ない状況になってしまい、全治しないまま初戦のウクライナ戦に出場しました。良いパフォーマンス、良いスタートを切るためには、ベストコンディションであることが前提です。セルフマネジメントの重要性を感じさせられた大会でした。療養の際、チームのトレーナーをはじめ選手団の医師や看護師に色々お世話になり、大変感謝しています。

選手 信田 光宣

ソフィアデフリンピックで「世界の3強」を目指し、4年間合宿や自主合宿、ゲーム試合など計画を立てました。男子強化部長担当であった私は、急遽辞退者が1名発生し、メンバーの入れ替え、私自身選手登録するという事態を受けました。大会まであと1ヶ月しかない短い期間で、体力作りやメンタル、担当の事務関係など、頭を切り替えるのは精一杯でしたが、スタッフの方にバックアップしていただいたおかげでスムーズに進められたことは、とても感謝しています。ある意味では、スタッフ体制がしっかり守られていたから、共同できたのだと思います。

今回の大会では、予選リーグ敗退になりました。

ブロのバレー経験者を監督として発起し、前回よりやり方を刷新したことについては大いに評価できます。今後の課題としては、この大会で得た反省点を次回のデフリンピックに向け、メダル獲得するために必要なことを選手皆に伝え、意思疎通を図るよう実施して、その上で更に良い成績につながっていくと信じています。

今回の大会では、スタッフの方々からサポートとご協力をいただき、本当に感謝しております。応援していただいた皆様、最後まで戦った11名のメンバーに対して本当にありがとうございました。

選手 佐藤 淳吾

デフリンピックを終えて

デフリンピックではグループ戦敗退という残念な結果になりました。海外のチームは高さがあるため、日本はサーブで攻め

相手のレシーブを崩し、攻撃を単調にさせチームの持ち味でもある泥臭く、粘り強く、最後まで諦めない気持ちで挑みました。今までの合宿や練習の成果を100%出し切ることの難しさを改めて感じました。

4年後に向けてどうすべきなのか、デフリンピックを経験した者でしか分からない部分もあると思います。そして次のチームにどう活かすか自分自身どうやるべきなのか良く考えたいと思います。

最後になりましたが、応援やサポートをしてくださった方、またチームのスタッフ、選手の皆様、ありがとうございました。

選手 木村 孝成

予選リーグではウクライナ、トルコ、イタリア、イランの順に4戦しましたが、世界の壁は厚く、0勝4敗の予選リーグ敗退で終わりました。今まで支えていただいた方、応援してくれた方の期待に応えられなかったことがとても悔しく、本当に申し訳ないという気持ちで一杯です。しかし、皆様のおかげで、デフリンピックという貴重な経験をさせてくれたと思っています。本当にありがとうございました。

私は日本代表のピンチサーバーとして出場しました。自分の持ち味であるサーブの威力、流れを変えるムードメーカーとして、毎試合毎セット、交代で出場しました。去年の世界選手権と同じ会場だったこともあり、変な緊張もなく、いつも通りのプレーができたことを誇りに思っています。

また、この4試合で一番印象に残ったのは、第3試合目のイタリア戦の3セット目です。イタリアに2セット先取され、18-14と4点差で負けている時に、自分がピンチサーバーとして出て、サーブやディグが上手く行き、18-18の同点まで押し上げ、相手にタイムアウトを取らせました。このセットが一番チームの雰囲気が良かったと思っています。次もチャンス을いただけるのであれば、スタメンという立場でコート上に立ちたいと思っています。

選手 加賀 充

成績に対する自己評価

初めてデフリンピックに参加して、とてもいい経験になりました。世界のレベルはとても高いこと、日本でもまだメダルを取ることができることがわかりました。でも、結果的にはウクライナ、トルコ、イタリア、イランと対戦し、全てストレート負けでした。残念な結果になりましたが、このチームと戦えて悔いはありません。本当に勝つためには何が必要なのか、海外で2週間過ごして、色々勉強になりました。私は、身長が175cmですが、世界では185～190cmが普通に選手として参加しており、当然ブロックも高いので、自分のスパイクはほとんどシャットアウトされました。ウクライナ戦では、3セット中決まったのは2本のみ、トルコ戦は途中交代だったので、3本しか決められませんでした。自分なりに頑張ったと思います。たとえ背が小さくても、スパイクを決めることはできるので、他の方法を考えて打てば、決まる確率は上がるのではないかと思います。

反省・まとめなど

皆様に応援やサポートをしていただいたのに、残念な結果になって申し訳ありません。今後は世界と肩を並べられるように、

練習だけではなく、強化合宿で他の選手達とのコミュニケーションをとり、積極的な意見を出し合うことが必要だと思います。そのような環境を作ることができなかったのが一番大きいと痛感しました。意見をぶつけ合うという場面が非常に少なく、試合もごちない動きが見られたのではないかと考えます。

また、平均身長が 185cm あったと思われる大型チームに對抗できるように、日本で大型チームと合同練習するのも悪くないと思います。一回でも良いので国内で高いブロックに對抗できるような練習をしないと、感覚がつかめないままの参戦となり、高いブロックに阻まれることになると思います。高校生相手に練習試合をしても、世界には通用しないことが今回のデフリンピックに出て、初めて分かりました。世界のレベルにあった練習試合の相手のチームも考慮した方がいいと感じました。

選手 中橋 薫哉

【自己評価】

僕はセッターとして参加しました。デフリンピックは今まで国内大会と違って、レベルの高い舞台だと感じました。セッターの仕事は世界に通用する速いバレーを作るために、トス回しの役割、または相手の状況を素早く把握して動くことです。実際に試合をした結果、各世界のチームは前回よりレベルアップしており背も高く、パワーもあり、バレーのシステムが多彩であり、日本チームよりオーラもすごく感じました。セッターとして今回の大会は通用するトス回しが足りなかったと感じました。

選手 田畑 稔

初めてのデフリンピック出場でした。初出場にも関わらず、試合では全く緊張せず、自信を持ってプレーをすることができました。それは、日々の練習、そして代表強化合宿で励んできたおかげであり、また昨年の世界大会にて収めた DVD で、何度も繰り返して分析してきたおかげだと、私は確信しています。しかし、予選グループ敗退という厳しい結果になってしまい、世界の壁の厚さを痛感しました。先輩達の話や、DVD などの分析から、私は世界と比較してフィジカルでは劣りますが、テクニック面、メンタル面で相手に負けなければ、試合で世界各地とやりあっていけると思っていただけに、余計悔しいです。まだまだ力不足だったと思います。その悔しさを、次のデフリンピックまで持って行かなければなりません。私が選ばれなくても、次に世界へ挑んでいく選手達に、メダルを取ることができなかった悔しさ、デフリンピックに参加して感じた経験を、きちんと全て伝えていくべきだと思っています。

私が日本代表に選ばれたのは、デフリンピックの9ヶ月前です。たった9ヶ月という短い期間で、チームの約束事、監督の意図、選手達の方向性等を、身体に覚えさせていくのに苦労しました。チームの皆から遅れないように、頑張っけて付いて行くのに精一杯でした。とても大変でしたが、本当に色々学べることが多く、刺激があった充実した半年だったと思います。

最後に、色々指導していただいた監督、身の回りをサポートしていただいたスタッフ、遠くから応援くださった方々、そして家事都合で色々大変な時期なのに背中をポンと押してくれた家族、皆のおかげで私は色々経験することができ、少しでも成長することができました。本当に「感謝」の一言に尽きます。

ありがとうございました。

バレーボール競技女子チーム

監督 狩野 美雪

①選手選考について

選手選考はデフリンピックにおいてチームが勝つことを最優先して行動できる人材を選考しました。

- ・指導者が求める技術・体力を持ち合わせ、戦術・戦略を十分に理解できること。
- ・デフリンピックにおいて十分なパフォーマンスが発揮できないような怪我をしていないこと。
- ・チームプレーに徹し、チームメイトやスタッフを尊重・尊敬できること。
- ・自己負担金を負担できること。

以上のことに重きを置いて 2013 年 5 月時点で選考しました。

選考時期にもう少し猶予があれば、怪我の回復を見込めた選手もいましたが、ろうあ連盟の規定による選考期限に従ったため 5 月時点でリハビリ中の選手を選考することができなかったことが非常に残念です。また、自己負担金についても誰でも気軽に払えるような金額ではないので、考慮せざるを得ませんでした。

②成績一覧

【女子バレーボール】

予選リーグ									
月 日	試合	対戦国	winner	スコア	1set	2set	3set	4set	5set
7月25日	1試合目	日本対メキシコ	日本	3-0	25-12	25-14	25-15	-	-
7月27日	2試合目	日本対ドイツ	日本	3-0	25-15	25-13	25-12	-	-
7月28日	3試合目	日本対ウクライナ	ウクライナ	2-3	25-23	25-23	15-25	15-25	17-19
7月29日	4試合目	日本対ベラルーシ	日本	3-1	23-25	25-16	25-23	25-12	-
7月30日	5試合目	日本対南アフリカ	日本	3-0	25-3	25-32	5-4	-	-

決勝トーナメント									
月 日	試合	対戦国	winner	スコア	1set	2set	3set	4set	5set
7月31日	準々決勝	日本対ポーランド	日本	3-0	25-17	25-16	25-19	-	-
8月1日	準決勝	日本対アメリカ	日本	3-1	25-27	32-30	25-21	25-22	-
8月3日	決勝	日本対ウクライナ	ウクライナ	0-3	18-25	22-25	16-25	-	-

順位	国名
優勝	ウクライナ
2位	日本
3位	ロシア
4位	アメリカ
5位	ポーランド
6位	ベラルーシ
7位	イタリア
8位	メキシコ
9位タイ	ドイツ、南アフリカ カナダ、ウズベキスタン

③成績と評価

準優勝という成績は今現在日本チームが持っている力を十分に発揮した結果で、優勝こそ逃しましたが選手やスタッフを十分に評価できる成績だと考えます。

女子バレーボールチームは一人ひとりが本当に真摯に取り組み、競技のみならずホテル内での生活においても、他競技や他国と比較しても競技者として自覚ある素晴らしい行動をとっていました。そういった点も、厳しい環境の中でも結果を残すこ

とにつながったと考えられます。

<各試合の戦評>

予選グループ戦

・対メキシコ

メキシコは他国と違い事前の情報が全くなく、不気味な相手でした。試合前の練習を見る限り、何名かの選手は身長も高く角度のあるスパイクを打っていたので、慎重に戦う必要がありました。試合開始直後は初戦ということで硬さも見られましたが、徐々に会場や雰囲気にも慣れ日本のペースで戦うことができ、難なく初戦に勝利しました。

・対ドイツ

ドイツは平均身長が高く、健聴者の代表同様に非常にサーブの良いチームです。相手のサーブに崩されると苦戦すると考えられましたが、集中し安定したサーブレシーブを供給することができました。サーブレシーブさえ返せば全く問題なく勝利することができました。

・対ウクライナ

ウクライナは参加国中で間違いなく一番の強豪です。予選で一度当たるということは、自分達の力を試す上で非常に良い機会になると考えました。1セット目の序盤は相手がメンバーを少し落としてきていたこともあって、サーブで乱してレシーブを拾うという日本の長所が随所に現れ、1、2セットを先取しました。日本がウクライナにセットを取ることは初めてでした。

しかし、3セット目以降はウクライナの高さや上手さに圧倒され自分達のペースを掴めぬまま2セットを連取されてしまいました。

5セット目は一進一退の攻防となり、マッチポイントを幾度となく迎えましたが、最後の一点を取り切ることができず惜しくも敗れてしまいました。しかし、この試合で選手達が自信をつけたのは言うまでもなく後々の試合につながっていきました。

・対ベラルーシ

ベラルーシは前回の世界選手権において準々決勝で敗れた相手です。世界選手権では5位という屈辱的な結果に終わり、選手がリベンジしたかった相手国の一つでした。高身長の選手を揃え、力のあるスパイカーが数名いるチームで、前回の対戦から考えると多少の苦戦が予想されました。

試合開始直後、選手は気合が空回りしたのか思うように体が動きません。身長の高い選手に対する焦りもあり1セット目を先取されるも、2セット目以降は落ち着きを取り戻し実力の差を見せつけることができました。昨年とメンバーが変わっていないベラルーシに対して、このような勝利を収めたことは、日本がいかに前回より力をつけているかということ、選手も実感したと思います。

・対南アフリカ

アフリカ代表の南アフリカチームは、バレーボールにおいてはまだまだ発展途上の国です。しかし、この日は初めてメインアリーナで試合を行う良い機会となりました。戦い方としてはメインアリーナに慣れること、連日の疲れを上手く調整すること、自分達のミスの数を知ること、そして若手の選手をいかに経験させるかに重きを置きました。

予選ラウンド最終戦ということもあり、多少疲れはあったと思いますが、良い雰囲気で行うことができました。

予選グループ戦最終戦を終え、決勝トーナメントの対戦カードを決める抽選が行われました。抽選の結果、決勝トーナメントは日本としては最高の試合順を引き当てることができました。

決勝ラウンド

準々決勝

・対ポーランド

ポーランドは昨年の世界選手権で勝利している相手です。中心選手は非常に身長が高く経験が豊富でした。しかし、日本選手は予選で自信をつけたのか、出だしこそ硬さが見られましたが、次のアメリカ戦を考える余裕を持ち、終始落ち着いた様子で、危うい所もなく勝利しました。

・対アメリカ

アメリカ戦はデフリンピックを振り返る上で一番のポイントとなる試合になりました。勝てばメダルが決まる一戦でしたが、試合序盤はアメリカの高さのあるブロックや、パワーのあるスパイクに押され、1セット目の出だしは相手のペースで試合が運ばれる展開でした。特にブロックはレフト攻撃中心の日本に対し高いブロックを2枚揃えてきており、レフトスパイカーは非常に苦戦していました。結局20点以降で徐々にペースをつかみ始め、デュースまで追い詰めましたが、最後は痛いサーブレシーブミスで先取のチャンスを失ってしまいました。

2セット目も一進一退の攻防が続きました。1セット目のような焦りはなかったものの、相手のエースを抑えきれず前半は非常に苦しみました。後半になってくると一人で打ち続けていた相手のエースに疲れが見え始め、アメリカチーム全体にミスが出始めました。もちろん体力的には日本も同じでしたが、集中力を切らすことなく2セット目を32-30の大接戦でなんとかもぎ取りました。ぎりぎりの戦いで2セット目を取ったことにより選手達に自信と余裕が生まれました。一方アメリカはセットを重ねるごとに集中力を失い、3、4セットは日本がペースを掴むことができました。

4セット目の最後も結局相手のミスで勝利を手に入れました。

長い試合の疲労の中でいかに集中力を切らさないか、いつも通りのプレーができるかは勝利を左右する非常に大きなポイントです。この試合では技術はもちろん精神的に強くなることがどんなに大切なことか選手も勉強になったと思います。

2セット目をどんな形であれもぎ取ったことが結果として勝利につながりました。

決勝

・対ウクライナ

決勝戦でのウクライナは予選で当たった時と比べ数段強くなっていました。選手の集中力はもちろんのこと、日本の選手をよく研究していました。日本が拾ってつなぐいつものバレーを実践していれば、今までは勝てていましたが、ウクライナだけはそれでは通用しませんでした。

1セット目の出だしから前後に揺さぶるサーブでサーブレシーブを乱され、高いブロックに苦戦しました。また、攻撃はミドルブロッカー中心の高さと速さのあるコンビネーションで翻弄されました。日本のやりたかったサーブで乱すということ、ウクライナにやられ、常に受身になってしまいました。

決勝戦では1セットも取れない悔しい結果となってしまいましたが、代わりの選手がほとんどいない中、最後まで選手は本当に頑張ってくれたと思います。とくに、エースの二人へ対する負担は非常に大きいものでしたが、なんとか最後まで大きな怪我をせず頑張ってくれました。

現時点での実力は選手層や環境も含め、ウクライナの方が上だと認めざるを得ません。

団体スポーツにおいて月に一回、1泊2日程度の合宿でプロ同然の強豪国と同等に勝負をするというのは並大抵のことではありません。金銭面でも選手に負担をかけている中でのこの成

績は本当に選手が頑張った結果だといえます。

④チーム（コーチ）体制と各コーチの役割

バレーボールにおける技術指導スタッフは以下のとおりです。

- ・監督 狩野美雪
- ・コーチ 村井貴行
- ・GM 兼コーチ 大川裕二

監督

監督は選手の技術指導、選手の選考、チーム全体（選手・スタッフ）の統率、指示、管理、戦術・戦略の分析、決定等を行いました。

村井コーチ

練習、試合時においての技術指導、監督補助、相手の分析をメインに行ってもらいました。バレー指導において監督自らがボールをつけながら選手を見て指導するのは非常に難しいです。以前は私自身がボールを打ちながら選手を見ていたので細やかな指導ができなかったのですが、村井コーチが加入し、コーチが選手にボールを打ち、ゲーム形式の練習に入ってくれたことによって、監督自身が選手のプレーを見極めることに集中できました。

また、練習を分散してできるようになったので、一人ひとりの選手がボールに触っている時間が増え、2コートで同時進行等短い時間に効率的な練習ができるようになりました。

大川 GM

大川 GM は事務的な業務が忙しい中、合間を縫って技術の指導や、相手の分析などを行ってくれました。普段の練習中の技術指導はもちろん、外国を想定した練習になるとどうしても相手チームに高さやパワーのあるプレーヤーが必要になります。日本人の女子選手同士でゲーム形式の練習をしても外国人選手の仮想チームにはなりません。大川 GM が相手に入ってくれたことで、そういった部分を補うことができ非常に助かりました。

また、試合会場などでのビデオ撮影や試合中の相手データの記録など現場においても多方面で様々な仕事をしてくれました。

⑤競技スケジュール（旅行スケジュール）

スケジュールは以下のとおりです。

- 7月22日 成田空港出発
ソフィア到着
- 23日 会場練習
- 24日 会場練習
- 7月25日 予選グループ戦 対メキシコ
- 26日 開会式
- 27日 予選グループ戦 対ドイツ
- 28日 予選グループ戦 対ウクライナ
- 29日 予選グループ戦 対ベラルーシ
- 30日 予選グループ戦 対南アフリカ
- 31日 準々決勝 対ポーランド
- 8月1日 準決勝 対アメリカ
- 2日 練習
- 3日 決勝戦 対ウクライナ
- 4日 閉会式
- 5日 ソフィア出発（現地時間）
- 6日 成田空港到着

ソフィア到着から試合が始まるまで中2日で、十分余裕があったとは言えませんが、初戦の相手は格下のメキシコだったので徐々にコンディションを上げることができました。

しかし、国際大会において初戦から開会式をはさみその後の6連戦というのは私自身、長い現役生活の中で一度も経験したことがない過酷なスケジュールです。このスケジュールリングは怪我の予防や選手の健康面を考えて今後考えなければいけない課題の一つだと思います。体格に恵まれず、普段の練習量の少ない日本チームにとって、このスケジュールは体力を消耗させ、非常に不利だと考えられます。

⑥大会の競技運営などの報告

大会のバレーボール競技 TD は、オランダ人 Cathy Schelvis 氏が担当しましたが、新任のため、TD 会議進行や試合の進行管理に不慣れでした。前任で、ビーチバレーボール競技 TD の John Knetzger 氏のフォローがありましたが、バレーボール競技手話通訳のベンチイン、ベンチアウトに対する見解や指示が、試合別に異なっており、審判の判断によって対応が違いました。また、南アフリカチームから、日本選手が補聴器をつけてプレーしているとのクレームが試合終了後にありました。Cathy Schelvis 氏は、日本チーム TD と当該選手に確認を行った後、誤認である決定を下しましたが、試合後にクレームを受けて確認をするならば、試合開始前に全選手に対して補聴器の有無を確認すべきです。

競技会場とホテルを結ぶシャトルバスの適切な運行が行われませんでした。日本選手団本部で独自にレンタカーやミニバスを確保していただき、安心して試合に臨むことができました。今後の大会においても同様の対応準備を求めたいです。同時に、ICSD や組織委員会に対しては、日本選手団が経費を支払ったバス運行等の不履行に関しては、責任の所在を明確に求め、賠償請求及び今後の運営改善を強く求めていくべきです。

⑦競技規則の適応（問題点など）

競技規則は2013年度のFIVB公式ルールが適用されました。競技ルールに関しては問題ありませんでしたが、通訳に対するルールが統一されていなかったことが非常に残念でした。試合や会場によって通訳が監督と一緒に立ち上がることが可能な場合もあれば、ベンチと一緒に座ることすら許されない時もありました。監督が手話を理解できることが望ましいのかもしれませんが、今後もっと強化をしていくにはスポーツの現場をよく知った指導者やトレーナーが必要になってくると思われます。そういった時に通訳に関する明確なルールがないなどということとは考えられないことです。

⑧大会参加までの準備状況

- ・大会までの強化

日本女子チームとしての強化練習は通常月に1回の1泊2日～2泊3日程度で、デフリンピック出発直前の6月後半から7月にかけては2回合宿を行いました。

2013年5月の合宿までは選手選考も兼ねていたので毎回16名程度の選手を招集していましたが、それ以降は12名で合宿を行いました。

2011年11月の就任以降、2012年5月にアジア大会、同8月に世界選手権が開催されたので、デフリンピックに対する強化大会と位置づけました。就任後はまず選手の能力の見極め、基礎プレーの習得、私自身の考えを浸透させることに時間を費やしました。そのため、昨年行われた世界選手権では5位という成績に終わりました。2013年度に入ってから、攻撃面やチーム形式の練習を多く取り入れるように意識し、なるべく多くの人、経験者に練習を手伝ってもらいました。プロの

選手やスキルの高い人に練習を手伝ってもらったのには理由があります。強いチームを想定した相手と手合わせさせたかったのと、口で説明するよりも直接同じコートに入り、目で見て真似をして技術を習得する方がデフ選手にとって分かりやすいのではないかと感じたからです。

また、デフリンピックの直前に、Vプレミアリーグに所属する久光製薬スプリングスに協力をいただき、合宿を行うことができました。選手達はプロの世界に初めて触れ、自分達は日本代表であるという自覚を改めて持ち、良いモチベーションに近づけることができました。

代表合宿以外は選手の自主性に任せて地元に戻って個人で練習を行っています。また、数回自主合宿として東西に分かれて選手が集まり練習会を開きました。その中で、行ける範囲のものは行って指導はしてきましたが、あくまで自主練習ということなのでメニューなどは選手が自分で決め、頼まれたことだけやるように意識しました。

・遠征への準備

昨年世界選手権がソフィアで開催され、同会場で試合が行われたことは私たちにとって非常に準備しやすい状況でした。そのため選手も日本食を持参し、トレーナーとマネージャーが軽食のおにぎり用に炊飯器を持ち寄るなど、選手のコンディションを良い状態で保つために万全の体制をとることができました。また、洗濯などどのようにしたらよいか、スーパーには何があるのかなどを事前に把握できていたことが、円滑にチームを運営することにつながったと考えられます。

⑨反省・まとめ

今井前監督と選手が掲げた目標は、デフリンピックで金メダルをとることでした。残念ながら最終目標を達成することはできませんでしたが、準優勝という結果を得ることができました。この準優勝という結果は選手やスタッフの努力の結晶です。銀メダルよりも、目標を達成するために自分が何をすべきか、仲間を信じるとはどういうことか、辛い時にどういう行動をとるかなど学ぶことや得ることが盛りだくさんでした。

実際、日本のデフスポーツを取り巻く環境は非常に厳しいです。諸外国の詳しいことは分かりませんが、日本チームは金銭的にも厳しいので遠征には自己負担金を負担しなくてはならず、そのために限られた回数しか練習をすることができません。また、前回の台北大会やメルボルン、ローマの大会と比較しても、諸外国は著しいレベルアップを遂げています。以前から強化していたアメリカはもちろん、ウクライナ、ロシア、ベラルーシなど10年前には強化をしていなかった国が年々力をつけています。

そんな中、練習の頻度や選手一人ひとりの環境、世界のバレー技術の進歩を考えても、今回のデフリンピックで選手・スタッフがいかに頑張ってくれたかがわかります。

台北デフリンピックが終わってから4年、このチームには本当に色々なことがありました。選手やスタッフにとって、監督の途中交代というのは非常にストレスだったと思います。それでも最後までついてきてくれた選手とスタッフに心から感謝をしたいと思っています。友人であった今井前監督が亡くなり、大川GMから監督就任のお話をいただき迷いに迷った挙句、前監督の想いをつなげたいという気持ちだけで何の知識もないまま監督に就任することとなりました。指導経験もなく、ましてやろう者と話したこともなかった私にとっては毎日が衝撃の連続で、本当に大丈夫なのだろうかという不安の日々でした。

最初に選手達を見た時の印象を正直に言うと、世界一など無理だろうと感じました。技術面でも精神面でも、世界と戦う準

備が全くできていなかったからです。技術以前に気になることも多く、まだまだでした。それでも全員が一生懸命だったことがとても印象深かったです。

まずは技術の前に選手の意識改革が必要です。そのためには日本の代表として世界で戦うとはどういうことなのかを選手自身に考えさせること、何でもかんでも与えるのではなく、できることは自分でやらせること、一人の大人の選手として尊重し、こちらで管理をするのではなく自己管理をさせることなどが挙げられます。

技術面では、デフの選手という特徴を考慮しつつも、なるべく今まで自分がやってきたこと、技術、練習と同じことをさせてあげたいと思い指導してきました。就任当初、音のない中での指導は非常に難しかったですが、言葉で伝えるよりもなるべく見本を見せることを実践しました。

昨年の世界選手権ではチームがバラバラでうまく回らず、自分のことしか考えていないような行動が多く見られました。残念ながらそれが原因でぶつかった選手同士もいました。技術面でも自分達がどのように戦わなくてはいけないのかが分からず、日本の特徴を出せぬまま5位という結果に終わってしまいました。私自身も監督に就任して1年足らずで、選手一人ひとりを理解できていなかったことも敗因の一つだといえます。

結果的には世界選手権で勝てなかったことが、選手を真剣にさせ、悩み、本当に勝ちたいという気持ちを生むことになったのだと思います。

デフリンピックの大会期間中、女子バレーチームは私の監督就任当初に感じたことが全て修正されていました。一人が皆のために、チームのために何をしたらよいかを考え、とにかく結果を残すために必死でした。チーム内では色々あったのだと思いますが、いつしか選手達はそれを自分で解決できるようになっていました。これにはスタッフ一同本当に驚きましたし感動させられました。ソフィアに入ってから2週間という今まで過ごしたことのない長い時間を選手達と過ごしました。試合期間に入ってから、一日一日成長していく選手達を見て、もっと多くの時間を過ごすことができれば、もっといいチームができると強く感じました。選手の成長の影にはスタッフのサポートが不可欠です。一人ひとりの役割を全うし、スタッフ同士も非常に雰囲気良く、なんでも話し合える仲だったことも、選手にとってプラスに動きました。

試合内容を振り返ると、レフトエースの二人（山崎、安積梨絵選手）への依存と負担が非常に大きかったです。攻撃はもちろん守りの面でも中心となりました。レフトに比べると、ライト、センター、セッターがもう少し機能していればもっと勝負できたのかもしれませんが。特にセッターはバレーボールにおいては最重要ポジションとなるので、今後も強化が課題になってきます。

バレーボールはリズムが大切なスポーツです。一人が長い時間ボールを持ちプレーすることはできないので、必ず自分の前後には他の人がボールを触ります。そのため、自分以外の人に頼ったり、人を助けたり絆が深くなければ絶対に相手には勝てません。特に日本のように小さく、個人レベルでは弱くてもチームとしての繋がりさえあれば勝つことができるスポーツです。今回日本チームはまさにそうやって勝つことができました。

すべきことはオリンピックでもデフリンピックでも同じだということがよくわかりました。しかし、優勝したウクライナに勝つためには、絆だけでは勝てないのも事実だと思います。根本的な強化体制を変えていかなくては、これ以上の成績を収めるのは困難だと感じました。日本人は生まれつき体格やパワーは外国人には劣ります。その諸外国と同等に渡り合うためには

緻密なプレーが必要になります。そのためにはいかに継続して練習を積み重ねていくか、代表選手が多くの時間を共に過ごし練習するか、お互いのことを理解し合うかなど時間が必要です。練習の頻度を増やし、選手が地元に戻っても徹底して意識して練習ができる環境を作り上げなくてはなりません。

1年10ヶ月という非常に短い時間ではしたが、選手やスタッフに恵まれこのような結果を残すことができたと思います。しかし、このチームはやらなくてはいけないことがまだまだ山積みで、現場のみならず組織としても変わっていかなくてはいけないと思います。そのためにはデフリンピックやデフスポーツ全体をもっと広げていければと強く感じました。

コーチ 村井 貴行

まず、この日本代表女子デフバレーチームにコーチとして携わる機会を与えて下さった監督ならびに協会関係者の方々には深く御礼を申し上げます。そして最高のスタッフ、選手の皆様には感謝の気持ちでいっぱいです。

今回のデフリンピック銀メダルという結果は、金メダルを目指していたことにおいては悔しい部分はありますが、前年度の世界選手権5位の結果から見ても誇れるものであったと思います。日本代表女子デフバレーボールチームは外国チームに比べ体格に劣る部分が多々ありましたが、ひたむきな練習態度、体調管理、最後まで諦めない姿勢、そしてチームの絆で勝ち取ったものです。これは、スタッフを含めたチーム全員が同じ方向を見ていないとできません。簡単そうで難しいことです。日本代表として試合に臨む意志が強かったと感じました。

私自身、チーム運営に携わる上で心がけていたことが一つだけあります。それは、監督の考えを尊重し、必要以上に前に出ないようにしたことです。ろう者の情報を得る手段は健聴者に比べ限られている部分があり、解釈の仕方も個人個人で違うと考えられます。そういう面で指示は統一してチームの長である監督から出た方が良く考えました。また、運営している立場のスタッフの意見がバラバラだと選手が困惑してしまう可能性があります。幸いにも、スタッフの考えは統一されていたので、そのような心配はありませんでした。選手自身も、始めの頃は自分本位な考えが見え隠れしていましたが、時が進むにつれチームのためを考えた行動や言葉が増えていきました。これは、チームとしても個人の成長としても喜ばしいことでした。

私は、コーチとして練習から大会本番まで客観的にこのチームを見てきました。その中で以下のことを感じました。

- ①日本代表にも関わらず金銭面、仕事の考慮面の選手個人負担が大きすぎるため、選手のモチベーションが上がらず、努力する動機は内発的なものに頼るしかないということです。
- ②チームスポーツなので月一回の宿舎では技術的な部分の習熟度を高めるには限界があります。
- ③守備に関しては、個人が持っている技術以上のものを試合で出すことができますが、攻撃面においては改善の余地があります。
- ④基礎体力が乏しいです普段の練習にかけられる時間と環境の確保が難しいためだと思われます。
- ⑤狩野監督のおかげで、Vリーグプレーヤーや久光製菓の選手と一緒に練習することで、プレーの質やバレーボールに対する考えに幅が生まれました。これからも、もっとこういった団体や選手の力を借りていくべきです。

これからも課題はたくさんありますが、今回のデフリンピック

クを通して、日本代表女子デフバレーボールチームは上昇気流に乗れたと思っています。その流れを絶やすことなく、発展することを願っています。そして他の競技の見本となりデフスポーツ界全体を引っ張ってみたいと思います。

最後に、多くの方々に応援、ご協力していただき誠にありがとうございました。

スタッフ 大川 裕二

<役割>

2009年から2013年まで、4年間の主な業務はチーム編成、予算の確保、強化合宿運営、海外大会派遣事務等、チーム運営の全般を担いました。

<振り返り及び特記事項>

・路線転換について

日本女子バレーは、2001年大会に金メダルを獲得し、2005年2位、2009年3位と順位を落としてきました。2009年まで、日本女子バレー代表監督は、聾学校等教諭が勤めてきましたが、初めてプロバレー経験者に監督を依頼しました。ろう者と全く関わりのない監督を導入するに当たり、種々の軋轢が生じました。しかし、2013年デフリンピックで、強豪外国チーム監督の指導レベルの高さやチーム力の向上を見ると、日本の路線転換は、正しい方向であったと考えます。

・スタッフ構成

2013年デフリンピックのスタッフは、健聴者は狩野監督、中川トレーナー、村井コーチで、いずれも日本のトップレベルで活躍しており、狩野監督、中川トレーナーは世界レベルで戦った経験があります。村井コーチは、非言語コミュニケーションによるバレー指導の経験がありました。マネジメント業務は、統括と財務、庶務に担当を分け、聴覚障害のあるデフバレー協会理事が担いました。両者のつなぎ役として、江戸川手話通訳者協会の全面的な協力を得て、飯塚手話通訳に依頼しました。日本の団体スポーツで唯一メダルを獲得した競技として、女子バレーチームのスタッフの能力と採用基準、指揮系統と業務分担、コミュニケーション方法、健聴者と聴覚障害者の割合などにおいて、聴覚障害者・健聴者・手話通訳者の3者共同によるデフトップスポーツ強化のモデルケースになり得ると思います。

・デフリンピック派遣費

デフリンピックに日本代表として出場するために、負担すべき金銭的なハードルが余りにも高すぎます。

一方パラリンピックは、日本障害者スポーツ協会が派遣元で、国からの補助金3分の2を除いた3分の1を協会の予算の中から捻出しています。同じ障害者スポーツでも、パラリンピックは国の補助金やスポンサー7社からの協賛金などで、選手・スタッフの金銭的な負担はほぼゼロで済みます。

デフリンピックは、ろうあ連盟が派遣元であり、ろうあ連盟はグッズ販売や加盟団体へ寄付活動を行い自己負担の軽減を図っていますが、ほとんどは競技団体の負担になっています。

確かに、パラリンピアンも本大会への出場権獲得のための海外遠征などの費用で、1人当たり年間100万円以上の自己負担が生じているとのことですが、日本のデフバレー選手は仕事をしながらのプレーのうえ、2011年米国遠征、2012年アジア地区予選、世界選手権の派遣費や強化合宿費など、年間で約30万円程度の自己負担があります。その上に、本大会への出場にかかる多額の費用を選手が用意しなくてはなりません。経

済的な負担は、選手のモチベーションを削いでしまいます。今後はお金のある者がデフリンピックに出場するという危険性もあり得ます。

2001 年、2005 年、2009 年、2013 年と 4 大会を振り返ると、自己負担の重さに関して、毎回同じ内容のレポートで改善要望をしていますが、対策は施されているとは言えず、逆に 2013 年は自己負担額が増えてしまいました。財政面で、4 年後に同じことを繰り返さないためにも、問題点を炙り出す必要があります。

ろうあ連盟スポーツ委員会は、パラリンピック選手と同等の環境を与えられるよう、連盟組織の枠を超えて、デフリンピックの現場を預かる各競技団体と定期的に討議する新たな組織を設けて、課題の抽出を行い、その対策を講じていくべきです。

また、デフスポーツの中期長期計画を立てて、広く行政やスポーツ関係機関、民間企業に支援を訴えていくべきであると考えます。東京オリンピック・パラリンピックが開催される 7 年の間に、デフスポーツのあり方を示さなければならないと思います。自らアクションを起こしていかなければ、今後、パラリンピックに追いつけないほどの格差が生じるのではないのでしょうか。

・デフバレーボール協会の資金作り

- ①スポンサー 6 社
- ②日本バレーボールリーグ機構寄付
- ③ WESYM（インターネット募金）
- ④日本代表応援 T シャツ販売収益

以上の寄付等を派遣費の一部に充てることができました。特に、株式会社日立東日本ソリューションズ、株式会社トランスコスモス、日本バレーボールリーグ機構のご支援ならびにご寄付いただいた皆様へ心から御礼申し上げます。

惜しくも金メダルは逃したものの、2012 年 8 月世界選手権で 5 位と惨敗したチームが、わずか 1 年でチャンピオンのウクライナを脅かすほど成長できたことは、勝利に値すると考えています。献身的にチームを支えていただいたスタッフ、全力を出し切った選手、多大なサポートをいただいた日本デフバレーボール協会、全日本ろうあ連盟、応援していただいた皆様に重ねて感謝の念を申し上げます。

トレーナー 中川 菜保

トレーナーとして選手のコンディショニング、トレーニング、ケアのサポートを担当しました。主に、大会期間中の生活における選手の体調管理、試合に向けたコンディショニングやトレーニング、傷害のケア、試合前のウォーミングアップ、試合後のクーリングダウン、栄養面でのアドバイス、選手自身が口にする食品や医薬品に対する情報提供とドーピングコントロールを踏まえた選手自身の自覚に対しての注意喚起と啓蒙をしました。事前の準備として、トレーニング実施の習慣づけと栄養に関する情報提供を行いました。

＜栄養＞

試合日程は、これまでにチームとしても経験のない連戦とタイトな予定であったため、本大会期間中の体力低下や体重減少、疲労によるパフォーマンスの低下を極力避けるよう、食事量を減らさないことを目標に、最低限必要とする食品提供の中でバランス良く摂取することに加えて、レトルト食品で補ったり、炊飯器を持参して白飯を炊き、試合前後の補食の準備をしました。

＜コンディショニング＞

チェックシートを作成し毎日の検温、体重測定、睡眠時間、

体調、傷害部位の状態などを記録し、選手のコンディショニング把握に努め、体調不良等の場合に迅速に対応できるよう注意しました。本部ドクターとトレーナースタッフとも情報交換を密にし、チーム状況を相談しながら必要に応じて助言や対応をしてもらうことができたので、選手全員が大きく体調を崩すことなく、最後まで万全のコンディショニングで試合に臨むことができました。

＜トレーニング＞

練習時間や選手達の状態を考慮して、現地入りしてからも実施しました。チューブなどの小道具や自体重で可能なトレーニングメニューを作成し、選手個人の運動量や疲労度、課題等に依りて行い、各自の部屋でも取り組むことができるように工夫しました。

＜医薬品＞

選手としての自覚を持ち、自身の体調や服用薬についての知識などを得るため、JADA に依頼して事前にアンチドーピング講習会を受講しました。薬の服用の仕方や医師への相談、申請手続きに関する情報など、自身が口にするものは自己責任が伴うことを事前に学びました。

◆反省・まとめ

試合数や大会期間の長さなど、スケジュール的に選手の疲労やコンディショニング維持についての懸念がありましたが、事前合宿からの取り組みにより選手各自が食事を確保したり、規則正しい生活を心がけたり、積極的に疲労回復に努める等の心掛けをしたため、全期間を通じて、大きく体調を崩すことなく試合を迎えることができました。現地に入って、チームとしてのまとまりや試合に勝ち上がるにつれての緊張感や疲労度を考えると、これは大きな成果だと言えます。選手からの若干の不調の訴えはありましたが、状態把握が早めに来たこと、本部スタッフとの連携により対処もスムーズにできたことが幸いしました。また、昨年の世界選手権でもソフィアに滞在しており、生活全般について多数の選手が環境も理解していて順応が早かったことも理由として挙げられます。

外傷に関するコンディショニングとしては、ベテラン選手が痛みを抱えながらの試合参加となりましたが、ケアを継続しながらコンディショニング維持に努めました。セルフケアが徹底できたこともあり、痛みでプレーができない選手を出すことなく試合に臨むことができました。スタッフの尽力により、氷や水も十分に入手することができたため、給水やケアについても問題なく十分に準備をすることができました。

総じて、今大会では長い試合期間をいかに乗り越えるか、選手のパフォーマンスを十分に発揮できるかを念頭に置き、セルフケアや日常生活での環境整備を中心に取り組みました。その結果、選手自身の意識が日を追うごとに高まり、試合へ向けての良いモチベーション、コンディショニング作り、引いてはチームの結束力に繋がっていったと思われます。スタッフ選手全員で得られた成果に心から感謝します。

手話通訳 飯塚 佳代

＜役割＞

デフリンピック期間中は、主に選手と監督間の情報保障、スタッフ間、またスタッフと現地通訳者間の情報保障を務めました。具体的には監督から選手への練習メニューの説明やアドバイス、選手からの質問回答、トレーナーによるウォーミングアップやトレーニング、ケアの指示、試合前の監督の話や、タ

イム時のアドバイス、試合後の総括やタイムスケジュールなどについて通訳を行いました。また、本部へ試合結果の報告を行いました。その他、TD 会議、チームの全体ミーティング、スタッフミーティング、試合で食堂が使えない時の食事手配、練習会場が無い時の練習場の確保、TD への試合ユニホームの色の確認、チームの洗濯や買い物への同行、スタッフ間での雑談の場面等で、通訳活動を行いました。

<個人反省>

私は2年前にこのチームの手話通訳となりましたが、当時は競技のルール程度しか知識がありませんでした。選手にとって少しでも分かりやすい通訳になれるよう学習をしましたが、戦略などを素人に分かりやすく説くような書籍はなく、苦戦しました。GM や監督に教わりながら、少しずつ理解しましたが、今でも競技を充分に理解できているとはいえません。選手の動きを見て、元オリンピック代表選手である狩野監督と同じように感じることは無理ですが、バレーボールの奥深さや魅力については理解することができたと思います。

選手はそれぞれ聴力レベル、育成環境、居住地、年齢などの違いにより、手話レベルの差があります。選手同士でのフォーメーションやトスの確認などの際に手話を読み取れない、読み取れてもバレーにふさわしい日本語に変換できないこともあり、もっとこの競技についての知識があればと思うことが何度もありました。このような未熟な手話通訳者であったにも関わらず、無事乗り切ることができ、選手も良い成績を収めることができたことは、スタッフや関係各位の手厚いサポートのおかげであると実感し、心より感謝を申し上げます。

<大会の手話通訳を考える>

デフリンピックにおける手話通訳者に求められることといえば、一般的な手話通訳のスキルだけでなく、専門的な知識はもちろん、長丁場を凌ぐ体力、環境の変化への適応力、遠征を共に過ごす協調性、チームスポーツを支えるコミュニケーション力などがあげられます。時には陰の存在ではなく、いちスタッフとして仕事を任されることもあり、一般的な手話通訳のケースとはかけ離れた現場であると感じます。

私を含め、日本における手話通訳者というのは、労働対価の低さから、ほとんどが専業主婦のパート的な活動であり、手話通訳者派遣事業は手話通訳者の配偶者の収入で支えられている制度といっても過言ではありません。そのような状況であることから、合宿や遠征などの通訳に出かけることに家族の賛同が得られず、デフスポーツの手話通訳者が育たないという側面があります。手話通訳者の社会的な地位向上が行われない限り、良い通訳者は育ちません。良い通訳者が育たなければ、ろう者の活動にも影響が出て然るべきであり、デフスポーツを含めたらう社会の発展のためにも、手話通訳者の社会的地位向上は必須の課題と考えます。今後、国際手話の技能も含め、国際大会で活躍できる手話通訳者の育成と、その人材の相応しい対価での採用を期待したいです。

<試合中の手話通訳者の立場について>

疑問があります。以前の国際大会では、試合中の手話通訳者は「影」であり、監督の横に立って試合を観戦することが許されていました。今大会は TD が変わったこともあってか注意されることがあり、審判によって判断がまちまちでした。その後 TD から直接指導を受け、ベンチの後ろの椅子に移動、試合中立ち上がることを禁じられました。そのため、監督が選手に声

を掛ける際、通訳に入れませんでした。狩野監督は必要な手話単語を覚えるなどしてすぐに対応してくれたので、試合の進行に支障をきたすほどのことはありませんでしたが、ルールが突然変わったことへの違和感は否めません。この件は、ぜひ日本から正式なルートで質問をし、正式な回答を求めたいです。

<その他>

日本のピンバッチのデザインは他国に比べて、素晴らしく良かったと感じています。反面、ジャージは素材が季節に合わず、非常に暑かったです。また、開会式の会場前での他国とのコミュニケーションにおいて、日本人は消極的であるため、向こうから声をかけてもらえるような工夫があれば交流がしやすいと感じました。例えばメキシコチームの大きな帽子などは注目的であり、様々な国の選手が声を掛けていました。

スタッフ 古徳 愛子

①団体内の担当とその内容

私は今回、バレーボール女子チームマネージャーとして任務を遂行しました。昨年のデフバレーボール世界選手権大会は同じソフィア市で行われましたので、滞在中に何が必要だったのかを思い起こしながら準備を進めてきました。メダルを獲得するために選手のパワー原動となるものは何か、中川トレーナーと現地の食事内容を想定し、国内合宿で飲み慣れているスポーツドリンク粉末、炊飯器とお米を日本から持ち込みました。予想通り毎食同じものが出てくる料理にそろそろ飽きてきた頃に白いご飯を炊いてあげると食欲が出てくるのが分かり、持ち込んで良かったと思いました。

現地では水や捕食を調達し、スタッフ間で交代し洗濯しに行きました。その際、昨年の世界選手権大会にお世話になった現地の通訳の方の紹介で来ていただいたアディ氏が頑張ってリサーチしてくださったおかげで、あまり大変な思いはしませんでした。

しかし、残念なことがありました。試合が夜間に行われる日があり、この日の夕食は本部が当日に準備してくださると思っていましたが、前夜就寝につく頃、突然本部から翌日の夕食準備ができたので取りに来てほしいとの電話が入ってきました。こちらの事前確認が足りなかったのがいけなかったのですが、遅い時間に連絡が来て戸惑いました。配給されたものを監督、トレーナーに確認してもらう必要があるため、至急とはいえ、時間帯を考えて早めに連絡してほしいと思いました。

渡された夕食内容はプレーンなパン、バナナ、栄養食品ビスケット、ジュースでしたが、パンは時間が経てば経つほど硬くなり、体力を消耗した体では食べる気が失せてしまいます。贅沢と思われるかもしれませんが、事前に団体に確認し、希望を取り入れて準備するか、予算の範囲で各団体に準備してもらうか、次のために考慮していただけたらと思います。当初ホテルがお弁当を作っていただくことになっていましたが、何らかの理由で急に受け付けなくなったそうです。今回だけではなく、前回台北大会もビーチバレー会場では衛生上とともに食事を摂れる場所がなくホテルレストランは朝食のみ、夕食は自己負担で割高のため毎日摂れず、こちらがお弁当をビーチバレー会場まで届けに行来していました。

スポーツ選手は食にありきで、世界を相手に戦うためには食生活も大事ということを念頭に入れて日本選手団として下準備をしっかりとお願いしたいと思います。

②反省、まとめなど

出発前から蓄積してきた疲れが取れず、ブルガリア到着2日後に急性胃腸炎でダウンしてしまいました。1日しっかりと休養をとり大事に至らず済んだのは良かったのですが、自身の健康に注意を向けなかったことを反省しています。

限られた期間で、食事後必ずスタッフで1日の流れを確認し、それぞれのやるべき役割がしっかりできたので、チーム力で準優勝の成果を出せて良かったと思っています。

主将 柳川 奈美子

デフリンピックは私達にとって大きな舞台であり、この大会のために何ヶ月も練習を積んできました。前回の台北大会では準決勝戦でアメリカに敗れたこと、昨年世界選手権でベラルーシに敗れ5位に終わったことに対する悔しさを忘れず、リベンジを果たすため、12年ぶりの金メダルを獲得するという目標を掲げて挑みました。

しかし、心に余裕がなく不安な気持ちがあったからなのか、色々と考えこんでしまう時もありました。

そんな時に、チームの仲間からもらった刺激のある言葉に胸を打たれ、気持ちを切り替えることができました。

『自分の役目とは何か。わたしはリベロ。戦うのは相手。自分らしく出していこう。』です。予選で勝ち進んでいくうちに自分の中で、どんどん熱い気持ちが込み上げてきました。

結果は予選で2位となり、準々決勝戦ではポーランドに勝ち、準決勝戦では前大会で敗北したアメリカを大接戦の末に倒し、決勝戦へ進むことができました。決勝では予選でフルセット負けした世界女王のウクライナに挑みましたが敗北してしまい、惜しくも金メダルは逃してしまいましたが、見事銀メダルを獲得することができました。

狩野監督をはじめ、スタッフや仲間達と最後まで諦めず、笑顔で励まし合いながら戦い抜くことができたという意味で、とても価値のある銀メダルになったと思います。出場までの3年間のこの銀メダルに溢れていて、ずっしりと重く感じ、一番良い色だと感動しています。皆と一緒に過ごしていくうちに、私自身が刺激を受け、見えなかったことが見えてきて、学ぶことがとても多く、デフリンピックとは自分を成長してくれる場所だと改めて実感することができました。

デフリンピックは知名度がまだまだ低く、メディアやスポンサーもいないため、遠征費などの自己負担が大きいです。それでも私達にとって大きな舞台であり、日の丸を背負い、メダル獲得という目標に向けて日々頑張っている選手達がたくさんいます。そんな選手達を応援するために、これからどのように知名度を上げていけるかを考え、活動していきたいと思います。

最後に、私達のために、たくさんの応援や支援をいただいた皆様には、本当に感謝しております。また、現地では他の競技の選手達や現地の人達も駆けつけてくれて、準決勝戦や決勝戦と一緒に応援して、盛り上げて下さいました。本当に心強かったです。ありがとうございました。

副主将 菅谷 美穂

私はこのデフリンピックという大きな舞台で戦うのは2回目です。今回は銅メダルで終わったので、ソフィアでは絶対金メダルを取るために戦う準備をしてきました。予選では世界選手

権で負けた相手のベラルーシに勝ち、準決勝では4年前に負けたアメリカに勝ち、リベンジをすることができました。決勝は予選でフルセット負けしたウクライナでしたが、リベンジできず結果は銀メダルでした。世界は長身でそれに比べて平均身長が低い日本チームがここまで戦えたのは今まで積み上げてきた日本らしいバレーができたからだと感じます。

今回のデフリンピックで、4年前とは違う経験をたくさんすることができたので、この環境を与えてくださったことに感謝しています。今、チームのために自分ができることは何か、たくさんのことを考えさせられました。このチームの副キャプテンという仕事を与えてくださったこと、自分が強くなるため、成長するため、普段経験できない仕事をやらせていただいたこと、まだまだ未熟な自分がこのチームの中で仕事ができることを誇りに思います。

最後まで戦えたことは、今まで多くの応援をしてくださった方、バレーをする環境を与えてくださった方のおかげです。たくさんの方が支えてくれたからこそここまでバレーができました。感謝の気持ちを忘れずに、今までの経験を糧にしていきたいと思います。ありがとうございました。

選手 宇賀耶 早紀

私は、センターとして予選、トーナメント戦合わせて計8試合のほとんどを先発出場しました。合宿でもセンターを何度かやらせていただきましたが、国際大会では初めてのポジションだったので不安が大きく、チームが勝利しても全体的な自分のプレーに納得がいかず、試合終了後でもどうしたら自分がチームの勝利に貢献できるのか、どんな攻撃が必要なのかを考えていました。しかし、試合を重ねていくうちに、身長の高い外国人選手に対応するために、左右の動きとタイミングを合わせるによりAクイックでも点数がとれるようになりました。また、センターとしての仕事でもあるブロックでは、相手のスパイクの方向を見て何度もワンタッチを取ることで、日本チームの攻撃に繋げる役割が果たせたと思います。

決勝戦の相手は、予選でフルセットまで戦った相手です。日本チームとしても最後の試合であり、必ず勝つという熱い想いで試合に臨みました。しかし、試合が始まると日本のリズムがなかなかとれずに相手にリードされたまま3セットを奪われて試合終了となりました。決勝戦で1セットも取れなかったことは、大変悔しい結果となりました。センターとしての経験も浅く戸惑いもあり、そんな自信のなさが消極的な攻撃やディフェンスとなってしまったこともありました。ですが、コートの中のメンバー、ベンチのメンバー、監督、コーチ、スタッフ皆の励ましやカバー、想いがあったからこそやり抜くことができました。この2週間で自分がセンターとして、一員としてチームに貢献できたこと、4年間一緒に戦ってきた仲間と決勝戦という大きな舞台に立ち、銀メダルを獲得したことをとても誇りに思っています。

そして、日本チームが銀メダルを獲得したことで、多くのサポーターやメディアが動いて下さっています。これまでデフリンピックを知らなかった方も、少しずつ興味を持ち始めている様子も見られます。私たちの4年間の総まとめとして最後に成果を出したことで、デフリンピック知名度向上にも繋がっていることを大変嬉しく思います。

最後に、この4年間支えていただいたスタッフ、応援していただいた皆様には感謝の気持ちでいっぱいです。金メダル

には届きませんでしたが、銀メダルを獲得し、感謝の気持ちとして良い報告ができました。私を支えて下さった皆様、本当にありがとうございました。

選手 安積 梨絵

3年間合宿でやってきたことをデフリンピックで全部出し切りました。

2012年の世界選手権が終わった後から2013年デフリンピックまで本格的なトレーニングを始めたおかげで技術力がアップし、パワーも上げることができ、試合で全力を出せてよかったです。満足のいくプレーもたくさんありました。

台北とブルガリアを比べると、今回のブルガリアデフリンピックの方が楽しかったです。色々なコンビも増え、年齢も若手中心になりました。

去年の世界選手権が5位だったのはすごく悔しかったです。正直に言えばその時はチームがバラバラでしたので、そういう状況も踏まえた5位だったのだと感じ、改めて反省しました。

そこから自分を変えて色々な人と付き合い、色々な話を聞き、アドバイスなどしながらだんだんとチームも良くなっていき、やっと心が一つになりました。本当に良かったです。そのおかげで決勝まで行けたのだと思います。選手だけではなく、スタッフと共に心がひとつになり、決勝まで行けてすごく嬉しかったです。

台北の時は準決勝でアメリカに負けましたが、今回はリベンジできて良かったです。ラリーも長く、2セット目の点数も32-30と、とても良い試合ができました。苦しかったですが、選手達も負けたくない、絶対に勝つという気持ちが強かったので、アメリカを倒せて本当に嬉しかったです。今でも忘れません。

決勝は2大会連続優勝であるウクライナと戦いました。予選リーグは2-3で負けましたが、ウクライナから2セットを取ったのは日本が初めてでした。接戦で負けた悔しさもあり、決勝でリベンジする思いは強かったのですが、結局はストレートで負けてしまいました。

お互いプレーを分析し合うこともしましたが、メンタル面でも負けてしまった部分があったように思います。

目標は「金メダル」でしたが銀メダルになってしまいました。悔しさもありましたが、予選リーグでは2セットも取り、自分でも満足のいくプレーもたくさんあったので、もっと練習すれば良かったというような後悔の気持ちはありません。すごく楽しかったです。結果は2位でしたが、皆の顔を見ると優勝したような顔で輝いていました。

背が高くブロックも簡単に決められる外国人選手に比べ、日本は背も低くブロックにもかかりやすいです。しかし、最終の点数は日本が一番多く取っており、これほど粘り強く戦えるのは日本しかないと思っています。

選手達の心が一つになって、最高のプレーもでき自分なりに満足できました。感謝しています。ありがとうございました。

選手 安積 千夏

初めて合宿に参加した時は日本代表になりたいという気持ちはありませんでした。しかし今井監督が亡くなり、姉からもう一度日本代表に戻るよう考えてほしいと言われ、日本代表に戻る決意をしました。合宿中にも何度もやめたいと思ったことも

ありましたが、今は最後までやってきて良かったと思います。

デフリンピックは世界選手権の時と比べ他国チームのメンバーが変わり強くなっていました。これがデフリンピックのだと驚きもあり勉強にもなりました。いろいろなトレーニングや練習もたくさんおこないきつかったのですが、そのおかげで2位になれたのだと思います。

試合の時、コートにはあまり出られませんでした。交代した時はとても緊張しましたが、コートに出られたことは本当に嬉しかったですし、今までいろいろやってきたことを出せたのでよかったと思います。

チームワークも世界選手権の時と違ってよくまとまっていたし、技術面も上がり、コミュニケーションもたくさん取れていたの、楽しくバレーをすることができたと思います。

予選でウクライナと試合をして負けてしまいましたが、2セットも取れたことは嬉しかったです。アメリカとの試合もすごい接戦でしたが勝って良かったです。応援している側もすごくドキドキしました。決勝はまたウクライナとの試合で、皆緊張しすぎたせいか日本らしくないプレーだったと思いました。頑張った結果負けてしまいましたが、世界選手権より良いプレーがたくさんありまし、表彰式の時は皆良い顔をして銀メダルをもらうことができたので悔いはないです。いろいろとありがとうございました。

選手 河尻 奈美

世界2位、銀メダルを狩野 JAPAN として獲得できたことは大変嬉しかったです。前の今井監督と狩野監督の下で4年間、仲間と共に最後まで諦めずに色々乗り越えて来られたと思います。

代表合宿を通して、自分のプレーの苦手な所や課題をたくさん見つけ、地元の仲間に支えられながら克服に向けて頑張り、代表合宿でコミュニケーションを取り解決し、本当に皆で努力して来ました。その成果があったからこそ、メダル獲得に繋がったのだと思います。

“絶対目標”にしていた金メダルを逃してしまったことはすごく悔しいですが、皆から教わったことはたくさんあり、それをこれからも忘れずに成長した部分を維持していきたいと思います。

また、仲間やスタッフ、応援していただいた方々と共に試合中の感動などを味わったり、声を出し合ったりしながらプレーできたことは良い経験になりました。

準決勝のアメリカ戦では、絶対に負けたくないという気持ちが強く、勝つことだけを考えました。台北大会のリベンジをしたいという強い気持ちが当時のメンバーからも伝わって来まし、日本は強いという証拠を見せつける気持ちで試合に臨みました。

ミーティングで監督から聞いたアメリカに対する注意点やポイントなどを意識しながらプレーしました。チーム全員の気持ちが一つになって戦うことができたので、すごく燃える熱い準決勝になったと思います。チームだけでなく、日本中、世界中の人々、特に家族からの支えや応援をたくさんしていただき、ありがたいの気持ちでいっぱいになりました。私は幸せだと感じました。

自分の反省点や課題もたくさん見つかりました。特に調子が悪い時どう切り替えて試合に臨むかが難しいと思いました。地元の練習で一つずつ克服できるようにこれからも頑張りたいと

思います。

デフ日本代表になり、自分自身が挨拶や感謝はもちろん、マナーや常識などを守ろうという気持ちが一層強くなりました。全ての人に対しての思いやりを常に持つことの大切さも学びました。周りを見て、気付いたら自ら行動することも意識するようになったと思います。代表として誇りを持って行動できたこと、デフリンピックに参加して大きな舞台でプレーできたことは一生の思い出になりました。これからの生活でも気を引き締めて頑張っていこうと思います。本当にありがとうございました。

選手 長澤 みゆき

日本デフバレーボール協会女子バレーボールチームとして銀メダルを獲得することができました。チーム内で選手達がお互いにフォローし合い、自分にできることを精一杯行った結果です。また、大会期間の監督やトレーナーによる生活面の徹底した管理が結果に繋がったのではないかと考えています。2012年ブルガリア世界選手権での経験がデフリンピックに活かされました。

ウクライナチームに負けて金メダルを逃してしまいましたが、「ウクライナはやはり強かった」としか言いようがありません。決勝戦で最初から全力で勝ちに来たウクライナに対して、日本は緊張からなかなか本調子を出せずにいました。途中で好プレーがいくつかありましたが、それでも波に乗れずリードを許したまま負けてしまいました。ただ試合を観て祈ることしかできない自分をもどかしく感じました。ウクライナとの勝ちへの執着心、ハングリー精神の差を垣間見た気がしました。

約2週間を選手12人が揃って同じ地で生活するので、トラブルは当然起きます。少なからずチーム内でいざこざがあり、プライベートと試合を区別できずチーム全体に悪影響を与えてしまう選手がいました。精神面の未熟さゆえに起きてしまったことですが、それに対してフォローできなかった私達周りの選手の力不足も反省すべきことの1つです。監督やトレーナーが選手の精神面をフォローしてくださったので最後には12人＋スタッフが揃って笑顔で終わることができました。

選手 高良 美樹

初めてデフリンピックに参加し、貴重な経験を得ることができました。家族を始め、監督、スタッフ、沖縄聴覚女子バレー部の皆様や多くの方々に応援、ご支援していただき、心から感謝の気持ちでいっぱいです。

私たち日本代表チームは金メダル獲得を目標に日々練習を重ねてきました。毎月の合宿は千葉、埼玉、兵庫などと移動も大変でした。隔週に招集される月間は体調管理にも気を配りました。厳しい練習中にはお互いに声を掛け合い、夜は遅くまでミーティングを行いチームの結束をはかりました。そうして、チームの目標の一つに挑んだ決勝戦で敗れてしまった時はとても悔しかったです。

しかし今、大会を終え振り返ってみると、チーム一丸となって戦えたことに私は心から満足しています。特に準決勝の接戦、アメリカ戦を制した時の感動、皆の笑顔と涙はきっと一生忘れることはありません。全力で戦い抜いた満足感と達成感が清々しい思いです。この銀メダルは私の宝物です。

選考会が始まって約3年半、本当にいろいろありましたが、ここまでこれたのも皆様のおかげです。長かったようであったという間でした。最高の2013年の夏を過ごすことができたことに、チームメイト、スタッフの皆様、今まで私を支えて下さった多くの皆様に感謝しています。これからも今の気持ちを忘れずに多くの人に接していきたいと思っています。本当にありがとうございました。

選手 藤井 美緒

始めてデフリンピックに参加し、ピンチサーバーとして試合に出ました。チームの流れを変えられるようにサーブを打ちましたが、あまり相手のカットを崩すことができずすぐに交代となってしまう、チームの流れを変えることができずとても悔しかったです。ベンチからは、観客席、相手のコートに負けないくらい仲間の応援をしました。試合に出られない選手の想いとスタッフの想いを背負ってプレーするコート内の6人とリベロの姿が心に響いた試合は準決勝のアメリカ戦でした。前大会では準々決勝でアメリカに敗れたので、今度は絶対に倒すとキャプテンでリベロを務める柳川選手が強い想いを語ってくれました。

初めはアメリカが先取してドキドキハラハラでしたが仲間を信じ、応援、サポートをし合い、どんどん日本らしいリズムと流れでアメリカを倒し、決勝へと勝ち進めた時はとても嬉しかったです。

決勝のウクライナ戦では3-0で敗れとても悔しかったです。12人とスタッフがいたおかげで、皆の心がもっとも一つになりました。

今井 Japan & 狩野 Japan のメンバーで良かったです。次回大会は、もっと技術を磨き、熱く、美しく、迅速で感動できるようなプレーをして決勝戦でウクライナを倒したいです。

選手 藤 裕子

デフリンピック出場4回目となり、台北大会に続き、セッターとして出場しました。

最近の動向としては、全体的に世界のレベルが上がってきて、特にウクライナ、ベラルーシ、ロシア、ポーランド等ヨーロッパ勢がレベルアップしていたことに驚きました。

怪我のこともあり、代表に復帰してからデフリンピックまで残り8ヶ月しかなく正直不安がありました。自分を信じて、体作りのため、仕事を辞めてまでトレーニングに集中しました。自分のプレーはメンタル面が強くなり、怪我をしていてもできるところまでやり切りました。本当に日本代表復帰して良かったです。監督、トレーナー、スタッフに心から感謝しています。

今回のデフリンピックは、『金メダルを獲得!』という目標を持っていましたが、残念ながら結果は『銀メダル』になりました。悔しくて涙が止まらなかったです。予選では、強豪のウクライナに3-2と2セットをとって負けましたが、決勝ではウクライナにも何とか勝てるはずだと思いました。ウクライナも、ビデオを見ていろいろと研究していて、さすがに強かったです。しかし、メルボルンのとき、1セットしか取れなかったため、今回は2セットを取ることができましたし、また、台北の時準々決勝で負けたアメリカにリベンジを果たせたので、大きな悔いはないです。

決勝まで勝ち続けてこれたので、毎日バレーができて幸せ

でした。チームの力で獲った銀メダルは、以前金メダルを獲った時以上に想い出深いデフリンピックでした。4度目の日本代表になれたことを誇りに思います。4回もデフリンピック出場でき、メダルを4個も獲得でき、こんなに幸せなことはいません。一生の宝物です。たくさんの方に感謝の気持ちでいっぱいです。応援ありがとうございました。

次世代の子供達にデフリンピックを通じ、未来への夢を持つことを経験させたいですし、育てていきたいです。また、デフリンピックの知名度をもっと広めたいと思っています。

選手 三浦 早苗

①成績に対する自己評価

前大会の台北デフリンピックでの成績、銅メダルを上回る銀メダルを獲得できたことは、とても大きな収穫だと思います。

決勝でウクライナにストレート負けしたことはとても残念ですが、前大会に出場した選手の話によると、以前よりスコアがかなり上がったとのことでした。今回プロの世界を経験している監督からご指導いただいたことで、金メダルにぐっと近づけたのだと思います。また、個人的にはサーブ、サーブカット、センター勢のさらなる強化を図れば金メダル奪回も夢ではないと思いました。

②反省・まとめ

＜チーム全体の反省＞

決勝トーナメントではセンター、オポジットの決定力が低くなったため、レフトの打数が増えたことでレフトの負担が大きかったです。常にレフトに打たせるという単調なプレーは避けて、できるだけレフト以外の選手も多く使って相手のブロックを割る必要があったと思います。また、ブロックフォローが甘かったです。日本はどうしても他国と比べて身長が低いので、いつもブロックされることを前提にプレーするべきだったと思いました。

＜個人の反省＞

サーブが弱く、ミスも多かったです。ウクライナのような攻撃パターンが多彩なチームには、強いサーブを打って崩し、単調な攻撃をさせていかないと苦しい展開になります。チームが苦しい時にサーブを決めて、積極的に流れを掴みに行くべきだったと思います。また、決勝トーナメントではほとんどクイックが打てず、自己アピールも弱かったためトスを上げてもらえる雰囲気を作ることができませんでした。そのため、相手のブロックからはノーマークとなった場面も多かったです。セッターとの信頼関係が弱かったように思います。セッターからの強い信頼を得るためには、常に強い自信を持ってプレーすることが大事だと思いました。

自分自身の攻撃パターンもたくさんあれば、レフトが苦しい時にトスをあげてもらえたのではと、今も悔やまれます。

今回の反省を生かして、今後も努めていきたいです。

選手 山崎 望

デフリンピックへは3度目の出場です。今度こそ、金メダルをとの気持ちで挑戦しました。準決勝でアメリカと戦い、リベンジしたいという気持ちを持ってプレーをしました。私だけではなく皆も同じ気持ちだったので凄く熱い試合になりました。勝利を掴み、リベンジすることができてすごく嬉しかったです。

そして、いよいよ決勝で世界一のウクライナにリベンジを果たす日を迎えました。ウクライナと戦いましたが、ブロックが高く攻撃もすごく日本はそれを止めることができず、残念な結果になりました。しかし、私は予選でウクライナに2セットをとれたことがとても嬉しかったです。ウクライナから2セットを取ったのは参加国の中でも日本が初めてだったからです。結果は銀メダルになりましたが、後悔はありません。私にとってはこれまで皆と共感しながら負けない気持ちでやってきた『金メダル』だと思っています。今回のデフリンピックに出場して、心から良かったと思います。

参考資料

ソフィアデフリンピックの派遣スケジュール

- 12年8月10日 競技団体を招いての選手選考基準面談
選考の理由を説明、確認→選手推薦基準確定
- 12年11月9日 ICSDおよびブルガリア政府からのデフリン招待状の受理
- 12年11月10日 連盟理事会・派遣委員会
派遣役員・評議員を決定、旅行会社決定
選手基準の最終確認
- ↓
- 競技団体へ派遣選手・スタッフ推薦名簿の提出依頼
- ・調査書
 - ・所属協会確認書
- 12年12月1日 選考・派遣に関する説明会
- 12年12月21日 予備エントリー締め切り
- 13年1月6日 選考・派遣に関する説明会
- 13年1月31日 派遣選手・スタッフ推薦名簿締切
- 13年2月2・3日 スポーツ委員会本委員会
選手団役員について確認
派遣選手・スタッフ推薦名簿確認
渡航スケジュール・ホテル確認
予算案・資金調達確認
- 13年2月28日 ICSD加盟団体（全日本ろうあ連盟）会員確認書締切
- 13年3月9日 連盟理事会・派遣委員会
派遣選手・スタッフを内定
事務局スタッフの人選（医療スタッフ、翻訳、手話通訳等）
- ↓
- 競技団体へ派遣選手・スタッフの健康診断提出依頼
- ・聴力検査書
 - ・健康診断書
 - ・ドーピング関係
 - ・ユニフォームサイズ表
- 派遣委員会決定後、内定選手の名簿を選手所属加盟団体へ送付。
内定選手の企業へ協力依頼文書送付。
- 13年4月10日 オーディオグラム締切→新規選手のみ
- 13年4月22日 提出依頼文書締切日
- 13年4月26日 オーディオグラムのICSD提出締切
- 13年5月11・12日 スポーツ委員会本委員会
現地体制確認
- 13年5月21日 航空券変更締切
- 13年5月24日 最終エントリー締切
（陸上・バドミントン・卓球・テニス・水泳・サイクリング・

	オリエンテーリング・ボウリング・柔道・ビーチバレー)
13年6月6日	秋篠宮同妃両殿下への御進講（石野理事長）
13年6月14日	最終エントリー締切（バスケット・バレー・サッカー）
13年6月21日	航空券発券
13年6月29日	本部会議
13年6月29日	壮行会（デフリンピック応援プロジェクトチーム）
13年6月30日	監督・スタッフ・本部会議
13年6月30日	JPC強化研修会（デフリンピック派遣前最終説明会）
13年7月4日	秋篠宮同妃両殿下の御接見
13年7月13日	理事会 選手・スタッフの最終正式決定（公式公表）
13年7月21日	結団式
13年7月22日	日本代表団 ブルガリアへ出発（一部競技チームを除き）
13年7月26日	開会式
13年8月4日	閉会式
13年8月5日	日本代表団一部競技チーム 日本へ帰国 在ブルガリア日本大使館 慰労会
13年8月6日	日本代表団 日本へ帰国

第22回夏季デフリンピック (2013 ソフィア) ブルガリア共和国

日本選手団 必携マニュアル



大会期間：2013年7月26日(金)～8月4日(日)
派遣期間：2013年7月22日(月)～8月7日(水)

一般財団法人 全日本ろうあ連盟

第22回夏季デフリンピック 必携マニュアル ～目次～

【内 容】	PAGE
1 出発日の確認	1
出発前の準備～帰国までの流れ	6
帰国日の確認	12
2 日程表	14
3 日本選手団組織図及び危機管理ネットワーク図	16
第22回夏季デフリンピック日本選手団名簿	18
4 結団式・解団式要項	23
5 ミーティングについて	24
事務所の開所時間について	25
競技スケジュール	26
6 ソフィア現地情報	27
日本選手団滞在ホテル情報	29
競技会場マップ	31
7 役員・選手必携(必読)	32
プロテスト(抗議)について	36
ドーピング検査の手順	38
オージオグラム規則	40
8 医療チームマニュアル(必読)	46
大会期間中に守っていただきたいこと	47
問診用紙	50
9 報告書作成について	52
10 緊急時の連絡方法について	53
11 ISCD執行委員会一覧	55
12 夏季デフリンピック技術規則	58
13 連絡先一覧	62
14 (参考)連盟への誓約書	64

日本出発日の確認

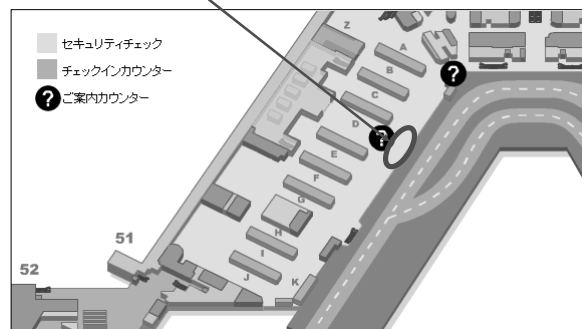
競技団体ごとに出発日と利用航空会社が変わっております。下記表より出発日と航空会社をご確認のうえ、成田空港へお越しください。

日本(成田空港)出発日	競技団体	利用航空会社
7月18日(木)	陸上(マラソン) 4名	ルフトハンザ航空(LH)
7月22日(月)	バスケットボール(男女) 30名	オーストリア航空(OS)
	バレーボール(男女) 35名	
	本 部① 6名	ルフトハンザ航空(LH)
	サッカー(男女) 52名	
7月23日(火)	本 部② 11名	オーストリア航空(OS)
	ビーチバレーボール 6名	
7月24日(水)	テニス 6名	ルフトハンザ航空(LH)
	サイクリング 7名	オーストリア航空(OS)
	バドミントン 3名	
	陸上: SAEGUSA/TAKAYUKI MR	
	水泳 10名	
	オリエンテーリング 2名	ルフトハンザ航空(LH)
	卓球 11名	
	本 部③: HAYASHI/TAKAO MR	
7月27日(土)	陸上 26名	オーストリア航空(OS)
7月30日(火)	柔道 8名	オーストリア航空(OS)
7月31日(水)	陸上: SHIMOBO/KENTARO MR	オーストリア航空(OS)

ご出発当日のご案内 オーストリア航空(OS)ご利用の方

成田空港での集合時間: **AM 8 時 15 分** ※時間厳守をお願いします。

集合場所: 第1ターミナル 南ウイング 4 階 案内カウンター前 (DとEカウンターの間)



搭乗手続き 成田空港第1ターミナルに到着されましたら、出発ロビー4階のご案内カウンター前までお越し下さい。ご集合後、本部スタッフがカウンターまでご案内致します。チェックインの際には事前にお選んだ航空券お控えとパスポートが必要になりますので予めご準備下さい。また機内に持込を禁止されているものは事前にスーツケースの中に入れ、必ず鍵をかけてください。(「出発前の準備」参照)

利用フライト オーストリア航空(OS)052便 AM11時15分出発 / ウィーン PM16:00着
○飛行時間 11時間45分 / 食事2回
乗継 オーストリア航空(OS)793便 PM17時25分出発 / ソフィア PM19時55分着
またはオーストリア航空(OS)799便 PM20時20分出発 / ソフィア PM22時55分着
○飛行時間 1時間30分 / 軽食1回

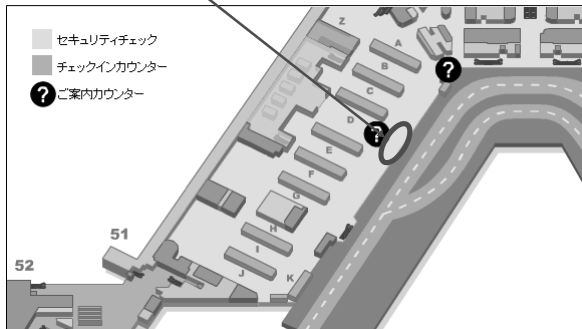
荷物宅配 お荷物を宅配便にて空港へ送られる方は、2日前の12:00までに「ヤマト運輸」へ直接依頼して下さい。集合場所へはお荷物ピックアップ後にお越しください。

ヤマト運輸申込先 TEL: 0120-01-9625
ヤマト運輸 HP 申込: <http://www.kuronekoyamato.co.jp/kuukou/kuukou.html>

ご出発当日のご案内 ルフトハンザ航空(LH)ご利用の方

成田空港での集合時間: **AM 9 時 40 分** ※時間厳守をお願いします。

集合場所: **第1ターミナル 南ウイング 4 階 案内カウンター前** (DとEカウンターの間)



搭乗手続き 成田空港第1ターミナルに到着されましたら、出発ロビー4階のご案内カウンター前までお越し下さい。ご集合後、本部スタッフがカウンターまでご案内致します。チェックインの際には事前にお渡しした航空券お控えとパスポートが必要になりますので予めご準備下さい。また機内に持込を禁止されているものは事前にスーツケースの中に入れ、必ず鍵をかけてください。(「出発前の準備」参照)

利用フライト ルフトハンザ航空(LH) 715 便 AM12 時 40 分 出発 / ムンヘン PM17:45 着
○飛行時間 12 時間 05 分 / 食事 2 回
乗継 ルフトハンザ航空(LH)1706 便 PM19 時 20 分 出発 / ソフィア PM22 時 10 分 着
○飛行時間 1 時間 30 分 / 軽食 1 回

荷物宅配 お荷物を宅配便にて空港へ送られる方は、2 日前の 12:00 までに「ヤマト運輸」へ直接依頼して下さい。集合場所へはお荷物ピックアップ後にお越しください。

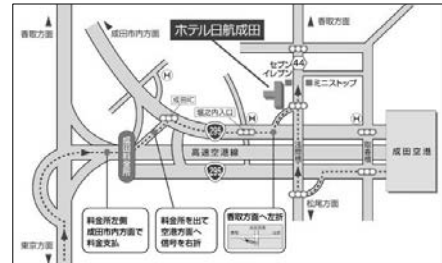
ヤマト運輸申込先 TEL:0120-01-9625
ヤマト運輸 HP 申込: <http://www.kuronekoyamato.co.jp/kuukou/kuukou.html>

前泊のご案内

グロリアアーツに前泊のホテルをお申込みされている方は下記ホテルまで各自でお越し下さい。

宿泊ホテル名 : ホテル日航成田 <http://www.nikko-narita.com/>
ホテル住所 : 〒286-0106 千葉県成田市取番 500
電話番号 : 0476-32-0032
チェックイン : フロントにてお名前をお申し出頂くか、お渡ししております予約確認書をご提示ください。なお、チェックインが遅くなる方は必ずホテルまで事前にご連絡をお願い致します。(チェックイン時間 PM15:00 より)※チェックインの際、翌朝の朝食券をお受け取りください。
お支払い : ご宿泊代金はご精算済みですので、現地でお支払い頂く必要はございませんが、お部屋でご使用頂いたお飲物代や電話代などは各自ご精算下さい。

地図 :



送迎 : 成田空港～ホテル間は無料シャトルバスが運行しておりますので、ご利用下さい。空港からの乗車場所・時刻表はホテル HP をご確認ください。
http://www.nikko-narita.com/access/bus_02.html

【7月21日(日) 結団式ご参加の競技団体の皆様】

結団式にご参加頂く皆様は、翌7月22日(月)、ホテルから成田空港まで専用バスをご用意しております。つきましては、ご出発当日は下記の通りご集合下さいませようお願い申し上げます。

集合日時 : **7月22日(月)** ※集合時間は利用航空会社により以下に分かれます。

○AM 7 時 30 分 集合 オーストリア航空利用ーバスケットボール/バレーボール
○AM 9 時 00 分 集合 ルフトハンザ航空ーサッカー

集合場所 : ホテル日航成田 1 階ホテルロビー

※7月22日(月)にご出発される結団式ご欠席の方は成田空港に直接お越しください。また成田空港の集合時間は先述の「ご出発当日のご案内」をご確認ください。

日本各都市より同日にお乗継ぎの皆様

日本国内線をお申込みの方で、日本出発日と同日のフライトをご利用の方は必ずご一読ください。

同日乗り継ぎの場合、ご出発の各空港でソフィアまでの搭乗券が発行され、またお預け頂くお荷物も、そのままソフィアまで運ばれます。(成田空港では再度チェックインの必要はなく、また受託荷物を引き出して頂く必要ありません)

例) 7月24日 名古屋空港 ⇒ 成田空港 ⇒ ソフィアのフライトをご予約の場合
○搭乗券:名古屋空港で目的地ソフィアまで発行されます。
○受託荷物:名古屋空港で預け、引き出すことなくソフィアまでスルーで運ばれます。

つきましては、同日にお乗り継ぎ頂く方は、先述の「ご出発当日のご案内」で指定された成田空港集合場所へご集合時間にお集まり頂く必要はなく、成田空港に到着されましたら、そのまま出国ゲートへお進みください。

【同日乗り継ぎの方の出発日当日の流れ】

① 出発空港到着 出発空港には**フライト出発時間の 2 時間前**までにお越しください。



○大阪伊丹空港のチェックインカウンター場所:
南ターミナル 1 階 国際線乗り継ぎカウンター「11 番」

○名古屋セントレア空港のチェックインカウンター場所:
出発ロビー3 階 ANA 国内線カウンター「K」

② チェックイン 上記チェックインカウンターにてチェックインを行ってください。お手伝いするスタッフはおりませんが各自でパスポートと航空券お控えをご準備の上、チェックインして下さい。尚、スーツケース等のお荷物もこちらで預けてください。
【注意】お預け頂くお荷物が規定範囲を超えた場合、超過料金が発生致します。発生した超過料金はその場で清算してください。お荷物が公費対象の場合、領収書をお持ち頂ければ、後日清算させて頂きます。

③ 搭乗 搭乗ゲートへはフライト出発時間の 20 分前までにお越しください。



④ 成田空港到着 成田空港第1ターミナルに到着後、南ウイング 4 階の出発ゲートへお進み頂き、セキュリティチェック及び出国審査をお済ませください。



⑤ 搭乗 搭乗ゲートへはフライト時間の30分前までにお越しください。

※上記案内は、同日乗り継ぎの方が対象です。国内線ご利用で前泊予定の方は、通常の国内線手続きとなりますので、国内線ご利用日は各空港の ANA 国内線カウンターへフライト出発時間の1時間前を目処にチェックイン手続きを行ってください。

出発前の準備

1. 外貨の準備

1) お小遣いを現金で持っていくのは危険?
多額の現金を持ち歩くのは、非常に危険です。万一、盗難にあったり、紛失したりしても**まったく補償がありません**。現金は必要最低限をご準備ください。

2) 現金の準備
ホテル到着時に食事や簡単な買い物をするために1万円分程度の現金を現地通貨に両替しておく便利です。現地通貨は日本では両替することができませんので、現地到着後に空港やホテルで行って下さい。なお、日本に戻った際に余った現地通貨を日本内に再両替できますが、両替できるのは紙幣だけになります。硬貨はどれだけ集めても両替ができませんのでご注意ください。

3) トラベラーズチェック (T/C)
T/C は、旅行者用の小切手です。T/C は現金が必要な都度、銀行や両替所で換金できます。また T/C であれば、盗難にあったり、紛失したりしたときでも再発行できますので安心です。再発行する際には、購入時の番号の控えと失った番号が必要ですので、使用記録を必ずとりましょう。ただし、T/C を再度現金化する際に手数料がかかります。T/C は東京三菱銀行トラベルコーナーなどで購入できます。※現在、取扱店が減少しておりますのであまりお勧め致しません。

4) クレジットカード
クレジットカード(VISA、MASTER など)が1枚あると便利です。海外では、現金を持ち歩くことが少なく、ほとんどのお店でかなりの小額からでもクレジットカードが利用可能です。盗難・紛失の際にも電話一本ですぐにカードの利用を停止することができます。また、為替のレートも一般に銀行や両替所よりもよく、利用した分しか引き落としがされませんので両替をし過ぎる心配もありません。

2. 機内持ち込み手荷物について ※重要です。

1) 制限について
機内持ち込みの手荷物は **1 個(縦 55×横 40×高さ 23cm 以内 8kg まで)**となっております。また、その他にノートパソコン・書類バッグ・ハンドバッグのうち一つをお持ち込み頂けます。なお、制限を超えた場合は、空港チェックインカウンターにて超過料金が徴収されますのでご注意ください。

2) 機内に持ち込み頂くもの
日本出国時に必要な物 : パスポート、搭乗券
手荷物にした方がよい物 : 現金、T/C、貴重品、壊れやすい物、機内で使用するもの
他、機内であれば便利な物 : スリッパ、ガッドブック、メモ帳
ノートパソコン、携帯電話、ムービーカメラ、カメラ、MP3 などの高価なパーソナルデジタル製品、宝飾品、貴重品、貴金属類などの貴重品は受託手荷物に入れず、直接機内にお持ち込み下さい。航空会社では貴重品の紛失または破損の損害に対していかなる責任も負いません。

3) 機内に持ち込めないもの
危険物 : あらゆる種類の火気、刃物など先の尖った鋭利なものなど危険物になり得るもの。
液体物 : あらゆる液体物(ジェル状、ペースト状のものも含む)
液体物を機内に持ち込む際には各液体物を 100ml 以下の容器に移し、これらの容器を 10 以下の透明なジップロック式の袋<最大 16cm×22cm>に入れ、空港の保安検査の際に別途検査を受ける必要があります。なお、機内に持ち込めるのは一袋までです。

3. お預けになるお荷物について

飛行機に無料でお預け頂けるお荷物(スーツケース等)は

お一人様 **2 個**まで、(一個あたり 重量 **23kg**まで/縦横高さの和 **158cm**以内のもの)

制限を超えた場合は、空港チェックインカウンターにて超過料金が徴収されますのでご注意ください。

(安全上の理由から **32 kg**を超えるお荷物に関しては貨物の取り扱いとなり、別途手続きや高額な料金が必要となりますので、1 個当たりの重量は **32 kg**を超えないようご注意ください。)

なお、競技に必要なお荷物の超過料金は公費扱いとなりますが、個人的なお荷物が上記規定を超えた場合、自己負担となりますのでご注意ください。(自費参加の競技団体は競技用具を含めたお荷物の超過分すべてをその場でご精算頂きますので、超過が発生するようでしたら現金またはクレジットカードを事前にご準備ください。)

【注意】可燃性・引火性のスプレー(コールドスプレー等)は機内への持ち込みも預け入れ荷物にもできませんので、一切お持ち頂かないようお願い致します。

4. アドバイス

1) カバンは丈夫なものを
カバンの積み降ろしは乱暴ですので、なるべく軽く丈夫で鍵のかかるスーツケースをお選び下さい。

2) 服装は軽快に！靴は履きなれた物を！
気温の変化に対応できるように重ね着ができるものをお持ちいただくとうれしいです。洗濯は手洗いが多くなりますので、簡単に手洗いできるものが便利です。

3) いつも使い慣れたものが“必需品”
寝間着、洗面用具、バス用品(シャンプー等)、タオルなどは、日本のホテルとは異なり、必ずしも備え付けられているとは限りません。必要最低限は使い慣れたものをご準備ください。また、外国では医師の処方箋がないとほとんどの薬は買えません。自分で必要と思われるものについては、各自ご用意下さい。

4) 電気製品“電圧、プラグ”に注意！
電気製品は電圧とプラグ(コンセント)の形状が日本とは異なりますので、現地でご利用になる際には変圧器とプラグアダプターが必要になります。

- 変圧器：電圧を変換します。電圧は **220V**になります。

なお、電気製品自体が 220V に対応しているものは、変圧器は必要ありません。(ポータブルパソコン、デジタルカメラの多くは対応しています。)

詳しくは、お近くの家電店へお問い合わせ下さい。



5) 洗濯ネットを必ず持参して下さい！
RODINA HOTEL へご宿泊される皆様は、選手団の洗濯物をまとめてクリーニング業者をお願いする予定です。そのため、自分の洗濯物を入れる洗濯ネットを2〜3枚程度ご用意ください。洗濯ネットには必ず自分の名前を刺しゅうしてください。(業者へは洗濯ネットにいられたまま預けて、そのまま洗濯してもらいますので記名入りの洗濯ネットがない場合、受付できません。)

その他、パスポートを紛失された場合にパスポートコピー、写真(パスポートサイズ)をご準備下さい。

出発から帰国までの流れ

1. 日本出発のご案内

エコノミークラスの預け入れ荷物は 2 個/1 個あたり重量制限 23kg、機内に持ち込むことのできる手荷物は 1 つが原則です(『出発前の準備』をご参照ください)。また、ハサミ、カッター、化粧品小型ハサミ、ライター等は安全上の理由から機内には持ち込むことができません。あらかじめ預け荷物にお入れください。
*規定範囲外の場合は、超過料金がかりますのでご注意ください。

成田空港到着



各集合時間までに成田空港第 1 ターミナル集合場所までお越し下さい。※ターミナルやフライトの出発時間に変更になることがあります。空港に到着したら、掲示板でご確認ください。

搭乗手続き



搭乗手続き(チェックイン)を行う際はパスポートをご用意頂きます。本部スタッフの指示に従ってチェックインを行ってください。こちらで目的地までのボーディングパス(搭乗券)と、クレームタグ(荷物預り証)をお受け取り頂きます。また、スーツケース(預け荷物)はここで預けます。

*1 お荷物は乗継地で引き出すことなく目的地まで運ばれます。クレームタグは荷物紛失の際に必要となりますのでスーツケースを受け取るまでは大切に保管してください。

*2 搭乗券とクレームタグは目的地まで発行されていることを必ずご確認ください。

出国手続き



出国審査を受ける際にパスポート、搭乗券が必要になります。

搭乗

搭乗ゲートでは、出発時刻の 30〜40 分前に搭乗案内のアナウンスがありますので、指示に従って搭乗を開始してください。

※空港へのアクセスについて

ご自宅から空港へのアクセスは、列車をご利用いただくことをおすすめいたします。バスや自家用車をご利用になる場合は、渋滞や事故等の可能性も考慮の上、大抵に時間に余裕を持ってください。フライトに間に合わない方の 9 割以上が列車以外の手段をご利用になった方です。

2. 到着のご案内

乗継空港到着



機内に忘れ物がないよう手荷物をもう一度確認してください。

ゲート確認



空港内に入ったらお乗り継ぎ頂くフライトのゲート番号をお近くの電光掲示板でご確認ください。

搭乗



搭乗ゲートでは、出発時刻の 30〜40 分前に搭乗案内のアナウンスがありますので、指示に従って搭乗を開始してください。

目的地空港到着



機内に忘れ物がないよう手荷物をもう一度確認してください。

荷物受取り



出発時に預けたスーツケースが所定のターンテーブルから出てきますので、必ずここで受け取ってください。

税関



申告するものがない場合、そのまま通過頂きます。

出口



出口を出たら、大会スタッフが出迎えております。スタッフの誘導に従って専用車へご移動下さい。

*空港のロビーはスリや置き引きの被害が多発するところ。貴重品などは手元から離さないように十分気をつけてください。

※入国の際の免税範囲

200 本のタバコ、50 本の葉巻又は 250g のタバコ、1 リットルの酒類と 2 リットルのワイン、50g の香水と 100g オードフレ。手頃な価格の贈答

3. 帰国のご案内

エコノミークラスの預け入れ荷物は 2 個/1 個あたり重量制限 23kg、機内に持ち込むことのできる手荷物は 1 つが原則です(『出発前の準備』をご参照ください)。また、ハサミ、カッター、化粧品小型ハサミ、ライター等は安全上の理由から機内には持ち込むことができません。あらかじめ預け荷物にお入れください。
*規定範囲外の場合は、超過料金がかりますのでご注意ください。

チェックアウト



ホテルフロントでルームキーをご返却の上、チェックアウトを済ませてください。電話、インターネット、ミニバー等、有料のサービスをご利用になった方は清算を済ませてください。※バスポートはスーツケースに入れないようにして下さい。
滞在ホテルからソフィア空港までは、大会組織委員会が用意するバスで送迎してもらいます。当日の出発時間は現地でご案内いたします。

空港到着



チェックイン時には、パスポート・航空券控えが必要となります。

搭乗手続き



航空券控えとパスポートをご用意のうえ、チェックインを行います。こちらでボーディングパス(搭乗券)と、クレームタグ(荷物預り証)をお受け取りください。

*1 お荷物は乗継地で引き出すことなく成田空港まで運ばれます。クレームタグは荷物紛失の際に必要となりますのでスーツケースを受け取るまでは大切に保管してください。

*2 搭乗券とクレームタグは目的地まで発行されていることを必ずご確認ください。

出国手続き



出国審査を受ける際にパスポート、搭乗券が必要になります。

搭乗



搭乗ゲートでは、出発時刻の 30〜40 分前に搭乗案内のアナウンスがありますので、指示に従って搭乗を開始してください。

乗継空港到着



機内に忘れ物がないよう手荷物をもう一度確認してください。

ゲート確認



建物内に入ったらお乗り継ぎ頂くフライトのゲート番号をお近くの電光掲示板でご確認ください。

搭乗

搭乗ゲートでは、出発時刻の 30〜40 分前に搭乗案内のアナウンスがありますので、指示に従って搭乗を開始してください。

4. 日本入国

入国準備

税関申告の有無にかかわらず、機内で配られる『携帯品・別送品』の申告書に記入してください。また、別送品のある方は、税関申告書を2通作成してください。1通を税関に渡し、もう1通を自分で保管します。

入国審査

係官にパスポートをご提示ください。

預け荷物受取り

忘れずにお受け取りください。＊荷物を受け取ったときにスーツケースに破損がないかご確認ください。破損があった場合は、クレームタグと一緒に、お近くの航空会社職員にお申し付けください。航空会社で修理をしてもらうことができます。なお、税関を出た後にお申し出になっても、航空会社は一切補償してくれません。

税 関

免税範囲をこえない方は緑ランプの検査台へ、免税範囲をこえる方および別送品のある方は赤ランプの検査台へお進みください。

注意！！
「携帯品・別送品」の申告書は
申告の有無に関わらず提出の
義務があります！

解 団

入国手続および通関終了後、自然解団となります。

日本入国時の税関手続き

1) 免税範囲と税額

外国(日本の免税店を含む)で購入した品物を日本に持ち込む(輸入)する場合、一定の数量又は価格を超える場合には、原則として、以下の税金を納めていただく必要があります。

品 名		免税範囲	免税範囲を超えた時の税額
酒 類	紙巻	3本 (1本760ml 程度)	ウイスキー、ブランデー 500 円/箱 ラム、ジン、ウォッカ 400 円/箱 リキュール、蒸留酒 300 円/箱 ビール、発泡酒、ワイン 200 円/箱
	葉巻	日本製200本 外国製200本	7.5 円/本
	その他	50本	一般税率 (35%～無税) ＊詳細は税関でご確認ください。
香 水	2オンス (1オンス約28ml)		15% (腕時計、万年筆等の関税が無税のものは消費税のみが課税)
	20万円		
その他の物品	(1個で20万円を超える場合は、 その全額に課税されます)		

＊20 歳未満の方は、酒類とたばこが免税になりません。

＊上記の免税範囲を超えた場合で、1個(組)が10万円を超えるものには、上記以外の税率が適用される場合があります。

2) 携帯品の申告

税関申告の有無に関わらず、外国から入国する全ての方が、「携帯品・別送品申告書」1通に必要事項を記入の上、税関に提出する必要があります。

3) 外国から送った荷物の申告

旅行中に、日本に送った荷物(別送品)については、携帯品の一部として、免税の適用や簡易な税率の適用を受けることができます。別送品がある時は、機内で「携帯品・別送品申告書」2通に必要事項を記入の上、税関に提出してください。

携帯品・別送品申告書の記入例

航空機割振り制 <2013.06.07 今後の変更予定> 1/2

出発日設定		往路条件:試合開始の3日前に設定										復路条件:試合終了の翌々日に設定									
競技団体	渡航人数	7/22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	8/1	2	3	4	5	6				
イベント	219																				
選手団本部	18			会議	会議	会議															
陸上	26					26				試合	試合	試合	試合	試合	試合		26				
①SAEGUSA/TAKAYUKI MR	1			1						試合	試合	試合	試合	試合	試合		1				
②SHIMOMO/KENTARO MR	1									試合	1	試合	試合	試合	試合		1				
③YAMADA/MASAHITO MR	2		2							試合	2	試合	試合	試合	試合						
④YAMANAKA/KOICHIRO MR	1		1							試合	試合	試合	試合	試合	試合		1				
バドミントン	3			3			試合	試合	試合	試合	試合	試合	試合	試合	試合		3				
ビーチバレーボール	4		4				試合	試合	試合	試合	試合	試合	試合	試合	試合		4				
①USHIO/HIROHITO MR	1		1			試合	試合	試合	試合	試合	試合	試合	試合	試合	試合		1				
②TAKEGAMI/MAI MS	1		1			試合	試合	試合	試合	試合	試合	試合	試合	試合	試合		1				
サイクリング	7			7			試合	試合	試合	試合	試合	試合	試合	試合	試合		7				
オリエンテーリング	2			2			試合	試合	試合	試合	試合	試合	試合	試合	試合		2				
水 泳	8			8			試合	試合	試合	試合	試合	試合	試合	試合	試合		8				
①TOYODA/TADASHI MR	1		1			試合	試合	試合	試合	試合	試合	試合	試合	試合	試合		1				
②NAKAZATO/KENCHI MR	1		1			試合	試合	試合	試合	試合	1	試合	試合	試合	試合						
卓 球	9			9			試合	試合	試合	試合	試合	試合	試合	試合	試合		9				
SATO/SHINJI MR	2			2			試合	試合	試合	試合	試合	試合	試合	試合	試合		2				
バスケット(男子)	16	16			試合	試合	試合	試合	試合	試合	試合	試合	試合	試合	試合		16				
バスケット(女子)	14	14			試合	試合	試合	試合	試合	試合	試合	試合	試合	試合	試合		14				
サッカー(男子)	29	29			試合	試合	試合	試合	試合	試合	試合	試合	試合	試合	試合		29				
サッカー(女子)	23	23			試合	試合	試合	試合	試合	試合	試合	試合	試合	試合	試合		23				
テニス	6		6			試合	試合	試合	試合	試合	試合	試合	試合	試合	試合		6				
バレー(男子)	15	15			試合	試合	試合	試合	試合	試合	試合	試合	試合	試合	試合		15				
①WATA/NOZOMI MR	2	2			試合	試合	試合	試合	試合	試合	試合	試合	試合	試合	試合		2				
バレー(女子)	16	16			試合	試合	試合	試合	試合	試合	試合	試合	試合	試合	試合		16				
②KAWA/YUKA MR	2	2			試合	試合	試合	試合	試合	試合	試合	試合	試合	試合	試合		2				
柔 道	8									8		試合	試合	試合	試合		8				
SATO/SHINJI MR	2									2		試合	試合	試合	試合		2				
本 部①	4	4															4				
TATEBATA/TOMOHITO MR	2	2															2				
数 値			9	74	69	80	80	54	80	80	72	79	80	80	80	66	18				
必要席数	96	63	9	24	0	0	0	0	0	0	0	0	2	1	1	1	12				
③YAMADA/MASAHITO MR	2		2										試合	2	試合	試合					
④YAMANAKA/KOICHIRO MR	1		1										試合	試合	試合	試合	1				
水 泳	8			8			試合	試合	試合	試合	試合	試合	試合	試合	試合		8				
①TOYODA/TADASHI MR	1		1			試合	試合	試合	試合	試合	試合	試合	試合	試合	試合		1				
②NAKAZATO/KENCHI MR	1			1			試合	試合	試合	試合	試合	試合	試合	試合	試合		1				
サッカー(男子)	29	29			試合	試合	試合	試合	試合	試合	試合	試合	試合	試合	試合		29				
サッカー(女子)	23	23			試合	試合	試合	試合	試合	試合	試合	試合	試合	試合	試合		23				
テニス	6		6			試合	試合	試合	試合	試合	試合	試合	試合	試合	試合		6				
オリエンテーリング	2			2			試合	試合	試合	試合	試合	試合	試合	試合	試合		2				
卓 球	9			9			試合	試合	試合	試合	試合	試合	試合	試合	試合		9				
SATO/SHINJI MR	2			2			試合	試合	試合	試合	試合	試合	試合	試合	試合		2				
本 部②	10	10															10				
HAYASHI/TAKAO MR	1			1													1				
TAKAGI/MACHIKO MS	1	1														1					
数 値			17	71	56	80	80	80	80	80	80	78	79	79	79	68	63				

＊陸上③④旅程: 日本出発日 7月18日/成田⇒ミュンヘン、7月23日/ミュンヘン⇒ソフィア

＊陸上マラソンの綱田コーチはミュンヘン往復となるため、上記表に反映されておりません。

航空機割振り制 航空会社別 割振り振り 割振り振り条件:各航空会社及び出発日で最大80席まで

航空会社 割り振り																			
割り振り条件:各航空会社及び出発日で最大80席まで																			
航空会社	競技団体	渡航人数	7/22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	8/1	2	3	4	5	6	
渡航人数合計			123	134	15	35	0	0	26	0	0	8	1	0	0	1	26	79	105
必要席数			219	71	6	11	0	0	26	0	0	8	1	0	0	14	62	47	
オーストラリア航空	陸上	26					26					試合	試合	試合	試合	試合	26		
	①SAEGUSA/TAKAYUKI MR	1			1							試合	試合	試合	試合	試合	1		
	②SHIMOMO/KENTARO MR	1										試合	1	試合	試合	試合	1		
	バドミントン	3			3				試合	試合	試合	試合	試合	試合	試合		3		
	ビーチバレーボール	4		4				試合	試合	試合	試合	試合	試合	試合	試合	試合	4		
	①USHIO/HIROHITO MR	1		1				試合	試合	試合	試合	試合	試合	試合	試合	試合	1		
	②TAKEGAMI/MAI MS	1		1				試合	試合	試合	試合	試合	試合	試合	試合	試合	1		
	バスケット(男子)	16	16				試合	試合	試合	試合	試合	試合	試合	試合	試合	試合	試合	16	
	バスケット(女子)	14	14				試合	試合	試合	試合	試合	試合	試合	試合	試合	試合	試合	14	
	バレー(男子)	15	15				試合	試合	試合	試合	試合	試合	試合	試合	試合	試合	試合	15	
	①WATA/NOZOMI MR	2	2				試合	試合	試合	試合	試合	試合	試合	試合	試合		2		
	バレー(女子)	16	16				試合	試合	試合	試合	試合	試合	試合	試合	試合		16		
	②KAWA/YUKA MR	2	2				試合	試合	試合	試合	試合	試合	試合	試合	試合		2		
	柔道	8										8			試合	試合	試合	8	
	サイクリング	7			7				試合	試合				試合	試合		7		
	本 部①	4	4															4	
		TATEBATA/TOMOHITO MR	2	2														2	
	NAKAJIMA/YUKINOBU MR																		
残 数				9	74	69	80	80	54	80	80	72	79	80	80	66	18	33	
必要席数			96	63	9	24	0	0	0	0	0	0	2	1	1	1	12	17	62
ルフトハンザ航空	③YAMADA/MASAHITO MR	2		2									試合	2	試合	試合	試合		
	④YAMANAKA/KOICHIRO MR	1		1									試合	試合	試合	試合	1		
	水 泳	8			8			試合	試合	試合	試合	試合	試合	試合	試合		8		
	①TOYODA/TADASHI MR	1		1				試合	試合	試合	試合	試合	試合	試合	試合	1			
	②NAKAZATO/KENCHI MR	1			1				試合	試合	試合	試合	試合	1	試合				
	サッカー(男子)	29	29				試合	試合	試合	試合	試合	試合	試合	試合	試合	試合	29		
	サッカー(女子)	23	23				試合	試合	試合	試合	試合	試合	試合	試合	試合	試合	23		
	テニス	6		6				試合	試合	試合	試合	試合	試合	試合	試合		6		
	オリエンティング	2		2								試合	試合	試合			2		
	卓 球	9		9				試合	試合	試合	試合	試合	試合	試合	試合		9		
	SATO/SHINJI MR	2		2				試合	試合	試合	試合	試合	試合	試合		2			
	UDOHATA/TOMOHIRO MR	10	10														10		
本 部②																			
	HAYASHI/TAKAO MR	1				1												1	
	TAKAGI/MAHICO MS	1														1			
残 数				17	71	56	80	80	80	80	80	80	78	79	79	68	63	18	

【 日本選手団組織図 】

日本選手団 組織図
 団長: 太田 晴介
 副団長兼監督 選手
 総務・機材・参謀

監督チーム
 医師(内科): 羽森 真
 医師(外科): 立石 智彦
 看護師 高橋 孝
 アスレティックトレーナー 中島 幸則
 アスレティックトレーナー 高橋 小夜利

総務チーム
 総務 嶋本 恭晃
 広報 仁木 尚美
 事務局員(記録) 後藤 啓二
 事務局員(総務) 高木 真知子
 事務局員(映像撮影) 田原 里絵
 事務局員(宿泊・輸送) 林 孝雄
 事務局員(宿泊・輸送) 白坂 寛志
 手話通訳 豊島 結美子
 手話通訳 小森 慶美
 手話通訳 長山 縁

各競技監督(12競技)
 陸上
 ハンドボール(男子)
 バスケットボール(男子) 坂本 知加良
 バスケットボール(女子) 穂積 雅哉
 ビーチバレー 牛尾 洋人
 自転車
 サッカー(男子) 柴田 英輝
 サッカー(女子) 穂永 久代
 柔道 江上 忍孝
 相撲 江村 彰敏
 水泳 豊田 律
 卓球 佐藤 真二
 テニス 船辺 品雄
 ハレーボール(男子) 若下 忠正
 ハレーボール(女子) 狩野 美雪

【危機管理ネットワーク】

厚生労働省
公益財団法人日本障害者スポーツ協会

【日本本部】
 一般財団法人全日本ろうあ連盟
 テフリンピック派遣委員会

【日本選手団本部】

【日本本部】
 サッカー（男子） 柴田 英雄
 サッカー（女子） 福永 久代

【競技チーム RUI PRAVETS GOLF & SPA】
 陸上 三萩 隆行
 バミントン 阿部 知子
 バスケットボール（男子） 坂本 知加良
 バスケットボール（女子） 篠原 雅哉
 ビーチバレー 牛尾 洋人
 自転車 早瀬 憲太郎
 柔道 江上 忠孝
 リエノテニシング 丘村 彰敬
 水泳 豊田 律
 卓球 佐藤 真二
 テニス 稲辺 忠憲
 ハレーボール（男子） 岩下 忠正
 ハレーボール（女子） 狩野 美雪

【関係各所】
 在ブルガリア 日本大使館

第22回夏季デフリンピック競技大会2013/ソフィア 日本選手団名簿

2013年6月28日現在

順し	No	競技名	出場及び 得点予定競技 項目	名前(漢字)	名前(よみがな)	年齢 性別	住所	所属協会(高校生は学校名を記載)
1	1	陸上	監督	三浦 雅行	さくぐさ たかゆかり	44	東京都伊豆市	公益社団法人日本聴覚障がい者協会
2	2	陸上	トレーナー	栗本 大雄	あけひでし ひろやう	35	東京都中央区	公益社団法人大塚障害者スポーツ協会
3	3	陸上	トレーナー	内海 健雄	うちみづ けん	40	東京都大田区	聴覚協会
4	4	陸上	スタッフ	近藤 重夫	まがさか あゆこ	27	東京都大田区	社団法人東京都聴覚障害者連盟
5	5	陸上	スタッフ	柳田 主税	やなだ ちから	28	東京都足立区	聴覚協会
6	6	陸上	スタッフ	下田 健太郎	しもべう ひなたろう	41	東京都立川市	社団法人東京都聴覚障害者連盟
7	7	陸上	100m/4×100m/1500m	小宮 哲	こみや けん	34	東京都佐倉市	一般社団法人長崎ろうきょう協会
8	8	陸上	100m/4×100m/1500m	門澤 隆平	かどや まゆみ	20	東京都足立区	社団法人長崎聴覚障害者連盟
9	9	陸上	100m/4×100m/1500m	田中 大智	たなか だい	20	東京都足立区	社団法人長崎聴覚障害者連盟
10	10	陸上	400m/4×400m/1500m	小宮 聖孝	こみや しょうこう	20	東京都足立区	社団法人長崎聴覚障害者連盟
11	11	陸上	マラソン	山田 真生	やまだ まさひと	27	福島県いわき市	社団法人福島聴覚障がい者協会
12	12	陸上	マラソン	金 隆一	かね たけし	46	山口県山口市	社団法人山口ろうきょう会連盟
13	13	陸上	マラソン/10000m	山中 孝一郎	やまなか こういちろう	31	東京都都府市	社団法人東京都聴覚障害者連盟
14	14	陸上	100m/4×100m/1500m	白土 達	しらいし すすむ	30	大阪府大阪市東島区	社団法人大塚聴覚障害者協会
15	15	陸上	100m/4×100m/1500m	三井 弘明	みつひろ ひろあき	24	福岡県福岡市	公益社団法人福岡聴覚障害者協会
16	16	陸上	100m/4×100m/1500m	三枝 浩基	さえき ひろき	22	東京都伊豆市	公益社団法人日本聴覚障がい者協会
17	17	陸上	200m/4×400m/1500m	佐々木 大福	ささき だいく	19	宮城県仙台市	社団法人宮城ろうきょう協会
18	18	陸上	200m/4×400m/1500m	渡井 将平	わたせい しょうへい	20	大阪府大阪市東淀川区	島崎ろうきょう団体連合会
19	19	陸上	400m/4×400m/1500m	岡田 悠介	おかだ ゆうすけ	25	神奈川県横浜市	聴覚障害者協会
20	20	陸上	400m/4×400m/1500m	清水 大生	しみず だいせい	20	東京都都府市	社団法人東京都聴覚障害者連盟
21	21	陸上	400m/4×400m/1500m	沼田 大志	ぬまた だいし	19	神奈川県足柄上野市	一般社団法人大塚聴覚障害者協会
22	22	陸上	800m/4×400m/1500m	田代 広成	たけだ ひろなり	21	東京都生田町	社団法人大塚聴覚障害者連盟
23	23	陸上	400m/4×400m/1500m	高田 穂斗	たかた ほうし	28	東京都練馬区	社団法人東京都聴覚障害者連盟
24	24	陸上	ハンマー投	森田 真敏	もりた まさとし	28	東京都練馬区	一般社団法人大塚ろうきょう協会
25	25	陸上	ハンマー投	石田 勇正	いしだ ゆうさき	27	東京都練馬区	一般社団法人大塚聴覚障害者協会
26	26	陸上	やが投	佐藤 光正	さとう まさみつ	32	東京都練馬区	愛媛聴覚障害者協会
27	27	陸上	やが投	佐藤 賢太	さとう けんた	23	東京都文京区	社団法人大塚聴覚障害者協会
28	28	陸上	種目無し	渡井 達郎	わたせい だつろう	28	神奈川県横浜市	神奈川県聴覚障害者連盟
29	29	陸上	走幅跳-走高跳	前田 浩之	まえだ ひろゆき	25	東京都品川区	島崎ろうきょう団体連合会
30	30	陸上	砲丸投-玉投	佐藤 大志	さとう だいし	21	東京都品川区	社団法人大塚聴覚障害者協会
31	31	陸上	やが投	佐藤 大志	さとう だいし	24	東京都品川区	社団法人大塚聴覚障害者協会
32	32	陸上	種目無し	藤原 智樹	ふじわら ともき	17	神奈川県鎌倉市	神奈川県聴覚障害者連盟 (鎌倉市ろうきょう会 高崎組)
33	33	バドミントン	スラッシュ	阿部 正一	あべ せいし	30	東京都練馬区	社団法人東京都聴覚障害者連盟
34	34	バドミントン	シングルス/ダブルス	別所 雅夫	べっしゅ まさお	23	東京都品川区	社団法人大塚聴覚障害者協会
35	35	バドミントン	シングルス/ダブルス	島本 弘毅	しまもと ひろき	23	東京都つげ市	社団法人大塚聴覚障害者協会
36	36	バドミントン/ボウリング	監督	森本 知加良	もりもと ちから	33	東京都札幌市東区	聴覚協会
37	37	バドミントン/ボウリング	コーチ	手塚 達夫	てづか だつふ	26	東京都台東区	社団法人大塚ろうきょう会連盟
38	38	バドミントン/ボウリング	コーチ	山崎 健吾	やまざき けんご	33	福岡県福岡市中央区	社団法人大塚聴覚障害者連盟
39	39	バドミントン/ボウリング	トレーナー	大塚 健吾	おおくさ けんご	28	福岡県福岡市	聴覚協会
40	40	バドミントン/ボウリング	選手	井上 和也	いのうえ なるひ	18	神奈川県足部市	一般社団法人大塚聴覚障害者連盟
41	41	バドミントン/ボウリング	選手	井上 英正	いのうえ へいせい	21	神奈川県足部市	社団法人大塚聴覚障害者連盟
42	42	バドミントン/ボウリング	選手	渡邊 泰郎	わたなべ やすひろ	33	神奈川県佐倉市	一般社団法人長崎ろうきょう協会
43	43	バドミントン/ボウリング	選手	橋本 貴人	はしもと けい	2		

第22回夏季フリンピック競技大会2013ソフィア 日本選手団名簿									
2013年6月28日現在									
通し No.	競技名	出場予定競技種 目	名前(漢字)	名前(ふりがな)	性別	住所	所属協会(高校生は学校名を記載)		
57	バドミントン男子	選手	梅本 光希	めもと みつあ	女	27 大阪府大阪市	社団法人大阪総体力障害者協会		
58	バドミントン男子	選手	大庭 光聖	おほえ ともみ	女	33 神奈川県鎌倉市	社団法人神奈川県総体障害者協会		
59	バドミントン男子	選手	藤井 淳哉	ふじい かつひ	女	24 東京都板橋区	社団法人東京都総体障害者連盟		
60	バドミントン男子	選手	鈴木 拓加	すずき たくか	女	32 千葉県流山市	社団法人千葉県総体障害者協会		
61	バドミントン男子	選手	田中 崇雄	たなか たくお	女	25 福岡県福岡市西区	社団法人福岡県総体障害者協会		
62	バドミントン男子	選手	永田 龍平	ながた りゅうへい	女	27 大阪府大阪市	社団法人大阪総体力障害者協会		
63	バドミントン男子	選手	吉 幸	よし かつひ	女	27 千葉県船橋市	公益社団法人千葉県総体障害者協会		
64	バドミントン男子	選手	森田 謙子	もりた けんこ	女	37 千葉県流山市	社団法人埼玉県総体障害者協会		
65	バドミントン男子	選手	森田 謙子	もりた けんこ	女	37 千葉県流山市	社団法人埼玉県総体障害者協会		
66	バドミントン男子	選手	伊藤 弘典	いとう ひろのり	女	28 大阪府堺市	社団法人大阪総体力障害者協会		
67	バドミントン男子	監督	寺澤 洋人	てらざわ ひろひと	男	38 神奈川県横浜市	健聴協会		
68	バドミントン男子	トレーナー	竹 健一	たけけん けんいち	男	24 東京都八王子市	健聴協会		
69	バドミントン男子	選手	天沼 弘志	あまのひろし	男	43 徳島県吉野川市	特定非営利活動法人徳島県総体障害者福祉協会		
70	バドミントン男子	選手	小林 誠寛	こばやし せいけん	男	29 静岡県磐田市	公益社団法人・静岡県総体障害者協会		
71	バドミントン男子	選手	武内 清隆	たけうち しみず	女	30 静岡県浜松市	公益社団法人・静岡県総体障害者協会		
72	バドミントン男子	選手	小林 幸雄	こばやし ちやうへい	女	30 静岡県浜松市	公益社団法人・静岡県総体障害者協会		
73	バドミントン男子	監督	坂智 ロードMTB	さかち るーど	男	40 神奈川県横浜市西区	神奈川県総体障害者連盟		
74	バドミントン男子	選手	坂智 ロードMTB	さかち るーど	男	39 神奈川県横浜市西区	神奈川県総体障害者連盟		
75	バドミントン男子	選手	坂智 ロードMTB	さかち るーど	男	39 神奈川県横浜市西区	神奈川県総体障害者連盟		
76	バドミントン男子	選手	坂智 ロードMTB	さかち るーど	男	39 神奈川県横浜市西区	神奈川県総体障害者連盟		
77	バドミントン男子	選手	坂智 ロードMTB	さかち るーど	男	28 東京都国分寺市	社団法人東京都総体障害者連盟		
78	バドミントン男子	選手	坂智 ロードMTB	さかち るーど	男	44 東京都葛飾区	社団法人東京都総体障害者連盟		
79	バドミントン男子	選手	坂智 ロードMTB	さかち るーど	男	44 東京都葛飾区	社団法人東京都総体障害者連盟		
80	バドミントン男子	選手	坂智 ロードMTB	さかち るーど	男	44 東京都葛飾区	社団法人東京都総体障害者連盟		
81	バドミントン男子	選手	坂智 ロードMTB	さかち るーど	男	44 東京都葛飾区	社団法人東京都総体障害者連盟		
82	バドミントン男子	選手	坂智 ロードMTB	さかち るーど	男	44 東京都葛飾区	社団法人東京都総体障害者連盟		
83	バドミントン男子	選手	坂智 ロードMTB	さかち るーど	男	44 東京都葛飾区	社団法人東京都総体障害者連盟		
84	バドミントン男子	選手	坂智 ロードMTB	さかち るーど	男	44 東京都葛飾区	社団法人東京都総体障害者連盟		
85	バドミントン男子	選手	坂智 ロードMTB	さかち るーど	男	44 東京都葛飾区	社団法人東京都総体障害者連盟		
86	バドミントン男子	選手	坂智 ロードMTB	さかち るーど	男	44 東京都葛飾区	社団法人東京都総体障害者連盟		
87	バドミントン男子	選手	坂智 ロードMTB	さかち るーど	男	44 東京都葛飾区	社団法人東京都総体障害者連盟		
88	バドミントン男子	選手	坂智 ロードMTB	さかち るーど	男	44 東京都葛飾区	社団法人東京都総体障害者連盟		
89	バドミントン男子	選手	坂智 ロードMTB	さかち るーど	男	44 東京都葛飾区	社団法人東京都総体障害者連盟		
90	バドミントン男子	選手	坂智 ロードMTB	さかち るーど	男	44 東京都葛飾区	社団法人東京都総体障害者連盟		
91	バドミントン男子	選手	坂智 ロードMTB	さかち るーど	男	44			

第22回夏季デフリンピック競技大会2013ソフィア 日本選手団名簿

2013年6月28日現在

通し	No	競技名	役職及び 出場予定競技種 目	名前(漢字)	名前(よみがな)	性別	年齢 6/1 現在	住所	所属協会(高校生は学校名を記載)
107	24	サッカー-男子	選手	野間 三志	のま みつし	男	34	福岡県北九州市八幡西区	社会福祉法人福岡県視覚障害者協会
108	1	サッカー-女子	監督	橋本 英代	はしもろ ひろよ	女	35	静岡県藤枝市	視覚者
109	2	サッカー-女子	コーチ	北 一行	きた かずゆき	男	37	埼玉県さいたま市南区	視覚者
110	3	サッカー-女子	トレーナー	石渡 敏ゆ未	いしわたり みゆみ	女	23	東京都杉並区	視覚者
111	4	サッカー-女子	スタッフ	立川 智雄	たちかわ ともお	男	35	広島県広島市安佐北區	一般社団法人広島県ろうあ協会
112	5	サッカー-女子	スタッフ	中村 祥子	なかむら しょうこ	女	24	東京都杉並区	社団法人東京都視覚障害者協会
113	6	サッカー-女子	選手	芹澤 真代	せのざわ まゆみ	女	28	東京都杉並区	社団法人東京都視覚障害者協会
114	7	サッカー-女子	選手	大塚 道佳	おおたに みほか	女	15	静岡県浜松市東区	公益社団法人静岡県視覚障害者協会 (静岡県立浜松視覚特別支援学校 高等学校)
115	8	サッカー-女子	選手	大島 彩香	おおしま あやか	女	21	兵庫県西宮市	公益社団法人兵庫県視覚障害者協会
116	9	サッカー-女子	選手	渡田 聖平	わた えいへい	男	28	東京都杉並区	社団法人東京都視覚障害者協会
117	10	サッカー-女子	選手	菅田 明彦	すがた あき彦	男	27	静岡県藤枝市	公益社団法人静岡県視覚障害者協会
118	11	サッカー-女子	選手	寺井 希美	てらい けいみ	女	37	静岡県藤枝市	公益社団法人静岡県視覚障害者協会
119	12	サッカー-女子	選手	川畑 美奈	かわはた めな	女	23	北海道札幌市厚別区	神奈川視覚障害者連盟
120	13	サッカー-女子	選手	柳岡 裕美	やなぎわ ゆみ	女	26	埼玉県さいたま市	社団法人埼玉県視覚障害者協会
121	14	サッカー-女子	選手	井部 絵理子	いべ えりこ	女	31	兵庫県三田市	公益社団法人兵庫県視覚障害者協会
122	15	サッカー-女子	選手	中井 香都	なかい かほ	女	24	大阪府堺市北区	社団法人大阪府視覚障害者協会
123	16	サッカー-女子	選手	高井 寛利	たかい けんり	男	14	静岡県静岡市東区	公益社団法人静岡県視覚障害者協会 (静岡県立静岡ろう学校 中学校部)
124	17	サッカー-女子	選手	菅田 真実	みた まこと	女	15	兵庫県伊丹市	公益社団法人兵庫県視覚障害者協会 (豊明学校高等部 1年)
125	18	サッカー-女子	選手	坂田 博康	さかた ひろか	女	32	東京都品川区	社団法人東京都視覚障害者協会
126	19	サッカー-女子	選手	佐藤 愛香	さとう あいか	女	28	神奈川県大和市	神奈川視覚障害者連盟
127	20	サッカー-女子	選手	市原隆 祥子	いちばら しょうこ	女	30	神奈川県藤沢市	神奈川視覚障害者連盟
128	21	サッカー-女子	選手	室野 陽子	むの ようこ	女	28	東京都練馬区	社団法人東京都視覚障害者協会
129	22	サッカー-女子	選手	菅原 麻衣	すがはら まい	女	30	東京都練馬区	社団法人東京都視覚障害者協会
130	23	サッカー-女子	選手	菅原 聖哉	すがはら せいや	男	19	愛媛県つるぎ市	社団法人茨城県視覚障害者協会
131	1	柔道	監督	立上 忠孝	たちかみ だてたかし	男	37	福岡県小倉市	視覚者
132	2	柔道	コーチ	森田 祐希	もりた ゆうき	男	28	福岡県東区	視覚者
133	3	柔道	手組通訳	西川 美穂子	にしがわ みほこ	女	42	福岡県東区	視覚者
134	4	柔道	選手	山田 光穂	やまだ こうすけ	男	31	福岡県東区	社団法人茨城県ろうあ協会
135	5	柔道	選手	吉良 晴生	きら はるひ	男	32	千葉県船橋市上原	社会福祉法人千葉県視覚障害者協会
136	6	柔道	選手	栗原 林太郎	くりはら りんたろう	男	27	高知県高知市	社団法人高知県視覚障害者協会
137	7	柔道	選手	木下 勇	きのした ひでし	男	25	京都府長岡京市	社団法人京都府視覚障害者協会
138	8	柔道	選手	宮下 真希	みやの 真希	女	26	奈良県大和郡	一般社団法人奈良県視覚障害者協会
139	1	バレーボール-男子	監督	石野 彰敏	いしの しょうみ	男	50	大阪府茨木市	社団法人大阪府視覚障害者協会
140	2	バレーボール-男子	選手	田村 敬一	たむら けいし	男	48	東京都三軒市	社団法人東京都視覚障害者協会
141	1	水泳	監督	豊田 健	とよた たけし	男	48	京都府京都市伏見区	社団法人京都府視覚障害者協会
142	2	水泳	コーチ	平田 健一	ひらた けん	男	41	東京都葛飾区	一般社団法人東京都視覚障害者協会
143	3	水泳	トレーナー	中野 寛一	なかの けんいち	男	40	東京都葛飾区	視覚者
144	4	水泳	スタッフ	高井 聖佳	たかい せいけい	女	27	大阪府大阪市城東区	社団法人大阪府視覚障害者協会
145	5	水泳	選手	森村 優希	もりむら ゆうき	男	19	大阪府東淀川区	社団法人大阪府視覚障害者協会
146	6	水泳	選手	栗原 光希	くりはら ひろゆき	男	28	神奈川県横浜市	社団法人東京都視覚障害者協会
147	7	水泳	選手	中村 可也	なかむら かの	女	25	大阪府河内長野市	社団法人大阪府視覚障害者協会
148	8	水泳	選手	高瀬 理奈	たかせ りな	女	35	東京都板橋区	社団法人東京都視覚障害者協会
149	9	水泳	選手	藤川 幸英	ふじがわ あやか	女	17	長野県軽井沢市	社会福祉法人長野県視覚障害者協会 (長野県松本ろう学校高等部1年)
150	10	水泳	選手	久保 南	くぼ みなみ	女	16	愛知県豊田町	一般社団法人愛知県視覚障害者協会 (愛知県立岡崎ろう学校高等部1年)
151	1	卓球	監督	佐藤 真二	さとう しんじ	男	50	東京都葛飾区	視覚者
152	2	卓球	コーチ	内山 健吾	うちやま たけひと	男	67	茨城県水戸市	視覚者
153	3	卓球	コーチ	須崎 聡典	すだずみ さとし	男	36	埼玉県八潮市	視覚者
154	4	卓球	手組通訳	井出 敏子	いで けいこ	女	50	神奈川県藤沢市	視覚者
155	5	卓球	選手	上田 航	うへだ へい	男	23	茨城県日立市	社団法人茨城県視覚障害者協会
156	6	卓球	選手	佐藤 瑞穂	さとう りほ	女	38	東京都杉並区	社団法人東京都視覚障害者協会
157	7	卓球	選手	青島 千寿子	あしま ちづこ	女	35	神奈川県横浜市中区	神奈川視覚障害者連盟

第22回夏季デフリンピック競技大会2013ソフィア 日本選手団名簿

2013年6月28日現在

通し	No	競技名	役職及び 出場予定競技種 目	名前(漢字)	名前(よみがな)	性別	年齢 6/1 現在	住所	所属協会(高校生は学校名を記載)
213	12	日本選手団本部	手組通訳	豊島 結美子	とよしま ゆみこ	女	48	兵庫県神戸市中央区	視覚者
214	13	日本選手団本部	手組通訳	小林 美美	こばやし よしみ	女	36	群馬県高崎市	視覚者
215	14	日本選手団本部	手組通訳	長山 祐	ながやま ゆう	女	33	京都府京都市伏見区	視覚者
216	15	日本選手団本部	広報	田原 聖絵	たはら せいえ	女	32	京都府京都市中京区	社団法人京都府視覚障害者協会
217	16	日本選手団本部	補送	林 孝雄	はやし たかお	男	63	東京都中央区	視覚者
218	17	日本選手団本部	補送	白根 真志	しろね まこと	男	36	東京都中央区	視覚者
219	18	日本選手団本部	補送	内田 典孝	うちだ けんた	男	48	東京都中央区	視覚者

第22回夏季デフリンピック競技大会2013ソフィア 日本選手団名簿

2013年6月28日現在

通し	No	競技名	役職及び 出場予定競技種 目	名前(漢字)	名前(よみがな)	性別	年齢 6/1 現在	住所	所属協会(高校生は学校名を記載)
158	8	卓球	選手	川崎 雅彦	かわさき みずえ	女	17	東京都小平市	社団法人東京都視覚障害者連盟 (板倉学園高校高等部1年)
159	9	卓球	選手	望月 剛太	もちづき しゅうた	男	28	神奈川県横浜市中区	神奈川視覚障害者連盟
160	10	卓球	選手	青島 聖生	あしみ よしお	男	32	神奈川県横浜市中区	神奈川視覚障害者連盟
161	11	卓球	選手	高瀬 文香	たかせ ふみか	女	20	茨城県仙台市青葉区	社団法人山形県視覚障害者協会
162	1	テニス	監督	堀田 忠孝	ほりだ ちゅうこう	男	68	埼玉県さいたま市	社団法人埼玉県視覚障害者協会
163	2	テニス	コーチ	内田 公彦	うちだ こうひこ	男	37	東京都練馬区	視覚者
164	3	テニス	スタッフ	尾崎 浩子	おざき じょうこ	女	43	大阪府寝屋川市	社団法人大阪府視覚障害者協会
165	4	テニス	選手	松下 智也	まつした ちゅうや	男	38	大阪府堺市東区	社団法人大阪府視覚障害者協会
166	5	テニス	選手	戸野 正樹	とのの まさき	男	30	神奈川県横浜市中区	神奈川視覚障害者連盟
167	6	テニス	選手	菅田 恵子	すがた けいこ	女	30	大阪府東淀川区	社団法人大阪府視覚障害者協会
168	1	バレーボール-男子	監督	前下 忠三	まえした だてさ	男	34	東京都江戸川区	視覚者
169	2	バレーボール-男子	トレーナー	前田 秀吉	まえだ ひでゆき	男	46	大阪府大阪市淀川区	視覚者
170	3	バレーボール-男子	手組通訳	大崎 武代美	おさき たけみ	女	53	大阪府吹田市	視覚者
171	4	バレーボール-男子	スタッフ	荒池 加寿子	あらい かずこ	女	50	東京都練馬区	視覚者
172	5	バレーボール-男子	選手	菅原 正孝	すがはら まさたか	男	30	栃木県那須塩原市	一般社団法人栃木県視覚障害者協会
173	6	バレーボール-男子	選手	田中 利典	たなか としのり	男	28	兵庫県高崎市	公益社団法人兵庫県視覚障害者協会
174	7	バレーボール-男子	選手	高橋 竜一	たかはし りゅういち	男	25	愛知県刈谷市	公益社団法人愛知県視覚障害者協会
175	8	バレーボール-男子	選手	中村 俊雄	なかむら としお	男	30	大阪府大阪市福島区	社団法人大阪府視覚障害者協会
176	9	バレーボール-男子	選手	中野 智久	なかの ともひさ	男	27	奈良県奈良市	社団法人奈良県視覚障害者協会
177	10	バレーボール-男子	選手	寺井 勇太	てらい ゆうた	男	20	大阪府大阪市東淀川区	社団法人大阪府視覚障害者協会
178	11	バレーボール-男子	選手	徳田 光彦	とくた ひろひこ	男	42	兵庫県神戸市西区	公益社団法人兵庫県視覚障害者協会
179	12	バレーボール-男子	選手	佐藤 淳	さとう じゅん	男	32	兵庫県川辺郡	公益社団法人兵庫県視覚障害者協会
180	13	バレーボール-男子	選手	木村 孝雄	きむら たかしげ	男	25	東京都板橋区	社団法人東京都視覚障害者協会
181	14	バレーボール-男子	選手	加賀 亮	かが りょう	男	22	静岡県三浦市	社団法人静岡県視覚障害者協会
182	15	バレーボール-男子	選手	中嶋 寛哉	なかしま けんや	男	30	愛知県日進市	一般社団法人愛知県視覚障害者協会
183	16	バレーボール-男子	選手	田嶋 祐	たけしま ゆう	男	28	愛知県刈谷市	一般社団法人愛知県視覚障害者協会
184	1	バレーボール-女子	監督	押野 美智	おしの みち子	女	36	東京都板橋区	視覚者
185	2	バレーボール-女子	コーチ	村井 貴行	むらい たくや	男	28	千葉県船橋市	視覚者
186	3	バレーボール-女子	トレーナー	中川 高徳	なかがわ たけ	男	36	茨城県つくば市	視覚者
187	4	バレーボール-女子	手組通訳	藤原 佳代	ふじわら かのこ	女	42	千葉県船橋市	視覚者
188	5	バレーボール-女子	スタッフ	大川 隆二	おおくわ しょうじ	男	48	東京都大田区	社団法人東京都視覚障害者協会
189	6	バレーボール-女子	スタッフ	大川 愛子	おおくわ あいこ	女	27	東京都大田区	社団法人東京都視覚障害者協会
190	7	バレーボール-女子	選手	柳川 奈美子	やなぎわ なみこ	女	27	宮城県仙台市青葉区	社団法人宮城県ろうあ協会
191	8	バレーボール-女子	選手	菅谷 美穂	すがや みほ	女	23	千葉県船橋市	社会福祉法人千葉県視覚障害者協会
192	9	バレーボール-女子	選手	中賀根 孝紀	なかがね けいき	男	22	栃木県栃木市	公益社団法人栃木県視覚障害者協会
193	10	バレーボール-女子	選手	安藤 梨絵	あづま りえ	女	21	兵庫県姫路市	公益社団法人兵庫県視覚障害者協会
194	11	バレーボール-女子	選手	安藤 千夏	あづま ちな	女	17	兵庫県姫路市	公益社団法人兵庫県視覚障害者協会
195	12	バレーボール-女子	選手	河村 奈美	かわむら なみ	女	24	岐阜県関市	一般社団法人岐阜県視覚障害者協会
196	13	バレーボール-女子	選手	長瀬 みゆき	ながせ みゆき	女	25	神奈川県平塚市	神奈川視覚障害者連盟
197	14	バレーボール-女子	選手	高良 美穂	たから みほ	女	22	神奈川県鎌倉市	一般社団法人神奈川県視覚障害者協会
198	15	バレーボール-女子	選手	藤村 美穂	ふじむら みほ	女	18	埼玉県加須市	社団法人埼玉県視覚障害者協会 (埼玉県立加須高等学校 高等学校部)
199	16	バレーボール-女子	選手	藤 祐子	ふじ ゆうこ	女	36	兵庫県神戸市西区	公益社団法人兵庫県視覚障害者協会
200	17	バレーボール-女子	選手	三浦 孝樹	みづう けんと	男	27	東京都杉並区	社団法人東京都視覚障害者協会
201	18	バレーボール-女子	選手	山崎 真	やまざき まこと	女	26	東京都杉並区	社団法人東京都視覚障害者協会
202	1	日本選手団本部	部長	大田 隆二	おおくわ しょうじ	男	54	福岡県福岡市西区	社会福祉法人福岡県視覚障害者協会
203	2	日本選手団本部	副部長	黒野 達人	くろの だつと	男	36	東京都板橋区	社団法人東京都視覚障害者協会
204	3	日本選手団本部	総務	橋本 恭雄	はしもと けいすけ	男	38	兵庫県三田市	公益社団法人兵庫県視覚障害者協会
205	4	日本選手団本部	広報	仁木 尚美	にき なおみ	女	45	神奈川県横浜市中区	神奈川視覚障害者連盟
206	5	日本選手団本部	総務	後藤 啓二	ごとう けんじ	男	36	東京都中野区	社団法人東京都視覚障害者協会
207	6	日本選手団本部	総務	立石 智恵	たちし ちほ	女	45	神奈川県藤沢市	視覚者
208	7	日本選手団本部	医師	羽倉 真	はぐろ まこと	男	37	京都府京都市西京区	視覚者
209	8	日本選手団本部	バレーボール-トレーナー	中島 孝樹	なかしま けんと	男	40	千葉県市川市	視覚者
210	9	日本選手団本部	バレーボール-トレーナー	高橋 小春樹	たかはし こはる	男	40	東京都板橋区	視覚者
211	10	日本選手団本部	補綴師	高橋 美枝子	たかはし みえこ	女	57	埼玉県所沢市	視覚者
212	11	日本選手団本部	翻訳	高木 真知子	たかぎ まちこ	女	63	東京都板橋区	視覚者

第 22 回夏季デフリンピック
日本選手団 結団式・解団式について

日本選手団では、以下の式の開催を予定しています。

1、 結団式

開催日時:2013年7月21日(日)19:00~21:00

開催場所:ホテル日航成田「鶴の間」

出席者:選手団員

式次第(予定)

- ① 開式通告
- ② 団長挨拶
- ③ デフリンピック派遣委員会委員長挨拶
- ④ 来賓挨拶
- ⑤ 乾杯
- ⑥ 歓談
- ⑦ 日本選手団紹介
- ⑧ 団旗授与
- ⑨ 主幹決意表明

2、 解団式

開催日時:2013年8月5日(月)16時~(予定)

開催場所:Rodina Hotel MARITSA ホテル 予定

出席者:選手団員

式次第(予定)

- ① 開式通告
- ② 団長挨拶
- ③ 成績発表
- ④ 乾杯
- ⑤ 歓談
- ⑥ 各競技チーム成績報告と挨拶
- ⑦ 団旗の返還
- ⑧ 主幹挨拶
- ⑨ 閉式通告

<大会期間中のミーティングについて>

大会期間中、下記ミーティングを行います。

1 全体ミーティング

1. 招集担当 団長
2. 招集対象者 選手団全員
3. 内容 選手団全体に関わる内容
4. 招集日時 結団式、解団式など決定しているものの他は未定。

2 監督ミーティング

1. 招集担当 副団長
2. 参加対象者 各チーム監督、本部総務担当(広報、翻訳、通訳)
3. 内容 TD会議結果の報告、情報交換など
4. 招集日時 週3回程度、日程については事務局から掲示。

3 事務局ミーティング(医療ミーティング含む)

1. 招集担当 総務(嶋本)
2. 招集対象者 本部スタッフ全員(医療担当者含む)
3. 内容 連絡・行動の確認
4. 招集日時 基本的に毎日開催

4 役員ミーティング

1. 招集担当 団長
2. 招集対象者 本部役員、関係者
3. 内容 発生した問題について
4. 招集日時 緊急時

<大会期間中の事務所などについて>

1 本部事務所：質問などあるときはこちらに来てください。

1. 開所 / 閉所 朝8時～ / ～夜9時
2. 場所 ミーティングルーム(MESTAもしくはJANTRAのいずれか)

2 ミーティング室：選手団員が予約制で会議に使える場所です。

最大2チームまで同時に使用できます。

1. 開所 / 閉所 朝8時～ / ～夜9時
2. 場所 ミーティングルーム(MESTAもしくはJANTRAのいずれか)

3 医療室：具合の悪いときにお越しください。

1. 開所 / 閉所 朝8時～朝10時 / 夜7時～夜9時 (いつでもおいでいただけます)
午後3時～5時 (不在時もあるので、受診の際は携帯で連絡をしてください)
2. 場所 (Room 2006 / 2007)

4 トレーナールーム：競技団体スタッフとお越しください。

1. 開所 / 閉所 朝8時～朝10時 / 夜7時～夜9時 (いつでもおいでいただけます)
午後3時～5時 (不在時もあるので、受診の際は携帯で連絡をしてください)
2. 場所 (Room 2008 / 2009)

競技団体	7/22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	8/1	2	3	4	5	6
選手団本部																
陸上																
バドミントン																
ビーチバレー																
自転車																
バレーボール																
水球																
水泳																
卓球																
バスケットボール																
サッカー																
テニス																
バレー																
柔道																

TD Technical Meeting
総合スケジュールと競技スケジュールが異なるケースあり。
試合? TDおよび練習のスケジュールは未定、変更される可能性があります。

現地一般情報

(2013年4月現在)

時差	日本とソフィアとの時差は -6 時間 ※サマータイム期間 (サマータイム実施期間は、3月最終日曜の AM2:00～10月最終日曜の AM2:00 まで。) 例:日本が AM6:00 の時、ソフィアは PM0:00 となります。
気候	4月平均気温 最低 5℃ / 最高 16℃ 平均降水日数 12 日 夕方以降は気温が下がるので、日中は露出の大きな恰好をしていますが、夕方以降は羽織れるものが必要になります。
通貨	通貨単位はレフ Lv (複数レヴァ)。 補助通貨単位はスティンキで、1Lv=100 スティンキ。 2013年3月現在、1レフ=約 63.60 円
両替	日本でレフに換金できませんので、現地の空港等で両替して下さい。 市中の両替所には EXCHANGE と英語で書かれた看板がレート表とともに出ている。 両替には原則としてパスポートが必要で、それと引き換えに両替証明書(領収証)が発行される。T/C は銀行で両替可能だが、5%前後の手数料がかかる。
チップ	【タクシー】おつりの小銭をチップとする。 【レストラン】高級レストランでサービスに満足したときには、料金の 10%程度が一般的。 【ホテル】料金にサービス料が含まれているので基本的に不要。特別な頼みごとをしたときに 1Lv 程度。
物価	●ミネラルウォーター/500ml→ 0.55Lv=約 31 円 ●屋台のピザ→ 3Lv=約 168 円 ●レストラン→ 15～20Lv=約 840～1,120 円 (観光客向けレストランでは 40～50Lv が目安。)
税金	ブルガリアではほとんどの商品に付加価値税が 20%かかっています。多くの場合内税方式で、税金を別途に払う必要はないが、一部の高級ホテルでは、付加価値税(9%)を宿泊料とは別に徴収する場合があります。免税の対象店で買い物をしたときには書類を作成してもらい、出国地で申請すれば払い戻しを受けられます。
飲料水	水道水は飲まない方がよい。ミネラルウォーターは比較的どこでも手に入るのをそれを買って飲むのがよいでしょう。
ビジネスアワー	以下は一般的な営業時間の目安。 【銀行】月～金曜は 8:30～16:30。土・日曜は休業。 【デパートやショップ】一般の商店は月～金曜は 10:00～20:00、土曜は～13:00、日曜、祝日は休業というのが一般的。ショッピングモールはだいたい 10:00～22:00 の営業で無休。 【レストラン】12:00～24:00 というところが多い。都市部には 24 時間営業の店もある。
安全とトラブル	比較的安全です。都市部では他の欧州都市と同様にスリなどに注意が必要。 【スリ】ソフィアの中心部や中央駅、バスターミナル周辺、路面電車や市内バスの車内といった所で多発している。数人でターゲットを取り囲んで盗難状況を作り出し、気をそらしている間にカバンの中やポケットから貴重品を盗むという手口が一般的。
トイレ	駅やバスターミナルの公衆トイレ(トアレトナ)は基本的に有料で、1回 0.20～0.50Lv。料金を払ってトイレットペーパーをもらう。入口は女性用(ダーミーまたはジェニー)、男性用(マジェ)に分かれている。しゃがんで使う便器は日本の和式と反対側を向いて使用する。
緊急電話番号	警察 166 / 救急 150 / 消防 160

宿泊ホテル

HOTEL RODINA

ホテル情報	Tel. 00359 2 917 9999 Fax: 00359 2 951 5840 HP: http://www.rodina.bg Address: Sofia 1606, blv. "Totleben", N. 8, Bulgaria
ロビー	・フロント(24時間・英語可) ・バー(飲み物・お菓子) ・カフェレストラン ・両替所(日本円取扱あり) ・ロビーではWIFI無料使用可能 ※ホテルでは水を用意できません。
部屋設備	テレビ/エアコン/ドライヤー/バスタブ/シャワー/シャンプー / 石鹸/バスタオル(1人1枚) / セーフティボックス/冷蔵庫/ヒーター
部屋にない設備	湯沸かしポット/製氷機/歯ブラシ/ミネラルウォーター/電子レンジ
インターネット(部屋)	階数によってネット環境が異なります。 ○8/9/10/12階 LAN ケーブル使用可能(無料) ※ケーブルはフロントにて無料貸し出しがあるが、数に限りがあるため、日本から持ち込んだ方がよい。 ○1~7/11/13/14/15階 WIFI 使用可能(無料) ○16階以上の部屋 使用不可(2013年4月現在) 【注意】階数指定はできないため、部屋での使用ができない可能性あり。その場合、ロビーでの使用もしくは日本からデータ通信レンタル機器を準備したほうがよい。なお、現在、全ての階でWIFIを使用できるよう工事予定。
食 事	・朝食はすべて2階(R階)にあるレストラン、(予定) ・朝食は通常 AM7:00~となるが、朝早い場合には事前にリクエストすれば弁当を用意してくれる。また昼食の同様に弁当をリクエストできる。食事内容は未定。
エレベータ	・エレベータは6機。P階=1階 ロビー / R階=2階 レストラン
ランドリーサービス	ホテルに洗濯機はなくランドリーサービスはあるが、とても高額。選手団の洗濯物を業者に一括依頼する予定。事前に記名入りの洗濯ネットを用意してください。
日本本部 設置期間: 7/24-8/4	・M階(3階)に設置予定。 ・会議室[MESTA HALL]もしくは[JANTRA HALL]のいずれか。
周辺施設① MALL OF SOFIA	・大型ショッピングモール ・ホテルから徒歩10分。 ・食料品、日用品、服飾品、レストラン等 取扱多数。 ・食料品売り場(B2F)に水が売っている。
周辺施設② 売 店	・飲み物やお菓子(チップス・チョコレート)、土産品。 ・英語は通じない。
周辺施設③ HAPPY 寿司	・ホテルから徒歩10分程度。 ・店員によっては英語が通じる。(英語メニューあり)

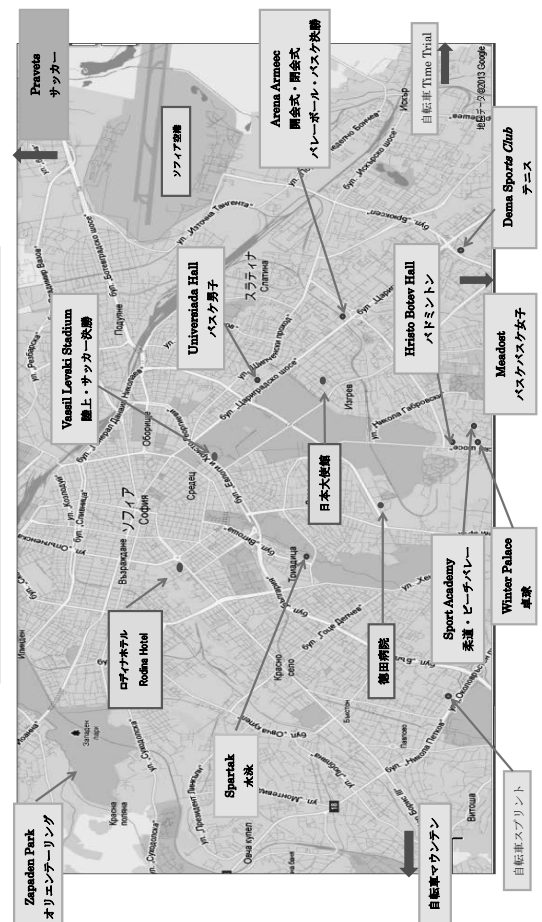
電話のかけ方	【ブルガリアから日本へかける場合】 (03) 1234-5678 または (090) 1234-5678 へかける場合 00(国際電話識別番号) ▼ 81(日本の国番号) ▼ 3 または 90(市外局番と携帯電話の最初の0を取った番号) ▼ 1234-5678(相手先の電話番号) 【日本からブルガリアへかける場合】 ソフィアの(02) 1234567 へかける場合 国際電話会社の番号 001(KDDI)※1、0033(NTTコミュニケーションズ)※1、0061(ソフトバンクテレコム)※1、005345(au携帯)※2、009130(NTTドコモ携帯)※3、0046(ソフトバンク携帯)※4 ▼ 010(国際電話識別番号)※2 ▼ 359(ブルガリアの国番号) ▼ 2(頭の0を取った市外局番) ▼ 1234567(相手先の電話番号) ※1 「マイライン」の国際区分に登録している場合は不要。詳細は URL www.mylain.org ※2 au は、010 は不要。 ※3 NTTドコモは事前登録が必要。009130をダイヤルしなくてもかけられる。 ※4 ソフトバンクは0046をダイヤルしなくてもかけられる。
--------	---

RIU Pravets Resort

※サッカー競技のみこちらにご滞在となります。

ホテル情報	ADDRESS : 8 Ezeroto quarter 2161 - Pravets Bulgaria Tel: + 359 2 90 24 100 Fax: + 359 2 90 24 111 HP : http://riupravets.bg/ E-mail: reservationspravets@tts.bg
ロビー	・フロント(24時間・英語可) ・バー ・中庭 ・レストラン ・土産物屋 ・ロビーでWIFI無料使用可能 ・周辺には何もない ※ホテルでは水を用意できません。
レストラン(食事)	・buffet形式のレストラン。 ・朝昼の食事は全てここで済ませます。(内容は未定)
部屋設備	テレビ/エアコン/ドライヤー/バスタブ/シャワー/シャンプー リンズ/石鹸/バスタオル(1人1枚) / セーフティボックス/冷蔵庫/ヒーター /ミネラルウォーター(最初の1泊のみ) ※湯沸かしポットはフロントで貸出あり
部屋にない設備	製氷機/歯ブラシ/電子レンジ
インターネット(部屋)	・LAN ケーブルで利用可能(無料) ※ケーブルはフロントにて無料貸し出しがあるが、数に限りがあるため、日本から持ち込んだ方がよい。
ホテル設備	・スイミングプール ・トレーニングジム ※宿泊者は無料利用可能
ランドリーサービス	現在、BDSF が選手団の洗濯物をまとめて受けてくれるクリーニング屋を調査中。 【注意】その場合、事前に記名入りの洗濯ネットを用意し誰のものか間違えないようにする必要がある。

2013 デフリンピック競技会場 MAP



【選手・役員必携】

1 はじめに

初めてデフリンピックに出場するにあたって、自分の技術の程度や海外遠征など、不安な状態にあると思われます。参加決定後、選手団本部、競技団体やコーチからいろいろと注意、指示があると思いますが、項目が多すぎたり、メモに書き落したりということがあっては、折角のチャンスを十分に生かせない結果になることも予想されます。ここでは、心構え、準備から帰国後までの内容を記しておきます。

2 心構え

- ★ 日本代表選手としての自覚を持って行動する。
- ★ 代表選手として悔いのないように練習する。
- ★ 大会参加の経験を生かし、後輩のために役立てる。

3 大会参加まで

- 選手団本部やコーチからの連絡事項
 - 身体に関すること
 - 健康状態の確認
 - 常備薬、排便などの生活習慣チェック
 - 競技に関すること
 - エントリー種目の決定
 - 競技規則の熟知
- 生活態度に関して
 - 指示事項は必ずメモを取る。
 - 集団生活のマナー（ルール）を守る。
 - 時間の厳守
 - 私物の管理（持ち物に名前を付ける）
 - あいさつの習慣
 - 喫煙場所の厳守
 - 生活習慣をさせること
 - 食事、シャワー浴、ベッド（メイキングも含む）
 - バランスのよい食事に気をつけること。
 - 貴重品は各自で管理すること。
 - 時間的、場所的にも制約を受けることが多くあるが、お互いのペースを尊重しながら、睡眠、食事、トレーニング、競技、応援、ミーティング、洗濯、排せつ等の生活リズムを自分でコントロールし、規則正しい生活に心がける。
- 所属するろう協会、居住する都道府県障害福祉課への連絡について。
 - 都道府県・指定都市の障害福祉課等と十分連絡を取り、挨拶などを欠かさないこと。
- その他
 - 国際手話に慣れておき、簡単な会話も学習しておくこと。

4 大会前までの練習について

- 大会に合わせた練習計画を立て、質の高い練習をすること。
- 初めての国際大会では、雰囲気慣れなかったり、あがったりするので、各自で競技に集中する方法を持っておく。
- 選手1人になっても競技に参加できるように、競技会の仕組みについて理解しておくこと。
- コーチの指示をメモし、頭にいれておくこと。
- 大会参加までの練習で、困ったこと、わからないことがあれば、選手団本部や競技チームに連絡、相談すること。
- 練習終了時に身体をチェックを行なうこと。

5 ユニフォームの着用について

日本選手団として参加する者は、その自覚と誇りを持って選手団公式ユニフォーム（以下「公式ユニフォーム」）を着用しなければならない。
日本選手団より支給された公式ユニフォームは以下の通りである。

- 共通ユニフォーム 屋外用ウェア（上下）、ボロシャツ、キャップ
- 競技ユニフォーム
- 共通ユニフォームの着用について
結団式、開会式、閉会式及び表彰式、解団式は共通ウェアを着用すること。
※この共通ユニフォームは他人に譲ったり交換することはできません。
※靴は黒色または紺色で統一すること。
- バッジ
選手団員は必ず1個を自引用として胸もしくは襟元に付けること。

6 大会会場で

- 競技場、食堂、宿舍、その他の関係施設の位置を確認すること。
- デフリンピックでは、雰囲気慣れなかったり、あがったりするので、各自で競技に集中する方法を持っておくこと。
- なるべく多くの参加者と親交を深めるように努力し、またそれぞれが、日本チームの一員として責任を持った行動をすること。
- 自分の競技が終了しても、日本チームの他の人でもまだ競技を控えている人もいるので、他の人への心づかいを忘れないこと。
- 無断に宿舍、競技場を離れないこと、また、単独行動はとらないこと。
- 部屋をきれいに使うこと。
- パスポート、現金、貴重品の管理をしっかりすること。
- 生水は飲まないこと。

7 毎日の報告について【重要事項】

- 毎日の健康チェックについて
チームごとに選手・スタッフの体調を管理してください。毎朝チェックし、異常があれば午前8時からのメディカルルームに当事者を連れて来てください。

- 毎日の試合結果について
 - 各チーム監督は毎日のチームの行動日程及びリザルトを宿舍に戻り次第、選手団本部に提出すること。
 - 公式記録の発表は、選手団本部においてもインターネットで確認する予定。

8 メディアへの対応について【重要事項】

第22回夏季デフリンピック日本選手団ウェブサイト <http://www.jfd.or.jp/sc/sofia2013/>を公式報道サイトと定め、写真・映像・記事を発信します。世界でのデフリンピックへの理解が進むことを期待し、メディアに対し積極的に情報を提供します。各競技の選手・コーチも日本選手団として積極的な協力をお願いします。
大会期間中は団員によるインターネットなどでの日記・レポート・解説・ニュース・写真・動画等に関して、下記のとおりガイドラインを設けます。
なお、日本選手団広報の撮影した写真は、日本選手団ウェブサイトにて公開しますが、撮影した全写真の著作権は連盟が持ち、個人的な譲渡は行いません。

■各競技チームのウェブサイト・ブログ・フェイスブック・ツイッターなどについて

- 認められる内容
- ①記事：各競技のトレーニング・練習・試合結果・報告
 - ②写真：各競技のトレーニング・練習・試合などの写真
：日本選手団ウェブサイトに掲載された写真（ロゴマーク入り）
 - ③動画：各競技のトレーニング・練習およびホテル・会場外で撮影したもの。

- 認められない内容
- ①記事：上記以外すべて
 - ②写真：各競技で同意の得られていない他国チーム選手の肖像画像
 - ③動画：試合・各競技で同意の得られていない他国チーム選手の肖像動画

■各選手・役員のウェブサイト・ブログ・ツイッターなどについて

- 認められる内容
- ①記事：自身の競技や心情、体調、プライベートに関する内容
 - ②写真：自身の肖像
：日本選手団ウェブサイトに掲載された写真（ロゴマーク入り）
 - ③動画：プライベートタイムで撮影したもの

- 認められない内容
- ①記事：同意の得られていない他の選手に関する内容
 - ②写真：同意の得られていない他の選手の肖像写真
 - ③動画：試合・トレーニング・練習の間に撮影したもの、同意の得られていない他の選手の肖像動画

※詳しくは別に配布するガイドラインを参考にしてください。

※デフリンピックの知名度をあげるため、積極的な情報発信を奨励することが本部の方針である。（オリンピック・パラリンピックも同様の方針）

※人種、民族、宗教、性別、障害、あらゆる面で特定の者・グループを誹謗または中傷することは厳禁する。
※営利目的による情報発信は厳禁する。

■これらの条件遵守期間は競技種目に関わらず全員 2013 年7月 21 日～8月7日とする。

【競技中における抗議について】

- 抗議する場合には、**必ず事前に総監督に相談すること。**
- 下記を熟読し、手順の流れについてつかむこと。
- 抗議する際の申し立て金については競技団体負担とする。

デフリンピック規則より DG24. 権限・判定権異議申し立ておよび上訴（紛争）

1. ICSD会長または会長に指名された者は、主催国連盟（又は組織委員会）又は大会参加国連盟により提出された、大会に関係するあらゆる申立ての仲裁において最高権力を有する。
2. 試合会場において、試合についてだされた異議については、大会役員によって判断が下される。これらの審判の判断の対象となるのは、試合結果が決定してから2時間以内に英語で書面で異議を申立てた場合に限られる。紛争に関して、さらに明確にする必要であれば、該当する国際スポーツ連盟規則を参考にしなければならない。
3. 役員の決定に対する申立ては、抗議委員会に提出する。併せて評議員会で決められた額の申立て金を納めるものとする。
4. 抗議委員会の決定に対する申立ては、申立人である選手団の役員が、抗議委員会の決定後、4時間以内にデフリンピックの審査員団に対しておこなわなければならない。
5. 抗議委員会は5名からなり、1名は技術委員とする。他の4名は組織委員会が指名する。
6. 審査員団は5名で構成し、うち3名はICSD執行理事会が指名し、残りの2名は組織委員会が指名する。
7. 申立てが受け入れられた場合、申立て金は訴訟を起こした選手団に返却される。
8. 聴力テスト及びドーピングに関する申立ては、（医療委員会、選手委員会などの主要代表者と協議の上）、ICSD執行理事会が判定権をもつ。

夏季デフリンピック規則より 9. 権限・判定権

9. 権限・判定権

- 9.1 ICSD 執行委員会は最高権限を有し、組織委員会および参加国連盟によって提訴された夏季デフリンピックに関する全ての論争に対して最終権限としての決定を下す。ICSD、選手および国連盟はスポーツ仲裁裁判所へ提訴する権利を有する。
- 9.2 審判員（ground judges）に対する競技に関する抗議は、審判員によって判定され、公式夏季デフリンピック抗議用紙に英語で記入して提出しない限り、抗告の対象とはならない。その抗議も各競技が定める時間内に提出されなければならない。（各技術規則を参照）
- 9.3 役員審判員（official）の判定に対する抗議は、その競技の審査委員会のどの委員にでも申し立てが可能であるが、その際には50米ドルの保証金を納めることとする。
- 9.4 審査委員会は競技ごとに定められた制限時間以内にその抗議に対する判定を下し、当該国連盟へ即座に通知しなければならない。
- 9.5 審査委員会の下した判定に対して抗議する場合、最初の判定が下されてから4時間以内に抗議国連盟の役員が夏季デフリンピック上訴審判へ提訴する。
- 9.6 提訴が受理された場合には保証金は抗議国連盟へ返却される。
- 9.7 聴力、ドーピング検査、選手の国籍問題に関する訴えはICSD 執行委員会の単独裁断とする。

【ドーピング検査の手順】

1. 全体的な考え方

ドーピング検査の対象競技者は、競技順位やくじで決定されます（従って、予告なしに通告されます）。

（1）行動の監視

ドーピング・コントロール・オフィサー（DCO）からドーピング検査対象となったと通告を受けた時点から検査終了まで、選手の全行動はDCOから監視を受けることになります。

（2）検査途中での異物混入を防ぐために

検査中は外部から検体（尿）への異物混入を防ぐために、容器の選択、採取からボトルへの分注、ボトルの密封まで、選手本人とDCO双方が確認した上で各操作が実施されます。検体は、密封された状態で検査機関に搬送され、尿の成分が分析されます。

（3）コーチ等の同伴

選手にはコーチやチームドクターなどの同伴者を1名帯同することが認められています。特に視覚障害のある選手や上肢機能に障害のある選手については、採取も同伴者が手伝うこともできます。未成年の選手には、検査が正しく行われたかを確認するためにコーチを同伴することが強く勧められていますが、どうしても難しい場合には、DCOによりシャペロンを1名配置するなど、DCOと選手が二人きりで検査を行わないように配慮されています。なお、通訳は上記同伴者の人数に含まず帯同することができます。

2. 検査手順

以下は検査手順ですが、検査の際にはドーピング・コントロール・オフィサー（DCO）が丁寧に一つずつ手順を説明してくれますので、その指示に従って検査を受けてください。また、（財）日本アンチ・ドーピング機構（JADA）のサイト上（ドーピング検査の流れ）に、字幕・イラストつきで手順が紹介されているので、必ず大会前に見ておくようにしてください。

1. ドーピング・コントロール・オフィサーから、検査対象者になったことを通告されたら、検査への同意を確認するための通告書欄に署名する（検査を拒否することは規則違反となる。）

* DCOから検査対象になった旨を伝えられます。通告後は、速やかにドーピング・コントロール・ステーションに出頭してください。表形式や別種目へ出場する、メディアに対応する、ウォームダウンを行う、必要な医療処置を受ける、同伴者または通訳を探す、写真付きの身分証明書を探すなどの行動は、DCOにその旨を伝え、許可を受けてください。DCOあるいはシャペロン（検査対象者への通知およびドーピング・コントロール・ステーションまでの付き添いと監視を行う検査係員）の同伴があればこれらを行うことは可能です。検査には1名の同伴者（コーチなど）を連れて行くことができます。検査を拒否することは規則違反とみなされます。

2. 尿意をもよおすまでウェイトイングールームで待機する。

* 検査室には安全なミネラルウォーターなどが用意されていますので、飲みながら尿意を催すまで待ちます。採取した尿量が90ml以下の場合は、再度の採取が必要です。

3. 待機中に、いくつかの採取カップの中から、使用するカップを自ら選ぶ。

* 必ず複数のカップの中から自分で選択します。破損や汚れがないか、気をつけて確認しましょう。

4. 採取する。

* 同様のオフィサーが一緒にトイレに入り、選手が正しく採取しているかどうかを目で見て確認します。

5. 採取した尿を保管するためにいくつかの密封されたサンプルキットの中から、使用するものを自ら選ぶ

* サンプルキットには外箱に確認用のシールが貼ってあります。また中にボトル2本が入っています。あらかじめサンプルキットが密封されているか、また容器に破損がないか確認します。

6. 2本のボトルに、指示された量の尿を分注し、しっかりとふたをする。

* 指示に従い、自分で行います。

7. 残った尿で、比重が測定される

* DCOが、カップに残った尿に尿スティックを浸して測定するか、または屈折計を用いて比重を測定します。

8. 検査7日以内に使用した薬物・サプリメントについて申告する。

* 大会前7日以内に使用した処方箋や処方箋のない薬および栄養補助食品類（サプリメント）を記載して下さい。吸入喘息治療薬（例えば吸入ベータ2作用薬、糖質コルチコイド吸入薬）を使用した場合、あるいは糖質コルチコイドの局所注射（関節内、関節周囲、腱周囲、腱膜外、皮内）をした場合は、診断名、使用した薬品名、および処方した医師の氏名や病院名などを記載して下さい（常時、薬名、サプリメント名とその成分がわかるものをリスト（日本語と英語）にして所検すること）。

9. ドーピング検査公式記録書にすべての関係者が署名した後、控えを受け取る

* 選手と同伴者も記録書の内容が間違いないか確認し、署名をします。

10. その後の措置

* 結果は2週間程度で、公式検査機関を通して実施団体及びJADAに報告されます。結果が陰性であった場合にはJPCおよび選手へは連絡は入りません。陽性の反応が検出された場合にのみ、JADAより選手へ直接通知されます。JPCにも連絡が入りますので、選手の所属競技団体にその旨を伝えます。その後、聴聞会を経て選手の処分（罰則）が決定されます。

【注意】
現在使用している‘くすり’は、使用目的ごとに、名前、メーカー、薬品名、番号などを英語でリストにし、常に所持して下さい。（検査で必要となります。）

オージオグラムに関する規則

1. 前文...2
2. 参加資格に関する規則...2
3. 定義とろうであることの証明...3
4. オージオグラムの承認手続...3
5. デフリンピック(あるいはICSD認定の競技会で)...4
6. 責任...5
7. 発覚...5
8. 違反と罰則...6
9. オージオグラム・データベースで使われている記号の意味...6

1. 前文

スポーツ精神とは、人間の精神・肉体・心を祝い、以下の価値観によって特徴づけられるものである：

- 倫理感、フェアプレイ、正直さ
- 健康
- すぐれたパフォーマンス
- 人格と教育
- 楽しみと喜び
- チームワーク
- 専心と献身
- 規則や規約の遵守
- 自身および他の参加者の尊重
- 勇気
- コミュニティと連帯

ICSDは、「**スポーツによる平等**」というオリジナルのモットーを掲げ、オリンピック精神の本質をろう者とわかちあう。

夏季・冬季デフリンピックおよび世界選手権などのICSD認定の競技会には、ろうおよび難聴の選手だけが参加することができる。

正会員、準会員、地域連盟は、国際および国内のスポーツイベントにおいて、以下のオージオグラム規則を遵守する。

2. 参加資格に関する規則

夏季・冬季デフリンピックは、加盟団体である全国的なろう者組織のろうのスポーツ選手が集結する場である。デフリンピックおよびその他の ICSD 認定競技会の参加者は、以下のとおりでなければならない：

- **聞こえが良い方の耳の聴力が 55dB 以上の聴覚障害を有する（500、1000、2000 ヘルツの三つの純音平均、気導、ISO1969 基準）ろう者であること。**
- **加盟団体である全国的な組織の会員であり、その国の国民であること。**

選手は、ウォームアップ中ならびに競技中、あらゆる補聴機器、増幅器および人工内耳の体外パーツを制限ゾーンエリア内で使用してはならない。スポーツ競技において、音の増幅器の使用が有利に作用することは明白である、そのため、ウォームアップ中ならびに競技中は使用が禁止されている。「制限ゾーン」の範囲は、すべての競技において定義されている。詳細は、各競技の技術規則を参照のこと。

2ページここまで

3ページここから

3. 定義とろうであることの証明

- 3.1. 「ろうであること」の定義は、良耳の聴力が55dB以上の聴力障害を有することである。（500、1000、2000ヘルツの三つの純音平均、ISO1969基準）55-65dBの境界域の聴力については、慎重に審査すること。
- 3.2. 各選手の聴力審査については、各国のスポーツ協会が全責任を負う。
- 3.3. 各選手は、添付資料 1 の ICSD のオージオグラムの書式を用いなければならない。書式は、<http://www.deaflympics.com/forms/audiogram.pdf> からダウンロードすることができる。
- 3.4. すべてのオージオグラム検査は、以下の4項目すべてに関し、**それぞれの耳について**記入されなくてはならない。

1. 気導
2. 骨導
3. ティンパノグラム（鼓膜聴力検査）
4. アコースティック反射(リフレクソメトリー)
訳注：医学辞書で該当する訳語なし。
音響反射・耳小骨筋反射にあたるか。

要件に従わない場合には、承認が遅れることになる。

- 3.5. 全てのオージオグラムは、公式なものであり、虚偽偽りのない選手自身のものではないなければならない。オージオグラムの信憑性については、各国のろうスポーツ協会が保障しなければならない。

4. オージオグラムの承認手続

4.1. 競技前:

- 4.1.1 新しいオージオグラムを提出する前にICSDに連絡し、当該選手がすでにICSDのオージオグラムデータベース中の自国の最新リストに掲載されているかどうか確認する。選手名がリスト中にない場合、ICSD事務局は、その選手のオージオグラムのデータを保有していないということを意味する。
- 4.1.2 いかなるICSD認可の競技（夏季/冬季デフリンピック、世界選手権大会、地域の選手権大会を含む）においても、競技の**3ヶ月前**には新しいオージオグラムが提出され、かつ1年以内のデータでなければならない。オージオグラムの提出の遅れや、新規参加選手のオージオグラム不在の罰金は、1書式につき20米ドルである。
- 4.1.3 すべての 新しいオージオグラムは、各国のろうスポーツ協会によって、直接ICSDの本部事務局に送付されなくてはならない。
- 4.1.4 受領されたオージオグラムは、ICSDのデータベースに入力され、彼らが「自国審査済み」であることを示すために、「N」（国内）も入力される。
- 4.1.5 3.4に規定されたおりに記入されていない場合、充分な情報を記載して再申請されるまで、オージオグラムは「INC」（不完全）と入力される。
- 4.1.6 オージオグラムは確認のためにICSDのオージオロジストに送られる。
- 4.1.7 ICSDのオージオロジストは承認するものと危険/境界線上にあるものとは表示する。
- 4.1.8 オージオグラムが承認されると「N」の欄が「C」（CISS）に変えられる。
- 4.1.9 「X」記号がつけられた「危険」な選手は、大会期間中、ICSDのオージオロジストによって再検査される。
- 4.1.10 平均聴力55dB以上の聴覚障害という資格要件に当てはまらない選手は参加資格なしと判定され、「DQ」と書かれ、その後最低2年間はオージオグラムを再申請できない。

4.2. 競技登録時:

- 4.2.1 最終登録用紙には「選手のID番号」の欄がある。
- 4.2.2 ICSDのデータベースに登録されている選手は、当該箇所選手のID番号を入力する。該当する選手は、オージオグラムを提出しなくてもよい。以下の例参照。

Family Name (姓)	First Name (名)	Date of Birth (生年月日)	Athlete ID Number (選手のID番号)
DOE	John	31 Jan 1975	12345
MCKNIGHT	David	5 May 1978	
SHARP	Alfred	10 Dec 1977	22678

上の例では、**DOE, John** と **SHARP, Alfred** はICSDのデータベースにオージオグラムがあるが、**MCKNIGHT David**はICSDのデータベースに入っていないことを示している。

- 4.2.3 データが不十分であることを示す「INC」あるいは資格がないことを示す「DQ」が記載されている場合には、参加は許可されない。

- 4.2.4 オージオグラムを提出していない者には参加資格が与えられない。

5. デフリンピック(あるいはICSD認定の競技会で)

- 5.1. 選手のオージオグラムが提出されていない場合、当該国の費用負担によって、聴力検査を大会会場において、アクレディテーション・バッジを受け取る前に実施する。（訳注：同一の文言が4.2.4に移動。規則2.0では2.3.1に記載）
- 5.2. 選手のオージオグラム・データベースが、各国のオージオロストによって検査されたことを示す「N」である場合、当該選手は大会期間中、ICSDのオージオロストによって再検査される場合がある。
- 5.3. ICSDのオージオロストによって検査・認証を受けた選手を示す記号は「V」となる。
- 5.4. ICSDのオージオロストは、すでに承認を受けている選手であっても、いつでも審査をおこなう権利を有する。（訳注：元となった文言が、規則2.0の2.3.5に記載）
- 5.5. ICSDの役員および技術委員は、大会中、オージオグラム審査を求めることができる。選手は、最終の試合の終了後、同日あるいは次の日に審査を受けることができる。（訳注：同一の文言が、規則2.0の3.1.1に記載）
- 5.6. 選手の聴力の状態に疑義が持たれる場合、ICSDはまず、選手のオージオグラム・データベースを、下記の要領に従って調べる。
 - 5.6.1 当該選手が「V」で示されている場合、既にICSDによって検査されているため、ICSDのオージオロストがこれ以上の検査を行う必要はない。
 - 5.6.2 当該選手が「C」「N」もしくは「X」で示されている場合、過去にICSDによる検査がなされていないため、ICSDは検査を行う必要がある。
- 5.7. オージオグラム審査は、試合のスケジュールを邪魔したり、変更させたりしてはならない。（訳注：同一の文言が、規則2.0の3.2に記載）
- 5.8. 自らのチームの選手の審査時間を確保するのは、チームリーダーの責任である。（訳注：同一の文言が、規則2.0/2.3.2に記載）
- 5.9. チームリーダーは、審査を受ける選手とともに決められた時間にICSDのオージオロジストと会う。選手に審査を受けさせるリーダーと選手は、パスポートまたはIDを持ってくる。（訳注：同一の文言が、規則2.0の3.3.1に記載）
- 5.10. 予約を守らなかった場合、料金が課せられる。（訳注：同一の文言が、規則2.0の2.3.3.1に記載）
- 5.11. オージオグラム規則にしたがってテストを受けずに大会会場後にした選手は、参加資格を失う。（訳注：同一の文言が、規則2.0の2.3.4に記載）

6. 責任

- 6.1. ウォームアップ中ならびに試合中にいかなる補聴器/増幅器ないしは人工内耳の体外パーツも制限ゾーンエリア内で用いないようにすることは、各選手の自己責任である。
- 6.2. 試合会場にはいる際、いかなる選手も補聴器/増幅器ないしは人工内耳の体外パーツの装着を認められない。すべての選手は、試合前の最後の練習では、補聴器/増幅器ないしは人工内耳の体外パーツは

ずさなければならない。

7. 発覚

7.1. 聴力機器類の使用

もし選手が、ウォームアップ中ならびに試合中に補聴器/増幅器ないしは人工内耳の体外パーツを制限ゾーンエリア内で装着しているを見つけた場合、ただちに、当該スポーツの技術委員と異議申し立て委員会にその旨を報告しなければならない。当該試合において承認を受けているリーダーおよびトレーナーだけが、補聴器/増幅器ないしは人工内耳の体外パーツの装着について、公式な異議申し立て文書を提出することができる。異議申し立て文書と共に、日時が刻印されたビデオによる、追加の証拠を作成しなければならない。伝聞による証拠は作成できない。

7.2. 参加資格認定期間中の聴力検査

選手が55dB以上の聴力障害を有していないことが、ICSDのオージオロジストによって判明した場合、当該選手は参加資格を与えられない。選手は、役割を「役員」等に変更しても、いかなる形の参加資格をも与えられない。

7.3. 異議申し立てによる聴力検査、もしくはICSD役員/技術委員長による聴力検査

競技者が55dB以上の聴力障害を有していないことが、ICSDのオージオロジストによって判明した場合、当該選手は参加資格を剥奪される。また、当該選手の出場したすべての競技において、失格とされる。当該選手が団体競技に出場していた場合、国際スポーツ連盟（ISF）の規則に従って、それまで出場していた試合は没収試合とされ、スコアも没収される。

8. 違反と罰則

8.1. 違反:

- 8.1.1 個人競技の選手が補聴器/増幅器ないしは人工内耳の体外パーツを使用した場合、当該選手は即時に競技から除外されなければならない。当該選手が他のスポーツや他の種目にも登録している場合、選手は、違反がおこなわれた種目についてのみ失格となる。

例A: 陸上競技: 選手が100m、200m、400mに登録していたとする。その選手は、200mのレースで補聴器をつけているところを見つかった。このことは、この選手の100mおよび400mには、影響しない。リレーで違反がおこなわれた場合、リレーチーム全員が失格になる。

例B: バドミントン: 選手がシングル、ダブルス、ミックスダブルスに登録していたとする。その選手は、ダブルスの試合で補聴器を使用していることが見つかった。このことは、その選手のシングルおよびミックスダブルスの試合には関係しない。もし違反がチーム競技でおこなわれた場合、そのチーム全員が当該種目から失格になる。

- 8.1.2 チーム競技の選手が競技中に補聴器/増幅器ないしは人工内耳の体外パーツを使用していた場合、各競技の試合没収に関する規則にしたがって、試合が没収されて、チームは負けることになる。選手は、次の試合には、自由に参加することができる。試合の得点状況によっては、負けることが返って有利になる場合がある。このことを考慮にいれ、チームがゲーム没収のために得をするようなことは決してないようにしなければならない。

- 8.1.3 選手が違反を繰り返した場合、当該選手とチームは、すぐに大会から除外され、ICSDに報告され、執行委員会が定める一定期間出場停止になる。

8.2. 罰則:

- 8.2.1 これらの規則に違反した場合、技術委員とICSDの役員はすべての違反をICSD本部に報告する。失格した選手と（あるいは）そのチームに授与されたすべての賞品、賞、メダル、証書が取り消される。それに加え、罰金が課されることもある。

- 8.2.2 もし各国のろうスポーツ協会が一度以上、本規則3.1、3.2、もしくは3.5の規定違反を繰り返した場合、ICSD執行委員会は、当該ろうスポーツ協会を、2年から4年の間、当該スポーツへの参加停止を命じる場合がある。

- 8.2.3 ある国のろうスポーツ協会が資格を失っている間、そのろうスポーツ協会とそのチームは、ICSD認定のスポーツイベントに参加することはできない。

9. オージオグラム・データベースで使われている記号の意味

V	-ICSDのオージオロジストによって検査され、有効とされた選手
C	-ICSDのオージオロジストによって確認され、承認されている申請書
N	-自国のオージオロジストによって審査、承認されている
X	-危険/境界線上
DQ	-平均聴力 55 dBの基準を満たしておらず失格
INC	-オージオグラムが不完全。詳細は 3.4参照

改訂版 - 2009 年 11 月 13 日

【医療チームマニュアル】

◆メディカルスタッフから選手・スタッフの皆様へ

今回の大会ではメディカルスタッフとして医師・トレーナー・看護師がご一緒にいます。メディカルスタッフの仕事は、皆様の健康管理、病気の怪我の予防や治療を行います。

場 所 ロディナホテル 部屋番号 2006 / 2007
診療・治療時間 8:00～10:00、19:00～21:00(予約なしで受診可)
15:00～17:00(往診もあるので、まず連絡を入れてください)

✚ メディカルルーム(内科)・(整形外科)

医師と看護師が対応します。

- ・怪我をした方、具合の悪い方(病気)
 - ・体の調子がいつもと違うと感じる方
 - ・自分の持ってきた薬を飲む前に医師に相談してください。
- 眠れない時や気持ちが落ち込んだ時も看護師に気軽に声をかけてください。

♥ トレーナールーム

トレーナーが対応します。

- ・ケア及びコンディショニングが必要な方はチームスタッフと一緒に来てください。
- ・ストレッチング指導、テーピング指導、トレーニング指導、アイシング指導、超音波治療、低周波治療、その他のコンディショニングに関すること
- ・初めて利用する方はまず医師の診断を受けてください。
- ・2回目以降は時間の予約をしてください。

毎朝出発前までに(各チーム) → 選手・スタッフの体調を確認し、異常があれば午前8時にメディカルルームへ患者を連れて行く。

診療時間外の急病時 …… 主に夜間や早朝、試合中・練習中・試合後・練習後など緊急連絡先

メディカルスタッフ: 高橋 (看護師) _____ 号室
本 部: _____ (事務局) _____ 号室

競技会場で怪我をしたとき → メディカルスタッフ: 中島トレーナーへ連絡

会場の医療救護所で治療を受ける

(チーム同行のスタッフまたはメディカルスタッフが付添い)

↓
地元の医療機関に運ばれる

↓
入院 → ホテルに帰る

↓
治療を受けた後ホテルに帰る

↓
問診票に記入したものを持参の上、メディカルルームで診察を受ける

- ※ 日本チームの医師は、競技会場や会場の医療機関で治療を行うことはできません。地元の医療機関に付添うことはできます。
- ※ 各競技団体に配布した問診票に記入し、それを持参の上、メディカルルームにお越しください。

大会期間中に守っていただきたいこと

◆毎日健康をチェックしましょう

チームごとに選手・スタッフの体調を管理してください。毎朝チェックし、異常があれば午前8時からのメディカルルームに当事者を連れて来ててください。

◆自分の健康管理をしましょう

皆様から大会の前に提出していただいた診断書および基本健康調査用紙は大会前に選手の健康状態を把握するための調査で、大会期間中に医師の診察が必要な場合に参考にするものです。既往(持病)や大会前の怪我が大会期間中に悪化する場合があります。また、大会中に病気になる、怪我をする場合があります。選手の皆様自身で健康管理をすることが大切です。早めに医師やトレーナーに相談することが健康管理です。大会期間中に病気やけがなどについて心配なことは何でも医療担当者にご相談ください。

うがいと手洗いをしてください。インフルエンザや風邪など、病気を予防します

- ・熱が出たときは、必ずメディカルスタッフに連絡してください。
- ・人ごみに出るときはマスクをしましょう。
- ・咳や熱が出たときはマスクをしましょう。
- ・個人(競技団体)で滞在日数分のマスクを持参しましょう。
- ・マスクは1日1枚使い捨てましょう。
- ・個人(競技団体)で体温計を準備してください。
- ・

- 1) ドーピング申請について
大会において、ドーピング禁止薬の治療目的使用の適用措置 (TUE) を必要とする選手の方は申請をお願いします。遅くとも大会開始 4 週間前までに申請が必要です。該当する場合は、各競技チームのコーチ・医療担当者に相談してください。

- 2) ドーピング検査対応の薬・サプリメントのリスト
現在使用している“くすり”は、使用目的ごとに、名前、メーカー、薬品名、番号などについてリストを作成し常に携帯して下さい (ドーピング検査で必要となります)。また、サプリメントは禁止物質が含まれていた場合に救済措置がありませんので、内容が不明な場合には決して摂取しないようにしてください。

- 3) 服用薬などのチェック・持参、ドーピング相談について
大会を万全の体調で迎えるにあたって、普段使用している『常備薬』などを次のように準備してください (医療サポート体制事務局では、外傷性と緊急性の高い時に使用するものは準備しますが、それぞれにあった“くすり”を準備することは不可能です)。
 - ・各自で日頃使用している“くすり”を少し多めに確保しておく。
 - ・定期的な服用をしているもの以外でも、自分にあった“くすり”を持っていく。

- 薬などの服用に関してはドーピングに注意し、各競技チームのコーチ、医療担当者に必ず**事前に**相談すること。「飲んでしまったんですが大丈夫ですか？」と質問する方がいらっしゃいますが、**大丈夫かどうかはわかりません**。禁止物質を含む“くすり”を服用していることがわかったときは、出場前に強制帰国させる等の措置を取る場合もありますので、必ず事前に相談すること。
- 出発前や帰国後に、急きょ病院にかかる可能性があるため、健康保険証（できるだけ写してないもの）を持参すること。

4) 健康管理について

大きな体調の変化は直ちに各競技チームのコーチ・医療担当者に連絡してください（事前に処理できるのに、出発前でチェックされ出場できなかった例がある）。外国は、医療制度が異なり、日本のように簡単に医療を受けることができないため、細心の注意が必要です。特に現地の水・食事・油物・感染などには注意が必要です。

食事について：

- 油っこい食事は胃腸が耐え切れず下痢につながるため摂取しすぎないようにする。
- 生野菜なども、胃腸炎の原因となる可能性がある。
- 食材が明らかでないものはドーピング違反になる事があるので注意する。
- 現地ににて自己判断で薬剤・ビタミン剤などは購入および服用しない。**

●ドーピングで「点滴治療」は禁止方法の一つであることから、滞在先のホテルや選手村で行うことはできず、組織委員会の指定した医療機関でしか行うことができないことを理解してください（医療機関であっても、禁止物質を含む点滴を行う場合はTUE申請が必要）。

●特に生活習慣・生活環境・食生活・飛行機の移動など、長期間にわたり日常生活が異なることによって生じる**精神的疲労を含め、健康管理に十分注意し予防を心がける**ことで

5) その他

- 海外でメガネ、コンタクトを作る場合は、診断書が必要な場合があるので、メガネやコンタクトは予備を持っておくこと。紫外線対策としてのサングラスもあると良い（UVカット）。
- 歯の治療をすませておくこと。歯痛がなくても歯の検診をうけておくこと。
- リラックスできるものを用意すること。
- 風邪の予防（マスク、うがい薬、体温計の持参）、水分補給等を考えておくこと。

*選手の特参品リスト（必須）

- ①ドーピング検査対応の薬（常用薬・屯用薬）
- ②ドーピング検査対応の薬・サプリメントのリスト
- ③**マスク・うがい薬・体温計（風邪予防用）**
- ④サングラス（屋外外出時の紫外線からの目の保護）
- ⑤防寒を含めた雨天対策用品
- ⑥健康保険証（できるだけ写しでないもの）
- ⑦**出国1週間前から口にした薬・サプリメントのリスト**

*スタッフ及び本部役員の特参品リスト（必須）

- ①常用薬・屯用薬
- ②**マスク・うがい薬・体温計（風邪予防用）**
- ③サングラス（屋外外出時の紫外線からの目の保護）
- ④防寒を含めた雨天対策用品
- ⑤健康保険証（できるだけ写しでないもの）

【現地医療施設】

★治療費はお立て替えいただき、帰国後の保険金請求となります。

■ Tokuda Hospital Sofia（徳州会ノフィア総合病院）

住 所: 15B, Nikola Vaptsarov Blvd. 1407 / Tel: 02-403-4000

Website: www.tokudabohnica.bg

2006年11月末に開院した、ブルガリア国内では、最新鋭設備を備えた総合病院である。基本的に受け付けには英語の通じる職員が配備されており、医師はほとんど英語で対応可能であるが、医療スタッフとはブルガリア語でしかコミュニケーションがとれないこともある。

■ VITA(BUTA) Hospital

住 所: 9, Dragovitz Street, 1505 / Tel: 02-943-4398, 02-960-4950

Website: www.vita.bg

2004年9月に開院した。産婦人科、内科、神経内科、小児科、外科、泌尿器科、整形外科、耳鼻咽喉科、眼科、皮膚科があり、

■ ヒロゴフ救急病院(Pirogov Emergency Hospital) ※公立病院

住 所: 21, Tottleben Blvd. 1606 / Tel: 02-915-4411（※救急車を呼ぶには“150”）

Website: www.pirogov.bg

24時間対応の救急病院であるが、病院は電話が通じにくいので直接行った方が良い場合も多く、医療スタッフだけでなく多くの医師にも英語が通じないので、ブルガリア語のできる人に同行してもらった方が良い。

■ Military Medical Academy ※公立病院

住 所: 3, St. Georgi Sofijski Street, 1606 / Tel: 02-922-6000/ 02-9222-5397

Website: www.vma.bg

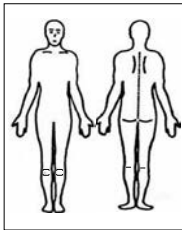
外国人担当の医師にも英語が通じないので、できればブルガリア語のできる人に同行してもらった方が良い。

第22回夏季デフリンピック大会

記入日: 平成 年 月 日

氏名: _____ 種目: _____
生年月日: S・H 年 月 日 生まれ（男・女）満 歳
身長: _____ cm 体重: _____ kg ベスト記録: _____
ポジション: _____ 得意種目・技: _____

○現在痛めている部位（気になる部位）や違和感のある部位を右図に記入してください



○現在治療を受けていますか？（はい・いいえ）

・通院している医療機関名、治療院名

- ① _____
- ② _____
- ③ _____

・いつから症状がありましたか？

- ① 平成 年 月 日～()
- ② 平成 年 月 日～()
- ③ 平成 年 月 日～()

・現在の症状（下枠より）・原因（下枠より）

- | | ① | ② | ③ |
|---|---|---|---|
| ① | ① | ② | ③ |
| ② | ② | ③ | ④ |
| ③ | ③ | ④ | ⑤ |

・治療内容（下枠より）

- | | ① | ② | ③ |
|---|---|---|---|
| ① | ① | ② | ③ |
| ② | ② | ③ | ④ |
| ③ | ③ | ④ | ⑤ |

症状	A 何もしなくても痛い	B さわるとうまい	C 動かすと痛い	D 歩くとき痛い	E 走ると痛い
	F ジャンプすると痛い	G 伸ばすと痛い	H 曲げると痛い	I ひねると痛い	J 泳ぐとき痛い
原因	K 投げると痛い	L 蹴ると痛い	M スキットと鋭い痛み	N スズンと鋭い痛み	O 焼けている
	P 重だるい	Q 腫れている	R 違和感がある	S つまっている	T 熱を持っている
治 療	U しびれがある	V 出血している	W 徐々に痛くなった	X ぶつけた	Y つまづいた
	Z 火傷した	1 電気治療	2 温熱治療	3 冷却療法	4 ストレッチ

○過去に主な怪我、病気、生まれつきの障害、手術など（特になし・ある場合は↓）
特になし・ある場合は⇒()

○現在服用している薬、サプリメント（薬の種類や服用状況）
特になし・ある場合は⇒()

○アレルギーの有無（食べ物、薬物、化学物質、環境など）
特になし・ある場合は⇒()

○女性の方への質問です。月経は定期的ですか？（はい・いいえの方は↓）
○婦人科に受診していますか？ いいえ・はい（服薬している薬名: _____）
○月経頻度は？（ _____ 日周期 もしくは _____ 回/日・週・月・ _____）

医療証サイン: _____

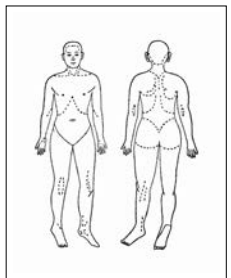
※この用紙に記載の個人情報、個人情報保護方針に基づき保管を徹底いたします。

問診用紙（1）

受診される方もしくは代理の方が記入ください。受診日 _____月 _____日

氏名: _____ 性別: 男・女
生年月日: 昭和・平成 _____年 _____月 _____日 年齢: _____歳
[どちらかに○をお付けください] 選手 , 役員]
競技名: _____ [種目 (階級・ポジション): _____]

1. どんなことで診察を希望されましたか？



2. 診てもらいたいところを右図に○をつけてください

3. これまでの主な病気やけがを記入ください。

病気 _____
けが _____

4. 現在、服用中の薬（あり、なし） 薬品名 _____
5. 薬物アレルギー（あり、なし） 薬品名 _____
6. 食物アレルギー（あり、なし） 食物名 _____
7. 女性にお尋ねします。妊娠の可能性はありますか？（あり、なし）

ご記入ありがとうございます

発熱がある方は裏面にも記入下さい

以下はメディカルスタッフが記入 問診用紙を確認したスタッフ氏名 _____
予想される問題点; どちらかに○を付ける 内科系 , 外科系

【報告書作成について】

大会終了後、日本選手団員は「全員」報告書の作成が義務付けられています。

【手順】

- ① 日本選手団員は報告書を作成→競技団体で取りまとめ→派遣委員会事務局へ提出。

【事務局への提出〆切】

2013年9月30日(月)厳守

※事務局提出〆切りを勘案し各競技団体内部での〆切を決められますよう、お願い致します。
※こちらの報告書は助成金を受けた結果を報告するためのものです。

【報告書の内容】

- 選手団員は下記のページ数を厳守して、報告書を作成して下さい。
- 事前に作成できる内容は、準備を進めておくことをお勧めします。
- 報告書をスムーズに作成できるよう大会期間中はメモを取ることをお勧めします。

1) 団長・副団長・総務・競技監督(文字数: 4800字～6400字)

- ① 選手の選考について
- ② 成績一覧
- ③ 成績と評価
- ④ チーム(コーチ)体制と各コーチの役割
- ⑤ 競技スケジュール(旅行スケジュール)
- ⑥ 大会の競技運営などの報告
- ⑦ 競技規則の適用(問題点など)
- ⑧ 大会参加までの準備状況
- ⑨ 反省・まとめなど

2) スタッフ(競技スタッフ・本部スタッフ)(文字数: 1200字～1600字)

- ① 団体内の担当とその内容
- ② 反省・まとめなど

3) 選手(文字数: 600字～800字)

- ① 成績に対する自己評価
- ② 反省・まとめなど

【様式について】

競技団体から事務局へ提出する際は、下記の点に注意し、提出下さい。

- ① パソコン(ワード)で作成。
- ② 書式
 - ・サイズ: A4 タテ
 - ・文 字: 横書き
 - ・余 白: 上下左右 2.0cm
 - ・段 組: 2 段
 - ・文字サイズ: 8 ポイント

※ 文書作成は「ワード」、表については「ワードまたはエクセル」を使用ください。

※ 写真は日本選手団広報担当が撮影したものをから選びます(事務局)。

【緊急時の連絡方法について】

- ① 渡航に関する緊急連絡(出発前日、及び当日の大幅な遅延、及びアクシデントの際)

【クロリアへの連絡】クロリアツアーズオフィスに連絡下さい。担当: 白坂

クロリアツアーズ(オフィス): 03-6661-9080 09:30～18:00(土、日、祝日を除く)

- 緊急時にはお電話で一報下さい。

(同行者に健聴者がいない場合は周囲の健聴者に電話をかけてもらえるようお願いください。)

その後必要に応じてメール対応致します。(白坂)

- 担当者が電話に出られない際には電話に出たスタッフに状況詳細をお伝え下さい。

- 時間外、休日には各担当者携帯に直接ご連絡下さい。

出発日	携帯電話	携帯電話メアド	GTI 担当
7/22(月)			白坂
7/23(火)			林
7/24(水)			林
7/27(土)			笹久保
7/30(火)			笹久保
7/31(水)			笹久保

- ② 現地で(期間: 7/22～8/6)

- ソフィア現地プリバイド携帯電話(音声のみ)について→24台手配

以下のメンバーに渡します。総監督、メディカルスタッフ、事務局などへの連絡への使用となります。
貸与する携帯電話にはプリバイドで、現地で使う分として30ユーロのみチャージしています。

本部スタッフ	競技スタッフ
① 栗野副団長 (その日に帯同する通訳者が電話を持つ) →豊島、小林、長山	⑬ 陸上(〇〇〇)
② 嶋本総務 (その日に帯同する通訳者が電話を持つ) →豊島、小林、長山	⑭ バスケ男子チーム(〇〇〇)
③ 後藤(通訳→豊島、小林、長山)	⑮ バスケ女子チーム(佐々木トレーナー)
④ 羽森医師	⑯ ビーチバレー(〇〇〇)
⑤ 立石医師	⑰ サッカー男子チーム(〇〇〇)
⑥ 高橋看護師	⑱ サッカー女子チーム(〇〇〇)
⑦ 中島トレーナー	⑲ 柔道(〇〇〇)
⑧ 高橋トレーナー	⑳ 水泳(中里トレーナー)
⑨ 高木	㉑ 卓球(〇〇〇)
⑩ 林	㉒ テニス(内藤コーチ)
⑪ 白坂	㉓ バレーボール男子チーム(〇〇〇)
⑫ 内田	㉔ バレーボール女子チーム(〇〇〇)

- 日本携帯電話について(メールのみ)→9台手配

以下のメンバーに渡します。ろう者の監督・スタッフから、事務局などへの連絡への使用となります。

本部スタッフ	競技スタッフ
① 太田団長	⑦ バドミントン(阿部スタッフ)
② 栗野副団長	⑧ 自転車(早瀬監督)
③ 嶋本総務	⑨ オリエンテーリング(丘村監督)
④ 仁木広報	
⑤ 後藤	
⑥ 田原	

- 無線 Wi-Fi(ネット・メールのみ)→1台手配

以下のメンバーに渡します。速報アップ用の使用となります。

本部スタッフ	競技スタッフ
① 仁木広報	

注意: 栗野総監督への連絡は混乱を避けるため、電話のみとします。

- インターネットテレビ電話について

○選手団事務局として使用するインターネットテレビ電話は Skype とします。

○本部とサッカー本部、全日本ろうあ連盟本部事務所、京都事務所との間のコミュニケーションに活用します。

ICSD(国際ろう者スポーツ委員会) 執行委員会

会長 President	Craig A. Crowley クレイグ・クロウリー crowley@ciss.org	
副会長 Vice President - World Youth Sports	David Lanesman デビッド・レーンズマン lanesman@ciss.org	
委員 Member at Large	Vanessa Migliosi migliosi@ciss.org	
委員 Temporary Board	ADAM Rebecca e-mail: adam@ciss.org	

ICSD 技術委員:

陸上	PEARCE Richard athleticstd@ciss.org	
バドミントン	BOGARD Martin Lawrence badmintontd@ciss.org fax: +44 1279874880	

バスケットボール	ENDRESS Jürgen Hermann basketballtd@ciss.org fax: +49 3212 1449162	
ビーチバレー	KNETZGER John J. beachvolleyballtd@ciss.org fax: +1 414 962 0671	
自転車 ロード マウンテンバイク	FERNANDEZ Ralph cyclingtd@ciss.org	
サッカー	NIKLAUS Christof Franz footballtd@ciss.org	
柔道	ANTOINE Damien judotd@ciss.org	
オリエンテーリング	MIR-MACKIEWICZ Marek Andrzej orienteeringtd@ciss.org fax: +45 75388002	
水泳	GERSHWIND Reed swimmingtd@ciss.org	

卓球	NYIRO Zsolt tabletennistd@ciss.org	
テニス	BURZ Tobias tennistd@ciss.org fax: +49 89 43660840	
バレーボール	Cathy Vonk email: volleyballtd@ciss.org	

夏季デフリンピック・技術規則

2013 年 1 月 25 日改訂

1. 期間

第 2 回夏季デフリンピック大会はブルガリアのソフィアにおいて、**2013 年 7 月 26 日から 8 月 4 日まで**開催するものとする。

2. 競技

第 2 回夏季デフリンピック大会では以下の競技を行う。

- 陸上、バスケットボール、バドミントン、ボウリング、自転車（ロードレース、マウンテンバイク）、サッカー、ハンドボール、柔道、空手、オリエンテーリング、射撃、水泳、卓球、テコンドー、テニス、バレーボール（ビーチバレー、室内）、レスリング（グレコローマン、フリースタイル）
- 競技種目は各々の競技の技術規則に規定する。
- 最少 2 つの地域から 5 か国以上の予備登録を承認した競技、種別および種目は、ICSD 執行理事会の裁量の後、公式種目として認められるものとする。

3. 参加規定

- 夏季デフリンピック大会は公平無私な競技を行う目的のもとに、加盟国全てのろうスポーツマンが集い団結する場である。
- 人種、宗教及び政治的所属などいかなる理由においても団体及び個人を差別する行為を禁ずる。
- デフリンピック大会に参加する選手は以下の条件に適合する者でなければならない：
 - ろう者：この場合は両耳のうち、聴力が優れた方の耳の聴力レベルが最低でも **55dB** 以上の者を指す（1964 年に定めた ISO 基準：500、1000、2000 ヘルツの 3 つの振動数平均を基準とする）
 - 加盟国連盟の会員
- 原則として競技者に年齢制限は設けない。但し、個別の競技または種目に関しては、その規則において年齢制限を設ける場合がある。
- 登録用紙に参加規定項を明記し、以下の同意文を載せるが、各連盟の 2 人の役員（通常は会長と事務局長）がこれに同意してサインしなければならない：「我々署名者は夏季デフリンピックの参加規定を読み、我々及び選手はその条件に従うことを誓います。我々は国際ろう者スポーツ委員会によって認可された条件と目的において、夏季デフリンピック大会の期間中、テレビ撮影及び写真撮影などを受け入れることに同意します。」
- 参加者は自分が所属する国連盟の国籍を有していなければならない。異議申し立てがあった場合、当該連盟はバスポートコピーの提出により国籍を証明しなければならない。
- 聴力に関する上記の規定はいかなる例外も認めないものとする。ICSD 執行理事会は、国連盟の会員ではない、またはその国が ICSD の正会員ではない選手からの申請を承諾する権限を

持つ。このような選手は ICSD の旗のもとに競技に参加する。

4. 取締り・罰則

- 聴力検査表（オージオグラム）を提出済みの選手リストを各連盟に配布する。リストに名前のある選手は新たに聴力検査表を提出する必要はない。リストに名前のない選手は全員、大会参加前に ICSD 指定の聴力検査表を事務局宛に提出しなければならない。用紙はホームページから入手すること。
- 夏季デフリンピック登録選手に対し、大会前または期間中に新たに聴力検査を課す場合がある。
- 全ての選手に対し、いかなる時でもドーピング検査を課す場合がある。
- これらの検査で不適格な結果が出た選手は即刻退場となる。もしその選手がその競技でいくつかの種目を掛け持ちしている場合は、違反が認められた種目のみ出場失格となる。
- そのような不適格な選手がチームの一員であった場合、その選手は試合中でも即刻退場となる。その選手はその試合の残り時間および次の試合において出場失格となる。その選手に代わり交代選手を出場させることは可能である。
- 不正行為が発覚した場合には、ICSD 執行委員会が課す全ての手続き料金と罰金を当該国連盟が支払う義務を負う。
- 夏季デフリンピック大会期間中に行われるその他の全ての検査諸経費は大会組織委員会が負担する。
- 持病（アレルギー、喘息、てんかんなど）により薬または禁止物質を使用している選手は治療目的使用のための適用除外申請用紙の提出により特別許可の承認を得なければならない。詳細については ICSD アンチドーピング規定を参照のこと。

5. 登録最終期限

- 陸上、バドミントン、ボウリング、自転車、柔道、空手、オリエンテーリング、射撃、水泳、卓球、テコンドー、テニス、レスリングに出場する選手名による登録最終期限は 5 月 24 日である。陸上と水泳の選手はそれぞれの競技への出場基準レベル到達のため 6 月 24 日までとする。
- 登録選手が競技に出場しなかった場合には、選手 1 名につき 20 米ドルが徴収される。ただし、医師からドクターストップがかかり、その旨の診断書が提出された場合は例外とする。
- バスケットボール、サッカー、ハンドボール、バレーボールのメンバーリストの最終提出期限は 6 月 14 日とする。
- バスケットボール、サッカー、ハンドボール、バレーボールチームの出場取り消しに関わる罰金は、メンバーリスト登録期限前の場合は 5000 ドルとする。**メンバーリスト登録期限後の「罰金」**（訳者注：The deadline とあるが、The fine「罰金」と思われる）は 10000 米ドルで取り消し後ただちに支払われなければならない。

6. 財政規定

- 各選手団は旅費、食費、宿泊費その他諸経費を負担しなければならない。選手団の宿泊施設はデフリンピック輸送ネットワークにアクセスするために組織委員会を通して予約することを奨励す

	る。
6.2	選手および役員（評議員会に出席する役員を含む）は、夏季デフリンピックの資格認定証を受け取る前に参加費 20 ドルを ICSD へ、さらに参加費 50 ユーロを 2013 年ソフィア組織委員会へ支払わなければならない。
6.3	未払い金は夏季デフリンピック開会前に全て支払われなければならない。開会前に支払われなければチーム全体が競技への参加を認められない。
7. メダルと賞状	
7.1	全ての個人と団体競技および種目において、第 1 位には金（金メッキした銀）のメダルと賞状、第 2 位には銀メダルと賞状、第 3 位には銅メダルと賞状を授与するものとする。
7.2	個人競技では第 4 位から第 8 位までの選手に賞状が授与される。
8. 技術会議（テクニカル・ミーティング）、抽選会	
8.1	全ての競技において、最初の試合が始まる前に少なくとも 1 回は競技ごとに技術会議が行われる。日時と場所は後日通達される。
8.2	技術会議には、競技委員会、審判員(jury)、デフリンピックの技術委員、各参加国からの代表者 2 名（2 名のうち、1 名はろう者でなければならない）が出席する。聴者が代表者として会議に出席する場合は、通訳者をつけることが認められる。 （訳者注：8.3 はなし）
8.4	卓球、テニス、バドミントンのトーナメント戦の抽選は、これらの競技における技術会議の前または会議中にソフィアで行われる。シード権は抽選会開催前に発表される。
9. 権限・判定権	
9.1	ICSD 執行委員会は最高権限を有し、組織委員会および参加国連盟によって提訴された夏季デフリンピックに関する全ての論争に対して最終権限としての決定を下す。ICSD、選手および国連盟はスポーツ仲裁裁判所へ提訴する権利を有する。
9.2	審判員 (ground judges) に対する競技に関する抗議は、審判員によって判定され、公式夏季デフリンピック抗議用紙に英語で記入して提出しない限り、抗告の対象とはならない。その抗議も各競技が定める時間内に提出されなければならない。（各技術規則を参照）
9.3	役員審判員 (official) の判定に対する抗議は、その競技の審査委員会のどの委員にでも申し立てが可能であるが、その際には 50 ドルの保証金を納めることとする。
9.4	審査委員会は競技ごとに定められた制限時間以内にその抗議に対する判定を下し、当該国連盟へ即座に通知しなければならない。
9.5	審査委員会の下した判定に対して抗議する場合、最初の判定が下されてから 4 時間以内に抗議国連盟の役員が夏季デフリンピック上訴審判へ提訴する。
9.6	提訴が受理された場合には保証金は抗議国連盟へ返却される。
9.7	聴力、ドーピング検査、選手の国籍問題に関する訴えは ICSD 執行委員会の単独裁断とする。

	10. 身分証明カード
	全ての選手および役員は身分証明カードが与えられ、試合会場などに入場する際には必ず携帯しなければならない。身分証明カードがない場合、選手は競技に出場できない。
	11. 宣伝広告
11.1	小さなロゴやその他の広告を衣類や用具に付けることは可能である。ただし衣類の前後に付ける大ききの合計が 400 cm ² よりも大きくてはならない。通常の特徴的なデザインパターンの一部またはそのデザインパターンから独立したものは使用してよい。（デフリンピック規約 DG15.2 参照）
11.2	夏季デフリンピック大会区域内外ではいかなる政治的、宗教的、人種的なデモや宣伝広告を禁止する。（IOC オリンピック憲章 2007 年 7 月版第 61 条を参照）
	12. 補聴器
	夏季デフリンピック競技中はいかなる種類の補聴器、増幅器、および人工内耳の外部装置の着用も厳禁する。
	13. その他
	現在のデフリンピック規則および ICSD 規約で定めた以外の予想外の事態が発生した場合には、IOC や国際競技連盟の規則を参照する。これらの規則に抗議はできず、主催国の連盟規則にも絶対的に優先してこれに従うもの

帰国日の確認		
各競技団体が帰国日が異なります。帰国日をご確認の上、ソフィア出発の準備を整えてください。ソフィアご滞在のホテルより送迎バスが用意されておりますのでホテル出発時間の 20 分前にはお荷物をおまとめいただき、ホテルロビーへご集合下さい。なお、ホテル出発時間は現地にてご案内いたします。		
ソフィア出発日 (日本帰国は翌日)	競技団体	利用航空会社
7 月 31 日 (水)	陸 上(マラソン) 2 名	ルフトハンザ航空(LH)
8 月 1 日 (木)	水 泳:NAKAZATO /KENICHI MR	ルフトハンザ航空(LH)
8 月 2 日 (金)	本 部①:TAKAGI /MACHIKO MS	ルフトハンザ航空(LH)
8 月 3 日 (土)	水 泳:TOYODA /TADASHI MR	ルフトハンザ航空(LH)
8 月 4 日 (日)	バドミントン 3 名	オーストリア航空(OS)
	サイクリング 7 名	
	バレーボール(男子): IWATA /HIDEHARU MR ・ KIKUCHI /KANAKO MS	
	バレーボール(女子): OKAWA /YUJI MR ・ OKAWA /AIKO MS	
	オリエンテーリング 2 名	ルフトハンザ航空(LH)
8 月 5 日 (月)	水 泳 8 名	
	卓 球: SATO /SHINJI MR ・ UCHIYAMA /TOSHIHIKO MR	
	陸 上 28 名	オーストリア航空(OS)
	ビーチバレーボール:TAKEGAMI /MAI MS	
	バレーボール(男女) 31 名	
	本 部 2: TATEISHI /TOMOHIKO MR ・ NAKAJIMA /YUKINORI MR	ルフトハンザ航空(LH)
	陸 上(マラソン):YAMANAKA /KOICHIRO MR	
8 月 6 日 (水)	卓 球 9 名	
	テニス 6 名	
	本 部 ③:HAYASHI /TAKAO MR	
	ビーチバレーボール 5 名	オーストリア航空(OS)
	バスケットボール(男女) 30 名	
	柔 道 8 名	
	本 部 ④ 4 名	ルフトハンザ航空(LH)
	サッカー(男女) 52 名	
	本 部 ⑤ 10 名	

連絡先一覧	
○ 手配旅行会社:株式会社グローリアツアーズ	
住 所	:〒103-0014 東京都中央区日本橋蛸船町 1-38-4 村上ビル 3F
TEL/FAX	:03-6661-9080/03-5641-1222
※日本国内で何かトラブルが起こった場合、こちらへご連絡ください。	
○ 在ブルガリア日本国大使館	
住 所	:14 Lyulyakova Gradina Str., 1113 Sofia, Bulgaria
TEL/FAX	: (国番号359)(0)2-971-2708 / (国番号359)(0)2-971-1095
URL	: http://www.bg.emb-japan.go.jp/jp/
開館時間	: 月曜日-金曜日 8:30-12:30/13:30-17:15
○ 成田空港フライトインフォメーション	
TEL:0476-34-8000(音声による自動応答システム)	
ケータイサイト:http://www.narita-airport.jp/jp/mobile/	
ソフィアの主な医療機関	
■ Tokuda Hospital Sofia (徳州会ソフィア総合病院)	
住 所:	15B, Nikola Vaptsarov Blvd, 1407 / Tel:02-403-4000
Website:	www.tokudabolnica.bg
2006年11月末に開院した、ブルガリア国内では、最新鋭設備を備えた総合病院である。基本的に受け付けには英語の通じる職員が配備されており、医師はほとんど英語で対応可能であるが、医療スタッフとはブルガリア語でしかコミュニケーションがとれないこともある。	
■ VITA(BUTA) Hospital	
住 所:	9, Dragovitz Street, 1505 / Tel: 02-943-4398, 02-960-4950
Website:	www.vita.bg
2004年9月に開院した。産婦人科、内科、神経内科、小児科、外科、泌尿器科、整形外科、耳鼻咽喉科、眼科、皮膚科がはい。	
■ ヒロゴフ救急病院(Pirogov Emergency Hospital) ※公立病院	
住 所:	21, Totleben Blvd, 1606 / Tel: 02-915-4411 (※救急車を呼ぶには"150")
Website:	www.pirogov.bg
24時間対応の救急病院であるが、病院は電話が通じにくいので直接行った方が良い場合も多く、医療スタッフだけでなく多くの医師にも英語が通じないので、ブルガリア語のできる人に同行してもらった方が良い。	
■ Military Medical Academy ※公立病院	
住所:	3, St. Georgi Sofijski Street, 1606 / Tel: 02-922-6000/ 02-9222-5397
Website:	www.vma.bg
外国人担当の医師にも英語が通じないので、できればブルガリア語のできる人に同行してもらった方が良い。	

誓 約 書

私は、第 22 回夏季デフリンピック(ソフィア 2013)の日本選手団員として、一般財団法人全日本ろうあ連盟デフリンピック派遣委員会の意向に従い、以下の事項について誓約いたします。

1. 第 22 回夏季デフリンピック(ソフィア 2013)の日本代表としての名誉を保ち、国際ろうスポーツ委員会の規則を遵守して競技・行動すること。
2. 出発前までに配布する選手団必携を熟読し、派遣期間中は団長の指示・決定に従い、規律を守り集団行動に努めること。
3. 国際アンチ・ドーピング機構規程および関連ドーピング規定を遵守すること。
4. 派遣期間中、組織委員会の許可した報道機関および日本選手団事務局の撮影・録音・インタビュー等には、極力応じること。
5. 公益法人日本障害者スポーツ協会、一般財団法人全日本ろうあ連盟の主催および許可した行事への参加要請に応じること。
6. 公式ユニホームの支給を受けた団員は、ユニホームを他人に譲ったり売買しないこと。

以 上

2013 年 月 日

競 技:

自 筆 署 名:

印

保護者署名:

印

※未成年の場合は保護者のサインを添えて提出

一般財団法人全日本ろうあ連盟

デフリンピック派遣委員会

委員長 石野 富志三郎 殿



22th Summer Deaflympics

Japan Deaf Sports Federation

＜ソフィア 2013 日本選手団の編成にかかる指針＞

**全日本ろうあ連盟スポーツ委員会
2012年11月10日策定**

はじめに

第22回デフリンピック夏季大会（ソフィア 2013）に、
(1)高水準の競技に適切な準備ができている競技者のみを派遣し、
(2)競技者が持つ能力を最大限に引き出す環境を整えるために、
全日本ろうあ連盟デフリンピック派遣委員会は日本選手団編成にかかる指針をここに策定し、全日本ろうあ連盟 2012 年度第 3 回理事会承認後の 2012 年 11 月 12 日をもって発表する。この指針は厚労省および文科省、日本パラリンピック委員会にあらためて報告されるほか、国民に広く公開されるものである。

各競技団体はこの指針をもとにソフィア 2013 でメダルを競るための選手強化及びチーム編成準備を行う。

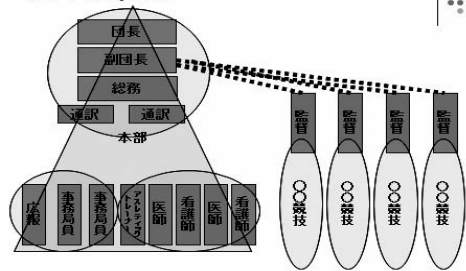
選手団編成について

従来は団長、総監督、事務局長を置いてきたが、競技上の様々な対応を迅速に行う指示系統の観点から、今回は、団長、副団長、総務に変更する。それぞれの任務は下記の通りにする。

団長の任務は全日本ろうあ連盟の設ける派遣委員会によって委託された職務に加えて、国際ろう者スポーツ委員会(ICSD)事務局、デフリンピック組織委員会(DIOC)事務局との連絡調整を行うことになる。また、ICSD 総会に日本を代表して出席するため、その任務を全うできる立場である全日本ろうあ連盟理事会から理事を配置する。



選手団構成



デフリンピック派遣委員会
2013年6月に最終承認・発表

スポーツ委員会がチェックして提案する

推薦

〇〇競技協会

〇〇競技協会

〇〇競技協会

〇〇競技協会

世界選手権大会出場すること

AP地場選手突破

国内大会が開催されていること

団体競技

AP大会ベスト2以上

世界選手権大会ベスト4以上

前大会3位以上の記録保持者

個人競技

2012・2013年度全日本ろうあ連盟会員であること
(ただし、前回デフリンピック出場者は2010年度からとする)

- 2011 年の世界選手権大会でベスト 4 の選手
- 2012 年第 7 回アジア太平洋ろう者競技大会でベスト 2 の選手

- 上記選手を日本ろう者ボウリング連合の管理する 2012 年度ランキングなどで超える選手

空手競技

- 2012 年の世界選手権大会でベスト 4 の選手
- 2012 年第 7 回アジア太平洋ろう者競技大会でベスト 2 の選手

柔道競技

- 2012 年の世界選手権大会でベスト 4 の選手
- 2012 年第 7 回アジア太平洋ろう者競技大会でベスト 2 の選手

自転車競技

- 2011 年の世界選手権大会および台北デフリンピックのメダリストと同格のタイムを出せる選手
標準記録のあるロードレース用コース（一周 5 k m） 1 0 分～9 分台
- 2012 年第 7 回アジア太平洋ろう者競技大会でベスト 2 の選手

各競技チームのスタッフ

デフリンピックで定める各競技につき最低 1 名のスタッフを保証する。

選手 4 名毎に 1 名のスタッフを保障する。(バスケットボールの場合は、1 名+6 名の 7 名となる)
スタッフにどの役割を振るかは各競技チームが決定する。

ただし、監督は必ず置くこと。

保証人数を超えるスタッフの配置は自由とするが、各競技協会が経費を負担することとする。

以上

④選手推薦等申請用紙

様式1 (団体)第22回夏季デフリンピック (2013ソフィア)競技団体調査書

(記入日2013年 月 日)

競技団体名									
所在地		〒							
TEL				FAX					
E-Mail									
連絡責任者(※1)取材対応者	氏名								
	役職								
	所在地	〒							
	TEL			FAX					
	E-Mail								
デフリンピック担当者(※2)事務連絡対応者	氏名								
	役職								
	所在地	〒							
	TEL			FAX					
	E-Mail								
第22回冬季デフリンピック(2013ソフィア)推薦選手数									
推薦人数		選手		名		スタッフ		名	

※ 当用紙に記載された内容は、第22回夏季デフリンピック (2013ソフィア) 日本選手団派遣業務のみに使用し、それ以外の目的には使用いたしません。

※1 通知文書等、公文書の窓口として登録ください。また、外部からの取材問い合わせ等はこちらを紹介し、そのことを絡めた連絡担当者をお決めください。なお、通常の事務連絡は「デフリンピック担当」宛にお送りします。

※2 派遣事務局と競技団体(監督・選手・スタッフを含む)との連絡担当になります。通常の連絡はこちらに送ります。また、質問・要望等もこの担当を通して受け付けますので、確実に連絡が取れ、なおかつ競技団体内の調整も行える方を記載ください。

様式2 (団体)第22回夏季デフリンピック (ソフィア2013)日本代表推薦選手候補一覧表

(記入日2013年 月 日)

競技名		所属ろうあ協会名			
推薦の理由 (※前記にある条件を全て満たしているかどうか、 ※選手4名必ず1人女性を含むこと) 選手候補が候補に附ける推薦理由をクリアしているかどうか、及び選手 候補推薦をどうしようとして行ったか等。					
候補者名	競技種目	種別(男)	氏名	○○ ○○	○○ ○○
1	シニアスネーク				
2					
3					
4					
5					
6					
7					
8					
9					
10					

【※】 推薦は2013年1月31日閉会の行事を入れてください。

団体名

代表者

印

※ 当用紙に記載された内容は、第22回夏季デフリンピック (2013ソフィア) 日本選手団派遣業務のみに使用し、それ以外の目的には使用いたしません。

様式3 (選手)第22回夏季デフリンピック (2013ソフィア)日本代表推薦選手候補調査書

(記入日2013年 月 日)

ICSDのID	なし	・ あり (NO.)	競技名			
氏名	性		名	性別		
ふりがな				男		
漢字				女		
ローマ字						
出生地	都道府県		市	区	町村	
生年月日	19	年	月	日	歳	
パスポート	名前	有効期限	年	月	日	
有・無	ローマ字	国籍				
障害者手帳情報	障害者手帳No.	等級				
装具の使用	補聴器使用	人工内耳使用	どちらも使用していない			
現住所	ふりがな	〒				
	住所					
	自宅番地	JR	私鉄	線	駅	
	TEL	自宅へ電話をした場合	自分へ電話内容をつないでくれる人がいる いない			
	FAX					
E-Mail (携帯)	E-Mail (PC)					
住民票のある住所	〒					
勤務先(在籍学校名)	名称	〒				
	所在地					
	所属部署(学年)	役職				
	TEL	FAX				
派遣依頼(必要は場合記入)	所属長名	役職				
	会社名					
	送付先	※資料は原則選手本人宛に郵送します。選手が自分で会社に持っていき、説明してください。				
TEL	事務担当者名		TEL 携帯 FAX E-Mail (携帯) E-Mail (PC)			
緊急連絡先	連絡者氏名	(本人との関係:)		連絡先		
読字力(英語)	Reading & Writing (読み書き)	良い	普通	できない	5段階評価 (5が最良)	
読字力(手話)	日本の手話	5	4	3	2	1
読字力(手話)	国際手話	5	4	3	2	1

※ 当用紙に記載された内容は、第22回夏季デフリンピック (2013ソフィア) 日本選手団派遣業務のみに使用し、それ以外の目的には使用いたしません。

様式4 (選手)第22回夏季デフリンピック (2013ソフィア)日本代表推薦選手候補プロフィール①

(記入日 2013年 月 日)

ふりがな						競技名
選手氏名						
推薦理由: 新文書にある各競技の条件事項①②③…の中から満たしている条件の番号を記入してください。(個人競技のみ。団体競技の選手は記入不要)						
メダル獲得予想						
種目						予想
国際大会成績・記録 デフリンピックの成績は全て記入してください。						
開催年	大会名	競技	種目	記録	順位	参加者数
その他、特記事項を記入						

※ 当用紙に記載された内容は、第22回夏季デフリンピック (2013ソフィア) 日本選手団派遣業務のみに使用し、それ以外の目的には使用いたしません。

様式5（選手） 第22回夏季デフリンピック（2013ソフィア） 日本代表推薦選手候補 プロフィール②	
競技名	
氏 名	
競技について (記入日：2013年 月 日)	
①始めたきっかけは？	
②主な活動場所 は？	
デフリンピックについて	
①ライバルは？ (国名や名前)	
②目標は？	
③あなたにとっ てデフリンピッ クとはなんです か？	

様式6 (団体)

第22回夏季デフリンピック (2013)
日本代表選手スタンプ一覧表

登録	氏名	性別	年齢【※】	健康	ろう	ろうの機会、所属協会名	推薦の理由	(記入日2013年 月 日)
【印】	〇〇 〇〇						この選手が国際デフリンピック (北北) でスタッフとして参加、デフスポーツに対する幅広い関心と知識を有していること、参加に必要とされる能力を有していること、	
監督								
コーチ								
トレーナー								
選段								
スタッフ								
スタッフ								

団体の名

代表者 _____ 印

* 当用紙に記載された内容は、第22回夏季デフリンピック (2013ソフィア) 日本選手団派遣業務のみに使用し、それ以外の目的には使用いたしません。

様式7 (スタッフ)

第22回東洋デフリンピック (2013ソフィア)

日本代表推薦スタッフ調査書

		競技名				
(記入日2013年 月 日)						
氏 名	性	名			性別	
ふりがな					男	
漢 字					男	
ローマ字					女	
出生地	都道府県	市 郡	区 町村			
生年月日	19 年 月 日	歳	(2013年1月31日現在)			
パスポート	名前 ローマ字	有効 期限	年 月 日			
旅 券 ・ 無	旅券番号	国籍				
現住所	ふりがな	〒				
	住所					
	TEL	携帯				
	FAX					
	E-Mail (携帯)	E-Mail (PC)				
住居費のある住所 ※親戚に同居する場合は記入して下さい。						
障害者手帳情報		票名	手帳No.	等級		
勤務先 (在籍学校名)	名称	〒				
	所在地					
	所属部署 (学年)	役職				
	TEL	FAX				
派遣依頼 (必要な場合記入)	所属長名	役職				
	会社名					
	送付先	※資料は原則スタッフ本人宛に郵送します。スタッフが自分で会社に持っていく、説明してください。				
	TEL	事務担当者名				
緊急連絡先	連絡者氏名	(本人との関係:)		連絡先	TEL 携帯 FAX E-Mail (携帯) E-Mail (PC)	
語学力 (英語)	良い		普通		できない	
	Reading & Writing	5	4	3	2	1
	Listening & Speaking	5	4	3	2	1
語学力 (手話)	良い		普通		できない	
	日本の手話	5	4	3	2	1
	国際手話	5	4	3	2	1
5段階評価 (5が最も良)						
5段階評価 (5が最も良)						
該当の番号に○印						
該当の番号に○印						

※ 当用紙に記載された内容は、第22回東洋デフリンピック (2013ソフィア) 日本選手団派遣業務のみに使用し、それ以外の目的には使用いたしません。

様式8（スタッフ）

第22回冬季デフリンピック（2013ソフィア）
日本代表推薦スタッフ プロフィール①

（記入日 2013年 月 日）

ふりがな			競技名	
スタッフ氏名				
指導者・競技役員等の資格	取得年	資格の内容	備考	
	年			
	年			
	年			
	年			
	年			
	年			
国際大会等の参加歴	参加年	大会名	開催地	役職・役割等
	年			
	年			
	年			
	年			
	年			
	年			
競技団体内での役職		指導歴	年	
その他特記事項を記入				

* 当用紙に記載された内容は、第22回夏季デフリンピック（2013ソフィア）日本選手団派遣業務のみに使用し、それ以外の目的には使用しない。

競技名	
氏 名	

競技について

（記入日 2013年 月 日）

①主な活動場所 は？	
---------------	--

デフリンピックについて

①ライバルは？ （国名や名前）	
②目標は？	
③あなたにとっ てデフリンピッ クとはなんです か？	

* 当用紙に記載された内容は、第22回夏季デフリンピック（2013ソフィア）日本選手団派遣業務のみに使用し、それ以外の目的には使用いたしません。

⑤健康調査票

連本第 120612 号
2013 年 3 月 19 日

第 22 回夏季デフリンピック
参加競技団体 各位
内定選手 各位

財団法人全日本ろうあ連盟
デフリンピック派遣委員会
事務局長 太田陽介

連本第 120613 号
2013 年 3 月 19 日

第 22 回夏季デフリンピック
参加競技団体各位
内定スタッフ 各位

(財) 全日本ろうあ連盟
スポーツ委員会委員長 太田陽介

第 22 回夏季デフリンピック (ソフィア 2013) 参加に伴う
基本健康調査用紙および診断書の提出について

平素は格別のご高配を賜り、厚く御礼申し上げます。
第 22 回夏季デフリンピックの内定選手は、最寄りのクリニックや病院にて基本健康調査用紙
および診断書の作成をお願いいたします。誠に申し訳ございませんが、今回、作成するにあた
って、費用は自己負担となりますことをご了承くださいますようお願いいたします。また、記
載漏れは一切認められません。この資料は、現地において選手の安全、健康管理上重要な書類
であることをご理解ください。
なお、帯同医師 (予定) による内容チェックの結果、担当の医師より指導が入る場合があり
ますことをご承知頂けますようお願いいたします。

1 提出書類

1) 様式 1 基本健康調査用紙 (本人が記入) ※ 選手対象

2) 様式 2 医師診断書 1・2 (医師が記入) ※ 選手対象

様式 1 を用いて診断を受け、医師が記入したものを提出してください。
様式 1 の記載漏れは認められません。

3) 別紙 1～3 使用薬物調査 ※ 選手対象

・別紙 1 : 選手連絡票

・別紙 2 : 使用薬物についての調査書

・別紙 3 : 使用する可能性のある薬物についての調査書

4) 様式 3 コミュニケーション状況調査用紙 ※選手対象

2 提出方法

上記すべてを各競技チームがとりまとめ、下記に提出下さい。

3 提出先

財団法人全日本ろうあ連盟 デフリンピック派遣委員会事務局
〒162-0801
東京都新宿区山吹町130 SKビル8F
財団法人全日本ろうあ連盟本部事務所内
TEL 03-3268-8847 FAX 03-3267-3445
担当: 後藤 (gotou@ifd.or.jp)、加茂下 (kamoshita@ifd.or.jp)

4 提出期限

2013 年 4 月 22 日 (月) 正午必着

以 上

連本第 120612 号
2013 年 3 月 19 日

第 22 回夏季デフリンピック
参加競技団体各位
内定スタッフ 各位

(財) 全日本ろうあ連盟
スポーツ委員会委員長 太田陽介

連本第 120613 号
2013 年 3 月 19 日

第 22 回夏季デフリンピック
参加競技団体各位
内定スタッフ 各位

(財) 全日本ろうあ連盟
スポーツ委員会委員長 太田陽介

第 22 回夏季デフリンピック (ソフィア 2013) 参加に伴う
基本健康調査用紙および診断書の提出について

平素は格別のご高配を賜り、厚く御礼申し上げます。
第 22 回夏季デフリンピック参加内定のスタッフは、最寄りのクリニックや病院にて健康診
断書の作成をお願いいたします。誠に申し訳ございませんが、今回、作成するにあたっての費
用は自己負担となりますことをご了承くださいますようお願いいたします。この資料は現地に
おいて選手団の安全、健康管理上重要な書類であることをご理解ください。
なお、帯同医師 (予定) の内容チェックの結果、医師より指導が入る場合がありますこと
をご承知頂けますようお願いいたします。

1 提出書類

1) 健康診断書

2012 年 4 月 1 日以降に受けた健康診断書 (職場等で実施したもの可) のコ
ピーを提出してください。4 月 1 日以降に健康診断を受けていない場合は、新
たに保健所などで健康診断を受けてください。
**診断項目は通常受けている物で問題ありません。(決まった様式はありませ
ん)**

2) 様式 3 コミュニケーション状況調査用紙 ※聴覚障害者スタッフ対象

2 提出方法

各競技チームがとりまとめ、下記にご提出下さい。

3 提出先

財団法人全日本ろうあ連盟 デフリンピック派遣委員会事務局
〒162-0801
東京都新宿区山吹町130 SKビル8F
財団法人全日本ろうあ連盟本部事務所内
TEL 03-3268-8847 FAX 03-3267-3445
担当: 後藤 (gotou@ifd.or.jp)、加茂下 (kamoshita@ifd.or.jp)

4 提出期限

2013 年 4 月 22 日 (月) 正午必着

以 上

【様式 5-1】
選手記入

基本健康調査用紙

(2012/2/20)

選手の皆様をお願いします。
皆様の健康を守るための調査用紙なので、できる限り正確に記載して下さい。
医師の診察を受ける前に、Q1～Q11までの質問にお答え下さい。わからない
場所は診察の時に、医師が問い合わせますので、記入しなくて結構です。

医師にお願い致します。
選手が記入するこの表紙より Q1～Q11までの回答状況をチェックし、必要が
あれば詳しく聞いて記載して下さい。

選手氏名: _____ 性別: 男・女
生年月日: 昭和・平成 _____ 年 _____ 月 _____ 日 年齢: _____ 歳
所 属: _____ 学年: _____ 年生
住 所: _____
電 話: _____ () _____ Fax: _____ () _____
E-mail: _____
競技名: _____ 競 技 歴: _____ 年
クラス分け: _____ 種目 (階級・ポジション): _____
障害名: 《該当する障害名に○をつけて下さい。また具体的な手帳の障害
内容がわかれば () 内に記載して下さい》
① 肢体不自由 ()
② 視覚障害 ()
③ 聴覚障害 ()
④ 知的障害 ()
⑤ 内部障害 (心臓, じん臓, 呼吸器, ぼうこう・直腸, 小腸, 免疫機能障害)
障害の原因となった傷病名: _____
障害の原因となった傷病の発病 (受傷) 日: _____ 年 _____ 月 _____ 日
障害の原因となった傷病の発病 (受傷) 時年齢: _____ 歳
障害の原因となった傷病に関する手術歴: (有、無)
有の場合 → _____ 歳: [手術名…]
_____ 歳: [手術名…]
_____ 歳: [手術名…]

本調査用紙・診断書は、公益財団法人日本体育協会の作成した国体参加選手のメディカルチェック用診断用紙の一部を障害者用に改
変して使用しております。(2012 年 2 月 20 日現在)

【様式 5-1】
選手記入

Q1. 障害の原因となった傷病以外のこれまでの主な病気・ケガについての質問

Q1-1: これまでに以下の病気をしたことがありますか。
“ない” 場合には () 内に×印、“ある” 場合には () 内に○印を付け、その
ケガをした時の年齢を _____ 部に記入、身体図にケガの場所に○を付けて下さ
い。

1) 貧血 () _____ 歳

2) 喘息 () _____ 歳

3) 高血圧 () _____ 歳

4) 心臓病 () _____ 歳

5) 川崎病 () _____ 歳

6) 腎 炎 () _____ 歳

7) 肝炎 () _____ 歳

8) 胃十二指腸潰瘍 () _____ 歳

9) てんかん () _____ 歳

10) その他 () _____ 歳

11) 手 術 () _____ 歳

_____ 歳 [病名 _____]

_____ 歳 [病名 _____]

_____ 歳 [病名 _____]

_____ 歳 [病名 _____]

_____ 歳 [病名 _____]

_____ 歳 [病名 _____]

_____ 歳 [病名 _____]

_____ 歳 [病名 _____]

12) 輸 血 () _____ 歳

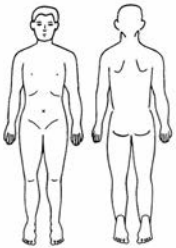
13) 薬物アレルギー [薬物名 _____]

_____ 歳 [薬物名 _____]

14) 食物アレルギー [食品名 _____]

_____ 歳 [食品名 _____]

Q1-2: これまでに 2 週間以上競技や練習の支
障となる “ケガ” をしたことがありま
すか。
ない・ある (_____ 歳)
“ある” 場合には、右の身体図にケガの場所に
○を付けて下さい。



Q1-3: これまでに練習中や試合中に意識を失ったことがありますか。
ない・ある (_____ 歳)

本調査用紙・診断書は、公益財団法人日本体育協会の作成した国体参加選手のメディカルチェック用診断用紙の一部を障害者用に改
変して使用しております。(2012 年 2 月 20 日現在)

— 157 —

【様式5-1】
選手記入

※2. 現在の病気やケガについての質問

Q2-1：現在、治療していたり、検査を受けている病気やケガ、障害がありますか。
 ない・ある [病名・障害名 _____]
 [病名・障害名 _____]
 [病名・障害名 _____]

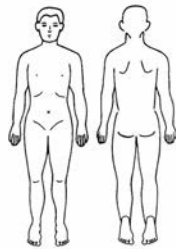
Q2-2：普段使用している薬がありますか。
 ない
 ある：＜①常用（毎日使用）、②頓用（時々使用）、③常用＋頓用＞
 ※ “ある”場合は後日配布する『使用薬物についての調査書』に記載して下さい

Q2-3：普段使用している健康食品、栄養剤、ビタミン剤、滋養強壮剤（ドリンク剤）などがありますか。
 ない
 ある（“ある”の場合は、下記に記入して下さい）

品 名	メーカー名	使用頻度	使用量/日
_____	_____	(毎日・時々)	_____
_____	_____	(毎日・時々)	_____
_____	_____	(毎日・時々)	_____

Q2-4：現在、競技や練習の支障となる“ケガ”をしていますか。
 ない・ある

※（“ある”の場合は、右の身体図にケガの場所がわかるように○で印を付けて下さい。また具体的なケガの内容がわかれば病名の記載もお願いします）



本調査用紙・診断書は、公益財団法人日本体育協会の国体参加選手のメディカルチェック用診断用紙の一部を障害者用に改良して使用しております。（2012年2月20日現在）

【様式5-1】
選手記入

※3. 自覚症状についての質問

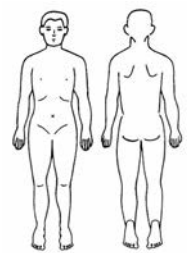
（ ）内に“ない”場合には×印、“ある”場合には○印、わからない場合には？印を付けて下さい。

1. 全般

- | | |
|-------------------|-----------------------|
| 1) 記憶が低下してきた () | 2) 練習についていけない () |
| 3) 練習がこなせない () | 4) 案にできた練習がきつくなった () |
| 5) 練習意欲がわかない () | 6) 疲れやすい () |
| 7) 疲労がたまっている () | 8) 体がだるい () |
| 9) 力が入らない () | 10) たちくらみがひどい () |
| 11) 風邪をひきやすい () | 12) 体重の変動が大きい () |
| 13) 体重が減少している () | 14) 体重が増加している () |
| 15) 寝付きがわるい () | 16) 熟睡できない () |
| 17) 早く目が覚める () | 18) 朝起きるのがつらい () |

2. 皮膚（右の身体図に問題のある場所に○印を付けて下さい）

- | |
|-----------------|
| 1) 褥創 () |
| 2) アトピー性皮膚炎 () |
| 3) みずむし () |
| 4) じんましん () |
| 5) その他 () |



3. 頭部

- | |
|------------|
| 1) 外傷 () |
| 2) 頭痛 () |
| 3) その他 () |

4. 眼

- | | | |
|-------------|-----------------|-------------|
| 1) 近視 () | 2) 乱視 () | 3) 視野異常 () |
| 4) 眼鏡 () | 5) コンタクトレンズ () | 6) 痛み () |
| 7) かゆみ () | 8) めやに () | 9) 異物感 () |
| 10) かすみ () | | |
| 11) その他 | 内容：_____ | |

本調査用紙・診断書は、公益財団法人日本体育協会の国体参加選手のメディカルチェック用診断用紙の一部を障害者用に改良して使用しております。（2012年2月20日現在）

【様式5-1】
選手記入

5. 耳

- | | | |
|------------|-------------|------------|
| 1) 痛み () | 2) 耳だれ () | 3) 耳鳴り () |
| 4) めまい () | 5) 聴力障害 () | () |
| 6) その他 () | 内容：_____ | |

6. 鼻

- | | | |
|------------|-------------|-----------|
| 1) 鼻水 () | 2) 鼻づまり () | 3) 鼻血 () |
| 4) その他 () | 内容：_____ | |

7. のど

- | | | |
|---------------|--------------|--------------|
| 1) へんとう腺炎 () | 2) のどの痛み () | 3) しわがれ声 () |
| 4) その他 () | 内容：_____ | |

8. 口腔

- | | | |
|------------|-----------|---------------|
| 1) 虫歯 () | 2) 歯痛 () | 3) 歯ぐきの出血 () |
| 4) その他 () | 内容：_____ | |

9. 頸部

- | | | |
|--------------|---------------|------------|
| 1) リンパ節炎 () | 2) 甲状腺の腫れ () | 3) その他 () |
| 4) その他 () | 内容：_____ | |

10. 呼吸器

- | | | |
|---------------|------------|-------------|
| 1) せき () | 2) たん () | 3) ぜんそく () |
| 4) 呼吸困難 () | 5) 息切れ () | 6) 咯血 () |
| 7) 過換気症候群 () | | |
| 8) その他 | 内容：_____ | |

11. 循環器

- | | | |
|------------|------------|------------|
| 1) どうき () | 2) 胸痛 () | 3) むくみ () |
| 4) 心雑音 () | 5) 不整脈 () | 6) 高血圧 () |
| 7) その他 | 内容：_____ | |

本調査用紙・診断書は、公益財団法人日本体育協会の国体参加選手のメディカルチェック用診断用紙の一部を障害者用に改良して使用しております。（2012年2月20日現在）

【様式5-1】
選手記入

12. 血管系

- | | | |
|------------|------------|-------------|
| 1) 静脈瘤 () | 2) 静脈炎 () | 3) 血行障害 () |
| 4) その他 | 内容：_____ | |

13. 消化器系

- | | | |
|-------------|-------------|------------|
| 1) 吐き気 () | 2) 嘔吐 () | 3) 胸やけ () |
| 4) 消化不良 () | 5) 食欲不振 () | 6) 下痢 () |
| 7) 便秘 () | 8) 腹痛 () | 9) 黄だん () |
| 10) 痔 () | | |
| 11) その他 | 内容：_____ | |

14. 泌尿器

- | | | |
|----------------|------------|------------|
| 1) 頻尿 () | 2) 排尿痛 () | 3) 血尿 () |
| 4) 尿が濁りやすい () | 5) 結石 () | 6) 蛋白尿 () |
| 7) 糖尿 () | | |
| 8) その他 | 内容：_____ | |

15. 血液

- | | |
|-----------|-------------|
| 1) 貧血 () | 2) 出血傾向 () |
| 3) その他 | 内容：_____ |

16. 神経系

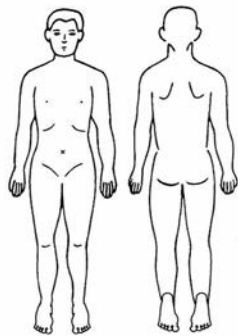
- | | | |
|-------------|-------------|-------------|
| 1) けいれん () | 2) てんかん () | 3) めまい () |
| 4) 知覚障害 () | 5) 失神 () | 6) 意識障害 () |
| 7) 運動障害 () | 8) 記憶障害 () | |
| 9) その他 | 内容：_____ | |

本調査用紙・診断書は、公益財団法人日本体育協会の国体参加選手のメディカルチェック用診断用紙の一部を障害者用に改良して使用しております。（2012年2月20日現在）

【様式5-1】
選手記入

17. 運動器 (右の身体図に問題のある場所に○印を付け、対応する問題と線で結んで下さい)

- 1) 癌性 ()
- 2) 不随運動 ()
- 3) 拘縮・変形 ()
- 4) 切断 ()
- 5) 筋肉痛 ()
- 6) 関節痛 ()
- 7) 骨折 ()
- 8) 脱臼 ()
- 9) 捻挫 ()
- 10) 肉離れ ()
- 11) その他 ()



Q4. 現在のコンディションについての質問

Q4-1: 以下、いずれかに○印を付けて下さい。

練習意欲 : 1=旺盛 2=普通 3=なし 4=全くなし

睡眠 : 1=良好 2=普通 3=不良

食欲 : 1=旺盛 2=普通 3=低下

便通 : 1=良い 2=便秘 (1回/日) 3=下痢 (回/1日)

全般的体調: 1=極めて良い 2=良い 3=普通 4=悪い 5=最悪

選手のメモ: コンディションが悪い場合には、最近のトレーニング量が非常に多い、
風邪をひいているなど思い当たる理由を記して下さい

本調査用紙・診断書は、公益財団法人日本体育協会の国体参加選手のメディカルチェック用診断用紙の一部を障害者用に
変更して使用しております。(2012年2月20日現在)

【様式5-1】
選手記入

Q5. 家族の病気に関する質問

Q5-1: 両親兄弟・姉妹に、以下のような病気がありますか、一つ一つチェックして
下さい。

□内に“ない”場合には×印、“ある”場合には○印と〔 〕内に誰であるかを記入して
下さい。

- 1) 高血圧□〔 〕 2) 心臓病□〔 〕 3) 脳卒中□〔 〕
- 4) 糖尿病□〔 〕 5) 痛風□〔 〕 6) 結核□〔 〕
- 7) 肝炎□〔 〕
- 8) その他□ 病名: _____

Q5-2: 両親兄弟・姉妹が以下のような病気で死亡していますか、一つ一つチェック
して下さい。

□内に“ない”場合には×印、“ある”場合には○印と〔 〕内に誰が何歳の時に
死亡されたのかを記入して下さい。

- 1) 突然死□〔 、 歳〕 2) 高血圧□〔 、 歳〕
- 3) 心臓病□〔 、 歳〕 4) 脳卒中□〔 、 歳〕
- 5) 糖尿病□〔 、 歳〕 6) 痛風□〔 、 歳〕
- 7) 結核□〔 、 歳〕 8) 肝炎□〔 、 歳〕
- 9) その他□〔 、 歳〕 内容: _____

備考: 突然死とは、原因不明に急に(たとえば24時間以内)死亡すること。

痛風とは、血液中の尿酸値が高く、足の親指などの全身の関節が痛くなる
病気です。

Q6. 体重減量についての質問

Q6-1: 競技に際して体重減量はありますか:

1=なし 2=あり 減量前体重_____kg、目標体重_____kg

Q6-2: 上の質問で“あり”の場合

スムーズに減量できますか: 1=はい 2=いいえ

選手のメモ: サウナ、食事を極端に減らすなど、その具体的減量方法を記入して
下さい

Q7. 女性の選手におたずねします

本調査用紙・診断書は、公益財団法人日本体育協会の国体参加選手のメディカルチェック用診断用紙の一部を障害者用に
変更して使用しております。(2012年2月20日現在)

【様式5-1】
選手記入

Q7-1: 初潮はありましたか:

1=なし 2=あり _____歳_____ヶ月、あるいは小学校_____年生_____月ごろ
中学校_____年生_____月ごろ
高 校_____年生_____月ごろ

Q7-2: 最終月経はいつでしたか:

1. 平成_____年_____月_____日ごろ
2. 既に閉経(_____歳頃)

Q7-3: 以下のいずれかに○印をして下さい(閉経されている方以外)

月経周期は : 1=規則的 2=不規則 3=無月経(_____年 _____月以来なし)

月経出血量は: 1=多い 2=普通 3=少ない

月経の痛みは: 1=ほとんどない 2=痛みはあるが、日常生活に支障なし

3=日常生活に支障あるが、薬は使用しない

4=日常生活に著しく支障あり、薬を使用する

(薬剤名: _____)

5=寝込む

Dr. メモ: どのように処置しているか、具体的に記入してください

本調査用紙・診断書は、公益財団法人日本体育協会の国体参加選手のメディカルチェック用診断用紙の一部を障害者用に
変更して使用しております。(2012年2月20日現在)

【様式5-1】
選手記入

Q8. 心理面について(競技活動では、こころとからだが運動して実力を発揮します)

Q8-1: 競技の場面で心理的問題(課題)を感じたことがありますか。

1: ない 2: ある

Q8-2: “ある”場合に○をつけた方は、下記の事項にお答え下さい。

1. 「その時に専門家が身近にいましたか?」 → 「いた」「いない」
2. 「その時に専門家に相談しましたか?」 → 「した」「しない」

Q8-3: “ある”場合はどのような内容であるかを具体的に答えて下さい。また、そ
の時にどのように解決したのかも書いて下さい。

※例えば、競技場面であがってしまい本来の実力がだせなかった など

Q8-4: 最近(この半年間)の生活で、「そうだな」と思い当たる項目の番号に○印
をして下さい。

1. 落ち着かない
2. 集中できない
3. ゆううつだ
4. イライラする
5. やる気がでない
6. 何に対しても興味がもてない

本調査用紙・診断書は、公益財団法人日本体育協会の国体参加選手のメディカルチェック用診断用紙の一部を障害者用に
変更して使用しております。(2012年2月20日現在)

【様式5-1】
選手記入

Q8-5：最近（この半年間）の生活で、「そうだな」と思い当たる項目の番号に○印をして下さい。

1. 眠れない
2. 食欲がない
3. 頭が痛い
4. 肩がこる
5. 疲れがとれない
6. からだがだるい
7. めまいがする
8. おなかが張る

Q8-6：これまで競技を継続していた中で、専門家による心理サポートや相談が必要と感じたことがありますか。

- 1：ない 2：ある

Q8-7：“ある”場合はどのようなサポートが必要であったかを具体的にお答え下さい。

- ※例えば、①競技力向上につながるメンタルトレーニングの指導
②競技と仕事や学業の両立の事で問題を感じ、他の人にアドバイスを
して欲しかった事など

本調査用紙・診断書は、公益財団法人日本体育協会作成の団体参加選手のメディカルチェック用診断用紙の一部を障害者用に改変して使用しております。（2012年2月20日現在）

【様式5-1】
選手記入

Q9. 練習頻度について

Q9-1：過去6ヶ月間の平均練習頻度についてお答え下さい。

- 1：週3回以上 2：週1～2回程度 3：月1～2回程度 4：月1回未満

Q10. 移動能力について

Q10-1：現在の移動能力についてお答え下さい。

- 1：屋外歩行自立
1a：歩行補助具（杖、装具、義足など）の使用なし
1b：歩行補助具（杖、装具、義足など）を使用
2：屋内歩行自立
2a：歩行補助具（杖、装具、義足など）の使用なし
2b：歩行補助具（杖、装具、義足など）を使用
3：介助歩行
3a：屋外介助歩行
3b：屋内介助歩行
4：車いす使用
4a：普通型車いす駆動自立
4b：車椅子移動介助
4c：電動車いす
5：その他（ ）

Q11. 排尿方法について

Q11-1：現在の排尿方法についてお答え下さい。

- 1：自排尿可能
1a：排尿障害なく、正常排尿
1b：自排尿可能であるが、一部症状あり薬物使用中
2：排尿障害あり、何らかの補助的排尿方法を用いている
2a：収尿器使用
2b：カテーテル使用
2b-1：留置カテーテル（膀胱瘻も含め）
2b-2：自己導尿
2c：集尿器、自己導尿の組み合わせ
2d：その他（内容： ）

本調査用紙・診断書は、公益財団法人日本体育協会作成の団体参加選手のメディカルチェック用診断用紙の一部を障害者用に改変して使用しております。（2012年2月20日現在）

【様式5-1】
選手記入

Q12. 排便方法について

Q12-1：現在の排便方法についてお答え下さい。

- 1：自己排便可能
1a：障害なし。
1b：自己排便可能であるが、内服薬物使用
1c：自己排便可能であるが、座薬使用
1d：特殊な器具などが必要
（必要なもの： ）
1d：特殊な設備や便器などが必要
（必要なもの： ）
2：排便障害があり、何らかの介助が必要
2a：介助者は誰でも良い。
2b：規定の介助者が必要
2c：医療関係者の介助が必要
2d：その他（ ）

本調査用紙・診断書は、公益財団法人日本体育協会作成の団体参加選手のメディカルチェック用診断用紙の一部を障害者用に改変して使用しております。（2012年2月20日現在）

【様式5-2】
医師記入

診断書（1）（医師記入のこと）

氏名： ； 生年月日：昭・平 年 月 日

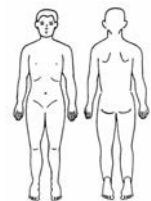
<現症>

身長： cm 体重： Kg 体温： °C 脈拍： 拍/分
血圧： / mmHg

理学的所見（必要に応じて右の身体図を利用して下さい）

異常所見の有無 異常所見の内容

- 顔面 なし あり
口腔 なし あり
頸部 なし あり
胸部 なし あり
腹部 なし あり
四肢 なし あり



<臨床検査所見>

心電図検査	所見：	精査の必要（無・有）
胸部X線	所見：	精査の必要（無・有）
尿検査	蛋白 () 糖 ()	潜血 ()
血液検査	赤血球 () ヘマトクリット () 白血球 () 血小板 ()	
生化学検査	血清鉄 () AST (GOT) () ALT (GPT) () γ-GTP () CK () CRP () 中性脂肪 () HDLコレステロール () LDLコレステロール () 総蛋白 () 尿素窒素 () クレアチニン () 尿酸値 () 血糖値 () HbA1c ()	
	その他先生が重要と考えられる検査所見 ()	

※異常値について、施設での正常値より低値の場合は「」、高値の場合は「↑」を付記して下さい。【例：AST (68↑)】

コメント備考欄

年 月 日 医療機関名・住所・電話番号

医師名： 印

* 本調査用紙・診断書は、公益財団法人日本体育協会作成の団体参加選手のメディカルチェック用診断用紙の一部を障害者用に改変して使用しております。（2012年2月20日現在）

【別紙1】
選手・障害障害者スタッフ記入

基本健康調査用紙*別紙：コミュニケーションについて

※この用紙は「基本健康調査用紙」と一緒に「全日本ろうあ連盟スポーツ委員会」へ提出してください。

選手氏名： _____ 性別：男・女
生年月日：昭和・平成 _____ 年 _____ 月 _____ 日 年齢： _____ 歳

(1)あなたは普段、聞こえる人に自分の話したい内容をどんな方法で伝えますか。
手話 筆談 音声 複数の方法（ と ）

その他の方法（ ）

(2)あなたは普段、（手話のできない）聞こえる人から話しかけられる内容を、どんな方法で理解していますか

筆談 口の形 音声 複数の方法（ と ）

その他の方法（ ）

(3)あなたは病院で診療を受けるときに、手話通訳を利用していますか。
いつも利用する 状況によっては利用する 利用しない

(4)あなたは「自分の病気」や「体調」について医師と話するとき、手話通訳に居てほしいですか。

いて欲しい どちらでもいい 状況による いてほしくない

(5)あなたは医師が話す重要な点については紙にメモして欲しいですか。
メモを渡してほしい メモは必要ない 自分でメモをしたい

(6)あなたは、診療を受けるときに、手話通訳や筆談の他に、どのような配慮を希望しますか。自由に書いてください。

例) マスクを外してほしい（口を見せてほしい）、途中で確認を入れてほしいなど

(6)あなたは高熱や嘔吐、めまいなどで具合がとても悪いときに、どんな方法で話しかけて欲しいですか。

手話 筆談 音声 複数の方法（ と ）

その他の方法（ ）

* この質問用紙は「第 22 回夏季デフリンピック（ソフィア 2013）」にあたり、財団法人全日本ろうあ連盟デフリンピック派遣委員会が作成しました。

⑥聴力検査票

連第 120614 号
2013 年 3 月 19 日

夏季デフリンピック競技団体 各位

(財) 全日本ろうあ連盟
デフリンピック派遣委員会
事務局長 太田陽介
(公印省略)

第 22 回夏季デフリンピック

新規選手の聴力検査図の提出について (依頼)

平素は格別のご高配を賜り、厚く御礼申し上げます。

第 22 回夏季デフリンピック (於ブルガリア・ソフィア市) に出場するにあたって、ICSD から出場資格に関する規程が発表されています。その中に下記のとおり、聴力に関する規程が定められております。

この条件に適合していることを証明するために、聴力検査図を提出しなければなりません。ICSD 認定の国際大会に出場して聴力検査図を提出したことがある者は改めて提出する必要はありませんが、これまでに提出したことのない選手は提出しなければなりません。

新規選手は医療機関にて聴力検査を受け、ICSD の定める聴力検査図に結果を記入してもらうよう各団体で指導をお願い致します。また前大会に出場した選手はどのようにして検査を行い記入してもらったのか、その経験を皆さんにアドバイスしていただくなど、各自取り組みをお願い致します。

何卒、皆様のご協力のほどをよろしくお願い申し上げます。

* アジア大会、デフリンピック等に出場経験のある選手で、婚姻等により氏名変更のあった場合は、旧姓でのパスポート (写真付きのページ) と現在のパスポートのコピーをお送りください。(聴力検査図は不要です)

* 提出くださった聴力検査図 (原本) は当事務局より ICSD へメール添付及び郵送をいたします。メールする際に CC へ貴協会ご担当者を入れますので、添付書類を保存下さいませよう宜しくお願い致します。

【添付資料】

- 01ー提出該当者一覧
- 02ー I C S D 専用オーゾグラム用紙
- 03ー聴力検査表記載時の注意事項 (原文と和訳あり)
- 04ー見本
- 05ー医師宛て依頼文書 (必要に応じて活用ください。)

【提出物】

- ・ I C S D 専用オーゾグラム用紙
- ・ 病院の検査機器から出力された結果のコピー

【提出〆切】2013 年 4 月 10 日 (水) 厳守

※聴力検査図は各競技団体で取りまとめの上、当事務局までご提出願います。

【提出先】(財) 全日本ろうあ連盟デフリンピック派遣委員会 事務局

〒162-0801 東京都新宿区山吹町 130 SKビル 8 階
TEL 03-3268-8847 FAX 03-3267-3445
担当 後藤 (gotou@jfd.or.jp) 加茂下 (kamoshita@jfd.or.jp)

以上



International Committee of Sports for the Deaf
Recognized by the International Olympic Committee
OFFICIAL AUDIOGRAM DATA SHEET

528 Trail Avenue
Frederick, Maryland 21701
UNITED STATES
Fax: +1 301 620 2990
Email: controls@icss.org

***Required Fields** PLEASE PRINT OR USE TYPEWRITER and send to your National Deaf Sports Federation for review

***Name:** Family Name (Last Name) Given Name (First Name) Other Names (Middle Name)

***Nation:** ***Sport:**

***Date of Birth:** (day / month / year) ***Which event?** ☐ Regional Championships ☐ World Championships ☐ Deaflympics

***Gender:** ☐ Male ☐ Female

AUDIOGRAM

***Audiometer:** ***Examiner Name:**

***Calibration:** ☐ ANSI 1969 ☐ ISO 1964 ***Date of Examination:** (day / month / year)

☐ Other:

***AIR CONDUCTION & *BONE CONDUCTION**
FREQUENCY in hertz (Hz)

HEARING THRESHOLD LEVEL in decibels (dB)

125	250	500	1000	2000	4000	8000
0						
10						
20						
30						
40						
50						
60						
70						
80						
90						
100						
110						
120						

***IMPEDANCE TYMPANOMETRY**

Ear	Canal	Peak	Compliance	Pressure
RIGHT				
LEFT				

***REFLEXOMETRY**
Stimulus Electrode Ear

RIGHT	Stim	500	1000	2000	4000
	Ipsi				
	Contra				
LEFT	Stim	500	1000	2000	4000
	Ipsi				
	Contra				

PURE TONE AVERAGE
(500-1000-2000 Hz)

Ear	Air	Bone
RIGHT		
LEFT		

KEY TO SYMBOLS

Ear	Air	Air-masked	Bone	Bone-masked
RIGHT (red)	○	◊	△	▽
LEFT (blue)	×	◻	>	]
		No Response	NR	

TYPE OF HEARING LOSS
(Check one for each ear with an "X")

Ear	Sensorineural	Conductive	Mixed	Cochlear Implant
RIGHT				
LEFT				

ICSD HOME OFFICE USE ONLY

ID: _____
Data Entered By: _____
ICSD Audiologist: _____

COMMENTS: (In English) _____

Audiogram Form
Revised: 4/2011
www.deaflympics.com/forms/audiogram.pdf

* This field is required and audiogram form must be completed three (3) months before the event.

Notes for the audiologist:

Thank you for using the ICSD audiogram form. Our athletes need to complete this form fully to receive an Identification number to participate in upcoming Championship or Deaflympics events.

In compliance with ICSD audiogram regulations, here is a guideline for you to complete the ICSD audiogram form, as listed below:

- Official ICSD Audiogram form must be used. The form can be downloaded from www.deaflympics.com/forms/audiogram.pdf
- All four (4) types of audiogram testing below must be filled out entirely for **EACH** ear including:
 - Air Conduction** - Please test on 500, 1000, and 2000Hz.
 - Bone Conduction** - Please test on 500, 1000, and 2000Hz.
 - Tympanograms** (Tymanometry) - Please write numbers
 - Acoustic Reflexes** (Reflexometry) - Please write numbers or NR if there are no responses. Do **not** use dash mark (-) or zero (0).
- Below yellow box with numbers indicates required fields for you to enter:
 - Audiometer** - Identify the name of the audiometer.
 - Examiner Name** - Name of the audiologist who performs the test.
 - Calibration** - Indicate the name of the calibration used.
 - Date of Examination** - Enter examination date.
 - Air Conduction** - Record air testing results. See 2.1 above. If there are no responses in Air Conduction, please write NR as noted in "Key to Symbols".
 - Bone Conduction** - Record bone testing results. See 2.2 above. If there are no responses in Bone Conduction, please write NR as noted in "Key to Symbols".
 - Tympanometry** - Record Tympanometry test results. See 2.3 above.
 - Reflexometry** - Record Reflexometry test results. See 2.4 above.
 - Pure Tone Average** - Add 500, 1000, 2000Hz and divided by three (3) for both air and bone testing results.
 - Type of Hearing Loss** - Identify the type of hearing loss by placing "X" accordingly as shown on the form for respective ear.
 - Comments** - Please write comments as needed about this athlete. If there are no Tympanogram or reflex equipments to test, please write comments in English.
 - This is for ICSD official uses only, do not write.

Failure to observe the requirements will result in delayed approval.

Thank you in advance for your cooperation,
ICSD Staff

As of: May 2011

聴覚検査士のみさまへ：

ICSDのオーディオグラム用紙をご利用ください、ありがとうございます。われわれの選手は、選手権大会、デフリンピック等の大会に出場するため、この書類を完全に記入し、ID番号を得る必要があります。

以下は、ICSDオーディオグラム規則に則った、ICSDオーディオグラム用紙の記入ガイドラインです。

1. ICSD公式オーディオグラム用紙の記入が必須です。用紙は以下のサイトからダウンロードできます。
www.deaflympics.com/forms/audiogram.pdf
2. 以下の4種類のオーディオグラム検査は、**両耳**について、完全に記載しなければなりません。
 1. 気導 - 500、1000、および2000Hzの検査を行ってください。
 2. 骨導 - 500、1000、および2000Hzの検査を行ってください。
 3. ティンパノグラム (ティンパノメトリー) - 数を記載してください。
 4. 耳小骨筋反射 (アブミ骨筋反射) - 数、もしくは、反応がない場合はNRと記載してください。ダッシュ (-) もしくはゼロ(0)を使って記入しないでください。
3. 以下の黄色い四角で囲んだ番号は、必須記載項目です。

1. **オーディオメーター** - オーディオメーターの名称を明記してください。
2. **検査者氏名** - 検査を行った、聴覚検査士の名前を記入してください。
3. **キャリブレーション** - 使用したキャリブレーションの名称を明記してください。
4. **検査日** - 検査を行った日を記入してください。
5. **気導** - 気導検査の結果を記録してください。上記2.1を参照のこと。気導検査の応答がない場合、「記号凡例 (Key to Symbols)」に従って、NRと記入してください。
6. **骨導** - 骨導検査の結果を記録してください。上記2.2を参照のこと。骨導検査の応答がない場合、「記号凡例」に従って、NRと記入してください。
7. **ティンパノメトリー** - ティンパノメトリーの検査結果を記録してください。上記2.3を参照のこと。
8. **耳小骨筋反射** - 耳小骨筋反射の検査結果を記録してください。上記2.4を参照のこと。
9. **骨導検査** - 500、1000、2000Hzの項目を追加し、気導と骨導両方の検査結果を、それぞれ記入してください。
10. **失聴のタイプ** - 失聴の種類を確認し、それぞれの耳について、該当する欄に「X」を記入してください。
11. **コメント** - 必要に応じて、当該選手についてコメントを記入してください。ティンパノグラム、もしくは耳小骨筋反射の検査器具がない場合、コメントを英語で記載してください。
12. この欄は記入しないでください。ICSD事務局のみが使用します。

Official Audiogram Data Sheet form with numbered boxes 1-12 indicating required fields.

必須事項の確認もれは、承認の遅れという結果を招きます。

ご協力ありがとうございます。
ICSDスタッフ

2011年5月現在

2013年3月吉日

担当医師様

東京都新宿区山吹町130 SKビル8階
TEL 03(3268)8847 FAX 03(3267)3445
財団法人全日本ろうあ連盟
デフリンピック派遣委員会
委員長 石野富志三郎

第22回夏季デフリンピック (ソフィア 2018) 聴力検査のご協力依頼

時下ますますご清栄のこととお慶び申し上げます。

2013年(平成25年)7月26日～8月4日まで第22回夏季デフリンピックがブルガリア・ソフィア市にて開催されます。当協会では標記大会に向けて代表選手を派遣する予定です。

標記大会のような国際ろうスポーツ委員会 (International Committee of Sports for the Deaf) 公認の競技大会 (夏季/冬季デフリンピック、世界選手権大会、地域の選手権大会を含む) では、聴力検査の提出が義務づけられています。大会参加には選手の「両耳の聴力が少なくとも55デシベル以上 (500、1000、2000ヘルツの三周波数の平均、1969年アメリカ国家規格(ANSI)による) の聴力損失と判断されたいらう」であることが条件となります。そのため医師の診断が求められていますので、聴力検査の実施をお願い申し上げます。検査結果を所定用紙にご記入のうえ選手にお渡しください。英語の別名をstapedius reflex、)

又、《見本》を別紙の通り用意いたしましたので、ご参考になさってください。

<検査内容>

それぞれの耳について下記検査内容のご記入をお願い致します。

1. 気導 2. 骨導 3. ティンパノグラム 4. 耳小骨筋反射 (直訳すると音響的反射となりますが、日本では耳小骨筋反射か、アブミ骨筋反射という。英語の別名をstapedius reflex、)

<参考>

- 聴力検査用 (ダウンロード用) <http://www.deaflympics.com/pdf/AudiogramRegulations.pdf>
- 聴力検査用 (見本)
- 国際ろうスポーツ委員会公式ホームページ <http://www.deaflympics.com/>
- オーディオグラムに関する規則 <http://www.deaflympics.com/pdf/AudiogramRegulations.pdf>

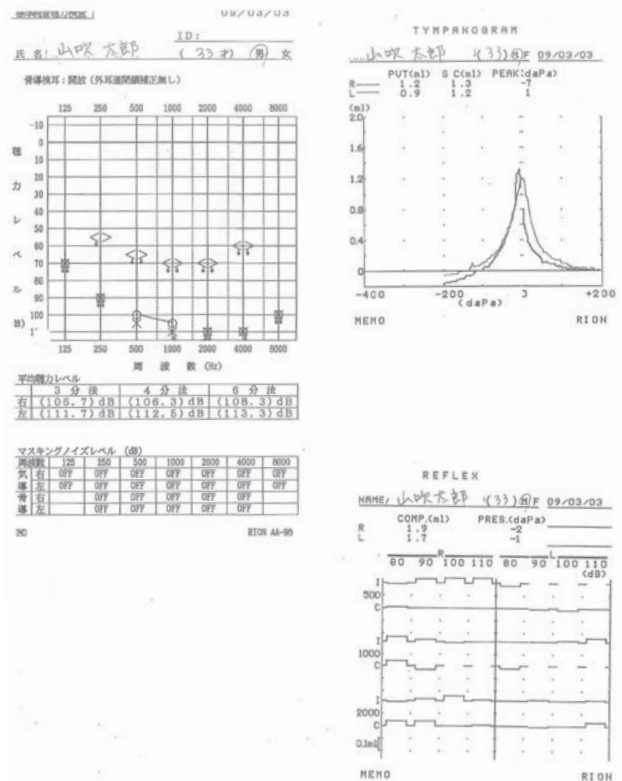
以上

(お問い合わせ)

財団法人全日本ろうあ連盟
デフリンピック派遣委員会事務局
〒162-0801 東京都新宿区山吹町130 SKビル8F
TEL 03-3268-8847 FAX 03-3267-3445
担当：後藤 (gotou@jfd.or.jp)、加茂下 (kamoshita@jfd.or.jp)

《見本》

Sample Official Audiogram Data Sheet form for YAMABUKI Taro. The form includes fields for Name, Nationality, Date of Birth, Sport, and Audiogram results. The Audiogram section shows Air Conduction and Bone Conduction results for Right and Left ears, along with Tympanometry and Reflexometry results. The form is signed by RION AA-76 and dated 7/5/2007.



第22回夏季デフリンピック競技大会 ソフィア2013

ソーシャルメディアガイドライン



一般財団法人全日本ろうあ連盟

ソーシャルメディアとは

ソーシャルメディアとはユーザーにより作成された内容を創出、交換することのできるインターネット・ベースのアプリケーション。

ブログ

一般的に誰もがアクセスできるウェブサイトの一つで、ジャーナルや日記の形で投稿、構成され、通常新しい順に表示されるもの。

ソーシャルネットワークサービス (Facebook, MySpaceなど)

利用者各人を表現する(通常個人プロフィール)、または利用者所有のリンク先など多種多様な追加サービスを含むオンラインサービス、コンピューターシステムおよびサイトのことである。

ウィキ

ウェブブラウザ経由でリンクされたいくつものウェブページを作成したり編集したりできるウェブサイトのことである。

Twitter、YouTube、他…

デフリンピック資産の例

！ 許可無く、営利目的で使用することは固く禁じられています。



ICSDロゴ

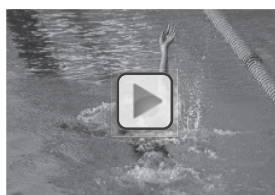


ソフィア2013
日本代表選手団ロゴ

SOFIA 2013
22nd SUMMER
DEAFOLYMPICS
大会ロゴ



静止画



動画・音声

デフリンピック資産の例

デフリンピックを広く知っていただくためにも、規制はいたしません。ただし、誤解を招くような使い方は控えて下さい。
(例: 「ソフィアデフリンピック」という名前だけの単独ブログを立ち上げる、など)

デフリンピックを特定する単語

Deaflympics

デフリンピック

ソフィア大会を想起させる単語

SOFIA 2013

ソフィア 2013

2013年ソフィア

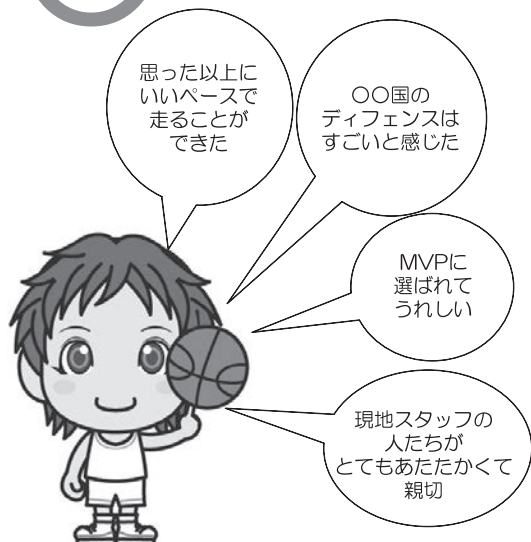
デフリンピック期間中
2013.7.26～2013.8.4

ソーシャルメディアへの文字投稿

■投稿していい内容■



デフリンピックで自分自身が
経験したことについて
個人的な感想を書くこと



デフリンピック期間中
2013.7.26～2013.8.4

ソーシャルメディアへの文字投稿

■投稿していい内容■



文章の一部に「デフリンピック」
という言葉を使うこと



デフリンピック期間中
2013.7.26～2013.8.4

ソーシャルメディアへの文字投稿

■投稿してはいけない内容■



企業・団体や商品のPRに
つながる記載



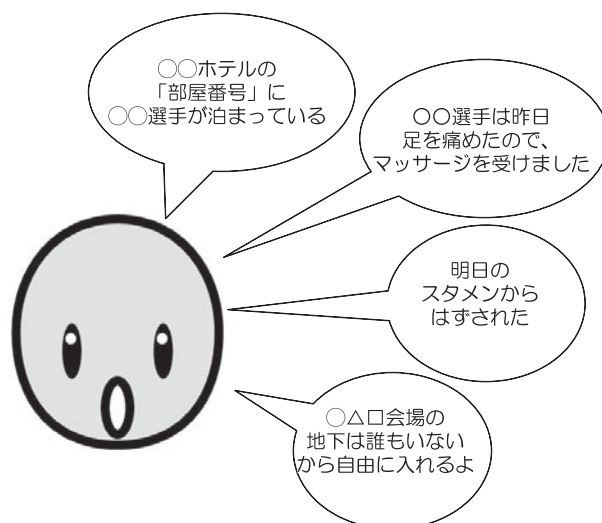
デフリンピック期間中
2013.7.26～2013.8.4

ソーシャルメディアへの文字投稿

■投稿してはいけない内容■



- ・他の参加者や組織の個人情報、
秘密事項
- ・施設のセキュリティー



デフリンピック期間中
2013.7.26～2013.8.4

ソーシャルメディアへの文字投稿

■投稿してはいけない内容■



他者や他の組織の
批判・誹謗・中傷



デフリンピック期間中
2013.7.26～2013.8.4



ソーシャルメディアへの写真投稿

■被写体の許可があれば掲載可■

スタンドからの撮影写真
(特定選手のクローズアップ写真は不可！)

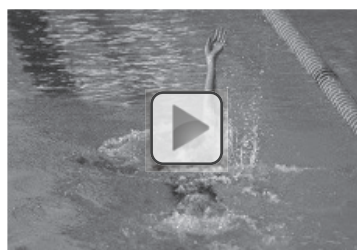
スタンドからの撮影(競技、表彰)
※特定選手のクローズアップ写真は不可

ホテルの入り口前、ホテルロビー
※スチール写真のみ可
(自分と家族、応援に来てくれた友人など)

デフリンピック期間中
2013.7.26～2013.8.4



個人で撮影した動画を、本人の許可無く
あらゆる媒体で公表することは禁止



<例外>

デフリンピック会場で自分自身を撮影したもの

デフリンピック会場・宿泊場所以外で撮影したもの

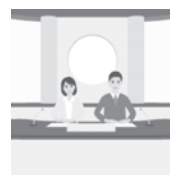
デフリンピック期間中
2013.7.26～2013.8.4

メディア行為は禁止

デフリンピック期間中、メディアとして資格認定を受けた人以外は、会場や宿泊場所などで、記者・レポーター・カメラマンの他、いかなるメディアとしての活動もしてはいけません。



他者へのインタビュー



ネット番組などのパーソナリティやレポーターとして大会や選手の様子をレポートすること



マスコミや企業・団体の広報媒体への記事や写真、動画・音声の投稿

大会や競技の様子を生、録画を問わず放送すること

デフリンピック区域
～撮影できる場所～



■競技会場■

スタンドからの撮影(競技、表彰)
※特定選手のクローズアップ写真は不可

■練習会場■

スタンドからの撮影(日本選手を撮影)

■宿泊場所■

ホテルの入り口前、ホテルロビー
※スチール写真のみ可
(自分と家族、応援に来てくれた友人など)

デフリンピック区域
～撮影禁止の場所～



■競技会場■

競技区域(field of play)からの撮影

ウォームアップ区域(出入口、屋内)

更衣室(出入口、屋内)

招集所(出入口、屋内)

■宿泊場所■

他国選手団の居住区

食堂(出入口、屋内)

本部(出入口、屋内)

アスレチックトレーナー室(設備など)

デフリンピック期間中
2013.7.26～2013.8.4

競技結果の情報発信について

**各自の競技に限り、リアルタイムでの
結果情報発信はしても構いません。**

※ただし、公式結果と相違が出る場合がありますので、
各競技団体で責任を持ち、発信の際は十分にご注意く
ださい。

※自分の競技以外の結果情報発信はしてはいけません。

※ネットマナーは必ず守って下さい。

【投稿してはいけない内容】

- ・他の参加者や組織の個人情報や秘密事項
- ・他者や他の組織の批判・誹謗・中傷

全競技の結果は、ICSD公式結果報告を受け
たあと、「日本代表選手団公式サイト」に毎
回掲載します。

競技団体サイトやブログなどにも、
「日本代表選手団公式サイト」のリンクを
貼って下さるようお願いいたします。

大会後の写真の取り扱い

(日本選手団公式サイトに掲載した写真や動画)

**ケースにより
取り扱いが異なります**



**全日本ろうあ連盟に
お問い合わせください**

一般財団法人全日本ろうあ連盟 スポーツ委員会
FAX: 03-3267-3445 TEL: 03-3268-8847
E-Mail: ifd-sc@ifd.or.jp (受信専用)

⑧デフリンピック開催地一覧

夏季デフリンピック開催地一覧

回数	開催国	開催都市	開催期間	大会規模		日本代表団派遣			日本代表団成績		
				参加国数	選手数	選手	役員	計	金	銀	銅
1	フランス	パリ	1924年8月10日～8月17日	9	148						
2	オランダ	アムステルダム	1928年8月18日～8月26日	10	212						
3	西ドイツ	ニュルンベルグ	1931年8月19日～8月23日	14	316						
4	イギリス	ロンドン	1935年8月17日～8月24日	12	221						
5	スウェーデン	ストックホルム	1939年8月24日～8月27日	13	250						
6	デンマーク	コペンハーゲン	1949年8月12日～8月16日	14	391						
7	ベルギー	ブリュッセル	1953年8月15日～8月19日	16	473						
8	イタリア	ミラノ	1957年8月25日～8月30日	25	635						
9	フィンランド	ヘルシンキ	1961年8月6日～8月10日	24	613						
10	アメリカ	ワシントン	1965年6月27日～7月3日	27	687	7	4	11	0	1	1
11	ユーゴスラビア	ベオグラード	1969年8月9日～8月16日	33	1189	9	4	13	0	4	0
12	スウェーデン	マルメ	1973年7月21日～7月28日	31	1116	9	4	13	4	2	0
13	ルーマニア	ブカレスト	1977年7月17日～7月27日	32	1150	17	8	25	5	2	0
14	西ドイツ	ケルン	1981年7月23日～8月1日	32	1198	33	11	45	7	4	2
15	アメリカ	ロサンゼルス	1985年7月10日～7月20日	29	995	52	15	77	8	5	2
16	ニュージランド	クライストチャーチ	1989年1月7日～1月17日	30	955	40	16	56	7	3	4
17	ブルガリア	ソフィア	1993年7月24日～8月2日	52	1679	41	13	54	4	7	5
18	デンマーク	コペンハーゲン	1997年7月13日～7月26日	65	2028	44	14	58	6	1	1
19	イタリア	ローマ	2001年7月22日～8月1日	67	2208	60	26	86	10	5	5
20	オーストラリア	メルボルン	2005年1月5日～16日	63	2038	102	33	135	3	7	1
21	台湾	台北	2009年9月5日～15日	77	2493	154	90	244	5	6	9
22	ブルガリア	ソフィア	2013年7月26日～8月4日	90	2871	149	70	219	2	10	9
23	トルコ	アンカラ	2017年 月 日～ 月 日								

冬季デフリンピック開催地一覧

回数	開催国	開催都市	開催期間	大会規模		日本選手団派遣			日本選手団成績		
				参加国数	選手数	選手	役員	計	金	銀	銅
1	オーストリア	ゼーフェクト	1949年1月26日～1月30日	5	33						
2	ノルウェー	オスロ	1953年2月20日～2月24日	6	44						
3	西ドイツ	オーベルアンメルガウ	1955年2月10日～2月13日	8	59						
4	スイス	モンタナヴェルマラ	1959年1月27日～1月31日	9	53						
5	スウェーデン	オーレ	1963年3月12日～3月16日	9	60						
6	西ドイツ	ベルヒスガーデン	1967年2月20日～2月25日	12	77	2	3	6	0	0	0
7	スイス	アーデルボーデン	1971年1月25日～1月29日	13	92	(不参加)					
8	アメリカ	レイクプラシッド	1975年2月2日～2月8日	13	139	10	3	13	0	0	0
9	フランス	メリベル	1979年1月21日～1月27日	14	113	8	5	13	0	0	0
10	イタリア	マドンナ	1983年1月16日～1月23日	15	147	9	6	15	0	0	0
11	ノルウェー	オスロ	1987年2月7日～2月14日	15	129	10	4	14	0	0	0
12	カナダ	バンフ	1991年3月2日～3月9日	16	181	9	6	15	0	0	0
13	フィンランド	ユッラス	1995年3月13日～3月19日	18	258	9	5	14	0	0	0
14	スイス	ダボス	1999年3月8日～3月14日	18	265	10	5	15	0	1	1
15	スウェーデン	スツツバル	2003年2月28日～3月8日	21	247	14	15	29	2	0	0
16	アメリカ	ソルトレークシティ	2007年2月3日～2月10日	23	298	17	22	39	3	0	1
17	スロバキア	ハイトラス	2011年2月10日～2月20日	中止	中止						
18	ロシア	ハンティーマンシスク	2015年 月 日～ 月 日								

第22回夏季デフリンピック競技大会報告書

発行日：2014年3月31日

発行：一般財団法人全日本ろうあ連盟

〒162-0801 東京都新宿区山吹町130 SKビル8F

TEL 03-3268-8847・FAX 03-3267-3445

ホームページ <http://www.jfd.or.jp/>

Eメール jfd-sc@jfd.or.jp

編集：全日本ろうあ連盟 デフリンピック派遣委員会

編集協力：日本聴覚障害者陸上競技協会 / 日本ろう者バドミントン協会 / 特定非営利活動法人日本デフバスケットボール協会 / 日本ろう自転車競技協会 / 日本ろう者サッカー協会 / 日本ろう者武道連合 / 日本デフオリエンテーリング協会 / 日本ろう者水泳協会 / 一般社団法人日本ろうあ者卓球協会 / 日本ろう者テニス協会 / 一般社団法人日本デフバレーボール協会

印刷：日本印刷株式会社



公式ユニホームの胸につけられた
日本選手団のロゴマーク